近世
日本演劇史

伊原敏郎著

伊原敏郎著

近世日本演劇史

早稻田大學出版部藏版

余が「日本演劇史」を公けにしてより丁度十年の月日がたつた。其の間、著者は俗務に忙がしき身となつたので、此の作に筆を執るのもなほざりがちであつたが、漸くにして近世期だけを脱稿して玆に再び發刊する事を得たのである。近世期は明治以前までに筆を止めてある。此の次ぎに明治期を書いて始めて余が經畫の全部が了るのである。

此の十年の間、吾が劇壇には色々な變化があり、又色々な活動があつた。同時に余が此の著述のやうな種類のものゝ要求も愈多くなつたと思ふ。極めて內容の貧弱な此の書が些かでも時代の要求に應ずる事が出來たならば著者は滿足とする。

出版の雜務については種村宗八君、及び校正については秋山正平君の勞を煩はした事が少くない。私かに兩君に對して謝意を表する。

大正二年五月卅日　　青々園

近世日本演劇史

序

伊原青々園君が幾十年の心血を灑がれた「日本演劇史」は、本編を得て幾んど大成したといつてよい。次いで來るべき明治演劇史の如きは、同君の業としては、龍を畫いておいて雲を添へる程の餘事である。

「日本演劇史」は明治大正の最も注目すべき好著述中の隨一であると信ずる。其内容の充實徹底せる點に於て、其體制の整然たる點に於て、其叙述の繁簡宜しきを得たる點に於て、其批判の冷靜妥當なる點に於て、其文章の雅馴明暢なる點に於て、此種の著述中に空前の名譽をほしいまゝにするものたるは言ふを俟た

ないと同時に、此後如何なる人が如何なる著眼、如何なる體裁によつて新たに我演劇史を編述若しくは論評せんとするとも、必ず一度は此「日本演劇史」の門を潛らねばならず、又多少其恩澤を蒙らざるを得ないであらうと敢て豫言して差支ないと思ふ。併し我三百年間の演劇的經驗を有する國は世界に少くない。我國の如く、全く連綿と續いて來た、複雜多樣な、豐富な、奇異な演劇的史實を遺傳した國は何處にもあるまい。我國の演劇的傳統は、丁度我國體の如く、天下無類だといつてよい。といふのは、我演劇史は、其實三百年ではなく、能狂言の歷史を合算すると――合算するのが當然であるが――少くとも五百年以上に遡ることになるからである。藤原氏の末、鎌倉時代のはじめ、今樣や宴曲や申樂をさへも系圖中に加へて觀察することになると、其材

料の豐富で、其閲歴の複雜で、其變化や樣式の奇異であることは眞に駭くべきである。先づ其根柢は樂劇式であるのだが、其樂劇式が少くとも二類に分れて、其最も古き一類は武家の式典用で、一種の風教機關で、其趣味も組織も、殆ど古代希臘的に高雅で沈靜で、木彫の佛像的で、吟誦式、緩舞式、大小鼓式の樂劇であり、他のやゝ後れて發達せる一類は、其成立の始めから娯樂機關的で、趣味は平民的、町家的で、メロドラマ風に卑近で、目ざましく賑かで、操人形風に活動的で、俚謠式、振事式、パントマイム式、三味線式の樂劇である。かと思ふと、其或部分は極めて單純な、粗樸な、稚拙な、諷刺脈を帶んだモーラル・プレーのやうな小喜劇であり、又或一部は極めて複雜な、無秩序な、不羈放縱な、支離滅裂な、荒唐奇怪な、夢幻的な、敍事的な、殘忍な、卑猥な、形式上からいふと、沙翁劇

やロマンチシズム全盛時代の紙上劇をも遙かに凌ぐやうな大自由の劇である。かと思ふと、又或一部は存外周密な現實描寫で、少くとも其幾斷片は、近代の社會劇の或者に比して遜色のないほどに寫實的でもあり自然的でもある。が、大體に於ては、本來が娯樂機關として發達し來つたゞけに、近世へ降るほど見世物式になり、ヴライヤチー式になり、俗受を第一とし、技巧を主とし、機關(からくり)裝置(じかけ)や目先の變化を專らにして活動寫眞的になつてゐる。

要素がかくの如く饒多であるからして、此等諸要素が相雜糅し、相混淆し、牴牾衝突し、融會調諧するに至つた進化の跡を探り、諸俳優の系統や傳記や、諸作家の事跡や、其他の諸關係事件を穿鑿することになると、其複雜なこと、其豐富なこと、其多方面のこと、

殆ど眩暈的であるといつても過言でない。要するに我五百年の演劇史は、滅法にだゞつぴろく、擴り放題に擴つた我東京市の如く不秩序不規律を極めたものであるから、二年や三年こゝに足を留めた者では自分が用達に出るにさへ案内者を要する程である、迚も廣く世間に向つて全局の案内者となることは望まれない。それは單に廣いが爲ばかりではない、雜駁多方面の中から、最も必要な部分だけを選り出し得る批判眼と、全體の釣合の爲めには、惜しい材料をも思ひ切つて割愛する勇斷と、おのが好む所に佞しない公平な態度と、在來の傳説や俗評に拘束せられない創見とを兼ね備へた上に、おのが新發見を誇耀しようなどいふ衒氣や名聞を蟬脫してかゝらねばならぬからである。恐らくかういふ著述をするには――贅澤をいへば――また此

上にも幾多の必要な資質が入用でもあらうが、差當り先づ以上だけを備へて貰へば大滿足である。而して本著者は悉く此等諸要件を兼ね備へてゐる人だといつてよい。勿論かういふ大著であるから、若し穿鑿立をしたなら、まだ幾らも物足らなく思はれる點が見出されるでもあらう。多少の誤謬や錯脫もないとは言はれまい。併し尚私は此著を以て空前の日本演劇史と斷言し、且つ永く斯道のオーソリチーとして後世に傳へらるべきものと信じ、我文藝界の將來の爲に本書の發刊を祝するのである。

我演劇世界の風雲最も險惡なる

大正二年夏五月

坪内逍遙

近世日本演劇史目次

挿繪

近世日本演劇史

伊原敏郎著

發端　近世期の三時代

江戸にては二世團十郎を失ひ、京阪にては中村富十郎が死せる安永天明以後を、吾が演劇史の近世期となす。即ち文學史に於ては、恰も建部綾足と平賀鳩溪とが歿して、京傳出で、馬琴現れ、又、三馬、一九、種彦、春水の漸く榮えたりし時なり。右の諸家によりて文學の中心が次第に京阪を放れて江戸に移りしと同く、演劇の主權も此の期に至りて終に西より東に轉じたりき。而して此れより明治以前までを更に小分して左の三つの時代となす。

一、寛政時代。

二、文化文政時代。

三、天保嘉永時代。

以下篇を追うて、此等の各時代に於ける俳優と其の技藝、及び作者と其の脚本等を叙述すべし。

第一編　寛政時代の俳優と其の技藝

第一章　中村歌右衛門と淺尾爲十郎

中村歌右衛門――「天羽衣」(赤松四郎と山名宗全)――江戸にての當り藝――生涯の傑作(「秋葉權現」)――桑名屋德藏――長所は實惡――藤川平九郎との比較――彼れが技藝の秘訣。

淺尾爲十郎――經歷――彼れが技藝の二種――小栗宗丹――毛剃九右衛門――澤井又五郎――彼れが衣裳の好み――早替り――幾多の短所。

寛政時代に於て、京阪の劇壇を代表して最も先輩たりしを**中村歌右衛門**(加賀屋一洸、正德四―寛政三)とす。彼れは加州金澤の醫師大關俊庵の子にして、年少客氣、過ちて江湖に放浪し、十七歳の時(享保十五年)、終に俳優となり、中村源左衛門の門下に投じて中村歌之助といひ、後に歌右衛門と改めき。蓋し源左衛門は元祿期に著名なりし女方中村千彌の末流として專ら敵役を得意とせる者なりき。されば歌右衛門も亦敵役を專門として越後地方を巡業せしが、寛保元年(廿八歳)、伊勢の劇場に現れ、「新薄雪物語」に大膳と五平次とに扮して頗る好評なりきといふ。翌二年十一月、京都に上りて、花川市之丞座の「近江源氏泰平凱」に佐々木巳午之介といふに扮せり。是れ彼れが京都の初舞臺なりしが、當時の評判記「役者和歌水」に彼れを評して曰く、

第一男付よく、澤音殿（澤村音右衛門）と嵐七五殿（嵐七五郎）と宗三殿（市川宗三郎）も少し入てなさろゝ。いづれ味い物を取集めた貝燒の樣なお人ぢやと申す……。當顔みせ、佐々木巳午之介と成り、後室の死靈に誘はれての出端よし、扨紛失せし劔を持參せし者は姫と娶はさんと札を立て、友右衛門持來れ共、姫は欠落せし故、大くらが妹を貰ひ祝言して、其後姫出るを見て手打にせんと言はるゝ所よし。次にみどりの介を見つけて打擲せらるゝまで先は評判よいとや申す………。

地方より一躍して京都の舞臺に現はれたる彼れは、斯くの如く好評を以て迎へられ、終に其處に止まること滿五年。即ち、

寛保三年四月、同座、「春駒勢曾我」に工藤祐經（同座は此れにて休場）。十一月、嵐松之丞座、「若緑初面箱」に萬ぜい大くら。十二月、同座、「芦屋道滿大内鑑」に石川惡右衛門。

延享二年十一月、中村喜世三郎座、「勝時萬歳樂」に浪人笠原丹平實は秀右衛門。十二月、同座、「山本勘助鼎軍談」に長尾景虎。

延享三年正月、「けいせい千里鐘」に不破伴左衛門。十一月、中村粂太郎座、「富館鸚鵡辭」に大和田玄蕃と家老岩倉高右衛門家來熊（い）平。

是れより彼れは大阪に轉じ、同地に留まること十年に及びたり。

寛延元年十一月、坂東豊三郎座、「冬籠妻乞軍」に久野谷金吾（此の時實惡をやめて立役となれり）。十二月「戀淵血絞染」（ト兒殺し）に山家屋手代傳右衛門。

寛延二年十一月、三桝大五郎座、「壽黄金勝軍」に牛つかひ桐助實は伊豆次郎。

寛延三年十一月、中村十藏座、「優平家咲分武者」に奴梶兵衛。
寶暦元年正月、「契情遠山櫻」（三桝大五郎の名古屋山三）に不破伴左衛門。十一月、同座、「袖日記双巴」（大五郎の石川五右衛門）に佛作治實は木曾の家來根の井大彌太。
寶暦二年正月、「傾城都富士」に田代孫右衛門と深草の五作。十一月、同座、「一谷嫩軍記」に田吾平役に軍人齋。十二月、同座、「津國十三渡」に布引善次兵衛と奴四五二。
寶暦三年十一月、三條定助座、「泰平木曾譜」に伊達の太郎。十二月、同座、「けいせい天羽衣」に赤松四郎と山名宗全。

此の「天羽衣」は並木正三が傑作たると共に歌右衛門が當り藝たりき。「役者大峰入」によりて其の役柄を記さんに、

赤松悴四郎にて宗全に一味し、「霓裳羽衣」の一卷を盜み、罪人の首を切り、樋の口より拔出る出端、拔首物を裏衣に着かへ一卷を懷中し行かんとする時、赤子泣聲にふしぎ立て、立寄見ていだき上げ愛する仕内、大出來々々。拔懷へ入れ、以前の首を籠へ入る時、番人出てささへるを絞殺し立のく所、きつさう面體の作りすごうてよし。次に二役山名宗全にて、細川と拍子の立合に乘り、あざけり笑ふにくさ。二番目、我が館へ歸り、右近之助が放埓を異見し、桂左衛門をねめ付け、義尚おなりにて右近之助放埓御害の時、手打にせんとし、次に毒害顯はれ切腹の仕内よし。扨諸士の暇乞を願ひ、桂左衛門が勘當を赦し、或は足利義政の靈なりと頼鎮め物語し、謀叛を勸め、羽衣を渡す仕内。三番目、又赤松四郎にて題名の渡しにて舟より宗左衛門を呼かけ、一卷を渡し、キンキンとハノモノといふ相詞を示し合ひ、六番目、大藏へ大じんと成來り、當時が命をかたり、さきら三八に顯はされ、狼められ白狀せず、し

ふとき仕内。切に赤松四郎と名乘り、細川に詰合ひ落合ふまで、此度此人近年の大當り………。

斯くて翌年の評判記に始めて「上上吉」に上せられき。（四十一歳）

寶暦四年十一月、和歌山文七座、「宇多源氏曦面箱」に弓削奥左衛門。十二月、同座、「けいせい今川狀」に今川上總之介と阿呆神主太郎作。

寶暦五年十一月、坂東豐三郎座、「時代世話黃金榮」に船頭松右衛門實は實盛一子齋藤五。十二月、同座、「村島廓音鼓革」に山伏桐脉院と久寶寺屋九右衛門。

寶暦七年三月、彼れは江戸の市村座に下り、「初午曾我」の三番目に七草四郎に扮し、蟇の術を演じて大當りを取れり。此れより江戸に停まること六年。

寶暦七年十一月、市村座、「松君隈曆廓」に藤原廣嗣と浦人福兵衛。

寶暦八年三月、同座、「戀染隅田川」に姥が池の婆。十一月、中村座、「木每花相生鉢木」に謀叛人大和田民部左衛門實は淺原八郎と赤星太郎入道。

寶暦九年正月、同座、「初買和田宴」（四世團十郎の景淸、後に荒五郎茂兵衛）に劔澤彈正左衛門、同二番目に男達鐵壁武兵衛實は三保屋四郎（大門口の鎧引）。十一月、市村座、「阿國染出世舞臺」に前司久國と山名宗全。

寶暦十年正月、同座、「振分髮末廣源氏」に平淸盛。十一月、森田座、「聖花弓勢鑑」に上總五郎兵衛。二番目に鵺の精靈にて七變化。

寶暦十一年正月、同座、「遊俠明鏡粧曾我」に工藤祐經。

彼れが江戸にての當り藝の尤なるものは彼の四世團十郎の相手として勤たる鐵壁武兵衛なりき。而して、寶暦十一年十一月に至り、彼れは五年目にて大阪に歸り、三桝大五郎座に現はれ、「世代氏德戸勢鑑」に鵺の精靈にて七變化と及び猪の早太とに扮せり。前者は江戸にて演せしものを其のまゝなりしが、大不評なりしのみならず、初日に見物に對ひて過言せしとて愈人氣を失ひたり。次いで、翌寶暦十二年正月、同座の新作「秋葉權現廻船語」に日本駄右衛門と月本祐明に扮して、前回の恥辱を雪ぎしのみならず、此れ實に彼れが生涯の傑作なりき。當時の評判記「役者手はじめ」の語る所を聞け。

日本駄右衛門となり、月本家の重寶古今集の一卷を盜み、番人新五右衛門を切殺し立のき、道にて玉島逸當(三桝大五郎)に出合ひ、灯を借り刀のりを拭ひ、一禮して、御縁もあらば重て御めにかゝらん、といふて別れんとする時、逸當に呼びかけられ心ばかりの立入、逸當に手裏劍を受けながら逃ぐる仕內。次に松原にて手下おさいに出合ひ、かたりを仕なうせし褒美に金三十兩やり別れ、夫れより盜みし古今集を祐明に渡し立のかるゝ仕內。早がはり、二役祐明となり、もんりう仕出しの衣裳にて乘物より出で、[illegible]を持ち睨めての幕。……次に月本屋敷へかたりに入り込み、上使と詐り、駕籠にのり、よいさつきの出端よし。……夫れより上座に直り、上使の趣き餘の儀にあらず、家の寶古今集紛失、それのみならず、御免もなきに本國に立歸りたる不屆、それゆゑ切腹なりと言聞かす所しつとりとしてよし。次に贋上使あらはれ、しづ／＼と花道へ歸りしなに、四枚がとめぬゆゑ、わざとしずめて歸らるゝ所、大丈夫手づよし／＼。……後に、立歸り、我は日本駄右衛門といふかたりなるが、いつに仕損じた事なし、此使歸りて顏立ず、顏の立つように其元の首をもらはんといふ仕內。……夫れより早がはり、二役月本祐明となり、井戸より出で與へ入り、元の役駄右

衛門となり、みさは御前に手裏劍な打ち立のく幕。中の卷、おさいにかくまはれ居て玉島幸兵衛に出合ひ、古今集の一卷なせり合ひ、﨟明に渡せしは贋物、正眞のは金三千兩入用ゆゑ質物に入れ置きしとかたる仕內。幸兵衛鳥目ゆゑなぶり殺しにする仕內、にくいぞ〳〵。……次にみつ姬をたばかり、一萬兩の朱印を奪ひ立のき、下の卷、松原にて幸兵衛に出合ひ、三尺棒にて鬪ふ仕內。次に監物が屋敷へ入込み、圓秋が謀事に乘る仕內。圓秋が子を囚にして懷に抱き、我が工あらはれしと覺り、抱きし子泣くゆゑ、ねんねこせいと、いふて迷惑がられる仕內、よいぞ〳〵。……大切落合まで先づ此度は出來ました……。

次いで「御所櫻」の辨慶、七月は、「淸水淸玄六道巡」に淸玄、「千本櫻」に權太と覺範等を演じたり。此れより以後は、

寶曆十二年十一月、同座、「寶小槌手づま占」に奴やかん平實は安倍保憲。

寶曆十三年正月、「非出玉川正平織」に宇治常悅。十一月、中山文七座、「勝鬨阿呼礎」に梅屋澁賫なだ八實は赤松次郎則村。

明和元年正月、「けいせい天羽衣」に山名宗全と赤松四郎（二度目）。十一月、三桝大五郎座、「龍宮城弓勢祝言」に仕丁當作實は平忠文。十二月、同座、「新薄雪物語」に秋月大膳と正宗、切狂言「小菊半兵衛」に男達金兵衛。

明和二年十一月、中の芝居、「大座附瀨賑凱歌」に馬士三吉實は源爲朝。

此の時、彼れは三桝大五郎と相座元たりしが、翌年に至り終に獨立して座元たりき。

明和三年二月、同座、「相馬太郎孝文談」に白川廣文。十一月、中村歌右衛門座、「日本歌弦勢矢車」に萬歲德若實は玄能法師。

明和四年正月、「けいせい陸玉川」（仙臺騷動）に豆腐屋權兵衛實は筆屋伊織と才原勘解由實は明智左馬五郎。九月、「秋葉權現」に日

本駄右衛門(二度目)。

此の一年きりにて座元を辭し、彼れは再び京都に上りしが、留まること一年にして再び江戸に下れり。

同年十一月、京都尾上条助座、「大黒天」(菊五郎の田三)に餅賣又平實は不破伴作。
明和五年正月、「けいせい節用集」に山伏天一坊實は尾形霜司一子と渡邊團右衛門。六月、「ひらがな盛衰記」に松右衛門。九月、「岸柳島」に佐々木岸柳。十一月、江戸、中村座、「今於盛末廣源氏」に鰥梅よしの長七、實は熊坂長範と平の清盛(二度目)
明和六年正月、「曾我模樣愛護若松」に工藤。三月、「清水清玄」(二度目)。七月、「念力樸章鑑」(九世團十郎の時の新聞)に磯島兵庫十一月、同座、「當花榮鉢木」にいたぶりの三ぶ實は淺原八郎と二番目に三庄太夫女房いらし實は東宮の騎納」。
明和七年正月、同座、「鏡池俤曾我」に松井源吾實は熊坂手下。七月、「敵討忠孝鑑」(累の狂言)に板額御前、二番目「鳩川出見曲」に孫右衛門。九月、「男作五雁金」に安の平兵衛。

此れにて彼れは大阪に歸來したりき。

同年十一月、大阪、小川吉太郎座、「眞一文字魁評判」に鏡磨富介實は梶原平次と兄源太。十二月、「桑名屋徳藏入船物語」に桑名屋徳藏と相模五郎。

此の桑名屋徳藏の狂言は彼の「天羽衣」と同く並木正三の作にして、且つ歌右衛門が當り藝の一つなりき。評判記「役者色々有」によりて其の役柄を記さんに、

始は綿屋和田右衛門となり、弟又助も討れし敵討の願ひに出で、巴之丞に金であつかはれしも一角がはからひ、誠は徳藏にて、丸

まで三日の受合にて、檜垣船に高丸龜次郎を乘せて、傾城檜垣をしづめにかけ、其の恨みの風起つて、海中に檜垣が姿現はれ詞をかはし、元來德藏正直一遍の男にて物に恐れず、主親より外に大切なる物なきとの言葉を、根を押されて幽靈に別れ、取り梶との幕。……扨三つ目、梅園中將の役……配膳終て窃に毒をしこんで一擧が難儀となし、高丸正元を縛つて引かせ、生きたる櫻の花を一擧にくれて、いとゞ櫻の歌にて切腹をすゝむる所……。腹を切らして置いて、相模五郎なりと本名を明かし、足利の船を覆さんと見送る體。……三つ目、小幕にて新藏を小提灯にて付て行くばかり。四つ目、相模五郎と德藏は二子なるゆゑ、面體の似たるまゝ、德藏になつて戻り、女房を驚かせ、入聟の德藏と言葉をかはす段。……其の後、田舍娘のおはまが誠の德藏と思ひ、女房なりとて付けまはさるゝを嫌がる所より、後長持に龜次郎の居る事を知つて腰をかけ、北條崩れと聞いて無念がる……。五つ目、德藏又相模五郎となりて淡路の館へ入込む段。……其の末住吉の神前、廻道具にて社人の姿にて取卷かる、後淡路の館にて荒事……。

次いで、「清水清玄」、「忠臣藏」の本藏、「妹背山」の入鹿と大判司、及び「一休噺」の蜷川を演じ、孰れも成功せり。

明和八年十一月、市山助五郎座、「中睦妖龍宮島臺」に浦島家の聟千島之介實は猩々の精。十二月、同座「三千世界商往來」に和蘭陀加比丹ていかう實は武智左馬五郎。

安永元年十一月、中村歌右衛門座、（再び座元）「尾上菊五郎不登噺」に江戸表方武助實は御厩喜三太。十二月、同座、「新薄雪物語」に兵衛と地藏五平次と正宗。

此の時より、彼れは「大上上吉」の位に上され、且つ「立役」として評判記に掲げられたり。尚ほ同時に、

座元を辭して嵐松次郎座の後見たりき。

安永二年十一月、嵐松次郎座、「大當百足山」に百足の精。十二月、「忠臣藏」(菊五郎の由良之助)に加古川本藏。「近江源氏」に四斗兵衛と時政。「菅原」に道眞と白太夫。

安永三年十一月、同座、「御所櫻」に辨慶(二度目)。十二月、「秋葉權現」に日本駄右衛門と月本祐明(三度目)。

安永四年正月、「糸十相合傘」(おふさ德兵衛)に住吉屋忠右衛門。四月、新作「競伊勢物語」に紀有常と名虎の亡魂。十二月、中村十次郎座、「忠臣藏」に師直、九太夫、定九郎、了竹。

安永五年十一月、嵐七三郎座、「源氏燧打出見檜」に源 旦實は遠藤武者。十二月、新作「伊賀越乘掛合羽」に澤井城五郎と山田大八。

安永六年三月、「伽羅先代萩」に梶原景時。十一月、市山太次郎座に座元後見「大自在雷子官位」に大宰府屋與八實は金如君が弟。十二月、「けいせい素袍襖」に尼子晴久。

安永七年四月、「小栗判官車街道」に横山大膳、「峯頭緣色幕」(中七三郎)に今市屋善右衛門。

安永八年正月、山下龜之丞座、「唐土日本往古圖」に菊濱撿挍實は飛驒宿禰と鷲塚彈正。

此の菊浪撿挍大當りにして「功上上吉」に進みしが、翌九年春は勢州中の地藏へ下り、二月、「新薄雪」に兵衛と五平次と正宗、三月「秋葉權現」に駄右衛門と祐明とに扮したり。

安永九年十一月、大阪、芳澤いろは座、「正八幡再來佐殿凱歌」に大場の三郎。十二月、新作「歸命曲輪敷」(石山車兵衛は猿之助)。

天明元年三月、「大塔宮曦鎧」に齋藤太郎左衛門。十二月、山下金作座、「連歌茶屋文章」(大下字屋伏詞)に鞍馬彈守、加古川久

兵衛、片岡三木守。

天明二年十一月、嵐他人座、「圖乘多萬國渡海」に梶原平三。

此の時、彼れは歌右衞門の名を門人中村東藏に讓り、自ら加賀屋歌七と稱せり（六十八歲）。

天明三年二月、「忠臣藏」に定九郎。

天明四年正月、藤川菊松座、「蓬萊山改顏見世」に岩永左衞門、「忠臣藏」に石堂。

天明五年十一月、中村のしほ座、「南　當　惠　方　福」に北條時政。

天明六年正月、「筥傳授百人上﨟」に稻村東藏。二月、京都、嵐秀之助座、「容競出入湊」（姉川新四郎の黑船）に船頭忠右衞門。十一月、大阪　坂東岩五郎座、「如虎石橋富貴英」に啞の五郎又。

天明七年十一月、中山福藏座、「意馬心猿歲核顏」に常陸坊。十二月、同座、「加賀見山」に谷澤此母。

天明八年十一月、市山太次郎座、「歲叶　西新興」に壽老神、「物くさ太郎」に佐々木彈正。十二月、同座、「新薄雪」に大膳と正宗。

當時彼れは七十五歲の高齡にして、此の「薄雪」を一世一代として、舞臺を退きしが、翌年の冬は京都に現はれたり。即ち、

寬政元年十一月、京都、萬太夫座、「萬歲草妹背振袖」に新洞左衞門。

斯くて、寬政三年十月廿九日、七十八歲にて大阪に病死せりき。

歌右衞門が長所は「實惡」にありたりき。其の一代の當り藝と稱せられしもの、「天羽衣」の山名宗全、「秋

葉權現」の日本駄右衛門、「入船物語」の桑名屋徳藏、「睦玉川」の才原勘解由、など孰れも獰惡なる兇漢にあらざれば陰險なる謀叛人の役なり。寶暦九年の評判記「役者談合膝」に彼れが江戸に於ける舞臺を評して曰く、

古人江戸實惡の開山、山中平九郎が仕内、大詰に惡顏はれて鱧にて取ひしがれ、さあ返事はどうぢやい、と大勢に詰掛けられ、ちと待ちやれ鼻なかむ、といふた程に落付たる惡の仕内せり。此の平九に等しき實惡なし。當時平九に肩を比ぶる實惡は此の桐嶋屋の歌七に極せり。今やうの仕内を見るに、實惡といふも、敵役といふも、惡の名ばかりにて、諸見物への見えばかりして、はれな取らん爲め、皆仕内を道化まぜたり。かゝる仕内には中々一圖なれ



歌右衛門の「清玄」（「似顔大全」より）

らふ大望は成就しがたし。

此れ歌右衛門が其の惡人に扮して場當りの可笑みに陷らざるを賞揚せるなり。明和二年の「役者開鷄

宴」に彼れが「薄雪」の秋月大膳を評して、

全體勿體あり、眼大きにして怒らるゝすさまじさ。ざん切、八德、長袴、取合ふ人品。實惡には重寶の人がら……。

といひ、同四年の「役者御身拭」には

當流日の出の實惡、一國一城の家老にしては自然と勿體備はり、表に實をかざり、內心には國を奪はんとの大きなる工をしこなし、如何にも其の器量大丈夫に見えます。

といへる、其の風采のすぐれ、且つ人品の偉なりしを稱せるなり。寶曆十二年、彼れが「秋葉權現」の日本駄右衛門に扮せる時なりき、

衒あらはれ、花道へそろ／＼歸る。月本圓秋に中村四郎五郎、呼びとめる所をとくと呼ばずに仕舞ひしゆゑ、歌右衛門せん方なく花道へ入り、しばしあつて花道より歸り來る……。歌七（歌右衛門）は元加州金澤の浪人にて人品甚よく、中年より役者となり、上下姿は別してよく寫れり。故に伊賀越の澤井城五郎にても、今のやうに燕天かづらはかけず、青月代なり。品柄よく、衒とは見えぬゆゑ、四郎五郎も呼びかねたるが今例となりて、誰がする時も呼びとめぬなり。（「傳奇作書」）

又、明和六年、江戸の中村座にて清玄に扮せる時、

色衣を着け、柄香爐を持出でたる時、自然と尊き大和尚と見え、墮落の時、櫻の散るを見て生死無常を思ふ場、獨舞臺、古今大出來。……（「脚色餘錄」）

此等の實例を前に掲げたる諸評に參照せば、彼れが面目を知るに足るべし。

彼れは實惡に好評なりし割合に、立役には其の當り藝跡かりき。蓋し、前の寶暦期に於て、江戸に、四世團十郎、大阪に、中山新九郎など、各實惡を以て却て立役の上に立てるが如く、歌右衞門の成功も此れと傾向を同うせるなりき。尙ほ音聲の低きと、世話の白まはしの拙きと、時々右の手を擧げてひらく出す癖のありしとを缺點とせり。要するに彼れは技巧に拙にして趣致と氣品に於て勝れり。「役者安評林」(天明九年の評判記)に彼れを藤川半九郎と比較して曰く、

此の人役の體の姿を作る事は此の上なし。誠に狂逆の張本と見えるなり。されども彼の用の業は利かざる……なり。當風の半九郎)は姿も業も利たるゆゑ、下に立つ事はなく誠の上手なり。されども、此の人其の業があんまり利き過ぎて、後にこそ大の謀叛人の姿もはまりたれども、其の以前は惡の大きく見える事少し薄し。歌右衞門は業は利かざれども、あたまから大の謀叛人と見えし出立なるゆゑに……實惡の部の卷頭となつて言出す狂言の數多く……。

又實惡のほか、老實の人、白痴の徒、嫉妬深き、もしくは執念強き人物も屢演じて好評なりき。彼れが當り藝の一たる「清水清玄」は實に後者を代表せるものなり。

彼れが技藝の秘訣を說くや曰く、

其の役の人になりおほせる事を心掛けるなり。例へば、清盛なれば清盛、袴垂保輔なれば保輔の、其の人品から、其の人の心持を考へて、其の人になりたる心にて、扨狂言の仕內にかゝりては、十のものを七つも八つも心の中、臍の下より出しながらに仕內なして、十が二つ三つを容にて見えきように花々しく狂言にするなり。實を七つ八つ、花を二つ三つといたすなり。元が狂言の事ゆ

ゑ、花は自づとあい易きもの、其れゆゑに實をおもにするなり。獨りしてする舞臺は却てなほ〳〵實をおもに、心の中に仕内をするを專一と心掛くるなり。（「東の花勝美」）

と、此れ純然たる自然派の口吻ならずや。門人武十郎が「忠臣藏」の伴内の役不足なりし時、彼れは武十郎を戒めて曰く、

伴内の役不足なりと思ふは言語同斷の事なり。能く思ひ見るべし。鹽谷判官短氣にて師直に殿中で手疵を負はせしゆゑにこそ此の通りの狂言に綴り來れり。若し師直が短氣にて判官に手疵を負はせなば、其時は主人の敵をむくふは誰がすべきぞ。伴内ならでは無きか。されば大事の役ならずや。（「古今いろは評林」）

といひしかば武十郎も納得せりといふ。此等は牽强附會の議論ながら彼れが脚本を解釋するに當り一見識を有せしを知るべし。

彼れは、最初京都の劇場に現はれ、又江戸へも下りたる事あれど、專ら大阪の舞臺を其の根據とせり。又彼れには實子三世歌右衛門あり、次ぎの文化文政時代の名優たりしのみならず、門下にも女方として同く次の時代に有名なりし中村松江を出しき。

歌右衛門よりは後輩にして、而も寛政時代に同く實惡に著名なりしを**淺尾爲十郎**（錢屋奥山、享保二十―文化元）とす。彼れは寶暦期に女方として名ありし淺尾元五郎の弟子なりき。京都麩屋町四條下る町にて生まれ、幼名を

萬吉といひ、六歳にして父と共に大阪に來りしが、父死してより錢屋といふに抱へられて藤吉といひ、伊藤出羽掾芝居より現はれ、後に爲藏と稱して地方を巡業せしが、寶暦六年(廿二歳)十二月、始めて爲十郎と改めて大阪の十木菊松座に現はれ、「學文談」の相馬太郎に扮し、翌七年正月、同座、「大和國井手下紐」に横雲大膳及び非人もつこうの傳に扮し、續いて好評を博し、更に翌八年二月、嵐粂松座に轉し、「五雁金」に布袋市右衛門、「傾曾我」に梶原平三に扮せり。此等の劇場は孰れも謂ゆる中芝居にして、其の俳優も第二流たりしうちに、爲十郎は一頭角を現はし、前途多望を以て目せられしが、是れより暫く京阪の劇場に其の姿を失ひて地方を興行し、更に寶暦十年十一月に至り、再び大阪の姉川新四郎座に出で、「三浦大助蔵德誥」に大場三郎に扮し、當時の評判記に敵役の「上上」として記されたり。次いで翌寶暦十一年十一月、中山文七座にて、「總追捕使鎌倉鑑」に梶原平次、同十二年正月、「泰平いろは行列」に師直、一子甚藏、不義士陣四郎、鐵てこ鐵右衛門等に扮して愈聲名を博し、同十一月も同座に在りて、「鉢木年代記」に朝倉大之進を勤め、此の時より敵役の「上上吉」に上され、同十二月、「双蝶々」に三原有右衛門、同傳藏、手代權九郎に扮し、是れ亦好評なりき。是れより以後に於ける舞臺の經歷は、

寶暦十三年十一月、同座、「勝鬨阿呼礎」に長崎四郎左衛門實は駿河守則定、

明和元年正月、同座、「けいせい天羽衣」に村雲大學と清見伴作。十一月、同座、「桃太郎菲噺」に柴刈の女房後に[illegible]

の滑稽）に物部平馬。

明和二年二月、「戀女房染分手綱」に鷲塚八平次。十一月、姉川菊八座、「花櫓闇書太平記」に博奕打みたの所平。

明和三年二月、「大和國井手下紐」に横雲大膳と非人もつこうの傳（二度目）。十一月、京都、市山助五郎座、「雪朝大紋日都鳥」に肴屋治兵衞實は富樫大九郞。

此の時、彼れは立役の中山文七と共に始めて上京して、尾上菊五郎と一座せるなりき。

明和四年正月、「けいせい大内櫻」に墓法師。九月、「楠正行軍略之巻」（菊五郎の宇治常悦）に吉岡兼房。十一月、同座、「神勅壽鐵砧」に木場の權平。

明和五年二月、「けいせい桃山錦」に岸田兵部、眞柴軍領、松岡八郞。十一月、大阪、山下八百藏座、「新館萬歲壽」に膏藥賣長崎てんぷら實は内海大學弟十八。十二月、「双蝶々」に番頭權九郞と駕の甚兵衞。

彼れは三年目に歸阪せるなり。

明和七年二月、藤松三十郞座、「東山殿女狩」に贋勘解由と松屋四郞兵衞。五月、「淀屋橋喧嘩」に手代傳兵衞、根津四郞右衞門、加古川市兵衞。六月、「催馬樂踊始」に村松官藏と東馬三郞右衞門。十一月、京都、三桝德次郞座、「榮源後陣凱」に大江三郞。

明和八年正月、「けいせい蝶花形」に小栗宗丹と土佐又平。十一月、嵐山十郞座、「萬代功源氏」に粕賣喜助。

安永元年正月、「けいせい櫻御殿」に大友宗麟と岩見太郞左衞門。十一月、芳澤いろは座、「大阪細工楪木像」に左甚五郞。

安永二年正月、「けいせい櫻大畷」に藻屑三平實は大内力丸。十一月、大阪、小川吉太郞座、「目出度討爺」に大部坊覺明。十二月、

「盛衰記」に梶原平次と權四郎。

此の時、始めて實惡の「上上吉」に上せられ、彼れが名聲は次第に高くなりき。

安永三年十一月、同座、「南朝嫁入始」に長崎次郎假に萬歳佐次右衛門と伯父大領。十二月、「忠臣蔵講釋」に九太夫と宅兵衛。

安永四年三月、「筐小袖累譜」に見與右衛門と船頭久右衛門。五月、「妹背山」に鱶七。十一月、同座、「鯱鯱百物語」に御厨太郎實は白川廣文。十二月、「双蝶々」に權九郎と駕の甚兵衛。

安永五年七月、「和訓水滸傳」に海賊毛剃九右衛門と兄後平次。十一月、嵐七三郎座、「源氏冠打出見槌」に紀州吉野丸源藏實は那須一子長範。十二月、「伊賀越乘掛合羽」（新作）に澤井又五郎と醫者（早變り）と母鳴見。

安永六年五月、「伽羅先代萩」に山伏眼通坊と常陸之助海尊。十一月、京都、三桝次郎吉座、「弓勢南村恋」に曲馬車橋宮丸實は清王丸、「布引瀧」に瀬尾十郎。

安永七年正月、「けいせい博多織」に毛剃九右衛門と後平次（二度目）。十一月、同座、「豪賢恩剌官島」に紀州源藏實は那須長範（二度目）。

安永八年正月、「けいせい書外題始」に不破伴左衛門、異國人趙子昂實は尼子勝久。九月、「闇著待新田系圖」に村上彦四郎。十一月、中山猪八座、「都繁昌雨物開初」に雷勘兵衛。

安永九年正月、「けいせい大内雛形」に山中鹿之助と男達眉間尺門平。十一月、同座、「金銀星祭四盛人」に箱根長範實は義村。十二月、「艶手綱」に後藤兵衛と時政。

天明元年正月、「けいせい聞物語」に提婆の六。五月、「緋帶橋」に小栗宗丹、「お染久松」に久作。七月、「一谷」に熊谷。

是れより、尾張及び伊勢地方を巡業して歸阪せり。

十一月、大阪、藤川山吾座、「天赦萬義經贔負」に輕業師早咲洞之助實は鈴木三郎。十二月、「天下茶屋聚」（新作）に東馬三郎右衛門と安達彌助。

天明二年三月、「一谷」に熊谷。五月、「二王門端歌雜錄」に石川五右衛門。七月、「丑天神血染宮入」に夢の市郎右衛門。十月、「けいせい博多織」に毛剃九右衛門（三度目）。

天明三年正月、「けいせい黄金鯱」（新作）に柿の木金助。三月、「三十石 艠始」に花滿左衛門と闕口半太。四月、「伊勢物語」に小よし。五月、「ふぢ見月通者墳」に大工與兵衛。六月、「三日太平記」に光秀。十一月、嵐他人座、「蘭菊女夫狐」に傘賣源太實は芦屋道滿。

天明四年正月、「けいせい倭荘子」に和田雷八と大庄屋郡次兵衛。

天明五年正月、嵐他人座、「けいせい天橋立」に提婆の六實は武藏之助。十一月、尾上菊五郎座、「義經千本櫻」に飛脚早助、實は義經。

此の時より、彼れは實惡の「大上上吉」として評判記に揭げられたりき。

天明六年正月、「けいせい忍術池」に稻田當藏。十二月、坂東岩五郎座、「伊賀越乘掛合羽」に澤井又五郎。

天明七年九月、「大塔宮曦鎧」に齋藤太郎左衛門。十一月、中山福藏座、「意馬心猿歳校顏」に猿の精。

天明八年正月、「加賀見山廓寫本」に大月源藏。三月、「大門口鎧襲」に願哲坊。十一月、江戸、市村座、「源氏再興黄金橋」に衛士又平と

輕業師小竹大五郎。

此れ彼れが江戸の舞臺を踏める最初にして、恰も五世團十郎と一座せるなりき。

寛政元年正月、同座、「戀便假名書曾我」に鬼王新左衛門、二番目に男達鐵壁武兵衛。三月、「梅川忠兵衛」に孫右衛門。五月、「三十石艠始」に小山判官と關口平太。六月、「忠臣講釋」に喜内、宅兵衛、近江屋次郎右衛門。八月、「姿伊達契情容儀」に仁木彈正、菅野小助、駿河禪司、尤道理之助。九月、「山姥」(路考)に怪童丸。十一月、同座、「花御江戸將門祭」に比叡嶽の鷲藏實は藤原純友、伊賀壽太郎。

寛政二年正月、市村座、「うれしく存曾我」に鬼王と剣池權之頭。八月、「腰越狀」に五斗平。十一月、大阪、淺尾爲十郎座、「一[illegible]芳山錦奥山」に蛤賣 新作、「薄雪」に團九郎と伊賀守。

此の時、二年ぶりにて歸阪せるなりき。

寛政三年正月、「けいせい誰伏水」にいかる甚内と利休。「腰越狀」に五斗平。「八百屋心中」に半兵衛母。「忠臣四十七訓」に師直、作内、義平。十一月、淺尾奥次郎座、「けいせい忍術池」に稻田東藏。

寛政四年正月、「伊勢物語」に孔雀三郎。「花大樹」に山口九郎次郎、松永長頭丸。「色競」に明智と山伏玄蕃。「富士嶺」に朝比奈と鬼王。「千本櫻」に銀平、彌左衛門、覺範。「お染久松」に油しめ勘六。九月、「碁二街」に大道寺學太郎と中間書平。十一月、同座、「人心叶戯場」に水豹の精、「信仰記」に是齋。

寛政五年正月、「勝武革奴道成寺」に尼子勝久、玉島兵庫。三月、「けいせい、勝玉川」に豆腐屋権兵衛、才原勘解由。「平井權八」に木右

衞門と幡隨長兵衞。「戀女房」に江戸兵衞、與三兵衞、「一谷」に彌陀六。七月、北の新地に轉じ、「忠臣講釋」に義平と近江屋治郎左衞門、「關平物狂」に關平。再び淺尾座へ歸り、「石井仇討」の赤堀水右衞門と淺田源八。「菊水卷」に石堂勘解由。十一月、同座、「乘掛合羽」に又五郎、母鳴見、醫者奧山左内。

寬政六年正月、「けいせい青陽鷄」に三輪五郎左衞門、阿波屋太郎助、金井三九郎。三月、「八重霞花街入船」に長柄丈右衞門、家老三左衞門、老女河内のお谷。七月、「小栗」に橫山太郎、れず兵衞、一式丹下。「女護島」に彌平兵衞と平野久右衞門。「三代記」に和田兵衞、擂鉢太郎左衞門、行平のお鍋。九月、堀江市の側芝居、五斗平と關平。十一月、中山與三郎座、「假名寫安土問答」に小田信長、長刀賣實は並川瀨平。「中増弓勢鼎負鬪」に北の神、「繼纓錦」に加村宇田右衞門。同十一月、京都、龜屋粂之丞座、「舊礎花木影」に山口九郎次郎と松永長頭丸。「延紙の書置」（文七の紙治）にちょんがれ語り。

寬政七年正月、再び大阪、中山座、「極彩色倭繪草紙」に小栗宗丹、猪熊門兵衞。三月、「鬼一法眼」に鬼若丸。「吾妻與五郎」に山崎與次兵衞と椀久。夏、京都、龜屋座、「勝負帷子」に先生龜右衞門、松阪屋新助、稻妻村右衞門。秋、再び、大阪、中山座、「忠臣藏」に師直、本藏、九太夫。「三十石」に川浦瑞見と關口平太、「鳴神」に奴傳内。

寬政八年正月、大阪、中山一德座、「雷」に太鼓持勘兵衞。「增補うす雪物語」に伊賀守と刎川兵藏の早變り、團九郎。三月、「けいせい黃金鯱」に柿木金助。五月、「千本櫻」に彌左衞門、「お染久松」に手代善六。八月、「伊勢物語」に小よし、藤太、當作。「思花街容性」に幡隨長兵衞。九月、「八百萬皿曾我」に工藤と樋守與五藏、顏見世に大黑天と花盜人の大盡。十一月、京都、龜屋粂之丞座、「三十石」に瑞見と關口平太。

寬政九年正月、大阪、市川團三郎座、「けいせい遊山櫻」にそろり新作、小西彌兵衞、小西如淸。五月、「御所櫻」に伊勢三郎母と藤彌

太。夏、上京、「扇矢數」に師直、堀部彌二兵衛、九太夫、平右衛門。「夏祭」に團七。「春陽鶴」に三輪五郎右衛門、金井三九郎、阿波座太郎助。「小野道風」に駄六。「お染久松」に善六。「博多織」に毛剃九右衛門と船頭五平次。「八百屋心中」に島田平右衛門。再び歸阪、「博多織」に同上。「菅原」に白太夫。九月、「遠州中山染」に道才坊、白須賀大領、「粂仙人」に守彦。十一月、京都、嵐熊之助座、「楠雪都」に加賀見太郎、杉本彌兵衛。「忠臣藏」に本藏、師直、石堂、平右衛門。

此の時より、評判記に彼れを「極上上吉」に推せり。

寛政十年正月、「けいせい櫻大臉」に藻屑三平、百姓與四郎實は尾形家來左馬五郎。三月、「增補時繼記」に三浦荒次郎、若徒大助。「腰越狀」に五斗兵衛。これより暫く伊勢に下る。八月、大阪、中の芝居、「國姓爺」に和藤内、「今織上布」に源五兵衛、「忠臣講釋」に近江屋治郎右衛門と宅兵衛。上京して「二王門」に石川五右衛門、腎虚やみ藥鑵屋しげ右衛門、「梅川」に孫右衛門、「伊勢物語」に小よしと名虎、「嫗山姥」に怪童丸。十一月、大阪、藤川勝次郎座、「月雪花校顏」に曲馬師立花の宮丸實は鈴木三郎、「一谷」に彌陀六。寛政十一年正月、「けいせい會稽山」に池上七九郎。三月、「石疊娘陣幕」に土肥庄左衛門、うしほの大六、「紙治」にちよんがれ諷り文海坊。四月、「信仰記」に是齋、「猿廻門出諷」に太鼓持友七、「嫗山姥」に怪童丸。五月、「菅原」に兵衛、「幼稚子敵討」に深見新平。七月、京都、早雲長太夫座、「會稽山」に池上七九郎と主計頭、「紙治」にちよんがれ坊主。九月、再び大阪、藤川座、「紅楓秋葉話」に長島平兵衛、月元福明、浮洲の岩。十一月、同座、「弓勢通矢車」に願人坊主西念、「蘆屋道滿」に與かん平、「梅川」に孫右衛門、「金比羅御利生」に深見瀬平。

此の頃より彼れは健康衰へ、與かん平を其の子與次郎に代らしめ、尙は舞臺を休みがちなりき。

寛政十二年正月、「けいせい花山崎」に荒木村重、こそべ新左衛門、齋藤内藏之助。三月、「濱眞砂」に石川五右衛門と藥罐屋助左衛門。四月、「小室節」に丹波與作、伊達與三兵衛。夏、京都、南側芝居、「勝負帷子」に兵法師龜右衛門と松阪屋新助。「四天王寺伽藍鑑」に妹子大臣と多門天。「絲の時雨」に宿老新助と米屋仁左衛門。「俠競廓日記」に鐘の太兵衛と山崎屋淨閑。十一月、大阪、中山徳次郎座、「惠寶太功記」に明智光秀。

享和元年正月、京都、北側芝居、「けいせい金花山」に甚内と利休。「名所井筒」に髮結長吉。七月、大阪、北新地芝居、「阿古屋松」に鹽燒藤太。「八重霞」に梶の長兵衛と福島屋清兵衛。八月、大阪、山下座、「水滸傳」に毛剃と船頭五平次。九月、「菊水卷」に夢判じ在兵衛と石堂勘解由。十一月、京都、嵐熊之助座、「伊賀越」に澤井又五郎、醫者奥山左内、母鳴見。十一月、大阪、大谷虎藏座、「五雁金」に宅間玄龍と田樂屋。

享和二年正月、同座、「けいせい廓源氏」に物草太郎と寺子屋東作。上京して南側芝居に同上、「矢口渡」に兵庫と頓兵衛。五月、歸阪して同上。六月、再び上京、「一谷」に彌陀六、「襤褸錦」に宇田右衛門。七月、大阪、角芝居、「契情花發船」に八代勘解由と船頭もじ兵衛。

次に「忠臣講釋」に九太夫に扮すべき筈なりしが、此の頃より彼れは病の爲め音聲を痛め、又終に舞臺を勤むるに堪へずして休業せり。十一月に至り、京都、南側芝居にて「双蝶々」の三原有右衛門に扮し、翌享和三年春、大阪、角の芝居にて「菅原」の時平に扮せしが、是れより舞臺を退き、更に秋に至りて「紙治」に其の得意なるちよんがれ坊主を勤め、此れを一世一代として、全然退身する筈なりしも、舞臺を勤む

る事は其の健康の許さゞりしかば、十月の始めより、市川團藏の紹介にて僅かに退隱の口上だけを述べ、且つ爲十郎の藝名を其の子與次郎に讓りて、此れより專ら自宅に靜養せしが、翌文化元年四月七日、



淺尾爲十郎（「ますかゞみ」より）

終に七十歳を以て歿せり。

爲十郎は小柄なりしも、音聲鮮かに、小手の利きて、所作事さへも能くし、其の藝風は賑かにして、憎みの他に可笑しみにも長けたりといふ。されば彼れが技藝は大かた之を二種に分類し得べし。甲は輕きと可笑しみとを旨とするものにして、乙は重みと憎しみを專らとするもの是なり。彼れが「双蝶々」の手代權九郎に扮し、紅裏の着物を見せて、始めて其の伎倆を認められ、續いて「お染久松」の善六に扮し、額の疵に貝をつけ、後に其の貝を吸ふ可笑みに大當りを取りて、生涯の間に、此の二役を幾たびも繰返せりといひ、又「淀屋橋喧嘩」の手代

傳兵衛に扮して同く好評を博せしといひ、麁忽なる手代の惡漢を得意の藝とせるは即ち此の甲種に屬すべきものなり。又この手代敵より轉じて、其の最も當り藝なる「紙治」のちよんがれ坊主の如き、「二王門」の腎虚やみ藥罐屋助右衛門の如き、「忠臣講釋」の近江屋治郎右衛門の如き、同く輕妙と滑稽とを以て悅ばれたるなり。尙ほ彼れは可笑みに長じたりしのみならず、物眞似に巧みなりしかば、曲馬師又は藥賣の口上等を模倣して屢喝采を得たりき。

乙種に屬する技藝の標本としては、第一に彼れが壯時の當り藝なりし小栗宗丹の役を推すべし。即ち明和八年、始めて之に扮せし「けいせい蝶花形」により其の役柄の大概を記さんに、

繪合內見の目利役を蒙り、高島狩野之助の饗應にあひ、門葉の諸大名を連れ、袴羽織、大小、四方髮、置手拭の出端、……傾城遠山に心を掛け、狩野之助に酒の酌をさせ、燗ぬるきゆゑ、狩野之助に自身銚子直しに行けといひ、肴の喰ひさしを挿みやり、色々惡口し、遠山が手に入らぬ意趣に、門弟中にて打擲させ、次ぎに遠山へ遣りし文を遠山が出し、門弟中に讀ますを聞いて無念がる仕內。……次ぎに金閣寺にて繪合內見の時、諸大名より指出せし一軸を一々目利をなし、其れより名古屋山三が狩野之助の名代に持參せし血の達磨の一軸を見て怪み、山三に來し方の事を問ひ、我れは不破道犬が悴伴左衛門が兄なりと言ひ聞かせ、持參せし血の達磨の一軸は贋物ゆゑ、其の通りを言上すれば高島の家は滅亡すべし、傾城遠山をくれなば正眞といふてやろと難題を言ひかける仕內……。其れより、山三が遠山の身請二三日延引いたしくれよといふを叶はぬ事といひ、暫くは相待ちくれんと乾の坊まで立歸り、次に山三に切付けられ、額に一かせ疵を受けながら逃延びるまで、大丈夫の惡の仕內……。（「役者色々有」）

「けいせい博多織」の海賊毛剃九右衛門は、其の次ぎに始めて彼れによりて演ぜられ、最も得意の藝として屢〻繰返されたるが、此は近松の「博多小女郎」を其のまゝに取りて前後を増補し、原作よりも一層殘忍なる兇賊に改作せるものなり。今原作になき博多柳町以下の後半を左に略叙せん。

三つ目、非人の姿にて辻堂に忍び、くが助女房お松が密事を立聞きせしゆゑ切殺し、くが助が密書を奪ふゆゑ、種が島にて打殺し、松が枝に忍べば、向井林左衛門が來るゆゑ、又種が島を打ちて立退き、四つ目、兄後平二に圍まはれ、下家に忍び居り、兄が在家知れさうなる樣子ゆゑ立退き、大切、しびれ藥の法を用ひて勅書を奪取り、五つ松雜掌花形大二と欺はり、箱崎家へ使者に來り、菅家の正筆、萬國通路船切手、二色の寶差上げぬうちは箱崎の相續叶はぬといひ、小平二が持來りし九右衛門が首といふを見れば、我が兄後平二が首ゆゑ驚き、其れより惣七と顏見合せ、九右衛門といふを制し、繩を掛けて預かり、次ぎに、小女郎、おさつ、兄弟の名乘するを立聞き、小女郎は我が子と言ひ聞かし、おさつに菅家の正筆の軸を盜めと言ひつけ、其れより林左衛門も馳走に出せし羊に毒ありといひ、新平が毒味せる所、忽ち狂ひ出し足の立たぬゆゑ、しびれ藥なりといひ、林左衛門も計略に陷り、定右衛門に正筆の一軸と船切手を取換へ立退く。（「役者大矢數」）

「伊賀越乘掛合羽」の澤井又五郎も毛剃と同年に始めて演じ、以來屢舞臺に繰返したる當り藝なり。其の筋と役柄とは、

澤井又五郎、元は足利の昵近ながら、心惡徒ゆゑ勘當うけ、行家が世話にて春太郎の近習に出でながら、唆かして内證入用の金を志津馬に判をさせて借らせ、傾城大橋を口說き、又志津馬が言ひなづけあるお袖に文をつけ、次ぎに行家に異見せられしを惡口し、再

右衛門に盜みて質に入れし正宗の刀を見出され、又若殿を唆かしたる事、お袖に不義しかけたる事まで露はれ、行家に中てられ、顏に犬の字を書かれしを水鏡にて見て無念がり、廊下に穽をこしらへ、行家を殺し、正宗の刀を奪ひて立退く。後、かつたい村にて、俗醫をしめ殺して妙藥を取り、死骸の顏の皮をむいて立退く。此の場、早がはりの二役。次ぎに長町の宿にてかつたいとなりて忍び、次ぎに伏見の宿に、櫻田が弟甚五兵衛と名乘り、かつたいを直して出で、金助に出合ひて手裏劍を互ひに打合ひ、我が言號の女房を見殺しにする憎さ。大切、志津馬と立合つて鑓の立合。（「役者花の會」）

此等よりは後に演じて同く喝采を博せし稻葉東藏といひ、柿木金助といひ、孰れも此の乙種に屬すべきものなり。

彼れは、敵役として此の二方面に成功せると共に、着實なる老役、もしくは立役は、屢是れを舞臺に試みたるに拘はらず、常に失敗に近く、晩年、彼れが實惡としては評判記に「極上上吉」と稱せられしも、同時に立役としては「極上上吉」に貶せられしが、又稀に此の種に於て成功の藝なきにあらず。即ち始めて江戸に演じて大好評を得、後に屢京阪に繰返したる鬼王新左衛門の如き、又「青陽鶏」（武藏鐙）の阿波座太郎助の如き、其の著き例なり。又後者の狂言に於て、別に扮せる三輪五郎左衛門は大久保彥左衛門を暗示せし役とて、朴訥剛直なる老武士を演出して是れも成功の部なりしは、蓋し彼れが藝品に於て一異彩たり。尙ほ彼れが「伊勢物語」の小よし、「双蝶々」の姉お關などの如き老女に扮せし事ありしも、此の方面に於ては、彼の立役と同く失敗を免れざりき。「役者壽」（文化元年出版）に爲十郎が一代に於け

る藝の優れるものと劣れるものとを系統的に列記せり、其の記事散漫ながら、前に述べたる補遺として左に引用せん。

勝系譜

●毛剃九右衛門—澤井股五郎—稲葉東藏
- 柿木金助—三輪五郎左衛門
  - 阿波座太郎助
  - 鬼王新左衛門—伊達與三兵衛
  - 安達彌助
  - 五斗兵衛
  - 籠供奴—曲馬宮丸
  - 月代曲剃—金賣源太
  - 桃喰婆

●天海チヨンガレ—手代善六—兵法師龜右衛門
- 腎虚やみ 藥罐屋助左衛門—俗醫左内
  - 加村宇田右衛門
  - 鷲塚八平次
- 近江屋治郎右衛門
  - 漁師鱶七
    - 宿禰太郎
    - 大庄屋軍治兵衛
  - 獨鈷の駄六
  - 飾磨宅兵衛

劣系譜

●白太夫—彌陀六—新口村孫右衛門
- 船頭權四郎—鮓屋彌左衛門
- 小よし—下女お鍋—長吉姉お關
  - 八百屋婆
  - 鍛冶屋娶
- 妹子大臣—物部守彦
  - 熊谷次郎—木曾義賢
  - 和藤内
- 齋藤太郎左衛門—石堂勘解由—斧九太夫
- 高師直—梶原平二
- 鳴神上人—黒船忠右衛門—船頭松右衛門
- 閻平—左甚五郎

彼れは亦衣裳の好みに長じたりといふ。諸評判記の彼れを評するや、必ず此の點に於て一致せり。彼の手代權九郎に扮して、赤裏の衣裳に喝采を博せる如き、其の一例なり。又安永五年、始めて毛剃九右衛門に扮せし時の逸話の如きも、彼れが此の特徴を證明するものといふべし。此の役は、海賊の頭なれば衣裳皆唐物ならでは寫り惡しとて、着附羽織は白羅紗の對、下着は唐更紗、足袋は金唐革、其の餘、提物に至るまで古渡りの唐物ばかりをつかふとて、彼れは金五十兩を興行人より申受けしが、當時は衣裳小道具とて甚だ質素なる物なりしを、斯く五十兩の費用を申受けし事とて、定めて美々しき衣裳ならんと、初日に見れば、着附羽織は白の紋羽、足袋も木綿に摺込みし金革まがひなり。興行人より爲十郎へ約束の違ふ事を責めしかば、彼れが曰く、大金を出すが故に噂をする、噂高ければ見物おどされて、紋羽も羅紗と見る、さすれば、羅紗を着ようと、紋羽を着ようと、自分の勝手なりといひしとぞ。彼れが意匠は能く鉛を化して銀とするの伎倆を有せるなりき。

斯くの如く、彼れは衣裳の好みに長ぜしのみならず、謂はゆる早變りに巧みなりき。安永五年の「伊賀越」に彼れは同じ齣に澤井又五郎と俗醫奥山左内とを兼ね、最初又五郎にて現はれ、稻村の内へ隱れて更に左内として出で、再び又五郎にて之を殺す科を見せて見物を驚かしめ、此の後も「伊賀越」を演ずる場合には必ず此の二役を早變りにて扮せり。後安永九年に至り、江戸に於て尾上松助が此の意匠を模

し、中村座にて幸崎甚内と釣鐘彌左衛門とを早變りにてせるのみならず、又操り芝居にて人形遣ひ吉田千四が之れを「忠臣藏」に應用し、定九郎と與一兵衛の早變りを見せ、更に歌舞伎にても嵐三五郎が此の二つに扮し、此れより定九郎と與一兵衛とを稲村にて早變りする事は屢舞臺に演ぜられたりき。

要するに、爲十郎の長所は其の技巧と輕妙と細かなると派手なるとにありき。然れば又數多の短所をも其のうちに含めり。即ち輕妙にして派手なるがゆゑに、老實又は沈着なる人物に扮するに適せず、これ白太夫、權四郎の如き老け役、もしくは、黒船忠右衛門、船頭松右衛門の如き立役に失敗せし所以なり。彼れは餘りに賑かすぎたりといひ、餘りに愛嬌のあり過ぎたりといひ、餘りに手が利き過ぎたりといひ、又餘りにおどけ過ぎたりとは諸評判記の一致する所なり。加之、其の技巧と細かなるとの弊は穿鑿に過ぎ、寫實に過ぎ、又冗長に過ぎて、随つて藝品に於て賤しかりき。是を以て大奸物大兇漢に扮する事は彼れの得意にあらず、實惡よりも平敵に適當し、最も手代敵に妙なりし事は前に述べたる通りなると共に、時代物よりも世話物を得意とし、此の點に於て爲十郎は歌右衛門と正反對なりき。明和八年の「役者歳旦帳」に彼れを評して曰く、

　餘り細かに氣をつけ過ぎて、役により上手の過上する事あり。此の場が考へられたら恐らく憎く勢はござるまい。

又天明九年の「役者姿記評林」には、彼れが大阪より東下せると同時に、江戸より上阪せる中村仲藏と比

較して曰く、

少し狂言の筋の下卑た方での惡な事に於ては續く者はないと思へば、世話事のさつく／＼したる事は、やつぱりさつく／＼見えて、其の中で行届くまで仕打を見せる人なり。勿論實情を專らとする所は秀鶴（仲藏）と比べて見る時は、秀鶴は今畫く土佐繪のやうなものにて、古風な中に當流の端手な持前の筆意に表はるゝ風情。又奥山は今はやる所の正寫し（寫生畫）にて、實與の筆意を見せて些しも正物と違はぬと見せる器用あり…。一場々々のこつてり事見て居る内はぞつこん面白うて、歸りてもあれならではとまでも思へども、よう思案して見れば、何うやら油こい肴ばかりの上に、又出たも天ぷらに腹の袋が少しつかへたやう…。

寛政三年の「役者節用集」には、前年彼れが江戸に於ける評を記して曰く、

こちらの方での評判には成程奥山（爲十郎）の藝は至極達者に身を入れてすれども、とかく見物の呑込んで居る仕内をくどくどして見せらるゝゆゑ、土地の風に合はぬといづ方でもいひましたてや。

更に「狂言は如才もなく、達者に、きめ細かに行届かす仕様ながら、をかしみを兼ねたる狂言にても、ちとしつこいと申ますぞへ」といひ、此れと同意味なる非難は各評判記に見えたり。蓋し江戸に於て彼れが不評なりしは、當時中村仲藏が久しぶりに京阪より歸來せしかば、其の人氣に押されたるに由れりといふ。而も彼れ自身の缺點が主なる原因なりしならん。尙ほ斯くの如き彼の缺點を最も具體的に示せるは寛政五年の「役者當振舞」に載せたる彼れの渡海屋銀平（「千本櫻」）に對する評これなり。

先づ銀平出端に碇をかたげて出る時、重き心持にて出らるゝは成程其の通なれど、そこが狂言にて、下駄はいて大きなる碇を見え

よくかたげて出るといふ所が芝居でござります。大切、碇をかつぎ入水する時も、綱を腰にしくと巻付けての仕内、其のやうに丁寧にせぬ所で持てたものでござります。

といひ、同時に彼が扮せる鮨屋彌左衛門を評して、

二役彌左衛門も、小金吾の首打ちて立歸る所はよかつたれど、内へ戻り、羽織に付きし血を溜み水にて洗ふ仕内、あまり氣が付き過ぎますと申しました。權太を手にかけ、後血汐を見て、笠にて顔を覆うて立出づる氣持も、白太夫ぐらゐなればよけれど、此の彌左衛門は重盛の恩を受け、其の恩がへしに惟盛の身替りに、途中にて前髪の首を切つて戻るほど大丈夫の親仁なれば、我が子の最後を見て、笠にて顔を覆うやうな事でも釣合ひがわるいぞ。

といひ、寛政七年の「役者時習講」に彼れの鬼若丸（「鬼一法眼」）を評して、

樽の鏡を打割り、酒を飲む時、酒のみの趣が餘りくはしく、十三歳の兒のやうには思はれず、あこら細かに氣を付けずと、只ぐつと一息に飲みたいものぢや。

といひ、又天明八年の「役者五極成就」に

天下茶屋の彌助にて、自分も涙をこぼしての仕内は見物へもこたへまするが、和田大八（「大矢數」）で慥か今の矢は手にこたへましたが、といふ心持にて足つまだてゝ延上り〳〵は、此のくらゐには立者にはおとなげなく、京桝内匠（「彦山權現」）が母親を討つて歸りしなに花道で舌を出しての嘲り顔は、立者には餘り愚當りばかりにて似合はぬ。

といひ、又安永七年の「役者大矢數」に彼れが得意とせる毛剃九右衛門の博多柳町の場を評して、

お尋の者ありと觸れ來りしに驚き、後に門口に掛行燈を懸けかへ置き、樣子を立聞く……。此の行燈をかけかへる時も、忍び足にて火の消えんとするを揭げるなど、餘り氣が付き過ぎて面白うないぞ。こま心を用ひず、只さつく〳〵と大手にしたいものぢや。

といへる、孰れも爲十郎の藝風の纖巧に過ぎ、穿鑿と寫實とに走れるを非難せるなり。更に、彼れが寫實の藝風に失敗したる實例は尙ほあり。

寛政三年の盆狂言、角の芝居にて「響灘入船噺」に船頭五太夫となり、娘の聟の爲にシケ日和合點にて海上へ乘出すといふ筋なり。彼れは若き折、沖にて難船したるを度々見及び、又船に乘合はせ難風に逢ひたる事も覺えあれば、此の役にて難風に逢うたる船頭の苦心をして見せんと、道具にも誂ありて、船の段々波に當つて碎くる所を眼のあたりに見せしが、餘り正寫しにて見物も心に凄く覺え、別して海上商賣の者は緣起わろしとて見物に來ず、其の場すみし跡へは來る。奧山は船頭の骨髓をして見するを自慢にて、見物揃ひてからでなくては此の幕を明けず。後は見物まろで來ずなりけり。（「傳奇作書」）

彼れは壯時より故藤川平九郎の藝風を慕ひ、曾て平九郎の成功せるものを演ずる事屢々なりき。而して平九郎が「姿」と「業」とに長じ、中村歌右衛門が其の「姿」だけに於て平九郎に優りし事は前章にいへり。爲十郎は其れと反對に「業」に於て寧ろ平九郎を凌駕したり。又彼れは平九郎と同く所作事をも能くし、「土器賣」、「椀久」、「一休」、「左甚五郎」、「怪童丸」などの當り藝あり。而も此等の大かたは平九郎の曾て演ぜしものを祖述したるに過ぎず。

彼れが音聲の鮮かなりし事は前に述べしが、安永元年版の「鸚鵡石」に其の白の癖を記せり。曰く、

口をいがめ胴聲を出し、うなりを付け、又せりふの間々に聲を張り、又聲を鎮めていふなり。

爲十郎には其の姪淺尾彌太郎あり、俳優たりしが早世し、又門下に二世爲十郎と工左衞門とを出せり。工左衞門最も著はる。又破門せる門弟國五郎は七世仁左衞門と稱して次ぎの時代の名優たりき。

〔註〕播州淺尾山の麓に奥山といふ處あり。此處に兵右衞門といふ農家ありて一子ありしが、幼き頃、上方へ登りて行方を知らず。然るに淺尾奥山といふ役者ありと聞き、其れこそ吾が尋ぬる血筋ならん、と緣を求めて其の由を言入れしに、吾れは京都の出生にて、兩親に早く別れ、淺尾といふ苗字は師匠淺尾元五郎より受け、奥山といふ名は贔負の客より貰ひたれば、聊も播州に由緣なしと答へしとぞ。（「役者用文章直指南」）

第二章　中山文七と二世嵐三五郎

中山文七――彼れが體格――菊五郎に劣れる點――彼れが三傑作――彼れが癖。

二世嵐三五郎――彼れの藝風――優れると劣れると――是利義教と淀屋辰五郎と――「烏帽子折」――吉太郎と藝風の相違――第二種の藝――大職卿――由良之助――第三種の藝――彼れが技藝上の用意――彼れが居常。

歌右衞門及び爲十郎が實惡によりて一家を成せると同時に立役として榮えたるを中山文七（和泉屋由男・享保十六―文化十）となす。彼れは寶曆期に於て京阪の名優たりし中山新九郎の義子にして、實は狂言作者松屋來助が子なりき。來助には二人の兄あり、松島兵太郎及び泉川千之助といひ、共に同時代の若女方たりしが、

千之助は新九郎の妹を妻とし、一家の因みをなせるにより、來助が子たりし文七は父新九郎の養ふ所となりしなり。蓋し來助には三人の男子あり、孰れも俳優にして、伯を松屋門十郎といひ、後に中山門十郎といへり、仲は即ち文七なり、叔は父の名を襲ぎて始め松屋來助といひ、中ごろ中山來助と改め、後に二世中山新九郎といへり。此の三人のうち文七最も顯はれて、終に寛政時代の代表的名優たりき。

彼れは幼名を與三郎といひ、元文二年（七歲）、大阪にて「妹脊の舞扇」（伯父泉川千之助の三勝、嵐新平の茜屋半七）に小兒お通に扮し、懷に抱かれて登場せるを其の初舞臺とす。此の後は若女方たりしが、寛延元年（十六歲）十一月、京都の嵐三右衞門座へ上りて始めて中山文七と改め、立役として眞田與市に扮し、翌二年、「誓文墳」に男達牛の尾の文七に扮して共に好評を博せり。同三年は休業し、同年十一月、京都、都半太夫座にて始めて元服し、「會稽和合璪」に養父新九郎と共に與勘平を演じて評よく、次いで翌寳曆元年、「玉藻前」に非人大六、「戀女房」に一平弟六藏に扮したり。同年十一月、彼れは京都の四條北側東の芝居の座元となり、「役行者大峰櫻」に山上次郎と大友王子とに扮し、評判記に「上上吉」に進められしが、翌寳曆二年正月、「けいせい菅原織」に今川仲秋となり、其の役柄に適せざりしとて「上上吉」に貶せられたり。又此の頃より、彼れは姓を改めて和歌山といへり。

同年十一月、新九郎と共に大阪へ下り、寳曆三年正月、三條定助座に、「相合枕」に放駒長吉となり、好評

なりしより元の地位に復せられ、同年十一月、同座、「木曾譜」に伊達次郎に扮し、翌寶曆四年正月、「天狗衣」の今川仲秋と阿房與五郎に喝采を得、秋は「五說經」に小栗判官と早苗三郎とに扮したり。十一月は大阪に始めて座元たり、「宇多源氏」のうごろもちの與五郎に評よかりしが、寶曆五年十一月、再び姓を中山に復し、坂東豐三郎座に「時代世話黃金榮」（盛衰記の改作）に船頭富藏實は樋口次郎（船頭松右衛門に擬せし役）に扮し、愈好評を得たりき。寶曆六年十一月は大松百助座に轉じ、翌寶曆七年正月、「天竺德兵衞」に將軍義輝と紺屋四郎九郎と渡邊六郎に扮し、同年十一月、姉川新四郎座に轉じ、「草津小女郎」に火の玉源五郎、寶曆八年春、「姬小松」に龜王丸などに成功し、更に同年十一月より角の芝居の座元たり。寶曆九年正月、「三十石艠始」に神道源八と爪長屋權九郎に喝采を博し、同年十一月、尚は座元たること舊の如く、翌寶曆十年正月、「鐘が岬」に獵師灘八と「女鳴神」に筆坂城之助、九月、「戀女房」に奴一平、十一月、同座、「生如來金顏見世」に阿彌陀如來、寶曆十一年正月、「[illegible]太郎」にきの平と廣元、孰も好評にして、且つ此れより「上上吉」の地位に上せられき。當時彼れは三十一歳。

寶曆十一年十一月、同座、「鎌倉鑑」に奴ほいと內實は義經。

同十二年正月、「いろは行烈」に鹽谷判官と大鷲文五と勘平家來千代七。秋、「[illegible]松」に[illegible]七、「[illegible]」に[illegible]衛。

十一月、同座、「鉢木年代記」にくづみ兵內、「双蝶々」に濡髮長五郎。

此の長五郎の好評なりしより、「大上上吉」の位に進みたりき。

同十三年「和田合戰」に淺利の與市、「菅原」に松王、「小栗」に横山太郎、「八重霞」(かしく)に福島屋清兵衛。十一月、同座「阿呼礎」に妻鹿孫三郎。

此の松王を、同時に中の芝居に歌右衛門が演せしも、文七の方却て成功したりき。

明和元年正月、「天羽衣」に北川宗左衛門、「累」に與右衛門、「喧嘩土俵入」に雷電源八、「非人仇討」に進藤治郎右衛門。十一月、「桃太郎昔噺」に桃太郎(子供より中年と老人、三段の仕分け)、「戀女房」に一平。

此の治郎右衛門も、同時に、中の芝居にて三桝大五郎が姉川新四郎の藝風に擬して演せしが、終に文七の好評なりしに及ばず。又此の時の評判記に彼れは始めて「極上上吉」に進められき。

翌明和二年夏、彼れが座元たりし劇場の或る事故の生せし爲め、翌年春まで休業せしが、四月十五日より再び舞臺に現はれたり。

同三年四月、「夏祭」に團七九郎兵衛。八月、「忠臣藏」に由良之助。十一月、京都、山下座、櫻井新兵衛。

此の由良之助は、故澤村長十郎、山下京四郎、及び市野川彦三郎、等が演せし以上の意匠を凝らし、其の細緻なる藝風は非常の好評と非常の大入とを取りしが、彼れは之を大阪の名殘として、十七年ぶりに京都へ上りて菊五郎と同座したりしなり。

同四年正月、「大内櫻」に飾磨左五右衛門實は大内義丸、足利直義實は小舟入山兵衛。三月、物草太郎と熊谷。九月、「菊水卷」に楠が瀨秋夜、「出入湊」に黑船忠右衛門。十一月、同座、「言鐵砧」に小鍛冶宗安。

京都に於ける彼れは始終菊五郎に壓倒せられて、大阪に於ける如き盛名なかりしが、此の時、菊五郎は退座して、彼れが養父新九郎之に代りて一座に加はりたりき。

同五年正月、「桃山錦」に毛利照元と武智左馬五郎。「青柳硯」に道風。夏、「夏祭」に團七、「腰越狀」に五斗平、「忠臣講釋」に矢間重太郎。八月、惟茂曲水の所作事。十一月、大阪三枡他人座、「高名大福帳」に惟茂曲水の所作(再び)。十二月、「双蝶々」に濡髮長五郎。

當時、隣座に於て女方嵐雛助が同く濡髮に扮せしかば、其の方珍らしがられて文七の方は前の如き成功を見ざりき。

同六年正月、「佐渡金山」にあたけ仁平、「忠臣講釋」に石屋五郎太と矢間重太郎、「堀江」(新作)に黑船忠右衛門、「惡女房」に一平。十一月、中山與三郎座、「三略卷」に金賣吉次實は鬼一法眼。

此の時、彼れは己の子與三郎を座元となせりき。

同七年三月、「小栗」に横山太郎、「磯馴松」に鍛冶屋太郎七、「大内鑑」に芦屋道滿、「一谷」に熊谷。六月、「相撲番組」に力士汐津島。

翌明和八年は伊勢の劇場へ赴きしが、當時、御影祭の半ばなりしかば、其の雜沓に壓せられて失敗に歸し、秋に至りて再び歸阪せり。

同八年十一月、小川座、「元日壽年魂」に佐野源左衛門、「三十石」に花鍋憲法と爪長屋。

此の時、「眞上上吉」の位に上せられき。

安永元年正月、「けいせい味方原」に島村彈正、「千本櫻」に狐忠信、九月、「不破伴左衞門」（養父新九郎の一世一代）に物草太郎。十月、「在原系圖」に奴蘭平。十一月、京都、芳澤座、「大阪細工樸木像」に武部源藏（あやめと靱猿の聟）。

同二年正月、「佐渡金山」にあたけ仁平（再び）。三月、「磯馴松」に鍛冶屋太郎七、「國姓爺」に和藤内、「雁金」に文七、「近江源氏」に佐佐木、「在原系圖」に蘭平。十一月、大阪、小川座、「目出度討盆」に熊谷直實、「盛衰記」に梶原源太と樋口次郎。

同三年正月、「九州細見」に貫練門兵衞。三月、「睦玉川」に浮世渡平と秋塚帶刀、「腰越状」に五斗平。七月、「雁金」に文七、「粂仙人」に守彦。十一月、同座、「楠噺」に萬歳實は楠正成。

同四年正月、「忠臣講釋」に重太郎。三月、「累」に與右衞門。五月、「妹脊山」に大判事と鱶七。九月、「布引」に實盛、「千兩幟」に千羽川。十月、「在原系圖」に村雨と蘭平。十二月、同座、「双蝶々」に濡髪。

同五年三月、「菊水の卷」に刎川主膳。五月、「信長記」に花子と松下嘉平治。七月、「水滸傳」に船頭小平治。九月、「天羽衣」に北川宗左衞門。十一月、嵐七三郎座、「打出兒槌」に大黑天。

同六年正月、「伊賀越」に政右衞門。三月、「先代萩」に重忠と片倉と鐵之助、「桂川」に長右衞門。八月、「近江源氏」に佐々木。冬、「南枝槐」に田原又太郎（小袖物狂ひ）。十一月、京都、三枡座、「賴政と、「布引」の實盛。

同七年正月、「博多織」に船頭小平治、「伊賀越」に政右衞門、「盛衰記」に松右衞門と家主鹽太。七月、土佐の又平、「先代萩」に重忠、片倉、鐵之助、「近江源氏」に佐々木。十一月、同座、「判官贔負」に奴宇治平實は源八兵衞廣綱（巨燵の立入）、「信長記」に此下東吉。

同八年正月、「外題始」に名古屋山左衞門、「累」に與右衞門。五月、「喧嘩土俵入」に雷電源八、「忠臣藏」に由良之助、「蘭奢待」に伊賀

守。「腰越状」に五斗平。十一月、大阪、芳澤いろは座、「忠臣蔵」に石堂、本蔵、義平。

同九年正月、「大内言葉」に鼓の胴師彌助、忠信一子吉野三郎、源九郎狐、「衣紋ヶ見」に力士孔雀三郎。七月、「千本櫻」に[illegible]平、「[illegible]抄盡」(小三金五郎)に伊東杢兵衛。九月、「磯馴松」に鍛冶屋太郎七。十一月、同座、「[illegible]殿勝岡」に[illegible]屋[illegible]助實は一[illegible]坊。

天明元年正月、「曲輪蹴」に鈴木喜多之頭。三月、「反魂香」に又平。五月、「八重霞」に福島屋清兵衛、「[illegible]衰記」に松右衛門と[illegible]太。七月、「喧嘩土俵入」に雷電源八。九月、「妹背山」に芝六と大判事。

天明二年は名古屋へ赴きしが、歸阪して藤川山吾座に、九月九日より一世一代として物草太郎と蘭平とに扮し、更に「博多織」の小平治と惟茂の所作とを演じ、其れより長へに劇壇を退きたり。是れより先き彼れは寶曆十二年に濡髪長五郎に扮せし時より脚部を痛め、終に痼疾となりて時々舞臺を休みし事ありしが、茲に至り全く俳優としての生活を辭して、死後の餘命を閑散のうちに送らんと欲せしなり。當時、彼れは歳五十二。「中山由男一代狂言録」に此の一世一代の興行の盛況なりし事を叙して曰く、

九月九日より十一月四日まで當りづめ、棧敷賣高……、九月九日より十三日まで千十六軒の賣高。同十八日まで五日の間に千二十一軒。同廿三日まで千廿七軒。同廿七日まで千二十九軒。廿八日より十月二日まで物ぐさ太郎、六日より後日狂言、此の間三日の休み、都合五日の間千三十二軒。七日より十一日まで千百四十五軒。十六日までが千二百八十五軒。廿一日までが千三百五十四軒。廿六日より廿八日まで千四百三十一軒……。十一月二日まで千五百八十九軒の賣高……。前代からの千軒續しめて見ましたれば、五十一日の間に一萬千九百二十九軒といふ事は此れが始めの終りで御座らう……。

斯くの如くして退隱せる彼れは、京都黑谷の眞如堂門前に草庵を結び、剃髮して淨光法師といひ、念佛三昧の傍ら狂歌などを物して平和なる生活を樂みたりしが、文化十年九月六日、八十三歲にて歿しき。

（註）文化十一年の「役者繁榮話」には八十二歲とあり。

文七の體格は肥大にして色白く、音聲爽かに、江戶の故大谷廣治の面影あり、筆跡は唐樣を學びて頗る能書の聞え高く、又文才にも長け、日常野卑なる業を好まざりきといふ。又遊藝に於ては舞と謠と皷とを能くし、其の藝風は和かみと愁ひと及び可笑みとを專らとせり。是を以て實事と濡事とに巧みに、實惡もしくは敵役に於て絕對的に不能なりき。彼れが「天羽衣」の北川宗左衞門に扮せる時の評に、

仕内は甚よけれども全體柔和にて憎らしくない。（寶曆十四年、「役者今川狀」）

といへる其の一例なり。謂はゆる和みと愁ひとを以て勝れるものには、「伊賀越」の唐木政右衞門、「忠臣藏」の大星由良之助、「忠臣講釋」の矢間重太郎、「菅原」の松王などの藝を標本とすべく、特に政右衞門は彼れが終生の傑作と稱せられき。然れども、公卿もしくは士人の如き上流の人物に扮するは、彼れの得意とする所にあらず、されば、明和四年の「役者御身拭」に彼れの菊五郎に劣れる點を指摘して

上品な藝ではない。上下着てせらるゝ事は其れほどになし。木綿物の裾短な形にて致さるゝ事に利目が見える。

といへり。彼れが京都に於て菊五郎に壓倒せられしは蓋し此の弱點を有せるが爲めなりしならん。

次ぎに、其の可笑みを主とするものには、顔見世狂言の喜劇に、河童、大黒天、阿彌陀如來等あり。又前にいへる如く、彼れは體格の逞ましくて且つ皮膚の清白なりしかば、力士に扮して屢成功し、就中、濡髪長



中山文七（「旦生言語論」より）

五郎と雷電源八とは政右衛門と共に彼れが三傑作と稱せられたり。其の他、孔雀三郎の如き、秋津島の如き、孰れも當り藝たり。尙は舞踊と音曲とに通せし爲め、其の方面にも當り藝尠からず。即ち一世一代に演せし惟茂の二挺鼓の所作の如きは、屢彼れが京阪の舞臺に繰返して喝采を博せしものなるのみならず、田原又太郎の小袖物狂ひを演じ、又其の末期に於て、「賴政」の仕舞を能がゝりに演せし如き、武部源藏に扮して「靱猿」の狂言を舞ひし如き、其の他、蘭平物狂ひといひ、狐忠信といひ、五斗平といひ、吃の又平といひ、

孰れも彼れが舞と謠と鼓との修養によりて成功したるなり。要するに彼れの藝風は技術的にも精神的にも優れたりき。寶暦十二年の「役者年越草」に、

何の藝でも、近世は品業を學ばずして、氣のみを以て藝をなすゆゑ、ちよと見てはよいやう見えど、氣を付けて見れば、所々さま明きがして見られぬもの。此の人の仕内は先づ第一業を大分骨折り、其の上少しづゝ氣持のあしらひをせらるゝゆゑ、其の藝の味ひ中々筆にも書かれず。

といへる、此の意味ならん。

彼れは最初女方として舞臺へ現はれしが、立役に轉じてより急に名聲を博し、前に示せるが如く、三十一歳にして「上上吉」に進み、更に三十三歳にして既に「大上上吉」に上せられし如き、其の昇進の迅速なるは殆ど異數といふべきなり。「中山由男一代狂言録」に曰く、

商ひ店でも、きれものゝ手代を見ては、あれがあの店での文七ぢやと世間一同に此のやうに贔負厚く……。

云々と。彼れが一代の劇壇に重きを爲せるは、「文七」といふ語が「羽振よきもの」といふ事を意味せる普通名詞として用ひられしにても知るべきなり。

彼が黒谷に退隱せる後なりき。

天明八年、七世片岡仁左衛門が京都にて蘭平を演ずるにつき、其の庵室を叩きて此の役の秘訣を問ひけるに、文七も好きの道とて

詳く教ふる所ありしも、即座に會得しがたければ、仁左衛門は更に日を期して双林寺中の閑靜なる座敷に請じ、彼れの教へを受けたるが、容易に覺えられず、途方にくるゝうち芝居は初日となりしより、詮方盡きて一兩人の舞子を招き相談したるに、下河原の舞子に山猫といふがあり、蘭平の所作に堪能なりしとの事に、其の山猫を呼寄せて踊らせ見れば、女の振とて端手にて色氣あり、キツカケもよく、一夜にして容易に覺え得たり。さて文七へは改めて謝禮として反物を贈り、桟敷へ招待して批判を請ひけるに、文七は見物し了りて言ふやう、我等教へし所は處々に見ゆれど、一體が女の振になつたるは許しゝ、小手の利きし取廻りは當時流行の所なるべし、然しながら此の蘭平の役ほどむづかしきはあるべからず、本名は伴の義雄にて、行平を父の仇と思ひ、復讐の爲めに下郎と容を變へ、刄物を見て狂亂するは敵に肌ゆるさせん謀事なり、されば器用には踊れぬ役なり、又拵事なれど、附きしは女の死靈なり、彼れ此れと工夫をつけ、度々勤めて試み、此のごろ我等がして見せしは頗る得意の所なり、今日見物せし所を評せば、舞子山猫の振に似て、狂言には遙かに遠し、と言はれて仁左衛門は慚愧に堪へず、在りのまゝを懺悔して其の罪を謝しけるに、文七も打領き、其れにて、様子わかりしとて尙ほ處々を口傳して庵室へ歸りき………。

といふ。此の逸話彼れが凡物ならざりしを知るべし。

彼れが癖は「左の肩をあげる心にて頷を延ばし、少し鼻へかけ、尻口を早う」白をいふにありたりといふ。其の俳名を由男といひしは赤穗義士の大石内藏之助に私淑したればならん。彼れに與三郎といふ子あり、一たび大阪の劇場に座元たりしも、俳優として著名ならざりき。門下には中山文五郎最も彼れが高弟として知らる。又文七の弟が二世新九郎たりし事は、前に記せしが、二世新九郎の養子たる中山

猪八が後に二世文七と稱せり、而も初世の如く大名を博するに至らざりき。

文七と殆ど同時に立役を以て京阪に聲名ありしを二世嵐三五郎（京屋雷子、享保十七―享和三）となす。彼れは初世三五郎の子にして、父の歿せる元文四年、僅に八歳なりしが、同年十一月、大阪の芳澤あやめ座に父の名を襲ぎて現はれ、父の門下たりし嵐七五郎に紹介せられて、「道成寺」に山伏となりて踊を演じたり。それより四年間、同地の竹田芝居に在り、後に若衆方として大芝居へ出でしが、寛延三年十一月、若立役として大阪の中村十藏座へ出で、寶曆三年（廿二歳）十一月、元服して中山文七座へ現はれ、やつし方を專門としたりき。

同七年十一月、京都の染松座へ上り、翌七年正月、「けいせい月待山」に道具屋與市に扮し、前髮の愚なる人物にて、腹を切つて女と共に心中するといふ役に成功し、同八年十一月、京都にて自ら座元を勤め、九年十一月は澤村座へ轉じて「浮洲岩」に重平に扮し好評なりしも、些く藝に弛みたるさまなりしを、十一年秋、「蛭小島」の眞田與市にて當りを取り、同年十一月、五年ぶりにて大阪の三桝座へ下り、始めて「上上白吉」の位に上れり。

寶曆十二年正月、「秋葉權現」に月本始之助。「御所櫻」に義經と針右衞門。「淸水淸玄」に淸玄。「千本櫻」に彌助と義經。十一月、同座、「寶小槌」に安倍晴明。

同十三年正月、「正平織」に浮世之助。「金比羅仇討」に寸度平。十一月、同座、「眞田與市」。
明和元年正月、「極彩色」に清十郎と兵助、切に「奴邯鄲」の大臣と神主（所作事）。「安達原」に八幡太郎。十一月、同座、「龍宮城」に國郷と伊達小金吾。「新薄雪」に左衛門、「小菊半兵衛」に半兵衛。

此れより、明和四年まで大阪に留まりしが、同年十一月、八年ぶりにて上京して尾上座へ出で、翌六年も同座に在りたり。中途より名古屋へ下り、「千本櫻」に、彌助、小金吾、銀平、忠信の四役に大當りを取り、十一月、歸京して再び同座に入り、七年三月、「蘭奢待」の助市、庄屋一の兵衛、浮かれ座頭に喝采を博しき。然れども、當時、やつし方としては小川吉太郎の勢力盛んなりしかば、暫く其の鋒鋩を江戸に避けんとし、九月、暇乞ひとして、「夕霧」に伊左衛門に扮し、同年冬、始めて市村座へ下り、「伊豆若緑」に烏帽子折大太郎實は頼朝に大好評を得たり。

明和八年正月、「和田酒宴」に祐成、山田次郎、阿房猪之助。十一月、「世纏鉢木」に香山屋實は弓削大助と時頼。
安永元年正月、「菅原」に源藏と櫻丸。「八百屋心中」（二世菊之丞のお千代）に半兵衛。十一月、森田座、「伊豆暦」に伊藤九郎。
同二年正月、「曾我羽觴」に朝比奈と京の次郎、二番目に小いな半兵衛、「淺間嶽」に巴之丞で夏、「十帖源氏」に物草太郎。十一月、市村座、「樹毎初物」に巴御前。
同三年正月、「伊達染曾我」に十郎と重忠。九月、「千本櫻」に忠信と彌助。「日蓮記」に日蓮上人。十一月、同座、「十三鐘」に積面の照作と大道寺田畑之助。

同四年正月、「榮曾我」に八幡三郎と祐成、半兵衞實は京の次郎。十一月、中村座、「花相撲」に伊藤九郎と百姓よき藏、二番目に河津三郎（仲藏の俣野と角力の所作）、次ぎに鴛鴦の所作事（菊之丞と）。

此より始めて「上上吉」の位に進みたり、時に歳四十五。

同五年正月、「田植曾我」に物ぐさ太郎と祐成。「昔八丈」に才三郎。「忠臣藏」に勘平、「忠臣講釋」に重太郎。十一月、同座、「咲此花」に植木賣曾次兵衞。

同六年正月、「青柳曾我」に工藤、二番目に江戸見物左衞門（所作）。九月、「淺間嶽」に駕かきの所作事。十一月、大阪、市山座、「雷子寶貨」に烏帽子折實は都良香。

此の時、彼れは十一年ぶりに歸阪せしが、其のやつし事は先輩の吉太郎とは異れる特色ありと賞揚せられき。

同七年正月、鴛鴦の所作（澤村國太郎と）。四月、「小栗」に横山太郎、「峯頭」に　七。「蘭奢待」に助市と庄屋の可兵衞。「十帖源氏」に物草太郎と名古屋山三。「菅原」に櫻丸。九月、「由縁の十德」に椀久と鴛鴦の所作。十一月、京都、染松座、「東百官」に烏帽子折實は桂中納言。十二月、「薄雪」に園部左衞門、「信仰記」に春永（花子の所作）。

此の時、京都へ九年ぶりにて上りて大喝采を博したり。

同八年七月、黑主（戀病の所作）。十一月、中山座、「南枝開初」に田原藤太。

同九年正月、「大内雛形」に大内義高と鴛鴦の所作。三月、「伊勢物語」にうなひ子の所作。「極彩色」に兵助。十一月、山下座、「菊旗

擧」に小山田三郎と村上彦四郎。

是れより「大上上吉」となりたり。(四十九歳)

天明元年正月、「都濱荻」に山中鹿之助と百姓彦九郎。三月、國太郎と伊勢に下る。「鏡山」に又助、「千本櫻」に狐忠信、國太郎と七變化の所作、「信仰記」に春永と東吉、切に鴛鴦の道行、「極彩色」に兵助。七月、歸京、「千本櫻」に彌助、銀平、忠信。九月、「盛衰記」に源太。十一月、同座、「菜種御供」に菅丞相と宿禰太郎。

同二年正月、「兒雅淵」に久次、「夕霧」に伊左衛門。九月、椀久。十一月、大阪、嵐座、「萬國渡海」に漁師の八作と若嶋。

同三年二月、「忠臣藏」に判官と勘平母。「伊勢物語」に荒川宿禰と小野篁。「襤褸錦」に奴伊兵衛。「布引」に[illegible]。「鬼一」に智惠内。

同四年正月、「倭荘子」に靱負之助と大和の佐國、蝶の道行、「夕霧」に伊左衛門。秋、京都、中山來助座、「倭荘子」に同上、「石橋」に狩野四郎次郎。十一月、大阪、尾上座、「金平孃」に童實は阿倍晴明。「菅原」に櫻丸と覺壽、「女鉢木」に最明寺。

十一月、同座、「女夫狐」に阿倍保名。「盛衰記」に源太。

同五年五月、堀江芝居、「妹背山」に入鹿、「椀久」。八月、京都、東芝居、「大塔宮」に土岐頼員(鞠助と萬歳の所作)、切に金屋金五郎と半時庵。九月、「忠臣藏」に判官。十一月、中村のしほ座、「惠方福」に義經。

同六年二月、京都、都座、「出入湊」に五郎八。三月、「相馬太郎」に仲光、切に小いな半兵衛。十一月、澤村座、「[illegible]」に妻平。

同七年正月、「花街蛙」に彦六。「安達原」に八幡太郎、切に、お俊傳兵衛。これより伊勢へ下る。十一月、嵐座、「御所櫻」に義經と侍從太郎。

同八年二月、大阪、大西芝居、「義臣傳」に小間物屋彌七。秋、京都、「忠臣藏」に石堂。十一月、京都、龜屋座、「源顔見世」に伊東祐清、切に角力の所作（園藏及び國太郎と三人）、「信仰記」に春永と新作と直信、「幡隨長兵衛」に平井權八。

寛政元年正月、「黄金鯱」に齋藤司之助と餅屋十三郎。三月、「風俗文選」に百枝勇次郎と山影采女之丞、切に玉取の所作。正月、「狹間合戰」に犬清、義輝、春永。「非人仇討」に春藤治兵衛と奴伊兵衛（雛助と奴の道行）。「菅原」に覺壽と櫻丸。十月、「鎌倉山」に時頼、狐半之助、大工與五郎、源左衛門。「一の谷」に忠度。「大塔宮」に萬歳の所作。十一月、同座、「廿四孝」に勝頼、簑作、慈悲藏。

同二年、「比良嶽」に春忠と久吉。秋、大阪、角芝居、「苅萱」に加藤重氏と女之助。「極彩色」に清十郎と兵助。「大閤氣」に久次實は瀬川采女。「襤褸錦」に春藤治兵衛と伊兵衛、「重井筒」に德兵衛。十一月、同、淺尾仙之助座、「忠臣講釋」に彌五郎と小間物屋彌七。

同三年「信仰記」に春永。「盛衰記」に源太。「菅原」に覺壽。「重井筒」に德兵衛。夏、「夏祭」に磯之丞、「千本櫻」に彌助。十一月、淺尾奥次郎座、連管の三番叟（芳澤いろはと）、「忍衛池」に都市、顔見世狂言に素盞雄尊と平惟茂。

同四年正月、「伊勢物語」に小よし。二月、「花大樹」の柏手公成、三月、「色競」に毛利輝音と百姓又市。「富士礎」に十郎、「女鉢木」に最明寺。是れより宮島へ下る。歸坂、北新地芝居、「優然染」に半兵衛。「二人楠」に塚本狐の所作。「雁金染」に山川屋權六と布袋市右衛門。中の芝居、「倭名所圖繪」に觀世伊織之丞と保生が後家。十一月、坂東重太郎座、「忠臣双葉藏」に義貞と若狹之助、顔見世狂言に與九郎狐。

同五年正月、「楊柳櫻」に足利義教と淀屋辰五郎（顯汲の所作）。「東海道」に丹波與作と綿打與八。「一の谷」に忠度と庄屋。「京土産」に木屋彦三。堀江芝居、「糸櫻」に神原佐五郎。「二人楠」に塚本狐、「夕霧」に伊左衛門。「蘭奢待」に助市。「信仰記」に春永。北新地芝居、「八百屋心中」に半兵衛。「芦屋」の改作に保名物狂ひ。秋、京都、「楊柳櫻」に同上、切、「義臣傳」に小間物屋彌七。冬、大阪堀江、

荒木座、「四十七訓」に判官と小間物屋彌七。十一月、中山與三郎座に米太郎狐、十二月、「倭莊子」に槻頁の助、佐國、切「蝶の道行。

同六年正月、「島廻」に漁師助作、金龍大王、若徒與五平。三月、「菅原」に菅丞相と櫻丸。夏、宮島より九州へ下る。歸阪、「白木屋」に才三郎。「二人楠」に正行と塚本狐。「大塔宮」に右馬之頭と萬歳の所作。「出入湊」に五郎八、「保名物狂ひ」に關官松大夫。十一月、中村金藏座、「千儷玉賜」に鍛冶屋仁藏、「非人仇討」に奴伊兵衛の道行、「寄儀」に若殿淺香左馬五郎と與三松二人の田の所作。

十二月、「忠臣藏」に由良之助。

此の時より、「極上上吉」の位に上されたり。

同七年正月、中山與三郎座、「倭繪草紙」に高島狩野之助。「鬼一」に大藏卿、「後面」の所作、切「戀」に山崎與五郎、「宴」に誰昏の女方、切に惟茂の所作。「信仰記」に春永と新作。「忠臣講釋」に重太郎、「天竺德兵衛」に吉岡萬助、「烏帽子折」、「曾我記」に源太。十一月、京都、山下座、「南芝英」に漁師みの藏と楠の若黨峯介、「道中双六」に丹波與作、ゆるぎ左衛門、後室

同八年、「達大礎」に志賀谷五郎と入間の與吉。是れより伊勢へ下り、新作「十人切」、「伊勢音頭」に齋宮。歸京、八月、「出入湊」に五郎八、「五人切」に齋宮。「一谷」に義經。「菅原」に菅丞相と櫻丸。「檀浦」に重忠。「義臣傳」に彌七。十一月、京都、都座、「風流」に安倍保名と六條左近狐。同月、大阪、角芝居に同上、「双蝶々」に與五郎と長五郎母。

同九年正月、「鳴門白浪」に藤屋伊左衛門と若殿萩塚萬次郎、切、「傾城買指南所」に藤屋伊左衛門。

此の興行の半ば、二月十六日より、一世一代の舞臺納として舞臺に口上を述ぶることと十一日間にして、

終に退隱し、西國三十三所の順拜をせしが、京都よりの招き頻りなれば、更に同地にも一世一代の興行をなせり。即ち

同年十一月、嵐座、「二人楠」に楠實は塚本狐（年中行事の所作）、「忠臣藏」に由良之助、「女鉢木」に最明寺、「鳴門白浪」に藤屋伊左衛門、切に傾城買指南所の所作。

斯くて、三五郎の名を其の子松之助に讓り、自ら京屋七兵衛と改名せしが、更に翌寬政十年三月、大阪天滿の天神へ宿願の事あり、寄進として十日間芝居を興行し、即ち、「盛衰記」に源太、「義臣傳」に彌七、「いろは緣起」に山中左衛門、「反魂香」に又平、「夕霧」に伊左衛門に扮し、これより剃髮して密巖といひ、京都岡崎に閑居せしが、享和三年五月二日、七十二歲にして歿せり。

三五郎は小柄なりしも容姿に優れ、且つ音聲朗かなりきといふ。「役者綱目」に彼れの藝風を評して曰く、

第一男付よく、小手きゝの上に和かみありて、所作事よろしく、やつし事よく、武道まで自由に出來、藝風上手筋にて親まさりの出來もの。

此の評語簡明にして要を得たり。實に、彼れは父初世三五郎の衣鉢をつぎて、和事と所作事とに長じ、而も晚年には實事と武道までを兼ねて、其の名聲は乃父よりも遙かに揚りたりき。玆に彼れが一代記

たる「桐の鳥臺」より其の一生の藝の優れると劣れるとを記さんに、

○極上品

菅丞相（菅原）　小間物屋彌七（義臣傳）　狩野四郎次郎（淺間嶽）
黒主（玉瀧）　足利義教（楊柳櫻）　寺小屋兵助（極彩色）
大藏卿（鬼一）　淀屋辰五郎（同）　藤屋伊左衛門（阿波鳴門）
鴛鴦道行（菜袍瓊）　鎌倉屋五郎八（出入湊）
最明寺（時頼記）　烏帽子折（顏見世狂言）

○上品

由良之助（忠臣藏）　椀久（金年越）　道具屋與市（月待山）
鹽冶判官（同）　大和佐國（倭莊子）　小田春永（信仰記）
勘平母（同）　矢間十太郎（忠臣講釋）　八幡太郎（安達原）
藤原仲光（相馬太郎）　土岐頼貞（大塔宮）　忠度（一谷）
眞田與市（蛭小島）　右馬之頭（同）　坂田藏人（嫗山姥）
ずんど平（金比羅仇討）　浮世之助（正平織）　怪童丸（同）

名古屋山三（十帖源氏）
保生が母（名所圖會）
徳兵衛（重井筒）
又市（色競）
奴伊兵衛（襤褸錦）
山崎與五郎（戀といふ一字）

巴御前（歸木曾）
工藤左衛門（青柳曾我）
しげひら（浮洲岩）
園部左衛門（薄雪）
勝頼（廿四孝）
慈悲藏（同）

櫻丸（菅原）
半兵衛（八百屋心中）
加藤左衛門（苅萱）
智惠内（鬼一）
若狭之助（双葉藏）
佐藤次郎（南枝英）

○中品

狐忠信（千本櫻）
助市（鬪者待）
浮かれ座頭（同）
塚本狐（二人楠）

佐野源左衛門（鎌倉比事）
菅丞相（菜種御供）
覺壽（菅原）
小よし（伊勢物語）

荒川宿禰（同）
朝比奈（曾我羽觴）
布袋市右衛門（雁金染）
妻平（薄雪）

○下品

たそがれ御前（愛護稚）
物草太郎（十帖源氏）

宿禰太郎（菜種御供）
半時庶庵（戀拔書）

萬助（天竺徳兵衛）
銀平（千本櫻）

横山太郎（小栗）	庄　屋（一谷）	武部源藏（菅原）
眞柴久吉（比良嶽）	重　忠（兜軍記）	綿屋與八（東海道）

右に掲げられし「極上品」のうち、大半はやつし事もしくは和事に屬するものなるを見ても、彼れが長所の最も此の方面に在りしを知るべし。而も、鎌倉屋五郎八、狩野四郎次郎、藤屋伊左衛門の如きは、在來の脚本に存する役なれど、足利義教、淀屋辰五郎、小間物彌七、烏帽子折の如きは、彼れによりて始めて演ぜられし新作なり。茲に筋の荒ましを記さんに、「楊柳櫻」の足利義教と淀屋辰五郎とは、此の脚本の始めて上場せられし寛政五年の評判記「觀進角力」に梗概を載せたり。曰く、

足利義教となり、今様邯鄲を勤めし小姓の美麗を見て取上げんといひ、褒美に戀歌の書きある盃をやり、御臺よりの使者と上使よりの使者の口上を聞捨にして奥へ入る所、屹と大將と見えました。後一色結城の守、屋敷へ來て、我が懸け居る守は調伏の守よと聞き、驚き取捨て、小姓と思ひしは結城守の娘と聞き、始めて女の情を知りて戯るゝ……仕内。其れより飛驒の守の惡事を見顯はすまで大將の氣持わかつて格別〳〵……。二役、淀屋辰五郎となり、島原の大門口の雪景色を見て、拍子屋の大騒ぎより、後、吾妻と口説の間はやつしの天上〳〵。それより岡本兵庫に吾妻を貰ひかけられて得心せず、切殺さんといふに驚き、吾妻が打かけの中に隱れ居る間など、いやはやうまいものでござります……。淀屋内の段はさしたる仕内もなけれども、大切、[illegible]となりて[illegible]の景色を見て居らるゝ姿は見事ぢや〳〵……。其れより四人所作事は御家ものにて、拍子のきゝ様は別な物でござります。其外まり遠責の鐘大詰を聞き、我が實の親飛驒守を召捕りに來ると覺り、所作事の中に愁ひを含みての仕内、まんまと下手の出來の[illegible]

しい狂言にて、花やかな中にて見物なかさるゝは流石當時和事の御上手……。

小間物彌七は今もまゝ舞臺に上せられて人の知る所なれば略す。烏帽子折の役は

實は頼朝なれども烏帽子折大太郎となり、時政のたちへ來り左り折の烏帽子より頼朝と覺られ、いろ〳〵の當て事を感ずろ仕内よし。燗鍋の湯氣にて下家に忍び者ありとさとり、様子を考へ、方々を踏んで見る上方風の細かな仕内……。長尾新五忍び出づるを切殺し、椰の葉に見付られしを色を仕掛け、心中に長尾が腕を我が手にして小指を切り、山木に腕を捻ぢられ、そつと拔ける身ぶり。次に時政を味方につけんと政子との濡事、辰姫に見付けられての可笑しみ……。（明和八年、「役者歳旦帳」）



二世嵐三五郎の「烏帽子折」（「生富語論」より）

此は、三五郎が始めて江戸へ下りて其の御目見え狂言に演じたる時の筋なるが、其の後、人名と狂言とを改めて屢同じ役を京阪の舞臺に繰返せり。蓋し、

やつし事を得意とせるもの、彼れの先輩に小川吉太郎あり、「最初は吉太郎の爲めに壓倒せられしが、江戸より歸りてより、吉太郎以外の妙所を世衆に認められし事は既に前に言へり。此の二人が同じやつし事に於ての藝風の相違は彼れが吉太郎の得意の藝なりし金屋金五郎に扮せし時の評語に見ゆ。即ち

英子（吉太郎）と來芝とは、やつし形の風儀大きに替りめありて、小川はのんどりとして輕い所に味を持ち、嵐はしつくりとしたる高味を持たせたる藝風ゆゑ、いつとても英子のしたる役にて目立ちかれる。（「桐の島臺」）

といひ、尙ほ具體的に同じ意味を述べて、

助市、物ぐさ太郎、なども何分小手きゝゆゑ、兎角利口氣ありてのんどりせぬゆゑ、役もはまり過ぎてはまり離れたり。（同上）

といひ、安永九年の「役者晴小袖」は一層明白に說明して、

梅幸（菊五郎）といふ始終趣きがあるゆゑ、色事の間でも仕内はよけれど、何とか、ちつと仔細らしみがあつて、英子（吉太郎）などの樣にゆるやかな所はすくないゆゑ、成程武道事のなされたら屹度面白かろ

といへり。要するに、彼れは最初吉太郎風の和事を專門とせると共に、他の半面には武道實事に長せし菊五郎風の面影を有せり。されば、和事、やつし事に於ては、吉太郎の如く、無邪氣ならず、無分別ならず、淡白ならず、又輕快ならざりしなり。而も、同時に他の武道もしくは實事の方面に於ても成功する事を得たりしなりき。即ち、彼れは一面に於て吉太郎に學ぶと共に、一面に於ては菊五郎に學び、以て

一家を成せるなり。

此の第二種の藝に屬すべきものゝ一つは「菅原」の菅丞相なり。寛政六年に彼れが演ぜし舞臺のさまは、翌年の評判記「役者人相鏡」によりて一斑を知り得べし。

傳授場の顔の拵へもよく、衣裳の物好も七日物忌といふ所にて、自分の心は白き衣裳にても着たい所を、和らげて薄き茶や薄玉子色などを取交ぜての物好き、屹度面白い……。二段目も一向何もせず、只面ばかりを切つて愁ひをこめての仕様、先づ此のくらゐの菅丞相は是まで覺えぬ……。心持に味ひを籠め、見えを構はず、氣持ばかりの仕様は一向詞に陳べられぬ。

同じ「菅原」にて「櫻丸」の「上品」にして此の役の却て「極上品」に位せるは、彼れの本領の往々やつし事よりも實事に在りしを證するに足る。而も同じ狂言の武部源藏が「下品」に位せるは、彼れの實事は和かみと位とにすぐれ、謂はゆる和實を長所とせるを見るべし。又「鬼一」の大藏卿は寛政七年の「役者時習講」に其の面影を寫せり。

すつと、門を出るより軒の瓦の數をよむ顔付ありて、狂言師お京を抱へんといひ、顔にて使はんといひてより、床几に腰をかけ、すり落ちてすぐに米つく眞似をする場も、こち付なく、さらりと輕うして、お京を連歸らんといひ、口の中にて何かつぶやく思入れあつて花道へかゝり、何も場當りの顔付物好みなく入る幕は、始終、成程位の高き御公家樣のおろかしき御方とも思はれ、梅幸（菊五郎）眠獅（雛助）などよりは遙に氣持高く、屹度面白い事……。四の切、傘をさし、狂言の出端と廣盛に逢うて常盤と祝言するは退屈なものぢやと物語の間の顔付、萬端いふに言はれぬ味ひ深く……。それより狐の狂言の白藏主の姿となり、後面の所作事、味いぞ

〳〵……。大切、八劍を手にかけ本心を明かすまで近來の大藏ちやとの評判〳〵。

最後に同じ實事の藝に於ける一例として、彼れの由良之助を紹介せんに

鹽谷切腹の場へ駈付けの所も、只何の物好もなく、つか〳〵と出られた所奥床しい……。人品が小柄にて梅幸(菊五郎)などには思はなんだ……。花道の熨斗目の帶付ゆゑ、人品も輕う見えましたれど、梅幸このかたの大星ちやと見功者方の御悦び……。切腹の九寸五分を受取り、三方に置かんとして握詰め、手より放れぬ思入はちと小口なる案じ方であつた……。九太夫と城渡しの相談場も落付いてよく、御家の系圖を取寄せ懐中する物好は新うござりました……。城を立退く名殘の場も格別の思入れもなく、すら〳〵とせられ、よかつた……。大勢の義士の心底を引き見ん爲め、わざと無念の思入なして九寸五分を出し、眞忠臣の者をためし見らるゝ思入れと見えて、我は正面むき立ちて一家中を座して並ばせ、眼中を一々見下す氣持、きつと受取りましたぞ……。其れより城段々と遠くなる道具立になり、物靜かに立退かんとして遠寺の鐘の音を聞き、思はずびつくりの顔持ありて、顔を取直し(親本にいふ心が發し、刀を拔掛け、疑勢の心持にて、又氣を取直し、柄のにごりを手にて打拂ふ思入にて)花道へ入る幕は梅幸ほどに見ばえが無かつた……。茶屋場、めんない千鳥にて浮かれ出で(一度々々肱まくりして捕らまよとするは細かな仕内)。千崎、矢間、竹森に出合ひの場も、矢張行儀に座して暫くして御免なされというて座を崩す仕樣もなく、平右衛門が段々敵討の供の願ひをいふを。醉中にて聞き居る思入れも、鼻紙などを梅幸のやうに度々つかはず、懐中するも一度脇の方へやりしまでにて、楊枝をつかひ乍ら鼻紙を口にあて、楊枝を紙の間へ入るゝ、一度はづれて、それより紙を懐中せんとて脇へ取落す物好き、平右衛門に其の事を言はずでもよいといふ事を堅く制するにても無く(楊枝にてこれ〳〵と招く樣にして、敵師直といふ所にて、これ〳〵とせはしく詰つかひ

ていふなど制する仕様は先づ近年の由良之助であつたぞ……。九太夫と出合ひ、色々の遊興して（れん付をして亭主に花をやらんとして、九太夫がいひし鼻紙袋を忘れて來たといふせりふを同くいふてのをかしみ、成程武家方の遊興と思はれたぞ）。潮來踊の所作を中居にさせて、我れは不調法なる振をしられた所どうも〳〵……。力彌駈付け、鯉口の音に眼をさまし、庭へおりる所も、これまでは誰々も謠などをうたひ〳〵花道の方へ行き、いろ〳〵思入れのある所をせずして、（手を叩き、水を乞ひすでにして庭へ下りちよと謠をうたひ〳〵花道の方へ行き）枝折戸の上より文箱を受取り、袂より（手拭を出して手をぬぐひ、それより）袱紗を出し、狀を包み、箱を力彌に渡し返す所もよく、お輕とじやらつき出して奥へ入るまで狂言の和かみはきついもの……。椽の下に忍び居る九太夫を突殺す所、板を足音高く踏みて、お輕に刀を持添へ突殺さすは、ちと素人が狂言をする思入れめいてあつた。九太夫を打擲する場を千崎にさせたは面白くないぞ。あこは矢張これまでの通り、自身打擲して四十四の骨々に碎くるやうにあつたはやい、と言はれば見物へこたえぬぞえ……。加茂川で水雜炊を食はせの幕を、狂言を和らげ、お輕に寄添ひ、かはい奴といふ幕は歌舞伎に取直して和らかな物好ながら、其れほどに浮立ちませなんだ、水雜炊を食らはせと平右衛門に言付け、行け〳〵といふ幕）。……山科の段、天川屋の段も、何もせず淋いものであつた……。九つ目、十段目を何もせず、四つ目、八つ目に工夫を付けて物好を入れられしは、一場々々狂言のシテワキといふ場を考へてしられたもの……。氣持の向上なる所は若手の見物衆へ行屆きかぬるゆゑ、一統に評判もよろしからぬと申すものゝ、先づ梅幸このかたの大星でござりました。やつし方が由良之助の出來るといふはきつい者になられたぞ。當時の親玉々々……。（「役者時習講」及び「役者枯槹」）

以上は彼れが寛政六年に演せしを基本とし、更に寛政九年、一世一代の興行に演せし時、相違せる點を

括弧内に挿みたり。就中茶屋場の和かみは菊五郎も及はずと評書にいへる、彼れが藝の特色を見るべし。尙ほ右の三役に對する評語によりて彼れの藝品が平坦にして何等の奇を求めざるうちに高尙の趣味を寓し、且つ動作を主とせずして科白以外の謂はゆる「心持」に重きを置きたるを證すべきなり。彼れが實事に對して好評斯くの如くなりしと雖も、漫りに原文を修正して其の作意を誤まるの弊は彼れにも免れざりしにや、「傳奇作書」に其の「蘭奢待」の助市を評せる古老の言を載せて、

助市のあしき凡そ來芝(三五郎)にとゞまるべし。……本文を來芝は小才覺にて直し、嫁の苦痛を助けよと聞くより刀を拔て立上り、それ傳へ聞くとせりふの終りに内侍の首討ち駈込めり。常に臆病の馬鹿者が唐倭の引き事をいふ隙に、宰内も心付き、内侍を傍には置くべからず。詞と仕草は變られど、唯一處の跡先になるより此の狂言の魂相違せり。中二此世にあらはれ出で、是を見ば大聲あげて泣くなるべし。

とて、其の原作の通り、内侍の首を討ちたる後に和漢の故事を引きたる白を言はざりしを非難せりき。

やつし事と和實とのほかに、彼れが第三種の藝は乃父相傳の所作事なり。彼の「極上品」として掲げたる鴛鴦の道行の傑作を始めとし、彼れが此の方面に於て數多の當り藝を有せる事は前に述べたる劇臺の閲歷によりても明かなり。又例へば、淀屋辰五郎の如き、大藏卿の如き、やつし事、もしく實事の地狂言にも、其の役の一部分たる所作事と相俟ちて成功せるもの尠からず。尙ほ「千本櫻」の狐忠信、「二人

楠」の塚本狐など、彼れが屢狐の精に扮して之れを得意とせるも同じ原因より來れるならん。

彼れは京阪の劇壇に重んぜられしのみならず、江戸に下りて六年の久しき間、其の聲名の愈高まりしは、彼の爲十郎及び雛助が關西に成功せるに拘らず、關東に失敗せる例に照らして異數なりといふべし。思ふに、其は前に述べたる如く、彼れが藝品の高尚にして平坦なる事が江戸人士の嗜好に適したればならん。

彼れが技藝上の用意は頗る綿密なりき。「嫗山姥」に莨屋源七の役なりしに、「表の一枚看板を出すにつき、畫面を畫工につけさせしに、十五度も畫がきて見せければ漸う是れにて宜しきとて畫工を歸しぬ。其は椽先に腰かけて莨を呑み居る所の圖なりしに、聊かの畫の居やうさへ斯くの如くなれば、まして狂言の仕打はさこそ」と其の畫工も感じて人に語れりと。又三五郎自身が「東の花勝見」の編者に語れる所を聞け。

> 私、狂言の心懸と申すは、常々見聞きするもの毎に心を留め、たとへば、御武家方、又町家の衆の風俗物言ひ等は申すに及ばず、御出家、山伏、神主、社家、醫者、座頭、角力取、薦僧等、其のほか諸職人方、田舎者、馬方、船頭、髪結、米舂、肴賣、菜賣までに、其の身なり其の取りなり、言葉遣ひに心を留め、見覺え聞覺ゆるやうにいたし、其の上に手業は、茶の湯、香道、弓、鐵砲を始めとして、杵取、鍬取、足の業は、蹴鞠から、臼の踏みやうまでに氣を付け、鳴物は、琴、三味線、太鼓、鼓、尺八等も少づゝ心掛け居り候へど、九牛

が一毛にて、不器用、不才の私……。

又曰く、

御贔負強き御江戸の御蔭にて、當年は一座の座頭役、それにつき御願申上度は、役者の御近付の御方々樣、いつの狂言にも讚めてばかり被下候人ばかりなり。其れよりは私を贔負に思召し下されなば、何うぞ惡い所は御見出し下され、御遠慮なく御心付け下され候やうに……。

斯くて、或る時、道具立の松の枝に妨げられて、三五郎の顏の棧敷より見えぬ事を注意せしに、彼れは其の忠告に對して大いに滿足せしが、松の枝を直させては道具方の不調法になりて如何、とて其の枝を除けて二重舞臺へ立上る事に改めしといふ。

斯くの如く、彼れは技藝に細心なりしのみならず、社交に綿密なりし人なりき。「座頭を勤めし時、朝も狂言の役は無しとも、早朝より樂屋に詰め、切も打出しまで居り、總役者殘らず歸りし跡にて火の元までも心付け、只一人跡より歸りたり。心易き方へ參るにも袴を放す事なく、室を隔てゝ一つ間へ入らず、是非々々と言はれて始めて一座」せりといふ。尚ほ彼れが居常を「役者穿鑿論」に記して曰く、

一體器用なる人、とかく下手から出られます。茶もなりまする。存義言合にて俳諧もいたされ、手蹟もよし、何だか常の風俗は御座敷を見るやうだ。人からの能いに上方風がぬけませねば、江戸表ではきやうでもござらうが、上方では惚れぬ女はなかりけります。

此の人、頓智、其業も當時の上手、よく細に氣の付く人でござる。

又「鸚鵡石」に彼れが白の癖を記して、

鼻へ息を出さぬやうにして、甲と乙とをまぜ、せりふの間、喉へ別のこもるやうにして口の先にていふ……。

といへり。

「穿鑿論」に據れば、妻をなをといひ、養子二人ありて、其の一人は市藏といへりといふ。而も三五郎の父は其の子松之助により襲がれ、且つ門人にして最も著名ありしは二世嵐吉三郎にして、共に次ぎの時代の名優なりき。

第三章　嵐雛助と四世市川團藏と尾上新七

嵐雛助――俳優としての經歴――彼れが體格――彼が女方時代――彼が長所――「時平の七笑ひ」――石川五右衛門――所作事――「六歌仙」と「山伏摂待」――尊大なりしといふ逸話――快濶の人。

四世市川團藏――俳優としての閲歴――長所と弱點――「法界坊」――「幡随長兵衛」――「馬切り」――「自來也」――種々なる新しき型。

尾上新七――技藝上の經歴――彼れが得意の藝――齋藤龍興――薩摩源五兵衛――一長一短――彼れが由良之助の型――彼れの性癖。

文七及び二世三五郎よりは後輩にして同く此の時代の名優なりしを雛助と四世團藏と新七との三人と

す。嵐雛助（吉田屋眠獅、寛保元―寛政八）は寶暦期の名優として女方と立役とを兼ねたる嵐小六の實子なり。幼名を岩次郎といひ、寛延元年、父小六が江戸へ下りし時、彼れは八歳にして隨行せしが、二世團十郎その前途の有望なるを察して自ら雛助といふ名を與へき。此の雛助の名は假に父小六が俳名として用ひたりしが、寶暦元年十一月、大阪の三桝大五郎座に於て彼れが初めて舞臺へ現るゝに及び、其の藝名となさしめ、是れより岩次郎を改めて雛助といひ、當時、彼れは十一歳にして黒木賣の所作を演じ、翌寶暦二年、「金比羅利生記」に弟梅松といふ子役を勤め、同年冬は、同座にて「後面」の所作を演じて好評なりき。寶暦三年冬、同座にて八瀬のお熊といふに扮し、母の怨靈つきて傘の下より附け髭の白のうちに所作事を演じ、愈評よく、同年夏は、「遊行柳」に柳の精に扮せり。寶暦五年冬より曾根崎新地の山本佐吉座に轉じ、「平假名」に判官と義經、「蘆屋道滿」に六の君を勤め、同五年冬、姉川新四郎座にて「道成寺」の所作事を演せしが、翌寶暦六年冬、父小六と共に京都の澤村國太郎座へ上り、雛賣の所作事を勤め、是れより安永九年に至るまで十六年間、若女方を專門とせり。當時歳十六。

寶暦七年正月、「鎌倉鑑」に主膳之助子小太郎（乳母殺し）と君が代姫。同冬、同座、「大社詣」に義經の常盤、樋の君（其の時盛り）。

寶暦八年正月、「信仰記」に是齋娘。冬、同座、「軍武者」に判官妹深雪。

寶暦九年正月、「けいせい花鳥山」に誰袖姫（女同士の濡試合）。三月、「鶯塚」に清少納言と姫白玉。冬、京都北側にて菊の曲光、雪

萊館」に傾城此花。

寶暦十年正月、「涌神廓曾我」に五郎と大磯の虎。「日高川」に清姫。冬、大阪、姉川新四郎座、「三浦大助」に娘玉琴。十二月、「鐘鳴今朝噂」（いろは新助の心中）に藝子いろは。

寶暦十一年正月、「眞島實記」に助八妹（賀勅使）。十一月、三桝大五郎座、「弓勢鑑」に菖蒲の前。

寶暦十二年正月、「秋葉權現」に傾城花月。「御所櫻」に腰元しのぶ。「清水清玄」に櫻姫。冬、中山文七座「鉢木年代記」に傾城櫻木。

此の時、父小六は京へ上りしかば、始めて獨立して舞臺を勤めたりしなり

寶暦十三年春、「双蝶々」に傾城吾妻。「菅原」に梅王女房お春。冬、三桝大五郎座、「扇屋熊谷」に小萩、「極彩色」に娘お夏、大切に飯焚とおぼこ人形の所作事（中村粂太郎と一日替り）。

明和元年秋、「大友眞鳥」に助八と兼道。十一月、同座、乙姫（秀郷に戀慕の仕打）と腰元夏花（純友の屋敷へ入込む筋）。十二月、「新薄雪」に腰元まがきと鍛冶屋娘おれん、「夏祭」に德兵衞女房おたつ。

明和二年秋、「闇奢待」に娘おこの。十一月、三桝及び中村座、「大座附」に重忠妻お梶（女武道）、「蛭小島」に誰が袖（相撲の行司）。

明和三年二月、同座、「相馬太郎」に美女丸。七月「三國一」に曾我五郎と貫八娘おいし。「蘆屋道滿」に葛の葉。十一月、自ら座元、「大阪村在所由來」に娘おひな。十二月、「盛衰記」に腰元千鳥（無間の鐘）。「忠臣講釋」に十太郎妻おりえと平右衞門女房お縫、「夏祭」に德兵衞女房おたつ（二度目）。

此れより名古屋地方に赴き、「反魂香」に前髪にて又平と傾城遠山とに扮し、大切に「石橋」の所作事を演

じて好評を得たりき。

明和五年十一月、大阪、山下八百藏座、「新館」に女髪結お民實は桃井源吾妻切瀬。「双蝶々」に濡髪長五郎とおてる。

當時、濡髪を得意とせる中山文七が隣座にて同く之れを演ぜしが、女方たる雛助が力士に扮せることは珍しとて、彼れは此れに壓倒せられき。尚ほ此れまで評判記に於ける雛助の地位は「上上吉」なりしも、濡髪に成功せし爲め臨時に「白上上吉」に上せられたり。

明和六年十一月、京都、尾上粂助座、「源氏鑑」に傾城難波津(石橋の所作事)。

明和七年三月、「双蝶々」に濡髪とおてる。「闇替待」に盲娘おこの。是れより宮島へ赴く。七月、「近江源氏」に宇治の方と母微妙。十一月、三桝德次郎座、「後陣凱」に傾城賤原と瀬尾妻浪の戸。

明和八年三月、「菅原」に菅丞相。夏、「矢の根」に五郎。秋、「物ぐさ太郎」に早枝と不破伴左衛門。冬、嵐山十郎座、「功勳源氏」に舞子お組。

安永元年正月、「櫻御殿」に櫻戸と正助妹おすが(嫉妬)。切に石橋の所作事。「妹背山」に定高。冬、大阪、小川吉太郎座、「[illegible]」に白拍子雛鶴(靱猿と紅葉狩の所作事)。「菅原」に菅丞相とお八重。

此の「石橋」は中村富十郎以外の妙味ありと稱せられ、去年以來の當り續きに、是れより「上上吉」の位に上されたり。

安永二年正月、「花繪合」に小栗宗丹（實悪）。五月、「淀伏見」に力士雷電源八、「愛護若」に黄昏。「大塔宮」に花園、「お龜與兵衞」にお龜。二月、「反魂香」に又平女房お吉と傾城遠山、切に「石橋」。冬、嵐松次郎座。「百足山」に白拍子白菊。「忠臣藏」に早野勘平と天川屋女房お園。

蓋し、彼の名古屋にて前髪の又平に扮してより、更に歸阪して、濡髮長五郎に好評を博し、次いで菅丞相、不破伴左衞門、及び曾我五郎等を演じて成功せるを以て、女方を廢め、小栗宗丹の實悪と雷電源八の男達とに扮せしが、世評甚だ可ならざりしより、再び女方を専らとせるなりき。

安永三年四月、「油屋庄九郎」（菊五郎）に象潟御前。五月、「近江源氏」に宇治の方、母微妙、四斗兵衞女房。八月、「嚴柳島」に間淵角右衞門女房おくら。九月、「菅原」に松王女房ちよ。冬、京都、藤川山吾座、「金丸山」に狂女小櫻、「鳴神」に鳴神上人。

安永四年正月、「鐘鳴渡」に博多小女郎と眞弓御前。九月、京都、早雲座、「一の谷」に熊谷と六彌太。「山姥」（父小六）に怪童丸。「石切梶原」に梶原。冬、大阪、三桝松之丞座、「天目山」に武田家臣鐵孫三郎。「忠臣藏」に大星由良之助と勘平母。

此の「山姥」は彼れの父小六が一世一代の藝なりしより、特に上京して一座に加はりしなるが、同時に雛助自身も、先年來屢試みて躊躇せる素志を斷行し、女方を捨てゝ全く立役に轉ぜしなりき。されば、彼れが俳優としての經歴は此の年を境界として前後二つに區分せらる。當時歳三十五。

安永五年正月、「北條五代記」に花岡大仁。三月、「黒船」に獄門庄兵衞。四月、「夏祭」に團七九郎兵衞、「山姥」（再び父小六の一世一代）に怪童丸。七月、嵐七三郎座、「お妻八郎兵衞」に彌兵衞。八月、「戀女房」に鷺坂左内、竹村定之進、重の井、ひぬかの八藏。十月、「綴

纏錦」に春藤次郎右衛門。冬、小川座、「山海名物」に伊勢海老、「薄雪」に秋月大膳と排五平次。
安永六年正月、「傾城櫻」に若藻國平と石不動と桃井市之正。「菜種御供」に時平大臣(實悪)と伯母覚壽、「八重霞(かしく)」に梅の長兵衛。七月、「貞婦鏡」に奴わび助。九月、「千本櫻」に知盛、彌左衛門、忠信・源九郎狐。冬、同座、「歌舞伎潤日」に中間六郎兵衛。
安永七年正月、「赤穂臘竈」に師直、力彌、千崎彌五郎。四月、「金門五山桐」に石川五右衛門。六月、名古屋に赴く。七月、歸阪、「木津川八景」に木津勘助、「五雁金」に案の平兵衛。九月、「和田合戰」に板額、「纏錦」に春藤次郎右衛門(二度目)。冬、同座、「源平[illegible]問盡」に梶原平次(狂亂の所作)。

此の時より、彼れは「大上上吉」の位に上されたり。

安永八年正月、「石井城女名和張」に將門の餘類浪人太郎左衛門と良助。五月、「葛の葉」(富十郎)に保名物狂ひ(嵐新平直言)、石川惡右衛門、芦屋將監。七月、「東鑑」に朝比奈、「反魂香」に又平、切に大津繪の所作。冬、京都、染松七三郎座、「天目山」に鐵孫三郎(二度目)
安永九年正月、「金門五山桐」に五右衛門(二度目)。「菅原」に松王、覺壽、希世。十二月、江戸、森田座、「時江都初雪」に渡島丁七(鐵孫三郎の通り)と猪の早太、「戀女房」に一平と重の井。

八歳の時、父と共に江戸に來りし彼れは、今や天下の名優として其處の舞臺に迎へられしなり。鯛助が最初東下せし時の竹馬の友たりし五世團十郎は、彼れが爲めに兄弟分たる口上を述べたりしが、江戸に於ける彼れが名聲は京阪の如く揚らず、居ること僅かに一月に充たずして西歸せり。

天明元年正月、京都、山下座、「都濱荻」に若薫兵作と三浦荒次郎。三月、「赤穗驪竈」に師直、力彌、義平。「繿縷錦」に春藤次郎右衛門（三度目）。六月、紀州に赴く。七月、「鍋祭」にわび助。冬、同座、「菜種御供」に時平と覺壽。「姫小松」に俊寛。

天明二年正月、「けいせい兒か淵」に捨若丸。「倭莊子」に和田大八。「忠臣藏」に師直、由良之助、定九郎。「盛衰記」に松右衛門と平次。「双蝶々」に放駒長吉。「東鑑」に朝比奈。「物ぐさ太郎」に伴左衛門。「千雨幟」に千羽川。「妹脊山」に鱶七。「かしく」に福島屋清兵衛。「近江源氏」に佐々木と和田兵衛と微妙。冬、同、中山來助座、「三莊太夫」に山岡惣太。「千本櫻」に忠信と源九郎狐。

此の時より、「極上上吉」に進みたり。

天明三年正月、「粟鳴渡」に家老山瀨織部と若薫洞八。三月、名古屋へ行く。七月、大阪、藤川菊松座、「鬼一」に鬼若丸、鬼一法眼、大藏卿。「姫小松」に俊寛。「加賀見山」に岩藤。九月「三十石」に川浦瑞見と神道源八。十月、「千本櫻」に忠信と源九郎狐。「八重霞」に福島屋清兵衛。十一月、京都、北野の芝居、「三十石」に川浦瑞見と關口平太。

天明四年正月、「鬼一」に同上三役。

此の四月より名古屋へ、又十一月は桑名に赴きて到る處喝采を得たり。

天明五年正月、大阪、曾根崎の芝居、「戀女房」に江戸兵衛、左内、定之進、八藏、重の井。「繿縷錦」に次郎右衛門（四度目）。「東鑑」に朝比奈、「桂川」に長右衛門、切に「濱眞砂」の所作事、（田舍娘、椀久、土佐繪の奴、面賣、融大臣、汐汲、箙）。歸京、「大塔宮」に村上彦四郎と齋藤太郎左衛門、「金屋金五郎」に伊藤杢兵衛。「忠臣藏」に本藏、平右衛門、石堂、義平。冬、京都、嵐秀之助（子息）座、「時賴記」に三浦彈正、切に「濱眞砂」の所作事。「菅原」に覺壽と松王、切に繪馬の所作事（椀久、融、大臣、累、面賣女、大津繪の奴、梶原源太）

天明六年正月、大阪、堀江の芝居、「大塔宮」に齋藤太郎左衞門と殿の兵衞。「秋葉權現」に日本駄右衞門、「綴錦」に治郎右衞門(五度目)。道頓堀の芝居、「釜が淵」に石川五右衞門。「國姓爺」に和藤内。「博多織」に船頭小平次。「山姥」の所作事。十月、讃岐に下る。十一月、坂東岩五郎座、菊池金藤次。十二月、「伊賀越」に渡邊靱負と唐木政右衞門。

天明七年三月、「眞顯記」に眞柴久吉。毛谷村六助、吉岡老母。「用明天皇」に鐘入の所作。夏、長崎、三田尻へ下る。七月、歸京、「眞顯記」に同上と吉岡一味齋。「釜が淵」に五右衞門、「用明天皇」に鐘入。冬、同、布袋屋座、「堀川夜討」に辨慶、切に「釣狐」(五度目、三五郎と三人)。十二月、大阪、堀江の芝居、「堀川夜討」に辨慶と藤彌太、「釣狐」の所作事。

彼れが江戸より上阪せし仲藏の藝を見て思はず喝采せりといふは此の年の正月の事なりき。而して此年、西國より歸京してより、彼れは姓を叶と改めたり。

天明八年、大阪、嵐文吉座、「盛衰記」に松右衞門と平次、「薄雪」に伊賀守、「赤穗鹽竈」に師直と力彌。三月、「青柳硯」に道風、「大門口鎧襲」に油屋庄九郎。鐵孫三郎(四度目)、「物ぐさ太郎」に作左衞門、「薄雪」、中村歌右衞門の一世一代に團九郎。

此の團九郎に成功してより「大至極上上吉」に上せられき。

寛政元年、正月、「けいせい北國曙」に柴田勝家、同奥方小谷の方、淺井新三郎、關羽の靈像。「綴錦」に治郎右衞門(六度目)。「道行かいらぎ」に作兵衞。九月、大阪、中山座(角の芝居)、「粂仙人」に守彦・粂仙人。十月、一世一代として、「狭間合戰」に東作、官兵衞、五右衞門、「山伏攝待」に佐藤老母、「娵景清」に景清、「用明天皇」に鐘入。十一月、大阪、淺尾爲太郎座(中の芝居)に再び一世一代、「けいせい兒が淵」に捨若丸、切に「六歌仙」の所作事。

當時彼れは四十九歳。父小六が五十になりたらば、舞臺を退けよと戒められし遺言により、せめて三都の一つなりとも其の言葉を守らんとて、最初角の芝居に一世一代を演せしも、同座は彼れが初舞臺の舊跡たり、別に中の芝居は女方を廢して元服せし舞臺なれば、其處にも一世一代を勤めよと强ひられ、斯くは兩座に跨がりて演じたるなりといふ。

寛政二年二月、京都、夷屋座、「廿四孝」に常磐井御前、横藏、關兵衛、切に「六歌仙」。四月、龜屋座、「比良嶽」に足利政右衛門、切「あふ子芝」に頼政、「糸の調」に曾我五郎（異見曾我の所作事）。「おしづ文藏」に日雇新兵衛。五月、「大塔宮」に村上彦四郎と齋藤太郎左衛門。六月、「忠臣講釋」に十太郎、おれい、宅兵衛。九月、「北國曙」に小谷の方、柴田勝重、千利休、關羽の靈像。十月、「山伏攝待」に佐藤老母。十一月、大阪、淺尾仙之助座、「忠臣講釋」に九太夫と同上三役、「大津繪」の所作事に奴、「東鑑」に朝比奈。「五山桐」に五右衛門と久次。

前年、大阪に一世一代の興行を演せし彼れは、亡父七回忌といふ名義により、再び其處に現はれしなり。

寛政三年二月、「二十四孝」に横藏。三月、「敵討非人の實錄」に須藤六郎右衛門と和泉屋五兵衛。正月、北の新地芝居、「信仰記」に東吉、「阿波鳴戸」に十郎兵衛。六月、京都、龜屋座、「伊賀越」に城五郎、政右衛門。七月、大阪、北の新地、「盛衰記」に平次。「夏祭」に團七、「菅原」に丞相と松王、「千本櫻」に彌左衛門。九月、「六歌仙」。十月、京都、都座、「郡山染」（非人實錄の改題）に同上二役。十一月、大阪、花桐富松座、「酒呑童子」に吉野の前と酒呑童子、「忠臣藏」に本藏、義平、九太夫、定九郎。

寛政四年正月、「大名賢儀」に曉東風右衛門と大友宗麟。二月、「菜種御供」に時平と覺壽、「清水夜開帳」に南方十次兵衛と大阪屋長

右衛門。三月、「布引」に義賢、清盛、實盛、「吉原雀」に豆腐屋仁平次。四月、「桔梗旗上」に光秀、「五人切」に薩摩源五兵衛。六月、京都、龜屋座、「布引」に義賢と實盛、「二見潟」に萬歳の所作事、「桔梗旗上」に光秀。七月、[illegible]座、「腰越状」に五斗、「二代[illegible]」に松津島。八月、「磯馴松」に鍛冶屋太郎七、「幼稚子敵討」に民谷新左衛門と矢濃左島。九月、龜屋座、「[illegible]」に師直と由良之助。十月、「東鑑」に朝比奈、「出入湊」に黒船。十一月、大阪、淺尾奥次郎座、「人心叶戯場」に大森彦七、「信仰記」に松永大膳と山口九郎次郎。寛政五年正月、「奴道成寺」に渡邊透と檜垣のお大。二月、「睦玉川」に浮世渡平と秋塚帶刀。三月、「平井權八」に唐犬十兵衛と小尾十左衛門、「王代一覽」に弓削道鏡と清丸女房青柳、「酒宴車」の所作事。四月、「戀女房」に一平、左内、定之進、重の井。五月、「一の谷」に熊谷。宮島へ下る。九月、「菊水卷」に宇治常悦と秋夜の母。十一月、同座、「伊賀越」に政右衛門。堀江の芝居、「[illegible]間合戰」に[illegible]衛、「忠臣講釋」に由良之助、「一の谷」に熊谷。

翌年より、彼れは叶雛助の名を子中村十藏に讓り、一旦門弟姉川菊八(二世小六)に讓りし父の名を襲ぎて三世嵐小六と稱せり。

寛政六年正月、再び淺尾座、「青陽鶏」に柴田勝重、河田武左衛門、輿惣太夫、女六尺實は萬の精(山の陵の所作事)。三月、「花街入船」に船越丈右衛門、木津屋久左衛門、長柄のおばし。四月、「布引」に實盛。五月、京都、龜屋座、「一の谷」に熊谷、「五大力」に三五兵衛、「惟茂」(子雛助)に渥美諸任。七月、大阪、堀江の芝居、「五大力」に源五兵衛。八月、再び京都、龜屋座、「菊水卷」に常悦と秋夜の母。九月、中山與三郎座、「大塔宮」に村上彦四郎と齋藤太郎左衛門、「出入湊」に黒舟と奴小萬、「仕合八景」に田原又太郎(所作事)。十一月、中村金藏座、「千箙玉賜」に秦次郎武國實は俵藤太、「[illegible]錦」に次郎右衛門と奴佐兵衛(三五郎と同役)。閏十一月、當世[illegible]

に劍屋元之助、石堂主膳、聟戸田八、鵲橋造（所作事）。「忠臣藏」に平右衛門と本藏。

寛政七年正月、「達大礎」に杉本甚内、宇治兵部之助、楠不傳。三月、「比良嶽」に足利政右衛門と柴田勝重、「嫗山姥」に八重桐。五月、「愛護稚」に杢作と二條藏人。六月、北の新地芝居、「鬼一」に鬼若丸と鬼一法眼、「隅田川」に法界坊、（惣賣の所作事、）「娘道成寺」の所作事。八月、京都、龜屋座、「戀女房」に左内と定之進、「嫗山姥」に八重桐。九月、大阪、中村金藏座、「天竺德兵衛」に德兵衛、「傾城鑑」に不破道犬、「盛衰記」に平治。十一月、藤川八藏座、「東海硯」に奴出來助と僧正坊、「譽景淸」に景淸、岩永、十藏母。



雛助の「槍持奴」（「ますかゞみ」より）

寛政八年正月、「花大湊」に山司金右衛門、菊池多門之頭、つる木嘉東次、閻魔の傳七、西方寺儀門、「六歌仙」の所作事。三月、「青柳硯」に良實と駄六。四月、「艶競石川染」に石川五右衛門、千の利休、石田の局。

此の「石川染」は四月四日開場の筈にて、三月廿九日、惣稽古をせしが、石田の局に扮して能の「熊野」を

舞ふ件にて暴に病を發し、享年五十六歳を以て歿せり。
雛助の體格も文七の如く肥大なりしといふ、其の女方より立役に轉ぜし所以は、男女いづれに扮しても成功を得たる彼れが天才にもよるべけれど、一つは餘りに肥滿して纎弱なる女人に扮するに適當ならざりし事が其の動機となれるなり。斯くの如くして、俳優としての彼れが歷史は前後二つに區分せらる。即ち前半生は女方として、後半生は立役としてなり。先づ女方時代に於て、彼れに對する月旦を記さんに、明和七年の「役者不老紋」に其の傾城浪花津に扮せるを評して、

女方の立てゞはなく、立役のやうに見ゆる。又せりふの間々に口だいがめらるゝ、氣を付けられよ。何ぼ美しくても見ざめするぞ

といひ、又翌八年の「役者歳旦帳」には彼れが傾城しづ原を評して、

此の役はそゝけず、始終引張合つてよいぞ〳〵。とかく、此の調子にせられよ。器量はよし、かつぽくはよし、所作は自由なり、心持次第で黒吉になるは今の間〳〵。

といへり。要するに、彼れは女方の時代に於て名聲甚だ揚らざりしが、男子に扮する後半生に入りて俄に其の價値を認められ、而も、地狂言と所作事とを兼ねたるのみならず、老少、男女、善惡、有らゆる役柄を勤めて、大かた成功したる點に於て、彼れは前例なき多能なる名優と稱せられき。茲に、彼れが寬政元年までに扮せる役々の分類と其の位付とを「眠獅選」より轉載せんに、

立役の部

極上上吉　春藤次郎右衛門　繿縷錦
至極上上吉　竹中官兵衛　狹間合戰
大上上吉　鷺阪左内　戀女房
至上上吉　福島屋清兵衛　八重霞
大上上吉　武藏坊辨慶　堀川夜討
大上上吉　齋藤太郎左衛門　大塔宮
至上上吉　放駒長吉　双蝶々
上上吉　濡髪長五郎　双蝶々
上上吉　朝比奈三郎　東鑑
上上吉　安倍貞任　安達原
上上吉　天川屋義平　忠臣藏

上上吉　毛谷村六助　眞顯記
上上吉　小野道風　青柳硯
上上吉　鬼一法眼　三略卷
上上吉　景清　娵景清
上上吉　菅丞相　菅原
上上吉　大星由良之助　忠臣藏
上上吉　和藤内　國姓爺
上上吉　安倍保名　芦屋
上上吉　千羽川吉兵衛　千兩幟
上上吉　帶屋長右衛門　桂川
上上吉　唐木政右衛門　伊賀越

實惡の部

大極上上吉　藤原時平　菜種御供
大上上吉　石川五右衛門　釜淵

極上上吉	石川五右衛門	金門
上上吉	鍛冶屋團九郎	新薄雪
上上吉	松王丸	菅原

敵役の部

極上上吉	高師直	赤穗噺竈
上上吉	梶原平次	平假名
上上吉	梶長兵衛	八重霞
上上吉	希世	菅原

道外方の部

極上上吉	一條大藏卿	鬼一

花車形の部

大上上吉	覺壽	菜種御供
大上上吉	岩手	安達原
上上吉	微妙	近江源氏

上上吉	石川五右衛門	艶問合羅
上上吉	奴佗助	錦祭
上上吉	印南大膳	播磨灘
上上吉	ひぬかの八藏	嬲女房
上上吉	獄門庄兵衛	出入湊
上上吉	石川県右衛門	芦屋
上上	斧定九郎	忠臣藏
上上吉	物ぐさ太郎	十帖源氏
上上吉	覺壽	菅原
上上吉	山姥	嫗姥
極上上吉	岩藤	鏡山

親仁方の部

上上吉　鮓屋彌左衛門　千本櫻
上上吉　竹村定之進　戀女房

若衆方の部

大上上吉　大星力彌　赤穗鹽竈
大上上吉　鬼若丸　鬼一
上上吉　捨若丸　兒が淵

子役の部

上上吉　怪童丸　嫗山姥

若女方の部

大上上吉　板額　和田合戰
上上吉　重の井　戀女房
上上吉　間淵角右衛門女房おくら　嚴柳島
上上吉　博多小女郎　鐘鳴渡
上上吉　たそがれ御前　愛護若

是れより先き、女方より立役に轉せしは、芳澤あやめ、早川初瀨、及び山下金作などの例あれど、孰れも失敗に歸して元の女方に復せり。只尾上菊五郎は女方より立役となりて却て大名を博し、又雛助が父たる嵐小六も、晩年に立役となりて聲價を落さゞりき。而も雛助に至りては、立役に轉じて成功せるの

みならず、右の如く種々雜多の役柄を勤めて、行くところ可ならざるはなかりしは異數といふべきなり。然れども、概して彼れの長所は善人よりも惡人に、又下賤よりも高貴に扮するにあり。又世話物の輕きよりも時代物の重きに演ずるにありき彼の寬政五年、「睦玉川」に家老秋塚帶刀と男達浮世渡平とに扮せる時の評に、

此の人の持前にて實（篤實）のふけ役をさせても、見物のおもひは實らしく思はれぬだけが損にて、渡平の男達姿は上品過ぎて男作のやうに思はれず。（「玉の光」）

と言ひ、別に同く渡平の評に曰く

時代役者にて世話は兎角人柄よすぎて仔細らしく見え、うつりかねる。（「役者觀進角力」）

といひ、又安永五年、「忠臣藏」にて、勘平の母に扮せし時の評に、

勘平母は覺壽か木綿物きたやうで、位すぎて取合はぬ。

といへる、共に其の證とするに足る。

されば、彼れの最も成功せるは、時代物の實惡にして、故藤川平九郎の再來なりと稱せられ、且つ品格の肥大にして人品のすぐれたるを以て、公家姿を最も得意とし、即ち「菜種御供」の時平、「五山桐」の五右衞門が彼れの傑作たりしは此の故なりき、茲に「役者白虎通」により時平の役柄を記さんに

唐使天蘭慶に對面して、菅丞相の位昇るを共に悦び、希世、清貫、いろ〳〵謀叛を勸むるを取上げず、清貫が齊世親王と紅梅姫と密通のしるしの短册を見せ、菅丞相を追ひ失はんと勸むる時、汚らはしきと袖を振切り入る……。次は、菅丞相左遷となりしを共に悲み、見送りて後、天蘭慶のいましめをほどき、身が御所にて黄金千兩受取り、早う唐へいねと言はるゝせりふ……。其れより菅丞相を罪に落せし工みの疑ひを獨りごと言うて欄干にもたれ、につこりと笑ふの幕。

今日も、舞臺に屢演せらるゝ謂はゆる「時平の七笑ひ」は此れなり、

〔補〕幕切、時平一人殘るまで書いたれど、幕をしめる工夫付かず、大内紫宸殿の前にて中通りの公家などが出て、樣子は聞いた、此の通り注進と駈出すを、時平がポンと殺されもすまじ、幕となるきつかけなきゆゑ、何うか工夫せうといひしに、總稽古となり、時平に嵐雛助、菅丞相尾上菊五郎、向ふへ入る後、時平獨舞臺となり、長きせりふあつて、道眞はいかい阿房ぢやなあ、ハヽヽヽと笑うて大笑ひをするを拍子に、ちよん〳〵と木を入れたる所、昔より斯樣な幕は決してなかりしゆゑ、是れのみ噂となり、笑ひ幕と號けたり。茲に或る國學者、此の狂言を見て、抑も俳優といふものは埒もなき作り事のみをするかと思へば中々博識の者の作するものなり、時平公は笑疾といふ癖ありて、一時朝廷にて此の疾發り、詮方なく政事を菅公にゆだれて退きたまふ、と確とせし記錄にあり、それを知つて笑ひ幕とは能く作したる者なりとて、五瓶（狂言作者並木）を先醒々々と尊敬せられしゆゑ、五瓶大きに迷惑したりと。（「傳奇作書」）

次ぎに、「五山桐」の石川五右衛門は如何。

本名明智左馬五郎にて假の名石川五右衛門なれども、南禪寺の眞山國師となりて久秋へ園生の方よりの使者と詐り來り、多くの傾城立出で、いろ〳〵挨拶するを、取敢へず、太鼓持もちやり問答しかけるをあしらひ、拂子にて打据ゑ、それより傾城花橘が布施に

出せし衣の裏に、古歌を記しある故、昔もなつかしく思ひ、出生を尋ね、蘭奢待の香を親の形見といひ出し、兄弟と逢ひ、由來を
がらにあしらひ……其より、筒井順慶が持參せし七千兩の金を手下の者に奪取らせ、名和内記が花生に隱くし置きし袖判を盜み、
順慶を切殺し、千鳥の香爐を奪取り、南無あみ豆腐〳〵といひ、靜かに裾を引きまくり、花道へ悠々と歸る……。次ぎに、南禪
寺山門に忍び居て、春の夕暮の景色を眺め、莨を飲み座して居る前へ、白斑の鷹、白絹をくはへ飛來りしを怪み、手に取上げ見れば、
此村大炊之助が書置ゆゑ、最後の様子を悟り無念がり、我れは大明宋蘇卿が子祖父と知り、いよ〳〵久吉を亡ぼさんと謀反を思立
ち、山門の下に、順禮が石川の蟬の小川は盡くるとも、と歌を吟ずるゆゑ手裏劍を打つ幕……。次ぎに、石川五右衛門と名乘りて、[illegible]
小路にて景高妹うたかを〆殺し、世尊寺中納言を剝取り…其れより大佛餅屋の入聟となつて次郎作と替名して、我が家へ勅使と詐
り、中納言の姿にて來り、鬼惣右衛門にあひ、段々斷り言ひて、次ぎに次郎作の姿になりて出、早川景高が五右衛門を詮議すると
いふゆゑ、わざと受合ひ……其れより鳩と鷹爭ひを見、怪み、八田平六部姿にて來るを順喜觀と呼止め、蘭奢待を焚きて、松が枝に
とまりし鷹を我が拳へとまらせ、八田平が持つたる掛物へ鷹を歸らせ、名畫の謂を語り、主從の名乘して、瀬川采女は我が弟と言ひ
かし、次ぎに又元の公家姿に立出で、早川景高が、鬼惣右衛門は我が手にかけしゆゑ、何時なりとも敵を打ちに來よと、制札を立て
置きしを見て、役にも立たんホテてんがうと言ひ嘲けり、額に手裏劍を打ち、大勢の取手を蹴散し網にかけ、悠々と立歸る……。大切、
桃山の御殿に忍び入り、景高を種が島にて打殺し、忍びの術にて宿直の武士を眠らせ、殘らず足にて踏みこかし、奥御殿へ忍込み、久
吉を打たんとすれば、我が懷中にある千鳥の香爐音を發するゆゑ、驚きて立退き、久吉がぬす人といふゆゑ、國賊は久吉なりと爭ひ
大勢の武士に圍まれながら、今宵は馳走にあづからんと悠々と懷手して入る……大詰が、順慶觀を清正とも知らず、千鳥の香爐を
渡し無念がり、大勢の取手と働き、盜取りし御袖判を采女に渡し、瀬川の家を立てよといふ落合ひ……。（安永九年「役者晴小袖」）

雛助は肥え太りて尻も見事なるゆゑ、僧頭巾、紫の衣を着たる儘にて、此の場には頭巾をとらず、花道の中程にてグツと尻をまくる。見事な尻に紅木綿の越中褌にて、舌を出して、南無あみ豆腐と根を盜賊に見せるが趣向にて、奥にて石橋の獅子、どうでんと太鼓入にて囃子になる。尻をまくりしまゝ此れに合せ向うへ入るなり。大膽不敵な思入にせし事とぞ。後片岡仁左衞門、師匠雛助の通り尻はまくつたれど、見事な尻にもあらず、石橋の鳴物あれども、其の業の出來ぬものから、南無阿彌豆腐といふがいな。尻引きまくつて向うへ駈込んだり。評に曰く、あの五右衞門は、衒りが露はれうかと逃げて歸つたといへり。其の後、歌右衞門（梅玉）、三津五郎（秀佳）、角中兩座にて此れを出したりしが、梅玉は鼠の衣にて、南無あみ豆腐の時、頭巾を脫捨て、衣の裾をまくり上げ、兩肩へかけてグツと引締める、裏は黑天鵞絨にて、裾は下に四天付の形りとなる。見れば當時專ら流行せし引拔の裏にて、引起しといふ好みなり。六方をふり、しづ／＼と入る。梅玉小男にして尻まくりしたりとも當りまじぐと新工夫にてする事なり。禪僧ゆゑに南無阿彌豆腐なれど、盜賊にては何とやら背けたるものなり。三津五郎も瘠地の男なれば……紫の衣、頭巾にてさしたる變はる事なく、後忍びをポンと當てる。忍びダザ／＼と跡へ寄る折、秀佳の頭巾を掴むゆゑ脫げる。下、百日鬘にて、ふと頭冷えたる思入にて頭を撫でる。頭巾なきゆゑ忍びを見て、頭巾を引取り着ると忍びポンと返る。懷より拂子を出して、南無あみ豆腐／＼と輕く言て向うへ入る。見たる所淋しけれど難有し。すべて二つ目の山門せり上げるまでは五右衞門の拵へを見せまじき爲め、序は禪僧の姿にて見せ、雛助は僧のまゝにて頭を見せず、尻引きめくつて盜賊と見せる好み、梅玉の好みは鼠の衣尤も背けり。秀佳の好み尤も妙なり。其の後、當時の歌右衞門（四世）、手下の盜賊同宿伴僧の形りにて六七人出で、五右衞門と共に花道にかゝり、皆々なむあみ豆腐と同音にて言つて、一時に尻をまくる。下、盜賊の思ひ／＼の形りとなる。此等は何の好みもなく論外なるべし。

餅屋場、中納言となり、冠裝束にての出も、雛助は京都芝居にては繼上下にして當りを取りしとぞ。只十三里の道なれど、皇都は公

家業の通行を毎度見來り、浪華の者は公卿といへば何時も冠裝束なりと思ふもの多し、故に大阪にては冠裝束にして、京都にては繼上下にす。是れ鄕に入りては鄕に隨ふの場所なり。桃山御殿の場、片岡のせしは、四天、大小、大百日にて出で、當直の古曽睡り居るを見て、笑ひながら上手へかゝる。綟子張の御殿を引道具にて出す。此の内に久吉脇息にかゝり睡り居る。五右衛門忍込み、刀を持たんとする。千鳥笛。久吉、妹ばかり行けばの歌をいふうち、綟子張引拔き、五右衛門、やゝ何とゝ高塀より飛下り屹となる。近習眼さまし、屹と取卷く。いと面白ければ歸つて幼心に感心して咄しければ、亡父曰く、離世のせしは中々左樣の物でなし、此の場は、打裂、野袴、忍頭巾にて出で、障子開く時、久吉、川風寒み千鳥なくなりと言へば、雛助、やゝ何とゝ高塀よりフウハリと飛下り、ツ、と下つて花道際へチョンと座す、尤もカゲ(附け拍子木)なしに居るなり、是れ忍術あらはれし思入にて、始終懷ろを押へしまゝ細らかに言ひしとなり。片岡のは忍術の心なし、あゝ云へたるかなと歎息せられし。(「傳奇作書」)

彼れは人品にすぐれたりしを以て、物草太郎を演じ、後に千の利休となりての風采は天下一品なりきといへり。又「忠臣講釋」の九太夫に扮せし時、在來の端敵を改めて、由良之助と對當なる人品として之れを演じ喝采を得たりといふ。

實惡以外に於ける彼れが特色は其の所作事なりき。蓋し、所作事は父小六以來の遺傳なりしのみならず、前期に名手たりし佐渡島長五郎に師事して殆ど堂奧に入れり。忠信の道行、大藏卿の物狂ひ、梶原平次の扇流し、二人奴の道行、無禮講の萬歳、蟻通し、石橋、娘道成寺、七變化、等はいづれも此の方面に於て彼の當り藝なりしといへども、最も其傑作とすべきは、寛政元年、大阪にて一世一代とし

て演せし「六歌仙」と「山伏攝待」となり。「六歌仙」は仕丁、遍照、康秀、業平、喜撰、黑主の五役を早變りにて勤め、當時、小町には雛助と同じく佐渡島の門下たりし女方澤村國太郎を特に京都より迎へて之に扮せしめたり。其の筋は

雛助はじめ、七人とも仕丁姿にて、左近國常に附添ひ出で、小町を入内させよとて、深草の少將、戀人の嘆きを察し、姿を變へて說き落してやらんと受合ひ、初めは僧正遍照にて、緋の縮緬の首立衣にての出。歌のせりふも一調子下げての時代事。次ぎは文屋康秀の烏帽子姿にて年のよりし風情。戀づくしの掛合ひの如き世話事。次ぎに在原業平の姿にて又も其時代の雲上の所作事。次ぎに喜撰法師の姿にて、黑衣をとり、白無垢にてチヨンガレの趣き。但し扇錫杖を取らず、甚だ向上なる世話仕立の所作。次ぎは黑主の役、これは持前の時平とも五右衞門とも、言はゞ言へ……。此の役にての實惡、腰元兩人を殺し、小町少將を打ちのめして小町を手に入れ、誠は敵の惡を見出し寶を取戻す……。（「役者紋選」「玉の光」）

「山伏攝待」は

佐藤の老母、初め靜御前、江田源藏、夫婦と知りての狼藉よりも其の姿そなはり、奥に旗揃ひの穩かさ……。（「眠獅選」）

蓋し此の後半の旗揃ひだけは、曾て父小六の演ぜしを、更に山伏攝待を加へて一篇となせるなり。此等の二曲共に舞踊を主として而も其の間に劇的の脚色あり、即ち所作事にして又地狂言たり。「眠獅選」に之を評して曰く

同じ扇の手と膝の働き、頭の切り、亂梅、雲上さを見せて驚かす。凡そ所作事といへるものは、後ろに花やかなる衣裳にて居並び、笛

に大小の鼓より、太鼓、三味線、胡弓、鉦、鉦鐘などに至るまでも並べ立て、拍子を合はすものなるに、此の一曲一代の二度の新曲に其の沙汰なく、漸く業平の所作に鈴木萬里が歌の出語り、三絃と二人のみ、其の餘は床の一ふし、樂屋のめりやすのみ、且つは猿樂より旗揃ひに至るまでも、義太夫節も、床の一曲にて、是れは何うもと褒め方さへも知らうばかり讃めて見聞の感心……

即ち、彼れは物賑やかなる鳴物を廢して、歌もしくは淨瑠璃と三味線とによりて、しめやかに其の曲を演じて、而も看客に多大なる感興を與へたるなり。尚ほ、彼れは舞踊に於て斯くの如く巧妙なりしと雖も其の身體の肥滿せる爲め、立廻りには拙なりしといふ。

すべて、雛助の長所は、能く其の役柄の精神を咀嚼して、且つ獨創の意匠を凝らせるにあり。前にいへる時平の「七笑ひ」及び「五山桐」の五右衛門の如き、其の一例なるのみならず、當時菊五郎の得意とせる由良之助を演じては、菊五郎以外に一機軸を出さんとし、中山文七の得意とせる政右衛門に扮しては、同く文七以外に新意匠を試み、又「忠臣藏」の平右衛門となりては同く藤川平九郎の藝風に與りながら、

奥山(爲十郎)は逸風(平九郎)を形にあらはし、小六(雛助)は心持に逸風を能く呑込んだものぢや、

と評せられたる如き此れなり。然れども斯くの如き自家の創意によりて却て失敗を招けるものも無しとせず。例へば、寛政七年に彼れが演ぜし「出入湊」の黒船忠右衛門の如きは其の一例とすべし。

物好き過ぎて、今は喧嘩もやめて居る此の親仁分といふ案じかたと見えて、島縞の綿入に黒い羽織、頭もすうとなる髷にして、出入の段も下駄もはかず、尻もからげず、とんと見えをせず、獄門くらゐの者は今でも五人や六人は苦にせぬといふ心持にて、うか

め過ぎたやうな仕樣にてありしが、成程そのやうなものにてもあらんなれども、其れでは只事になつて狂言といふ場薄く、殘念なると見巧者がたの取沙汰。（「玉の光」）

又彼れは俗受けを嫌へり。「毎日、見物の譽める所をわざと拔き、幕を引いて後、あゝ面白かりしと感心するやうにせり」といひ、寛政八年の頃、其の子二世雛助が「頻りに評判よく、見物より聲のかゝり褒めらるゝゆゑ、其の身も嬉く、愈舞臺を出精して肩を怒らし、樂屋に入りし時、雛助呼んで、今見物の褒めたるは誰を祝ひて褒めたるぞと問ふに、其の下男、若旦那を褒めたるなりといふ、雛助、子雛助を睨み付けて、

扨も〳〵苦々しき事なり、即座に褒めるは濱芝居の見物なり。門へ出づれば直に忘れて仕舞ふ。大歌舞伎の見物は、一日の狂言を見、歸つて、一日の惣評をして、誰れ彼れは上手なりと褒めるが故、芝居藝中に褒めるものにあらず。其れを知らず、聲さへ掛くれば嬉しがり、見えを切らずともよき所に見えを切り、せりふにも場當りよきを考へ、褒めるやうにする、下手役者、濱芝居の十文役者のする事なり。大歌舞伎の古名人は、誰れ言合はすともなく、仇褒をさせまい〳〵とばかり考へて大事に勤む。さりとて情なや。うぬが仕樣の下主張ると見えたり。嗜み居らう。

と大音にて罵り」しといふ。然れば彼れの藝は皮肉なりき。而も此の皮肉と相伴へる弊は、彼れが舞臺に不忠實にして、技藝を疎かにせるが如き觀ありしこと是れなり。前に引ける明和八年の評に「此の度はそゝけず」といへる、女方時代より既に此の弱點の存せるならん。而も、晩年には愈この弊を增し、

「詞のうち脇へ眼が散るゆゑ肝腎のせりふの性根が抜ける」との非難は其評判記に見えたり。

斯くの如く藝風の皮肉にして且つ舞臺に不忠實なりといふ事と、及び其の才能の多方面なりし事とは、父小六に似たりしと共に、傲慢にして人に憎惡せられし事も亦父に似たりき。彼れが自ら尊大なりし逸話は諸書に傳へらる。寛政七年、大阪にて「天竺徳兵衛」の世話場に、百姓萬作に初世嵐三五郎、徳兵衛に雛助にて、萬作が徳兵衛を諫め腹を切る所にて、「憎まれて世に住む甲斐はなけれども可愛がられて死ぬよりは増し」といふ狂歌をいふべきを、雛助わざと改めて、「可愛がるゝ下手より増しかえ」といひしかば、世の人愈彼れを憎みしとぞ。又當時は尚ほ役者を一年抱へにする習慣の京阪の劇場にも有せしに、雛助だけは一年のうちに幾たびも劇場を轉じて決して一座に留まる事なかりき。或る人の此れを詰りしに、彼れは自若として、「鯨と伽羅と此の己とは丸では買はれぬものぢや、」といひしかば其の人驚いて退きたりと。尚ほ

菅原の松王、寺子屋の場を勤むるに、源藏は誰なりしか忘れたり、玄蕃は柴崎[illegible]とて中芝居の座頭なり。二つ巴の[illegible]へ、[illegible]を出せば毎年大入を取りしとて、釜入の[illegible]藏とも呼びし名人なり。是を歌舞伎へ買上げて玄蕃を勤めさせたり。さて初日に首實檢の場となり、三すくみの處にて玄蕃が松王の顔を見詰めたるに、源藏の息組のよさに四方より詰められ、思はず[illegible]の心にて顔を二つ打ちたり。見物人も實に力が入つて面白かりしと。さて暮になりて[illegible]藏も[illegible]に取りし時、小六[illegible]、いつも下手に[illegible]

れて苦いと思つたが、上手に取まかれたのは又格別苦いわい。（「積善翁筆記」）

倘は彼れは斯くの如き大言を屢舞臺に於て吐きしにや、評判記にも其の意味を漏らせり。

何ぞの言葉の端には憎まるゝ噂が出て、聞いて居るうちの心遣ひ………。（安永二年、「役者有難」）

年なら、器量なら、何處やらに憎い所で持つたのも藝の張り……。（安永三年、「役者値下上」）

然れども彼れは又快襟の人なりき。

和藤内なせし時或る人、此の度の鴫蛤の爭ひはいかう見えもよかりしと褒めければ、雛助申しけるは、何時ぞや、あなた樣仰せには、近頃の由男（中山文七）道風の役を勤めし時、柳の木に蛙の飛びかふを見て考へる所、餘り傍近く寄りての仕樣ゆゑ取合よろしからず、柳より一二間も間を明けて考ふればよいと評判記にも書いてあると御咄を承りましたゆゑ、其の心得にて致しましたと申せし由。（「役者用文書直指箱」）。

三代目瀨川菊之丞、未だ市山富三郎といひし頃、嵐雛助段々肥滿して女形如何ゆゑ立役になる存寄り也。それにつき雛助の名前を遣はすべきやとありしに、富三郎いはく、不束なる私へ御名を讓り下さるべき思召は忝く存じ候へど、一生女形を致す心ゆゑ、女形の名なれば御貰ひ申すべく候へども、女形を止めて立役にならんとの御名は好ましからず、御免あれかしと申しければ、雛助さして立腹もなく、いまだ年も行かざるに大丈夫の心根、其の思入にては今に大立者になるべしといはれし。（「脚色餘錄」）

寛政元年「けいせい北國曙」の中入にて、雛助二役柴田勝重の切首を卓の上に置き、秦の文華齋燒香するうち、雛助は奈落より本首を出す。此の頃、眠獅（雛助）立者にて威勢尤強く、家僕金剛を責使ふ事の甚きを憎み、奈落より眠獅の腰膝或は脇の下を探りけ

れば、來看者に頭を見せながら身體自由ならざれば、困苦み、漸く其の場を勤め樂屋に入りて、誰なれば斯かる物合をなせしぞと責りし時、金剛等詞を揃へて、我々なりと名乘り、彼是いはゞ打擲もしかねまじき體なり、其の時、眠獅、僕一人に金一兩づゝ遣はし、名使の其方等が斯く憎む程なれば、嘯樂屋内にても我れを憎むらん、今日の惡戯は我が身の爲には好き意見なり、とて賞めしかば其しけり。是れより眠獅は玉ぢや、性根が違ふ、親小六まさりの玉なりとて賞めしより、後改名して嵐小六となり、「小六玉」と呼びしは此の狂言の時よりしてなり。(「傳奇作書」)

又、安永五年、忠臣藏の由良之助をせし時、此の役を得意とせる先輩尾上菊五郎、特に变化を遂げ、且つ緣儀なりとて同優が由良之助にて用ひし頭巾と大小とを借りて舞臺に用ひたる如き、敬岸なるうちに自ら襟度の裕かなる所ありしならん。

彼れが白廻しの癖は「喉と鼻との間から聲を出し、鼻へ息の出ぬやうにして聲を出し、隨分甲と胴とをませて眼をつるやうにして調子をあげて」いへりといふ。又彼れは常に淀川の水を飲用とせり。最初は乳母の弟の食客たりし者が天王寺逢坂の淸水を毎日一荷づゝ汲みに行きしが、小船にて淀川の水を汲みなば便宜なるべしとて遂に其の通りにし、近隣の者も茶の水にとて所望せしより、孰れも淀川の水を遣ひ覺え、同く小船にて淀川の水を汲むに至れり。

雛助に三子あり。長男は二世嵐雛助の名を襲ぎ、幼名を秀之助といひ、中ごろ三世中村十藏といへり。

蓋し前期の名優たりし中村十藏の養子二世十藏が、天明八年病死せし時、雛助に其の名蹟の相續を托せしかば、彼れは諾を重んじて己が子をして十藏の名を襲がしめたるなり。三男は嵐新平といひ、初め當次郎といへり。二男は叶珉子といひ、初め岩次郎、後に七世嵐三右衞門の名を襲ぎ、次の時代の名優なりき。又門下には、七世片岡仁左衞門、四世嵐小六、及び關三十郎、等最も著はる。尙ほ雛助は前に言へる如く、舞踊に巧みなりしかば、俳優以外の女子にして彼れが門弟たりし者多く、「眠獅選」に掲げられたる此等の人名を數ふるに、大阪に二十九人、京都に三十三人あり。彼の江戶の舞臺を一度きりにて西歸せるを彼れが終生の失敗として、京阪の劇壇には謂はゆる「小六玉」と呼ばれて持囃されしほか此の方面に於ても無上の勢力を有しき。

●●●●●四世市川團藏（三河屋市紅、延享二―文化五）は京都の出生にして、幼名を虎藏といひ、寶暦七年（十三歲）、同地和泉式部境內にて芻間等の身振芝居ありし時、「繿褸錦」の二人奴道行に、奴伊兵衞に扮して好評を博し、前途多望を以て注目せられたり。當時奴伊兵衞に扮せしは中山竹藏といひ、後に泉川楯藏と稱せる俳優なりしが、後二人共に大阪の濱芝居なる龜谷豐後座へ現はれ、虎藏は龜谷の姓を冒しき。

同十三年、初世中村富十郎の門に入り、名を中村虎藏と改め、明和五年春（廿四歲）、江戶の辰松座の子供芝居へ下りて「姬小松」の俊寬に喝采を得しが、同年冬、始めて三世團藏の弟子となり、市川友藏と改名

して市村座へ出でたり。此れを大劇場に現はれたる最初として、翌六年冬、京都四條なる三桝徳次郎座へ上り、顔見世狂言「龍一天夫婦鯨」に立脇太郎に扮しき。以後の俳優としての閲歴は、

明和七年正月、「けいせい廓陣幕」に岩淵東藏。三月、「御所櫻」に土佐坊と辨慶。七月、「木曽朝門叢」に木曽信濃部實は知盛亡靈と盜賊擂鉢太郎左衛門。十一月、同、尾上粂助座、「梅八島」に中間北六實は佐々木三郎と江間小四郎。「姫小松」に四方右門と次郎九郎。

明和八年春、「けいせい大江岸」に浪人入江萬助と奴逸刀。五月、「ぬけ拳」に宗兵衛。七月、「千本櫻」に河越太郎と梶原。十一月、同、三桝徳次郎座、「都吉野帝闕」に篠塚五郎。

安永元年春、「忠臣藏」に石堂。「花東山」(清玄櫻姫)に壬生平。十一月、江戸、市村座、「曳綱坂」に衛士後に雄氷直光。

此の時、友藏を改めて團三郎といひ、且つ師團藏の養子となれり。

安永二年春、「名所曾我」に範頼と團三郎。十一月、同座、「歸木曾」に今井四郎(實)と尾形三郎。「忠臣藏」に判官。

前年、三世團藏の死せしかば、是に至り、彼れは其の名を襲ぎて始めて市川團藏と稱しき。

安永三年春、「伊達染曾我」に五郎。「千本櫻」に知盛、「菅原」に源藏と白太夫。十一月、中村座、「天盤戸」に土肥彌太郎と梶原源太。

安永四年春、「青柳曾我」に松井源五。秋、「姫小松」に俊寛。十一月、同座、「花相撲」に伊藤家臣鎌田又八と鎌田與市實は文覺上人。

此れより「上上吉」の位に進められたり。

安永五年春、「田植曾我」に八幡三郎實は粂の平內、古郡新左衛門、範頼。五月、「忠臣藏」に本藏と石堂。十一月、同座、「咲此花」に有藤兵衛尉(實惡)と上總之助。

安永六年春、「青柳曾我」に五郎、小藤太、百姓杢作。「千本櫻」に銀平と彌左衞門。十一月、森田座、「貢入船」に眞柴東吉、めのと森野（老女役）、大館左馬之助。

安永七年正月、「妹背山」に入鹿と大判事。（これより病氣にて休業）。十一月、同座、「伊達錦」に國井藏人（仲藏と二人せり出し）。

安永八年春、「綠曾我」に鬼王、小藤太、奴軍助。八月、「忠臣藏」に由良之助と與一兵衞女房。十一月、同座、「倭歌競」に大伴黑主と秦大膳。

安永九年春、「白石噺」に大福屋宗六。三月、「菅原」に白太夫と源藏、「對面」に五郎。八月、「四季咲分」に桃井隼人。十一月、同座、「都初雪」に猪の早太と崇德院。

天明元年春、「曾我細見」に工藤と景淸。三月、「忠臣藏」に由良之助、與一兵衞、義平、定九郎、判官、戸無瀨、大鷲文吾（七役）、「牡丹分身容」に石橋（女方）。これより休業。十一月、同座、「雪三吉野」に六角大炊之助實は相模五郎。

天明二年春、「常曾我」に工藤と飛驒の匠、大津繪の所作事。「安達原」に貞任と濱夕。是より暫く休業。十一月、中村座、「五代源氏」に荒川八郎、阿倍貞任、駕舁甚兵衞。

天明三年春、「三升曾我」に鬼王。九月、「忠臣藏」に本藏、平右衞門、石堂。「勝相撲」に竹右衞門、駕の甚兵衞。「娘仇討」に敵助太郎。

以上十二年間、江戸に在りて名聲益揚れる彼れは終に去つて大阪に轉じたり。蓋し同地は彼が第二の故郷ながら、其の大劇場に現はれしは此を以て最初とす。

天明四年春、大阪、藤川菊松座、「蓬萊山」に奴江戸平、實は惡七兵衞（江戸へ下りし當時と同じ役）。二月、「忠臣藏」に由良之助、師直、

本藏。三月、「小野お通七段譜」に中村彌助、左馬之助を輿、奴伊達平。五月、「由良湊」に大田田藏之丞、隅田川に法界坊（並者の所作事）と淺山主膳。五月、「夏祭」に義平治と三ぶ。八月、「千本櫻」に銀平、「忠花由富性」（備八小楽）に堀川院は高清・佐竹の三郎・「東鑑」に大藤内。九月、「洛陽見物左衛門」に荒木左衛門、獅子の化身、切に、「石橋」の所作事。十一月、尾上丑之助座、「金子櫻」に百姓あかん平實は相馬良門。「菅原」に輝國と源藏。

此等いづれも大成功にして、翌年春より評判記に位を「上上吉」に昇されたり。（三十一歳）

天明五年春、「西國物語」に三好左京之進、海道左衛門。三月、「出入湊」に□三郎、「時雨記」に二階堂、これより劇場便夫の苗め明石に下り、幾もなく歸阪して鳴神と團平と毛拔彈正。「戀女房」に左内、鷹政、宝之進。十月、「本朝列女傳」に地の正司。十一月、尾上菊五郎座、「千本櫻」に鹿島の事觸れ實は僧正坊（猿の所作事）。

天明六年春、「けいせい忍術池」に萬野兵庫。（半ばにして休座）。三月、坂東彦次郎座、「大湊」につゞみ宗左衛門と田原新兵衛。これより紀州より讃岐に赴く。十一月、中村粂太郎座、「金比羅仇討」に遠藤主税と矢流左鳥。

天明七年春、「けいせい櫻城砦」に大内義高、杉彈正、中間勇助。二月、「千本櫻」に銀平と判左衛門。四月、「忠臣藏」に義平と石堂。七月、「仇討寶永祀」に細川藏人、三右衛門、淀屋三郎兵衛。これきり大阪に現はれず、翌春、京都に出勤の筈なりしも、大病につき斷り伊勢を巡業。

天明八年九月、京都、布袋屋梅之丞座、「忠臣藏」に由良之助、本藏、師直、與一兵衛、宿九郎、義平（六役）。十一月、同座「[illegible]顏見世」に鎮西八郎、腹野五郎、由場十藏、切に「四十八手」に三人角力の所作事。「信仰記」に山口と早雲、切に[illegible]兵衛。

此の時より更に「白太上上吉」となれり、（四十四歳）

寛政元年正月、「黄金鯱」に柿木金助。半ごろ伊勢へ下る。八月、「菅原」に輝國、白太夫、時平、源藏、「襤褸錦」に高市武右衛門。十月、「鎌倉山」に佐野兵衛、櫻井新左衛門、青砥左衛門。十一月、大阪、中山福藏座、「契種睦美」に奴新平。「鎌倉比事」に盜賊長藏、佐野兵衛、百姓かに作。十二月、北新地芝居、「忠臣藏」に判官、與一兵衛、定九郎、義平、本藏、由良之助。

寛政二年春、「路島臺」に田川惣左衛門（八人切）。三月、「比良嶽」に柴田勝重、足利政右衛門、「秩白絞」に久作。四月、「妹脊山」に芝六と大判事、「宿無團七」に堺大治。夏、上京、「忠臣講釋」に喜内と由良之助。七月、歸阪、「苅萱」に新洞左衛門と玉屋與次、「極彩色」に朝比奈藤兵衛と林三太夫。九月、「襤褸錦」に佐兵衛と治郎左衛門。「重井筒」に重井筒藤左衛門。十一月、淺尾爲太郎座、「忠臣講釋」に喜内と由良之助、「大津繪」に鬼の念佛の所作事。

寛政三年春、「五山桐」に順喜觀。三月、上京、「妹脊山」に芝六と大判事、「吾妻世話事」に法界坊と淺山主膳。「布引」に義賢と實盛。「千手護助劔」に石井兵衛、三木十左衛門。「雷神」に鳴神上人と粂寺彈正。「名物時雨蛤」に百姓伊作、伊井帶刀。鳥さし鳥右衛門。「伊賀越」に佐々木丹右衛門、澤田内記。八月、大阪、中山一德座、「四十七訓」に判官と由良之助、切に所作事（座頭、振袖娘、蟻通、越後獅子、布袋、唐子遊）。「鸞瀧」に御影此母。六月、上京、「四十七訓」と所作（同上）。「女護島」に俊寛。十一月、同、淺尾奥次郎座、「忍寄池」に萬野兵庫と信濃藤藏。「伊勢物語」に紀有常。

寛政四年春、「花大樹」に木下藤吉と淺井長政。五月「會稽富士傚」に辨慶の七兵衛、工藤祐經、切「矢の根」の五郎。八月、「千本櫻」に忠信、源九郎狐、樵太、「歌祭文」に野上半平。九月、「忠孝寒二街」に安田大將と田代左五右衛門。十一月、同座、「人心叶戲場」に栗生左衛門と馬之丞實は楠亡魂（後に鬼女）。「信仰記」に春永と東吉。

此の時より「大上上吉」となれり。（四十九歳）

寛政五年春、「奴道成寺」に奴與治平（道成寺の所作事）。二月、「睦玉川」に岩倉主膳と若徒三田平。三月、上京、「伊勢物語」に荒川宿禰と紀有常、「粂仙人」に物部守彦。五月、「忠臣講釋」に義平、喜内、宅兵衛、「白羽二重」の所作事。九月、歸阪、「近江源氏」に高綱、「鬮水卷」に楠正行、鞠が瀬秋夜。十一月、淺尾奥次郎座、「伊賀越」に靱負、内記、松野金助。十二月、北の新地芝居、「兜軍記」に重忠、「物草太郎」に岡平、「女護島」に俊寛、「布引」に實盛。

寛政六年春、「青陽鶴」に久吉、三七信孝、（馬切）。中ばより伊勢に下る。七月、歸阪、「菩薩池」に池の庄司、結城六郎、老女村路、大切に大蛇。八月、「女護島」に俊寛、門脇の局、文覺、「淨名大神」に間野十内。九月、「三代記」に高綱、藤三。十月、上京、「[illegible]」に淺室さよ路、「綴錦」に治郎右衛門と佐兵衛。十一月、中山與三郎座、「弓勢畠負方」に仕丁實は宇賀善神、「安土問答」に東吉と光秀、「綴錦」に治郎右衛門と佐兵衛。上京、「花木影」に東吉。

寛政七年春、歸阪、「倭繪草紙」に名古屋三左衛門。二月、「鬼一」に鬼一、「戀」に橋本治部右衛門。三月、北新地芝居、「一の谷」に六彌太と熊谷。四月、上京、「忠臣藏」に七役（由良之助、定九郎、與一兵衛、同女房、義平、本藏、判官）、「[illegible]」に春藤と眞平次、「岩井風呂」に治助。八月、歸阪、「忠臣藏」に由良之助、定九郎と與一兵衛との早替り。九月、坂東岩五郎座、「三十石」に花[illegible]と[illegible]三右衛門、切に「鳴神」。十一月、「菅原」に源藏、「[illegible]世話事」に法界坊。十二月、中山一德座、「[illegible]」に十八三[illegible]。

寛政八年春、「薄雪」に兵衛、主膳、正宗、「黄金[illegible]」に高坂甚内と老女むらじ。五月、「[illegible]」に三[illegible]と[illegible]、北新地芝居、「[illegible]」に銀平と權太、「妹背門松」に久作。夏、宮島へ下る。八月、上京、「一の谷」に六彌太と熊谷。九月、「菅原」に[illegible]と松王、「[illegible]」に岩永、切に「鳴神」。十一月、大阪、子息市川團三郎座、「[illegible]入」に或三郎（團十郎の大黒天）所作事。更に上京、同上「三十石」に

憲法と與三右衛門。

寛政九年春、歸阪、「遊山櫻」に佐藤正清と足利政左衛門。三月、「扇矢數」に大星、寺岡、鷺治、「御所櫻」に辨慶、「重井筒」に藤右衛門。五月、上京、「扇矢數」に同上、「夏祭」に三ぶ。七月、「青陽鶏」に久吉、柴田、三七信孝、「八百屋心中」に山脇牛十郎、「妹脊門松」に久松、「青柳硯」に良實。八月、「博多織」に箱崎左京之進、切に「三つ人形」の所作事。歸阪、市川團三郎座、「博多織」に同上、「菅原」に松王。「遠州中山染」に景川式部と海道左衛門。十一月、中山與三郎座、「萬兩橋」に外郎賣と多門天。

寛政十年春、「狹妻櫛」に修行者快了と井上新左衛門、切に寫繪の所作事「吾妻世話事」に法界坊と淺山主膳（東下の暇乞）。三月、京都、嵐熊之助座、「吾妻世話事」に同上。四月、「忠臣藏」に師直、本藏、定九郎、與一兵衛、由良之助、切に「娘道成寺」。七月、江戸、森田座「愛護若」に田畑之助と荒木左衛門、「綴錦」に治郎右衛門と佐兵衛。八月、「布引」に實盛（養父團藏の追善）。九月、「妹脊山」に大判事、「隅田川」に山田三郎と法界坊。十一月、同座、「太平記」に篠塚（暫）と修行者蟠龍軒、八尾大膳實は長崎勘解由、「色引方」に片桐彌七。

彼れは十五年ぶりに再び江戸へ下りしなり。

寛政十一年春、「彦山」に六助と木津川隼人。三月、「伊達衣裳」に亘理三平、鹽澤丹三郎、島田十左衛門、局政岡、不寢茂助、道哲。五月「菅原」に松王と覺壽。十一月、中村座、「爲朝射親船」に爲朝。

此の「菅原」の時、菅丞相の役について隙を生じて森田座を退き、中村座へ轉じたり。蓋し菅丞相の役は團藏が勤むる筈なりしに、此の役によりて彦三郎が屢々大當りせしゆゑ、彼れに勤めさせたしと金主

等の希望せしかば、一旦團藏も其の意に隨ひしも、彦三郎が病氣の爲め一兩日休業せし時、覺壽を中村のしほに勤めさせて丞相を團藏に賴みしより、去年以來同座の衰運を挽回せしめし己が恩義を忘れたりとて、自ら所決せしなりき。

寛政十二年春、「幸曾我」に景清、二番目に「幡隨院長兵衛」。三月、「双面影」に俊寛、「綴錦」に瀬郎右衛門。五月、「千本櫻」に川越、銀平、彌左衛門、覺範。これより退座。九月、市村座、「菅原」に時平、覺壽、白太夫、源藏。十一月、中村座、「金門取」に大江左衛門、袴垂保輔、平井保昌。

享和元年春、「忠臣藏」に七役。九月、「布引」に義賢と實盛、「隅田川」に法界坊、「反魂香」に又平。十一月、森田座、「三升□□」に五代三郎と正直庄兵衛。

江戸に留まること、滿三年にして終に大阪へ歸りぬ。

享和二年春、大阪、嵐川龜三郎座、「けいせい美島林」にかちすか幸六と此下東吉。二月、「布引」に實盛、「出入湊」に□□□右衛門と八木孫三郎、「戻駕」に次郎作。三月、「忠臣藏」に師直・與一兵衛・同女房・定九郎・本藏・由良之助、「女護島」に俊寛。五月、北□□にて同く俊寛。六月、京都、嵐三吉座、「一の谷」に六彌太と熊谷、「綴錦」に瀬郎右衛門。七月、「太功記」に光秀と□左衛門、「切□曙」に梶川新十郎。八月、「吾妻世話事」に法界坊と淺山主膳。九月、大阪、嵐川座、「忠臣講釋」に義平・喜内・宅兵衛。十月、「□□」に濱田幸十郎、「巖流島」に佐々木巖流。十一月、京都、吾妻富次郎座、「風流國姓爺」に和宮藏人・山崎東作・鬼一。

享和三年春、「花街容性」に佐竹杢之頭と幡隨院長兵衛、「けいせい櫻花島」に龍造寺帶刀と片桐三木之頭。三月、「廿四孝」に山田幸衛

衛、宇佐美五右衛門、駕昇平作。「女護島」に宗清と俊寛。六月、「漢人韓人」に千島大領、「大阪神事揃」に喧嘩屋五郎右衛門。七月、大阪、姉川熊次郎座、「壁仇討」に九十九新左衛門と庄屋德右衛門、切に「鳴神」。九月、「狹間合戰」に來作と官兵衛、「加賀見山」に岩藤、「繼綫錦」に治郎右衛門。十一月、藤川友吉座、「石橋山」に股野五郎。十二月、「菅原」に白太夫、覺壽、源藏、時平。

文化元年三月、京都、「忠臣藏」に由良之助、本藏、義平。五月、「五山桐」に久吉と餅屋宗右衛門、「宿無團七」に並木正三。八月、大阪、姉川龜三郎座、「蘭奢待」に伊賀守、幸内、彦七。九月、「濱眞砂」に石川五右衛門と石田局。十月、北新地芝居、「彦山」に六助。十一月、芳澤國次郎座、「千負稲」に龜島藏人、「姫小松」に俊寛、十二月、「彦山」に六助。

文化二年春、「天羽衣」に足利義久とさゝら三八。三月、「忠臣藏」に本藏、石堂、寺岡。四月、上京、同上。五月、「蘭奢待」に彦七と佐渡平。八月、「薄雪」に伊賀守と團九郎、「黒船」に忠右衛門、「巖流島」に巖流。十一月、病氣にて休業。

文化三年春、大阪、中村歌六座、「いろは歌」に師直、彌次兵衛、神田與五郎、座頭德市。三月、嵐權之助座、「鬼一」に宗清と鬼一、「龜山噺」に淺川右膳と鳥井彌右衛門、「在原系圖」に蘭平。是れより卅五年ぶり名古屋に下る。秋、大阪、中村座、「秋葉權現」に福明と駄右衛門。十一月、京都、北側東芝居、「秋葉權現」に同上。

文化四年春、大阪、芳澤巳之助座、「けいせい高砂松」に老女明石、聖行山、吉見彦次郎。これより伊勢に下る。八月、大阪、嵐龜三郎座、「鎔謡釋」に時政、澤庵、和田兵衛、「酒肆諷戀酌」に疋田水藏。九月、「自來也談」に自來也、名越長兵衛、金毘羅の神靈（故障ありて中途より興行が止む）。十一月、藤川辰藏座、同上。十二月、上京、同上。

文化五年春、大阪、藤川座、「けいせい輝双紙」に名古屋山三と嘉門母芹生。三月、京都、北側芝居、「八陣」に加藤正清、「歌祭文」に久作と勘六。五月、「庵室曙」に清水清玄と鷲尾次郎右衛門、切に骸骨の所作事。七月、大阪、小川吉太郎座、「清水清玄」に清玄と細川

頼之、同く骸骨の所作事「歌祭文」に久作。九月「八陣」に正清。此の興行中、病を獲て舞臺を退き、十月九日に歿しき。歳六十四。



四世團藏の「佐藤正清」(「似顔大全」より)

彼れは「小柄なれども小手きゝ」なりしといふ。同時代の他の名優の如く、幼時より大劇場に現はれず、專ら小芝居に修練を積みたることが、彼れの藝風をして器用ならしめしならん。彼れは謂はゆる宙返りに巧みなりき。彼れが始めて市川友藏と改名して、江戸の市村座に現はれし時、花道より出で、跡返りせし業の見事さ、見物は其の動作の輕捷なるに舌を卷けりといひ、又法界坊を演じて、傘をさしながら三たび跡返りせしといふ。同時に彼れは太刀打と立廻りとに妙を得、又同時代の諸名優の大かたが所作事に長せし如く、彼れも亦舞踊に於て堪能なりしのみならず、謂

はゆる早變りを得意とせりき。屢彼の「忠臣藏」の七役に扮し、與一兵衞と定九郎と、又由良之助と本藏とを早變りにせし如き、又「菅原」の四役に扮して判官と覺壽とを同く早變りにせし如き、謂はゆる其の藝の「小手きゝ」にして、且つ雜多なる役柄を一人にして兼ね演ずるほど多能なりしを證すべし。

彼れは斯くの如く多能且つ多藝なりしに拘はらず、專ら其の本領は武道實事に限られしこと先代の團藏と同じかりき。蓋し、彼れが中村虎藏と稱して江戸の子供芝居に「俊寛」を演せし時より、既に先代團藏の風ありと稱せられ、後終に其の門下に入りしだけ、始終其の藝風を襲ぎ、例へば「布引」の實盛、「千本櫻」の知盛、「一の谷」の六彌太と熊谷、「綴錦」の春藤治郎右衞門など彼れが當り藝なりき。

而して、彼れの長所にして且つ缺點なりしは其の藝風の質實なる事なりき。諸評判記の彼れを月旦ずるや、常に「すこし仕打が堅すぎる」、「淋うするを專らとする」、「花うすし」、等の評語を漏らせり。此れ其の體格の矮小なりし先天的狀態も其の原因の一つなるべけれど、一方に於て、先輩なる雛助もしくは三五郎が派手なる藝風を以て喝采を博せし反動として、彼れは力めて科白の誇大なると扮裝の華麗なるとを避けたりしなり。例へば、侠客黑船忠右衞門に扮して奥島の羽織を着せしといひ、「千本櫻」の忠信に扮して、長上下の下ばかりを穿てりといひ、「一の谷」の六彌太に扮して、在來の「花やかなる姿を改め」又「顔を赤うして鎌倉武士」の素朴なる風を寫せりといひ、「綴錦」の春藤治郎右衞門に扮して、葵

下坂の刀を示す時に、例の如く片足を突出さゞりしといひ、又「菅原」の輝國にて、道明寺の場に、團笠に禪衣にて出でしかば、見物より輝國を出さぬかいと罵られ、翌日より桃色の素袍に龍頭卷にて花々しく出で、富十郎の覺壽の前につかへて、「御詞に隨ひ、衣裳相改め參上仕りましてござります」といひ、始めて人氣を恢復せりといひ、彼れが藝は淋しく且つ堅くるしかりき。是を以て、同じ武道實事のうちにも、「姫小松」又は「女護島」の俊寛の如き、「三略卷」の鬼一の如き、「薄雪」の園部兵衞の如き、「忠臣藏」の加古川本藏の如き、「忠臣講釋」の矢間喜内の如き、「妹脊山」の大判事の如き、「伊賀越」の和田靱負もしくは山田幸兵衞の如き、素朴もしくは傲岸なる老人に扮して最も成功したりき。

尙ほ彼れが有せる今一つの弱點は其の品位と風采とに缺けたる事なりき。晩年には稍この非難を免れたるも、寬政五年の「役者當振舞」に彼れが「伊勢物語」の紀有常を評して曰く、

此の役は歌七（歌右衛門）梅幸（菊五郎）といふ上下付の人品のよい所を、置手拭させて茶呑噺の趣向な取組んだる作者の働きゆゑ、市紅（團藏）丈茶呑の處は置手拭の取合よく、有常らしくなく、やつぱり太郎助のやうであつたぞや。

といひ、他の評書にも、彼れが「信仰記」の春永を評して、大紋烏帽子の適合せずして人品に劣れりといひ、「薄雪」の正宗を評して、名人の劍工らしからず「只の親仁」めきたりといひ、又すべて「上下付がわるい」といふ非難の屢見えたり。是を以て彼れは亦同じく素朴もしくは傲岸なる老人にても、上流の士よ

りは寧ろ下層の人物に扮して屢喝采を博せり。例へば、「お染久松」の久作の如き、「忠臣藏」の與一兵衞の如き、「伊賀越」の平作の如き是れなり。

此等の地藝のほか、彼れが所作事に長ぜし事は既に前に述べたり。「忍賣」の如き、「石橋」の如き、此の方面に於て彼れが傑作と稱すべく、又同時に立役のほか若女方にも老女方にも扮して屢成功せり。

斯くの如く多能なりし彼れが終生の當り藝として天明四年に演ぜし「隅田川續俤」以來、屢々三都の舞臺に繰返せしは其の法界坊なりき。此の狂言は彼れより以前、既に江戸に於て、中村仲藏が大日坊といふ役名にて屢之に扮して喝采を博せしが、團藏は即ち其の脚色に多少の改竄を施して之を演ぜしなり。即ち

> 人を殺し、女を姦し、金を騙り、財を掠めて恬然たる法界坊といふ殘忍なる墮落僧あり。吉田宿直之介の室たるべき野分姫を挑みて聽かれざるゆゑ之を殺し、法界坊は道具屋甚三が妻おさくの爲めに殺さる。野分姫と法界坊との亡魂は相合して宿直之介の情婦たるお組と一對の姿となりて松若丸及びお組を惑はしむ。

といふ筋にして、此の最後の一齣は謂はゆる「忍賣」と題する所作事たり。垢衣蓬髮の惡漢忽ち變じて長袖美目の處女となりて舞踊を演ず、敵役の地藝と女方の所作事と、此の二つを一人の俳優が兼ねて演じ了するところ、彼れが當時の看客に喝采せられし所以にして、且つ彼れが獨特の藝なりし所以たら

ん。尙ほ同じ脚本に於て、彼れは更に淺山主膳といふ武士に扮し、彼の法界坊を殺せるおさくの爲めに五十兩を騙取らるゝ齣あり。最後に其の事を知りて、女の去りし方を見込み、呆然として扇を落す幕切の仕打の妙なりしより、俗に「扇落しの幕」と稱して同く彼れが當り藝と稱せらる。此れも彼れが此の狂言に成功せる理由の一つたらん。

第二に、同く彼れが當り藝として知られしは「幡隨院長兵衞」なり、此れ亦天明四年に演ぜし「思花街容性」以來、屢舞臺に繰返されたり。此れより先き此の役名に扮せしもの中村仲藏あり、更に仲藏より前に大谷廣次あり、而も「花街容性」の長兵衞は作者並木五瓶が特に團藏の爲め新作せるものなり。

板橋驛に平井權八の己を追捕せんとする者を殺すに邂逅し、權八をして己が家に潛ましむ。是れより先き、長兵衞は權八の情婦お澤を陽はりて己が妻なりと稱し、共に同棲す。茲に於て權八に實を告げて相婚せしめ、自ら權八に代りて捕はる。

此は彼れが得意なる武道實事の種類に屬すると共に、一面には壯時より久しく江戶に在りしだけ、能く其の地の氣風を摸せし事が京阪の看客に悅ばれしならん。

第三に「馬切り」の三七信孝も彼れが當り藝の一にして、寛政六年、辰岡萬作の新作「けいせい青陽鶴」が上場せられし時、始めて團藏が之に扮してより屢々舞臺に繰返し、且つ今日も往々劇場に此の一齣だけ演ぜらるゝを見る。

小田家の貴公子三七郎信孝、豪放にして世事に齷齪するを忌み、自ら地位を捨てゝ江湖に放浪し、大阪阿波座に窮居す。眞柴久吉が高野山に獻ずべき三千兩の祠堂金を運べるを大和橋に見て、馬士を切り、其の金を奪ひ、悠々として歸り去る」

といふを其の梗概とす。評判記に之を評して、「姿のはまりから落付いたる仕樣、よしある大將と見える」と言へるのみならず、彼れが得意たる大刀打も此の役をして成功せしめし一つの理由ならん。最初の興行の時、彼れは半ばより病の爲め舞臺を退き、先輩たる嵐雛助が暫く代りて扮せしかば、人皆團藏に優るべしと豫期せしに拘はらず、却て雛助は彼れよりも劣りしより愈名聲を揚げたりといふ。

第四に「自來也」も亦彼れが當り藝の一なりき。此は團藏が死する前年、作者近松德三が特に彼れの爲めに脚色せし新作なりき。

松が枝に幼子のかゝりあるを見て手下におろさせ養育して、寢んねこせいといふ樣子にて抱きての幕……。百日鬘に羽織大小野袴にての出、誠に花やかに見えて江戸の畵を其のまゝ見るやう……。次ぎに繩にかゝり出で、市之正に緑丸の劒を望み、それより代々絹が香を焼きしより兄弟の名のりして、わざと入牢して段之進が盜み置きし緑丸を奪ひ取り、喜文太を遠當にて殺し立退く幕、落付いたもの……。代々絹に逢ひ、盜人と傾城は品こそ變はれ、夜の商賣なれば好い出合とのせりふは大いに請けました……。後に普藏方へ盜賊に入り、思はず女房ひがきにあひ、普藏は我が家來にて數多の金箱を受取らるゝまで、誠は尾形周馬といふ三好が臣下にて、主の仇を報ぜんとの思立ち、武士とは屹度見えました……。

これも謂はゆる武道に屬する役として成功せしなり。

彼れは亦、往々實惡もしくは敵役に扮せしに拘はらず、此の方面に於ては大かた失敗を免がれざりき。例へば、佐々木巖流に扮して「憎み薄し」と評せられ、老女岩藤に扮しては「憎からず」と言はれ、又彼れが當り藝なりし法界坊さへも、同く憎みに足らざりしと稱せられき。又輕妙なる世話事も彼れの長所にあらざりしかば、「宿無團七」の並木正三に扮せし時、武士らしゝと非難せられたり。

前にいへる如く、彼れは衣裳の華美と科白の誇大とを忌みしと共に種々なる新しき型を創めたりき。彼の「一の谷」の岡部六彌太を鎌倉武士となせる如く、又同じ脚本の熊谷直實が蓮生法師となりし件にて、辨慶の如く天鵝絨鬘を用ひて五分月代となせる如き其の一例なり。更に彼れが伊勢の古市にて「伊賀越乘掛合羽」を演ぜし時なりき。彼れは斯る不座なる時に三十郎の内記は面白からず、李冠(二世吉三郎)にすべしといひ、當人が若輩なりとて辭退するを聞かず、さて毎日の稽古に、唯白の言合のみ、槍の立廻りもせず、年輩も貴公の年齢にて然るべし、と故と若輩に出立たせたり。斯くて初日となりて、「先大殿樣には鎗術の祕事は殘らず御傳授中上げ置きましたれども、若殿樣には未だ御傳授申上げず、御免下され」と立上り、其れより鎗と扇の立廻りに、李冠は何の差別もなく突いて行くに、團藏は是を握り、又扇にてあしらひ、眞ことに傳授するやうに見ゑて見物一統に感心したりといふ。後に彼れは曰く、

奥儀とはいひながら、摺はがしの大殿に今まで傳授せぬといふは、殿が柔弱か、悪くいへば不器量者のやうに見ゆるゆゑ、岡崎屋

（吉三郎）が若年より不圖思付きたり。

といひ、後に三世歌右衛門が内記を勤めし時も、此の型により若輩につくりて喝采を博したりき。尙ほ團藏は「幕切の名人」と稱せられ、彼の淺山主膳の「扇落しの幕」の如く常に幕切の仕草によりて喝采を得たりき。

●●●●●彼れが性行を「役者穿鑿論」に記して曰く、

せうとく能氣質でござる。又古團藏の妻に仕る事、寒夜には手づから夜着をかけ抓つくろひ、いかりにも機嫌をそこなはず、能孝行にいたされます。目黑に抱屋敷あつて内福にくらされます。酒でも過た時は遊などにも行、中々おもしろい人でござる。

同時代に於ける京阪の名優のうち、彼れの如く久しく江戸に留まりて且つ其處に聲名を博し得たるは稀れなり。右に記せし如く、東下せし時、目黑に住せしを以て俗に之を「目黑の團藏」といひ、又壯時の名を呼びて「友藏團藏」ともいへり。彼れには三子あり、長男門三郎は早く死し、次男團之助は女方として地藝と所作と共に能くし、太刀打の上手と稱せられしが、僅に三十二歲にして自殺せり。養子團三郎、家を襲いで五世團藏となり、次ぎの時代に於ける名優たり。門下には、市川市藏、市川荒五郎、等最も著はれき。

●●●●尾上新七（南部屋芙雀、延享二―文化六）は江戸の出生にして尾上菊五郎の門人なり。幼名を佐之助といひ、寶曆五年十

一月(十一歳)、江戸の市村座に子役として現はれしが、次いで立役の部に入りたり。同十年十一月、春五郎と改名し、明和元年(二十歳)冬、始めて大阪へ下り、中山文七座へ出で、尾上七三郎と稱し、「天竺德兵衛」に奴秋内に扮し、同三年冬、尾上新七と改めて、師菊五郎と共に京都の市山助五郎座へ現はれき、是れより同地に留まること十二年。次第に昇進して、安永元年(廿八歳)の評判記には「上上吉」の位に推され、就中、二年冬、「兵較」に渡邊綱、五年冬、「繁昌鉢木」に赤星太郎等に好評を博せしが、安永六年冬、師菊五郎と共に大阪に下り、小川吉太郎座の「赤城鹽竈」(菊五郎の由良之助)に判官と義平に扮し、最も後者に好評を得たり。以下主なる技藝上の經歷は左の如し。

安永七年四月、「五由桐」(雛助の五右衛門)に早川高景と大佛餅屋女房、十一月、同座、「[illegible]」に[illegible]の三郎、十二月、「女[illegible]張」に奴栗平と淺井主殿之助。

安永八年三月、「播州廻」に生田兵庫之助と久作新平、九月、「女護島」に俊寛、十一月、京都、中山猪八座、「[illegible]」に[illegible]。

安永九年正月、「大内雛形」に毛利元就、同家臣宍戸下總、児島馬彌九八、十一月、大阪、藤川山吉座、「[illegible]」に[illegible]彈正。

天明元年正月、「加賀見山」に安田庄帽と鳥居又助(早變り)、十一月、同座、「[illegible]」に江間小四郎。

天明二年正月、「殿下茶屋」に千島の冠者、幸右衛門母、片岡三木守、三月、「一の谷」に六彌太、十一月、同座、「[illegible]」に[illegible]三郎。

前年の「加賀見山」に大好評なりしのみならず、「殿下茶屋」は當時京阪の三座に競ひて演ぜられ、新七の役は彼れが最も優れしとの評にして、これより「上上吉」に進みたり。（三十八歳）

天明三年正月、「黄金鯱」に齋藤龍興、櫻井帶刀、老女むらじ。三月、「伊勢物語」に有常。

此の龍興も彼れが當り藝なりしが、同年冬、京都へ上るべかりしを、師菊五郎が死せしを以て、其の遺孤丑之助を保護する爲め、大阪に留まりたり。

天明四年正月、嵐他人座、「倭莊子」に主計頭と星野勘左衞門。「桂川」に長右衞門。夏、京都、中山猪八座、「倭莊子」に同上。下阪し、十一月、再び中山座、「大島臺」に秋田城之助。「白石噺」に惣六。

天明五年二月、「黄金鯱」に龍興、櫻井帶刀、老女むらじ。名古屋に下る。九月、歸京、「忠臣藏」（故菊五郎追善）に由良之助、與一兵衞女房。十一月、嵐秀之助座、「菅原」に源藏と輝國。

天明六年正月、「伊賀越」に本田内記、「桂川」に長右衞門。三月、「相馬太郎」に將軍太郎。十一月、同、澤村元三郎座、「千種結」に本田二郎。「薄雪」に來國行と園部兵衞。天明七年八月、大阪、坂東岩五郎座、「大塔宮」に右馬頭、「桂川」に長右衞門、「白石噺」に惣六。十一月、同、中山福藏座、「意馬心猿」に本田二郎、「加賀見山」に安田大將と又助。

天明八年正月、「色襲船」に男無間の所作。十一月、京都、龜谷座、「源顔見世」に田原又太郎、「信仰記」に東吉。

此の時より「至上上吉」に昇されたりき。（四十四歳）

寛政元年三月、「風俗文選」に百枝藏之助。十二月、大阪、中座、「佐野船橋」に佐野源左衞門と秋田城之助。

寛政二年四月、「双蝶々」に橋本治部右衞門、南與平、角力頭取。九月、「近江源氏」に佐々木三郎と同四郎、「龜山仇討」に石井□衞と三木十左衞門。十一月、淺尾彌太郎座、「錦奥山」に實盛。

寛政三年四月、上京、「時雨蛤」に獅子堂主計頭、一の關豐前、城山三介。「伊賀越」に數負と松野金介、「兜軍記」に重忠、「双□□」に尊氏、大星宮内、石堂、由良之助、若狹之助。十一月、同、姉川熊次郎座、「白梅源氏」に坂田金時。

寛政四年夏、大阪、堀江新芝居、「佐野船橋」に源左衞門。十一月、同、坂東重太郎座、「双葉藏」に宮内、石堂、由良之助。

寛政五年正月、「楊柳櫻」に一色結城守、老女八雲、渡邊要助。秋、上京「夏衣裳」に本庄倉平次と多川木曾兵衞、「忠臣講釋」に由良之助と重太郎。「楊柳櫻」に同上。

寛政六年、大阪、中山與三郎座、「五大力」に源五兵衞。三月、「菅原」に松王と輝國。五月、京都、龜屋粂之丞座、「一の谷」に六彌太と彌陀六、「五大力」に同上。「菊水卷」に正行と秋夜。「金花山」に堀尾団十郎。「飛馬始」に岩倉主膳、「繼纏錦」に高市武右衞門。十一月、大阪、中村金藏座、「千儷玉賜」に渡邊綱、「繼纏錦」に武右衞門。

寛政七年三月、京都、龜屋粂之丞座、「菅原」に覺壽と松王。「連歌評判」に光秀と百姓與五郎。「宿無團七」に並木正三、「雷電源八」に行司庄九郎。七月、大阪、中村金藏座、「信仰記」に東吉、「桂川」に長右衞門。九月、「天竺德兵衞」に□□六郎、「反魂香」に吃又平。十一月、京都、山下秀次郎座、「南枝英」に正成。「道中双六」に伊達新左衞門。

寛政八年正月、「達大礎」に杉本甚内、宇治兵部助、森唐意軒、大福屋惣六。三月、大阪、中山一德座、「黄金鷄」に□□と百□太郎助。「夏祭」に一寸德兵衞。同、北新地芝居、「千本櫻」に川越太郎と梶川平三、「お染久松」に山家屋清兵衞。八月、再び中山座、「伊勢物語」に和田作、荒川宿禰、紀有常。九月、「八百萬盟曾我」に祐信、重忠、戸倉十内と十一月、藤川八藏座、「旭□□」に□貫六六と松の尾内記。

此の時、彼れは名を改めて鯉三郎といへり。蓋し、夢に三つの鯉魚を見たるによれりといふ。

寛政九年正月、「双蝶々」に治部右衛門、南與平。二月、「鳴門白浪」に萩塚鳴戸之助。五月、「淺草靈驗記」に大川友右衛門。七月、「雁金小紋」に若徒木曾兵衛。北新地芝居。「桂川」に長右衛門、「褄重」に木津勘助。上京して同上。十一月、大阪、北新地芝居、「千手助太刀」に石井兵衛と三木十左衛門。

寛政十年正月、京都、嵐熊之助座、「櫻大嗽」(藻屑三平)にあたけ甚平。三月、「増補時頼記」(鎌倉山)に佐野源左衛門と秋田城之助。八月、大阪、山下龜松座、「國姓爺」に甘輝、「今織上布」に三五兵衛、「忠臣講釋」に十太郎と由良之助。上京、「二王門」若木當馬之丞・「戀飛脚」に忠兵衛、「伊勢物語」に荒川宿禰と紀有常。十一月、大阪、山下龜松座、「源氏魁」に竹の下孫六實は景清、「鉢木」に時頼入道。

寛政十一年正月、藤川勝太郎座「會稽山」に松田覺左衛門と岩倉競。上京して、「千手助太刀」に石井兵衛、鳥井彌十郎、三木十左衛門。七月、「會稽山」に同上。十一月、休業。

寛政十二年春、伊勢へ下る。七月、上京、「大塔宮」に右馬之頭。「巖流島」に月本武者之助。八月、「大内鑑」に蘆屋道滿。「加賀見山」に多賀の大將と鳥井又助。「狹間合戰」に久吉。十一月、京都、片岡愛之助座、「薄雪」に來國行と園部兵衛。下阪「加賀見山」に安田大領と安田庄司。

享和元年正月、上京、「棧物語」に老女淺茅と吉川左近。「繪本忠臣藏」に大星宮内、石堂、由良之助。「金花山」に月本圓秋、「戀關札」に伊達專左衛門、「磯馴松」にむれの兵衛と太郎七。九月、「躄仇討」に佐々成政、九十九新左衛門、後室寄浪。十一月、京都、嵐三吉座、「新年顔見世」に中間その助實は金賣吉次。

享和二年正月、「楊柳櫻」に結城守と渡會要助。「廓大通」に今木傳七。三月、下阪、「[illegible]」に同じ、「[illegible]」に[illegible]郎七とむれの兵衞。八月、角の座、「花發船」に三輪左衞門、小早川帶刀（男無間の所作）。九月、「忠臣講釋」に由良之助と十太郎。十月、「巖流島」に月本武者之助、「廓大通」に傳七。

この武者之助と傳七とは彼れが一世一代の興行にして、（當時五十八歳）、これきり舞臺を退き、南部屋孫兵衞と改名し、京都祇園町に白粉の店を營みしが、僅かに一年を經て再び俳優として現はれたり。

文化元年三月、大阪、中の座、「風俗文選」に百枝藏之助。四月、「戀女房」に左内、「五大力」に源五兵衞。五月、「千手助太刀」に兵衞と十左衞門。八月、「伊勢物語」に有常と奴常平、「歌祭文」に久作。九月、「大内鑑」に左近太郎。十月、「物[illegible]太郎」に名古屋山三。十一月、京都、藤川友三郎座、「扇勝閧」に五大三郎。

文化二年正月、「都吉野」に細川政元、門番茂右衞門、增田左京。三月、「妹脊山」大判事、「廓大通」に傳七、これより名古屋へ下る。七月、歸京、「薄雪」に兵衞と五平治。「黒船」に濱地源左衞門、「巖流島」に武者之助。十一月、龜屋粂之丞座、「川中島」に信玄と直江山城。

文化三年正月、大阪、角の座、「いろは歌」に判官と由良之助、夏、京都、北側芝居、「一の谷」に[illegible]、六彌太、「[illegible]」「[illegible]」に[illegible]久、「五大力」に源五兵衞。九月、大阪、角の座、「秋葉權現」に月本圓秋。

文化四年正月、京都、西側芝居、「いろは歌」に判官と由良之助。三月、「双蝶々」に治部右衞門と十次兵衞。

此の興行中、中風病に罹りて舞臺を退きしが、文化六年三月四日、終に六十五歳にて歿しき。

新七が得意の藝は謂はゆる和實にありき。例へば、「加賀見山」の安田大領と鳥井又助の如き、「黃金鱐」の齋藤龍興の如き、「桂川」の長右衞門の如き、「五大力」の源五兵衞の如き、「廓大通」の今木傳七の如き、孰れも彼れによりて始めて演ぜられ、而も彼れが成功せる藝なりき。玆に齋藤龍興の役柄を敍せんに、

齋藤龍興ながら非人姿にて乘物に乘り出で、身を隱し、金助甚内と出合ひ、互に狂歌を笠に書いて噺し合ふを立聞いて、同く一首をのべて二人の手裏劍をめんつに受けし幕も甚よく、二つ目、龍興にて我が家の寶物の短册を自ら隱し、二人の曲者の姿を變へ騙りに來るを騷がず相手になりし所……。去る年、加賀見山にて殿となりてから、殿の仕樣は手に入つた仕打にて、分けて此度はゆつたりとして……。されば只只仔細らしさなく、彼のざつく〳〵した所が能うはまつて……何はともあれ、二人にさして跡へよつて、せぬやうに見えて、其の中に仕打があつて賴もしいやうな……。次ぎに我はもと誠の龍興ならず、家老山形道閑が子にて、うぶ屋にて取替へ置いて成長せし事を覺り、養母が種を殘さんと多くの娘を置くを取敢ず女きらひとなり、誠の龍興を尋出さんと思ふうち、南宮左中將となり入込みし高坂甚内こそ實の若殿と思ふより、娘のうち關屋といふ女こそ男嫌ひなるが心に叶ひ、我が親の惡事を明かし、實の若殿に家を讓り、今宵腹を切つて死なん事を物語り、介錯を言付くるに、彼の關屋、我が守袋より去狀を出し、誠は上杉の娘にて龍興と言號ながら、離緣せられしゆゑ、操を立て、此の館へ姬を連れてはした奉公に入込み居たる事を語り、元の姬となり、祝言の粧ひして給はれと願ひしに、承知とばかり答へて娘を呼び、寢所の用意せよと言付け、……後、親道閑に惡事なる事を言聞かせ、甚内を呼出して家の納まりをつけ置き、親に詰腹切らせ、我れも腹切り、姬に介錯さする幕。（天明三年、「役者三部敎」）

次ぎに薩摩源五兵衞の役は、

藝子菊野に頼まれ、據ところなく色なりと三五兵衛にいひて、其の告めにて浪人し、借座敷に乏き住居して、家主が懇切な意に、菊野が心底つくすな感じ、後、心變りと思ひ切殺し、若黨八右衛門が意見を感ずるまで、成程、田舎そだちの物がたい武士といふ場な

よくしられた。(寛政七年、「役者人相鏡」)

一面には物堅くして、又一面には和かく可笑きが彼れの得意とする所なりしなり。されば、三五郎の如く純粋の和事は彼れの長所にあらざりき。例へば寛政十一年の「役者初相場」に彼れの鮨屋忠兵衛を貶して、

これは御持合に合ひかねる役にて、何う見ても分別のある人がらゆゑ、内の場はしつくりとしてよけれども、茶屋場にては、八右衛門が悪口を聞いて封印の金を切るような人とは見えませぬ。

といへり。要するに、彼れの扮せる人物は必ず思慮に富み又常識を具へたりしなり。又彼れの體格は小柄にして而も人品に優れたりき。前に引ける龍興の評に「殿様は手に入つた仕打」といひ、天明八年の「役者五極成就」に、

此の五六年はとかく、殿様事をして、殿様に成りさへすれば狂言を當てらるゝ。

といひ、同く彼れが若狭之助を評して、

源左衛門(佐野)は旗本にては人品よすぎしが、若狭之助は大名だけ役もしつかりはまり……。

といへる、彼れが人品は常に武士よりも大名に扮するに適せしなり。

斯くの如く、和實に其の名聲を博せる彼れは、次第に晩年に至り、師菊五郎が得意とせる武道實事を演じて成功したり。即ち菊五郎が當り藝なりし由良之助佐野源左衞門、秋田城之助、等の役を亦新七が當り藝として屢之を繰返したり。寛政五年の「役者觀進角力」に曰く、

中興、さばき事のお頭は中村吉右衞門と古中村四郎五郎にてありし所、其の後は古舎柳（二世中山新九郎）、素桐（二世三保木儀左衞門）芙雀（新七）、三人負けず劣らずの立者なりしが、孰も故人となられしゆゑ、當時には尾上氏に留めました。何さま、さつく〳〵として一派立てたる武道にも其の中に和かみを兼ぬ……。

云々と。謂はゆる武道のうちに和かみを兼ねたるが師菊五郎以外に一機軸を出だせる彼れが特色なりといふべし。されば、彼れの由良之助は七段目の茶屋場が餘りに意氣過ぎて遊び馴れたりといひ、又前にいへる源五兵衞を、雛助のと比較して、色氣のある點に於て彼れに此れの優りたりといひ、謂はゆる「和かみ」より生せる彼れが藝の一長一短なりき。尙は、彼の「黄金鯱」の龍興の如き、「双葉藏」の若狹之助の如き、屢猥褻なる科白によりて喝采を博せしは亦其の弊なりき。

彼れは亦音調にも秀でたりき。安永八年の「役者互先」に

場によつて、向うの調子よりは高くて合はぬやうに見えるゆゑ、少し騒がしう見えるが疵。

といへるは、彼れの音聲の高きに過ぐるを貶せるなり。次いで安永八年の「役者五極成就」には、

あまり性根事もなく、小細工なく、持前のさつく〳〵ばかりゆゑ、調子と恰好の持合にて當時の立役



新七の「齋藤龍興」（「旦生言語備」より）

といへり。謂はゆる調子によりて彼れの技藝の引立ちたるを見るべし。

總じて、彼れの藝風は前に引ける諸評に「さつく〳〵」と言へる如く、淡泊にして粘氣なく、誇大の科白を避けて自然を旨とせるにありたり。前の齋藤龍興の評に「二人にさして跡へよつて、せぬやうに見えて、其の中に仕打があり」といひ、彼の「五極成就」の評に「性根事なく、小細工なく〳〵」といひ、同く此の意味なり。傳へ言ふ、天明五年、彼れが亡師菊五郎の追善として「忠臣藏」を演ぜし時、彼れが「由良之助役は近年追ひ〳〵工夫思入を付けての仕内ゆゑ、此の度は何もせず、正本の通りに勤めん」とありしを、眠獅（雛助）、それも然るべきか、然し忠臣藏、狂言毎に大當

りなるは、役々色々と物好きあるゆゑ、此の度は何うするぞといふて諸見物群集する事なれば、矢張新意を加へる方も然るべしと言ひしとぞ。新七が藝に小細工を忌みしは此の逸話によりても明かなり。

當時、彼れが演ぜし由良之助の型を「いろは評林」によりて記さんに、

初日には、四つ目、駈付の場、大小とも下緒を口にくはへ、袴を結び〳〵の出端、ちと齒ぶしの強き大星なるとの評。鹽谷切腹の間、上使もあれば大いに平伏して居ればならぬ所なるが、ちと頭が高かつたなどとの沙汰もありし。鹽谷死骸を乗物へ移し、燒香をする場に、自身最初に香をつぐはよけれども、一炷して又一炷する時、いたゞきて乗物へすぢかひにせられしは、顔世より先きに燒香するやうに見えて氣の毒なるもの。夫より顔世に燒香なされといふ時、御燒香といふて舞臺をとんと叩かれたが、是は顔世泣しみ付てゐる故、氣を付ん爲か知られども、ちとげうさんにて卑劣に見えたり。其外諸士大勢に燒香させたり、愁傷を隱さんとて鼻をかみし事もあれど、眠獅（雛助）が石堂にて同じ思ひ入ありし故か、後にはやめたり。扨かけ付の出端も一通りにて出で、燒香も顔世一人ばかりにて何事もせず、思ひ入事を殘らず拔かれしゆゑ、甚見よくありしが、夫だけ淋しきゆゑ、場の請はさもなく、是にて最初聞傳へたる芙雀眠獅の談話（前に記せし如く新七が正本の通り勤めんといひしを雛助が反對せし事）相當せり。城渡しの跡、諸士憤るを制せんためわざと大聲上て我いふ事を用ひぬと、花道にて子供のする様にじだんだを踏まれしが、是れも餘り拙くありしが、後にせりふばかり早口にいふて騒がれなんだもよし。

七つ目、祇園町の場、平右衛門にあふて扇をつかひ〳〵居眠り、扇を落しながら肱が張つてあつたが、是は合點の行ぬ仕やう。全體ちと遊びやうが手に入、粹過て見へたり。おかるを身受せんといふ前、すこし濡れ事を用ひ、だき付ての仕様は、身受せうといふ

うつりよし。大詰、加茂川で水雑炊を食らはせといふせりふの時、水の字を分けて、加茂川で水くらはせと平右衛門に合點の行様にいはれしは耳立てよろしからず。諸人が知りぬいてゐる事なれば、只やすらかにせりふないひたい所なるを、平右衛門へアといふて顔にて幕を切、由良之助顔を横へなして平右衛門が幕を切りしは、眠獅おとなげない仕様、是はやはり由良之助が幕を切られば上合宜しからず。

九つ目、本藏切腹を見届け、大丈夫といふて、夫を是にて見せ申さんと、庭におりるはちと双金が裏へ廻りし氣持なり。[illegible]の五輪を見せる時、本藏に突込ありし鎗の柄先を持そへ、後むかすはきめ細かに氣が付過て面白からず、すべて是に限らず、歌舞伎狂言といふ場を取外さぬ様にして、こまごましたる性根事はやめたきものなり。こも僧姿にならんとして、定紋付の衣裳に氣が付、上着をぬいで下着の上へ袈裟かけて尺八を吹き、淨瑠璃文句に合し花道へはいるは、見物大に悦びたれど、餘り人形の眞似過てうつとしうありし。

十段目、大切まで、すべて師匠梅幸の趣をよく呑込み勤められたり。

而して、此れと同時に、彼れは寫實の藝風を好みたりき。寛政九年の「役者桔槔」に彼れの橋本治部右衛門を評して、

此の人の持前で、何をせられても當風に粋めいて、役によりても締まりかねる事もあり。

といへる如く、彼れは歴史時代の人物に扮しても、常に現在の風俗を模倣したりしなり。又彼の若狹之助の如き大名に扮して、好評なりしも、一つは彼れが江戸に生まれて武家の風俗を目撃せるを[illegible]毫に寫

せるによれりといふ。

彼れは又、殘酷陰忍なる老女に扮して屢喝采を得たり。例へば、「黄金鯱」の金助はむらじ（婦人の生膽を取る仕打）の如き、「楊柳櫻」の老女八雲の如き、「棧物語」の淺茅の如き、此れなり。然れども、敵役は彼れの能くする所にあらざりき。例へば「菅原」の松王に扮して「憎み薄く、始めから實らしく」と評せられたる其の全豹を知るべし。

彼れの性癖は餘りに自尊すること甚しく、隨つて屢同僚と隙を生じ、又世間の彼れに對する同情も薄かりきといふ。安永四年の「役者藝雛形」に、

折ふしはいろ／＼よからぬ取沙汰でありますゆゑ、贔負たちの御心遣ひ。とかく愛敬なおとりなされて、男女とも一統に受けのよいやうになされよ。

といひ、翌五年の「役者男風流」にも、

とかく、見物が鏡なれば、立者顏をせずと、隨分愛敬を取りたまへ。藝が上れば自然とはたから敬ひますれば、其の心得がかんじん／＼。

といへるなど、壯時より此の缺點を有せりと見ゆ。現に彼れが明和二年、始めて江戸より大阪へ下りし時、「江戸氣性にて高上なる流義、役者といふ者は諸侯貴人の御伽にも召出さるゝ者なりとて、東都の風

儀を直に大阪にて取出し、町家の諸歴々といへども。脚下に見下す形勢、町中の諸人甚だ彼れを憎んで、顔見世の時、手打連中・新七ばかりには手を打たず、」殊に濱の連中最も彼れを憎みし餘り、富豪鴻池の主人なりと稱して竊かに新七を招き、彼れを歴々の武士に扮せしめて遊廓に豪遊し、又賄金を彼れに與へて纏頭となさしめ、興酣なる時、悉く散じ去りければ、新七ひとり殘されて賄金つかひの嫌疑を蒙り、且つ酒宴の費用を請求されて非常なる恥辱を受けたりといふ。又晩年にも、坂東彦三郎と役割の上より確執を生じて其の一座を脱したる如き、彼れも亦藝術家に往々免れがたき唯我獨尊の病に陷れるなりき。

彼れが白廻しは「舌を卷しなに甲聲を出し、口を大概に明き、白の間は向ふへ附込み、一つ〱白を切つて」いへりといふ。一代に盛名を擅まにせしに拘はらず、其の門下餘りに著はれず。二世新七の名は門人德松によりて襲がれしが早世せり。

第四章　京阪に於ける其の他の立役と敵役

二世三保木儀左衛門――彼れが藝風。――坂東岩五郎――其の藝風。――二世山村儀右衛門――彼れが藝風。

●●●●●●●●●●●

二世三保木儀左衛門（高砂屋素桐、享保十六―寛政元）は前期に於て敵役として知られたる今村七三郎と同く、三保木七太

郎の門下より出で、初め三保木富士松といひ、京都の宮芝居に出でたり。半ごろ暫く舞臺を退きしが、寶暦七年十一月、京都の中村粂太郎座へ立役として現はれ、此れを彼れが大劇場に出でたる最初とす。寶暦九年十一月より富士松三十郎と改め、翌十年十一月、始めて大阪の姉川新四郎座へ下りしが、當時、同座に松山三十郎の出勤せしかば、更に三の字を改めて山十郎といへり。其の後、京都に歸りしが、明和五年、再び大阪に下り、「青柳硯」の頼風、「腰越狀」の義經、「お染久松」の油屋太三郎に好評を博したり。同七年、角の座にて座元を勤めしが、翌年、更に上京し、安永五年十一月に至り、舊師七太郎が祖父の名を襲ぎて、終に三保木儀左衛門と稱しき。

安永八年正月、大阪の中の座にて、「唐土日本往古圖」に小野左衛門と淸姫の二役を勤め、「道成寺」の所作事を中村富十郎と競爭的に演じて彼れを壓倒したり。次いで、新作「三代記」に佐々目四郎と百姓藤三とに扮して喝采を博し、同九年、「磯馴松」にむれの兵衛となり、天明二年、「連歌茶屋」に人形屋幸右衛門と玄蕃に扮し、當時、隣座と同じ狂言の競爭なりしが、終に敵の敗北に歸したりき。次ぎに「實語敎」に兒秀若と小田留左衛門、大切に「七變化」の所作事を演じて成功し、同三年、「忠臣藏」に平右衛門、本藏、石堂の三役、「布引」の實盛、「伊賀越」の政右衛門、「先代萩」の政岡に當りを取り、同四年には、「忠臣藏」の判官と戸無瀨、同五年、「腰越狀」の泉の三郎、同七年、「伊賀越」に内記と金助、新作「彥山」に友平と傳

五右衛門、寛政元年、「三十石」に花満憲法など孰れも好評を博せしが、同年七月、「漢人韓文」に千島守に扮せるを最終の舞臺とし、九月十五日に發したり。

彼れの藝風は、「役者綱目」に其の富士松三十郎時代を評して、

近年は實事をやめて、やつし形になられしが、とかく實事のかたぎ當り多し所作事は自由になり、花々しい當りをとり給へ。

といひ、安永八年の「役者丹光」に、

捌役方、落付、聲よく、姿よく、きつう見よい千旦よいぞ。

といひ、安永八年の「役者男紫花」に

狂言の上りめと落付樣は大に感心いたしましたが、梅幸丈似せるにても有まいが、始終居ぐりふ共、似るやうに聞ゆる。

といへり。即ち彼れは武道實事を最も得意とし、態度の沈着なるに優り、菊五郎の如く居ながらに自を



二世三保木儀左衛門（「旦生言語備」より）

いふを特色とせしなり。尚ほ其の體格小兵なりしといふ。前に述べし如く、彼れの當り藝として「忠臣藏」の由良之助と本藏、「伊賀越」の政右衛門、「布引」の實盛、等の見ゆるは、其の實事の例とすべく、又「先代萩」の政岡、「道成寺」の清姫等に扮して好評なりしは、彼れが女方として、一面には實事に成功せると共に、一面には所作事に成功せるを見るべし。

坂東岩五郎（阿波屋岩子、享保十七―寛政七）は兄を坂東國五郎といひ、此の國五郎は江戸の俳優たりし坂東又九郎の女婿たり。岩五郎は、寶暦六年十一月（廿五歳）、大阪の大松曲助座へ敵役として現はれしを其の大劇場に於ける初舞臺とし、をかしみを兼ねたる仕打に好評を得たり。同九年十一月、雷の女房稲妻に扮し、夫の姫と祝言するを見て嫉妬を起し、「兄に國五郎、弟に岩ごろ〳〵といふ子までなしたる仲」との白に喝采を博し、次第に昇進して、寶暦十二年、「上上吉」に推され、始終大阪に土着せり。

安永二年、中村歌右衛門座にて「薄雪」に大膳、同五年、三桝松之丞座にて「忠臣藏」に師直、藥師寺、了竹、「夏祭」に義平、などに好評を取り、次いで、「戀女房」に官太夫、「綴錦」に宇太右衛門、「菅原」に兵衛と時平、「三代記」に時政等その當り藝たり。天明二年、中の座にて「連歌茶屋」に伊東元右衛門に扮し、彌助を殺し、伊織を返討にする憎き仕打を其の一代の傑作とし、後に至るまで此の狂言に其の藝風を傳へたり。翌三年、同座にて、「忠臣藏」に九太夫、「伊勢物語」にどらの如八、同五年、角の座にて、「出入湊」

に獄門庄兵衛、同七年、中の座にて「彦山」に杣斧右衛門、同九年、同座、「薄雪」に謡川、寛政二年、「千手護助劔」に榊原兵次、其の他、「伊賀越」に櫻田林左衛門、火車小次兵衛、「信仰記」の風呂屋お爪、どすの喜藏など彼れが得意の藝なり。後に角の座の頭取を勤めしが、寛政七年八月十七日、六十四歳にして死せり。



坂東岩五郎（「且生書語備」より）

彼れの名聲は兄國五郎を凌ぎしのみならず、彼れの養子坂東重太郎は後の文化文政時代に於ける名優なりき。「役者綱目」に其の藝風を許して曰く、

第一、大がらにてかつぷくよく、口上事取なし、重話敵の侍などにしては至極にくう、別して可笑い事をさせては腹の當替するやう成事は成ぬ……。

と。彼れは憎しみと滑稽とに長じ、同く敵役として武士に扮して最も適合せり。

二世山村儀右衛門（大坂屋五登、元文元―享和三）は大阪濱芝居の出身にして龜屋喜吉といひ、明和六年（三十四歲）十一月、山村光藏と改めて大阪の中山文七座へ出でたり。此れ彼れが大劇場に現はれたる最初なりき。然るに同九年より再び中芝居に投じて大劇場に見えざりしが、安永五年（四十一歲）十一月、山本儀右衛門と改めて、京都の松山小源次座へ出でたり。これを同地に於ける初舞臺とす。翌六年正月、同座にて「伊賀越」に又五郎、同母鳴見、及び俗醫に扮したり。此三役とも先輩淺尾爲十郎が當り藝なるを、當時の評者は寧ろ爲十郎の纖巧なるよりも儀右衛門のを褒揚せり。同七年春、名古屋へ下りしが、秋、再び上京して梶原平三に扮し、次で「八百屋」に老婆となりて好評を博しき。同八年十一月、山本を改めて山村儀右衛門と稱し、大阪の芳澤いろは座へ下りたり。蓋し、山村儀右衛門は彼の以前既に其の名あり、彼れは其の門葉たりし緣故により第二世の名を襲げるなり。同時、「忠臣藏」に九太夫と師直とに扮して喝采を得、次いで、天明元年十一月、京都、中山猪八座へ上り、翌二年正月「殿下茶屋」に安達三郎右衛門と彌助とを勤めしが、是れも「伊賀越」と同く爲十郎の當り藝なるを、爲十郎以外の妙所なりと稱せられ、只彼れは爲十郎以上の新意匠によりて演せしを、此れは餘りに爲十郎を模倣したりと非難せられたり。同四年、同座、「反魂香」に土佐將監、同五年、嵐秀之助座、「菅原」に白太夫に扮し、次いで大阪に下り、寛政三年、「信仰記」に山口九郎次郎、「千本櫻」に權太、同四年、「菜種御供」に土師兵衛。同五年、「楊柳櫻」

に飛騨守と淀屋手代惣兵衛、同六年、「五大力」に勝田八右衛門、「忠臣藏」に師直と與一兵衛、同七年、「忠



二世山村儀右衛門（「旦生言語備」より）

臣講釋」に宅兵衛と喜内に扮せしが、同八年、病氣に罹りてより、技藝漸く衰へ、享和三年正月五日、終に六十八歳を以て大阪に歿せり。

彼れは前に記せし如く久しく中芝居に在り、壯時を過ぎて始て大劇場に入りしに拘らず、當時の劇壇に實惡として重んぜられしは其の伎倆の凡庸にあらざりしを見るべし。諸評判記の彼れが藝風を評する者曰く、「大場にして手強し」、曰く、「ちやりなし、澁とく、何役でもそつけず落付いてする」、曰く、「歌右衛門代りになるは此の人」、曰く、「實をおもにして花うすし」。即ち、彼れは諧謔なく、滑稽なく、沈着に、熱心に、大惡漢大兇徒に扮するに適せり。而して其の缺は質に

過ぎて文に足らざりき。彼れが爲十郎と同じき役に扮して、或ひは優り或ひは劣れるは此れが爲めにして、且つ其の歌右衛門の後繼者として當時の評家に仰望せられしも此れが故なりき。只彼れの歌右衛門に及ばざりしは人品の揚がらざりし事なり、又人品の揚がらざりしゆゑに、時代事よりは世話事を得意とせしのみならず、晩年には實惡の憎みを捨てゝ實事の老人に扮するを得意とし、同時に平坦と單調との非難を免れざりき。

第五章　中村仲藏と四世松本幸四郎

中村仲藏――彼れが幼時――生涯の一大危機――藝氣ちがひ――「定九郎」――「釣狐の工藤」――「惣賣」――「關扉」――彼れが技藝――彼れが缺點――私人としての彼れ。

四世松本幸四郎――舞臺上の閲歴――彼れが藝品――彼れの藝談。

京阪に於て、中村歌右衛門と淺尾爲十郎とが實惡として重きを置かれたると殆ど同時に、江戸に於て、一は實惡として、一は立役として活動せるを仲藏及び幸四郎の二人とす。

●●●●中村仲藏（榮屋秀鶴、元文元―寛政二）は齋藤某といふ浪人の子にして、江戸の深川小松町に生まれ、幼名を萬藏といへり。幼にして父母に別かれ、五歳の時、和泉町に踊の師匠たりし志賀山お俊に養はる。

〔註〕以上專ら彼れが自傳「雪月花寐物語」に據れり。三世仲藏の「手前味噌」には、平井村在の渡守が妹の子にして、お俊が平井の聖

天へ參詣の途にて渡守より貰ひしといひ、「歌舞伎年代記」には、父なる者妻に先立たれ、困窮して貰屋町河岸の居酒屋の主に頼み其の世話にてお俊に養はるといへり。又親の死せると養子となりし年につき、「寐物語」には兩親に別かれて居酒屋に養はれ、四つの時、志賀山へ養はれしといひ、更に別項には、五歳の時父母に別かると あり。「壽阿彌筆記」にも養子となりし時、五歳なりしとあるを以て、暫く之に隨ふ。

蓋し、養母お俊の冐しゝ志賀山の家名は、元祖萬作より出でゝ、中村座の振付を勤め、劇踊道にかけては江戸隨一の名家にして、お俊は彼の萬作の後を襲ぎし初世中村傳次郎が實妹たり。且つ其の夫は中山小十郎といふ唄うたひにて、代々長唄の名人として稱せられ、小十郎は其の第五世を襲ぎて頗る音曲の譽れありき。仲藏は斯くの如く父母共に優れし藝術家たる家庭に養はれ、早くより其の薫陶を受けたりき。彼れが自傳「雪月花寐物語」に幼時を敍して曰く、

此處へ、木綿袷、上下染分の櫻に馬の總模樣の振袖着て來たとさ。さあ、病身だから嫌だとき。親が煩いから頼むとき、小僧で貰つてやらうと貰はれて、七つの年、脾肝とやらで死んだとさ。かゝ樣が可愛がつて氣海に灸をすへたとさ。夫から生きて、何時の間にか子になつたとさ。大用小用毎晩々々した、其の時、役に立たぬ奴とて着る物を脱がせ、木綿の袷に着替へたとき、其の袷が、やで〳〵、きつうい嫌ひ。わるい事をすると袷が出ておれを脅すゆゑ、袷も出ると、それは一縮み。こんなこわい事はなかつた。さあ、それから七つの年から踊を教つた。不器用で、覺えがわるくて、何でも尻へぬける、其のたび〳〵はこわい物が出た。觔でした、ホウと光る小刀が出てのう、おれが股をまくつてシッペイをあてるとの、股へ早く疵が出來て痛い。小刀が出るとおれが尻を

まくつて切るよ。其の時は死ぬると思つた。佐十郎の弟子鶴藏といふがあつた。おれと同じやうに小刀針をくつた。跡がめゝずのやうに腫れてのう、毎日々々、互ひに今日は何本くつたと行つて見るとのう、血がにぢんであるよ。それから駈落をするといふから、おれも行かうといふと、かゝ樣が聞いての、鶴藏はほんに田舍へやられた。おれは彼の袷を出して着せた。其の十の年（延享二年）だから、袷が小さくなり、手や足や長くなつて、いつそ見つともないから恥かしくなつた。十月寒い所を逐出して、門に立つてはみんなが來て笑つてならぬから、內へ入らうとすると、鯨や小刀が列べてあるから、內へは入れず、友達は來て笑ふ、こんな嫌な事はない。思出すとこわい事〳〵。かゝ樣がお薦を持つて來て、おれを包んで川へ投込むと、おれをお薦に包んだよ。旦那（俳優二世中村傳九郎）のかゝ樣おもん樣が湯に行くとて、おれが前を通りなさる。見附けての、おもん樣〳〵と呼んだれば、來て見ての、かゝ樣に詫をして、湯に連れて行つて洗つての、着物を取りに遣つて、太夫（傳九郎の實父、中村座主、六世中村勘三郎）へ連れて歸つて、袷を疊んで、これから、言ふ事を聽かぬと、おれが是を着せるから言ふ事を聽けとて、たんと菓子をくれて、そして抱いて寢なさつた。內へ歸るとこわいから、稽古ばかりに歸りて、朝も夕も太夫元樣に居て、旦那の給仕をして、どこへも友達のやうに附いて行つて踊を踊る。みんながおれを譽める。

是れより先き、彼れは七歲にして彼の二世傳九郎（當時勝十郎といへり）の門に入り、中村市十郎と稱し、幾もなく中村中藏と改めたり。蓋し、養父小十郎は長唄を敎へて己が業を繼がしめんと欲せしも、不器用にして記憶わるく、且つ音聲の太くして長唄に適せず、眼鼻立ばかりは人にすぐれたれば、役者にせ

んとて、二世傳次郎に踊を習ひ、終に其の弟子となりき。而して師家の愛みは前に叙せし如くなりしのみならず、同じく延享二年十一月の事なりき。

旦那が名を變へて中村傳九郎になつて、鬢が薄くなつた。おれが向ひに見て居たれば、旦那が齒を剝出して睨んだ。をかしいから笑つた。旦那がをかしいかと言ひなすつた。をかしいと言つたら、此處へ來いと言ひなさつたから、行つたら、氷砂糖をくれての、おれのやうに睨めと言ひなさつたから、齒を出して睨んだら、いゝ子とて氷砂糖をくれなさつた。

即ち、同年同月、十歳にして始めて中村座の舞臺に出で、師傳九郎が「奴丹前」の相手として供の奴に扮しき。自傳に曰く、

丹前の顔見世、吉三郎樣の奴になり、おれは上下で出た。其時、口上があつての、旦那（傳九郎）吉三郎さんと一所に花道へ入つた。其の時、旦那と花道で睨んだよ。毎日々々、氷砂糖くんなさつた。おもん樣と勘三郎樣が、裏革に赤地に雲龍と下に立つた鶴と若松の模樣、大きな鶴が三つある羽織と着物を出しての、又袷を出しての、これがよいか、わるいか、どちらがよいと言ひなさつた。赤いべゞがよいと言つたれば、踊を善く踊るなら是れをやらうと言ひなさるから、踊りませうと言つたれば、着物と袷をおれに持たせて、かゝ樣の處へ行つて咄せとのこと。歸つて咄したれば、おれを捕へて藏の中で大きな瓮を据えて、どちらがよい〳〵と責めるから、赤いがよい〳〵と言つたれば、踊を踊らぬか、踊るか、踊りませう〳〵と言つたれば、嘘をつくとて口へ灸を据へる所へ、伯父樣が來て詫言したから、免されて、赤い着物をきせて、太夫元へ行つて、踊らうと申しますから、是れを着せました、此の上わろく踊ると、又袷を着せて川へぶち込みますとて、袷を大事に持つて歸りなさつた。

此の興行中、一萬丸を勤めし才藏といふ子役が中途より病氣に罹りて休業せしかば、彼れは其の代りをも勤めたり。初舞臺にて代り役までを勤めしは、如何に彼れが師家に愛せられしかを知るべし。當時、藤川平九郎が始めて大阪より下りて、同座に股野五郎に扮せしが、其の非人姿にて出でしを子供心に怖ろしがりしかば、「こわがると役に立たぬ」とて樣々に賺されたりといふ。是れより子役として年々の興行に出勤し、其の家庭に於ても「いゝ着物が出來」「段々と手遊び殖え」居間さへ「二階へ出來」て、「少々わるきこと致し候ても叱り申さず」、又舞踊の修養あるだけ、起居やさしく容貌さへ麗しかりしかば、大名旗本などの邸に招かれて給仕をつとめ、其の得意なる舞の手振によりて座興を助けたり。斯く武人に接近すると共に、時としては彼等より能樂の指南を受け、傍ら劍術柔術をも學び、又、手習、鼓の稽古なども勵みたりき。

斯くて、寛延三年（十五歳）には子役より若衆方に進みしが、此のころ、彼れは本町の吉川某といふ富客に嬖幸せられ、寶暦元年（十六歳）、人形町に家屋を新築して其處に酒店と蕎店とを營ましめさせられ、尚ほ仲藏自身は吉川の家に寓して暫く舞臺を退きたり。翌二年七月に至り、彼れは吉川を辭して家に歸りしが、同時に彼れは六世杵屋喜三郎の女お岸を娶りき。既に踊の家元を母として、小唄の名人を父とせる彼れは更に三絃の名家を其の岳父とせるなりき。

〔頭〕 自傳「寐物語」に曰く「能、手習、鼓、又は武藝に隙なく、ぶら〳〵と病み申間に」と、彼れが俳優を中止せしは其等の爲めならん。又吉川の家を辭せしは、其の隣家の娘に思はれ、身の上安からざりし爲めなりきといひ、又是れより先き、人に勸められて悪所通ひを始め、吉川より委托せられし金を費消したる事ありといひ、此の後は本町へ往來せざりきといへれば、此の時、吉川の寵遇漸く衰へたりしならん。

彼れが結婚せる翌年三月、養父小十郎は歿しぬ。養母亦病に臥しければ、跡の弟子は次第に減じ、酒店も商賣に疎き藝人だけ日に荒みて、終に同年十二月、店を閉ぢて和泉町へ移轉したりしが、翌寶曆四年(十九歳)正月、母お俊も病死せりき。

〔頭〕「手前味噌」には小十郎の死後お俊は二世中村傳次郎に再嫁して、安永四年六月に死せりとあれど、茲には自傳に據れり。

斯くて妻お岸を二世お俊と改名せしめ、籠屋新道に稽古所を設けて志賀山の家名を繼がしめたり。お岸は杵屋の女とて三絃に堪能なりければ、これに地を彈かしめて自ら踊を指南し、尚ほ同年十一月より立役として再び中村座の舞臺に現はれたるが、此の前後こそ彼れが生涯の一大危機なりき。自傳に曰く、

顏見世より又々舞臺に出で申候。二度目の出なり。七兩給金なり。振付仕り申候。覺がはりにて目暈わしく、子供とは遊び申候て、誠に恥かき申候こと日々なり。右につき樂屋なぶり物となりぬ。三階板にて二十枚ならべては、[illegible]八枚程飛び申候なり。敎桿は葛籠に鏡を入れ、背負ひて飛び申候。二三枚にて轉げ申候。飽たち申候ト、宗齋とて四方より突ゐ申候なり。編笠責は三階の草履を笠の形に結付け、頭に着せて、腰につけ、二階三階、唄にて引通り申候なり。[illegible]

の身を長物（？）板に結付け、撞木となして時の鐘うち申候。越王勾踐と申候と、皆々膝を立て、其の前に丸の裸にてすはり申候て、皆々の前を嘗めまはり申候。嘗め不申候時は、乘しかゝり無理に嘗めさせ申候なり。女房もち候者が日々の責、身をくやみ、内へ歸り申候と、岸（妻）三日より血吐き申候病なり。

技藝には失敗し、同僚には侮辱せられ、而も、妻亦重き病に臥しぬ。彼れは絶望の餘り終に自殺を企つるに至りき。即ち

皆々（同僚）相手に致しなば皆（家族）の難儀と一圖に定め、兩國橋へ參り、四つ過ぎ水に入り申候所に、幼少の時より水稽古仕り申候ゆゑに、水心ありて自由ならず、裸にて入り申候故なり。一重候へば身に纏はれ申候と心付き、よき所に舟候を便りに岡へあがり、橋へ參り申候所に、番所の脇に單物御座候。よつて着申候處へ尋來り、見付け申候。よつて水に入る事もなりがたく、皆々案じ申候ゆゑに、出世を望み水垢離仕候とて詐り連立ち歸り申候。……それよりは舟も嫌ひに相成申候。たとへ舟に乘り候ても思出し、今はこわく御座候也。

偶彼れが子役時代よりの贔屓客として曾て能樂を彼れに授けし石井某の其の家を訪へるあり。仲藏の顏色の異なるを怪み、頻りに堪忍の大切なるを諭せしが、一たび自殺せんとして果さゞりし彼れは、尚ほ失望のあまり自暴自棄となり、且つ年少の客氣に驅られて博奕に耽り、又酒色に溺れたりき。

始めは附合ひにて候ひしが、段々と身が入り申候。□□年より廿四歲まで家内も亦荒れはて申候。そのうちに（博奕の爲め）命にもかゝり申候事三度御座候。

附合ひの爲めに酒を飲習ひ申候。酒の導く女郎買ひ、吉原へ皆々同道にて參り候處に、度々おろ（拒絶）され申候、

彼れが放蕩は忽ち家計の困難となりぬ。されば舞臺の暇なる時は内職に下駄を製りて生活の費を補へりといふ。然れども彼れは斯くの如き墮落の境より忽ちにして向上の勇氣を生じ、何時しか藝道執心を以て同人間に稱せらるゝに至り、終に當時の劇壇に泰斗たりし四世團十郎の認むる所となりぬ。三世仲藏の「手前味噌」に其の事情を記して曰く、

たま／＼申上げますの役でも勤むるが身の晴なれど、元來藝道執心の仲藏ゆゑ、一枚ばかりの書拔、こんなものはと神棚に投上げて碌々讀んでも見ず、内職の方へ身を入れて、芝居へは自分のある幕の時でなくては行かず。此の時も稽古に立ちしが、臺辭も覺えず。其の時の座頭は四代目市川團十郎にて、衣裳上下家老の拵へにて平舞臺へすまひ、高二重上手には上使、下手に腰元、上下に諸士居並ぶといふ大廣間へ、仲藏バタ／＼にて揚幕からでゝ申上げますの役なり。其の日初日ゆゑ、少し早めに揚幕へ來てキッカケを待ち、花道の附際へすまひ、申上げますといふ。團十郎、慌だしい、何事ぢやと問ふ。仲藏口上を言はうとせしが、書拔を能く見ぬゆゑ、臺辭を皆無忘れてグッとつまる。如何はせんと思ひしが、度胸よき仲藏なれば、何食はぬ顏にて、御免といひて團十郎の傍へツカ／＼と來り、耳へ口を寄せ、親方忘れましたといふ。團十郎、よし／＼と頷づき、これへ申せといふ。仲藏ハタ／＼と[illegible]して向うへ入る。此の件とん／＼拍子にゆきしゆゑ、落ちも來ず、穴も明けず、首尾よく幕になりたり。

これより、團十郎は彼れが機智を愛し、其の寵遇を受けて殆ど門下生を以て準せられ、謂はゆる「修行講」（四世團十郎の條を見よ）の席に列するの榮を得て愈技藝に苦心し、樂屋に於て「藝氣ちがひ」の綽名を

呼ばるゝに至れり。

斯くの如くして、寶暦七年（廿二歳）の頃より次第に世間の注目する處となりしが、寶暦八年十一月、市村座へ轉じ、翌十年十一月、再び中村座へ復して中藏を改めて始めて仲藏といひき。同十二年十一月より森田座に現はれ、更に明和元年十一月、市村座に轉じ、翌二年（三十歳）春、「三組曾我」に伊豆次郎（實惡）と法界坊とに扮して好評を博し、十一月、同座「二代源氏」に源頼親を勤め、此の頃より評判記に始めて「上々吉」として揭げられ、立役を廢して實惡を專門とし、特に色惡を得意とせり。

明和三年春、「相生曾我」に姉輪平次と範頼御臺朝日御前（女方祐成に戀慕の仕打）。九月、「忠臣藏」（菊五郎歸阪の名殘狂言）に定九郎。十一月、中村座、「凱陣兎武者」に平時連と劔の難兵衞。

此の「定九郎」は彼れが出世藝なりき。山崎街道の場にて、其れまでは、大百日の鬘に山岡頭巾をかぶり、大縞のどてらに丸ぐけの帶、紐付の股引、五枚がさねの草鞋を常例とし、全く時代物の山賊といふ扮裝なりしを、彼れは、別に意匠して、定九郎はもと家老の家に生まれ、主家沒落後、京畿に流浪し、酒色などに身を持崩し終に剽盜に墮落せるなれば、山賊よりも寧ろ浪人といふ心持なかるべからずと、即ち在來の扮裝を一變し、鬘は五分月代、衣裳は主家より拜領せる意にて、鷹の羽の紋つきし黑羽二重の小袖の古びたるを單衣にし、茶小倉の帶、朱鞘の大小にて、腕をまくり、尻をからげ、福草履を後帶に挾み、顏も

手足も眞白に塗り、雨に濡れし意にて、鬘より衣裳まで水を浴せ、破れし蛇の目の傘持ちて、花道より與一兵衛を呼びかけながら出で、さて本舞臺へ來りて袖を絞り、髮を撫づれば水の滴るに、見物聲を揚げて感ぜざる者なかりきといふ。蓋し、此の意匠は彼の四世團十郎の「修行講」に於て其のヒントを得たるなりき。「壽阿彌筆記」に曰く、

五代目團十郎、余に語りて曰く、亡父隨念（四世團十郎）弟子を集めて修行講といふを催す。各狂言の工夫を言はしめ其の好否を定む。秀鶴（仲藏）弟子にはあらざれども、隨念を信ずること師の如くなるゆゑ、これに列なる。或る會日、父に問うて曰く、五段目の定九郎を箇樣にしては如何。父の曰く、それは人の惡き武家の生寫といふものなり、團十郎は左はせぬものなりと言はれて止みしことあり。其後、秀鶴來りて、先日の定九郎、不用ならば吾に賜へ。余が曰く、聞かれし如く、父に制止せられし案じなり、余は一生すまじきなり、勝手につかひ玉へと言ひしより秀鶴の物となり、此の事猥に人に語り玉ふな、秀鶴の美を奪ふなりと言ひしなり。

「東の花勝見」には仲藏自身が作者西川純通に語りしとて、彼れが王子稲荷へ祈願しての歸るさに或る浪人を見て創意せりといひ、「手前味噌」には王子稲荷にあらで柳島の妙見なりといひ、又「江戸塵拾」には戸野村某といふ士人が熊谷堤にて己が家來と知らで追剝せしを舞臺に寫せりといへれど、要するに五世團十郎の意匠を假りしといふ前說最も信ずべく、此の意匠によりて途上に目擊せる浪人をモデルにせりと解釋する方可ならん。

彼れは、定九郎によりて舞臺に成功せると共に、同座の立作者たりし金井三笑の怒りを買ひたり、蓋し當時の狂言作者は後世の如く未だ俳優の奴隷たらず、脚本の選擇、俳優の役割より、道具、衣裳等、舞臺上の瑣事に至るまで一々これに干渉し、俳優の顧問官、また興行主の秘書官として畏敬せられき。特に三笑と相頡頏せし濠越二三次は既に老衰して昔日の盛名なく、後進ながら有望なりし櫻田治助は漸く見習の地位を脱して三枚目の作者たり、三笑が名譽と權力とは今や其の絶頂に於てありき。然るに、自信強き仲藏は定九郎の意匠を秘して三笑に何等の計る所なく、初日はわざと鬘をもかけず、樂屋着のまゝ揚幕へ赴き、衣裳は門弟をして密かに表口より運ばしめ、此處に扮裝をして舞臺へ現はれしかば、此の事いたく三笑の感情を害し、吾れを出し拔きたる仕方なりとて是れより彼れを憎みしが、右の如く、彼れは其の冬より中村座へ轉じ、同座には明和六年より六年の間、彼の櫻田治助が立作者たるあり。謂はゆる新進ながら有望なりし治助が、此の六年間彼れの爲めに作せる脚本は殆ど成功せざるものなかりき。これ彼れが爲めには僥倖なりしなり。

〔註〕「手前味噌」には、是れより先き「釣狐の工藤」の事にて彼れは三笑と隙を生じ、三笑之を含みて、わざと定九郎の如き端役を彼れに授け、秀鶴亦之に激して意匠を凝らせりとあれど、「釣狐の工藤」に扮せしは定九郎よりも後年の事なれば、此の說は誤まれり。

明和四年春、「大見世曾我」に近江小藤太。「千本櫻」に川越太郎。十一月、同座、「太平記」に竹林院公重（「暫」のうけ）と仁木太郎。

此の川越太郎及び定九郎が立者の演ずる役となりしは實に彼れより始まれり。

明和五年春、「曾我　章」に釜屋武兵衛。四月、「忠臣藏」に定九郎（二度目）、「夏祭」に義平次。十一月、同座、「末廣源氏」に長田太郎と三國の九郎（菊之丞と「石橋」のたて）。

明和六年春、「愛護稚松」に手塚太郎と唐犬十右衛門。十一月、同座、「榮鉢木」に山岡三郎（菊之丞と「紅葉狩」の所作）と宗尊親王。

明和七年春、「俤曾我」に工藤（釣狐の對面）。十一月、同座、「一陽的」に清盛と賴豪阿闍梨。

此の「釣狐の工藤」は彼れが第二の出世藝にして櫻田治助が作なりき。彼れは始めて工藤に扮するを以て、治助に計りて新工夫を案じ、祐經が「釣狐」の今様能を舞ひ、狐の假面をかぶりて兄弟に對面し、中途にて假面落つといふ趣向なりしが、果して世尚に投じ、大入を取りたり。

明和八年春、「曾我年代記」に工藤（二度目）と髭の意休（五世團十郎の助六）。「忠臣藏」に本藏と定九郎（三度目）。十一月、同座、「小野五文字」に炭燒惣五郎實は巨勢金岡と松風（所作事）。

此の「曾我年代記」の時、作者櫻田治助は工藤の役を四世團十郎に宛てんとし、座元の弟子にして且つ仲藏が師たりし傳九郎は、前年と同く仲藏に扮せしめんとし、治助は終に同座を退きて、二世中村重助代つて其の稿を全くし、仲藏が工藤に扮せしなり。蓋し治助が彼れを拒みしは先輩たる團十郎を重んじたればなるべく、幾もなく同座に復歸せり。

安永元年春、「曙草紙」に鬼王。秋より病氣にて休業。

安永二年三月、中村座、「和田酒盛」の二番目に太宰梅丸。再び病みて休業。十一月、同座、「御攝勸進帳」に惟明親王と伊達次郎。

安永三年春、「曾我雛形」に小藤太と朝比奈。四月、「戀女房」に鷺坂左内。「假名手本手習鏡」（「菅原」と「忠臣藏」とを混合せる新作）に松王、時平、師直、義平。九月、「双蝶々」に治郎右衛門と長五郎。十一月、「天磐戸」に烏帽子折大太郎實は文覺と鬼王、二番目に岡崎四郎。

此の年四月、四世團十郎を首めとして、其の子五世團十郎、門人四世松本幸四郎など、市川門下の俳優悉く袖を拂つて退座せしかば、仲藏は三世大谷廣次と共に治助を作者として能く孤壘を守りたるなりき。

安永四年正月、「青柳曾我」に工藤（三度目）、朝比奈、麻生松若、二番目に本田次郎と大日坊（荵賣の所作事）。八月、「出世太平記」に武智光秀。「車街道」に横山太郎。十一月、同座、「源氏贔屓」に左近狐、眞田文緘、爲朝、股野五郎（富本にて嵐三五郎と角力の所作事）。

此の「荵賣」の所作事も彼れが出世藝の一つなりき。當時、彼れは「娘道成寺」を演ずる希望を抱きしが、同曲は女方たる中村富十郎及び瀨川菊之丞等の家に興行權を有し、容易に之を侵すこと能はざりしかば、彼の治助が部下の作者たりし河竹新七の意匠により、大日坊の亡靈、荵賣の女にやつして所作をなす筋を脚色して演せしなり。蓋し、是れより先き、寶暦二年、市川雷藏が荵賣の女に扮し、「双面」の所作を演せる事あり、新七は其の案を奪胎せるなるが、同時代の四世團藏、亦仲藏についで此の「荵賣」を屢

演せし事は既に同優の條に述べたり。斯くて、仲藏は此の翌年春より始めて評判記に「上上吉」として掲げられき。(四十一歳)

安永五年春、「田種曾我」に五郎と物草太郎實は淸水坂の松若丸、夏、「廿四孝」に高坂彈正と橫藏、「忠臣藏」に由良之助と定九郎(四度目)。十一月、森田座、「矢聲太平記」に奴ばれ平實は畑六郎左衞門、二番目に燒酒賣五郎八實は長崎勘解由左衞門。

是れより前一年、久しく中村座の立作者たりし治助は同座を去つて、仲藏と敵たりし三笑之れに代り、定九郎以來相反目したりし兩者は九年ぶりにて一座に會せしが、意地わるき三笑は一種狡猾の手段によりて私かに其の怨に報いんとしたりき。即ち仲藏が常に橘守國の繪本を參考して服裝を工夫せるを奇貨とし、彼の「田種曾我」の五郎に扮せし時、彼れを勸めて「草摺曳」の場に本繪の形を模せしめ、朝比奈に扮せる四世團藏は袖の小さき素袍、顏に猿隈なく、鬚に「鎌つぼう」なく、仲藏の五郎も、肌に針金入の單衣を着け、手綱にて大太刀を肩に掛けて舞臺に現れしめければ果して大失敗に歸し、見物より「水虎の生捕」といふ冷評を受けたりといふ。されど、仲藏は此の失敗に懲りずして、次の由良之助には、國元より駈付けたりとの意にて、胸掛の上に麻上下を着けて出で、此れも散々の不評なりしのみならず、當時、市村座には四世團十郎が其の門下を率ゐて、一世一代の興行に大入を取り、仲藏の一座は此れが爲めに壓倒せられしなり。斯くて八年間、中村座に勤續せし彼れは、今や森田座に轉じて始めて座頭た

りき。

安永六年春、「小袖曾我」に景清、山田六郎實は京の次郎、二番目に清玄（「道成寺」の所作事）。四月、「志賀山越」（「伊賀越」の改作）に杣平、「千本櫻」に知盛、川越太郎、いがみの權太。秋、「奉納新田大明神」に十寄三郎左衛門と三庄太夫。十一月、市村座、「飛入狐」に尾形三郎と惡源太、切に角兵衛獅子實は厩の喜三太（富本の所作事）。

安永七年春、「高尾曾我」に工藤（四度目）。「伊賀越」に又五郎、同母鳴見、大内記。「戀女房」に一平と由留木左衛門。秋、俊寛。十一月、森田座、「伊達錦」に高弘親王（「暫」の受け）、貞任、善知鳥安方（常磐津の所作事）。

此の年八月、五世團十郎は中村座にて父の高弟たりし四世幸四郎と隙を生じ、同座を去りて、冬より森田座に轉ぜしかば、四世團十郎に對する恩義を忘れざりし仲藏は、彼れを扶けて同じく森田座に入りて再び座頭となりしなり。自傳に曰く、

森田座、二度目座頭に抱へ候時、帳本半兵衛、給金のところ千兩と申候。辭退仕らず承知仕り、五月四日、手附金二百兩の處、金作りの脇指一腰持參り、手附に出し申候。金銀は湧物なり、これは末代の手附にて殘り御座候。有難く忝引仕、萬兩丸と名づけ家の寶に仕り申候。

十九歳より廿四年間の刻苦は、彼れをして七兩取りの稻荷町より千兩取りの座頭役者たらしめたりき。

安永八年春、「緣曾我」に朝比奈、重忠、大佛の三ぶ、二番目に大日坊（忍賣の所作事、二度目）、「夏祭」に團七。秋、「忠臣藏」に師直、平右衛門、義平、定九郎（五度目）。十一月、同座、「當世模樣」に五代三郎、膽いり傳三（卒塔婆小町、柴刈、仕丁の所作事）。

安永九年春、病氣にて休業、三月、「菅原」に菅丞相と松王。「白石噺」に常悦。以後再び休業。十一月、中村座、「錦牡丹」に六部實は爲朝、衛士のつる平(末廣と布袋の所作事)。

天明元年三月、「小町曾我」に團三郎、範頼、遍昭。以後、病氣にて休業。五月、「戀女房」に江戸平、定之進。秋、「島原軍談」に佐々木岸柳と七草四郎。八月、「信田長者柱」に浮島彈正。十一月、同座、「四天王」に渡邊綱と袴垂。

天明二年春、「粧曾我」に工藤(五度目)と滿江、「助六」(五世團十郎)に意久。八月、「伊達染」に不破伴左衛門。十一月、市村座、「伊勢平氏」に盛遠、奴仲平實は三浦荒次郎、六部實は長田太郎。

天明三年春、「萬歳曾我」に景清(茶の湯)。六月、「忠臣藏」に本藏と定九郎(六度目)。秋、「帷子辻」(「夏祭」の改作)に天竺徳兵衛、二番目に「娘道成寺」の所作事。十一月、同座「奇軍配」に山本勘助(奴丹前の所作事)と長尾輝虎。

天明四年二月、「皐月富士」に景清、京の次郎、八幡の三郎、和田道玄。四月、「石橋」の所作事。(これより、市村座、負債の爲め休業して、桐座之に代る。)十一月、桐座、「小町櫻」に小野篁實、船頭灘藏、大伴黑主(「關扉」の所作事)

これを常磐津の淨瑠璃「關扉」の最初とす、彼れは此の時より評判記に「至上上吉」として掲げられたり(四十九歳)。尚ほ彼れが妻お岸は此の年に死し、後妻さねを娶りたり。

天明五年春、「言葉曾我」に工藤(六度目)。三月、「團七縞」に團七と「お七」に土左衛門傳吉。秋、「音頭瀬戸」(「博多小女郎」の改作)に叔界灘右衛門(毛剃)。十一月、中村座、「振袖源氏」に爲朝實は八丁礫喜平次と佛御前實は爲朝(富本の所作事)

是れより先き、彼れが師たる二世中村傳九郎は安永四年、其の兄七世勘三郎の跡を襲いで中村座の座元

となり、八世勘三郎と稱せしが、幾くもなく、安永六年に死し、更に二世中村七三郎の幼子三世七三郎を其の養子として九世勘三郎と稱せしめしも、是れ亦天明五年に夭折し、中村家の遺族としては、八世勘三郎の子たるお菊及びお富の姉妹あるのみなりしが、淺草福井町の名主齋藤某の次男熊吉といふ者、三百兩の持參金にてお富の養子となり、之を十代目勘三郎といへり。然れども、家道次第に衰へて負債山の如くなりしのみならず、年々の興行大かた損失に歸して、俳優を聘する資金にさへ窮したれば、重だちたる役者は悉く他座に買收せられて、中村座は其の興行を繼續する事能はず。茲に於て座員の機智ある者、彼の姉妹を唆かして仲藏の許を訪はしめ、泣いて其の情實を訴へしめたるに、舊師に對する恩義を忽せにせざりし彼れは、既に翌年度も桐座に勤續すべき先約のありしを撤回して中村座に入り、己が貯金を散じて一座を組織したりしなり。尙ほ此の時、彼れは養父の名を襲ぎて六世中山小十郎と改め、且つ八世志賀山萬作と號し、是れより先き養子とせし萬作に己が名を讓りて二世仲藏と稱せしめたり。然れども、此の顏見世興行の結果不良なりしのみならず、翌年正月、江戸に大火あり、同座も烏有に歸し、初夏に至り漸く新築開演するに至れり。

天明六年四月、「萬歲舞臺」に手白の猿若。五月、「忠臣藏」に師直、義平、定九郎（七度目）。「夏祭」に釣舟三ぶ。十月、「壽三番叟」。十一月、桐座、「伊豆幡揚」に平時忠（「暫」の受け）と俊寛。

春の大火のほかに、秋は關東の洪水あり、彼れが本所請地の宅も半ば浸水の害を蒙り、自ら義俠的に經營せし中村座も始終不結果なりしかば、此れが爲めに彼れは家計に不如意を告げたりき。是れより先き、天明二年、大阪より招聘せらるゝあり、既に豫約の金さへ受取りしかば、今度を機として上阪すべしと決し、而も桐座へは前年中村座へ出でし爲め先約を破りし償ひとして、右の如く十一月興行に現はれ、尚ほ新たに改名せる小十郎にては京阪の人士に通ぜざるべしとの事に、再び中村仲藏と復稱し、養子仲藏をも七世小十郎と改めしめ、斯くて匆々に江戸を出發したりき。

天明七年正月、大阪、中村粂太郎座。「壽三番叟」、「櫻城砦」に無言の行者實に尼子三郎、「双蝶々」に南與兵衞と權右衞門。二月、「千本櫻」に忠信、源九郎狐、權太。四月、「忠臣藏」に由良之助と定九郎(八度目)。七月、男達鹿の子勘兵衞。九月、「[illegible]」に傳藏、[illegible]寺村平次、「椀久」と「奴丹前」の所作事。十一月、上京、早雲座、「壽三番叟」、「千本櫻」に忠信、源九郎狐。

此の大阪の初舞臺に、當時同地に盛名ありし嵐雛助が見物に來り、其の技藝の妙なるに感じて思はず「ヨウノヽ」と聲をかけしが、其の身同業にして普通の見物と同く土間より聲をかけしは不禮なりとして、改めて仲藏に面會して罪を謝し、且つ吾が子二世雛助の事を托しきといひ、又第二回の「千本櫻」に、座元粂太郎が彼れの旅宿を訪ひ、在來同地にて雛助及び三五郎などが演せし型を語り、別に新工夫ありたしと乞たるに、彼れは、鳥居前の忠信も、後の御殿場の忠信も、同く陣羽織にて出で、又引拔きとなり

て絲鬢の鬘を着けしが、こは野狐なれば色々に變化する事能はずといふ意、及び源九郎狐は必ず絲鬢の男に化けるといふ傳説に據れるにて、果して同地の世尙に投じ、非常に好評を博せりといひ、當時、同座の座頭たりし四世團藏が專横の擧動多かりしより、一座仲藏を擁立して終に團藏を退座せしめたりといひ、又京都にても「壽三番叟」の大當りして、彼れが名は堂上にまで知られ、關白家に聘せられて同狂言を演じ、「江戶志賀山一流、三が津白拍子」と大書せる直筆を賜はれりといひ、彼れの技藝は關西に於ても大いに歡迎せられしなり。但し京都の興行は、興行主に金錢上の紛紜を生じて、大入なりしに拘はらず、僅に八日にして閉場せりといふ。

天明八年正月、歸阪、再び中村粂太郎座、「曾我」に釣狐の工藤（七度目）、切に土手の道哲（「忍賣」の所作事）。三月、病氣にて休業。夏、中國に下り、三田尻に湯治。十月、江戶、中村座、「唐相撲」に石川五右衞門、切に「戾駕」の所作事。

此れより「至極上上吉」に上されたり。

寛政元年春、「陽曾我」に釣狐の工藤（八度目）、二番目に雷庄九郎、本田次郎、砂村玄伯。二三日にして病氣の爲め休業。七月、「平家評判記」に俊寬と「壽三番叟」。

幾くもなく再び病を發して、翌寛政二年四月廿三日、五十五歲を以て歿しき。

●●●●●彼れが技藝を說かんとせば、先づ其の重に先天的に屬するもの、即ち、容貌、體格、風姿、及び音調を說か

ざるべからず。「劇神仙」と稱せられし永島壽阿彌、彼れを評して曰く。

第一、男振よし、さのみ大柄にはあられど、肉合格好ふり合ひ、錦升（五世松本幸四郎）より二寸許も大きかるべし。調子は却つて錦升けれども、長短をぬきさしよく、錦升、二代目杉曉 阪田半五郎 など調子のある者も眞似たるなり。

又曰く、

片岡市藏、余に問うて曰く、秀鶴は如何なる人ぞ、余答へて、成駒屋（四世中村歌右衛門）と錦升（五世幸四郎）とを一つに寄せた所が秀鶴一人の顏なり。片市これを聞いて、どちら一つでもよき顏なるに、二人ひとつによせし顏もありしや、と驚嘆せし事あり。道外師のからだに無きこと之にて知るべし。

彼れが容貌の秀でたりしは、少時、吉川某に寵せられしにて知らる。且つ其の容貌の秀でたりといふは、只みめよきのみにあらずして、表情にも妙なりし事を意味せり。されば彼れを評する者、必ず其の顏に藝ありし事をいへり。壽阿彌は曰く、

釣狐の工藤の咥へ面落ちて、鶏は八聲に、と唄にかゝる所の顏に、「關の扉」の鉞研ぎ、同じ狂言に、五寛花園になりて、、、さらば在りし雲居の、と唄にかゝる所の顏、こんな顏は絕えてなし。錦升も及ばず。

又天明六年、桐座にて上阪の暇乞に「俊寛」を演せし時の評に、

すべて、文句のうち顏にて狂言致さるゝ所、友綱どうと押切つての處、感心々々。（「役者難梅判」）

此等、孰れも容貌の表情に妙なりしをいへり。また、音聲の佳ならざりし事は、前に引ける壽阿彌の評のほか、諸評判記に屢見え、特に晩年上京せる時の評に、

口跡は古尾上紋太郎のやうに聞苦いやうなぞや。（「役者五極成就」）

といへるにても明かなり。傳へいふ、彼れが尚ほ下廻りの地位なりし時、初世中村助五郎に「人殺し」と言ひながら組付くところ、日々呼吸わるかりしゆゑ、助五郎より叱責せられ、「不器用な奴、役者で飯は食へぬ」と罵られしを憤り、一時、俳優を止めて人形町に下駄屋を營み、何時かは、弟子にても、子にても、中村助五郎と名乘る役者の上に立たんとて肝膽を碎きしが、其の頃堀留邊に逸見某とて謠に巧なる隱居ありしを、夜毎に其處に通ひて語りものばかり習ひきとか。おもふに、其は音聲を矯め、もしくは節調を整へんが爲めにして、壽阿彌の謂はゆる「長短をぬきさしよく」し、五世幸四郎及び二世阪田半五郎等が彼れを模倣せりといふも、斯くの如き刻苦の結果なるべし。

尚ほ、彼れは生まれながらにして體格容姿にすぐれしのみならず、前に言へるが如く、志賀山一流の所作事に熟し、且つ能樂（單に謠ふのみならざる）にも指を染めたれば、動作態度に於てもすぐれたりしならん。要するに、彼れは俳優として既に天賦の美質に富み、更に之を完うするに切瑳の功を以てせるなりき。

加之、彼れは脚本に向つて屢新解釋を試み、又之を舞臺に再現するに當つて屢々新意匠を創めたり。されば二百年後の今日、尚ほ「秀鶴型」と稱して舞臺に行はるゝもの一にして足らず。例へば「菅原」に


仲藏の「關兵衞」（「似顔大全」より）

於ける菅丞相の如き是れなり。安永九年三月、彼れが森田座にて之に扮せし時、謂はゆる「荒れ場」なる天拜山の齣に、丞相の面前へ梅王丸が鷲塚平馬を引据うる所、平馬は賤き侍なれば、始終檜扇にて面を隱し、其の罪惡を白する間、開かぬ振して居るうち、ふと帝を執らへて押籠め奉るといふ語を耳に入れ、玆にて忽ち蛇となりて向うを見込み、次第に顏を變へ、思はず扇を取落して其の途端に梅が枝に手を觸れ、吾れ知らず枝を折りて膝節がつくりとなり、それを踏直すはずみに枝を取り直し、此の時、手ごたへせしを訝りたる心にて振向き見れば、平馬が首を已が打落せしに驚き、彼

の枝を投出し、切首を見る思入あり。此の工夫大いによしとて好評を博し、後世の俳優亦之を模倣するに至りき。又「千本櫻」の知盛入水の如き、四世團十郎は矢疵に屈せず大碇を易々と振上げ、岩臺へ登りて見得をなし、四世團藏は、矢疵に勞れて漸く碇に取付き、其の綱を身體に卷付けて入水する事なりしが、仲藏は此の二つの型を折衷して、よろめきながら碇に取付き、岩臺へ登り、ヤッと一聲かけて碇を重さうに振上げ、大勢に取卷かれて幕を引く事とせり。此のほか、「菅原」にて車引の松王も仲藏の型を今に殘しゝといひ、前に述べたる定九郎の新意匠といひ、彼れが新機軸を出だせる例なり。然れども、此等の新解釋及び新工夫については頗る先輩に負ふ所多く、定九郎の型が五世團十郎の意匠を襲ぎしといふほか、すべて四世團十郎と二世廣次とを手本にして藝を工夫せり、と壽阿彌の筆記にいへり。又彼れが自傳にも、

役者にて柏筵市川團十郎、二代目澤村長十郎、元祖大谷廣次、元祖瀬川菊之丞、元祖坂東彦三郎、誠に妙なる御方々樣なり。十六歳まで知り申候。今に其の流江戸の花と相成罷在候。

所作名人は九代目市村羽左衛門樣、元祖中村富十郎、二代目瀬川菊之丞、狂言は二代目大谷廣次、元祖市川八百藏　存じ候御方々なり。

と記せり。此等先輩の技藝によりて發明せること多かりしならん。

然れども、彼れが缺點は、其の新機軸及び新解釋の皮肉に走り、穿鑿に陷りしことなりき。諸評判記に彼れが壯時を評して、「小手の利いた仕打」、「小手利の達者」など言ひけるは此の意味を含めるなるべく、壽阿彌も亦彼れを次の時代の五世幸四郎に比して曰く、

錦升（五世幸四郎）が晩年に比ぶれば、大場なる事は錦升に及ばず。錦升は初めは一途に秀鶴の眞似なり。晩年には隨念（四世團十郎）一途なり。秀鶴も隨念なれども、これは隨念の小水なる所を取り、錦升は隨念の大場なる所を取りたるなり。それゆゑ、安永に出版せし信夫石といへる評判記に小水に穴をせらるゝとあり、……

といひ、曾て、馬士の役にて背中の日にやけて黑きが、腹掛の跡ばかり十文字に白くして出づるといふ意匠を思付きしが、立者のすべき事にあらずとて、坂東善治に此の意匠を讓りしといひ、狐を勤むる時、その姿を現はさぬ狂言にても肌には狐の縫ひぐるみを着けたりといひ、「戻駕」の衣裳前後同くして、袖の長さだけ變へたりといひ、其の他、彼の浪人姿の定九郎といひ、緣鬘の狐忠信といひ、「水虎退治」の五郎といひ、胸當したる由良之助といひ、又守國が繪本によりて工夫せりといひ、彼れは衣裳、鬘等に最も苦心し、且つ此の範圍に於て寫實を力めたるなり。蓋し最近の團十郎が「活歷」の一部分も此の潮流より來れるものなると共に、脚本の大本よりも有職故實の末端に心を勞せる弊は古今轍を同うすと言ふべきなり。

斯くの如く彼れは服裝に於て寫實的なりしに拘はらず、其の科白は全く非寫實的なりき。「役者姿記評林」に彼れを同時代に於ける大阪の名優淺尾爲十郎に比して、一は土佐繪の新畵の如く、一は現代の寫生畵の如しといへるは、既に爲十郎の條下に引用せしが、尚ほ同書に彼れが上阪中の技藝を評して、

此の人の思はくを察する所が、上方にて先づ當時奥山（爲十郎）の仕打、そつこんこたへて面白みあれども、狂言といふ所薄く、實情ばかりにてあれば、向うへ行屆かず、根が芝居狂言なれば、其の實情は一場のうちにて二つと三つはこたへさせればならず、其の跡は一體に狂言といふ所に花實を含ませればならぬ道理なり、と思はれてづう〳〵とせらるゝと見え……。

といひ、鹿の子勘兵衞に扮せし時、母の駆出すを止めんとて、大手を廣げて突立ちたれど、斯かる仕打は大阪人の好みに適せず、爲十郎ならば其を寫實的に演ずべしとて、

大阪はしがみ付いてとゞめて、又引きづられる程にまでも行かぬと、只ぬるいと言出すなり。奥山は其處をよく呑込みし者ゆゑ……見る人によつてみそこひといふが此の人（爲十郎）の病なり。

といひ、尚ほ俳優の技藝には「體」「用」の二別ありとて、體に於て優りし中村歌右衞門を仲藏に對し、用に於て秀でし藤川平九郎を爲十郎に比せり。又他の諸評判記にも「花うすし」といひ、「古風にてぬるく、愁めいりて淋し」などいへるは、彼れの科白が寫實ならず、自然ならず、歌舞伎の舊套を追うて古朴なりしを意味せるならん。

彼れが役柄の變遷を見るに、子役より若衆方に、若衆方より道外方に、道外方より立役に、立役より實惡に轉じて、晩年は、實事と、敵役と、立役と、女方と、孰れをも兼ねて、且つ地藝のほかに所作事をも能くせり。壽阿彌は曰く、

所作事は家橘（九世市村羽左衛門）とならび、敵は比類なく、立役は役によりて善惡あり、工藤は十分ならず、伴左衛門は千古一人、世話は少も體になし。

と。されば彼れが本領は敵役にありしならん。然れども評判記に、

生れつき愛のある男ゆゑ、實惡で見る時は折節ぬるいといふ場もあれど、仕打を御覽なされませ、二役とも出來申候と

とあれば、實惡としては憎みに缺ぐる所ありしならん。只色惡は最も彼れが成功せるものにして、其の天生の容貌と風姿とは彼れをして之に適せしめたる所以の一なるべく、而も世話事に適せざりしは、其の道外役に適せざると共に、彼れの科白が寫實的ならずして、輕妙よりは寧ろ沈重に、自然的よりは寧ろ技巧的なりし當然の結果なるべし。

彼れが終生の當り藝は「釣狐」の工藤と定九郎とにして、同く前後演ずること八回の多きに至れり。而も此の二役ともに色惡に屬する藝なり。別に所作事の方面に於ては「忍賣」「關扉」「戻駕」を其の傑作として、孰れも今日まで舞臺に行はれつゝあり。

私人としての彼れが美徳は其の篤實と精勵とにありたりき。「役者穿鑿論」に「一體堅人で御坐る」といひし如く、養家たる志賀山及び中山に事ふること孝順にして、家名を興すに汲々たりしのみならず、生みの親を慕ひし事は、「歌舞妓年代記」に「實の親のしるべを尋ねんと、暇ある時は弟子どもを連れ、深川中の寺院、無緣の石塔を尋ねけれども知れずといひしが、幼年の時、何ぞ心覺ありけるにや、毎月八日に牡丹餅或は團子を拵へ、修行者、托鉢の僧に接待を出しける」といひ、加之、舊師たりし中村氏の爲め私財を抛ちて其の劇場に出で、且つ恩人たりし市川家に對して其の厚意に反かず、四世幸四郎と敵視せる五世團十郎を輔けし事は既に前に述べたり。中山小十郎と改名せし時、給金千兩の約なりしが、年來己が借財の滯れるもの三百兩もありしを、「貸方の人々を招寄せ、このたび、私親の名に改め申すにつき、御願ひ御坐候。只今まで私名面の借金、親の名面に負はせ申すは、不孝にも當り申候。殘らずの儀出來申すまじく候はんが、其の處少々御用捨願入る」といひければ、「皆々篤實なる事を感じ、いづれも納得の上、手金請取り、皆濟の書面出しければ、佛前へ供へて、かゝる大金を取る役者となる事も偏に御養育の御影と、涙ながら禮拜」しきと、後年彼が門人中村此藏の語りしを「歌舞妓年代記」に載せたる如き、又貧かりし時、隣家の吳服屋に惠まれし舊恩を忘れざりしといふ逸事と共に、彼れが律義なりし性行の一斑を見るべきなり。尙ほ彼れが一言の諾を重んじて禿頭の賣春婦に一年あまりを通ひつゞけたるが如

き、不犯の立願せし時、贔屓客に勸められて深川の狹斜に遊び、八重といふ婦人と同衾せしも終宵袴を脱せざりしが如き、其の自傳に、世の浮華となり、梨園の禮節廢れたるを嘆じ、かゝる世の中に義によつて家を捨てし富豪の子、そを慕ひて共に落魄せし忠僕ありきとて「二人乞食」の事を掲げ、或ひは主恩に感じて其の偶像に事ふること生ける人の如くなりし狂女ありきとて「氣違ひお松」の事を記し、など、彼れが人と爲りを見るべし。

要するに、彼れは常識的且つ實際的の人なりき。曰く己れの分を守る。曰く己れの職を重んず。これ彼が世に處する二つの題目たりき。能く其の分を守るを以て溫良謙讓、能く其の職を重んずるが故に精勵刻苦せりき。其の技藝に於ける苦心は既に述べたるが、戲作者柳亭種彥が語る所に據れば、

元祖中村仲藏、初めは藝道も未熟にて……藏衣裳の素袍にて並び大名に出でしが、粘強き麻素袍なれば、二日三日にのり付落ちて皺多く見苦しきを……秀鶴一人は衣裳を人手に掛けず、自から其素袍に水のしゝて能く疊み、……翌日着て舞臺に出て、列座の晶子と立並びし時も、一際勝れて立派に、いかにも上手らしく見え……、

此れより見物にも樂屋にも注目せられて、次第に好き役を付けられ、終に昇進したりといふ。又「役者穿鑿論」に曰く、

此の人、萬事を顧みず、只家業のみ專一にいたされます、舞臺へ出るにも揚幕などに待つ事が嫌ひ、三階にて一つのきつかけを聞く

どぢきに拵へにかゝられます。顏を隈取る時も、五本の指のさきに色々の繪の具をつけて一度に隈取られます。扨て衣裳を着て、舞臺へ行くに丁度のきつかけ、藝は道によつてゞ御坐る。

尙ほ自傳に、四世團十郎が退隱せし時、彼れを戒めて、吾が行ひを學ぶべからず、兎角「勤め死を心掛け給ふべし」といへるを記し、大阪にて中山文七が退隱してより芝居の不繁昌となりし例を引きて、役者は身死するまで決して業を廢すべからず、只己が身ひとつを全うせんとて生時に退隱せんには即ち見物に名殘を惜まれ、跡の芝居不繁昌の基となるべしといひ、

役者は武道にひとしく、名を以て職となすなり。然れば、死の跡の名こそ惜けれ。利口にかやうに存じ候が、吾が心わかり申さず。當年五十歳にて其の先の心知れず。もとより世もよしあし多くして悟り難し。心一杯仕り見申すべく候也。

といへる、彼れが向上の精神を見るべし。又俳優が漫りに外出する弊を擧げて、

歌舞伎役者は藝を以て其の名をあらはし、一心を以て座上に立ち、一座の頭と成り候まで、我が體ながら我が體ならず。花見、月見、雪見など、人立多き處へ參り候事なり難し。あしき事あればあしき評あり。

といひ、世評に拘はるの不可なるを說きて、

善惡を申し候人あれども、贔屓々々にあるなれば……聞き候事も聞免し、聞かぬなり。只眞心にて……其の身第一とたしなみ申し候なり。

といへる、彼れが謂はゆる「一心」を味方とせる自助の精神を窺ふに足る。

然しながら、彼れをして精勵ならしめたる半ばは其の自重の氣概なりき。彼れが意地の強きと負けず嫌ひなりし事は幼時の逸話、既に之を證せり。

〔補〕自傳に尚ほ彼れが幼時の逸話の二三を載せたり。

或る時、また友達連立ち、表にて夜遊び致し申し候。月夜にて按摩多く通り申し候。袋に灰炭を入れて竹の先につけ、此袋底穴をあけて、按摩の後より頭の上にて浮めて打ち申し候。灰炭顔にかゝり申し候を、按摩手を以て撫で申し候。立ちどころに眞黒になり申し候。面白さに毎晩出で申し候。一夜、右の通りに致し申し候と、どや〳〵と按摩より申し候て何々を捕まへ申し候。皆に逃げ申し候。私一人捕へられて酷く叩き申し候なり。通り候人、立留り詫び致し申し候。なか〳〵合點致し申さず、めくらが面々眞黒に致し、呼ばれて内へ入り申し候と、皆々恐がりて、此の間も呼び申し候女、内に入ると驚き聲を絶し申し候。[illegible]候奴、皆々申合せて捕へ、家主へ連來り、お上へ願ひ申し候由と、色々に申し候へども放し申さず。折よく[illegible]申し候隙に免れ申し候。此の時は今も恐ろしく候なり。懲り〳〵仕り、それより惡さ止め申し候。

人形町角の番所、駄菓子賣り申し候。袋入の豆を賣り申し候。くれろと申し候らへばあかんべい致し申し候。友達[illegible]に存じ、晩方、芝居歸りがけ、番太郎釜より飯をうつし申し候處へ砂を投掛け申し候。内へ歸り候處へ、[illegible]飯つぎ持來り、斯樣に候とて親へ見せらるゝ。兩親はあきれ候て私を縛め、藏へ入れ、食どめにてたべさせ申さず候。おさわと申す女、内々にて握りてたべさせ申し候。やう〳〵に詫濟み免され申し候。其の無念晴れやらず、友達を語らひ申し候て、顔見世、道具部屋に[illegible]居り申し候。膠もらひ沸かして四つを待ち、時うちに出て申し候うちに、敷居[illegible]へ流し[illegible]り申し候。歸り候て戸あけ申さず。[illegible]

郞また内へ參りて怒鳴り申し候。兩親も私が見申し候。其の時は二言となしに誤まり、泣出し申し候。よつて科知れ、親指と親指を結び、稽古にほどき、又結び、踊り損ひ申し候と灸が出で申し候。今日はちりけ、明日はせうもん、一處づゝ毎日灸責なり。
長谷川町に、おれと同じ年のおまつといふ子、器量がよくて踊りがよいから、何時でもおれが負けるから、中がわるくて何時でも喧嘩をする。
四季椀久を踊り申し候に、忘れ候過代として二十一遍踊り申候。後には糊のやうに相成り候。前後も知らず臥せり申し候。夜九つ時に、井上せうてつ樣、助右衛門樣、御出でにて、御咄の内に、私起上がり、椀久一番うたひながら踊り申し候。皆も膽を潰し氣をつけ申し候處を母止め、打捨て置き申し候由。椀久一番まるに踊つて其の儘ふせり申し候由。せうてつ樣、天滿屋助右衛門樣、夢中の所作御覽ありて御悅び成され候由。明日御詫び成し下され候。是れより覺えよろしく相成り、何事も忘れ申さず候なり。太鼓、鼓、稽古相やみ申し候。所作稽古事ばかりに成り申し候。

又、團十郞の門人たりし市川兵藏が養家の實子おせんと通じて彼れと養母との間を離間せるを憤り、兵藏を殺さんとせりといひ、彼の中村助五郞が毒舌を怒りて發奮せりといひ、此等は未だ血氣定まらざりし壯時の事なれど、斯くの如き覇氣と俠骨とは初老に至りても衰へざりき。されば、世に處して圓滑に、人に對して謙遜なりしとは言へ、非道の前には之に反抗するに躊躇せざりき。例へば、山王祭りに己が預りし舞子の事より町内の若者と爭ひし事、神田祭りに暴漢を挫きし事、劇場よりの歸りに三人の溢れ者を打懲らしゝ事、自傳には頻りに此等の事實を記し、且つ「是れまで人の身につき浮世に立引とやら

にて難儀仕り申し候」といへり。蓋し劍道柔術の心得ありし彼れは、意志の强かりしと共に腕力にも强かりしなり。而して其の弊は執拗となれると共に、且つ才子たりしだけに同僚の忌む所となりしのみならず、己が客氣に驅られて他の怨恨を買へる事なしとせず。「歌舞妓年代記」に彼れが小十郎と改名せし理由を記して、

生得正直なる者なれば、以前狂氣したる事もありしゆゑ、又此の度も慢心の餘りに改名せしと沙汰あり、

といひ、又前にいひし如く、子役上りの時、同僚に虐待せられしなど、一は彼れの弱點が自ら招ける結果なりしならん。

彼れは「能、手習、鼓、又は武道に隙なく、ふら〳〵と病み申し候」、又「其の頃は、役者も專滑幼少より仕り、何事も存じ候なり」と、自傳にいへる如く、俳優として技藝以外に種々なる訓練を受けたりき。彼れが自傳に「雪月花寐物語」あり、暢達の筆にあらねど、又多少文筆の才ありしを證すべく、外に狂歌俳諧も此の者流の慣はしとして、幾多の吟詠あれど餘りに誦すべきものなし。世才に長せしだけに風流は彼れが能事に非ざりしものゝ如しと雖も、自傳に於ける左の一節の如きは詩味を掬するに足る。

烏山と申す土地にて道成寺相勤め候。折ふし春の事とて、野山の櫻今日を盛りと咲亂れ候。芝居の者共思付き候様子にて、此の櫻にては如何と申し候。よろしくと答へ候へば、見事なる一重櫻の枝したゝかに切りて舞臺に飾付け候。立つて舞ひ候節に、ひら

〳〵と花の散りかゝり候景色、うろはじとも花やかとも言はんに言葉なく、誠の道成寺も斯くやあらんかと存じ候。望みにて二日勤め候に、櫻は最早凋みたる様子、これにて充分なりと申し候に、座中の法師つと立ちて、手づから庭の櫻折りて參り候。あまりに酷きと申し候へば、櫻かやうの役に立ち候事、深山なれば重ねては之れなく、此の度は人も□□□と申し候へば、一枝も多く切り申すべくと答へ候。……烏帽子落しの時、櫻ばつと散りかゝり候。我れながら
花見かな、中山寺の烏帽子落しの花も積もりて。

彼れは壯時少も酒を飲まず、漸く付合ひの爲め飮習ひきといへれば、之に對する嗜好は淺かりしならん。又彼れが日蓮宗の信者たりし事は自傳にも往々見ゆ。而も熱心なる富士派なりしも、別に神棚を設け、顧客より神社の札を贈る時は、之に納めて朝夕禮拜を怠らざりきとぞ。

住居は始め人形町なりしが、中ごろ深川六間堀に移り、更に和泉町に轉じき。自傳に據れば、深川へ移りしは明和五年（三十三歲）のことにして、「庭七間に九間半、向に築山一間半、泉水さへありき」といふ。同年は彼れが當り藝なりし定九郎を演じてより二年後なれば、既に活計に餘裕の生ぜしならん。されど劇場へ通ふ途次の物騷なりしを以て和泉町へ轉住せるなり。

（補）「明和伎鑑」には六間堀住とあり、「役者穿鑿論」には和泉町住とあり。彼れが轉居は兩書の出版せられし明和六年と安永六年との間ならん。又彼れは火災に遭ふこと前後九度、「こり〳〵仕り申候」と自傳にいへり。

屋號は榮屋といひ、定紋は初め四つ銀杏なりしが、中ごろ丸に上の字を用ひ、寶暦六年より丸に中の字

とし、翌七年より更に中車に改め、一旦小十郎と改名してより蔦に一の字を用ひたり、これ某侯の隱居より賜はりしものなりといふ。又死するに先だつこと一年、寛政元年よりは角に舞鶴を用ひたり。替紋は人といふ字を崩して縱に三つ列べ、假に之れを香の圖といひしが、實は日本にて三指に屈せらるゝ程の名優たらんとの意にて、揚幕にて、掌へ人の字を三たび書き、其を舐りて花道へ出づるを例とし、其の頃より名聲頓に揚りしを以て、終に紋章として用ひしなりといふ。

當時、「仲藏染」とて世に行はれし模樣ありき。彼れが尚ほ廿兩取なりし二十三歳の時、中村座にて大藏屋傳三の役を勤め、更に早替りにて「櫻川」の所作事を演ぜしが、始めの服裝は黑紋付に淺黄無垢の袴、後は淺黄無垢の着附に桃色の法衣、袈裟頭巾の法師姿にて能がゝりの所作をするなりき。僅ばかりの給金とて、二通りの衣裳を調ふるとに苦み、其の前、江戸にて始めて「菅原」の上場せられし時、市中に流行せし「菅原染」とて、菱の中に梅鉢と松櫻の模樣ある古帷子ありしを、妻お岸と養母との計らひにて蘇枋に染めて裾廻となせり。當時より彼れは同僚に憎まれしかば、調度に紙を付け、油墨を塗り、又は衣裳の袖口を縫ぐるみとし、或ひは裾に上草履を結付くるなど、種々の惡戯を施され、特に或る日、彼の桃色の衣裳を裏返しにして焙り籠に掛け、紐にて結付けて、傍には小道具の突棒刺又に板をつけて高札の如くし、

此の者、夏冬の時を知らずして、我儘に身を飾り、人の眼を掠めて四季の法式を破る、寒暑の科により、三座三階に於て、三日の間晒し者となし、衣裳づた〳〵に切解き、永く洗張り、戸板に張付けにする者也。
藝道無宿　仲　藏。

と記され、慌てゝ紐を解かんとすれど容易に解けず、終に舞臺へ出遅れて頭取より叱責を蒙りしが、其の夜、師傳九郎に招かれ、此の始末を尋ねられて、仔細を語りしに、今の大谷十町（二世廣次）が尙は鬼次とて百兩取なりし頃、「戀の關札」の淨瑠璃にて衣裳裏の調達に窮し、水仙の總模樣ある帷子にて裾廻しなしに舞臺へ出でしが、赤つらの役にて水仙の大模樣つけしは優しき仕打なりとて好評となり、そを吉例として今も衣裳羽織に水仙の模樣を着けたり、汝が今日の始末、今八百兩の大立者たる十町が昔に似たるこそ出世の瑞相なるべしと言はれ、仲藏も十町が先例を襲ひ、當時「源兵衞小紋」とて彼の「菅原染」に染めたる模樣ありしを己が衣服に染めて常に着用し、何時しか「仲藏染」とて世上に行はれしのみならず、狂言作者河竹新七が上下に染めて用ひしより、其の門下に傳はり、後に五世松本幸四郎も此の小紋を用ひたりといふ。

彼れは又單衣に必ず辨慶縞を用ふるを例とせり。自傳に其の理由を掲げて曰く、

私、十六歳の時、一たび芝居をひき、商人と相成候。其の時の名字齋藤と申すがゆゑ、養父なる人に承り候へば、實家の名字と申され候。私、五歳の時、實の父母に別れ候ゆゑ更に存ぜず、いろ〳〵聞合せ候ても、何の便りもなく、我が身に付き候ものとて、親の

形見と見るべき程の物はなく、只湯上りの浴衣こそ日々の着用に肌身離さぬものなればと存じ、辨慶縞のみ用ひ候。これも西塔の武藏坊と申すより、齋藤を忘れぬために、始終着用の譯合に御座候。

これ、彼れが深川の古寺を探りし事と共に其の孝心の深かりしを見るに足る。

妻お岸の出産せしこと數次なりしも、いづれも難産なりきと自傳にいひ、且つ實子ありしこと他書にも見えねば、悉く死産もしくは夭折せしならん。安永六年（四十二歳）の「役者穿鑿論」にも、家族は妻お岸と養子二人とあり。其の一は中村仲次郎とて、彼れが養父の業を繼ぎ、唄うたひを專らとせしが夭折せり。他は即ち後に二世仲藏たりし萬作にして、改名後、幾もなく七世小十郎と稱せり。幼名を芳澤鶴松といひ、中ごろ芳澤吉十郎ともいひ、實は四世團十郎の弟子たりし松本小次郎が長男なりき。彼れは役者としてよりも寧ろ振付として著はる。斯くの如く、仲藏が二人の養子をして養父母の唄と踊とを繼がしめたるも、亦其志の篤かりしを知るべし。而も此の萬作は仲藏と稱せしこと僅に一年なりしかば、後の人、之れを二世仲藏と言はず、二世仲藏は初世の死後、その遺族に乞ひて襲名せるものにて、初め三世大谷廣次の門に入り、幼名を永助といひ、後春次といひ、又鬼次と改めて、更に中村仲藏といひ、寛政八年に夭折せり。

註　寶暦元年、彼の吉川某の許に寄寓せし時、明神邊の武家屋敷へ百兩の貸金を受取に下人を供にして行き、終日待たせられて夜

に入りて漸く五十兩だけを受取り、財布に入れて首にかけ、見附の土手と本田原との間へ來かゝりしに、彼の下人提灯の火を吹き消して、百兩の金子受取り給ひて首尾めでたしといふ。其の語氣に從心を生ぜし事を知り、金子は受取らじといひながら、密に財布を腰に落して三つ目に結付けたるを、下人は覺らで、懷ろを探りて守袋の外何物もなきを見て、さらば金子は受取り給はざりしか、斯かる時人に見られてはあしかりなん、と故と火を消したるなりと言ひ紛らし、事なく本町の家へ歸りしが、戸を明けて内へ入ると共に金と叫びしまゝ氣絶せるを、介抱されて始めて心付き途中の仔細を語り、此は中村平十郎といふ役者が、斧定九郎にて五十兩を盗み、詮議の場にて隱し、其の故智を襲へるなりと告げしかば、吉川は彼れが機智に長ずると共に藝に志の厚きを感じたりと。（自傳「雪月花寐物語」）

彼れが既に中通りに進みし時、團十郎の門下たりし四世松本幸四郎（當時高麗藏といふ）とは同僚にて交情甚だ密なりしが、或る顔見世に、兩人相計りて二立目の狂言に意匠を凝らし、故さら作者に頼みて「先づ仲藏は大百日、袖のやつし、引拔き大鉞を以て大木を切る。ドロンと遠寄せのかしらを打込み、鉞を擔込み向ふを見込む。揚幕にて高麗藏、ヤア〳〵と呼止めになり、見參々々といふ。仲藏、何が何だと突掛けになり花道へかゝる。向うより、高麗藏、しつちう付き、生締、剃立て、長上下、大小、三方へ寶物を載せ持出で、仲藏に出合ひ、突廻して三方を突付ける。仲藏立身にて鉞を振上げ、双方よろしく見得。鳴物かはり、靜かなる合方へドンチヤンを打込み、高麗藏、長ぜりふにて舞臺に押戻す」といふ脚色なりしが、扮裝といひ、舞臺面といひ、場内大喝釆なりしを、座頭たりし四世團十郎は以ての外の不興にて、斯かる仕打は分に過ぎたることなり、と翌日より此の幕を禁じぬ。斯くて團十郎は自宅に兩人を招き、今日の事、横しまなる君が處置と思ふべけれど、あれ程の藝を朝の内とて、見物も集まらぬ二立目に出ださんは惜むべし、出世して立者とならんも近き身なれば、其の時に大詰の幕にて演ぜよと諭され、二人は師恩の厚きを謝したりとぞ。（「手前味

嘲し）

又中通りより相中に上りし年の顔見世に、四代目團十郎、不死身の六部にて世話場へ宿を借り、仲藏下男にて草刈鎌を研ぎ居る團十郎髭を剃りたいと剃刀を探す。仲藏廻し者なれば、此の鎌で剃つてやらんといふ。是れにて團十郎眞中にすまひ、サア剃つてくれと髭を濕す。仲藏片襷にて後ろに廻り、髭を剃り、トヾ團十郎の咽へ鎌を引掛ける。團十郎、閉ぢ居りし眼を開き、屹と睨む。其の鎌の手を取つて前へ引出し、一寸立廻あつて錫杖の仕込を拔き、ポンと切る。仲藏見事にかへるとドロンと畫寄の鳴物を打込み、立役出て來て詰めになるといふ筋なりしが、彼の團十郎が眼を開きて見物の喝采せる後、再び喝采の響起るに、團十郎怪みて門弟に其の故を問へば、そは仲藏が鎌を引掛けながら、不死身にて切れぬゆゑ、不思議さうに上から覗き見る其の顔がよきにや、見物が喝采するなりと答へける。さて翌日に至り、仲藏この仕打をせざりしゆゑ、團十郎は己が部屋に招き、何故折角の見せ場を省きしかと問へるに、親方の藝を妨げてはわるしと思ひ遠慮したりといひければ、團十郎微笑して、こりや坊め、手前が出張つたとて己が邪魔になるものか、其んな遠慮せずと譽めらるゝやう飽くまでやるがよいにと言はれて引下りしと（同上）

四世松本幸四郎（高麗屋錦江又錦考、元文二―享和二）は京都に生れ、延享元年（八歳）冬より江戸の市村座に出で、初世瀬川菊之丞の門に入りて俳優となり、瀬川金吾といひて色子たり。後若衆方となりて上京せしが、寶暦四年（十八歳）冬、東下して市村座に現はれ、瀬川錦次と改名して立役を勤めしも世評好からざりしかば、彼れが姉にて高輪にいね屋といふ引手茶屋を營みたるが、舞臺を退かしめて己が家を譲らんとせしも、彼れは其の忠告に随ばざりしより、同胞の縁を絶たれて再び劇場に赴きしといふ。

〔補〕四世仲藏が「手前味噌」に、幸四郎の前身を京都宮川町の男娼なりとし、二十歳前後、姉を頼りて江戸に出奔せるといへるは、一旦彼の姉に絶縁されし事を誤り傳へたるならん。此の事「役者穿鑿論」に彼れが直話として掲げられたり。

同七年に至り、始めて四世團十郎の門下に投じ、市川武十郎と改めて和事を專門とせり。八年春、不粹の女郎買、同年秋、「青柳硯」の賴風に好評を得、同年冬、上京せしが、翌十年冬、江戶の森田座へ下り、其の翌年は中村座に移り、十一年春、曾我十郎に扮して好評を博したり。次で同十三年（廿七歲）春、染五郎と改め、同年冬、更に中村座に於て高麗藏と改め、當時、始めて彼の姉との緣を復して高輪を訪れたりといふ。此の前後に、彼れが同僚中村仲藏と共に技藝を切瑳せし事は既に述べたり。以後に於ける舞臺上の閱歷は左の如し。

明和元年正月、「春告曾我」に十郎、二番目「助六」に白酒賣。五月、「菅原」に櫻丸。十一月、同座、「相馬內裡」に由良太郎。

明和二年正月、「念力曾我」に十郎。三月、「忠臣藏」に判官。八月、「福引曾我」に名古屋山三。十一月、同座、「雨乞小町」に深草少將。

明和三年正月、「伊豆春駒」に近江小藤太。七月、「八百屋お七」に吉祥寺。十一月、同座、「凱陣荒武者」に善知鳥安方、

明和四年正月、「大見世曾我」に吳服屋手代實は三保谷四郎と十郎、二番目に本町丸綱五郎（市川雷藏の代り）。五月、「千本櫻」に忠信と源九郎狐。十一月、同座、「太平記」に義貞と長濱新左衞門。

明和五年正月、「曾我章」に十郎、吉祥寺、重忠。夏、「五人男」に雁金文七、「菅原」に櫻丸、「青柳硯」に道風、「十帖源氏」に物草太郎。

十一月、同座、「末廣源氏」に三味線引吉六實は駿河次郎。

明和六年正月、「愛護稚松」に宇佐美三郎左衞門實は鬼王・重忠妻宇佐美、八幡三郎。秋、「操菓鑑」に千原左近。十一月、同座、「拳鉢木」に佐野源左衞門。

明和七年正月、「俤曾我」に十郎と外郎賣實は京の次郎、二番目に梅の由兵衞。七月、「忠孝鑑」に信田の下部駒平後に男達朝比奈藤兵衞、羽生村與右衞門。十一月、同座、「鵺森一陽的」に賴政と花守藻作實は澁谷土佐次郎。

明和八年正月、「曾我年代記」に十郎、駕かき實は三保谷四郎、八百屋半兵衞、「助六」に白酒賣。夏、「忠臣藏」に由良之助。七月、「田村麿」に濱成。十一月、同座、「小野五文字」の二番目に行平。

安永元年六月、「曙草紙」に工藤(初役)。十一月、同座、「海老胴篠塚」に鐘梅よしの五郎八實は相模二郎。

此の時、彼れは師の名を襲ぎて、始めて四世松本幸四郎といへり。(三十六歲)

安永二年正月、「和田酒盛」に十郎と清水清玄、二番目に平野屋源兵衞實は京の次郎。五月、「伊勢神風」に細川勝元。七月、「片岡山」に聖德太子の家來淺間左衞門、「菅原」に松王。十一月、同座、「勸進帳」に義經と和泉三郎。

安永三年正月、「曾我雛形」に十郎、二番目に與九郎狐の女郎買、「お夏清十郎」に清十郎。十一月、森田座、「[illegible]顏見世」に桂川左衞門實は尾形三郎、二番目に奴實は忠信。

師四世團十郎と共に久く中村座に據りし彼れは、此の時、故ありて師及び其の一門と共に同座を脫し、冬より森田座に現はれしなり。

安永四年正月、「蓬萊曾我」に千原左近と鹿島三郎、二番目に二人由兵衞(三津五郎と)。五月、「菅原」に松王と覺壽。八月、「月の都」に名古屋山三。十一月、市村座、「親船太平記」に浪人卜部權之助實は備後三郎。

此の時より始めて「上上吉」の位に上されき。(三十九歲)

安永五年正月、「冠言葉」に曾我十郎と重忠、「助六」に白酒賣。七月、「菅原」(四世團十郎の名殘狂言)に菅丞相、「龜山通」に石井右內と關口隼人。十一月、森田座、「矢聲太平記」に傘賣六郎助實は土岐藏人、二番目に玉屋新兵衞と博多入梅左衞門實は楠正成。

安永六年正月、「小袖曾我」に工藤、二番目に梅堀小五郎兵衞實は鬼王、「千本櫻」に忠信と源九郎狐。七月、「新田大明神」に新田義興、二番目「仇名かしく」に福島屋淸兵衞。十一月、「將門冠初雪」に俵藤太(三人衞士)。

三年前、袖を列ねて中村座を脫せし市川門下の俳優は、玆に再び同座に復せるなりき。

安永七年正月、「和曾我」に重忠と鬼王。七月、「阿國劇場」に絹川谷藏と渡邊民部。十一月、同座、「榮鉢木」に佐野源左衞門。

安永八年正月、「綉曾我」に工藤と下部軍助、「助六」に伊藤祐淸。三月、「菅原」に菅丞相と松王。八月、「仇名かしく」に度會大和之助と佐五郎。十一月、市村座、「榮楠」に長濱新左衞門。

彼の「阿國劇場」の興行中、八月の末に至りて、常に幸四郎に快からざりし座頭の五世團十郎は、看客の前に彼れが非行を攻擊し、突然退座したりしかば、此れより幸四郎は同座の座頭たりき。

一たび中村座を去りし五世團十郎が此の時再び同座に復歸せしかば、幸四郎は其の根據地を失ひしに、當時市村座の座頭たりし尾上菊五郎が彼れを助けて其の座へ招きたるなりき。

安永九年正月、「曙曾我」に八幡三郎實は京の次郎、二番目に力士雷鶴之助、五月、「出入湊」に黒船忠右衛門、七月、「[illegible]」に[illegible]
數馬之助と饅頭屋太平次、「梅川」に忠兵衛、「葛城」に名古屋小三郎。十一月、同座、「群高松」に佐藤嗣信、伊勢三郎。

此の「出入湊」の時、菊五郎が彼れの專横を憤り、舞臺に其の事を述べて退座せる事は既に前期に於て菊五郎の條にいへり。斯くて、彼れは同座に殘りて座頭たりしなり。「戯場話」に據れば、當時彼れは、本町の富商越後屋佐兵衛の後援を得て一座に勢力を逞くし、暗に黨を結んで菊五郎を斥けんとし、又菊五郎に附屬せる狂言作者筒井半次（金井三笑が門人）を憎み、評判記「役者紫郞鼠」に半次一派を貶して、櫻田治助を揚げしめたりといふ。　又「脚色餘錄」に據れば、當時、市村座は興行損毛つゞきにして、俳優へ豫定の報酬を拂ふこと難かりしより、幸四郎は仕切場の手代彌兵衛と計り、豫定の額ならで出勤せさる者は除外し、收入に關せず出勤する有志の者によりて興行を續けんとて、大谷廣次、尾上民藏、等を退かしめ、又菊五郎には興行中に給金を拂ふべしと約して彼の「出入湊」を開演せしに、非常の大入なりしに拘はらず、期日に至りて菊五郎に支拂ふ所なかりしより、彼れは幸四郎が彌兵衛と結びて私曲を行へる事を疑ひ、且つ、「幸四郎が其の昔、市川武十郎といひし時の衆道の意氣地も根にありてや」斯かる不穩の行爲に及べりといひ、且つ幸四郎は始めて彌兵衛が奸曲を知りて之れを放逐したりといふ。兩說いづれが是なるを知らずと雖も、先きには亡師の子たる五世團十郎に擯斥られ、二年ならずして更に菊五郎

に反目せれらたるは、彼れが德行の上に於ける汚點たらずんばあらず。

天明元年四月、「萬代曾我」に工藤、二番目、「桂川」に長右衞門。七月、「室町殿」に幡隨長兵衞。九月、「梅川」に孫右衞門。十一月、同座、「雪雛形」に淺間左衞門、二番目に歌よみ樽次實は孔雀三郎。

天明二年二月、「柳伊達絹」に絹川谷藏實は奴軍助、「近頃戀世話」に井筒屋傳兵衞。三月、「龜山染」に石井右内。四月、「信田館」、「助六」に助六。九月、「濱眞砂」に石川五右衞門と豆腐屋太四郎。十一月、同座、「伊勢源氏」に源亘。

當時、市村座は財政困難愈甚しく、正月の興行には幸四郎自身も不平を唱へて休業せしが、一座の危急なるを見て無給にて出勤せんとせし事は既に前編にいへり。而して此の十一月に至り、久しく彼れと別座せる仲藏が加入して稍その衰勢を挽回する事を得たりしなり。

天明三年三月、「萬歲曾我」（仲藏の茶湯景淸）に工藤と重忠。五月、「忠臣藏」に由良之助と勘平。八月、「帷子辻」に釣船の三ぶ。十一月、森田座、「小野照崎」に額彫長右衞門、小野風流齋實は孔雀三郎、土器師丸太夫實は紀名虎。

天明四年正月、「閙曾我」に工藤、「夕霧」に伊左衞門、「梅川」に忠兵衞と母妙閑、「おさん茂兵衞」に荒五郎茂兵衞。七月、「戀女房」に左内と逸平、「今年入船」に名古屋山三、「二錦紅」（かしくと桂川）に福島屋淸兵衞と長右衞門。十一月、大阪、中村粂太郎座、「子顏見世」に三保の白龍と壬生七右衞門。

市村座より森田座に轉ぜし彼れは、同座も亦財政困難なりしより、終に岩井半四郎と共に上阪せるなりき。當時、乘込の儀式に、船中へ瓦礫を投ずる者あり、又糞尿を注ぐ者あり。彼れと半四郎は中途より微

行して漸く危難を免がれたりといふ。是れ先年菊五郎が彼れの爲めに迫害せられしを、大阪人の記臆して其の復讎をなせるなりき。又同時に菊五郎の遺孤尾上丑之助が角の芝居の座元たりしが、其の左右の者、丑之助に敎へて、座附の口上に、「中の芝居へは追つけこわい伯父樣が御座るとの事ゆゑ、其れがこわさに此の芝居へ逃げて參りました」と述べさせしかば、愈世の人幸四郎を惜めりといふ。

天明五年正月、「正月の陣立」に細川和泉守と白酒賣四郎兵衞。三月、「戀妬」に佐々木六角、浮世渡平、百助平。

彼れが出勤せる中の芝居は、此れきり火災の爲めに燒失せるのみならず、大阪人の感情を害して不評なりしかば再び江戶に歸りたりき。當時江戶にては、彼の市村座が借財の爲め愈破產して休座し、桐座これに代りて、且つ彼れの敵たりし五世團十郎が其處に座頭たりしが、茲に於て市川門之助の仲裁により双方の和睦成り、彼れは九年ぶりにして團十郎と同座せり。

天明六年五月、桐座、「壽曾我」に男達隱家の茂兵衞(團十郎の荒五郎茂兵衞と仲直りの趣あり)と揚羽の蝶吉。八月、「富町女文章」に名古屋山三。

此の後。與行表に其の名を見ざるは故ありて舞臺を退きしなるべし。斯くて翌年に至り、八年ぶりに中村座へ出でたり。

天明七年十一月、中村座、「榮花鉢木」に佐野源左衞門。

天明八年正月、「吾妻鑑」に幡隨長兵衞。秋、「高尾大明神」に雷鶴之助。十一月、同座、「唐相撲」に千利休と駕舁吾妻與四郎實は久吉（仲藏と「戾駕」の所作事）。

此の時より彼れは「大上上吉」となれり。

寬政元年正月、「陽曾我」に十郎と案の平兵衞。「荏柄天神」に重忠。七月、「平家評判記」に阿波の民部、「戾駕」（二度目）に吾妻與四郎。十一月、同座、「小町村」に五代三郎と毛物屋五郎又實は大江音人。

寬政二年正月、「伊達染曾我」に豆腐屋三ぶ實は鬼王新左衞門と浮田左金吾、二番目に力士桂川長右衞門。七月、「忠孝兩國幟」に羽生村與右衞門、天川屋義平、大星由良之助。

寬政三年正月、河原崎座、「幸曾我」に工藤と十郎。九月、「高麗屋經緯」に南與兵衞。十一月、中村座、「二代源氏」に幡隨長兵衞と平井保昌。

寬政四年二月、「櫻鯛一寸釣舟」に細川勝元と釣舟三ぶ。三月、「隅田川」に粟津六郎と土左衞門傳吉。（中村座、これより休業）。十一月、河原崎座、「鯱顏見世」に文身師横谷東民實は備後三郎。

此の時より「極上上吉」となれり。

寬政五年二月、市村座、「貢曾我」に馬士源五郎と町抱朝顏千太郎。五月、「忠臣藏」に由良之助と義平。七月、「桑名祭乘合噺」に磯貝實右衞門と桑名屋佐五郎。十一月、桐座（市村座の代櫓）、「雪伊達染」に渡邊民部と豆腐屋三ぶ。

寬政六年正月、「若榮曾我」に紀文大盡と吉田下部軍助、三番目に絹川與右衞門。五月、「敵討乘合噺」に月本武者之助と肴屋五郎

兵衞。八月、「梅川忠兵衞」に母妙閑と孫右衞門。十一月、河原崎座、「女楠」に正成と備後三郎。
寛政七年二月、「吉例曾我」に祐經と幡隨長兵衞。五月、「忠臣藏」に本藏。七月、「東伽羅」に渡邊民部、「妹背山」に大判事と鎌足。十一月、同座、「吾妻内裏」の二番目に茶の湯師通圓實は田原藤太。
寛政八年三月、「忠臣藏」に由良之助、「戀飛脚」に孫右衞門と妙閑。五月、「水滸傳」に月本武者之助。十一月、同座、「雪白觀」に重盛、二番目に殺生石の五郎太實は鎌田次郎。
寛政九年正月、「和曾我」に祐經、鬼王、粟津、釜屋武兵衞。五月、「菖蒲帷子」に南與兵衞。七月、「時今盛魁」に久吉。九月、「[illegible]天神」に福島屋清兵衞。十一月、中村座(再興)「柳錦木」に肴賣勘三ぶ彌兵衞實は三浦國妙。
寛政十年三月、「驪曾我」に八幡三郎。四月「妹背山」に鎌足。五月、「染分纓」に伊達與惣兵衞と馬士八藏。七月、「信田出來秋」に浮島彈正と米春八兵衞實は小山田多門、「大内鑑」に道滿、「女鉢木」に最明寺。十一月、休み。
寛政十一年三月、中村座、「助六」(六世團十郎)に伊藤祐清。四月、「忠臣藏」に一文字屋、石堂、義平。十一月、同座、「[illegible]」に下田の手習師匠保積伊織實は狩野茂光。
寛政十二年正月、「幸曾我」に鶯昇文殊の次郎兵衞實は重忠、二番目、「幡隨長兵衞」、「國藏」に品川伊平次。三月、「高尾伊達染」に豆腐屋三ぶ、「非人仇討」に高市武右衞門。五月、「千本櫻」に梶原。七月、「屏風浦」に柳川左島と船宿傳兵衞。九月、「赤松[illegible]」に今川貞世、二番目に蔦屋太郎兵衞。
これより京阪に上りしが、翌享和元年十一月に至り、幸四郎の名を其の子高麗藏に讓り、自ら男女川京

十郎と號し、享和二年六月廿七日、六十六歳にして病歿せり。

補　「名人忠臣錄」に據れば、彼れが男女川と改姓せしは五世團十郎と絕交せる結果にして、此等の事より益々世人の憎みを受け、何者にか刄傷せられて死せりといふ。

彼れが藝品を最も詳く評せるもの「劇神僊話」あり。曰く、

人品、男振、調子よく。小手きゝたれども、白眼と愁と敵と荒事とは少しもなき體……。

なりきと。又その例を擧げて曰く、

一年、左交（櫻田治助）が作にて、木挽町にて、土左衛門傳吉松助にて、初め立役、後に見出されて敵役、釜屋武兵衛幸四郎にて、初め敵役、後に立役、初の敵は山中平九郎の思入なりと聞きしが、いかにしても惡人とは見えず、幡隨長兵衛が腹を立てしと外は見えず。荏柄平太の和田右衛門（中島）を駕舁鷺の首太左衛門と見出す所、傳言（土左衛門）を奈良法師圓覺と見出す所は手輕くてこたへる事、外の役者の斷じて出來ぬ事。

といへり。これ彼れが敵役に劣りて立役に優れる一證なり。又曰く、

荒事は武十郎の昔、訥子（澤村宗十郎）賴政にて猪逸太のせり上げ、鵺退治の場を勤めたりしが散々の惡評なりと云ふ。夫より斷じて顏を塗らず、生涯白顏ばかりにて終れり。

更に彼れが長所を擧げて曰く、

男達相撲取など小柄なれども、よく移り、せりふの呼吸は是程の者其後なし……。重忠、帶屋長右衛門は古今絕倫。工藤は篤と手

に入らざりしが、晩年、江島の對面の工藤、隨念(四世團十郎)再生せしが如し。幡隨長兵衛は錦江、錦升(彼れが子五世幸四郎)に不及ぞ

といへり。尚ほ明和八年の「役者綱目」には「體やわらかにて色ある仕うち」といひ、安永三年の評判記



四世幸四郎の「幡隨長兵衛」(「似顏大全」より)

「役者位下上」には、彼を評して「少長(中村七三郎)の和みに訥子(澤村宗十郎)の思入あり」といひ、寛政二年の「役者紋選」には、「錦江國」と題して彼が藝風を諷し、

風俗柔和にして武士町人共に刀劍の術を得たり。多辯にして實儀もつぱらなり。しかしながら、色情深き武士有て色に亂るゝ事あり。又重つて意氣通じたる者多かりしが、今其事稀也。忠義なまもり仁義正しき士多し。

といへり。約言すれば、彼れは容貌と風采と音聲と辯舌とにまさり、其の得意は和事もしくは實事にあり。此の點に於て、彼れが藝風は同時代の京阪に於ける三五郎と好一對をなせりき。而して彼れが傑作には前に引用せる如く重忠及び長右衛門

あり、特に、

> 茶の湯の景清の重忠、錦江が如き其の比を不見。飴賣の唄にも、いつでも重忠よんすかんなんばアと謠ひしなり。

と「劇神僊話」に激賞せり。尙ほ曾我の十郎も彼れが傑作の一つたりき。謂はゆる「色立役」が彼れの長所なりしが、晩年には、工藤祐經、仁木彈正の如き役に扮して成功せり。口舌にすぐれたる彼れは又頗る諧謔に長じたりき。「劇神僊話」に

> 平日寡言なり、適口を開けば絶倒せしむるの語あり。余其類を輯めて錦考語錄と云ふ書を作らんと欲すること久し。

といひ、又

> 役者信夫石（明和三年印本）に、いつもしやれが過ぎ升、ちと引しめ玉へとあるは至言なり。何の役にてもしやれたがると、五代目團十郎の何の役にても白眼たがると同癖。白猿は由良之助に白眼所なしとて、四段目に短刀を持てにらみ、錦江は工藤にてもしやれる故、移りのわろきこと、秀佳（坂東三津五郎）が熊谷の物語出來たりとて工藤をさせたるに、赤澤山の物がたり動きすぎてゐるきが如し。

といひ、又享和七年の「役者人相鏡」に

> 享保年中の頃は、口合といふ事はやり、其時に口合を仕込んで藝に花を付けられし工風……。其頃の助高屋（宗十郎）少長（七三郎）などつい一言の口合がはんなりとおもしろく、人口にも殘りしぞかし。今は此人（幸四郎）一人、今後かやうなる藝風の人も出來まじ。

といへる、一は諧謔を以て彼れが缺點なりとし、一つは寧ろ彼れが長所なりとせり。又幸四郎の「はて宜うごぜえす」を白にいふ口癖ありき。後に坂東大吉が此れを眞似しかば、大吉が登場する每に、見物の方より「はて宜うごぜえす」といへりとぞ。

彼れは亦舞踊の素養あり、仲藏が所作事のシテとして成功せると同時に、彼れは、其のワキとして屢く成功したりき。又仲藏と同く作者櫻田治助と深く結托し、彼れが傑作の藝は大かた治助の筆に成れるなりき。

「秀鶴冊子」に幸四郎自身の藝談を載せて曰く、

よき金主あり、よき役者ありて芝居をこしらへるはノロマにても出來ることなり。金主も役者もなき困窮芝居にて、入ると入らぬとは水物なれど、二百日相違なく興行相續せれば太夫元へ座頭の役がたゝぬ……。

彼れが財政の困難なる市村座に據りて奮鬪せしも、此の抱負と氣概とのありたればなるべく、其の團十郎と鬩ぎ、又菊五郎に忌まれて世間の同情を損せしに拘はらず、尙ほ一部に人氣を有せるも此れが爲めならん。彼れは又曰く、

役者の出世は物入に構はず、衣裳を着るも我身代出世の種を蒔事なれども、何よりかよりも、諸人愛敬有て贔屓の多きほどつよきものはなし。たとへでんぼうにても、田舍はとや子傅女に迄も御ひゐきとあれば有がたし。贔屓の多き時は、上で[illegible]しなき評判、

まんざらと思ふ役廻りも、惡い所はいはず、少しにてもよさゝうなる所は大そうに聲のかゝろも、世話に申す通り、ひゐき目ならはよく見える故なり。ひゐき多いと役もつき、役がよいと藝が上り、藝が上ろと器量までも能く見え、兎角御見物には可愛がられたきものなり。

されば彼の京阪の嵐雛助が見物に對して皮肉なりしと異なりて、彼れは愛嬌を以て賣物とせろなりき。彼れが妻をお梅といひ、男子二人、女子二人ありしが、二子早世せりとは「役者穿鑿論」の記す所なり。其の男子の一は即ち五世幸四郎にして次の時代の名優なりき。

第六章　五世市川團十郎

舞臺上の經歴――其の藝風――彼れの人格――其の吟咏――立川焉馬――晩年の行狀。

仲藏及び幸四郎よりは稍後輩たりしも、其の門閥と及び其の聲望とによりて一代の牛耳を執れるを五世市川團十郎（成田屋三升、後に白猿、寛保元―文化三）とす。彼れは四世團十郎の實子にして、母は二世團十郎の養女たり。幼名を梅丸といひ、延享二年、幸藏と改め、寶曆四年正月、十四歲にして始めて中村座に現はれ、「百千鳥曲輪曾我」に義經嫡男經若丸に扮し、江戸節の淨瑠璃に虛無僧姿にて出でたり。同十一月、父が市川家に入りて始めて團十郎となりしと共に、其の舊名を襲ぎて三世松本幸四郎といひ、「外郎賣」の白に好評を博し、同五年十一月、「將門裝束榎」に幸壽丸にて二世坂東彥三郎と太刀打の仕草あり、次いで色惡に

轉じて、「曾我贔屓二本櫻」に金村屋の若者喜助に當りを取りたり。明和二年正月、中村座の「念力曾我」に、始て工藤に扮し、翌三年春、同座、「海道一伊達春駒」に座頭慶政、同十一月、同座「凱陣荒武者」に宗任、五年正月、同座、「曾我章」に梶原、六年正月、同座、「愛護稚松」に五郎、七年正月、同座、「係曾我」に京の次郎にて「外郎賣」の白を述べ喝采を得しが、此の時、中村仲藏始めて同座にて工藤に扮しき。又二番目は四世幸四郎(當時高麗藏といへり)の梅の由兵衛にして、彼れは丁稚長吉に扮し、前幕に瀬川菊之丞の下女おせんと萬年草を盥にひたして出合ふ所ありき。同年十一月、父四世團十郎が再び幸四郎に復名せると共に、彼れは始めて五世團十郎と改め、同く中村座の「鵺森一陽的」に熊井太郎に扮し、始めて「暫」を演じ、二番目に尾形三郎に扮せり(三十歳)。以後の舞臺上の經歴は●●●●●●

明和八年正月、「曾我年代記」に五郎、次いで「助六」。九月、「田村麻呂」に友成。十一月、森田座、「嵩月吉原」に荒獅子男之助、「暫」、梅津嘉門、地獄谷のようちん坊、不動の像。

安永元年正月、「鷄曾我」に景清と十郎、大詰に張飛。夏、「戀女房」に慶政と左内。秋、「紅葉傘」に澤田鍵形と八橋の亡魂(怪骨)。十一月、同座、「伊豆暦」に工藤金石丸。

此の時、始めて父と別座し、且つ始めて座頭たりき。

安永二年正月、「曾我羽觴」に工藤、二番目に外郎賣實に景清。五月、「物太草履」に作左衛門と奴岡平。九月、「鬱雪章」に守屋大臣、醴

見いちゐ、毛拔彈正。十一月、中村座、「御攝勸進帳」に熊井太郎(暫)、富樫左衛門、不動の像。

此れより評判記に「上上吉」の地位たりき。(三十三歲)

安永三年正月、「曾我雛形」に工藤。此れより市川門下悉く退座。十一月、森田座、「一富」に鈴木三郎(暫)、團栗のおさん婆、鞍馬の僧正坊。

安永四年正月、「蓬萊曾我」に工藤、團三郎、景清一子あざ丸。五月、「天竺德兵衛」に德兵衛。七月、「菅原」に輝國と時平。八月、「月都」に不破伴左衛門。十一月、同座、「菊慈童」に山姥、樽拾ひ五郎太實は幸壽丸、相馬太郎、白狐の化身。

安永五年正月、「富士姿見」に工藤。「平假名」に平次と重忠。五月、「苗曾我」に安の平兵衛實は井場十藏。「桔梗染」に蘆屋道滿と金剛夜叉。十一月、市村座、「雪黑主」に磐若五郎(暫)、檜垣婆、五代三郎。

此の年、彼れが實父四世團十郎は市村座に於て一世一代を演じて永へに退隱せりき。

安永六年正月、「羽衣曾我」に漁師善知鳥、外郎賣實は景清、三番目に毛拔彈正。五月、「安達原」に貞任と黑塚の婆。八月、「忠臣藏」に判官と平右衛門。十一月、中村座、「將門冠初雪」に加藤兵衛尉(暫)、二番目に廻國修行者實は將門。

安永七年正月、「和曾我」に工藤、浪人鷺坂左內、北條時政、駕舁七兵衛實は景清、不動の像。七月、「阿國戲場」に男之助と勝元。此より休業。十一月、森田座、「伊達錦」に八幡太郎と荒川太郎(暫)。

二年前に退隱せる實父四世團十郎は此の二月に病死せしが、七月興行の半ばなりき、彼れは同座せる幸四郎が陰險なる事を見物に告白すること三日にして突然退座し、終に仲藏の座頭なりし森田座へ投せ

しなり。「戯場談話」及び四世中村仲藏の筆記、等によれば、幸四郎が常に己の勢を恃んで彼れを排擠せるのみならず、父四世團十郎に阿諂して親子の間さへ疎外せんとせしを怒りしなりと言へれど、彼れは其前年物故せる二世市川八百藏の寡婦と通じ、「八百藏が、後家へさんじよう仕り」といふ落首を掲げられ、此の讀賣の世上に唄はれしかば、平賀鳩溪が戯れに「飛んだ噂の評」安永七年九月」を著はして彼れを辯護せるあり、是れより先き、久く彼れと別居せる妻は終に離縁を請ひ、公けに彼の寡婦と結婚するに至れり。彼れが家庭の斯くの如く紊亂せるのみならず、父四世團十郎の死して、門下生等は彼れに反き、暗に幸四郎に心を寄する者多かりしより、玆に其等の餘憤を漏らせるならん。

安永八年正月、「綠曾我」に工藤と景清、二番目に白井權八、「兜軍記」に岩永。七月、「夏祭」に一寸德兵衛。八月、「忠臣藏」に本藏と勘平。十一月、中村座、「英雄太平記」に篠塚伊賀守(暫)と藥師寺次郎左衛門。

此の藥師寺に好評を博して、是れより「極上上吉」に進みたり。(三十九歲)

安永九年正月、「曲輪曾我」に工藤と景清、二番目に極印千右衛門。五月、「十帖源氏」に作左衛門、「夏祭」に團七。七月、「風流文月」に高坂彈正と中尾輝虎。九月、「忠臣藏」に判官と本藏。十一月、同座、「錦壯貌」に上總五郎兵衛と伊勢平太實は手塚太郎、二番目に宗清と不動の像。

去年、彼れが中村座に復歸せしと共に、幸四郎は其處を去つて菊五郎の座頭たりし市村座に據りしが、

同座にて又も菊五郎と隙を生じ、菊五郎は此れが爲め急に市村座を脫して西歸せんとせしを、團十郎は己が中村座へ聘して其の名殘狂言として由良之助を演ぜしめ、非常の大入を取れるなりき。

天明元年正月、「小町曾我」に工藤と外郎賣實は景清、「在原系圖」に飛脚忠治。七月、「島原軍談」に天竺德兵衞と月本武者之助。八月、「信田長者柱」に小山判官と阿房杵藏、二番目に日の出の五郎八。十一月、同座、「四天王」に坂田金時と平井保昌。

天明二年正月、「粧曾我」に鐵挺の三、荒五郎茂兵衞、艾賣三升屋十兵衞實は景清、次に「助六」。八月、「伊達染」に名古屋山三、豆腐屋左治兵衞、土手の道哲。十一月、同座、「五代源氏」に三浦平太夫、修行者實は貞任、愛染明王。

天明三年正月、「三升曾我」に工藤と淸玄（骸骨の所作）。五月、「忠臣藏」に由良之助。九月、「晴相撲」に南與兵衞。これにて中村座燒失。

天明四年正月、同座、「筆始勸進帳」に熊井太郎（暫）、富樫左衞門、盜賊三條衞門實は伊勢三郎、源八兵衞、横川覺範、景清。三月、「娘長者」に工藤、鬼王、團三郎、「助六」に意休。七月、「千本櫻」に權太、辨慶、覺範。八月、「忠臣藏」に本藏と義平。九月、「大内鑑」に道滿。十一月、同座、「蛭小島」に股野五郎、曾我太郎、地獄谷淸左衞門坊主實は文覺。

天明五年正月、「親曾我」に八幡三郎、傀儡師實は京の次郎、二番目に油屋九平次と景清。三月、「櫻舞臺」に伴左衞門、山名宗全。七月、「累詞」に女房累と高坂彈正、「出世鑑」に光秀。十一月、桐座、「娵源氏」に仲光、箕田源吾（暫）、柴苅實は足柄山の山神。

天明六年四月、「壽曾我」に古郡新左衞門と工藤奥方岩藤御前、二番目に荒五郎茂兵衞。八月、「女文章」に局淸瀨と不破伴左衞門。十一月、同座、「伊豆幡揚」に三浦荒次郎（暫）、白升婆、北條時政。

多年敵視せる四世幸四郎は彼れと和睦成りて、此の「壽曾我」の二番目より同座に出でたりき。

天明七年正月、「幸曾我」に梶原源太と景清。「忠臣藏」に由良之助。「天竺德兵衛」に德兵衛。十一月、同座、「時花嫁」に佐野源左衛門、修行者實は淺間左衛門。

天明八年正月、「傳曾我」に工藤、團通七兵衛實は景清、「高野山心中」に玉屋與次兵衛、「居續噺」に由比の[illegible]常悔。八月、「高尾[illegible]」に男之助、片桐彌十郎、薪屋惣八、賴兼。十一月、市村座(再興して桐座に代る)、「源氏再興」に三浦荒次郎(暫)、修行者快山、鈴木三郎、篠士福作。

寬政元年正月、「假名書曾我」に工藤と景清、二番目に荒五郎茂兵衛。五月、「三十石」に信田左衛門と淀左近之助。六月、「忠臣[illegible]」に由良之助。八月、「契情容儀」に豆腐屋戸平と勝元。十二月、同座、「將門祭」に將門と福祿壽の像。

寬政二年正月、「存曾我」に近江八幡之助實は景清と巴御前、二番目に百姓十七兵衛と丹波屋助太郎、次に「鳴神」。「木母寺由來」に文覺。夏、甲州に赴く。十一月、河原崎座、「大從勸進帳」に熊井太郎(暫)と裏白はね平(實は源八兵衛團子實の辨作)。

寬政三年正月、河原崎座を去つて駿州甲州に赴く。十一月、市村座、「源家角鐔」に澁谷金王丸(暫)、宗清、山賤實は文覺。

此の時、改名して市川鰕藏といひ、六世團十郎の名を其の子海老藏に讓りき。(五十一歲)

寬政四年正月、「江戸子曾我」に景清、近江小藤太、工藤、二番目に油屋九平次、三番目に佐々木岸柳。五月、「[illegible]」に由良之助、植木屋十兵衛、平右衛門。七月、「戀女房」に慶政。八月、「掌白猿」に荒木左衛門と毛[illegible]。九月、「妹背山」に鱶七。十二月、河原崎座、「鰕顏見世」に木樵谷藏、えびざこの十後に亘新左衛門、畑六郎左衛門、二番目に六部實は長崎勘解由左衛門。

寛政五年正月、「相撲曾我」に工藤、二番目に幡隨長兵衛、三番目に植木賣實は景清。三月、「鏡山」に岩藤、切に「矢の根五郎」。四月、「八百屋お七」に土左衛門傳吉。八月、「姫小松」に俊寛と重盛。十一月、同座、「花麗源氏」に物部平太、茨木長兵衛實は相馬太郎。

寛政六年正月、「愛敬曾我」に和田義盛、釣鐘彌左衛門、景清。「戀女房」に定之進、「千本櫻」に覺範。七月、「二木松」に仁木彈正、戸隱屋三ぶ、亂脈の吉、勝元、次に毛拔彈正と鳴神上人。九月、「忠臣藏」に師直、義平、由良之助。十一月、桐座、「男山」に鎌倉權五郎(暫)、鎌倉權太夫實は貞任、二番目に郡山の氣おひ金作次郎。

寛政七年正月、「褐曾我」に工藤と梶原源太、二番目に土左衛門傳吉。三月、「廓花道」に松下嘉平次と石川五右衛門。五月、「忠臣藏」に本藏、義平、師直、「八百屋心中」に八百屋後家。十一月、河原崎座、「吾妻内裏」に參議忠文、山賤實は三田仕、二番目に獸賣清左衛門實は將門。

寛政八年正月、「曾我幗」に工藤。これより休業。十一月、都座、「大當源氏」に碓井貞光(暫)、修行者實は相馬太郎、二番目に山姥の分身。

當時彼れは五十六歲、此れを一世一代として舞臺を退き、成田屋七左衛門と改名して向島に閑居し、只狂歌俳諧を樂みしが、寛政十年の冬、彼れが義弟たる岩井半四郎に再勤を勸められしも肯んぜず、只實子六世團十郎が座頭となりし禮にとて、中村座に口上を述べ、且つ毎日狂歌一首づゝを披露して再び退隱せり。然るに六世團十郎は翌寛政十一年に夭折し、彼れが外孫海老藏十歲にして、更に十二年十一月、七世團十郎の名を襲ぎ、市村座に現はれしかば、市川家元祖百年忌の壽を兼ねて「だんまり」の一幕だけ

に出勤し、修行者實は大友山主に扮したりき。

此れより再び向島に蟄居せしが、翌享和元年十一月、河原崎座の俳優に乏く、特に座頭の市川男女藏が病氣に罹りて殆ど開場むつかしかりしかば座元河原崎權之助は市川家と緣故あり、且つ當時同座の立女方たりし岩井粂三郎の父は彼れが義弟なる半四郎なりし緣故により、其の再勤を請ふ事切りなりしより、彼れは已むを得ずして三十日間無給にて出勤すべき事を諾し、「名歌德三升玉垣」に盤若五郎にて暫をつとめ、又修行者實は大友山主に扮し、續いて翌享和二年二月、同座の「初紋日艶郷曾我」に工藤と景清(牢破り)、更に二番目の大切なる粂三郎の「道成寺」に海老名源八(押戾し)に扮せしが、五六日きりにして舞臺を退き、此れを最終の藝として文化三年十月廿九日、六十六歲にて歿せり。



五世團十郎の「暫」(「役者見手柏」より)

彼れの容貌が父四世團十郎に似たるが如く、其の藝風も亦四世團十郎に似たりき。即ち四世團十郎が最初實惡を專門とせしが如く、彼れも亦幸四郎時代には實惡を其の本領となし、特に、景清、工藤、及び將門、等が終生得意の藝なりしのみならず、「兜軍記」の岩永、「盛衰記」の平治の如き平敵にも屢喝采を博せり。而して團十郎を襲名せる明和八年前後よりは寧ろ實事を主とし、特に「忠臣藏」の由良之助に扮せるは市川宗家に於て彼れを最初とす。又俠客に扮しては、荒五郎茂兵衞、幡隨長兵衞、女人に扮しては、累、山姥、檜垣、岩藤、巴御前、八百屋心中の母親、痴漢に扮しては、百姓杵藏、丹波助太郎、等あり。此等孰れも四世團十郎の藝品を襲げると共に、他の一面に於ては義祖父たる二世團十郎の風をも兼ね、「助六」「鳴神」等に成功し、又純粹の荒事に於ても「暫」と曾我五郎とは彼れが得意の藝として屢繰返せるものなりき。只荒事に於て彼れの缺點は其の足の長き割合に體軀の餘りに瘠せたる事にして、「役者今文字摺」に此の弊を舉げて

此の上はよき藥を以てもちつと太りを付けたいもの。役がらにより少し見にくきことあり。

といへり。

彼れは亦頗る辯舌に優れたりき。されば二世團十郎の得意なりし「外郎賣」を屢演じて喝采を博せり。加之、舞踊にも多少の素養ありて、「山姥」、「檜垣」の如きは能の所作を演じたりといふ。且つ同時代

の淺尾爲十郎及び尾上松助によりて頻りに行はれし「早變り」をも彼れは屢々舞臺に演じたりき。要するに、四世團十郎と二世團十郎との特色を打して一丸とせるもの、即ち彼れの藝風なりきといへば大差なからん。「役者今文字摺」に彼れを評して曰く、

全體幸四郎の時より藝風大場にして、役がらに忌嫌ひなく、如何やうなる見えのわるいことでも致さるゝは大立物になるべき仕得なり。幸藏の古へは中比の坂東(彦三郎)などゝ引合はせては餘程劣りたる評判。それといふも、こな付け、惡語ちといふ事なせず、只一筋に狂言の道を立てらるゝゆゑ、終に江戸名物とならるゝは、いかい手柄なり。

茲に言へる如く、彼れの壯時は何等の聲名なかりしが、何時しか先輩たる仲藏及び幸四郎を凌いで江戸の劇壇に第一人と稱せられしは、亦彼れが父四世團十郎と同く晩成せる大器なりしなり。或る人、彼れに對つて、「こなたは舞臺の藝を大まかになさるゆゑ大まかな事を團十郎藝者と申すが、ちと魂膽をなされ、細かい事も工風して御らうせぬかや」と言ひしかば、彼れは答へて曰く、

我等、下根多病にして心を勞する事一向ならざるゆゑ、若き頃より魂膽を捨てゝ致さず。さりながら、壯年の頃より只一つ工夫する事あり。平清盛になり、日を招き返す狂言をせば、此のせりふ如何いふべきやと、此事ばかり考へ居れども、五十一年の間、此の工夫ひらけず候。日輪暫く止まり候へと言はゞ慇懃に成りて清盛が弱くなるべし。日輪暫く止まれと言はゞ存在過ぎて人柄惡しかるべし。今に此の工夫開けず。是れより外に魂膽工夫したる事なし。むづかしき所は、路考(菊之丞)、杜若(半四郎)、錦升(幸四郎)などに談合して敎へて貰へば事は足るゆゑ、當年五十一歳まで魂膽は致さぬ。

彼れは又曰く、

故人門之助申し候は、敵役寳物を盜み所持して居る、和事仕難儀の場へ捌役出で、此の御寳の盜人も大概そこらにといふと、敵役懷を押へて顔で思入すると、見物がイヨ細かいと譽める。此の樣な滅法な事はない。其れでも己らや親方を下手だといふは何うしたものだと笑ひし事あり。上方は其情を寫し、言葉も其れに應じて靜かにいふ事あるべし。江戸は芝居大きく廣ければ、調子低きものは形にて狂言を見せ、又せりふの言廻しにて見物も譽めるゆゑ、世話事にても大きく強くいふ。細かなる事にかゝりては淋くなる。派手をおもにして心に其役の性根を含む、……。とかく、市川流は狂言を大まかにして其の氣性を持つてするが專一なりと申傳へて御坐る。(「役者此手嘉志和」)

此等の言、當時の俳優がせゝ細しき枝葉の穿鑿に陷りて、技藝の大本を失せるを嘲ると共に、彼れの藝風が謂はゆる「大場」にして「こぢ付け惡落ち」といふ事をせず、唯一筋に狂言の道を立」つるを主とせるを知るべし。

彼れは若年より多病なりき。其の體格の瘠せたるも一は此れが爲めならん。又彼れの父が藝道研究の爲め催せる修行講へ、仲藏及び幸四郎が熱心に出席せるに反し、ひとり彼れが無頓着にして、「唯酒を呑み、俳諧などを樂み居り」し事は既に四世團十郎の條下に記せり。「役者黨紫選」の傳ふる所によれば、或る時、相者の彼れを見て、此の人二の座に付くべし、一の座に付くべからず、然れども心の行ひによりて秀づる事あるべしと言ひしより奮勵して出世せりといふ。而も彼れは斯くの如く私かに技藝の精神に

苦心せるより、他の同輩の如く齷齪たる枝葉の穿鑿を忌みたるなるべく、随つて早くより一般に其の伎倆を認知さるゝ事を得ざりしならん。尚ほ彼れが謂はゆる「役がらに忌嫌ひ」なかりし實例は、安永四年十一月、森田座に座頭として白猿の化身に扮せし時、大詰の幕切に大谷廣次に踏まへらるゝ科あり、評判記「役者通利句」に之を非難して曰く、

今まで大詰の切の見えも、子供の時分から見て来たが、一座の座頭が毛だ物になつて人の足の下にふまへられて、首ばかり出して出たといふ事、大昔あつたかは知らぬが何の事だ。全體、今度三升(團十郎)がおとなし過ぎるからの事だ。

格式の嚴なる劇場の習慣よりいへば、斯かる不名譽なる役廻りは斷乎として拒絶すべきを、彼れは斯かる點に於て常に洒々落々たるなりき。而して其の襟度の大にして細事に拘泥せざりし事は即ち彼れをして後年の大飛躍を成さしめたる所以なりしなり。

謂はゆる「俳諧などを樂み」て修行講を怠りしと自ら言へる如く、彼れが文筆に對して多大の趣味と才能とを有せし事も、其の技藝と密接なる關係を有するものならん。「役者穿鑿論」に彼れの人格を評して曰く、

此の人、正直にてわる氣なく、役者には珍らしき氣象、實に戯場の君子とも申しませう。第一、俳諧を能くいたされ、江戸役者での手書き。それに祖父栢筵(二世團十郎)學問をしつけられしに、近頃また山口なにがしの門人となり、唐本もいつすと讀みます。

即ち彼れは二世團十郎の薫陶によりて其の遺風を襲ぎ、三升、白猿、又晩年には反古庵と號して俳句を能くし、又花道のつらねといふ狂名により狂歌をも詠じたりき。彼れが自記に曰く、

我稚き時（十四歳）、祖父栢筵の膝のもとにとし月遊べるに、或年の菊月重陽の日、祖父の我に向ひ給ひて、

いふてみや菊栗きくくりみきくくり

と重陽の絶句なかけられしまゝ、余即席に

申候合せて菊栗六きくくり

と返しに吟じければ、祖父微笑して、汝滑稽の才に富り、末頼もしと祝ひ給ふ。

彼れが機智に長じたるは斯くの如くなりしなり。其の吟咏のうち最も人口に膾炙せるは、

梅は[illegible]は柳かな

もろこしの屈原は江潭にさまよふ、我は世の濁りも知られば、

隅田川漁父にもあはず風引いて
白猿ひとりはなたれにけり

彼れが狂歌は下にいふべき立川焉馬の諸著述に採錄せられたり。又別に焉馬と合作の「五百崎蟲評判」あり。役者評判記に擬して蟲の月旦をなせるものにして亦彼れが文藻を知るに足る。又彼れが「古今集」の序に擬して當時の俳優を月旦せる戯文あり。

芝居とは人の心を種として、萬のなぐさみとはなれりける。市紅(團藏)は路考(菊之丞)が上にたゝん事かたく、路考は市紅が下にたゝん事かたくなんありける。此頃名を得し人には、市川の新車(門之助)貌のさまを得たれども實少し。たとへば繪にかける女を見ていたづらに心を動かすが如し。坂東薪水(彦三郎)は心餘りて言葉足らず。たとへばしぼめる花の色なくて匂ひ殘れるが如し。小佐川の巨撰(常世)は、はじめ終りたしかならず。たとへば秋の月を見るに、曉の雲におほへるが如し。坂東秀佳(三津五郎)は言葉たくみにして、いはゞ商人のよき衣きたらんが如し。岩井の杜若(半四郎)は衣通姫のながれにて、弱からぬやうにて哀れ深し。いはゞよき女の惱める風情あるが如し。松本錦江(幸四郎)はそのさまいやし。いはゞ薪を負へる山人の花の蔭に休めるが如し。

されば、彼れは當時に於ける江戸の諸文人と頻に往來し、特に狂歌壇の泰斗たりし太田蜀山と相親かりしは、猶ほ二世團十郎が當時俳壇の大家たりし其角に於けるが如く、享和元年に河原崎座が彼れに再勤を請ひし時座主權之助等は蜀山の紹介によりて始めて其の向島の寓居を訪へりといふ。尚は蜀山と同く狂歌壇の一人たりし立川焉馬の如きは寧ろ彼れを崇拜して義兄弟の約をなし、其の住居は彼れが舞臺に用ひたる衣服器財と其の紋章とによりて装飾し、又「歌舞妓年代記」を著はして頻りに彼れに讚美の言を呈せり。鈴木白藤の筆記に此の書を貶して

五代目白猿の如き、所作事、太刀打、實事、やつし、武道、愁嘆、一つも出來ず、上もなき大下手なりし。たゞ贔屓はかりはよかりしを、其書に名人の如く書下せり……。

とあり。又焉馬は別に彼れと市川家累世との傳記もしくは其の賛咏を集めて自ら出版せるもの、「團十郎晶屓」(天明七年)、「御江戸飾鰕」(寛政三年、六世團十郎襲名の時)、「美満壽組入」(寛政八年、五世團十郎一世一代の時)、「今日歌白猿一首」(寛政十年、六世團十郎初座頭の時)、「七世嫡孫」(寛政十二年、同上)「珠數の親玉」(文化四年五世團十郎死亡の時)「以代美満壽」(文政二年、五世團十郎十三回忌の時)、等あり。又前に言へる如く、平賀鳩溪が「飛んだ噂」を著はして彼れを辯護せるも、一つは平常よりの風交ありし爲めならんか。要するに當時のジョンソン倶樂部たりし狂歌壇に於て彼れはガアリックの地位たりしなり。

【註】焉馬が談洲樓と號せるは「團十郎」の音に通ずればなり。其の相生町の住居は、上り口を六尺四方の三升形にして、上には五世團十郎が男之助に扮せし時の上下もてつくりたる揚幕を掲げ、二階の二室は疊に三升の模樣を織出し、其の一室の天井は竹もて三升形に組み、一室は同く三升形の網代天井とし、其他、障子の骨に至るまで三升ならざるはなく、襖及び疊の縁には團十郎が「暫」に着用せし柿色の素袍を用ひしといふ。

前に述べたる彼れが再婚は、其の歴史中の一汚點たるを免れずと雖も、晩年の行狀は、謹直謙遜、且つ質朴を以て知られき。彼れが鰕藏と改名し、又俳號を白猿となづけし時に其の理由を述べて曰く、

祖父、親は海老藏の文字を付けましたが、私がえびはざこ鰕の文字を用ひまする。又祖父は栢莚、親は五粒、悴は柏筵　私はしろざ

ると書いて白猿と申します。此の心は名人上手に毛が三筋足らぬと申す儀でござります。

其の謙遜の意深きを知るべし。而も此の口上の高評にして見物の多かりしかば、「口上で入りのあること は恥の內」とて僅かに四日きりにて中止せりといふ。

彼れは斯くの如く自ら持すること謙讓なりしと同時に、又技藝の上に於ては大いなる抱負を有せり。

嘗て自ら語つて曰く、

大阪より三十日勤め呉れられよとの事、則ち金二百兩持參、然れども所緣もなき許などへ賴みの狀遣はすまじと申すゆゑ斷止まる。役者の抱引に所緣なき許へ賴狀遣はす事は此道のかけとなるべしと言つて斷はりし也。(東の花勝見)

藝術家として見識の高きこと今日の俳優よりも數等の上なるを見るべし。而も、彼は部下の者の爲めには此の見識を犧牲に供して悔いざりき。寛政元年六月、「間あつて土用休み、七月まで七八十日、興行も如何と申す沙汰、芝居がゝりの者難儀の由相談に及」びしかば、彼れは答へて曰く、

昔より市川代々、土用中は相休み候へども、私に於ては罷出づべし。其の時、皆々先祖に背きしと笑はゞ我が目當は格別なり……。私先祖四代は名人上手なり、其れゆゑ土用休み致したりとも人尤もといふべし。我が未熟なる技藝において其のまねをせんよりは、今芝居がゝりの下々、元手のうして難儀なるべし、先づ興行が專一なり。…………

もしも不當りならば給金も取るまじと、「忠臣講釋」に由良之助をつとめて大入を取れりといふ。又次

いで、翌寛政二年の夏は甲州に赴き、其の翌年も正月より駿州甲州を巡業せしかば、初世及び二三世の團十郎が西上せしに拘はらす、四世と彼れとは一たびも京阪の地を踏まず、而も市川家に先例なき三都以外の舞臺に現はれしを非難する者ありしと雖も、其の部下の爲めには己が見識を犧牲とし、且つ細事に拘泥せざる彼れが義俠と洒脱とは寧ろ藝園の美談とすべきならん。

彼れが退隱する少し前なりき。寛政五年、岩藤に扮せし時、紀眞顏が山東京傳及び京山の兄弟と共に其の樂屋を訪ひしに、彼れは恰も弟子に襟白粉をつけさせながら、其の無禮を謝し、

昨日も顏に白粉つけさせながら淚をおとし候。御素人樣ならば、悴へ家業を讓り、隱居をもすべき歲なり。然るにいやしき役者の家に生れしゆゑ、歲にも恥ぢず、女の眞似するは如何なる因果ぞ。役者としてこゝに心づきては藝にも艷なく、能く舞臺は勤まらぬものなり。

とて頻りに落淚して嘆息せしが、果して二三年の後、向島へ退隱したりといふ。父四世團十郞の例にならひ、斯くの如く未だ六十歲に滿たずして舞臺を退き、晚年を全うせしのみならず、以後再勤を請ふものあるも、世間に對して其の言を食まんを憚りて之を斥け、只止むを得ざる事情によりて、漸く前後二回だけ再勤せしが如き、亦彼れが謹厚方正の人なりしを證すべし。而も其の向島に退隱するや

景淸の役の衣裳を脫捨て、

今は日向のこうたうなり

と自ら詠せし如く、力めて衣食住を質朴にし、「隠宅は人の孫店にて、六疊に勝手のみにて天井張らず、茅屋根の裏みゆ。庭よりの上り口に双六盤のやつれたるを据ゑて階段とす。三尺の佛壇ありて間窓を開き、内に小石を敷き、瀬戸物の佛具あり。正面に佛像はなくて、白紙一枚を張り」たり。或る時、山東京傳が弟京山及び眞顔と共に其處を音づれ、「佛像なくて白紙あるをいぶかり問ひけるに、彼れは打笑みつゝ、能く見たまへ、あの紙は西の内なりと答へ」しといふ。又、天井に竹を渡し、開きたる屏風の載せてありしを、眞顔が尋ねければ、彼れ曰く、風ふけば硯に塵おちて物かくにおしき故なり、此の屏風につけて狂歌あり、先生いかゞあらんや、とて

天井を張れば鼠はさわぐなり
水も溜まらず月も宿らず。

と口ずさみしとぞ。「隠居の雑費は一月に金二歩づゝと定めたるを娘より送られ、「私」のやうに世を捨つれば隠居なるべきに、奢る心を捨てざるゆゑ、いつまでも顔を塗り候」と語れりといふ。

又劇場に關係する者には面會を謝絶し、且つ將軍家の「御放鷹など此邊に御成ある時は、河原者の身として御通路の傍に居ること畏憚るべきなりとて、其の日は必ず去つて堺町の本宅に避け、尙は衣服をつ

くるに曾て一色のものを用ひず、別色のきれを縫接ぎて之を着し曰ふ、卑賤の人家貧からずと雖も、美服を着るは尊卑を辨ぜざるなりと」。尙ほ享和二年春に再勤せし時、近年華麗なる事を謹み候やう御觸れのありたればとて、「天鵞絨鬘の臺鍋を黑木綿にて張り、「祐經の衣裳は桃色の練絹の袖と腰に白練をはぎ繼ぎて、子持筋を摺込み熨斗目とし、下は白無垢の襟と袖に重ね着したるやうに縫ひくけ、人形仕立」にせりといふ。

彼れが妻は八世羽左衛門の姪にしてかめといひ、二女ありしが早世し、後に桃太郎といふ男子を生みしも、桃太郎は安永五年十月、八歲にして死せり。又夫妻の間相熟せずして久しく別居し、終に離婚して八百藏の寡婦るやを後妻とせし事は既に前に述べたり。別にすみ及びはるの二女と德藏といふ一男を儲け、此の德藏即ち六世團十郎たりしが、六世は寬政十一年に二十二歲にて夭折し、更にすみの子にして己が孫たる新之助をして七世團十郎の名を襲がしめたる事前に言へる如し。尙ほ弟分としては彼の四世松本幸四郎及び五世岩井半四郎あり、共に同時代の名優たりしのみならず、門人にして著名なりしものに三世八百藏及び初世男女藏ありき。

第七章　江戸に於ける其の他の立役と敵役

二世市川門之助――其の技藝。――尾上松助――舞臺の經歷――彼れが體格――其の本領――「鏡山」の岩藤――早變りの技術―天竺德兵衞。――三世大谷廣次――舞臺上の經歷――彼れの藝風。――三世澤村宗十郎――舞臺上の經歷――其の傑作―彼れが藝風――二世市川八百藏。――三世八百藏。――坂東三津五郎。――二世三津五郎。――二世中村助五郎

●二世市川門之助（瀧野屋新車）（寛保三―寛政六）は江戸に生れ、父を都八重太夫（實名重岡重兵衞）といひ、王子瀧の川に住せり。彼れは幼名を千吉といひ、大阪に上りて瀧中鶴藏と稱せしが、寶曆六年、江戸に歸り、同九年、秀松と改め、同十二年（二十歲）、故人初世門之助の家に養子となり、且つ四世團十郎の門に入りて、廣藏と改め、若衆方たり。明和七年（廿八歲）十一月に至り、中村座にて始めて二世門之助の名を襲ぎ、「鶴森一陽的」に信西娘辨の內侍（所作事）實は守仁親王（實事）をつとめたり。

明和八年正月、「曾我年代記」に馬七實は小栗家來池庄司、二番目に久松。四月、「忠臣藏」に小浪。十一月同座、「小野五文字」に井筒業平。

安永元年正月、「曙草紙」に曾我五郎。十一月、同座「海老團篠塚」に大塔宮と虛無僧。

安永二年正月、「和田酒盛」に愛護若と七藏（長吉殺し）。五月、「伊勢神風」に井筒女之助。七月、「片岡山」に聖德太子、「菅原」に櫻丸。十一月、「御攝勧進帳」に下河邊行平と駿河次郎。

安永三年正月、「曾我雛形」に五郎。十一月、中村座、「大岩戸」に眞田與市。

安永四年正月、「青柳曾我」に義經公實は經若丸、二番目に久松。八月、「出世太平記」に小西彌十郎と細川與一郎。十一月、森田座、

「菊慈童」に箕田源太（荒事）と源頼信。

安永五年正月、「富士姿見」に五郎と團三郎、「平假名」に巴御前。五月、「苗曾我」に雁金文七實は曾我五郎。「桔梗染」に左近太郎。

十一月、同座、「矢聲太平記」に義貞と百姓太郎作實は篠塚伊賀守。

安永六年正月、「小袖曾我」に箱王丸と狩野之介茂光。七月、「新田大明神」に義峯。十一月、中村座、「冠初雪」に貞盛。

此の時、始めて元服して若衆方を廢し、立役の部に入れり。（三十五歲）

安永七年正月、「和曾我」に五郎、本田次郎、二番目に揚羽の長吉。七月、「阿國戲場」に女之助と鹿之助。十一月、同座、「榮鉢木」に青砥五郎。

安永八年正月、「雛曾我」に箱王と團三郎。三月、「菅原」に櫻丸。八月、「し°」に靫負之亟と六三郎。十一月、「英雄太平記」に奴瀧平、二番目に大館左馬之助。

安永九年正月、「廓曾我」に五郎と雁金文七。五月、「夏祭」に德兵衞。八月、「越路文月」に原隼人。九月、「忠臣藏」に石堂と勘平。

十一月、市村座、「群高松」に熊井太郎（留）。

天明元年四月、「萬代曾我」に五郎、二番目に八百屋嘉十郎、奴團助、淸十郎。七月、「室町殿」に本庄左門と奴土佐平。九月、「夏祭」に玉島巴之丞。十一月、中村座、「四天王」に季武、二番目に修行者實は五位之助忠家。

天明二年正月、「粧曾我」に五郎、二番目に幸助（菊之丞のおきく）。八月、「伊豆染」に男之助と石堂內記。十一月、同座、「五代源氏」に萬歲實は鎌倉權五郎と佐伯藏人、二番目に駕舁實は荒川次郎。

天明三年正月、「三升曾我」に五郎と清玄、二番目に二人淺間(女方)と白藤源太。五月、「忠臣藏」に判官と十太郎。八月、「腕相撲」に放駒長吉。

天明四年正月、中村座、「筆始勸進帳」に鈴木三郎、二番目に肴屋小六、「牢破の景清」に重忠と夢判じの長兵衛實は三保谷四郎。三月、「娵長者」に五郎と朝比奈、二番目にお初德兵衛。十一月、桐座、「小町櫻」に般若五郎(暫)、安貞、同弟宗貞。

天明五年正月、「詞曾我」に十郎と吉野屋酒樂實は吉田の下郎軍助。三月、「關七騎」に磯之丞と德兵衛。七月、「音頭瀬戸」に小松屋宗七。十一月、同座、「娵源氏」に平井保昌と怪童丸、二番目に深雪之助。

天明六年正月、「壽曾我」に團三郎と稻野屋半兵衛。八月、「室町女文章」に男之助。十一月、同座、「伊豆幡揚」に常盤井の市作。

天明七年正月、「幸曾我」に工藤(初役)。「天竺德兵衛」に宵寢仁助、「三勝道行」に長作。十一月、同座、「三庄」に常盤井次郎と二階堂信濃之助、二番目に皮剝門兵衛。

天明八年正月、「優曾我」に鬼王と八幡三郎、二番目に山家屋清兵衛と力士玉の井。「居續咄」(由比正雪)に鞠ヶ瀬秋夜。八月、「高尾宮」に女之助、彦惣、熊田源吾兵衛。十一月、中村座、「唐相撲」に小田春永。

寛政元年正月、「陽曾我」に五郎、二番目にお染。夏、「平家評判記」に長谷部信連。六月、「阿波鳴門」に玉木左馬之介。十一月、同座、「小町村」に五位之介、般若五郎、大屋太郎兵衛。

寛政二年正月、「伊達染曾我」に十郎、二番目に足輕曾根崎德兵衛。秋、「兩國織」に早野勘平と金屋金五郎。十一月、市村座、「峯楓」に篠塚伊賀守(暫)、備後三郎、二番目に百姓與五藏實は相模次郎。

此の時より「上上吉」に進みたり。(四十六歲)

寛政三年正月、「江戸曾我」に五郎と「葱賣」の所作。「壺碑」に奴伊達平實は義經公達冠者太郎と「助六」（宗十郎と一日替り）。「伊賀越」に大内記。秋、「室町文談」に蘭丸、久吉、曾呂利。九月、「吉原雀」に浮田重三郎。十一月、同座、「源家角鐔」に伊藤九郎、肴屋實は鈴木三郎、二番目に亀王。

寛政四年正月、「江戸子曾我」に十郎、二番目に平野屋徳兵衛。四月、「白髪岸柳」に月本武者之助。五月、「染井鉢植」に桃井播磨守と貝原伊助。八月、「掌白猿」に大道寺田畑之助と桃太郎。九月、「妹背山」に入鹿と大判事。十一月、同座、「伊達大門」に辨慶と伊達次郎。

寛政五年二月、「貢曾我」に十郎と工藤、二番目に幸助（菊之丞のお菊）、濡髪長五郎、意久大盡實は重忠。十一月、河原崎座、「花降源氏」に碓井貞光（暫）と渡邊綱。

寛政六年正月、「愛敬曾我」に十郎、二番目に刀屋半七と「葱賣」。「戀女房」に與作と慶政。秋、「二本松」に男之助と狩野四郎次郎。

此の夏より病を獲て臥床せしが、十月十九日、五十二歳を以て歿せり。

彼れは風采に秀で、舞臺花やかにして一代の人氣役者たりき。其の技藝は、最初、初世門之助と同く若衆方を專門とし、立役に移りてより一面に和事を主と　、菅原」に櫻丸を得意とせると共に、他の一面に於ては往々市川流の荒事を勤め、特に曾我五郎を得意として屢之れに扮したり。然れども、安永六年の「役者世凰凰」に彼れを評して

とかく荒事が好きと見ゆるが、此の人はや　りしつぼりした事がうつりませう。

と言へるを見れば、尚は荒事よりも和事が彼れの本領なりしならん、又舞踊をも能くし、菊之丞もしくは半四郎など當時の女方の所作事には屢其の相手をつとめて



二世門之助の「曾我五郎」（「似顏大全」より）

評を得たりき。加之、自ら女方にも扮し、又晩年には和實もしくは武道事をも兼ねたり。

彼れが妻は常磐津文字太夫の二女にしてお龜といひ、夫婦の間に三男あり、長男は男女藏といひ、俳優として次ぎの時代に市川家の總代たり。二男は門吉といひ、長唄うたひ岸田鳥暁の養子となり、門左衞門といひ、太鼓の名人たりき。三男は瀧之助といひ夭折せり。

●●●●尾上松助（新井羽屋三郎、後に松緑、延享元─文化十二）は江戸の出身にして、尾上新七と共に初世菊五郎の高弟なり。寶暦六年（八歳）十一月子役として始めて舞臺に出で、同十三年（十五歳）冬より若女方に轉じ、明和二年十一月、市村座にて謂はゆる「橋三枚」に上れり。

同、五年（二十歳）冬の頃は「上上吉」の位に進み、同七年（廿二歳）十一月、女方を廢して立役となり、市村座の「伊豆着綿」に八幡三郎となり、翌八年正月、「和田酒宴」に範頼の色惡と粟津七郎、十一月、同座、「世繼鉢木」に赤星太郎の實惡をつとめたり。以後の舞臺の經歴は、

安永元年正月、「菅原」に覺壽と涎くり。十一月、同座、「曳綱坂」に袴垂保輔と蛇骨婆。
安永二年正月、「名所曾我」に朝比奈と白山の傳吉。三月、「御所櫻」に伊勢三郎と礒禪司。九月、「忠臣藏」（菊五郎上阪の名殘）に伴内。十一月、森田座、「初雪世界」に佐野源藤太。
安永三年正月、「初買曾我」に大神樂勇四郎實は三保谷國俊と大日坊。五月、「忠臣藏」に師直。九月、「黑船」に判じ物喜兵衛。十月、「篠原合戰」に近江のお兼（上京の名殘興行）。十一月、京都、早雲座、「金丸山」に力持關東兵衞實は櫻井新助。

此れ彼れが始めての上京なりき。

安永四年正月、苦情ありて缺勤。三月「双蝶々」に濡髮。十一月、同座、「繁昌鉢木」に弓削大助。十二月、「兜軍記」に齋藤五と阿古屋（三曲）。
安永五年正月、伊勢へ赴く。七月、歸京。十一月、布袋屋座、「大福藏」に權守兼房實は平家の亡靈股猫。
安永六年正月、「布引山」に織物屋手代喜十郎と同後家お熊。

此れぎり舞臺に出でず。「戯場話」によれば、此の上京中、彼れは材木屋喜太郎といふ者の爲め、四條の旗亭に於て侮辱せられしを憤り、相手を傷つけて獄に下れりといふ。其の說を眞なりとせば入獄せるは

蓋し此の間なるべし。斯くて翌年に至り江戸に歸りたりき。

安永七年七月、江戸、森田座、「双蝶々」に濡髮、「巖流島」に武者之助、「國姓爺」に虎。十一月、同座、「伊達錦」に鳥海彌三郎實は宗任。

安永八年正月、「綠曾我」に番場忠太と阿古屋(三曲)。十一月、中村座、「英雄太平記」に高純親王(暫の受)。

安永九年正月、「曲輪曾我」に婆羅門の吉と古郡新左衞門(草摺引)。五月、「十帖源氏」に金魚屋金八。九月、「忠臣藏」(菊五郎上京の名殘興行)に勘平母、藥師寺、師直。

天明元年正月、同座、「小町曾我」に鬼王。五月、「戀女房」に官太夫と一平母。十一月、同座、「四天王」に碓井貞光と荷かつぎ綿田貞吉實は相馬太郎。

天明二年正月、「粧曾我」に朝比奈、二番目に浪人向坂甚内と大姫との早替り、「助六」に門兵衞。八月、「伊達錦」に山名宗全と立波雞藏。十一月、同座、「五代源氏」に伊具の十郎。

天明三年正月、「三升曾我」に八幡三郎實は京の次郎、二番目に力士婆羅門の三ぶ。五月、「忠臣藏」に定九郎と相岡千蝶。

天明四年正月、市村座、「皐月富士」に工藤。十一月、桐座、「小町櫻」に橘逸勢(髑髏蘇生の早變り)と文屋の秋津。

天明五年正月、「詞曾我」に仲間權助。三月、「團七縞」に義平次女房。七月、「音頭瀨戸」に島村彈正。十一月、同座、「[illegible]」に夕霧大臣(暫の受)、鬼同丸(變化事)、淨瑠璃に牛飼。

天明六年四月、「壽曾我」に鬼王、二番目に白柄十右衞門。八月、「婦女文章」に赤松政則。十一月、中村座、「雲井花」に足利直義實は

大塔宮亡靈（暫の受）と杉本佐兵衛坊主實は宇都宮公綱。

天明七年正月、「根元曾我」に工藤、「井出山吹」に横雲大膳、淨瑠璃に、奴、比丘尼、願人坊主の所作。三月、「助六」に意休。七月、「今川本領」に今川太兵衞。九月、「忠臣藏」に由良之助。十一月、森田座、「群高松」に玉蟲御前（暫の受）と教經。

天明八年正月、「伊賀越」に又五郎と母鳴見。「稚曾我」に鬼王。十一月、市村座、「黄金橘」に左大辨國廣（暫の受）、二番目に角兵衛獅子。

寛政元年正月、「假名書曾我」に阿野法橋。五月、「三十石」に桃山郷左衞門。六月、「忠臣講釋」に九太夫。「姿伊達」に桃井播磨守。十一月、中村座、「小町村」に眞鳥、黑主、關寺の婆。

寛政二年正月、「伊達染曾我」に局岩藤と劍澤ばく庵。七月、「忠孝兩國織」に高師直と金貸羽生屋金五郎。十一月、同座、「狹夜中山」に横山禪定と道玄坂道玄、二番目に鹿島踊の所作。

寛政三年正月、「艷躧曾我」に岩藤、「助六」に意久。六月、「双蝶々」に姉お關。十一月、大阪、淺尾奥次郎座、「和合劔」に帶刀太郎と乞食婆。

此れ彼れが大阪に於ける初舞臺なりき。（三十八歳）

寛政四年正月、「花大樹」に今川四郎と初瀨の前（早變り）。「伊勢物語」に紀名虎の亡靈（骸骨と早變り）。「千本櫻」に辨慶。十一月、北の新地芝居、「顏見世濫觴」に達磨大師。

寛政五年正月、京都、布袋屋座、「伊勢物語」に名虎の亡靈。「内百番」に後室清見と横川杢兵衞。

此れより再び東歸せり。

寛政六年正月、桐座、「若紫曾我」に工藤と純子大臣、二番目に累、五月、「乘合船」に佐々木岸柳、十一月、河原崎座、「婦女楠」に足利尊氏(暫の受)、二番目に合法太郎。

寛政七年正月、「吉例曾我」に局岩藤。「女非人仇討」に彦坂甚六。四月、「忠臣藏」(菊五郎十三回忌)に由良之助・戸無瀨、「車僞願」に力士鳴神と仁木彈正、「妹背山」に鱶七。十一月、同座、「吾妻内裡」に逆髮王子(髑髏より蘇生の早變り)、純友、山姥の所作。

寛政八年正月、「曾我櫓」に鬼王。十一月、同座、「雪顔觀」に崇徳院(天狗との早變り)、古骨婆・難波六郎、

寛政九年正月、「和曾我」に朝比奈と土左衛門傳吉。「助六」に意休、五月、「菖蒲帷子」に濡髮長五郎(水試合の鬘のかみ)。七月、「[illegible]先魁」に石川五右衛門。九月、「お初天神」に[illegible]婆。十一月、中村座、「櫓歸木」に松島蔵人實は貞任と中村實方亡靈、

寛政十年正月、「驪曾我」と近江小藤太と宇佐美四郎太夫、二番目に今市善右衛門。四月、「妹背山」に入鹿、五月、「[illegible]」に[illegible]太夫。十一月、市村座「橋系圖」に足利尊氏(暫の受)、町抱へ千本の松、氏家中務、二番目に杉本佐兵衛實は長崎水右衛門、

寛政十一年正月、「花街曾我」に工藤、二番目「詠千金」に深見十右衛門。三月、「加賀見山」に岩藤。四月、「[illegible]」に[illegible]兵衛、五月、「二十四孝」に齋藤道三。七月、「女文字」に伊達兵庫と日置佐吉、九月、「千本櫻」に權太、「江戸紫」に[illegible]兵衛、十一月、中村座、「爲朝射親鏃」に崇徳院(天狗との早變り、二度目)と清盛入道。

寛政十二年正月、「幸曾我」に工藤、「幡随長兵衛」に近藤助太夫と同弟助市。三月、「高尾[illegible]染」に仁木彈正と[illegible]。五月、「千本櫻」に辨慶と獨左衛門女房、七月、「屏風浦」に六瀨彈正と仲居[illegible]のおてふ。九月、「玉兎見島臺」に百姓五郎太夫。十一月、河原崎座

「戻橋」に美女御前後に酒呑童子・山姥、二番目に鍛冶屋金鎚の兼。

享和元年正月、「初寅曾我」に河津の靈魂（畫像より脱出づる仕掛）、二番目に土左衛門傳吉と局岩藤。三月、「奉納見臺」に小山丈右衛門。五月、「吉岡染」に東意軒宥栢實は常陸坊海尊、玉川撿挍、熊谷屋三ぶ。七月、「妹背山」に入鹿。九月、「忠臣藏」に由良之助、師直、勘平。十一月、中村座「伊達蒔」に阿野法橋（暫の受）、蝦夷の獨花女、菊池判官。

享和二年正月、「陽向曾我」に工藤、二番目に濡髪のお關。三月、「助六」に意久。「菅原」に輝國と時平。四月、「袷小袖」、おふさ徳兵衛）に井筒屋十兵衛。八月、「伊賀越」に又五郎と母鳴見。十一月、市村座「壺碑」に尊仁親王（暫の受）と桂中納言實は貞任。

享和三年正月、「徳曾我」に近江小藤太と六浦道庵、「由縁十徳」に八谷五郎四郎。四月、「加賀見山」に岩藤。八月、「千本櫻」に辨慶、「桂川」に片岡幸左衛門と幸之進。十一月、河原崎座「吉野内裡」に大塔宮と淵邊伊賀守との早變り、肴賣乙松、二番目に犬神つかひ勘解由左衛門。

文化元年正月、「女綸曾我」に工藤と満江御前、「中由兵衛」に福島屋淸兵衛。四月、「對伊達者」に後室岩崎實は音羽婆。七月、「天竺徳兵衛」に徳兵衛實は大日丸、妙五百機、座頭徳市。八月、「名畵家產」に宅間のお谷婆。九月、「相撲番附」に幻竹右衛門と引窓與兵衛」「忠臣藏」に由良之助、本藏、與一兵衛と定九郎の早變り。十一月、「四天王」に辰夜叉御前（骸骨より蘇生の早變り）、土蜘蛛の精、二番目に古金買ひ七面の傳吉實は相馬太郎。

此の年、河原崎座は勢力頗る振はず、且つ俳優に乏しくして關係者殆ど活路を失ひたるを、彼れは一門のほか僅に岩井喜代太郎を相手として踏止まり、總金は後拂ひに、孰れも手辨當にて出勤せしが、此の「天

竺德兵衞」に非常の大入を取りてより、一座始めて蘇生の思ひをなせりといふ。又此の時より彼れは「上上吉」の位に進められき。（六十一歳）

文化二年二月、「賑曾我」に工藤、河津の亡靈、半時九郎兵衞、乳母お時。三月、「鏡山」に岩藤、「助六」に意休。十一月、市村座、「吉野鐘」に老女岩手と長崎次郎。

此の岩藤にて武家にて奧女中の用ふる被布を着し、又意休に扮して銀鎖に類する羽織の紐を用ひし爲め、町奉行より譴責を受けたり。

文化三年正月、「魁曾我」に工藤、「三五大切」に船頭長兵衞、「河原噂」に黑木屋大隅。四月、「忠臣藏」に九太夫と才兵衞。六月、「韓國聞書」に天竺德兵衞（二度目）。九月、「照手松」に池の庄司。「織繡錦」に加村宇太右衞門。十一月、同座、「平家女護島」に清盛。

文化四年三月、「盤代曾我」に朝比奈、「元吉原」に仁王仁太夫。五月、「岸柳島」に民右衞門。六月、「妖狐傳」に妲妃と玉藻前（水中の早替り）。八月、「金龍山」に一つ家の婆と源水。九月、「桂川」にお半母。十一月、同座、「八島凱陣」に惟明親王、「曾の字」、時忠實は僧正坊（天狗）。

文化五年正月、「和曾我」に滿江、「戀山崎」に淨閑。三月、「阿國戲場」に山名と八汐。五月、「忠臣藏」に九太夫と關平母。「二十四孝」に信玄と道三。六月、「御伽草」に天竺德兵衞（三度目）と小幡小平次。七月、「時桔梗」に柴田勝家。十一月、同座、「二代源氏」に左大臣高明と茨城婆。

此の「天竺德兵衞」の時、作者鶴屋南北と謀りて、世人を驚かすべく術數を逞くせし事は後に述ぶる如

し。

文化六年四月、「曾我雛」の二番目に本庄助太夫。六月、森田座、「阿國御前化粧鏡」に阿國御前（髑骨の早變り）。九月、市村座、「雲井白浪」（石川五右衛門）に岩木兵衛。十一月、同座、「鳥羽戀塚」に清盛、梓巫女、義朝亡靈。

此の時自ら松綠と改名し、養子榮三郎をして二世松助の名を襲がしめたり。

文化七年正月「心謎解色絲」に鳶の者風神五左衛門。三月、「五山桐」に岩瀬局。十一月、中村座、「花黒主」に檜垣婆。

文化八年正月、「鶴曾我」に工藤。七月、「菅原」と「忠臣藏」に時平、師直、九太夫。九月、「一谷」に彌陀六と老母はやし。十一月、休む。

文化九年十一月、森田座、「雪吉野」に高氏と伊賀局。

此の時より「功上上吉」となれり。（六十九歳）

文化十年正月、「曾我伊達染」に阿野法橋、近江八幡之助、大江廣元。六月、「松綠洗濯噺」に蟇仙人、仲居お梶實は岩瀬局。八月、市村座、「累淵」に絹川羽生之助と累。十一月、同座、「戻橋」に髭黑大將。同時に森田座、「繋馬」に葛葉狐。

文化十一年五月、市村座、「松綠刑部話」に天竺德兵衛と刑部姫。六月、「桂川」に藝子岸野亡魂。

此の興行中發病して、翌文化十二年十月十六日、七十二歳にして歿せり。

彼れの體格は魁偉にして且つ容姿と風采とに優れたりといふ。明和八年の「役者綱目」に、

きりやうよく、ひいきあり。女形にも大ていにせられし所、師匠（菊五郎）の例を引ての役替、去顏見世より市村座にて男なり。一しほ似合ひ、其上、せい高く、近比は肥滿せられしゆゑ、男よく……。

といひ、安永四年の「役者酸辛甘」にも

男大きく、きれいなる仕出し、敵役にはおしいものぢや。



松助の「天竺徳兵衛」（「役者合勢鏡」より）

といへり。蓋し、彼れが女方より立役に轉せしは、前に引用せる如く、其の師菊五郎の例に習へるのみならず、彼の嵐雛助と同く、其の軀幹の肥大にして女人に扮するに適せざりし事も一因なるべし。而して其の本領は師菊五郎及び同門の新七の如く、和實にあらずして、實惡、色惡もしくは公家惡にあり。例へば、「曾我」に於ける工藤、「助六」に於ける意休、「伊達」に於ける仁木、「忠臣藏」に於ける師直、「暫」に於ける受、等は其の得意とせるものなりしのみならず、一方に女方にも實惡を兼ねたる「鏡山」の岩藤の如き、彼れが獨特の技なりき。寛政七年の「役者時習講」に彼れが此の役に

扮せるを評して曰く、

にくしみは二の次にして、女の情を本とし、せりふ廻しもしとやかに落付て、其中から出るにくみ故、何さまいぢわるき女のしんれづよき樣に見へて、心のおくはかられず、却てけしからぬ大達敵に見へまする。

といへり。最初女方より出身せるだけに、能く女人の性情を穿ち、同時に陰忍なる大惡人を表現し得たりしなり。是れより先き、此の種の役に成功せるもの、京阪に嵐小六父子、江戶に四世團十郞父子、等ありしも、松助は其の以外に能く一機軸を出し、特に岩藤の藝は彼れによりて後世にまで其の典型を傳へたりき。享和三年、市村座にて此の役に扮せる時、それまで岩藤の鬘は「帽子かけ」なりしを、彼れの工夫にて、銅の胴へ羽二重を貼り、其の纖維の間へ毛髮を植ゑて、眞の生え際のやうに見せ、鬘の製法は是れより急に進步したり。又、奧庭の仇討の場にて、琴入り六段の鳴物に蛙の聲をつかひしも當時、彼れが創意によれりといふ。

彼れは亦音曲に堪能なりき。されば純粹の女方としても、「琴責」の阿古屋の如きは、其の得意の技として、立役に轉ぜし後も屢舞臺に繰返したりき。安永五年の「役者男風流」に彼れが京都に演せし此の役を激賞して曰く、

琴なら鼓弓なら、三味線なら、うまい事〱……。歌をうたふてじや聲もうつくしいわいな……。全體此の場の狂言こせつかず、

花やかにして心にうれいをこめての仕內、おどろき入ました……。慶子（中村富十郎）をよくのみこんだ物じや。

彼の享和二年の「陽向曾我」の二番目に濡髮のお關といふ役名にて、宮本齋宮太夫の淨瑠璃に其の三味線を彈きたる如きも、彼れが音曲に精通せる證とすべきなり。

彼れは衣裳、道具、及び鬘の細工に器用なりしかば、屢〻自己の意匠によりて謂はゆる仕掛物を工夫し、遠くは二世團十郎、近くは淺尾爲十郎によりて行はれし早變りの技術を一層精巧にし、之を妖怪又は亡靈の役に應用して、此れ亦彼れが技藝の一長所と稱せらるゝに至りき。例へば、天明二年の「粧曾我」に向坂甚內と大姬との早變りに喝采を博し、同四年、「小町櫻」に橘逸勢の亡魂が骸骨より蘇生する早變りを演じて見物を驚嘆せしめ、寛政四年、「花大樹」に今川四郎と初瀨の前とを早變りにし、次いで同年、「伊勢物語」に紀名虎が亡魂の骸骨より蘇生する早變りをなし、寛政六年、「若葉曾我」に累に扮して、始めて、顏と鬘との仕掛を工夫し、同七年、「吾妻內裡」に逆髮王子が骸骨との早變り、同八年、「雪顏觀」に崇德院の天狗に變ずる仕掛、同九年、「菖蒲帷子」に濡髮長五郎にて、水試合の鯉つかみ、同年、「檜錦木」に中將實方が雀に化する仕掛、寛政十二年、「戾橋」に美女御前が邪法を以て惡鬼となり、白き顏面の忽ち髮までも赤く變じ、且つ角を生ずる早變り、享和元年、「初寅曾我」に河津の亡靈が畫像より脫出づる仕掛など、孰れも彼れが特技として稱せられしが、更に文化元年の「天竺德兵衞」によりて、其の妙を極

めたり。即ち

天竺へ吹流されし船頭にて、異國のアツシの上に上下を着てゐる。庄屋沖右衛門に萬國の咄を申上る事あり。吉岡宗觀、切腹して、實は朝鮮の臣下木曾官なり、久吉に責亡され、徳兵衛は我子大日丸と物がたり、女房夕浪これも自害す。夫より宗觀が首を松助打おとす。捕手大勢取卷と松助印を結べば、上より雲下りて隱す。道具替りて樋の口の左右に大勢槍を持ち待つて居ると、水門より大きなる蟇首をくはへて出で、槍を突掛けると、何れも悶絶して倒れる。花道にて蟇破れて、中より徳兵衛四天のなりにて宗觀が首をさげ、高笑ひにて幕。次に月若丸のめのと五百機にて笘船より徳兵衛に切殺され、船に半身出して早變り。これは人形にて首を出し、舟の内へ身體が入と、徳兵衛船頭姿にて出で、うしろより幽靈出る。これも人形にて後向きにて上ると、松助の後髮を引。これも早からくりにて皆々目をおどろかしました。後の幕に幽靈にて笹藪より出る所大いにすごく、門口へよりかゝると、内へ入、からくりにて直ちに出、消へうせるも、壁を布にていたしたものやら、ふはりと消へる幕、大評判。大切、座頭徳市にして、越後ぶしにて木琴を打、唄をうたふ。紛れ者と詮議にかゝれば、前の池の船へ飛入り、吹水上り、向ふより長上下百日鬘にて上使に出られた所、奇々妙々の早がはりゆゑ、七月より九月中の大入大々當り。（「歌舞伎年代記」及び「役者正札附」）

此の木琴を彈けるは、前に述べし如く、彼れが音曲に通ぜしを以てなるが、此の狂言以外にも、早變りのうちへ音曲の藝を加へ、例へば亡靈又は妖怪が琴を彈ずる如き役を屢繰返したり。又此の徳兵衛の早變りは全く彼れ一人の意匠に成り、開場まで何人にも秘密とせしが、初日より果して大評判となり、大かた切支丹の邪法をつかふならんなど風聞の立ちしかば、町奉行より見分の役人樂屋に出張し、衣裳道

具につき一々說明を聞きて始めて事なきを得、此れより愈人氣の立ちて非常の大入を取りしが、實は作者南北と謀りての術數なりきといふ。尙は寛政二年の「兩國幟」に師直に扮せし時、己が首を自作に彫りて舞臺に用ひ、其の首のある所へ更に自分が登場して見物を驚かし、又「累」にて池の蓮の葉を渡り、之は葉の下へ黑き臺を置きて水にひたし、其の上を渡りしなれど、見物その不可思議なるに肝を潰したりといふ。

尙ほ彼れは所作事にも長し、世話事をも能くし、後者にては、特に江戸ッ子の氣おひと力士に扮するを得意とし、土左衞門傳吉及び婆維門の三ぶ、等の當り藝あり。彼れの成功が狂言作者金井三笑の後援に負ふ所多き事は既に前編にいへり。「天竺德兵衞」以後は新進作者鶴屋南北を重用し、後に南北が怪談作者として名を揚げしは實に松助の推薦に基けるなりき。

彼れは其の體軀の肥大なりしと同く腕力にも富めりき。されば前にいへる如く、彼の京都にて材木屋某を傷けしといふは全く無根の事實ならざるべし。

或る夏の夕、涼み居て、米三斗ばかりの臼七つを橋の上に積揚げたれば、翌朝往來の人は見て、天狗の業と取沙汰す。其人かゝる重き品を高く積あぐるに、足場もなく如何にしたる工夫なりやと問ひしに、松助笑つて、そこが即座の案じなり、臼を竪てゝ橋に置き、四方から添木にて括りて之れを柱の如くして、跡にて繩を切り、添木を取り捨つるなりと答へしといふ(「役者風俗三國志」)

この逸事は彼れが大力なりしと共に機智に富めるを知るべし。又彼れは晩年老衰せしも、其の舞臺に於ける意氣は矍鑠たりき。文化五年に再び天竺德兵衛を演ぜし時、六十五歳にして、「往來の節は僕の肩にすがり、息切いふばかりなし。知己の者いふ、一日に三度も水に入る事なれば、終には病を甚くして死に至るべしと」。彼れ答へて曰く、「身體は病のため利かずと雖も、心神衰へざれば、百度水中に入るも恐るゝことなし」と。又いふ、「心神苦勞すればこそ身體衰ふにあらずや」。答へて曰く、「心神粉の如く碎くるも、一日に三兩二分の金は必ず取るなり、慾心烈火の如くにして强大なれば、一盃の水薪車の火は消しがたき道理に非ずや」と笑ひしといふ。

松助には實子なかりしも、養子榮三郎、（二世松助）、後に三世菊五郎の名を襲ぎ、次ぎの時代の名優たりき。

●●●●●三世大谷廣次（丸屋十町、延享三―享和二）は始め米山德五郎といひ、小芝居に出でしが、寶曆五年（十歳）秋、二世廣次の門に入り、大谷春次と稱して市村座に現はれ、同八年（十三歳）冬、鬼次と改め、次第に聲名を揚げ、同十二年（十七歳）十一月より、市村座にて廣次の名を襲ぎたり。同十三年春、始めて鬼王に扮して好評を得、同年冬、森田座にて力士に扮し、翌十四年春、黒船忠右衛門に喝采を博し、明和三年（廿一歳）より「上上吉」の位に進みたり。同五年春、市村座にて始めて工藤に扮して大當を取り、翌六年春、同座にて鬼

王となり、相撲の物語大出來と稱せられ、七年冬、同座の河津の相撲に好評を得たり。以下の舞臺上の經歷は、

明和八年正月、「和田酒宴」に小栗十郎と鹿島三郎、二番目に黒船忠右衞門實は鬼王。十一月、同座、「世嗣鉢木」に於下御實は牧野小次郎と甲賀三郎。

安永元年正月「菅原」に松王。十一月、同座「曳緘坂」に下部良助實は將軍太郎と金時。

安永二年正月、「名所曾我」に足輕新平實は鬼王、御所五郎丸、湯島の三吉。三月、「堀川夜討」に辨慶。八月、「四天王寺」に本田善光。十一月、中村座、「勸進帳」に直井左衞門。

安永三年正月、「曾我雛形」に鬼王と番場忠太。四月、「戀女房」に逸平。八月、「菅原」と「忠臣藏」に由良之助と源藏。九月、「双蝶々」に長吉と與兵衞。十一月、同座、「天岩戸」に河津三郎と眞田文藏。

安永四年正月、「青柳曾我」に伊勢三郎と鬼王、二番目に薩摩源五兵衞。「二代勝負附」に秋津島。八月、「出世太平記」に久吉、「五雁金」に文七。十一月、森田座、「菊慈童」に怪童丸と渡邊綱。

安永五年正月、「其兄弟」に伊達次郎と鬼王。三月、「盛衰記」に樋口。五月、「菖曾我」に布袋市右衞門、「桔梗染」に與勘平。十一月、中村座、「咲此花」に三浦之助。

安永六年正月、「青柳曾我」に二條藏人と獨鈷の駄六、二番目に放駒四郎兵衞。「絲櫻」に本庄綱五郎。七月、「和田合戰」に荏柄平太。八月、「千本櫻」に權太。九月、「戀女房」に逸平。十一月、市村座、「飛入狐」に大貫吉平實は上總五郎兵衞、二番目に大谷村の伊賀藏。

安永七年正月、「高屋曾我」に二宮太郎と宇佐美十内。四月、「伊賀越」に丹右衛門と武助。七月、「善光寺」に山上源内。八月、「戀女房」に左内。十一月、同座、「梅愷樂」に荏柄平太と江間小四郎。
安永八年正月、「江戸紫」に湯島の三吉。二月、「若榮曾我」に鬼王。八月、「薄雪」に五平次。十一月、同座「榮楠」に栗生左衛門。
安永九年正月、「曙曾我」に鬼王。

此の五月きり彼れは舞臺を退き、且つ當時彼れの名聲は漸く衰へたりしが、翌年十一月より再び出勤せり。

天明元年十一月、森田座、「雪三吉野」に亘新左衛門と藤房實は篠塚五郎。

これきり再び休座したり。

天明三年三月、市村座、「萬歳曾我」に鬼王と赤澤十内、二番目に蕎麥屋五郎八。六月、「忠臣藏」に平右衛門と義平。「帷子辻」に團七九郎兵衛。十一月、同座、「車懸」に武田晴信。
天明四年正月、「皐富士」に仁田四郎と番場忠太。十一月、桐座、「小町櫻」に小野篁と秦大膳、二番目に閻魔長右衛門。
天明五年、「論曾我」に近江小藤太。赤澤十内、鍔師梅忠右衛門。七月。「音頭瀬戸」に船頭檜垣五郎兵衛。十一月、中村座「振袖源氏」に三浦荒次郎と泣上戸常遠次郎兵衛。
天明六年五月、「忠臣藏」に平右衛門。六月、「夏祭」に團七。十月、「祇園女御」に彌五平。十一月、同座、「吉野壯士」に大森彦七。
天明七年正月、「根元曾我」に鬼王と地藏五平次。「井手山吹」に唐金茂右衛門。七月、「今川本領」に笹の才藏と磯貝實右衛門。十一

月、同座、「榮花鉢木」に庄屋鍬右衛門と三浦彈正。

天明八年正月、「吾妻鑑」に箱根畑右衛門。七月、「高尾大明神」に渡邊民部と豆腐屋仁平次。十一月、同座、「唐相撲」に讒佞よし五郎兵衛。

寛政元年正月、「江戸富士」に布袋市右衛門、二番目に野崎久作。七月、「平家評判記」に瓶王丸。十一月、市村座、「將門冑」に牧野荒太郎。

寛政二年正月、「存曾我」に闘三郎。八月、「忠臣藏」に本藏と義平。十一月、中村座、「狹夜中山」に池の庄司と後藤右衛門、二番目に船玉の五郎兵衛。

寛政三年正月、「艶麗曾我」に工藤。九月、「菊宴」に大江音人と孔雀三郎。十一月、河原崎座、「法鉢木」に和田太郎、二階堂貞秀、佐野源左衛門。

此の時より「功上上吉」の位に上されたり。（四十六歳）

寛政四年二月、「金秤目」に浮世戸平と男之助。五月、「仕形講釋」に由良之助と喜内。九月、「女團七」に釣船三ぶ。

寛政五年正月、「遇曾我」に朝比奈。四月、「東かゞみ」に伴内と平右衛門。七月、「双蝶々」に長吉と長兵衛、「布引」に義賢。十一月、都座、「都陣取」に壹岐判官。

寛政六年正月、「觀曾我」に朝比奈、「五人男」に宅間玄龍。五月、「文祿曾我」に淺田屋十右衛門。七月、「三本木」に土佐又平。十一月、同座、「名歌譽」に般若五郎、「廓繩張」に御厨四郎。

寛政七年正月、「江戸砂子」に赤澤十内と八幡三郎、二番目、「五大力」に出石宅右衛門。七月、「吉原養育」に鳴神峰右衛門、「二つの名」

に太五平と彌陀六。九月、「大内鑑」に與勘平。十一月、桐座、「柱礎暦」に百姓丸作。
寛政八年正月、「大福帳」に工藤、二番目「隅田春」に金谷金兵衛。「赤穂鹽竈」に役者花井才三。五月、「皐月嫩」に皃與右衛門。七月、「比翼三紋」に油屋太郎兵衛、「彦山」に一味斎。十一月、同座、「松行平」に衛士又作とむれの兵衛。
寛政九年四月、「時雨櫻」に細川勝元。七月、「月武藏野」に藤島主計。
寛政十年二月、森田座、「市川團藏待請咄」に九太夫、義平、さゝら三八。七月、「桂男」に源光政。

これより興行表に彼れの名を逸せしが、享和二年五月十一日、終に歿せり、歳五十七。

彼れの藝風を「役者綱目」に評して曰く、

此人一體いやみなき仕内にて、狂言なそゝらず、口跡よく、愛敬ありてひいきつよく、何を致されいでも舞臺に出らるゝと諸見物の悦び大かたならず。

「劇神僊話」は曰く、

男振よく、大柄にて調子よく通り、愛敬男との評判。明和安永の間は女の贔屓もあり、丸屋張といふ煙管も出來たり。鬘はきかぬ方にて意氣な所と敵役は少しもなし。長崎勘解由左衛門の謀反人を金井三笑が剃立にて體に合ふやうにしてさせて見たれども思はしからず。一頃は、春の鬼玉、寺岡平右衛門、天川屋など、此役者の物のやうになりしが、今日の間にあはず。一體大味なれども舞臺は手強く、押出しは大立物と見えしなり。顔見勢に赤塗の立役、春の朝比奈、助六の意休、五大力の出石宅右衛門、芦屋の與勘平、など是に續く者なし。

又「役者紋選」には「十町國」と題して、

此國、元大國にして、力量の壯士、角觝俠者の士多く、よはきを取ひしぐ勇あり。代々其風儀今に殘れり。一體氣直にしてたのもしき事あれども、少しく卑劣なる風あり。男肥て音聲群にすぐれ、至實實義にして愛敬有。任俠の立引に一寸もひかず。然るに兎角はたかなる事多し。隣國と見えたり。



三世廣次の「天川屋義平」（「似顔大全」より）

要するに、體格と容姿と音聲にまさり、品位に乏く、壓裸體の人物に扮し、又敵役に適せず、手强けれども大味にして、俗衆に悅ばれ、謂はゆる「愛嬌役者」なりしなり。而して其の得意の藝は老實なる郎黨、忠勇なる下僕、又は力士俠客等に扮するにあり。鬼王、平右衛門、義平、與勘平の如きは即ち其の實例なりき。

彼れが婦人女子に非常なる人氣を有せし一例は、前に引用せし如く其の屋號を取りし「丸屋張」といふ

煙管の形の行はれしにても知るべく、又安永六年の「役者穿鑿論」に曰く、

去年の秋、深川の茶屋の娘が、かけこんだといふ事だ。いかに浮氣な所風でも、女房の在内へ欠込とは、こいつもあんまり厚かましいじやれいか……。なる程、かたの無い事でもござらぬ。十町（廣次）が異見して歸されました。しかもいゝ女さ。

然れども安永の末年より漸く人氣衰へ、次いで天明五年に船頭五郎兵衛に扮せし頃より、聊か名聲を後したりと雖も、其の晩年頗る振はずして死したりき。

彼は又立花の上手にして且つ相學にも通ぜりといふ。養子三人あり。一は永助といひ、春次といひ、鬼次といひ、後に二世中村仲藏といへり。一は德五郎といひ、四世中村傳五郎の名を襲ぎしが、二人とも彼に先だちて夭折せり。他の一は廣五郎といひ、鬼次と改め、終に四世廣次の名を襲げり。又門下に大谷德次あり、道外方として著はれたり。

●●●●●●●三世澤村宗十郎（紀の國屋訥子、寶曆三―享和元）は二世宗十郎の次男にして三世市川八百藏の弟なり。幼名を澤村田之助といひ、寶曆九年（七歲）十一月、中村座を初舞臺とし、同十二年正月、同座「曾我贔屓」に敦盛の公達保童丸に扮し、これより子役として各座に現はれしが、明和六年（十七歲）冬、父と共に京都尾上座に上り、翌七年八月、父の物故してより、其の遺言により、嵐三五郎の庇護を受け、同八年正月、京都、三桝德次郎座、「けいせい蝶花形」に若衆方として秋塚歌之助を勤め、同十一月、元服して始めて宗十郎の名を襲ぎ、

同座、「吉野帝閣」に新田義介に扮したり。以後、舞臺上の經歴は、

安永元年十一月 京都・姉川座、「白梅源氏」に渡唐天神と頼家。
安永二年正月、「馴初櫻」に今川常磐之助と山崎與五郎。「忠臣藏」に判官と小浪。「三十石」に膳殿助と下人與九郎。十一月、同芳澤座、「兵鞍」に賴光。
安永三年十一月、同、藤川座、「金丸山」に和泉之助。
安永四年二月、「鐘鳴渡」に尼子千次郎。十一月、大阪、三桝座、「天目山」に勝賴。
安永五年正月、「忠臣藏」に判官。十一月、同、嵐座、「打出兒穂」に麻生松若。

これ彼れが大阪に於ける初舞臺なりき。

斯くて、九年ぶりにして江戸に歸りぬ。

安永六年十一月、江戸、森田座、「貢入船」に名古屋山三（物狂ひの所作）。
安永七年正月、「妹背山」に求馬、芝六、久我之助。三月、「八百屋心中」に半兵衛。十一月、市村座、「梅櫻[illegible]」に冠者太郎。
安永八年八月、「薄雪」に園部左衛門。十一月、同座、「榮楠」に義貞と小山田太郎。
安永九年正月、「曙曾我」に小間物屋實は十郎。三月、「女鳴神」に千葉左衛門助。十一月、中村座、「錦壯貌」に宗盛と樋口次郎。
天明元年八月、「信田長者柱」に千原貢之助と髮結次郎吉。十一月、同座、「四天王」に賴光。
天明二年、「粧曾我」に十郎と千原左近。七月、「伊達染」に賴兼。十一月、同座、「五代源氏」に八幡太郎。

天明三年正月、「三升曾我」に十郎。二番目に梅の由兵衛。七月、「勝相撲」に濡髪長五郎。十一月、市村座、「車掛」に男傾城。
天明四年五月、「天網島」に紙屋治兵衛。十一月、中村座、「蛭小島」に河津三郎、下河邊行平、手跡指南實は頼朝。
天明五年正月、「親曾我」に工藤と十郎。三月、「櫻舞臺」に狩野歌之助と名古屋山三。七月、「幼馴染」に勝頼と山崎與次兵衛。十一月、同座、「振袖源氏」に順禮十作實は重盛。
天明六年十一月、同座、「吉野壯士」に新田義介と楠正行。
天明七年三月、「助六」に白酒賣。五月、「忠臣藏」に由良之助。七月、「今川本領」に仲秋、二番目に茂兵衛。十一月、森田座、「群高松」に佐藤嗣信。
天明八年正月、「伊賀越」に政右衛門。四月、中村座、「吾妻鑑」に白井權八。七月、「高尾大明神」に頼兼と高尾亡魂。
寛政元年正月、市村座、「假名書曾我」に十郎と團三郎。夏、「忠臣講釋」に重太郎と勘平。七月、「傾城容儀」に頼兼。十一月、同座、「將門祭」に貞盛と秀郷。
寛政二年正月、「存曾我」に工藤、十郎、京の次郎、義仲亡魂、關屋傳兵衛。二番目に明石志賀之助。「八百屋心中」に半兵衛。七月、「忠臣藏」に由良之助。十一月、同座、「峰楠」に順禮壺坂庄作、妻鹿孫三郎、大塔宮、畑六郎左衛門、楠正行。
寛政三年正月、「江戸繪曾我」に十郎、二番目に帯屋長右衛門。「壺碑」に助六と意休（一日替り）。七月、「千本櫻」に彌助、銀平、忠信、源九郎狐。九月、「室町軍談」に小田春永と石川五右衛門。「吉原雀」（上阪の名殘）に頼兼と道哲。十一月、大阪・花桐座、「大江山」に渡邊綱。

此の時、彼れは十五年ぶりにて大阪へ上り、居ること一年にして東歸せしが、翌年再び上阪せり。

寛政五年正月、中村座、「曾我中村」に十郎と團三郎、切に清玄。四月、「赤穂鹽竈」に由良之助。七月、「布引」に實盛、「姫小松」に俊寛。

十一月、大阪、中山座、「米太郎狐」に小山田三郎。十二月、「倭荘子」に北畠主計頭。

寛政六年正月、江戸、都座、「貌曾我」に十郎、二番目に稲野屋半兵衛、三番目に千原尾上之助(男草履打)。四月、「五人男」に雁の小兵衛。五月、「文祿曾我」(龜山仇討)に大岸藏人。七月、「三本傘」に山三。「阿波鳴門」に甚助。九月、「千本櫻」に義經と、「比翼塚」に長兵衛。十一月、同座、「名歌譽」に孔雀三郎と黒主。閏十一月、「曲輪縄張」に相馬良門と淡島甲斐之助。

此のとき、狂言作者並木五瓶大阪より下り、以後專ら宗十郎の爲めに脚本に筆を執りき。

寛政七年正月、「慶曾我」に十郎。「五大力」に源五兵衛。三月、「一の谷」に六彌太と熊谷、「出入湊」に孫三郎。四月、「忠臣藏」に判官と本藏。七月、「吉原養育」に島津重三郎と頼兼。九月、「大内鑑」に保名。十一月、桐座、「桂暦」に清盛と八丁礫喜平次。

寛政八年正月、「曾我大福帳」に十郎、「隅田春」に梅堀由兵衛。四月、「赤穂鹽竈」に由良之助と不破数右衛門、「累」に與右衛門、「夏祭」に重忠。七月、「比翼の三紋」に山形屋佐四郎。九月、「彦山」に六助と毛利元成、「物草太郎」に伴左衛門。十一月、同座、「[illegible]世界」に惟喬、行平、むらじ。

寛政九年正月、「曾我門松」に十郎と河津亡魂、「青樓詞」に紀國屋文藏。四月、「時雨櫻」に赤松彦四郎。七月、「月の武藏野」に稲の谷半左衛門と忰半十郎。九月、「菅原」に松王。十一月、同座、「雪女」に佐野源左衛門。

寛政十年正月、「小袖曾我」に工藤と不動靈像。「戀山開」に出村新兵衛。三月、「[illegible]」に薗部伊左衛門、高松勘右衛門、百姓五郎兵衛。七月、「三面大黒」に櫻井左七と石川五右衛門。九月、「薄雪」に園部兵衛、「野邊の書置」に細川兵衛、「[illegible]」に巴之丞。十一月、「五大力」に源五兵衛。十一月、大阪、龜松座、「雪鉢木」に佐野源左衛門、次いで京都にて同上。

此れ彼れが四回目の上阪なりき。

寛政十一年正月、「淺妻船」に松濱庄左衛門と悴庄九郎。二月、「五山桐」に久吉、大炊之助、瀬川采女。「五大力」に源五兵衛。三月、「柱礎暦」に清盛と義朝亡魂、「隅田春」に梅の由兵衛。更に北の新地芝居へ轉じ、切「和田合戦」に淺利與市。六月、京都、北側芝居、「千本櫻」に知盛、忠信、源九郎狐、切に藤屋伊左衛門。八月、大阪、中の芝居、「嫁威谷」に春樹右近右衛門、同惣右衛門、祖母おそま。九月、京都、東の芝居「信仰記」に東吉、「五大力」に源五兵衛。十一月、同、早雲座、「桔梗旗上」に春長、「夕霧」に伊左衛門。次いで大阪、中芝居、「信仰記」と「夕霧」。

寛政十二年正月、「淀川話」に花滿兼房と橘右近。次いで、京都、東の芝居、「近江源氏」に三郎兵衛、「伊達染」に頼兼、「淺間嶽」に巴之丞。次いで、南の芝居、「伊勢物語」に有常と名虎亡魂。五月、「忠臣講釋」に由良之助、重太郎、力彌、勘平。十一月、江戸、市村座、「波溶渦」に五代三郎と黒主。

二年間、京阪に持囃されし彼れは再び江戸へ歸來せしが、翌享和元年三月、四十九歳にして病死せり。

彼れは「人品男振よく、大柄」なりきといふ。而して其の得意とする所は父と同く和事にあり、而も「武道、太刀打、所作、一として中分な」かりしが、敵役は「少も體にな」かりき。「劇神僊話」に曰く、

> 石川五右衛門を色立役にして三笑がさせたれども、おもはしからず。物草の伴左衛門も爲る事は言分なけれども人體うつらず…。

して其而の傑作としては、

> 火の病の清盛、あばれこみの惟喬親王、五大力の源五兵衛、伊達の頼兼は、京阪は知らず、江戸にては前後一人なり。十郎は初代三津

五郎に不及、頼兼は三津五郎に勝れり。三津五郎は飽くまで温和にて人を手討にする氣象少しも見えず。其故に十郎には宜しく短氣に宜しからず。訥子は温和の内に底に烈しき所あり、いらつきて見えし故手討も仕兼ぬ氣象ありて、短氣に宜しく、十郎に宜しからず。因て、伊達競の頼兼、三津五郎にて高尾な殺さず、角力取の絹川谷蔵、錦紅(四世幸四郎)殺し、伊達染仕形講釋、高尾大明神、楓の離、二度の頼兼宗十郎二度ながら自身に高尾を斬たり。此狂言三度とも左交(櫻田治助)作にて、昔は此の如く其役者の體から役を見て考たれども……。

と。宗十郎に此の特色あるを以て、「五大力」に於ける五人斬は彼れが得意の藝と稱せられしなり。而して此等晩年の藝は大かた並木五瓶の作を仰ぎしが、壯時は專ら金井三笑を作者として、其の特別の擁護によりて終に名を成せるなりき。

「劇神僊話」又彼れが藝風を評して曰く、



三世宗十郎の「由良助」(「似顔大全」より)

舞臺は父訥子（二世宗十郎）、隨念（四世團十郎）、眠獅（嵐雛助）、雷子（二世三五郎）、秀鶴（仲藏）、小川吉太郎の心持なりと云ふ。其うちにも眠獅は大分に有しなり……。五山桐の大炊之助など、今させたれば續く者なかるべし。山門の五右衛門も眠獅腹にて、秀佳（三世坂東三津五郎）より勝るべし……。

宗十郎には三男二女あり。幸四郎の女を妻として長男源之助を生み、源之助は後に四世宗十郎の名を襲ぎたり。後に雛助の妹を娶り、三男田之助を生みしが共に夭折せり。又長女は宗十郎の門弟たる澤村東藏に嫁し、次女は五世岩井半四郎に嫁して、六世及び七世半四郎の母なりき。

此の他、同時代の立役に二世市川八百藏（蓬萊屋中車、享保廿—安永六）及び三世八百藏（紀の國屋中車、延享四—文政元）あり。二世八百藏は始め豐竹和泉太夫といひ、中ごろ中村傳九郎の門に入り中村傳藏と改めしが、傳九郎は己が恩顧の人たりし初世八百藏の家名の絶えん事を憂へ、其の妹を傳藏に娶はして二世八百藏の名を襲がしめ、四世團十郎の門下たらしむ、實に此れ寶曆十三年の冬なりき。最も婦人女子に持囃され、其の「助六」を演せし時、彼れが「はまつた天水桶の水を德利に汲んで歸り、さゆに沸して」服用せる者ありしといふ。惜いかな、僅に四十三歲にして夭折せり。三世八百藏は三世宗十郎の實兄にして幼名を澤村金平といひ、娘方たり。明和四年、四郎五郎と改め、同六年、二世菊之丞の門に入り、瀨川雄次郎といひ、安永六年、立役に變じて四郎五郎に復名せしが、同八年、五世團十郎の門に入り、八百藏の名を襲ぎ、文化六年、二世助

高屋高助と改め、晩年奥州に赴き、福島にて病死せり、歳七十一。

別に初世坂東三津五郎(大和屋是業、延享二―天明二)及び二世三津五郎(同上、寛延三―文政十二)あり。初世三津五郎は大阪に生れ、竹田巳之助と號して竹田芝居へ出でしが、八世市村羽左衛門の門下たる坂東三八が養子となりて江戸に下り、明和三年、森田座にて始めて三津五郎といひ、僅に三十八歳にして歿せり。其の藝風は萬能なりしも濱芝居の臭味あり、又口跡に拙なりしといふ。二世三津五郎は初め尾上藤藏といひ、初世菊五郎門下たる尾上紋太郎の弟子なり。後紋三郎と改め、安永三年、始めて江戸へ下り、同五年、二世三津五郎の名を襲ぎしが、初世三津五郎の實子成長するに及び、寛政十一年十一月、其の名を還して、自ら二世荻野伊三郎といひ、八十歳にして死せり。

又二世中村助五郎(仙國屋魚榮、延享二―文化三)あり、初世の實子にして、始め助次といひ、寶暦十三年、父の名を襲ぎ、專ら父の藝風を模倣し、六十二歳に及びて死せり。

第八章　東西の女方

二世山下金作――舞臺上の經歷――彼れが得意。――澤村國太郎――彼れの藝風。――二世花桐豐松。――四世芳澤あやめ――彼れの長所。――三桝德次郎。――藤川友吉。――山下八百藏。

四世岩井半四郎——彼れの藝風——彼れが性行。——三世瀨川菊之丞——舞臺上の閱歷——彼れの特色——藝道の祕訣。——二世小佐川常世。

二世山下金作（天王寺屋里虹、享保十八—寛政十一）は大阪の產にして、最初中村富十郞の弟子となり、中村半太夫といへり。寛延二年（十六歲）冬、初世金作の養子となり、京都に於て初めて山下金作と改名せり。

〔補〕「歌舞妓年代記」の傳ふる所に據れば、彼れは攝州兵庫邊の產にして幼名を金太郞といひ、父に後れて母の後夫に養はれしが、十四五歲の時、伊勢へ拔參をせしまゝ、四十餘年間行く處を知らず。天明六年の頃、兵庫在に旅芝居ありて、大阪より俳優の多く來りしうちに、山下金作といふが金太郞に似たりと聞き、其の時再び寡婦たりし老母の芝居見に行きけるに、はや一座は他國へ去りし後なりしかば、陣幕といふ大阪相撲の大關の紹介に據り、漸く母子の對面を遂げたりといふ。

寶曆二年（二十歲）十一月、舊師中村富十郞と共に初めて江戶の中村座へ下り、以後同座に勤續せしが、同六年十一月、市村座に轉じ、八年秋、八百屋お七に扮して好評を得たりき。同年冬、大阪の中山文七座へ上り、同十二年冬より三桝大五郞座へ轉じ、同十四年（明和元）春の評判記に初めて「上上吉」の位に昇されたり。以後舞臺上の經歷は、

寶曆十三年十二月、三桝大五郞座、「極彩色娘扇」に娘おしなと腰元お岸。
明和元年十一月、同座、「龍宮城」に眞盛奧方。十二月、「新薄雪」に薄雪姬、「小菊半兵衞」に嫁お龜。
明和二年十一月、同座、「大座附」に末社みどりと助作女房。

明和三年二月、「相馬太郎」に粧姫。十一月、京都、布袋屋座、「四天王寺供養」に戀八卦お政實は本田吉光妻。

明和四年三月、早雲座、「物草太郎」に傾城葛城と早枝、十一月、同座「毒鐵砧」に娘おかね。二月、「信仰記」に雪姫。

明和五年二月「桃山錦」に傾城淀町と金十郎妻お作。「小野道風」に娘おぬひ。「染模樣」に娘お染。「夏祭」に娘お仲。十一月、大阪、三桝他人座、「大福帳」に女占阿部おきよ實は諸人妹琴鶴姫。十二月、「双蝶々」に傾城吾妻。

此れ彼れが十六年ぶりの上京なりしが、故ありて僅に九日間にして興行を中止せり。

明和七年、江戸、森田座、「曾我閨」に女工藤實は月小夜。「八百屋心中」にお千代。「女鳴神」。七月、「夏祭」にお辰とお梶。九月、「假名女夫」に女由良之助。「葛の葉」。十一月、中村座、「鶴森」に花守喜作女房お梅と常磐御前。

これ十二年ぶりに江戸へ下りしなり。而して九月の評判記より初めて「上上吉」の位に昇れり。

明和八年、「曾我年代記」に景清妻阿古屋、八百屋女房お千代。夏、「忠臣藏」に顔世御前、お石、お園。十一月、森田座、「月吉原」に女三宮の侍女むつ花。

安永元年正月、「鷄曾我」に祐經妻玉卷御前。夏、「戀女房」に重の井。秋、「けいせい紅葉橋」に淺香の局。十一月、同座、「伊豆曆」に滿江と伊東祐清妻實は海士藻汐。

安永二年正月、「曾我羽觴」に女重忠。「小いな半兵衞」に景清妹小いな。五月、「物草太郎」に女房梅とお國御前。八月、「劇精靈」に女仕丁月益。十一月、同座、「初雪世界」に北條御臺らんの方と青砥孫三郎女房お作。

安永三年正月、「初買曾我」に賴朝御臺政子。五月、「忠臣藏」に戸名瀬。八月、「累二世月浪」に湯平女房お關。十月、「驛小桜」にお安。十一月、中村座、「天岩戸」に辰姫と眞田文藏女房小笹。

安永四年正月、「青柳曾我」に麻生の松若女房鳥羽玉と政子御前、二番目（仲藏の大日坊）に藝者お松實は阿古屋。「安達原」に濱夕と文治妻。八月、「出世太平記」に臺の前と小野のお通。「車街道」に女房淺香。十一月、同座、「花相撲」に烏帽子折お大と小藤太女房。
安永五年正月、「田植曾我」に巡禮おしがと大磯の虎。「繼娘」に白木屋女房。夏、「廿四孝」に慈悲藏女房。「忠臣藏」にお石。「忠臣講釋」に重太郎女房。八月、「菊水卷」に石堂勘解由妻と秋夜女房。十一月、森田座、「矢聲太平記」に畑六郎左衛門妻篠塚。
安永六年正月、「小袖曾我」に櫻姫と妼野上實は景清妻阿古屋、二番目に澁賣お由實は鬼王女房。七月、「新田大明神」に十寄左衛門妻うば竹。「仇名のかしく」に福島屋女房お梶。十一月、同座、「貢入船」に霞が谷の龍女と名古屋山三妻武智。
安永七年正月、「妹脊山」にお三輪、定香、鎌足御臺。これより奥州に赴く。十一月、市村座、「梅愷樂」に安達景盛妻菅生の前。
安永八年正月、「江戸紫」に下女お杉と樋守與五藏女房。三月、「若榮曾我」に大磯の虎と非人お關。八月、「新薄雪」に女房小女郎。十一月、中村座、「英勇太平記」に女楠。
安永九年正月、「廓曾我」に富士民部妻花園と滿江御前。五月、「物草太郎」に金魚屋女房と利久女房。九月、「忠臣藏」にお園とお石。十一月、大阪　藤川山吾座、「丑執達」に奉公人お作。
天明元年正月、「加賀見山」に加賀の千代、おさみの方、丹波屋お妻。五月、「再興」に久吉女房と與五郎女房。「愛護若」に黄昏。「宵庚申」にお千代。「時賴記」にまつよ。「累」。十二月、自ら座元、「連歌茶屋」に幸右衛門女房おすみ、加古川久兵衛娘お才、片岡三木守女房。

此の時、彼れは十三年ぶりに歸阪せしなり。而して「連歌茶屋」に好評なりしより位を「大上上吉」に昇されたり。

天明二年十二月、藤川山吾座、「黄金鯱」に百姓太郎助女房、實檢妻はしとみ、傾城春日野。
天明三年正月、「菜種御供」に小とみ。五月、「女鳴神」(初世金作追善)。七月、「加賀見山」にお初。十月、「八重霞」にしとし。

これより暫く勢州地方に旅興行せり。

天明五年正月、大阪、中村粂太郎座、「正月陣立」に神功皇后と妹おさめ。
天明六年十一月、大阪、坂東岩五郎座、「富貴英」に白粉賣お萬。
天明七年八月、「大塔宮」に花園、「桂川」にお絹。
天明八年十一月、大阪、市山太次郎座、「物草太郎」に金魚屋女房と利久妻。十二月、「薄雪」に腰元まがき。
寛政元年正月、「北國曙」に勝助女房八重と久吉奥方園生。三月、「大振袖」に宇治の方、須磨左近妻、佐々木源三妻眞妹。九月、「[illegible]錦」に萩の方と浮世渡平女房。十一月、淺尾爲太郎座、「稚兒淵」に帶刀女房織殿。
寛政二年十一月、同座、「一體分身」に近江の小萬。これより上京。
寛政三年十一月、大阪、淺尾奥次郎座、「忍術池」におすはの方。十二月、「伊勢物語」に伊勢の侍從。
寛政四年十一月、坂東重太郎座、「忠臣双葉藏」に大星宮内妻と戸名瀬。
寛政五年正月、「楊柳櫻」に一色結城守奥方と鳴物占小萩。「一の谷」に相模。「京土産」に惣八妻。堀江芝居、「糸櫻」に糸屋後家お島。「女鳴神」。七月、北の新地芝居、「忠臣講釋」に顔世。「岩井風呂」に利介女房。角の芝居、「ふとの里」に仕立物屋お[illegible]。「[illegible]」。「[illegible]卷」に石堂妻と秋夜女房。十一月、淺尾奥次郎座、「乘掛合羽」に奥方濱町、丹右衛門女房龍尾、政右衛門女房お種。
寛政六年正月、「青陽鷄」に與惣太夫と小谷。九月、「三代記」に五斗女房。「磯馴松」に太夫女房。十一月、江戸、桐座、「[illegible]山」に仲居

お兼實は安部貞任妻。

彼れは十五年ぶりにして、三たび江戸へ下りしなり。

寛政七年正月「操曾我」に月小夜と下女お杉。三月「廓花道」に光秀妻皐月。五月、「忠臣藏」におかや、戸名瀬、お園。「戀女房」に重の井。「妹脊山」に定六女房と貞香。十一月、都座「雪義經」に源八兵衛妻八重機と由利八郎妻小きん。

これきり彼れは再び西歸したりき。

寛政八年、京都北の芝居、「伊賀越」に政右衛門女房と濱町御前。四條東芝居、「薄雪」に女民部、梅の方、腰元まがき。これより地方に赴く。秋、大阪、角の座、「國姓爺」に和藤内母と小むつ。「伊勢音頭」に貢伯母。「敵討」に象潟御前と織屋お絹。十一月、市川團三郎座、「惡藏入」に下女おきそ。上京、「三十石」に源八女房と仲居お舟。

寛政九年正月、大阪、市川團三郎座、「遊山櫻」に土手のお春、加藤正清妻、海士お濱。五月、「御所櫻」にお淺と磯禪司。「桂川」にお絹。「重井筒」に藤右衛門女房。「吉原細見圖」に遠山甚三妹、「博多織」に小平次女房とお幸の方。「菅原」に千代。九月、「中山染」に若黨文平女房と白須賀奥方。十一月、中山與三郎座、「萬兩橋」に仲居お作。「彦山」に眞弓の方。

寛政十年正月、「狹妻櫛」に乳人更科と玉川のお里。「隅田川」に道具屋甚三女房。「鄙島原」に奥方岩倉と此町。「姫小松」にお安。「夏祭」に團七女房。「一の谷」に藤の方。「猿廻」の與次郎母。「伊達姿」に沖の井と老女おりく。十一月、山下龜松座、「源氏魁」に腰元おきん。

蓋し座元龜松は、彼れが養子なりき。

寛政十一年夏、北の新地芝居、「和田合戦」（初世金作の五十回忌追善）に板額。五月、京都、四條北側芝居、同上、秋、大阪、中の芝居、「嫁威谷」に御臺象潟、おオ、藤浪。



二世金代の「立田の前」（「以顔大全」より）

斯くて九月十二日に至り、急病にて物故したりき。歳六十七。

●●●●●彼れの得意とする所は地藝なりき。明和五年の「役者言葉花」に曰く、

今は盛の若女形、御器量さのみ飛切といふではなけれ共、風俗いやといはれぬ生れ付。諸藝も近年段々仕上げられ若人の上手。ぬれ事のうつり、くゝんで持様よい事、しめりのない行きかた、どうも／＼。

又同八年の「役者綱目」にも、

全體色あつく、女の情ふかく、ぬれ事などさせては、くゝんで持つやうなうまさにて、其上諸藝を仕上げ、近年の女形にて、三が津とも受とり、申分のない品物々々。

といへり。即ち、壯時には最も濃艷なる情事を長所とし、彼の八百屋お七もしくは薄雪姫に成功せるは此の故なりしなり。降つて安永三年の「役者有難」には彼れを評して曰く、

色香をふくみ、武道、世話女房、傾城のだて、年増のしこなし、振袖のあどなさ、春の花に辨當をひらき、秋の月の團子よりむまいことく〱。

同五年の「役者通利句」には、

仙魚（瀨川菊次郎）丈身まかりて以後、地藝、眞の女形と申すは此の里虹丈より外にござるまい。

といひ、同年の「役者男風流」には、

正德の頃、若女形淺尾十次郎は武道の名人にて、敵役を和かにきめる事得物なりしが、此の人の仕内を見れば昔を思ひ出されます。

といへり。然れば、後年に至りては、濃艷もしくは無邪氣なる娘方のほか、女武道又は敵役を得意とし、且つ時代に、世話に、傾城事に、年増役に、地藝の有らゆるものを能くしたりしなり。「役者人相鏡」に斯くの如き彼れが藝風の變遷について其の消息を漏らして曰く、

一體、色子の頃は至極やせて居られしが、御當地（二度目に江戸へ下りし時）にてふとり玉ひてより、狂言は女工藤などゝいふやうなる捌き役をおもに勤められしゆゑ、此事御登り前に評判ありしかば、藤川座の座附の時（安永九年十一月）、思の外、前に變らぬ可愛らしさとの評判。其のふとりを直に狂言に取組み、妾奉公にやるといふ趣向にて、詰袖にてやらう、イヤ振袖でやらうとのせり合

た氣の毒がり、何うも斯うふつゝかになりて、振袖が何う着らるゝものと愛なもたせ、それより御見物様へ尋ねての上の事と、三保木殿が挨拶より、見物一統に振袖がよからうと聞いて、オヽ恥かしで小幕を切り、次に振袖にて傘さしての出、むつちりとした味さ娘なりとて當てられ……。

されば、彼れが娘方以外に發展せるは其の體軀の肥滿せるが動機なりしと見ゆ。而して其の武道事もしくは敵役としては、右に擧げられし「女工藤」のほか、「女重忠」、又は重の井、阿古屋、等を例とすべく、別に嫉妬事には、「女鳴神」、「累」、など其の得意とする所なりき。要するに彼れが地藝を專門とせるは、其の師富十郎の衣鉢を襲げるなり。或る時、富十郎彼れを評して、

所作は花、地藝は實、その實を結ぶ爲の花なれば、女方は所作よりは地藝が第一ぢやが、そなたは其の地藝の上手ぢや」（「役者穿鑿論」）

といへりと。彼れが師をして斯くの如き讃辭を發せしむる、金作の伎倆が凡庸ならざりしを知るべし。殊に「連歌茶屋」にて三役に扮し、娘方と世話女房と時代事とを一つの狂言に示したる如き、其の藝風の多方面なりしを證するに足る。

金作は俳諧を能くし、特に祇德點を好み、「酒もよく吞み、折々遊びにも行き、一頃は借金が涌きましたが、松之丞といふ色子が身上を立て直しました」とは「役者穿鑿論」の語る所なり。

彼れには男女二子あり。男を金太郎といひ、後に山下萬菊と稱して、同じく女方たりしが、寛政三年、僅に二十六歳にして江戸に歿せり。女はお作といひ、俳優吾妻藤藏の妻たりしが、藤藏の死後、三世市川八百藏に再嫁せり。又門下に二世萬菊及び龜松あり。龜松は後に彼れが養子たりき。

金作が三都の舞臺を殆ど等分に踏みたりしを例外として、同時代の女方は東西各その根據地を有せり。玆には、先づ京阪の部よりして次に江戸に及ばん。

澤村國太郎（天滿屋其答、元文四―文政元）は初世澤村宗十郎の門弟長四郎の子にして、寛延の初め、京都に色子たり。所作を佐渡島長五郎に學び、同二年（十一歳）十一月、染松七三郎座へ子役として現はれ、三番叟を演ぜしが、寶暦元年（十三歳）より若衆方の部に入り、其の二の替りに「上上吉」に昇され、前途多望を以て目せられき。同年十一月、榊山座に出でゝ佐渡島家傳來の藝たる「後面」に好評を得、次いで前髪姿の荒事を演じて愈喝采を博し、同二年十一月より嵐座に移り、三年十一月、自ら座元となり、翌四年春より女方に轉じたり。座元たること滿二年にして、同五年十一月、難波松之助座に入り、「勳功記」に菊慈童の所作を演じて當りを取りしが、更に翌六年十一月より座元たること九年にして益伎倆を進め、「上上吉」に昇されたり。明和二年（廿七歳）秋、「葛の葉」と「後面」とに扮し、此れを京都に於ける名殘狂言として、十一月、大阪の姉川菊八座へ下り、五年間、同地に勤續せり。

明和三年十一月、中村歌右衛門座、「弦勢矢車」に桂姫と腰元お袖。
明和四年正月、「睦玉川」に傾城高尾と吃おゐぬ。十一月、中山雷助座、「男女相性鑑」に源吉妻花園、十二月、「千本櫻」に靜御前。
明和五年十一月、山下八百藏座、「新館萬歳壽」に尾上の前。十二月、「双蝶々」に傾城吾妻と都。
明和六年十一月、中山與三郎座、「三略卷」に皆鶴姫。
明和七年三月、「咬𠺕吧戀文」に傾城菅原。「二世姫松」に重井筒のお高、「嚴流島」にお捨、「近江源氏」に佐々木妻篝火。「[illegible]組」に傾城三千歳。秋、「大内鑑」に葛の葉。十一月、京都、三桝徳次郎座、「[illegible]源」に土佐次郎吉娘千種、
明和八年正月、「一蝶花形」に傾城遠山、十一月、同座、「吉野帝閣」に殿の兵衞娘[illegible]。
安永元年秋、「宵庚申」にお千代。十一月、芳澤いろは座、「樸木像」に女仕丁お光へ女菅丞相。
安永二年正月、「櫻大幟」に傾城金山。十一月、大阪小川吉太郎座、「日出度詩歌」に京の司。十二月、「[illegible]」に腰元千[illegible]。
安永三年十一月、同座、「楠噺」に菊一文字女房お菊、お屋[illegible]次郎妹[illegible]、十二月、「[illegible]」に[illegible]女房
これまでは二枚目の娘方なりし彼れは、初めて此の「楠噺」より立女方の大役を取るに至れり。
安永四年三月、「累譜」に下總の累。四月、「妹背山」にお三輪と雛鳥。十一月、同座、「百物語」に[illegible]。十二月、「双蝶々」に傾城吾妻。
安永五年秋、「八百屋」におてふ。これより大病にて休む。十一月、同座、「山海名物」に[illegible]。十二月、「[illegible]」に[illegible]方と[illegible]娘おれん。
安永六年夏、「[illegible]」に福島屋女房、「[illegible]祭」に半兵衞女房、「[illegible]」に娘お里と[illegible]。十一月、市山[illegible]座、「[illegible]」に腰元

お國實は輝國妹。
安永七年正月、「素袍臺」に傾城明月。四月、「車道街」に淺香。「臺頭」に笠屋三勝。「物草太郎」にお國御前。「菅原」に覺壽。秋、「芦苅」の所作事。十一月、京都、三桝次郎吉座、「判官贔屓」に腰元お國實は鷲尾娘。
安永八年正月、「外題始」に出雲のお國と瀬平妹お鹿。「忠臣藏」に戸名瀬とお園。「雷電」に源八女房。「五斗」に九斗女房。十一月、同中山猪八座、「南枝開初」にゆさの國介女房。
安永九年正月、「大内雛形」に貫練門平妹　おみよ後に傾城明月（三五郎と鴛鴦の所作事）。十一月、山下八百藏座、「菊旗擧」に楠妻八橋。
天明元年正月、「都濱荻」に彦九郎女房お種（狐の所作物語）と音つる姫。これより伊勢へ下る。六月、歸京。「千本櫻」にお里、靜御前、典侍の局。七月、「鍋祭」に半兵衞女房と新兵衞女房。「盛衰記」に千鳥。十一月、「菜種御供」に松月尼（鷄の所作）と腰元十六夜。

此の時より「太上上吉」に昇れり。（四十三歳）

天明二年正月、「稚兒淵」に祇園のお梶後に傾城七浦、切に「夕霧」。
天明三年正月、大阪、藤川山吾座、「黄金鯱」に傾城東路、腰元關屋實は上杉姫君。三月、「伊勢物語」に信夫と井筒姫。五月「ふぢ見月」に大工與平女房。六月、「三日太平記」にお通の方。七月、「鬼一」に虎藏と常磐御前。「鏡山」に尾上。「俊寛」にお安。十一月、嵐他人座、「女夫狐」に葛の葉（狐の所作）。
天明四年正月、「倭莊子」に小牧。秋、上京、同上。十一月、京都、中山猪八座、「大島臺」に島守六郎太夫妹　村雨。

天明五年二月、「黄金鯱」に傾城東路。十一月、嵐秀之助座、「時賴記」にいくよ。（病氣の爲め中止）。

此の頃、彼れは、多病にして屢舞臺を休みたりき。

天明六年十二月、澤村元三郎座、「薄雪」に腰元まがきと娘おれん。

天明七年正月、東の芝居、「薄雪」に同上。「眞顯記」にお園。「釜が淵」に五右衛門女房。十一月、嵐七五郎座、「御所櫻」に靜御前とお淺。

天明八年二月、大阪、嵐文吉座、「義臣傳」に腰元お高。「平假名」に千鳥、「夕霧」。秋、上京、「義臣傳」に同上。十一月、京都、龜谷粂之丞座、「源顔見世」に伊東祐清妻と傾城喜世川（相撲の所作事）。十二月、「信仰記」に几帳の前と侍從。

寛政元年正月、「黄金鯱」に腰元關屋と傾城東路。三月、「風俗文選」に百枝藏之助女房と海士小梅。五月、「陳岡合戦」に澤と官兵衛妻と綾の臺。「安達原」に袖萩。「近江源氏」に宇治の方と母微妙。「戀飛脚」に梅川。「菅原」に龍田と八重。十月、「鎌倉山」に狐宵葉、庄屋娘お菊・佐野妻白妙。「一の谷」に菊の前。

寛政二年二月、「廿四孝」に濡衣と慈悲藏女房。「六歌仙」に小町。四月、「比眞嶽」に清光尼。「扇子芝」に菖蒲の前。「三鱗」の景事、「大塔宮」に花園。「おしづ文藏」に新兵衛女房。六月、「忠臣講釋」に顔世御前、重太郎女房、千右衛門女房。九月、「北國曙」に圖書の方と千利久女房。「女鉢木」

寛政三年正月、同座、「五山桐」に傾城花橘。「郡山染」に舞子お照、老女お[illegible]、和泉屋娘。「盛衰記」に千鳥。「菅原」に八重と戸瀬。「重井筒」にお房。「六歌仙」に小町。十一月、大阪、花桐富松座、「酒呑兒」に坂上是則妻小町。

寛政四年正月、「入間詞」に腰元小蝶と日向のおゆら。「忠臣藏」に戸無瀬とお園。二月、「布引」に葵御前とゐろての局。「菜種御供」に松月尼。「夜開帳」、腰元深雪。「雨下知」に明智女房皐月。十一月、大阪・中山文一座、「顔見世初」に芹摘の后使者いちゐ。

寛政五年二月、堀江芝居、「平假名」に千鳥。秋、上京。「義臣傳」にお高。十一月、大阪・中山與三郎座、「米太郎狐」に乳人夕ひで實は楠正成妻。

寛政六年正月、「倭莊子」に娘小卷。二月、「島廻」に傾城求女と住の江御前。三月、「菅原」に覺壽と千代。「吉原細見」に下女お石。堀江、荒木座、「妹背山」に芝六女房、定香、お三輪。再び中の座へ歸り、「大塔宮」にお園。十一月、同座・「安土問答」に蘭の方、小坂部狐、東吉女房お園。「繼縺錦」に春藤女房お春。

寛政七年正月。「極彩色」に玉蘭（老女の所作）。「鬼一」に常磐御前、「山崎與五郎」に娘お照とおさん。夏、「一谷」に相摸。「戀飛脚」に龜屋の嫁。上京、「忠臣藏」にお輕、お石、お園。「連歌評判」に東吉女房。「菖蒲帷子」に雷電源八女房。歸阪、「信仰記」に几帳と侍從。「忠臣講釋」におれい、重太郎女房、植木屋のお高。「天竺德兵衞」に女房お舟。「忠信道行」に靜。「平假名」に千鳥。十一月、大阪、藤川八藏座、「東海硯」に明石のお濱實は玉蟲。「琴責」に阿古屋。

寛政八年春、「道風」にお町とお蝶。「石川染」に淀町御前と五右衞門女房。上京、同上。「古手帷子」に八郎兵衞女房。七月、「出入湊」に奴の小萬。「伊勢音頭」に齋宮女房。「一谷」に菊の前と藤の局。「菅原」に覺壽と千代。「琴責」に阿古屋。「義臣傳」にお高。十一月、大阪、藤川座、「旭面箱」にお菊狐と葛の葉。「双蝶々」に傾城都。

寛政九年正月、「鳴門白浪」に千鳥の前。「淺草靈現記」に十内女房お民と瀧姫。「褄重」に勘助母と同女房。北の新地芝居、「加賀見山」に尾上。十一月、京都、嵐熊之助座「楠雪都」に出雲の神子お國。「傾城買指南所」に先の夕霧。「女鉢木」に白妙。

寛政十年正月、「櫻大晦」にあだけ甚平妻更科と傾城島山。三月、「時和記」に禮元奉絹、勘解由左衛門妻白妙、秋田城之助妻[illegible]、
これより伊勢へ赴く。秋、大阪、中の座、「國姓爺」に小むつと錦祥女。「忠臣講釋」に重太郎女房、「嫗山姥」に八重桐。再び歸京、「二王門」に當馬之丞妻。「戀飛脚」に槌屋おゑん。「伊勢物語」に娘お涙、「嫗山姥」に八重桐。十一月、京都、南側芝居、「[illegible]」に常盤御前。「猿廻」に與次郎母。

寛政十一年三月、「嫩陣幕」に老女關屋。五月、歸阪、「菅原」に覺壽。六月、再び上京、「信仰記」に几帳と侍従。「嫗山姥」に八重桐。十一月、大阪、北の新地芝居、「義臣傳」にお高。

寛政十二年春、京都、因幡藥師芝居、「倭莊子」に彌生と檜垣。「平假名」に千鳥。四條芝居、「忠臣講釋」に由良之助妻、[illegible]右衛門女房。「雷電」に源八女房。「大塔宮」に花園。「巖流島」に與五郎女房。「加賀見山」に加賀の千代、「[illegible]合戰」に官兵衛女房。「お國名物」に中老尾上。十一月、京都、片岡愛之助座、「薄雪」に園部奥方。

享和元年正月、大阪、中座「加賀見山」に尾上、「[illegible]忠臣藏」に春月尼。北の新地芝居、「女鉢木」。八月、再び中座、「[illegible]」に[illegible]女房。「切籠曙」に樽屋後家。「菊水卷」に勇助女房と石堂妻、

享和二年、大阪、角座、「美鳥林」に好文木の精と勝須賀小六妻實は唐人。三月、「布引」に[illegible]。四月、「忠臣藏」に[illegible]。九月、「太功記」に阿能の局と光秀母。「義臣傳」にお高。十一月、京都、吾妻富次郎座、「風流國姓爺」に[illegible]（[illegible]作）實は[illegible]の精。

享和三年三月、「伊賀越」に幸兵衛女房。「女護島」に東屋。七月、大阪、大西芝居、「[illegible]」に春月尼。十一月、大阪、中村のしほ座、「金幟幕」に海士お濱實は伊勢の侍従。

文化元年秋、大阪、中座、「闌奢待」に伊賀守妻。「濱眞砂」に久吉御臺。「嫗山姥」に八重姫。

前に記せし如く、安永五年の大患以來、彼れは屢病氣の爲に舞臺を休み、特に、晩年には音聲の明朗を失ひたり。これ一つは彼れが好んで大酒せる爲なりきといふ。此の頃より、老衰の爲め舞臺に現はるゝ事稀れなりしが、翌文化二年四月、大阪の角の芝居に於て「關寺小町」の所作事を一世一代として全く退隱し、薙髮して神路館海老麿と號し、文政元年七月二日、大阪に病死せり、歲八十。

明和八年の「役者綱目」に彼れの藝風を說いて曰く、

風俗花奢にして器量よく、所作は自由なり。今鯉長（中村粂太郎）をのけて、傾城事などは此人。さりとは奇麗な事。

これ、彼れが三十三歲の時の評なり。それより八年後なる安永八年の「役者男紫花」には曰く、

全體拍子きゝゆゑ何事もとかく立派すぎて、役によりては取合ぬ事もあり。……器量、風俗、口跡、地藝、所作、うれひ、打揃うたろ今の女形ぢや。

又それより廿五年後なる「役者用文章」には、

お千代（宵庚申）の女房姿はいかさま嚴い姑には氣に入りかぬる筈とも思はれ、覺壽（「菅原」）などは品位あつてまれ人もなく、加賀の千代（「加賀見山」）の風流なる仕たては諸人手を打つてのかんしん……。

要するに彼れは容貌と風姿とにすぐれ、且つ舞踊道は佐渡島の門下たりしといふだけ、彼の山下金作が

地藝を專門とせしと反對に、所作事を最も其の得意とし、「七化」、「六歌仙」の小町、「鷺娘」の景事、などの當藝あり。特に同時代の立役にして且つ所作事に堪能なりし嵐三五郎と相提攜して愈その妙技を發揮したりしなり。只、其の弊は浮華に過ぎて質實ならず、此れを以て「背庚申」のお千代の如き性格に扮して成功し、又「義臣傳」（植木屋）のお高を其の得意の出し物とせるも同じ理由より來りしならん。而も、晩年には能く此の缺點を補ひて、彼の覺壽の如き、又お國御前の如き、白髮の老女に扮して屢喝采を博し、富十郎の歿後、金作と共に女方の二名人として持囃されしなり。



國太郎の「八重桐」（「ますかゞみ」より）

國太郎は俳諧を好み、浪花萬翁の門に入りて風雅を樂みきといふ。其の技藝上の注意も頗る綿密にして、曾て京都に「琴責」の阿古屋を演せし時、重忠は嵐三五郎、岩永は嵐小六にして、すべて操仕立の趣向

にし、衣裳仕打に至るまで人形の趣きにて演ぜしが、彼れは三五郎に問ひて、私存付き候事ありて致せしも、諸見物に行届かぬ事にてありしが、御心付き下されしやとの事に、流石に三五郎も名人とて、其れは紅絹の足袋を召されし事ならんと言ひければ、成程その事なり、皆々操仕立の趣向ゆゑ、お山人形の心得にて、何時もの白き足袋を用ひ参らせずと語れりといふ。

國太郎には男子あり、長之助といふ、俳優として、其の名甚顕はれず。又門下にも著名なるものなかりき。

●●●●●●二世花桐豊松（花田屋、里聲、寛保三―寛政八）は花桐平八の弟子たりし初世豊松の門下たり。寶暦六年（十四歳）十一月、大阪の姉川大吉座へ色子として現はれ、駒若丸に扮してより、其後、濱芝居にて女方の立者となりしが、明和三年（廿四歳）、姉川菊八座に出で、これより天明元年に至るまで十六年間、大阪の大劇場に勤續せりき。最初はさしたる名聲もなかりしが、安永二年（卅一歳）の「役者清濁」に、

近年和かみた事らにして、狂言の行方が報らしく……、第一、何にても間にあふ仕内。

と褒揚せられしを初めとして、次第に好評を博し、特に三世芳澤あやめの型を奉じて地藝に巧みなるを以て多望と稱せられき。

天明元年（卅九歳）十一月、名を菊松と改めて始めて京都に上り、愈聲價を高め、特に、同三年、「千両幟」

の岩川女房に當りを取りて、翌年の評判記より「上上吉」の位に昇せられたり。天明五年十一月、滿四年ぶりにて歸阪せしが、八年十一月、再び上京し、翌寛政元年より更に「至上上吉」に進み、同時に豐松の舊名に復せり。



二世花桐豐松（「見生言語備」より）

寛政元年十一月、再び歸阪して其處に勤續せしが、同五年より病の爲め屢舞臺を休み、終に八年二月廿九日、五十四歳を以て物故したり。

豐松の藝風は前にもいへる如くあやめ式の地藝を專門として所作事の伎倆を缺ぎ、容貌又甚美ならず、花に薄くして、實を主とせりき。されば最も女房役に適し、彼の岩川女房に大喝采を博せしほか、「檻褸錦」の春藤次郎左衛門妻は先輩たる澤村國太郎よりも味深しと稱せられたり。

彼れには二子あり、伯を富松といひ、寛政三年、大阪に座元たり、後、四世芳澤あやめに養はれしが早世

せり。叔を德三郎といひ、是れ亦俳優として顯はれざりき。

四世芳澤あやめ（橋屋巴江、寶曆五―文化七）は三世あやめの子にして、始めいろはといへり。父と共に大阪の舞臺に現れて色子たりしが、明和七年（十六歲）冬、父子京都に上り、翌八年十一月、始めて女方に進み、安永元年冬より同地に座元たること滿二年なりき。斯くて三世あやめは翌二年歸阪して其處に病死せしが、彼れは尙ほ京都に留まり、安永四年冬、「夕霧」を名殘狂言として江戶に下り、伯父中村富十郎の庇護によりて森田座に出でたり。留まること三年。同六年冬、富十郎と共に大阪の小川吉太郎座へ上り、同八年、尾上新七の「俊寬」に蜑千鳥に扮して大好評を得、同年冬、吉太郎に代りて座元たり。翌天明元年冬、上京して中山猪八座に出で、翌二年（廿八歲）の評判記に始めて「上上吉」に進みたりき。

天明四年冬、大阪の尾上丑之助座へ下り、同六年、富十郎と共に上京し、次いで長州藝州に下りしが、冬、再び京都に歸り、翌七年夏に至り伊勢に赴きしが、同年冬、再び大阪に現はれたり。次いで寬政六年正月、初めて「上上吉」となり、此の頃より技藝上達の評頻りにして、享和元年（四十七歲）正月より「大上上吉」となりたり。文化四年（五十三歲）冬、京都の北側芝居に於て初めてあやめの名を襲ぎ、且つ「眞上上吉」に上り、同六年、彼れが子芳澤崎之助が二十五歲にして夭折せるに次ぎ、翌七年八月二十六日、彼れも亦五十六歲にして大阪に死せり。

彼れの長所は、第一に其の容貌と風姿とにありき。享和二年の「役者寶船」に曰く、

一體花やかな風俗ゆゑ、しつぼりとした狂言にては今少し取り合ひ兼れるといふ沙汰もあれど、又傾城や、娘子、密といふ役「なつては外に續くものもなく……、

云々、といへり。是より先き、寛政八年の「役者御青慶」には、

べつたりとせぬが持前にて、其故傾城事のはりの強い役などは此仁に續くものは御座りませぬ。

といひ、同十年の「役者相榜」には、

とかく、なりの優しいが持前、傾城などはむつくりとまゐらぬ事もござります。

といへり。要するに、彼れの得意とする所は意氣向きなる狹斜風にありき。即ち「五大力」の菊野、「伊勢音頭」のお紺は其の書下しに演じて大當りを取りしのみならず、「恨鮫鞘」のお妻、「戀飛脚」の梅川、等も彼れが成功せる藝なりき。此れに反して、「妹背山」の雛鳥、「清水清玄」の櫻姫、



四世あやめ（「ますかゞみ」より）

「三代記」の時姬の如き姬樣役、又は「一谷」の相模、「菅原」の戸浪、「加賀見山」の尾上の如き女武道は、到底彼れに適せざりしなり。尙ほ彼れが悋氣事を得意とせるに拘はらず、其の「女鳴神」はお姬樣らしからず、其れ者の果なりと評せられ、又其の政岡は花やかにして愁なしと評せられたり。而して彼れの缺點は餘りに華を尙びて場當りを好めるにあり、又所作事も甚だ振はざりき。寬政四年の「役者名所圖會」に曰く、

美しい事はいふまでもなく、世話女房にて屹度使はれますようになつたれど、所作はもそつと和かにしたいものぢや。

到底彼れの本領は地藝にありて、而も優柔なるよりも快活に、可憐なるよりも老成に、質實なるよりも華麗に、姬樣、町娘よりも遊女傾城に、武家奥方よりも世話女房によかりしなり。

彼れは終生江戸に現はるゝこと前後僅かに三年。大阪を根據地として京都の舞臺を兼ね、山下八百藏と相頡頏せしが終に彼れを凌ぐに至りたり。

彼れがあやめの名を繼ぎし前、父の弟子五郎市が江戸にて四世あやめと稱せしも、芳澤家の系譜には此れを認めず。されば四世あやめは東西に前後二人あり、後の人これを混ずべからず。

此の他、三桝德次郎（升屋漁江、寬延三―文化九）あり。初世三桝大五郎の門人にして、寬政二年、立役に轉ぜしが、同六年、再び女方に復し、同十一年より「上上吉」に昇れり。文化の初めより病の爲め屢休業せしが、文化

九年八月廿五日、六十三歳にして死せりき。

又藤川友吉（板屋花友、寶暦九—文化五）あり。初世藤川八藏が養子たる二世八藏の母の義弟たり。寛政十二年、始めて「上上吉」に進み、更に、文化四年、「至上上吉」に昇されしが、翌五年五月、京都に上り、「清水清玄」に小萩と櫻の精に扮せしを名殘とし、六月十六日、五十歳にして大阪に歿しき。



三桝山次郎（「ますかゞみ」より）

又山下八百藏（升屋、其虹）あり。父は始め芳澤浪江といひ、後に山下又太郎の門に入りて山下治郎三といへり。八百藏は、寛政七年、始めて「上上吉」に昇り、友吉と同じく色氣ある若女方を得意とせり。彼れが狐に魅せられしといふ傳説のあるにても、如何に濃艶なりしかを知るべし。寛政十一年の頃より、大かた舞臺を休みがちにして、文化四年以後、終に評判記に其の名を見失ひ、同十年に至り、其の門人甲菊が二世八

百藏の名を襲げる事實より推測して、彼れは此の間に物故せるか、もしくは廢業せるならん。

以上、山下金作と四世あやめとを除きて、他の五人は、一たびも江戸に下らざりし女方なり。以下、專ら江戸に屬するものを説かん。



山下八百藏（「ますかゞみ」より）

●●●●●芳澤五郎市（橘屋春水、元文二—寛政四）は大阪の産なり。初め山下又太郎の門人にして山下小式部といひ、又市五郎といへり。中ごろ二世あやめの弟子となり、芳澤五郎市といひ、延享二年冬、師と共に初めて江戸の市村座に下りたり。寶暦三年冬、上京せしが、翌四年、同地に於て二世あやめの死せしかば、再び江戸に下りて中村座に現れ、明和元年、三世崎之助の名を襲ぎ、同三年、「上上吉」に進み、當時二世吾妻藤藏と相頡頏せり。安永四年冬、大阪の小川吉太郎座へ上り、翌五年冬、再び東歸して市村座に現はれ、同七年十一月、師名を繼ぎて初めて四世あやめといへり。而して、天明

七年以後の評判記に彼れが名を見ざるは、舞臺を退きたればなるべく、寛政四年九月廿八日、終に大阪に於て歿しき。歳五十六、「役者綱目」に彼れが藝風を評して曰く、

　仕打ち花あつて慶子（中村富十郎）をよく呑み込み、其上、鯉長（中村粂太郎）の俤あつて、世話事よし。

又彼れが競爭者なりし吾妻藤藏と比較して、

　藤藏と此人午角と雖も、藤藏に花薄くして崎之助（則ち五郎市）に實薄し。藤藏の方功者なれども、崎之助此上立身あるべし。

といへり、而も晩年甚振はず、「上上吉」以上に進まずして歿しき。彼れには一子五郎市ありしが寛政七年に早世せり。

彼れが芳澤家の血統ならずして師名を冒せしかば、別に四世あやめの江戸に生せし事は前に述ぶるが如し。

●●●●●●●四世岩井半四郎（大和屋杜若、延享四―寛政十二）は江戸の人形遣ひ辰松重三郎の子なり。幼にして二世松本幸四郎（四世團十郎）の門に入り、松本長松といひ、寶暦三年（七歳）十一月、初めて子役として中村座へ出で、同十二年（十六歳）十一月、松本七藏と改め、同時に娘方に轉じて次第に高評を博し、明和二年（十九歳）、「忠臣藏」の小浪に成功せしが、同年十一月、終に岩井家の養子となり、五世半四郎の名を襲げり。蓋し、初世

半四郎（承應元―元祿十三）は元祿以前より大阪に於ける劇場の太夫元にして、嵐三右衛門と並び稱せられ、男女五子あり。伯を龜松といひ、後に二世半四郎となり、太夫元たる傍ら俳優をも兼ね、實惡を得意とせり。仲を半三郎といひ、叔を竹松といひ、享保七年、三世半四郎となり、稀れに太夫元たりしも專ら俳優を事とし、最も和事を主とせり。三世は江戸に下ること前後二度にして、寶暦九年、五十七歳を以て歿しき。又初世半四郎の長女は俳優山下金作に嫁し、次女は嵐新平に嫁せり。尚ほ三世半四郎と養女は最初瀬川菊次郎の妻となり、菊次郎の歿後、四世團十郎に再嫁せしかば、三世半四郎は晩年舞臺を退きてより之に依り、終に其處に死せりき。而して斯くの如く團十郎は彼れと女婿の縁あるを以て、舅家の斷絶せんことを憂へ、即ち己が門弟七藏をして岩井家を繼がしめたり。

【補】是より先き、京都に於て、中村富十郎も己が門弟初五郎をして岩井半四郎たらしめしが、幾くもなくして彼れは二世中村新五郎の名を冒せり。

明和六年（廿三歳）、森田座にて再び「忠臣藏」の小浪と及びお輕に高評を博し、同年秋、「七面」の所作事、翌七年春、「曾我」の五郎、同年、中村座にて狐の仕打、八年春、「助六」の揚卷、「忠臣藏」の勘平、等に次第に名聲を上げ、天明二年（三十六歳）十一月、中村座に於て瀬川菊之丞と一座して一對の「春駒」の所作を演せしが、菊之丞は餘り思入れ過ぎて半四郎の方高評なりき。斯くて翌三年（三十七歳）の評判記よ

り「上上吉」に上り、同四年九月、「葛の葉」に大當りを取りしを江戸の名殘として、四世松本幸四郎と共に初めて大阪に上り、留まること二年。天明六年冬、再び東歸して桐座へ現はれたり。



四世半四郎のお初（「似顔大全」より）

寛政十一年、尾上松助の「山姥」に、怪童丸に扮し、翌七年春、再び大阪に下り、秋、宮島に下りしが、さしたる評なくして直ちに江戸に歸りたり。而して同十二年春、中村座にて市川團藏の「幡隨長兵衛」に女房お時に扮せしを最後の舞臺とし、同年三月廿九日に病死せり。歳五十四。彼れは丸顔なりしかば俗にお多福半四郎と言へり。音調は明晰なりしも吃る癖あり、白を言出す時、必ず膝を叩き、又「有難う」といふ口癖ありきといふ。寛政七年の「役者人相鏡」に曰く、

丸顔にして聲にリンと張あれば一生色音失せず。諸人愛敬のある相なり。

又寛政十二年の「役者年中行事」には、

誠に花實兼備の若女形。別て花を表として愛敬は世界一抔に滿ちたり。娘形、世話女房、おやま、武道、ぬれ事、所作に至るまで何一つ不足のなき太夫さん。

と曰へり。されば、彼れの藝風は花やかにして愛嬌を以て勝り、而も雜多の方面に於て成功したりしなり。謂はゆる娘方の當り役は、「忠臣藏」の小浪とお輕、「菅原」の八重、「八百屋」のお七、「油屋」のお染、など、世話女房と武道とには、「忠臣藏」のお石と戸名瀬、「菅原」の戸浪と千代、「鉢の木」の白妙、「先代萩」の累と政岡、「戀女房」の重の井、「加賀見山」のお初、「大内鑑」の葛の葉、など、又おやまには、揚卷、高尾、虎、少將、阿古屋、「所作」には、七變化、うなゐ子、春駒、四季、おぼこ人形、長作　女房、枕慈童、道成寺、山姥、等を例とすべし。

尚ほ彼れは女方以外なる「曾我」の五郎、「忠臣藏」の勘平、など立役の荒事に於ても高評なりしのみならず、初世菊之丞と同じく、「女壻」の如き女方としての荒事にも成功したりき。又彼れは主に四世幸四郎と相提挈して、謂はゆる「生世話物」にも當りを取り、當時江戸の下流社會に實在せる任俠的の女性に扮するを得意とし、「三日月お仙」は其の最も著き一例なりき。即ち、寛政四年十一月、河原崎座の「大船盛鰕顏見世」に作者增山金八が初めて三田三角の局見世の光景を脚色し、半四郎をして此の役に扮せしめ

んとせるに、彼れは其の役柄を解せずとて拒絶せしかば、金八は強ひて實地を踏査せしめ、其の風俗を舞臺に實寫せしめて非常なる大入を取れりといふ。

〔補〕半四郎斷りしを、實地を見んとて頭巾にて面を包み、桟敷番勝次郎といふを案内として長屋路次を入りしに、番人斯くと察し、相番に囁きしゆゑ、金八即ち金千疋を出し、委細を語りて他聞を禁じ、終に實況を見ることを得たりと。

斯くの如く半四郎が女方として寫實に指を染め、市井の風俗を舞臺に上さんとせるは吾が演劇史に特筆すべき事實なりといふべし。「役者穿鑿論」に彼れが性行を叙して、

意地の張つた性で、留場などが喧嘩の仕樣をふだんまだろがられます。ひと頃は角の五六本づゝ生たてつかな向うへ廻して、蹴つある、野郎共見て呉れろ、などゝしやれられしが、近年は屹度おとなしくなられ、なか〲左樣な事では御座らぬ。

と云へり、蓋し彼れが扮せる任侠的の女性は即ち彼れが居常の通りなりしなり。

彼れが又俗に「目黒の太夫」又は「白金の太夫」と呼ばれき。其處に別莊を有したればなり。最初家號を「雜司谷屋」といひしが、見物より「やま〱」(女方の事)と稱贊する聲の頻りなりしより、寶暦の頃、終に「大和屋」と改めしといふ。妻をたよといひ、其の子は則ち次の時代に名優たりし五世半四郎なりき。前に言へる如く、半四郎は第三世に至るまで立役なりしに拘らず、四世に至り始めて女方となりしより、以後代々女方の名家として知られき。傳へいふ、彼れが其の師四世團十郎より初めて半四郎の名を襲

がしめられし時、彼れの言ひけるは、「實に名高き名にして有難き事言はん方なし。されど、女方の名に半四郎とはいかめしき樣なれど、傾城に半太夫といふ名もあれば、是よりは末世に至るまで、半四郎といふ名は女方の名に限るように心掛くべしと言ひ」きと。彼れは果して此の誓を實行せるなりき。

半四郎と同時代に江戸の劇壇に於いて相頡頏せるを三世瀬川菊之丞（濱村屋路考、寛延三―文化七）とす。菊之丞は大阪道頓堀の產にして、父は市山七十郎といふ振付の達人なりき。七十郎に二子あり、長男は市山七藏といふ女方にして、後に二世瀬川菊之丞の門に入り、瀬川七藏といひ、更に狂言作者に轉じて瀬川如皐といへり。次男は即ち三世菊之丞にして、初め市山富三郎といひ、明和二年（十六歲）、大阪の中村歌右衞門座へ色子として出で、其れより濱芝居へ出勤せしが、同八年より市山助五郎座に現はれ、「桂川」のお半に好評を得たりき。安永元年十一月、中村歌右衞門座の「尾上菊五郎不登咄」に有琴姬に扮し、瀬川菊之丞と名乘りて堀川館へ乘込むといふ件あり。思ふに、彼れと瀬川家との因緣は此の時より始まれるならん。而して二世菊之丞は翌安永二年三月に物故せしが、彼れは同三年（二十五歲）春、初めて江戸に下りて故人の門に入り、名を瀬川富三郎と改め、市村座の「伊達染曾我」に少將に扮し、同年三月、二世菊之丞の追善として「道成寺」を演じ、更に同年十一月、三世菊之丞の名を襲ぎ、市村座の「愛護若」に下女お菊に扮せり、蓋し此の襲名は二世菊之丞の遺志なりしといふ。「役者穿鑿論」に曰く、

故人路考常に此の富三郎が大阪にての評判を聞及び、何卒呼び下したく思ひし内、ふと病氣つかれ、既に死に向はんとして、妻のおみつを重き枕の側に招き、何とぞ富三郎を呼下し、我が名跡を定めよ、とくれ〴〵も遺言して泉下に赴きました。其故早速呼下せしに、此人心やさしく、ほんの娘のやうにおぼこ形氣なれば、おみつも甚だ不愍を加へ、初の程は太夫さま〳〵と申されしが、何時となく太夫さん〳〵といとほしがられます。

是れ此の間の事情を窺ふに足る。

以後の舞臺上の閲歴は、

安永四年正月、「榮曾我」に少將、二番目に傾城千代崎(二世菊之丞三回忌追善の「無間鐘」)。十一月、中村座、「花相撲」に股野猪熊[illegible]。

安永五年正月、「田植曾我」に少將。「昔八丈」に白木屋お駒、夏、「廿四孝」に八重垣姫、「忠臣藏」にお輕と小浪。十一月、市村座、「雪[illegible]黒主」に傾城墨。

安永六年正月、「羽衣曾我」に傾城通路(「羽衣」の所作)。「安達原」に戀衣。十一月、同座、「飛入鷹」に淨瑠璃御前と靜御前。

安永七年正月、「高尾曾我」に夕霧。「伊賀越」に笹尾とお袖。秋、「女夫順禮」に彌生の前、「戀女房」に重の井。十一月、同座、「梅[illegible]時」に梶兵衞娘お浪と鹿島の事觸れ(後に龍王の化身)。

安永八年正月、「江戸紫」に八百屋お七。三月、「若紫曾我」に少將と辻君お露(「淺間嶽」の所作)。二世菊之丞七回忌追善に「石橋」。秋、「薄雪」に腰元籬。「大内鑑」に葛の葉。十一月、同座、「榮楠」に勾當内侍と胡蝶の精。

安永九年正月、「曙曾我」に虎と少將、「女鳴神」、「出入湊」に奴の小萬。七月、「淨瑠璃坂」に傾城[illegible]、「[illegible]」に梅川、切に由留木[illegible]

童丸。十一月、同座、「群高松」に花賣お菊實は小女郎狐。

天明元年四月、「萬代曾我」に人丸姫、二番目の三日替道行にお夏とお千代とお半。

此時殆ど七十日の大入を取り、操芝居にても、菊之丞が似顏の人形にて興行し、是れ亦大當りを取れりといふ。

同年秋、「榮華舞臺」（幸四郎の長兵衛）に三浦屋小紫（蟲賣の淨瑠璃）。十一月、中村座、「四天王」に舞子妻菊。（「女暫」）實は蜘蛛の精。

天明二年正月、「粧曾我」に月小夜、「お菊幸助」にお菊。八月、「伊達染」に高尾の亡魂。十一月、同座、「五代源氏」に善知鳥 妹やすかた。

天明三年正月、「道成寺」の所作。五月、「忠臣藏」にお輕と戸名瀨。十一月、同座、「勝相撲」に傾城昔妻とおはや。

此の時、彼れが實兄七藏は「道成寺」の所作を一世一代として瀬川如皐と改め、始めて狂言作者となりしなり。

天明四年正月、「筆始勸進帳」に鎌田娘花園。三月、「娘長者」に月小夜。「お初徳兵衛」に田舍娘お房。六月、「千本櫻」に忠信女房信夫と狐。十一月、同座、「小町櫻」に小野小町と傾城墨染（「關扉」の所作）。

天明五年正月、「言葉曾我」に藝者お宮、曾我の二の宮、曾我五郎、「五變化」の所作（白酒、助六、邯鄲、羽根禿、石橋）。四月、「團七縞」にお梶とお辰。「音頭瀬戸」に博多小女郎。十一月、同座、「娵源氏」に空蟬の内侍と佐理卿息女初音姫。

天明六年四月、「壽曾我」に時政奥方と大磯屋の岩越。八月、「室町女文章」に葛城。十一月、森田座、「女武者」に巴御前（「女暫」）。

天明七年正月、「初買曾我」に虎。「磯馴松」に松風と小ふじ。「道成寺」の所作。十一月、同座、「三が庄」に富士左京娘梅が枝。
天明八年正月、「名取曾我」に重忠奥方と虎、二番目の二日替にお染と粂之助。秋、「高尾宮」に傾城高尾、下女お閏、大場が釜娘、藝者おしづ。十一月、市村座、「源氏再興」に女順禮お船。
寛政元年正月、「假名書曾我」に傾城舞鶴(「女朝比奈」)と月小夜。「淺間嶽」と「石橋」。五月、「三十石」に眞弓御前と筑波のおたね。六月、「戀飛脚」に梅川、「契情容儀」に高尾と賤女おみや、「山姥」の所作(爲十郎の怪童丸)。十一月、中村座、「小町村」に小野小町と小女郎狐、二番目に黑木賣芹生のお里。
寛政二年正月、「伊達染曾我」に高尾と尾上召使お初(松助の岩藤)。秋、「兩國幟」に羽生村の累、寺岡平右衞門女房、細川風呂のおやし。十一月、同座、「狹夜中山」に鹿島の事觸れ。同時に市村座、「峯　楠」に北野天神尊像ととの、法印娘蓬生。

此の時彼れは兩座を兼勤したりき。

寛政三年正月、中村座、「艶麗曾我」に藝者おとり(「春駒」の所作)。二番目の二日替りに三勝(半四郎の半七)と半七(半四郎のお花)。九月、「伊勢物語」に春日野の信夫。十一月、市村座、「源家角鐔」に藝者お仲(「暫」の請)。
寛政四年正月、「江戸子曾我」に虎。「五人女」に雁金のおぶん。「重井筒」におふさ。六月、「染井鉢植」に後家お禰、お園の方、お關。「青柳硯」に道風とお町。「女鉢木」に白妙。八月、「箏白猿」に傾城鳴照と古曾部左京女房。十一月、同座、「伊達大門」に靜御前。

此の時より彼れは「極上上吉」の位に上れり。(五十三歲)

寛政五年正月、「貢曾我」の二番目にお菊(門之助の幸助)。秋、「桑名祭」に桑名屋佐五郎女房、「近江源氏」に篝火。十一月、都座、「

陣取」に巴御前（「女暫」）。

寛政六年正月、「觀曾我」に虎。二番目の二日替りに小いなと小菊。五月、「文祿曾我」に田邊文藏妻おしづ。秋、「三本傘」に傾城葛城。十一月、「名和歌譽」に白拍子久方。「廓繩張」に仲居お濱。

寛政七年正月、「五大力」に小萬、切に「青楼人形」の所作（二世菊之丞廿三回忌追善）。四月、「忠臣藏」にお石とお園。秋、「吉原養育」に傾城高尾。「一谷」に相模と菊の前。九月、「大内鑑」に芦屋道滿妻。十一月、桐座、「柱曆」に八丁礫喜平次女房、常磐御前、池田宿の朝顏。

寛政八年正月、「隅田春」に由兵衞女房小梅と丁稚長吉。「赤穗驪龍」に顏世御前。五月、「皐月緘」に累。「兜軍記」に阿古屋。「國姓爺」に錦祥女。秋、「比翼三紋」に油屋お染。「彦山」にお園。十一月、同座、「松行平」に松風。

寛政九年正月、「曾我門松」に和田の息女虎御前。「青楼詞」に萬字屋の八橋（彦三郎の佐野次郎左衞門）。三月、「菊水卷」に奥方秋篠と寄波。四月、「時雨櫻」にみゆき御前、二番目に「道成寺」。七月、「月武藏野」に小いな。九月、「菅原」に菅相丞。十一月、同座、「鉢木」に乳人園菊、お百狐、白妙亡靈。

寛政十年正月、「小袖曾我」に工藤奥方。「戀山開」に三國屋小女郞。三月、「浪華詠」に夕霧と里見伊助女房。五月、「團者待」に女房おそれ。秋、「三面大黑」に片桐助作女房と蘇鐵の精。八月、「薄雪」に園部奥方。「のべの書置」に小春と紙治女房。「淺間嶽」に逢州亡魂、「石橋」の所作。九月、「五大力」に小萬。十一月、市村座、「橘系圖」に水茶屋おしづ。

寛政十一年正月、「花街曾我」に虎。「詠千金」に松葉屋の喜瀨川。三月、「加賀見山」にお初。四月、「血汐染色」にお妻。五月、「廿四孝」に勘助母と濡衣。「女文字」に娘信夫。八月、「千兩幟」に岩川女房。九月、「千本櫻」に忠信と源九郞狐。「江戸紫」、「八百藏の長兵

衞）に小紫。十一月、同座、「雪世界」に鹿島踊の所作。

此の時、彼れは中村千之助を養子とし、名を瀨川菊之助と改めしめき。即ち此れ四世菊之丞なり。

寛政十二年正月、「譽曾我」に鬼王妹十六夜、「戀姿見」に藝者小いな。二月、「桂川」にお半。三月、「六歌仙」（雛助）に小町、「蟬丸」に桝花女。四月、「男結」に印南十内妻後に傾城大岸と印南志妻。五月、「平假名」に梅が枝。七月、「山姥」の所作（雛助の怪童丸）。八月、「十帖源氏」に葛城とお國御前。九月、「菅原」に八重と戸浪。十一月、同座、「浪濟渦」に五代三郎妻。

享和元年正月、「馴染曾我」に箱王丸。「戀いろは」にお染姉岩木と久松。四月、「伊達曲輪入」に高尾、「梅の由兵衞」（宗十郎道善）に女房小梅。五月、「信仰記」に雪姫。八月、「蘆雁的」に浮島大八女房。九月、「黑船」に女房おまさ。十一月、同座、「女將門」に將門玄と秀鄕奧方。

此の九月興行の時、彼れは菊の字を憚りて菊之丞を改め、其の俳名路考を藝名としたりき。

享和二年正月、「纈盃」に阿古屋。三月、「菜種御供」に菅相丞、白大夫娘、覺壽。五月、病氣の爲め休業。秋、「信田妻」に葛の葉（一代の名殘）。十一月、大阪、中芝居、「東金草」に占方お百。

彼れは二十九年ぶりにして故鄕へ歸れるなり。

享和三年正月、「平假名」に巴御前と千鳥（無間の鐘）。四月、角芝居、「菅原」に菅相丞と八重。「女鉢木」に白妙、「大職冠」（化粧「帶屋」にお半。七月、京都、北側芝居、「平假名」に同上。「十帖源氏」に娵早枝、葛城、お國御前。十月、「女鉢木」に同上。十一月、大阪、角芝居、「金幔幕」にお針おはま。

文化元年正月、「霜傳授」に御臺綾の臺、小西行長妻、娘およつ、「道成寺」の所作。三月、京都、北側芝居、「忠臣藏」に戸名瀨とお園。「道成寺」の所作。「五山桐」に五右衛門女房、「山姥」の所作、「岩井風呂」にお富。秋、大阪、中芝居、「間者待」に助市女房と楠後家。「淺間嶽」と「石橋」。角芝居、「大内鑑」に葛の葉。十一月、江戸、中村座、「菊相撲」に修行者無量尼。

彼れは二年ぶりに再び東歸せるなりき。

文化二年二月、「虎女石」に月小夜、虎、東金茂右衛門女房。三月、五日替りの所作（二世菊之丞三十三回忌追善）。四月、「妹背緣日」に園部侍室と娘おれん。五月、「夏祭」にお梶と重の井お房、「戻駕」の所作。七月、「鏡臺山」に岩川女房と園右衛門娘。八月、「餘慶曾討」に御影堂女房、と操御前、「由緣月」に夕霧。九月、「千本櫻」に靜。十一月、同座、「清和源氏」に紫式部。同時に市村座、「吉野鐘」に吳羽の前と天女の化身。

文化三年正月、中村座、「箭立杉」に月小夜、片貝、梛の葉狐。「歌祭文」にお染と久松姉。四月、「珍花行列」に尾上。五月、「姫小松」にお安。八月、「二木仇討」に丹右衛門女房と園花御前。十一月、同座、「雪陸奥」に傾城奥州。

文化四年三月、「櫟曾我」に虎。九月、「忠臣藏」に顏世と戸無瀨。十一月「雪木下」に白拍子采女（一世一代の「道成寺」）、「女鉢木」に白妙。

此の時彼れは路考を改めて仙女といへり。

文化五年正月、「妹背山」に定香と柴六女房。三月、「花兒譜」に吉田の花子。五月、「千本櫻」にお里と典侍局。八月、「菅原」に千代と櫻丸。十月、「廓文章」に夕霧、十一月、同座、「恩賀仙」に待宵の侍從、宗清妻、黒木賣梛葉。

文化六年正月、「想曾我」に月小夜、「八百屋お七」にお杉。四月、「秋葉權現」に牙のお才、「七變化」の所作（二世菊之丞三十七回忌追善）。五月、「忠臣藏」に顏世とお園。七月、「高尾丸」に高尾と平四郎女房。「戀女房」に重の井と定之進女房櫻木（「道成寺」の所作）。八月、「近江源氏」に四斗兵衛女房と宇治の方。九月、「伊勢物語」に信夫。十月、「黒船」に女房おまき。十一月、同座、「奥州牧」に實方奥方と一つ家の主おはま。

文化七年正月、「御攝曾我」に大姬と兵部娘小いな。四月、「女鉢木」に白妙。七月、「道中娘」に傾城重の井。九月、「伊達游」に政岡。

彼れは此の時より病を獲て、十二月四日、六十歳を以て歿せり。

●●●●彼れの特色は其の美貌と女性らしき態度を第一とし、且つ地藝と共に所作事をも兼ね、初世以來瀨川家の藝たる「道成寺」「無間鐘」「石橋」の如きは、屢々之を舞臺に繰返したり。而も晩年、彼れが西上せる時の評判に、

とんと幽玄體の所作なく、拍子づくめばかりにて、舞子のやうなといひましたぞ。（文化元年、「役者諺」）

といへる、尠くとも京阪人の眼に詠ぜる彼れの舞踊は餘りに浮華に過ぎて、劇的の趣味に缺けたりしならん。又同じ時の評に、彼れが「平假名」の巴御前に扮せるを擧げて、

とかく、瀨川氏は色情な事らとせらるゝゆゑ、巴にて和田に責はるゝ時、早一寸と尻眼づかひのやうな心持が頻りにしられたが、其時、大分見物ががや／＼いひました。軍中にて義仲の最期を聞き、無念がる間もなく、義賢の女房に成とて早戀の情を催して貞節が薄く思はれたが、其後は其氣持をやめられたでよかつた。（同上）

といひ、同じ腰元千鳥を評して、

源太にあうてからの口舌は餘りしつこ過ぎたじやないか。……歸りしなに口を吸うて別るゝ仕樣……此の狂言は鎧な身あがりの銀のかはり外へ預け置、それもなければ源太の發足も叶はず、大に心配の所ゆゑ、中々いやらしい仕內の出來る場ではあるまい。……手水鉢を無間の鐘となぞらへろまでに、金比羅樣の守が火鉢へくばつたり、奥の客の金を盜まんとしても、女の事ゆゑ、こわげ立ち、氣を丈夫にせんと、酒を呑んだり、いろ〱思入多く、あまりに小細工過ぎました。……源太が歸ると、それから是れまで、有來りたる通りの、すぐに二八十六の歌ならば幽玄にてよからんに、外の歌のめりやすにて、とかく思入多く縫ひあげかしてほしいと申しました。（同上）

といひ、又は「帶屋」のお半を評しては、

世上にては顏がひねくろしいの何のと惡口をいふたれど、年配の若女形が娘形をする事ゆゑ其筈の事……。仕內においては、いやはやきつい事〱。誠に十三四の娘の情は動きませぬ。……長右衞門がいろ〱と言聞かす所、年齒の行かぬ娘の事ゆゑ、只うつむいてゐて膝へ淚のこぼれるを袖にて拭ふ氣持など、大に感心いたしました。此處などはきつと上手のしるしは確か〱。（同上）

といへり。即ち彼れの缺點は餘りに色つぽきと餘りに寫實に走りて仕草のくだ〱しきにあり。而して此の缺點は又彼れの長所にして、最も娘方もしくは女方に巧みなりしなり。彼の「夕霧」「高尾」等の傾城役を屢演せしも同じ理由より來りしならん。

菊之丞が尙は市山富三郎たりし時、嵐雛助に其の號を襲げよと勸められて、女方の名にあらざる故を以

て辭退せし事は、既に雛助の條に述べたり。これ彼れが壯時より用意の深かりしを知るに足る。曾て自ら藝道の祕訣を語りて曰く、



三世菊之丞の「道成寺」（「似顔大全」より）

若き衆は新狂言の書拔を受取ると、先づ其れを覺える事と、衣裳の思付とに心を勞するなり。私は先づ第一に其役の身の程をかんがへるなり。例へば、由良之助女房お石の役になれば、殿樣鹽谷判官は何萬石程の大名にて、家老由良之助は千五百石、年は幾つ位の男、其女房ゆゑ、年は幾つ程、扨其次に衣裳は、家老の女房にて、内に居るには何れ無地のものにて、色は何、帶は何、髮はいかやうと工夫をいたし、扨書拔せりふは、一體其筋な合點して、相手よりせりふ受取渡しの折、其極り／＼を能く覺えるやうにさへすれば、自然と長せりふも覺え易く、鑓を出すやうな事はないものなり。扨、狂言の上にて、お石心立は如何ならん、心根がたく、しつかりとして色氣なく、さつぱりと綺麗に打上りたる女なるべしなぞと考へ、尤も其女の心得な工夫して、始終其の心持の拔け

ぬやうに心懸くるなり。（「東の花勝見」）

彼れは又曰く、

舞臺に出でゝは、相手の者色々仕内のうち、其脇に何も言はず手を束ねて居る時も、眼を放さず心を付けて居る故に、ぢろ〳〵と棧敷の方を見る事をせず。其故に御知る方の御見物を見付けぬ勝なり。……少したりとも氣の放れぬやうに心懸くるなり。（同上）

彼れは江戸の劇壇に女方の巨擘として生存せること久しかりしのみならず、殆ど前例なき兩座駈持を屢し、特に報酬の如きも、文化五年（死する前二年）の記錄によれば、同時代に比類なき一か年千八百五十兩の巨額なりきといふ。然れば內政頗る豐かにして、金銀を蓄へ又家屋地所を數多有せり。彼の享和二年に西上せし時、京阪共に「さまでの手際もなかりしほどに、伊勢の古市なりける芝居へ出で、無間の鐘の狂言せしが、或る日、其の役にて石の手水鉢に向ひ、三百兩の金こそほしけれと言ひたりし時、見物の中より、左程に黃金なくて叶はじとならば、江戸の町屋敷一か處賣りねかし、と言罵りければ、といふて今夜の間にも合ひまじと、狂言ながらに答へしに」、皆人其の頓智を感じ、其の後は京大阪とも此の事を聞傳へて評判を取返したりといふ。

俗に彼れを「仙女路考」といふ。彼れには實子なくして、養子二人あり。一を瀨川路三郎といひ、一を路之助といひ、路之助は後に四世菊之丞の名を襲ぎて次の時代の名優たりき。

傳へいふ。彼れの養子四世菊之丞が十三歳なりし時、興行主は曾て三世三津五郎の山姥にて、五世半四郎に怪童丸を勤めさせ、大入を取りし前例より、同く怪童丸を勤めてと乞ひけるは、彼れが聞きて、

杜若（半四郎）とは成田屋より出でたる家筋、女方でも市川の流れを酌めば荒事の怪童なしても無理はなし。そなたは純粋の女方の家筋、まして色氣のない赤い顔なぞをする了簡は止めるがよい。

とて拒絶せしめたりといふ。

二世小佐川常世（綿屋巨撰、寶暦三―文化五）は初世常世の門人なり。初世は小佐川重右衛門の門下たる小佐川平藏の弟子にして、初め染松常世といひ、又大和川の姓を冐し、明和三年、四十三歳にして歿せり。二世常世は初め小佐川七藏といひ、寶暦十三年の頃、色子として舞臺に現はれしが、明和五年（十六歳）、師の名を襲ぎ、寛政元年（三十七歳）の評判記に初めて「上上吉」の位に上れり。是れより次第に老功を以て進み、半四郎及び菊之丞に次いで江戸に於ける女方の名手と稱せられき。彼れの長所は愁嘆事もしくは辛抱役に在り、「加賀見山」の尾上、「先代萩」の政岡、「忠臣藏」のお石、等は其の得意とする所なりき。文化三年の「役者大極丸」に彼れを評して曰く、

しつぽりとした役をさせて涙をこぼさせたは、昔の仙魚丈（瀬川菊次郎）以來、江戸にては當時巨撰丈より外に味持つたものなく、京大阪へ上ぼして見たいは此人ぢや。

又寛政二年の「役者紋選」には、

婦人の情ふかく、姿よく、是至つて麗し。なすこと功者にして凡て器用肌なり。町人の妻女貞心あり。まゝ振袖の少女歌舞のわざあり。

といへり。然れば、娘方及び所作事をもよくせしなり。而して其の缺點は實に過ぎて華に空しき事なりき。寛政十二年の「役者年中行事」に、

仕打に色を含み、情を失はず、面白いこと。しかし此上花があらば尚によかるべし。實六分花四分と存ずる。何でも上手ぢや。

と曰へり。



二世常世の「お初」（「似顔大全」より）

第二編　文化文政時代の俳優と其の技藝

第九章　七世片岡仁左衛門と二世嵐吉三郎

七世片岡仁左衛門――俳優としての經歷――彼れの體格――成功せる一因。
二世嵐吉三郎――彼れが長所――當り藝の主なるもの――三世歌右衛門との比較。

文化文政時代に於ける京阪の俳優にして最も先輩なるものを七世片岡仁左衛門(松島屋我童、寶暦五―天保八)となす。片岡家第四世までの傳統は既に「日本演劇史」のうち、初世仁左衛門の條下にいへり。五世仁左衛門は始め山本七藏といひ、四世に養はれて藤川半三郎と改め、後に五世の名を襲ぎしが、其名甚だ著はれずして早世せしかば、六世仁左衛門の名は片岡の門葉なる片岡彦四郎によりて襲がれたり。然るに彼れは幾くもなく三保木儀左衛門(初世)と改名し、片岡の名跡の一時中絶せしを、七世仁左衛門に至り再興せるなり。彼れは京都出身にして、二世中村十藏の門に入り、中村松助といひ、後淺尾爲十郎の弟子となりて淺尾國五郎と稱せしが、故ありて破門せられ、姓を山澤と改めて大阪に於ける中芝居に出でたり。幾くもなく淺尾の苗字に復し、天明三年、京都の中山猪八座に於て「阿波鳴門」に板屋勘兵衛に扮して好評を博し、天明七年(三十三歲)に至り、始めて仁左衛門の名を襲ぎ、大阪の中の座に現はれき。寛政元

年冬、上京し、此の頃より立役をも兼ね好評を得しが、同六年、再び大阪の中の座へ下り、「島廻」（最初の「五大力」）の笹野三五兵衛に當りを取り、「菅原」の白太夫、「大塔宮」の平賀三郎、「出入湊」の八木三郎と獄門庄兵衛に扮せしが、興行中、故ありて狂言作者並木五瓶と共に江戸へ下り、十一月、都座の「閏訥子」に紀名虎に扮せしも不評なりき。同七年夏、「曾我」に鬼王、「五大力」に再び笹野三五兵衛、「忠臣藏」に師直、九太夫、義平、「大内鑑」によかん平、同八年、「信仰記」に松永大膳と是齋、「菅原」に白太夫、「彦山」に京極内匠、いづれも好評なりしが、同年十一月、「清和源氏」に番太郎實は伊豫太郎にて、番屋の中より密書を持ちし飛脚を刺殺し、欠伸をしながらの出に大喝采を博し、翌九年（四十三歳）の評判記に始めて「上上吉」の位に上されたり。以後の俳優としての經歴は、

寛政九年正月、「曾我」に工藤。「加賀見山」に政尾の局と長玄。「盛衰記」に權四郎と平次。「極彩色」に藤兵衛。九月、「磯馴松」に此兵衛。「爺打栗」に金時（江戸の名殘狂言）。十一月、大阪、角座、「萬兩 橘」に馬士江戸六實は宗清、「彦山」に京極内匠。

彼れは三年めに上阪せるなり。

寛政十年正月、「薩摩櫛」に藻屑の三平。「吾妻世話事」に道具屋甚三。「鄙島原」に奴無間の所作。「姫小松」に俊寛。「一谷」に熊谷、十一月、京都、南側芝居、「雪月花」に奴江戸助實は宗清、「一谷」に熊谷。

これ、彼れが七年ぶりの上京なりき。

寛政十一年正月、「鄙島原」に奴國平（二度目の奴無間）。「橋下富士」に一の關彦六と神道源八。これより伊勢へ下る、歸阪して大西芝居、「盛衰記」に平次と松右衛門。「出入湊」に黒船忠右衛門。京都、北側芝居、「信仰記」に松永大膳、山口九郎次郎、是箕、「五大力」に三五兵衛。十一月、南側芝居、「雨下知」に光秀、「在原系圖」に闌平。同月、大阪、中座、「信仰記」に同上。

寛政十二年正月「淀川話」に馬士平太と高橋の局、上京、「近江源氏」に高綱、和田兵衛、時政、「伊達染」に豆腐屋佐次兵衛、「伊勢物語」に孔雀三郎と小よし。「雷電」に源八。「大塔宮」に齋藤太郎左衛門と村上彦四郎、「巖流島」に佐々木巖流、「大内鑑」に石川惡之助。「加賀見山」に長玄と政尾の局、「狹間合戰」に竹中官兵衛と石川五右衛門。十一月、京都、北側芝居、（彼れが子愛之助の座元）「薄雪」に伊賀守と正宗。

此の翌春より「至上上吉」の位に進みたり。（四十八歳）

享和元年正月、「加賀見山」に長玄と岩藤、「操物語」に武智左馬五郎と馬士かち助、夏、宮島へ下る。歸阪、中座、「水滸傳」に船頭小平二、「切子曙」に梶川新十郎。「菊水卷」に宇治常悦、「伊賀越」に城五郎と政右衛門。十一月、京都、南側芝居、同上。

享和二年正月、「美島林」に奴國平。「布引」に義賢。「出入湊」に獄門庄兵衛と奴の小萬、「忠臣藏」に判官と平右衛門。「在原系圖」に闌平。北新地芝居、「極彩色」に喧嘩屋五郎右衛門と寺子屋兵助、秋、中座、「太功記」に清水長左衛門　光秀。京都、因幡藥師芝居、「一谷」に熊谷。十一月、南側芝居、「双蝶々」に十次兵衛と長吉、

享和三年正月、大阪、中座、「盛衰記」に平次と松右衛門、角座、「菅原」に覺壽、白太夫、松王。「大塔宮」に村上彦四郎と齋藤太郎左衛門。「帶屋」に長右衛門。七月、京都、北側芝居、「盛衰記」に平次と松右衛門。「信仰記」に東吉。「出入湊」に奴の小萬と忠右衛門

「物草太郎」に伴左衛門と物草太郎。「菅原」に覺壽と松王。十一月、大阪、角座、「金幔幕」に奴道平。

文化元年正月、「箱傳授」に獵師磯六と長岡勇齋。京都、北側芝居、「忠臣藏」に判官と平右衛門。「撞鐘頭」に糸屋新兵衛、「五山桐」に五右衛門と大炊之助。「岩井風呂」に利助。秋、大阪、角座、「伊勢物語」に孔雀三郎と小よし。「歌祭文」にだはの勘六。「大内鑑」に道満とやかん平。「物草太郎」に伴左衛門と物草太郎。十一月、同座、「牛負稻」に五斗兵衛。

文化二年三月、「苗打松」に和田大八と奴くが助。秋、名古屋に下る。九月、京都、北側芝居、「白石噺」に惣六。「戀飛脚」に孫右衛門。十一月、北野下の森芝居、「一谷」に熊谷、「戀湊」に出村新兵衛、「在原系圖」に蘭平。

文化三年春、伊勢へ下る。秋、大阪、角座、「一谷」に六彌太と熊谷。「御國名物」に政尾局。「秋葉權現」に玉島逸當と幸兵衛。十一月、京都、北側芝居、「秋葉權現」に同上と月本圓秋。

文化四年正月、大阪、角座、「高砂松」に印南眞助と若松大炊頭。名古屋へ下る。秋、大阪、中座、「水滸傳」に島の小平二。「東鑑」に朝比奈、「薄雪」に正宗と大膳。

文化五年正月、「品評林」に梅津掃部とさゝら三八。三月、角座、「天下茶屋」に但馬守、三木守、幸右衛門母。「狹間合戰」に官兵衛と五右衛門。「〽」に百姓與三二と絞の吉兵衛。名古屋へ下る。秋、歸阪、角座、「高音鼓」に淺間左衛門。「戀女房」に左內、重の井、定之進、江戸兵衛。「兜軍記」に岩永。十一月、京都、南側芝居、「戀女房」「高音鼓」に同上。

文化六年正月、大阪、角座、「戀釣船」に馬士平太と明智左馬五郎。伊勢へ下る。五月、大阪、中座、「御所櫻」に辨慶、「八百屋」に島田平右衛門、「菅原」に松王。堀江芝居、同上。「出入湊」に獄門庄兵衛。七月、中座、「錦絹川」に與右衛門。「廿四孝」に横藏と高坂彈正。「縺纏錦」に春藤次郎右衛門、「山姥」に怪童丸。角座、「五山桐」に五右衛門。「楠昔噺」に老婆。「白石噺」に常悦と宗六、「六歌

仙」の所作事。十一月、京都、南側芝居、「廿四孝」に同上。「住吉物狂」に田原又太郎。

文化七年正月「廓船諷」に淺川内藏之助と桑名屋德藏。伊勢へ下る。秋、歸阪、「讐仇討」に九十九新左衛門と筆助、「住吉物狂」に田原又太郎。「千本櫻」に知盛と權太、「爺打栗」に公時。十月、上京、「讐仇討」に同上、「姬小松」に俊寛。

文化八年正月、大阪・中座、「驛路梅」に澤井城五郎と唐木政右衛門。「安達原」に貞任、「出入湊」に獄門庄兵衛と奴の小萬。四月、堺より備中へ下る。歸阪、堀江芝居、「戀女房」に四役。八月、「在原系圖」に蘭平。九月、中座、「三十石」に瑞軒、源八、權九郎。十一月、京都、北側芝居、同上。

文化九年正月、「戀登船」に馬士平太と明智左馬五郎。「双蝶々」に長五郎と治部右衛門。「天下茶屋」に林左司馬、幸右衛門、三木頭。「紙治」に孫右衛門、「戻駕」に駕かき。

文化十年正月、大阪、角座、「達大礎」に杉本甚内、宇治兵部之助、佐五平姉おまん、楠普傳。伊勢へ下る。歸阪、堀江芝居、「廿四孝」に橫藏。「綴錦」に次郎右衛門。上京、「忠臣藏」に判官、平右衛門、義平。

文化十一年正月、大阪、中座、「釣鐘櫻」に奴淀平と漁師浪六實は七草四郎。「巖流島」に巖流と笠原老翁。「岩井風呂」に治助。八月、名古屋に下る。十一月、京都、北側芝居、「驛路梅」に城五郎と政右衛門。

文化十二年春、「秋葉權現」に玉島逸當と日本駄右衛門。伊勢へ下る。歸阪、角座、「妹脊山」に定高と鱶七。「東鑑」に朝比奈。秋、再び伊勢へ下る。

文化十三年正月、大阪、角座、「伊賀越」に政右衛門と鳴見、「錦帶橋」に米五郎、「戀飛脚」に孫右衛門。三月、「船橋」に佐野兵衛と勇助。五月、「信仰記」に春永、正清、大膳、「夕霧」に喜左衛門。堺宿院芝居、「峯禪」に千島守と清德寺和尚、「岩井風呂」に東木正三、顯

江芝居、同上。「紅葉」に幡隨長兵衛、「繼纒錦」に奴伊兵衛と高市武右衛門。十月、「先代萩」に浮世渡平、大江廣元、岩倉主膳、切に「鳴神上人」。「戀女房」に重の井と八藏。

これより彼れは十九年ぶりに江戸へ下りき。

文化十四年正月、江戸、桐座、「新舞臺」に石川五右衛門と岸田局。「東鑑」に朝比奈。「廿四孝」に横藏と高坂彈正。「堀川」に本國屋仙太郎。「三略卷」に鬼若と鬼一。河原崎座、「一谷」に六彌太と熊谷。「戀飛脚」に孫右衛門。「嚴流島」に嚴流と笠原老翁。「戀女房」に重の井と八藏、切に「六歌仙」。十一月、歸京、南側芝居、「東鑑」に朝比奈、「戀女房」に左内、定之進、重の井、「六歌仙」の所作事。

文政元年正月、「菅原」に覺壽と松王、切に白髮の公時。「繼纒錦」に次郎右衛門と奴伊兵衛。大阪、角座、「廿四孝」に横藏と高坂彈正。「物草太郎」に物草と伴左衛門。伊勢へ下る。

翌年春の評判記に「極上上吉」に進められき。（六十五歳）

文政二年正月、京都、南側芝居、「石川染」に石田局と五右衛門。大阪、堀江芝居、同上、切に「奴無間」。中座、「黄金鯱」に高坂甚内と老女村路。「二代勝負附」に秋津島。「闌奢待」に義貞。「扇矢數」に師直、平右衛門、由良之助。「盛衰記」に平次と松右衛門。「紙治」に乞食嚊お熊。十月、兵庫へ下る。十一月、大阪、角座、「双蝶々」に姉お關と十次兵衛、「小栗」にねず兵衛、「重井筒」に德兵衛兄。

文政三年正月、「花大樹」に小田春永、千切屋金七、松下太平次、柴田修理之助。「千本櫻」に銀平と梶原、「小いな」に奴胴助、磯の谷十内。「隅田川」に甚三。四月、「嚴流島」に嚴流、笠原老翁、加藤正清、「女鉢木」に源左衛門。名古屋へ下る。

文政四年正月、京都、因幡藥師芝居、「妹背山」に定香と鱶七、「繼纒錦」に次郎右衛門。二月、「出入湊」に黒船と奴の小萬。勢州へ下

ろ。八月、大阪、堀江芝居、「秋葉權現」に日本駄右衛門と月本圓秋。九月、角座、「菊水卷」に常悅と秋夜姫、「山姥」に山賤。「巖流島」に巖流と笠原老翁。十一月、中座、「三十石」に淀與三右衛門と河村瑞見。「三略卷」に飛鳥と鬼若、「出入湊」に忠右衛門と孫三郎。

文政五年正月、「染分總」に定之進、由留木左衛門、福島政則。「五山桐」に高景と久吉、「五雁金」に安の平兵衛と田舍屋六兵衛。五月、「大石摺」に師直・由良之助、堀部彌次兵衛、「淀屋橋」に根津四郎右衛門。七月、「水滸傳」に島の小平次、「繿縷錦」に次郎右衛門。九月、上京、「三略卷」に鬼若と鬼一、「戀飛脚」に孫右衛門。十二月、大阪、中座、「菅原」に覺壽、松王丸、白太夫。

文政六年正月、「品評林」にさゝら三八と梅津嘉門、「高野物狂」に田原又太郎。「乗合話」に民谷新左衛門、金比羅神靈、堀口勇軒、矢流左司馬。「達大礎」に杉本甚内、楠普傳、兵部之助。「双蝶々」に甚兵衛と十次兵衛。

文政七年正月、京都、北側芝居、「戀登船」に高橋局、馬士慶太郎、明智左馬之助、「桐壺」に仕丁の景事。「筑紫琴」に老女お玉と秋月弓之助。「安永錄」に安達友之進。勢州に下る。

文政八年正月、京都、南側芝居、「秋葉權現」に日本駄右衛門と玉島逸當。大阪、中座、同上、「小いな」に巴屋八八、「切子籠」に梶川新十郎。六月、勢州へ下る。

これより再び江戸に下りき。（七十一歳）

文政九年正月、江戸、河原崎座、「三升曾我」に工藤、日本駄右衛門、朝比奈。六月、「腰越狀」に五斗。「五大力」に三五兵衛。八月、「忠臣藏」に平右衛門、本藏、判官。九月、「繿縷錦」に次郎右衛門、「信仰記」に大膳と九郎次郎。

文政十年正月、「曾我島臺」に工藤、「妹背山」に鱶七。五月、市村座、「夏祭」に釣船三ぶ。七月、「忠臣藏」に師直と九太夫。十一月、河

原崎座、「判官贔屓」に辨慶、「八百屋」に島田平左衛門。

文政十一年正月、「曾我綱見」に近江小藤太と鷲屋甚兵衛。三月、「伊達抄」に鬼貫、「千本櫻」に辨慶と梶原。五月、「伊賀越」に城五郎、「廿四孝」に勘助母、「千兩幟」に千羽川。九月、大阪、角座、「物草太郎」に伴左衛門と物草、「双紋」に水尾十左衛門と幡隨長兵衛。十一月、同座、「加賀見山」に長玄と安田庄司。

蓋し、江戶にては、さしたる役もなくして、終に中途より歸阪せるなり。

文政十二年正月、「薄雪」に大膳と正宗。三月、「柳櫻」に澤江木多之頭。京都、北側芝居、同上。五月、「白石噺」に庄屋七郎兵衛、「腰越狀」に五斗。十一月、大阪、角座、「白石噺」に同上、「木津川八景」に木津勘兵衛、「布引」に瀨尾。「連歌評判」に松下嘉平次、「反魂香」に土佐將監。同月、京都、北側芝居、同上。

天保元年正月、「雪月花」に此村大炊之助と松田十內。三月、「忠臣藏」に九太夫と義平。「譽景淸」に景淸と三保谷。「伊勢音頭」に藤浪左膳。八月、大阪、中座、「彥山」に一味齋、「花楓」に青山瀨左衛門。「大內鑑」に松浦兵庫頭と道滿、「千本櫻」に彌左衛門。十一月、京都、北側芝居、「菅原」に白太夫と時平、「千本櫻」に同上。

此の時より、評判記に「老功無類」と記されき。（七十六歲）

天保二年正月、大阪、角座、「廓亭環」に百姓十作實は木山常陸之助と、大道寺勘解由、「稻妻草紙」に上杉四郎兵衛。「隅田川」に永樂屋與兵衛。伊勢へ下る。七月、歸阪、角座、「近江源氏」に時政、「切籠曙」に梶川新十郎。「桂川」に半齋、「譽二街」に大道寺美作と田代佐五右衛門。十一月、京都、北側芝居、「忠臣藏」に石堂と本藏。

天保三年正月、大阪、筑後芝居、「英勇記」に笠原老翁、百姓七助、加藤正清。三月、「朝顔日記」に老女お玉と秋月弓之助、「夏祭」に釣船三ぶ、「吉原細見」に姉小わた。六月、兵庫へ下る。八月、大阪、中座、「天下茶屋」に早瀬左司馬と花形刑部。九月、「浦朝霧」に唐橋彈正。十一月、京都、北側芝居、「巖流島」に巖流、正清、笠原老翁、「吉原通」に水尾十郎左衛門と幡随長兵衛、「妹背門松」に久松。大阪、中座、「祭文讀」に内芝仙人と岩倉主膳、「姫小松」に俊寛。

天保四年正月、角座、「稚兒淵」に久吉と高景。下の關へ下る。九月、中座、「弓張月」に阿蘇忠國、炭屋藤市、鬼夜叉。十一月、京都、南側芝居、「千本櫻」に彌左衛門、「東鑑」に朝比奈、「お染久松」に山家屋佐四郎。

天保五年、大阪、中座、「染分總」に定之進、乳母小笹、福島正則、「出入湊」に孫三郎。三月、「先代萩」に岩木兵庫、「大頭」に平左衛門。五月、「盛衰記」に延壽、「いろは新助」に今福村六兵衛。八月、筑後芝居、「伊勢物語」に名虎亡魂と小よし、「隅田春」に信樂勘十郎。「伊賀越」に和田靱負、澤井城五郎、梶原源五左衛門。十一月、京都、南側芝居、「伊賀越」に同上、「妹背山」に入鹿、「大經師」に岐阜屋道順。

天保六年正月、大阪、中座、「英双紙」に村路の老母。三月、「菅原」に白太夫。「箱傳授」に此村隼人、「伊勢音頭」に藤浪左膳。五月、「詠吉野」に梶原景時、「狹間合戰」に義龍。「忠臣講釋」に天川屋義平と人見佐五右衛門。

天保七年正月、同座、「蕾八總」に山内秋定。名古屋に下る。十一月、京都、南側芝居、「八陣」に八十瀨局。

天保八年春は大阪の角座へ出勤する筈なりしに、病氣の爲め舞臺を休み、三月一日、終に八十三歳にして歿せり。

彼れの體格について、享和四年の「役者壽」は曰く、

> 親玉(嵐小六)大がらなるカッポクなれど、ちと末すぼりに見えたれば、今の片岡の仕出しは上下共揃うて肥大なる男前、とんと申分のない圖取になつたぞ。

即ち彼れは肥滿して、而も能く四肢軀幹の釣合の取れたるなり。又眉目秀で、音聲朗かにして、舞臺に愛嬌ありきといふ。これ仁左衞門が淺尾家を破門せられし無名の下廻より出でゝ終に一代の泰斗たりし所以の一ならん。寛政三年の「役者節用集」に彼れを評して曰く、

> 敵役にて、愛敬なもつた御人……かつぽくといひ、口跡まで取合うたよい男振にて實惡をさせては今少し行屆かぬ場もあれど、平敵にかけては花やか〳〵。

當時彼れは尙ほ三十七歳の壯年にして、頻りに淺尾爲十郎風の半道敵を得意とし、未だ謂はゆる實惡としては輕かりしなり。而して、此の前後より、彼れは敵役以外の方面なる立役に指を染めて好評を博し、次第に故嵐小六及び故中山文七の藝風を擬して、終には、平敵と立役とのほか、實惡にも、親仁方にも、又女方にも、所作事にも成功し、行くところ殆んど可ならざるなきに至れり。即ち平敵として彼れの當り藝は「盛衰記」の梶原平次を其の最も著き例とすべし。而して、立役に於て彼れの道具屋甚三(隅田川」)は風采の優麗なるだけ故三桝大五郎よりも優れりとの評あり。又「忠臣藏」の平右衞門に好評なり

しは寧ろ當然なりとして、其の判官に屢非常なる喝采を博せしが如きは、當時の劇評家も豫想外なりと驚嘆せり。而して同じ狂言の由良之助、「菅原」の松王、「一谷」の熊谷、等は失敗の藝に歸し、又親仁方として、「千本櫻」の彌左衛門、「菅原」の白太夫、「忠臣藏」の九太夫が好評なりしに反し、「大塔宮」の齋藤太郎左衛門、「狹間合戰」の竹中官兵衛の如きは、「金鐵の武士にあらず」と當時の劇評家は言へり。想ふに、彼れの藝風は初め平敵によくして、實惡に適せざりしと同く、餘りに花やかにして餘り愛嬌に過ぎたればならん。而も、晩年には、老功の結果此の病弊を脱せるにや、松王と、熊谷も、彼れが得意の出し物として稱せられ、由良之助も亦劇評家の賞讃を受け、特に實惡として、「信仰記」の松永大膳は三が津到る處大當りを取れるのみならず、日本駄右衛門、佐々木巖流、石川五右衛門、等も



七世仁左衛門の「松永大膳」(「似顔大全」より)

同く實悪の當り藝として、屢舞臺に繰返したりき。尙ほ女方には、「出入湊」の奴の小萬を首めとして、「戀女房」の重の井、「菅原」の覺壽、「妹脊山」の定香など、彼れが得意の出し物として知られ、所作事は故嵐小六の得意とせし「六歌仙」を首めとし、「高野物狂」「奴無間」など、其の當り藝なりき。

彼れが健康にすぐれ、精力に秀でゝ、稀有の長壽を保ちし事が彼れが藝術の上に成功せる一因たりしは言ふまでもなし。其の俳優たること七十年の長き間、病の爲に舞臺を休みし事なかりきといふ。文政十二年正月、彼れが七十五歳の高齢にして「薄雪」の正宗に扮し、舞臺へ裸體にて現はれたるに、或る人が風を引かぬようにせよと忠告せしが、「中々狂言になると汗をかきます」と答へきとぞ。されば、死する三個月前まで尙ほ舞臺に出勤せしが、晩年にはいたく聽覺を損し、且つ音調低くなりて見物に聽取りにくかりしといふ。

仁左衛門が江戸へ來りしは、前後三回なれど、久しく其處に足を停めず、專ら京阪の間を往來せしほか、伊勢と尾張とへ赴きしは頗る頻繁なりき。傳へいふ、仁左衛門は千人の婦人に接せん事を聖天宮に立願し、終に其の望みを遂げたりと。而して實子に愛之助及び島丸ありしが孰も早世し、八世仁左衛門の名は彼れが養子によりて續がれたりき。

仁左衛門より若きこと十五歳にして、而も殆んど同時に京阪の劇壇に雄視せるを二世嵐吉三郎（岡島屋璃寛、明和

六一文政四）とす。彼れは初世吉三郎の實子なり。蓋し初世に三子あり、長男は嵐猪三郎といひ、初め二世中村十藏の門人にして中村大三郎といひ、文政八年、六十歳にして死せり。次男は竹本中太夫といひ、義太夫語りの名手たりしが、文政八年、五十九歳にして歿せり。三男は即ち二世吉三郎にして、幼時は、大阪の竹田芝居へ出で、後、京都に上りて習練し、寛政元年（廿一歳）、其の北側芝居に現はれしを彼れが大劇場に於ける初舞臺となす。翌二年、「比良嶽」に柴田權六に扮して當りを取り、同三年、「奧州日出濱」に小栗栖十兵衛となり、同年冬、大阪の中座へ下り、五年、「忠臣藏」の勘平に扮して好評を博し、十一月、「双葉藏」に由良之助、勘平、判官の三役、五年正月、「楊柳櫻」に正木主税と奴布平とを勤め、此の時より「上上白吉」の位に進みたり。（廿五歳）

寛政五年二月、堀江芝居、「絲櫻」に綱五郎、「吉野山」に正行。北新地芝居、「信田妻」に奴。十一月、中座、「米太郎狐」に猿廻源六實は正行。

寛政六年春、伊勢へ赴く。七月、大阪、角座、「小栗」に判官と横山四郎。十一月、同座、「千箱玉賜」に平貞盛。

寛政七年正月、「寄族揃」に岡田新兵衛、「忠臣藏」に判官。三月、「達大礎」に志賀谷五郎と粟島甲斐之助。秋、「千本櫻」に忠信（道行）。

十一月、京都、南側芝居、「南枝英」に新田義貞實は夜番夢助。「道中双六」に奴一平と今井彌助。

寛政八年正月、大阪、中座、「薄雪」に妻平と下人吉助。三月、「黄金鯱」に石谷歩左衛門。八月、「伊勢物語」に孔雀三郎。堀江芝居、「盛衰記」に源太と松右衛門。「吉原細見」に遠山甚三郎と平井權八。「誓曾我」に鬼王。十一月、角座、「廻面箱」に奴常平。

寛政九年正月、京都、北側芝居、「双蝶々」に蝶五郎（大當り）。「赤穗鬮竈」に仁木多門守。「淺草靈驗記」に若徒傳助と萩本但馬守。「布引」に義賢。「雁金」に文七。「勘助島」に力士八橋吉五郎。「河原立引」に傳兵衛。十一月、角座、「萬兩橋」に括猿と中間芦平。「彦山」に奴友平。

寛政十年正月、「猿妻橋」に千島冠者と新野帶刀。三月、「鄙島原」に百姓四郎藏、七草四郎、鹿の子勘兵衛。伊勢へ下る。夏、上京。「國姓爺」に甘輝、「五大力」に源五兵衛。七月、歸阪、角座、「一谷」に六彌太、「恨鮫鞘」に香具屋彌兵衛、「河原立引」に猿廻與次郎（好評）。「伊達姿」に松が枝敵之助と秋塚帶刀。十一月、京都、南側芝居、「河原立引」に同上。

寛政十一年正月、大阪、角座、「會稽山」に眞柴久次、上田慶次郎。三月、「嫩陣幕」に内田庫之助。四月、堀江芝居、「信仰記」に東吉、「河原立引」に與次郎。五月、角座、「幼稚兒敵討」に寸度平。京都、南側芝居、「信仰記」「河原立引」に同上。七月、「會稽山」に同上、「天網島」に治兵衛。九月、「秋葉語」（新作）に月本始之助と德島五平。十月、薩摩芝居、「千本櫻」に忠信（道行）、「河原立引」に同上。十一月、角座、「通矢車」に力士釋迦が嶽、「大内鑑」に左近太郎。

寛政十二年正月、「花山崎」に古曾部主水。「倭胄曾我」に禪司坊と五郎。「小室節」に江戸兵衛。「替唱歌」に花屋惣八。「廓日記」に幻竹右衛門と油賣與兵衛。十一月、京都、北側芝居、「薄雪」に民部と地藏の五平次。「寒紅梅」に辻法師實は梶川源太。

享和元年正月、大阪、中座、「加賀見山」に鳥井又助（好評）。京都、北側芝居、「棧物語」に淺川與一郎。「忠臣藏」に諏訪勝右衛門。「名所井筒」に花屋惣八。七月、大阪北新地芝居、「阿古屋松」に主馬判官。「◦し」に船越十右衛門。「水滸傳」に向井金左衛門と陸助。「切籠曙」に里見伊助（好評）、「菊水卷」に丸橋秋彌。十一月、京都、北側芝居、「伊賀越」に丹左衛門、内記、金助。大阪、中座、「雁金」に文七。

此の翌年春より始めて「上上吉」に進みき。(三十四歳)

享和二年正月、「廓源氏」に名古屋山三と金魚屋金八。二月、上京、南側芝居、同上。三月、「矢口渡」に南瀬六郎、「京羽二重」に石岡左膳。五月、歸阪、同上。「繪本忠臣藏」に由良之助、諏訪勝右衛門、天川屋義平。七月、上京、「太功記」に久吉と孫市、「切籠曙」に里見伊助。歸阪、「太功記」に同上、「植木屋」に杢右衛門。十一月、京都、北側芝居、「風流國姓爺」に桑原武者之助(好評)。

享和三年正月、「鬼一」に智惠內。「花街容性」に權八。「櫻花島」に千島之助と漁師灘八。「女護島」に丹左衛門。「廓 話」に油賣與兵衛。三月、「伊賀越」に政右衛門と十兵衛。「漢人韓文」にうつかり兵六。「神馬揃」に雷鶴之助。七月、歸阪、大西芝居、「繪本忠臣藏」に由良之助と勝右衛門、「露蝶」に南方與兵衛。角座、「敵討兄弟標」に雄島藤太郎と家來文治。十一月、同座、「金幟幕」にちよこ平實は行平。

文化元年正月、「箱傳授」に小西行長と筑紫權六。三月、「丹波島」に百姓野作、「五大力」に勝間源五兵衛。六月、名古屋へ下る。七月、上京、南側芝居、「兄弟塚」に雄島藤太郎と家來文治。九月、北側芝居、「秋 雨 話」に久次、筑紫權六、佛作兵衛。十月、「三代記」に盛綱、藤三郎、奴橫助、「戀深川」に出村新兵衛。十一月、同座、「扇 勝鬨」にちよこ平實は孔雀三郎と惟高親王。

文化二年三月、大阪、角座、「苗打松」にこしの勘左衛門と鹿兒島新十郎。四月、「近江源氏」に高綱、盛綱、三浦之助。七月、北新地芝居、「太功記」に久吉、「名所井筒」に花屋惣八。八月、角座、「伊賀越」に丹右衛門、政右衛門、十兵衛(好評)。九月、「廓 飾書」に權八、「大津繪」に土佐又平。十一月、京都、北側芝居、「川中島」に長尾輝虎と勘助。

文化三年正月、大阪、角座、「いろは歌」に堀部安兵衛、平右衛門、若徒佐五平、與一兵衛、石堂縫之助(孰も好評)。夏、名古屋へ下る。九月、大阪、中座、「三代記」に高綱、藤三郎、千島義弘、「戀深川」に本牧屋滿五郎と神原左五郎。十月、新地芝居、「刈萱」に玉屋與二、

「京羽二重」に石岡左膳。十一月、京都、南側芝居、「廓錦畫」に権八、「小栗」に池庄司。
文化四年正月、大阪、中座、「英草紙」に吉川左衛門と八瀬のげら松。三月、「女庭訓」(改作)に鎌足、芝六、入鹿、「櫻菅笠」に下人久助。五月、「奴請狀」に春忠と東吉、「猿曳」に與次郎。七月、「鹿講釋」に百姓十作と佐々木高綱、「戀酌」に砂川傳七。九月、角座、「自來也譚」に自來也、名越長兵衛、金比羅神靈。十一月、同座、「錦車」に椎津市之丞、早見政次郎、金持中村晋藏。
文化五年正月、「輝双紙」に名古屋山三、梅津嘉門、佐々良三八。「天下茶屋」に千島冠者と人形屋幸右衛門。「狹間合戦」に東吉と船越十右衛門。七月、堀江芝居、「川中島」に長尾輝虎と勘助、「國訛」に阿波十郎兵衛。九月、中座、「八陣」に千島冠者と森三左衛門、「南柯夢」に丹波市と赤根半七。十一月、同座、「月弓張」に爲朝(好評)。
文化六年正月、「潮来諷」に門番太郎治後に青柳彈正、手代新兵衛、たゞき甚内、「姫小松」に重盛、「色爲替」に穐屋忠兵衛。五月、堺へ赴く。七月、堀江芝居、「聞書帖」に奴矢田平實は久次と貴田孫兵衛、「千兩幟」に岩川と津田南助。大西芝居、「聞書帖」「千兩幟」に同上、「劔本地」に百草屋久兵衛と惟茂。九月、中座、「富士見西行」に松波靭負と義仲、「東詞」に獄門庄兵衛、「阿波鳴門」に十郎兵衛。
十一月、角座、「會稽山」に上田慶次郎。
文化七年正月、「廓船諷」に多度津一學と兩助、「情曳窓」に南與兵衛。三月、京都、南側芝居、「南柯夢」に半七と丹波市。五月、名古屋に赴く。七月、大阪、中座、「天神記」に武任、「濵華詠」に丁稚喜太郎。「彦山」に久吉と六助。「漢人韓文」に今木傳七。十一月、京都、南側芝居、「奴請狀」に春忠と東吉、「千兩幟」に岩川。
翌年春の評判記より「至上上吉」に上れり。(四十三歳)
文化八年正月、「驟路梅」に佐々木丹右衛門と十兵衛。「安達原」に文次と義家。三月、大阪、角座、「曲輪文章」に花熊霜貫と慶覺上人、

「京暦」に手代茂兵衛。「瀬川復讐」に平澤左内、「千兩幟」に岩川。上京、「丹波噂」に民谷主水と百姓野作。「京羽二重」に石岡左膳。

七月、大阪、角座、「千手護助釼」に三木重右衛門と鳥井源十郎、「融通大念佛」に亀井太郎。九月、「いろは藏」に由良之助・飯田多門之頭、手代新兵衛。北新地芝居、「近江源氏」に三浦之助、盛綱、高綱、「劔木地」に百草屋久作。十一月、京都、南側芝居、「近江源氏」に同上。

此の翌年より「大上上吉」に上りき。（四十四歳）

文化九年正月、大阪、北新地芝居、「いろは歌」に勝右衛門、與一兵衛、縫之助。二月、京都、南側芝居、「月見松」に孔雀三郎と行平、「大經師」に庄兵衛。大阪、角座、「月見松」に左甚五郎（京人形）。「信仰記」に藤吉、「茜染」に由兵衛。「川中島」に輝虎と勘助。九月、「義懸柵」に永井源三郎と百姓藤作。十一月、京都、南側芝居、同上。

文化十年正月、大阪、角座、「達大礎」に谷五郎、惣六、松江藏人。四月、「青柳硯」に道風と良實、「ゝし」に堀側藤治と船越十右衛門。「嫁入小鍛冶」に與九郎狐と鍛冶宗近。和歌山及び備中に赴く。十一月、上京、南側芝居、「青柳硯」に同上、「京人形」に左甚五郎。

文化十一年正月、大阪、角座、「筑紫琴」（新作）に阿曾次郎と沖津の仁三。堺へ赴く。七月、角座、「北其獄」に久吉、春忠、權六、「お六櫛」に貝屋善吉、「猿廻」に與次郎。「菊水卷」に勇助と正行。「南柯夢」に丹波市と半七。十一月、京都、北側芝居、「睦路梅」に丹右衛門、十兵衛、松野金助。

文化十二年正月、大阪、中座、「秋葉權現」に月本圓秋と玉島幸兵衛。名古屋へ下る。九月、大阪、中座、「浦朝霧」（新作）に網干右兵衛輔と小割傳内（好評）。十一月、京都、南側芝居、同上。

文化十三年正月、大阪、中座、「菌の雪」に妻平、秋月大膳、葛城市之丞、「千本櫻」に梶原。病氣にて休む。八月、「学園氏」に[illegible]

（好評）と敎經、「油賣」に與兵衛と南方十次兵衛。「小倉色紙」に船頭小平次、笹原隼人、三吉狐。病氣にて中途より休む。十一月、同座、「御所櫻」に辨慶。

文化十四年正月、「兒淵」に捨若丸、高瀬屋重右衛門。三月、上京、「孝源氏」に熊坂長範と敎經、「蝶紋日」に駕の甚兵衛と南與兵衛。七月、歸阪、中座、「藤戸譽」に盛綱、「切籠曙」に里見伊助。十一月、同座、「三國夫婦塚」に玉矢眞平。

文政元年正月、「加賀見山」に安田大將、鳥井又助、松田山城守。五月、堀江芝居、「源平躑躅」に熊谷、鷲尾三郎、「五人切」に笹野三五兵衛。八月、中座、「八島日記」に義時と景清、「嫁入雛形」に網打藤兵衛、「京羽二重」に石岡左膳。九月、「道中双六」に政右衛門と十兵衛。

文政二年正月、「花都遊」に久次、雄島藤太郎、勇記の正。「黄金鯱」に龍興、「二代鑑」に高倉隼人。「闌奢待」に助市。五月、上京、北側芝居、「源平躑躅」に熊谷と鷲尾三郎、切に高瀬屋重兵衛。七月、休業。九月、南側芝居、「艶色紙」（新作）に日本駄右衛門と川越長吉。

文政三年正月、「小倉色紙」に笹原隼人と船頭小平治。伊勢へ下る。九月、大阪、堀江芝居、「在原系圖」に斑鳩藤太と飛脚仲二、「月桂雄」に南方與兵衛。十一月、休業。

文政四年三月、大阪、中座、「廓島臺」に柳が瀬左内、鹽の長藏。病氣にて休む。八月、北新地芝居、「鵺物語」に賴政と玉水の岡六、「阿波鳴門」に十郎兵衛。

此の年三月、吉三郎の名を甥大三郎に讓り、自ら橘三郎と改稱し、且つ同時に「極上上吉」の位に進められしが、八月興行の半ばより病を發して舞臺を退き、終に九月廿六日に歿しき。歲五十三。

彼れの長所は第一に其の風采と音調とに在りき。「俳優世々の接木」に曰く、

近來か程まで揃たる役を見ず。第一美男にて、其上美形にて、上品で、まづ近世の稀人なり。



二世吉三郎の「源頼光」（「似顔大全」より）

彼れが「口跡は父よりもハッキリ」し、初世吉三郎が力士と俠客とを得意とせると共に、社杯事には不適當なりしに反し、彼れは斯かる品位ある役にも成功し、謂はゆる「親まさり」なりし事は各評判記に見えたれど、小男なりしが缺點なりきといふ。而して彼れが壯時の評に「さら〳〵と嫌味なし」といひ、「をかしみなし」といひ、又「色氣なし」「色事仕あかず」といひ「花三分實七分」といへる、蓋し其の長所と缺點は此のうちに含まれしなり。されば、彼れは戀愛に淡泊若しくは初心なる立役に當りを取れり。例へば彼れの爲めに書下されし「秋葉話」の月本始之助の如き、同じ「筑紫琴」

の宮城阿曾次郎の如き、又倂て尾上新七が當り藝なりし「黄金鯱」の齋藤龍興の如き、「油賣」の與兵衛の如き、「伊賀越」の十兵衛の如き、是れなり。尚ほ父と同く、力士に扮するも彼れの得意とする所にして、「双蝶々」の長五郎、「千兩幟」の岩川、などは其の最も著き例なり。其の他、筑紫權六、熊坂長範、八郎爲朝、長尾輝虎、（配膳）、熊谷直實（扇屋）、志賀谷五郎、白井權八、里見伊助、鳥居又助、猿廻し與次郎の如きも彼れが當り藝の主なるものなりき。而して、其の晩年には、色氣と愛嬌と花とに乏き弊を脱し、謂はゆる平坦より絢爛の域に入りしなり。然れども彼れは往々他の名優がなせし如く、立役にして敵役もしくは女方を兼ぬることなく、終生殆ど立役を專門となしき。故に、彼れの技藝は其の面積に於て狭かりし代りに、其の深さに於て深かりき。文政四年の「役者百物語」に、彼れと其の晩年の競爭者たりし三世中村歌右衛門とを比較して曰く、

岡島屋（吉三郎）を大盞の化物に見立たは、小廻りはせれど食物の司をたく家内第一の御道具といふ事であらう。又いつでも狂言は大事にかけて致されるゆゑ、ついに是が一つわるいといふ事はない。……加賀屋（歌右衛門）のように何んでもむさんこうにせぬもの、わるからう筈がない。其かわり手ひどうよい事もない。

是れ彼れが本領を說破せる適評ならん。吉三郎が狂言は謂はゆる、「大事にかけて一忽がせにせざりし事は左の逸話によりても知り得べし。

衣裳好み上手なる上、着曠して、何の時の衣裳、かの時の衣裳と、見物もよく見覺えし程なり。青柳硯の道風の役勤めし時、洛中山狼狽窟の主人(俳師大明)より官位に合ひし本裝束を取寄、舞臺にて勝手よき樣それを手本に仕立させ用ひたり。釋迦如來轉法輪處の文字を書くにも、四天王寺額の大掛物を床にかけ三五年前より隙ある時は書習ひ居たり。狂言も故名人の仕來りしをよく見覺え居て工夫に渡り勤めしゆゑ、小野の道風といふは此樣なものにもあらんかと思ふばかりなり。(「傳奇作書」)

又二世中村歌六(現存)が談話に、同く吉三郎と歌右衛門とを比較して、

吉三郎は宮城阿蘇次郎、宮本武藏など、女の方より慕ひて男の方にて嫌ふ役、歌右衛門は宿無團七など、男の方から慕つて女に嫌はれ、終に殺すといふ役なり。吉三郎は美男で調子がよく、歌右衛門は痘痕ある醜男なればなり。

といひ、「錦繪姿」(文化九年)に、

岡島屋を贔屓するは、多く女が勝ちまする。歌右衛門は不男ゆゑ、娘や内儀は左程には思ひませねども、狂言の仕打に功者面白味を見ようなら、中々嵐吉と一口には云はれませぬ。

といひ、此等も亦吉三郎が特色を知るべし。

四世團藏が特に彼れをして「伊賀越」の大内記を勤めしめたるも、(第一編第三章を見よ)一つは斯くの如き彼れが美點を發見せしに因れるならんか。

更に彼れが美點は、其の藝風の決して先輩の或る者を模倣せずして、大かた自家の獨創に出でたる事なりき。寛政七年の「役者時習講」に曰く、

　誰の眞似をするといふ事もなく、一筋を立てゝの仕様にきつと末頼もしい……。

云々と。當時、吉三郎は僅に廿七歳にして既に此の月旦あり。而して今日に於て彼れが終生の當り藝を數ふるも、義太夫物もしくは其の他の古狂言よりも、寧ろ新作の脚本に多かりしは、此の豫評の果して中れる證とすべきなり。即ち「秋葉話」の月本始之助、「箱傳授」の筑紫權六、「南柯夢」の半七、「弓張月」の爲朝、「自來也語」の自來也、「切籠曙」の里見伊助、「浦朝霧」の小割傳内、「筑紫琴」の阿曾次郎、「夫婦塚」の出村新平、「戀賊」の日本駄右衛門、等は其の主なる例なるが、特に晩年には狂言作者奈河晴助を己れに專屬せしめしかば、以上の脚本の大かたは晴助の手に成れりき。傳へいふ、彼れは五日ほど興行しても不入なれば給金を其のまゝ戻し、座中貧窮なる者には次の興行まで取替へて貸し置き、皆一統より給金を戻させて一月二月休むを常とし、且つ其の時は不祥の氣を拂ふといひて湯治に行くか大和廻りに出かけたりと。又彼れは嵐小六と同く大酒の癖あり、晩年健康を損して舞臺を休みがちなりしも大かた其の爲なりきと。俗に彼れを「大璃寬」といへり。實子芳三郎ありしが、多病にして中ごろ俳優を廢めて鬢付油を鬻ぎ、三世吉三郎の名は二世の姪大三郎によりて襲がれたりしこと前にいへる如し。又門下には嵐冠十郎最も著名にして、同時代の名優なりき。

第十章　三世中村歌右衛門と五世市川團藏

三世中村歌右衛門――舞臺上の閲歷――彼れの藝風――獨創の意匠――彼れの競爭者――蜀山人の惡感――作者としての並澤龍玉――彼れが性質――彼れに關する著述。

五世市川團藏――俳優としての經歷――其の藝風――三世歌右衛門との比較――彼れが得意。

二世吉三郎よりは後輩にして而も其の晩年の競爭者たりしを**三世中村歌右衛門**（加賀屋梅玉、安永七―天保九）となす。

彼は初世歌右衛門の實子にして、幼名を福之助といへり。父は彼の俳優たるを喜ばず、醫業を修めしめんと欲せしに拘はらず、幼時より劇道を好み、終に自から進んで子供芝居に投じて頗る名聲ありき。

［註］「梅玉遺響」に彼れが自筆として掲げたる書簡には「安永三年三月三日の誕生」とあれど、此の眞僞疑はしければ、茲には、天保九年、六十一歲にして歿せりといふ諸書に據り、年數を算して安永七年生と斷定せり。尙ほ右の「梅玉遺響」の書簡は彼れが幼時を叙すること詳かなれば參考として下に抄錄せん。

『……親ども申候には、われは若氣の至りにて放蕩に身をもち、此やうな家業になりはてたれども、その方は姉の緣付居候醫師中川正圓のかたへ遣し、少々物も讀ませ末々は醫者にするつもりと申され候。私をさな心にやはり役者になりたく、いろ〳〵と申、其頃の立て者、三五郎、雛助、三保木、（儀左衛門）などを母よりたのみ申、此人々まゐり、先々われら（市おかれ候へと申され候得とも、親どもきゝ入不申、私七歳の思案に、此うへは、神佛を賴んでなりとも役者になりたい、と其頃、千日前、竹林寺に今も有之候不動尊大きに御利益あるよし承り候ゆへ、これへ水をあび、雪の降るのもいとはず、はだかで詣り居申內に、着物を取られ候事も[illegible]。

母申候には、方々の子どもはみな／＼子供芝居へ樂屋入をするをおもしろい事の樣におもふ。子ども心は尤じやが、てゝ御がものがたいゆゑ、といろ／＼なだめられ、其內、親どもたのみ、寺正法寺へ參るとて私をつれられ、そのかへるさ、いつも日本ばしを北へわたるところを、どふいふ事にか、其日は若太夫芝居の前を通られ、看板をみて、奥次郎（後に二世淺尾爲十郎）が座がしらじやと申。何ごゝろなく立つて居られ候とき、勘定場に私どもの伯父源藏（歌右衛門が母お八尾の兄にして二世小川吉太郎の父）居合せ、むりにすゝめて一幕見物いたさせし、其狂言は國姓爺三だん目にて、賴太夫かたり、首ふりにて、かんき奥次郎、錦祥女花桐（德三郎）、和藤內左藏（淺尾）、みな／＼私同年の子供に御座候。これを見て、歸りがけに源藏へ相談いたし、英雀（尾上新七）、三保木、雛助、雷子、なども申合、次ぎのかはりより私を出すつもりに親ども申。さればまつたく竹林寺不動さまの御かげ、と子供心にうれしう存じ居申候。ほどなく替り狂言になり、廿四孝三段目、磯太夫にて、ぢひ藏、音松（藤川）、おたね、一德（中村）、かげ勝、奥次郎、母、花さり、横藏、私、大切に伊勢ものがたり、梶太夫、嵐の春太夫、江戸へ行し雛太夫、三人かけ合にて、小よしに花桐、豆四郎に奥次郎、しのぶ一德、によう八音松、あり常私、是にて大入大ひやうばんに御座候。それより三ケ年ほどいろ／＼の狂言をいたし、京、大津、堺、西の宮、などかけまはり、私十二歳に相なり候冬、親ども死去いたし、あくれば十三歳、初て荒木與次兵衛座芝居にて、せりふないふ狂言をいたし申候。狂言は鎌くら山にて、勇助に政吉（嵐）、あら次郎に友藏、新左衛門に八藏（藤川）、勇助女房に吉太郎（嵐）、やす村と源左衛門二役に私、これも打つゞき繁昌いたし、それより音松と私たてわかれ、座摩いなりにて評判よろしく、道とん堀、濱しばゐの邪魔になるよしにてやかましく申候處、小六、三五郎、兩人より、子どもの藝道稽古の爲なれば十五歳迄と申込み、其時はいなりにてみな／＼同座にて、私は日本馱右衛門、音松は幸兵衛、市藏（後に市川鰕十郎）は圓秋をいたし、一德おさい、半季も致し、中途にて衣裳とりかへる程の大入り、日々に□□□□□りあがり申候。その後、隱居三五郎、古芙雀、片岡（六世仁左衛門）古いろは（芳

澤)、文五郎(中山)、澤村の太夫(國太郎)、同座にて宮島へ下り申候。是十五の時にて、忠臣ぐらに若狹之助、伊吾、團五郎をいたし、近江源氏に芙雀の取立にて九つ目の谷村小藤次をいたし申候。其とき、場の御見物が、芙雀あとへよれ、かげ屋が見えぬ、と申たと樂屋へは入り、大わらひに御座候。それよりいなり芝居へかへり、五大力の狂言、私源五兵衛、一とくさく野にて、又々大入、まことに是が子ども芝居の世ざかり、とみな〳〵申候。十六歳の六月より、角のしばゐへまねき看板を出し上り申候……」

又三世中村仲藏の「歌右衛門傳」に據れば、父歌右衛門が彼れの俳優たるを好まざりしは其の容貌の醜かりし爲めなりしも、父には秘密に子供芝居へ出で、座頭の地位を占めしを、何時しか此の事の露はれて自宅に幽閉せられ、而も劇場より懇望頻りなるより、父歌右衛門も始めて其の登場を許すに至れりといふ。

斯くて、父歌右衛門の死して四年後なる寛政六年(十七歳)冬、中村歌右衛門の名を襲ぎたり。蓋し是れより先き、二世歌右衛門の名は父の弟子中村東藏により襲がれしが、寛政二年、故ありて彼れが再び舊名に復せしを以てなり。而して同時に三世歌右衛門は在來の小芝居を退きて、始めて大阪の角座へ「敵役」として現はれたりき。

此れより、大阪を根據として京都にも往來し、專ら三枚目の役にて、「桂川」の長吉、「綴錦」の逢坂甚六、「五大力」の彌助、等に當りを取りしが、寛政十一年三月、大阪の中座にて、江戸より來れる澤村宗十郎が「源平柱礎暦」の清盛に扮せる時、彼れは藤九郎盛長となり、切狂言の「隅田春」に金屋金十郎、次いで八月、「嫁威谷」に蒲生戸根五郎等に好評を得、翌十二年六月、北新地芝居、「盛衰記」に平次と松右衛門、「吉

原細見」に澤屋金兵衛、大切、「釣狐」に太鼓持兵助にて景事を演じ、十月、堀江芝居、「戀女房」に鷺坂左内と奴逸平、「隅田川」に法界坊、十一月、角座、「浪花賑」に芳澤園次郎と雌鳥雄鳥の三番叟の所作、ついで京都に同じ狂言を演じ、十二月、歸阪して、北新地芝居、「太功記」に春永、「廿四孝」に横藏、孰れも喝采を博し、翌享和元年（廿四歳）の評判記に始めて「上上吉」の位に昇され、且つ「實惡」の部より「立役」に移され、「立役も敵役も女形も、所作事まで、自由になさるゝ」と激賞せられたり。以後の舞臺上の閲歴は、

享和元年正月、「忍逢淵」に石川五右衛門（爲十郎の代り）。北新地芝居、「布引」に實盛、「鳴神」に船頭和田八。五月、京都、南側芝居、「忍逢淵」に同上。夏、堀江芝居、「忠臣藏」に師直、由良之助、十太郎、「五大力」に源五兵衛。九月、京都、北側芝居、「躄仇討」（新作）に筆助。十一月、同座、「新年顏見世」に龜井六郎。

享和二年正月、「楊柳櫻」に荒濱太兵衛、正木主税、奴布平、「廿四孝」に横藏、「拳褌」に下人久六。備中及び名古屋に下る。十一月、大阪、中座、「浪花着綿」に太鼓持歌七と北條義時。

享和三年正月、京都、藥師芝居、「桃山錦」に且元、久次、松山兒之助、「猿廻」に與次郎。三月、南側芝居、「日吉丸」に猿之助、「持丸長者」に淀屋新兵衛。四月、大阪、北新地芝居、「妹脊山」に芝六、「猿廻」に同上。五月、「戀女房」に逸平、「信仰記」に春永と東吉、「古手帷子」に奴歳平、「夏祭」に德兵衛。紀州に下る。七月、大阪、大西芝居、「忠臣藏」に若狹之助、小寺十內、與茂七、「廓名月」に山崎與五郎。九月、角座、「兄弟標」に村川兵藏と山田軍助の早變り。十一月、同座、「金幔幕」に般若五郎。

文化元年正月、「宮傳授」に久次と奴林平。京都、北側芝居、「飛馬始」に立浪逢五郎、岩倉主膳、與茂七、「釣狐」に傾城亂菊（所作事）。

三月、「忠臣藏」に石堂と定九郎、「五山桐」に高景、「時雨傘」に團七。九月、「三代記」に奴圓助と三浦之助、「標深川」に下屋鶴兵衛、「兄弟標」に村川兵藏と山田軍助、「秋雨話」に奴矢田平と太鼓持喜作。十一月、同座、「扇勝圍」に般若五郎、破軍太郎、八瀬の萬太、「忠臣講釋」に勘平。十二月、大阪、北新地芝居、「三代記」に三浦之助、「右近橘」に秦藏人。

文化二年正月、京都、北側芝居、「都吉野」に足利義稙と鰐淵藤太。三月、「妹脊山」に鱶七と芝六、「筝碊」に傳七。夏、名古屋へ下る。九月、京都、北側芝居、「白石噺」に谷五郎と秋夜、「三度笠」に忠兵衛。十一月、大阪、中座、「白石噺」に同上、「夫婦晶屓鳰」におろしや國船頭。十二月、「千本櫻」に忠信、源九郎狐、義經(爲十郎の代り)、權太(二世爲十郎の代り)。

文化三年正月、「薺佳節」に花園道常と奴浪平の早變り。切に「鶺鴒」の景事。二月、堀江芝居、「三代記」に藤三郎と播針太郎、「韃靼脚」に忠兵衛と孫右衛門。三月、角座、「國姓爺」に和藤内、「伊勢音頭」に喜助、「山姥」に怪童丸。京都、南側芝居、同上。夏、傾城艶に吃又平、「祇園曙」に鳥羽屋半七。伊勢、尾張、美濃に下る。十二月、大阪、角座、「大阪奴」に飛團子賣と萬歳。

文化四年正月、大阪、堀江芝居、「布引」に實盛、「世話料理」に八百屋半兵衛、「山姥」に八重桐。二月、京都、北側芝居、「いろは歌」に田代安兵衛、平右衛門、伴内。三月、「双蝶々」に長五郎。四月、「盛衰記」に平次と松右衛門、「鐘道噺」に手代半兵衛、「春臣傳」に植木屋李右衛門、「山姥」に八重桐、「雁金小紋」に文七。七月、「千本櫻」に權太、「伊勢音頭」に貢。八月、「物草太郎」に名古屋山三。九月、「秋七種」に花園道常と奴浪平の早變り、「出入湊」に獄門庄兵衛と奴の小萬。十月、「大塔宮」に村上彦四郎、「春狩卷」に仁田四郎。十一月、中座、「薄雪」に奴妻平と民部、「帶白旗」にちやん吉と仕丁定吉。

文化五年正月、「品評林」に山三と又平、「角田川」に法界坊(江戸下りの名殘)。三月、江戸、中村座、「花見扇」に大友常陸介、「廓操」に玉屋新兵衛。四月、「猿廻」に與次郎。五月、「千本櫻」に知盛、權太、忠信。六月、「布引」に實盛、「妹背門松」に山家屋清兵衛、「在

原系圖」に蘭平。七月、「躄仇討」に山左衞門と勝五郎。八月、「磯馴松」に此兵衞。九月、「菅原」に覺壽と松王丸、「戀女房」に逸平。
十一月、同座、「恩賀仙」に清盛、惡源太、山木判官。

是れ、彼れが最初の江戸下りなりき。「待焦れたる江戸名古屋の贔屓及び大阪の連中等より數千本の幟風に棚引き」、其の盛況言はん方なく、役々いづれも好評なりしが、五月狂言の知盛に、「碇の角見物に當りたる」とて喧嘩になり、三階上り口にて見物の者（長次といふ、は組の鳶）、歌右衞門を打擲し、面部に疵つきて血流れたり」。彼は其の疵口に銀箔を押して、强ひて舞臺に出勤し、且つ贔屓先へ「紫をもらふや江戸の杜若」といふ句を摺物にして配りたれば、愈々人氣立ちて、恰も「忠臣藏」を開演せし市村座は是が爲めに壓倒せられ、七日目に閉場したり。然るに、「此の喧嘩したるうちに市村座へ出勤せる坂東三津五郎の食客のありしかば、其の仕返しにとて、歌右衞門贔屓の者十四五人、三津五郎の許へ押行き、家財を打壞せしより、更に三津五郎の方よりも歌右衞門の許へ亂暴に及び」、歌右衞門側にて入牢せる者二人ありたりといふ。斯くて、市村座は六月より尾上松助が天竺德兵衞、其の子榮三郎が小幡小平次を演じて喝采を博し、同時に中村座に於ける歌右衞門は蘭平に扮して非常の不入を取り、更に「躄仇討」を出せしが「歌右衞門、夏のこはだに中てられて早々腹はらん平。」「へた右衞門こはだの鮨に中てられて腰が拔けたか躄狂言」といふ落首を掲げられたりといふ。

文化六年正月、「俤曾我」に工藤と義時、「八百屋お七」に吉三郎と前髮左兵衛。四月、「秋葉權現」に月本祐明と日本駄右衛門。六月、「忠臣藏」に、師直、由良之助、定九郎、おかる母、彌五郎、戸無瀨、義平の七役。七月、「戀女房」に慶政と左内、「姫小松」に俊寛、「嫁入獻立」に獄門庄兵衛と八木孫三郎。八月、「近江源氏」に盛綱と谷村小藤次、「角田川」に法界坊。九月、「伊勢物語」に名虎と小よし、「廓文章」に伊左衛門。十一月、同座、「雪驪」に伊貝の十郎、安倍貞任、惡五郎、善知鳥安方、鴛鴦の精(所作事)。

此の翌年より「上上吉」に進みたり。(三十三歳)

文化七年正月、「御攝曾我」に鬼王、「艶容姿」に鹿の子勘兵衛と丁の與次郎。三月、「五山桐」に五右衛門、「隅田春」に長五郎、「相合傘」に巖流と百姓斧右衛門。七月、「孃菅笠」に奴逸平、切におかめの所作。九月、「曲輪風俗」に仁木彈正と高松彦次郎、「勝戰状」に五斗十一月、同座、「花黑主」に栗の本の文治、大伴黑主、關兵衛。

文化八年正月、「鶴曾我」に景清(三曲)、「白木屋」に秋月一角。三月、「砂石川」に五右衛門、「お染久松」の久作、「七變化」の所作(傾城、座頭、業平、角兵衛、橋辨慶、海士、鐘馗)。五月、「佐野八橋」に三浦荒次郎、佐野兵衛、傳逸坊。七月、「忠臣藏」に本藏、平右衛門、定九郎、「菅原」に源藏、宿禰太郎、梅王。九月、「一谷」に熊谷と忠度。十一月、同座、「岩井内裏」に將門、御厨六郎、一寸法師ちよこ平、下總屋馬右衛門。

此の年も、市村座には坂東三津五郎が座頭となりて歌右衛門と相競爭し、特に三月は「七變化」を演じて、其の「源太」の曲に「今年や南瓜の當り年」と暗に歌右衛門を刺りたる文句を加へ、人氣も中村座を凌ぎて大入を取りしかば、歌右衛門は金主大久保今助に強請して、急拵へに同じく「七變化」を出し、市村座

は此れが爲めに壓倒せられ、中途より興行を中止せりといふ。斯くて歌右衛門は其の翌年の評判記にて「白大上上吉」の位に上されき。

文化九年正月、「富士根曾我」に朝比奈と小藤太、「韋頭」に茜屋半七と父次郎太夫。三月、「清水清玄」に清玄、「道成寺」に白拍子。四月、「龜山染」に大岸藏人。五月、「繼白波」に此下東吉と鎌倉屋五郎八。七月、「忠臣講釋」に師直、由良之助、お組、帯間次郎右衛門、百姓聞作（鎌腹）、重太郎。九月、「舌出三番叟」の所作、「盛衰記」に松右衛門。「嫗山姥」に八重桐後に山姥と切株斧右衛門。十一月、大阪、中座、「錦鶴翼袖」に圓上りの鶴實は平清盛、「忠臣藏」に師直、由良之助、戸無瀬、勘平、定九郎、義平、彌作。

彼れは五年ぶりに歸阪せるなりき。

文化十年五月、「反魂香」に吃又平。二月、「繁夜話」に松浪藏人と柿木金助、「七變化」の所作。三月、「一谷」に熊谷、「伊勢音頭」に貢、「七變化」の所作。五月、京都、北側芝居、「一谷」に同上、「恨鮫鞘」に八郎兵衛、「七變化」。六月、歸阪、中座、「大塔宮」に齋藤太郎左衛門と武勇萬藏、「恨鮫鞘」に同上。七月、堺へ赴く。八月、歸阪、中座、「布引」に實盛、「伊勢音頭」に貢。八月、「盛衰記」に平治と松右衛門、「衛の紅摺」に勝間源五兵衛、「八百屋」に半兵衛。九月、角座、「菅原」に源藏、宿禰太郎、松王、覺壽（大吉の代り）、「兜軍記」に岩永。十月、「腰越狀」に五斗兵衛。十一月、北側芝居、「忠臣藏」に師直、勘平、戸無瀬、「反魂香」に又平。十一月、大阪、中座、「近江源氏」に三浦之助、盛綱、谷村小藤次。

文化十一年五月、「釣鐘櫻」に清水清玄、立浪良助、「道成寺」の所作。三月、「英勇記」に宮本無三四。四月、「宿無團七」に團七（東下の暇乞狂言）。六月、江戸、中村座、「双蝶々」に長吉、「戻駕」に浪花次郎吉。七月、「伊勢音頭」に貢伯母。八月、「伊賀越」に丹右衛門、武助、内記。九月、「八陣」に後藤兵衛、「色世界」に稲の屋半十郎、「兜軍記」に岩永。十一月、同座、「二人猩」に高安左衛門と伴良雄、「戀

女房」に左內、「廓文章」に夕霧。

此れ彼れが再度の江戸下りなりしが、翌年冬又も歸阪せりき。

文化十二年正月、「伊達彩」に賴兼、外記、五郎、政岡。三月、「艷湊」に獄門庄兵衛、「盛衰記」に平次、「九變化」の所作(文使娘、老女、酒屋丁稚、雨乞小町、夕立雷、鑓持奴、辻君、江口の君、石橋)。五月、「信仰記」に東吉、「菖蒲帷子」に丁稚長吉。七月、「女吉原」に助松主計、「大塔宮」に太郎左衛門、「靫猿」に猿曳、「反魂香」に吃又平。八月、「千本櫻」に忠信、源九郎狐、覺範。九月、「縮緬錦」に倉科次郎右衛門と伊兵衛、「妹背山」に入鹿とお三輪。十月、「三略卷」に鬼若と鬼一。十一月、大阪、角座、「忠臣講釋」に由良之助、癇作、十太郎、「妹背山」に同上。

文化十三年正月、「伊賀越」に丹右衛門、內記、武助、「錦帶橋」に文字助、「戀飛脚」に忠兵衛。三月、「佐野船橋」に源左衛門、勇助、「九變化」。五月、「信仰記」に東吉と蘭丸、「廓文章」に伊左衛門。七月、堺に赴き、「拳褌」に傳七、「宿無團七」に團七。八月、大阪、堀江芝居、同上。九月、角座、「紅紫」に權八と山田右內、「襤褸錦」に次郎右衛門と奴佐平。十月、「先代萩」に賴兼、外記、才原勘解由、「鳴神」に芝翫坊、「釣狐」に怪助。十一月、京都、北側芝居、「時賴記」に源左衛門、「錦帶橋」に文字助、「戻駕」に浪花次郎作、「八百屋」に半兵衛。

文化十四年正月、「稚兒淵」に捨若丸後に五右衛門、石田局、手代源五郎、「戻駕」に浪花次郎作。三月、「御堂明敵討」に緒島九八、「十二か月」の所作、「猿廻」に與次郎。五月、「廿四孝」に高坂彈正と横藏、「重井筒」に德兵衛。「在原系圖」に與茂作。

此の春、彼れは高價なる引幕及び水引を劇場に掲げしとて其の筋より譴責せられ、次いで江戸の中村座

に對し、三年勤續の契約を僅に一年きりにして歸阪せし廉により、同座より出訴せられて、江戸町奉行の召喚を受け、江戸に下りて終に翌年より同座に現はれたり。

文政元年二月、江戸、中村座、「三代記」に高綱。三月、「東山殿」に小栗宗丹、名古屋山三、物草屋太郎兵衛。五月、「妹背山」に定香と鱶七、「五人男」に布袋市右衛門。七月、「彦山」(改作)に絹川彌三左衛門、一味齋、六助。八月、休む。九月、「忠臣講釋」に喜内、「女鉢木」に白妙。十一月、同座、「伊勢平氏」に上總之助、傘張法橋、淸盛、「植木屋」に出村新兵衛。

文政二年正月、「曾我模樣」に五郎と片岡幸右衛門。三月、「女雛形」に下河邊大炊之助と召仕お初、「助六」に意休。四月、「菅原」に時平、白太夫、源藏、「夏祭」に團七。六月、「腰越狀」に五斗、「廿四孝」に横藏、「千兩幟」に鐵ヶ嶽と岩川女房、「雨鉢木」に源左衛門。七月、「薄雪」に伊賀守、「色出來穐」に若徒定七と門付吃の傳三。八月、「いろは假名」に師直、平右衛門、義平、「小栗」に横山太郎と星川雲八、「阿漕浦」に次郎藏、「九變化」の所作。十一月、大阪、角座、「双蝶々」に長吉、「小栗」に同上、「重井筒」に德兵衛。

翌年より「極上上吉」に進みたり。(四十二歳)

文政三年正月、「花大樹」に東吉と井桁庄三郎、「女鉢木」に白妙。三月、「千本櫻」に權太、忠信、源九郎狐、「廓色揚」に半兵衛、「墨田川」に法界坊。五月、京都、北側芝居、「巖流島」に無三四、「宿無團七」に團七。八月、「大塔宮」に太郎左衛門、「恨鮫鞘」に八郎兵衛、「在原系圖」に團平。九月、大阪、角座、「八陣」に加藤と此村主水之助、「持丸長者」に淀屋新兵衛、「在原系圖」に同上、「反魂香」に又平。十一月、京都、北側芝居、「八陣」に加藤、「重井筒」に德兵衛。十二月、大阪、角座、「惠實太功記」に光秀。

文政四年正月、「双鏡山」に望月源藏、又助、お初。三月、「妹背山」に定香と鱶七、「紅梅靮」に梶原(石切)、「廓文章」に夕霧と伊左衛門

(三津五郎と一日替り)。五月、「忠臣講釋」に師直、與茂七、宅兵衛。七月、中座、「先代萩」に男之助と勝元、「宰領」に西尾半七と次郎太夫、「檀風」(人形遣吉田文三郎追善)に山伏本間入道。九月、角座、「菊水卷」に秋夜、「嫗山姥」に八重桐後に山姥と怪童丸、「英勇記」に無三四。十一月、中座、「三十石」に源八、權九郎、「鬼一」に鬼若と鬼一。

是れより先き、彼れの先輩にして且つ競爭者たりし二世嵐吉三郎とは、文化元年以來舞臺を共にせざりしを、此の九月、久しぶりに一座すべしとて、六月の末、贔屓連は大川の涼船に兩優を招きて顏繋ぎの酒宴をなさしめ、又この爲めに「鶴橘」といふ俗曲さへ作られしが、吉三郎が急に病死せしかば好劇家の失望大方ならず、芝居の景氣も頓に衰へて、「太平記」は七日、次の「英勇記」も六日にして閉場せりといふ。

文政五年正月、「染分綱」に八藏、船頭梶六、莨切三吉。三月、「五山桐」に五右衛門、「五雁金」に布袋市右衛門と角左衛門。五月、「大石摺」に神田與五郎、田代安兵衛、酒屋息子伊吉、淺香佐五右衛門、「淀屋橋」にうはの吉郎兵衛。六月、兵庫へ下る。八月、角座、「戀女房」に左内、定之進、慶政、重の井、「切籠曙」に里見伊助。九月、中座、「釜淵」に五右衛門、「山伏攝待」に佐藤後室。十一月、京都、北側芝居、「紅梅鞆」に梶原、「山伏攝待」「釜淵」に同上。

文政六年正月、大阪、角座、「廓大門」に美濃庄九郎、今川男之助、椀久(「三面」の所作)、「女舞鶴」に板額。三月、「菅原」に菅丞相、清貫、宿禰太郎、時平、白太夫、千代、玄蕃、「出入湊」に黑船。五月、「夏祭」に團七、「姬鏡」に池庄司。七月、「棚山賊」に三島幻仙、大橋曾平、「古手屋」に八郎兵衛。九月、「崇禪寺馬場」に譽田大內記、遠城治左衛門、兒富丸、「檀風」に山伏。十一月、京都、北側芝居、「稚兒淵」に捨若、石田局、手代源五郎。

文政七年正月、大阪、角座、「花大矢數」に北畠主計頭、松並彈次兵衛、越の勘左衛門、「琴責」に岩永。三月、「忠臣藏」に由良之助、師直、勘平、義平、數右衛門、下女りん、生ぐさ和尚、「盛衰記」に源太。五月、堀江芝居、「大内鑑」に保名、やかん平。七月、京都、北側芝居、「夏祭」に團七、「槐久」の三面。八月、「崇禪寺馬場」に大内記、利左衛門、兒富丸。閏八月、大阪、角座、「伊賀越」に政右衛門と鳴見。九月、「船橋」に佐野源左衛門、「國姓爺」に甘輝、「女護島」に瀨尾太郎、「三代記」に安達藤三。十一月、同座、「東山殿」に帮間庫七實は惡源太。

文政八年正月、「百萬國」に高橋作十郎と兄作右衛門、「九變化」の所作。三月、一世一代の狂言、「腰越狀」に五斗、「彦山」に京極内匠とお園、「一谷」に熊谷。四月、「姫小松」に俊寛。五月、京都、北側芝居、「百萬國」に兄作右衛門、「黑船」に忠左衛門。九月、堺へ下る。

十一月、京都、北側芝居、「伊賀越」に政右衛門と鳴見。

此の頃、彼れは多病にして屢舞臺を休みしかば、大阪に於て一世一代の披露をなせしが、堺と京都とに現はれ、翌年は又も大阪の舞臺に出勤したりき。尙ほ其の春の評判記より「無類」に上せられき。（四十九歲）

文政九年正月、同座、「花木影」に此下藤吉、「大内鑑」に保名とよかん平、「布引」に實盛、「姫小松」に俊寛、「彦山」にお園、「河堀口」に長藏、「檀風」に山伏。堺へ下る。七月、大阪、中座、「狹間合戰」に官兵衛と五右衛門、「極彩色」に兵助、「躄仇討」に筆助と九十九新左衛門、「五大力」に源五兵衛。京都、北側芝居、「五山桐」に五右衛門、「五人男」に布袋市右衛門と角左衛門。十二月、大阪、角座、「布引」に瀨尾、「千本櫻」に義經。

文政十年正月、「遊山櫻」に大内秀丸と加藤正清。二月、堺へ下る。四月、大阪、堀江芝居、「假名手本忠臣講釋」に師直、由良之助、喜内、おりえ、「在原系圖」に蘭平、「隅田川」に法界坊。六月、北新地芝居、「腰越狀」に五斗、「隅田川」に同上。七月、角座、「双蝶々」に與五郎とお關、「中村𢌞」に八百屋庄松、「黑船」に忠右衛門。備中へ下る。

文政十一年正月、大阪、角座、「天滿宮」に時平、孔雀三郎、覺壽、堤畑の十作、荒藤太。三月、中座、「鬼一」に鬼若と鬼一、「紅梅靮」に梶原、「橋辨慶」。四月、角座、「秋葉權現」に駄右衛門、「宿無團七」に團七。七月、京都、北側芝居、「三代記」に高綱と藤三、「隅田川」に法界坊。八月、「天滿宮」に同上(覺壽だけを除く)。九月、大阪、中座、「赤穗臙竈」に師直、力彌、宅兵衛、「隅田春」に梅の由兵衛、「御所櫻」に辨慶と藤彌太、「非人敵討」に彦坂甚六。十一月、京都、北側芝居、「遊山櫻」に大内秀丸と加藤、「廓文章」に伊左衛門。

文政十二年正月、角座、「歌清水」に奴妻平、伊賀守、五平次、大膳。三月、「淺草靈驗記」に大川友右衛門、「七變化」の所作、「蝶花形」に小坂部、「舞扇」に茜屋半七。五月、京都、北側芝居、「白石噺」に常悅と秋夜、「雁金」に木曾兵衛。七月、大阪、角座、「白石噺」に常悅と宗六、「木津川」に宇治屋七兵衛、「布引」に實盛。九月、「連歌評判」に光秀と百姓與五郎、「反魂香」に又平。十一月、京都、北側芝居、同上。

天保元年正月、大阪、角座、「雪月花」に石田局、三二の五郎七、石川五右衛門。三月、「忠臣藏」に由良之助。五月、「[illegible]景清」に[illegible]判官、十藏母、岩永、「伊勢音頭」に貢、「大塔宮」に齋藤太郎左衛門と村上彦四郎。六月、宮島へ下る。八月、大阪、中座、「彦山」に衣川彌三左衛門と毛谷村六助、「阿漕浦」に次郎藏。九月、角座、「大内鑑」に保名と野干平、「妹背門松」に山家屋清兵衛と久作、「千本櫻」に狐忠信。十一月、京都、北側芝居、「菅原」に松王、「阿漕」「千本櫻」に同上。

天保二年正月、大阪、中座、「繁夜話」に松並藏人、柿木金助、おぼこの鐵太。三月、角座、「伊勢物語」に有常、名虎、孔雀三郎、「道成寺」

の所作。六月、「千本櫻」（操と合併興行）に知盛と權太、「嬢景淸」に景淸、「明烏」に幇間半七。七月、中座、「一谷」に熊谷、「腰越狀」に五斗、「戀飛脚」に忠兵衞、七變化の所作。九月、「高音鼓」に淺間左衞門、「左小刀」に甚五郎。十一月、京都、北側芝居、「忠臣藏」に師直・勘平・由良之助、「出入湊」に庄兵衞と奴小萬。

此の角座の「忠臣藏」は判官に四世團藏、石堂に七世團十郎、九太夫に七世仁左衞門、鄕右衞門に四世幸四郎、東西の名優を集めたる大一座なりしが、歌右衞門の由良之助、城渡しの門外にて、九寸五分を懷ろより出し思入ある時、劇場の屋根に多くの烏集まりカア〳〵と噪ぐを幕切として好評なりき。此は彼れが意匠により、前日より屋根に魚の腸を捨置き烏を集めたりといふ。

天保三年正月、大阪、中座、「品評林」に山三、千嶋冠者、浮世又平。二月、角座、「妹背山」に鎌足、大判事、鱶七、「源平躑躅」に熊谷。五月、「北國梅」に岩藤、「黑船」に寄進役者梅玉（梶久の役）と庄兵衞。七月、「潤曾我」に朝比奈・工藤、「高臺橋」に雷電源八と松坂屋新助。八月、「自來也」に自來也と名越長兵衞。九月、「戀女房」に左內、定之進、重の井、江戶平、「八陣」に森三左衞門、「松風」に此兵衞。十一月、休む。

天保四年正月、角座、「稚兒淵」に捨若丸、久次、石川五右衞門、狩野四郎次郎。三月、京都、「妹背山」に入鹿、鱶七、大判事、「花雪」に四郎次、「源平躑躅」に熊谷。五月、大阪、角座、「國姓爺」に甘輝、「五雁金」に庄九郎と喜三右衞門。七月、上京、「國姓爺」に同上、「極彩色」に喧嘩屋五郎右衞門と石井兵助。九月、「自來也」に長兵衞と自來也、「嫗山姥」に八重桐。十一月、大阪、角座、「一谷」に義經。

天保五年正月、「天滿宮」に紀長谷雄と武部源藏、「六歌仙」に御所女中。三月、「五山桐」に矢田平、「澤紫」に諏訪數右衞門、「鳴神」に

梅玉坊。五月、「三代記」に高綱、「夏祭」に釣舟三ぶ。八月、「九重錦」に義親、「桂川」に長右衛門。十一月、京都、北側芝居、「一谷」に義經、「腰越狀」に五斗、「反魂香」に又平。

天保六年正月、大阪、角座、「八相櫻」に淀平と遠山主膳。三月、「英勇記」に佐々木巖流と笠原新三郎。四月、伊勢へ下る。七月、大阪、角座、「大塔宮」に花園、「拳褌」に典藏。八月、中座、「狹間合戰」に官兵衛と石川五右衛門。九月、角座、「角抹賞」にちよんがれ傳界坊、「矢口渡」に頓兵衛と義興亡靈。十月、中座、「忠臣講釋」に師直、重太郎、近江屋次郎右衛門。十一月、同座、「源平躑躅」に鷲尾母お六と熊谷。

此れより改名して、玉助といひ、四世歌右衛門の名は門人二世芝翫によりて襲がれき。

天保七年正月、角座、「青陽鷄」に三輪五郎左衛門、三七信孝、久吉、「蔦蔓」の景事。三月、「伊賀越」に又五郎、醫者幸安、城五郎、武助、幸兵衛、「千兩幟」に鐵が嶽。是れより休業。十月、「大内鑑」に保名と野干平、「出入湊」に庄兵衛と小萬。十一月、休む。

天保八年正月、大阪、角座、「玉手綱」に伊達新左衛門と番頭彦七。四月、「嬉心船橋」に秋田城之助、「極彩色」に兵助。八月、「物草」に物草太郎、「阿漕浦」に次郎藏。九月、「鬼一」に鬼一法眼、「鉢木」に源左衛門。十月、角座、「崇禪寺馬場」に丹波屋十右衛門と綿田内記、「嫗山姥」に八重桐。

天保九年正月、休む。四月、中座、「苅萱」に新洞左衛門、「紅梅靮」に梶原。

此れより病に臥して、七月十三日、六十一歳にして歿しき。

歌右衛門は體軀矮小にして且つ容貌も甚だ揚がらず、「言語しやがれたる口跡にて、折々含み聲」、「され

ど辯舌爽か」にして、廿四歳の頃、既に敵役、立役、女方、所作事を兼ね、「眠獅がはり」又は「文七の和かみ」ありと稱せられ、只色事師だけは不似合なりと言はれたりき。蓋し彼れが競爭者なりし三世嵐吉三郎が風采に於て優れたりしのみならず、二世文七、二世雛助、等容貌よき若手役者のありしゆゑ、彼れは大かた色敵もしくは平敵に扮せしに、此の二人の早世せしより「歌右衛門は男前は悪いが藝が上手と」言はれ、終に吉三郎と相頡頏するに至りき。文化三年（廿九歳）の「役者大極丸」に彼れを評して曰く、

年若には似合はぬ小手のきいた事。其中に氣持高く狂言を仕つめずにさらりと流す場も有て、きつと末たのもしい藝風。


三世歌右衛門の「熊谷」（「似顔大全」より）

即ち、彼れの●●●●藝風は萬能にして器用なり、而も淡泊にして餘韻を存せるなり。

其の萬能なる事は前に述べし如く、善惡、男女、時代と世話、地藝と所作、到る所として可ならざるはな

く、「忠臣藏」「菅原」の七役もしくは九役、所作事の七變化、もしくは九變化など、同時に雜多の役に扮するを得意とし、特に壯時以後には彼の不似合と言はれし色事師さへ好評を得たれど、其の藤屋伊左衛門が餘りに賢過ぎたりといふ當時の評は、彼れが特色を知るべし。要するに、もし彼れが終生の當り藝を擧げなば、其の數に於ても、又其の種類に於ても、殆ど無限なるべく、然れば、既に吉三郎の併に兩者を比較して評せる如く、吉三郎の藝は面積に於て狹かりし代りに其の深さに於て深く、歌右衛門は其の面積に於て廣かりしと共に、又其の深さに於ても深かりしなり。「芝翫隨筆」に吉三郎が歌右衛門に對する「藝道妨出入帳」なるものを載す。戲作なるべけれど、如何に兩優が競爭の甚かりしかを知るべく、且つ其の中に歌右衛門の所作事を禁ずる事を乞ふの條あり。彼れが所作事に堪能なりしは確かに吉三郎に取りて弱點なりしなり。而も吉三郎と同く、歌右衛門も亦獨創の意匠に富み、謂はゆる「小細工」又は「小手きゝ」の評を得たりき。例へば「千本櫻」の權太に扮して、其の脊中に股引の跡だけ日に燒けぬさまを見せたる如き、「忠臣藏」の勘平に扮して、其の肌着に鹽谷家の紋を半ば現はし、お輕の振袖の古着を繼合はせたる如き、又彼の城渡しの由良之助に烏を鳴かせし如き、此等は餘り穿鑿に過ぎて寧ろ弊なりと雖も、其の舊作と新作とを問はず、性格に新き解釋を求めて之を舞臺に實演し、謂はゆる「梅玉の型」なるもの〻今日も幾多の狂言に存するを見ても、此の天才の吾が歌舞伎劇に及ぼせる影響の如何に大な

りしかを知るべし。

彼れは、幼時、大阪の大西芝居なる謂はゆる「首振」に出で、人形遣ひと同座して斯道の名手たりし吉田文三郎の薫陶を受け、操りの型に就いて深き造詣ありきといふ。又大芝居に現はるゝに至りては、先輩淺尾工左衛門に教へらるゝ所ありき。傳へ言ふ、彼れが初めて「盛衰記」の樋口次郎に扮せし時、權四郎は工左衛門なりしが、總淩ひの日、

例の淨瑠璃、「若君をお筆に渡し」と歌右衛門樋口にて二重眞中に住ふ。工左衛門は上手障子家體の前に腕を組んで立つて居る。歌右衛門不審に思ひ、何時もは皆下座ぢや御座りませぬかと言へば、人は何處でも己は此處ぢや、工合が惡いなら魂膽して見なされと言放す。歌右衛門無念を堪えて一夜眠らず考へしが、翌日の初日に、工左衛門は前日の通り上手に突立つて居る。歌右衛門は上手へは見向きもせず、ヅカ〳〵と二重を下りて門口へ來り、何時もの格子戸を開けて表を窺ひ、其の儘にて「權四郎、頭が高い」といふ。工左衛門も妙な事をしをると思ひながら、「何ぬかすぞえ」といふ。歌右衛門、矢張表を見たまゝ戸を明放しにして跡じさりしながら、「天地に轟く鳴る雷の如く」と後向に始終表へ目を放さず、「樋口の次郎」とまで一杯に二重へ上り、「兼光なるわ」と始めて此の時上手の權四郎を睨む。權四郎「エヽ」と驚き、「いふに親子も荒膽取られ」と、後を向き樋口を見上げる。歌右衛門は昨日の遺恨あれば睨殺さんといふ息組にて急度見る。「あきれ果てたるばかりなり」と、權四郎その儘ヒヨロ〳〵と下手へ下りちよつと行き、工左衛門は例の自慢のベタ〳〵と坐はり、斜に樋口を見上げる。此の呼吸實に眞劍の息込みゆゑ、場内崩るゝばかりのうなり、鳴りも鎭まらざりしといふ（「手前味噌」）。

京阪に於ける彼れの競爭者が三世嵐吉三郎なりし如く、江戸に在りても三世坂東三津五郎と相頡頏し終に兩派の爭鬪に及びし事は既に前に述べたりしが、江戸子を以て任じたりし太田蜀山人は最も彼れに同情して此れを惜み、「余に三つの嫌ひあり。有德庵と古賀彌助と中村歌右衛門」といへりと。又歌右衛門が歌川豐國の京美人に贊を求めしかば、

歌右衛門能つく聞け上方では斯んな女でも立小便するぞよ。

と書けりといふ。又文化五年に彼れが扮せる清盛を刺りて、

伍將軍甘輝のやうな清盛はけふ小芝居の翫びもの。

といひ、同八年に扮せる寺岡平右衛門を諷して、

菖蒲革きぬ足輕は、虎の皮の褌をせぬ鬼も同前。
菖蒲革きぬ足輕の見え坊は寺岡ならぬ米屋平右衛門。
菖蒲革きぬ足輕はものゝふの鎌倉風を知らぬ座頭。

といひ、其の私信の中に彼れを評して曰く、

芝翫（歌右衛門）事上手は上手に候へども、初下りの節、座頭市川男女藏を下駄にて叩き申候狂言いたし候。男女は下手に候へ共、市川と申し候名字は江戸子の大切なる名字也。狂言作者より申付け候とも辭退可致處、其儘押して座頭と成り、江戸の狂言の風俗を破い候間、上手なれども江戸者の風上に可置ものに無之、早々歸國爲致たく候。新場は上方多く候間、ひいきも有之、小田原町は直

の江戸者に候。是もどうか不和の由に御座候。上方役者、上方儒者、皆々大嫌に候也。

といひ、

芝翫はさしたる藝也。杜若（半四郎）に合せて踊るばかり也。ちよこ兵衛（一寸法師の役名）で膝かしらを痛めるは座頭でなく膝頭也。此一寸法師なくば誰も此狂言は見まじきことに。名人々々。……六郎公連、惣嫁の眞似、一寸法師まで出来るは、役者になるより、野太鼓を叩くがましならんか。

といひ、又

兼るといふ字を書きし戯子あり。當今の御諱をも憚らず、書き散らしたる上方役者。
淨瑠璃の義太夫節も内職にかね〴〵これをかねるとぞきく。

と江戸子の歌也。小田原町の戯語書附を見ると、兼る、はしる、にげる、のぼる、ごれるの五役も候。

といへり。斯くの如き蜀山人が嘲罵は殆ど江戸子の歌右衛門に對する憎悪を代表せるに拘はらず、彼れが前後三回の東下の孰れも大成功なりしは、暗に敵をして畏敬せしむるの伎倆を有し、且つ其の藝風の謂はゆる「氣持高く、狂言を仕つめ」ざる事が江戸向なりしなればならん。且つ歌右衛門に對する蜀山人の惡感も後年に至りて融和せりき。「三津五郎と二人奴の所作をせし時、芝翫を始て見物に來られたり。芝翫之を聞くと直に棧敷へ挨拶に行きしかば、蜀山、芝翫の扇へ、大和屋と加賀屋と二人奴らさ、こんのだひなし、外にねば〳〵。是より蜀山も芝翫贔屓となり、狂歌の發句の代作を句帳に書いて與へ」

しといふ。
彼れは亦その舞臺に於て萬能なりし如く、平生に於ても多藝なりき。彼れは舞踊の他に音樂をも能くせり。然れば「琴責」の阿古屋に扮して三曲を演じたる事往々ありき。又淨瑠璃に堪能なりし事は前に引用せし蜀山人の私信に言へる如し。只文筆の道に至りては最初その素養に乏かりしかば、

江戸中村座にて、さる贔屓より扇面に、畫なりとも、發句なりとも、書きくれよと乞はれ、甚迷惑せしが是非なく瓢畫を認め、「芝翫寫す」と惡筆にて書きけるを、其人持歸つて後坂東彦三郎に見せ、餘り拙し、是に賛をして興を添へよとあるに、薪水は書畫共に出來たれば、「椽先や蚯蚓のたくる五月雨」と書添へ……

たりといふ。而も後年には斯の道にも指を染め、狂歌發句さへ吟詠するに至りしが、文化十二年、再び歸阪せる時、曾て競爭者たりし三津五郎の前にて、

漕戻す跡は闇なり花火船。

と吟せしに、三津五郎は快からず思ひ、

三津又の花火は絶えず川開き。

と答へて、之を蜀山人に語りしかば、山人、

三津又の花火は絶えず川開き、主でなければ夜は明けいせん。

といひ、恰も隣座にありし七世團十郎も、此の事を聞きて、

濟度す奴が闇なり花火船。

といふ句を三津五郎に贈れりといふ。

彼れは「根氣強く、工夫に凝つては寢食を忘れ、藝道に勵む」ゆゑ、晩年には、「俳優の改稱、妓女の名弘め、等の摺物にも發句狂歌など數多よみ、語路手爾於葉の分らぬながら、中には相應に出來たる句もありたるが」、傍ら作劇にも埋頭せり。是れより先き、文化五年、彼れが始めて東下せし時、作者奈河篤助を招ぎ、歸阪の後も己に附隨せしめ、父の俳號一洗を贈りしが、幾もなく其の作不評なりしより、篤助は二世龜助と改名して歌右衛門と絶交し、專ら濱芝居の作者となりしかば、是れより歌右衛門は自ら金澤龍玉と稱して俳優たる傍ら狂言作者となり、金澤芝助（舊名奈河十喜助）金澤一洗（舊名奈河恒助）、及び戯作者濱松歌國を其の門下に集め、主に古狂言の添削をなせしが、實は彼れが執筆を擔當せる齣は大かた代作を他に依托せりといふ。西澤一鳳は其の「傳奇作書」に記して曰く、

余にも代作を賴みし事度々あり。役者にかけては古今の名人と呼ばるゝ者なれど、作道にかけては一文不才にて、時代人名の新古解らず、片腹痛き事まゝあれど、首領の勢に閉口して諫むるものはなし。余一場の代作なれば、誂の筋きかせ、草稿出來れば、前後讀合す時、意の違ふ事多くして、始めの誂への筋とは世界變れり。……此は如何にと問へば、前段の趣向につき取組みたり、又役者の違ひしは、誰々に合ひ、一時の戯れに役を振り變へんといひし故、趣向筆意の的も狂ひ、片腹痛き事まゝあり。既に「トン／＼」の

狂言本讀の時、序の筋、世話筋へ通らずして、奈河晴助は立腹して、龍玉（歌右衛門）と刺違ひ死んもの、と相口に手をかけしを、余し止めし事あり。然共、世にいふこぼれ幸とかにて、首尾わからぬ儘にも觀客よろこび、相應の當りを取りし狂言もありけり。

とて、歌右衛門が自作と稱する脚本の名を擧げたり。即ち、

「けいせい廓大門」（文政五年）。「遖傾城花大矢數」（文政七年）。「傾城百萬國」（文政八年）。「天滿宮花梅松櫻」（文政十一年）。「花雪歌清水」（文政十二年）。「けいせい雪月花」（天保元年）。

此等、孰れも凡作のみ。畢竟彼れの文才と詩眼とは俳優としての伎倆と比例せざりしなりき。

彼れは大阪の道頓堀に住居を構へて、一家の男女三十餘人、他に三戸の別宅を有し、一か年の生活費凡三千兩餘にして、當時「高麗橋の大丸か中村梅玉か」といふ諺のありしといふ。文化六年、江戸深川の淨心寺に妙見堂を再建し、石の鳥居及び手水鉢など彼れ一個人によりて支出せる其の費用千五百兩に上りき。然れば其の收入も非常の巨額にして、文政十二年、彼れが宮島へ下りし時、三十日間六百兩、別に一座の俳優二十二人に對して四百兩、都合千兩を受取りたり。又文政元年、江戸の中村座へ下りし時、僅かに二幕を演ずるのみにて、報酬二百兩、衣裳料百兩、合せて三百兩を請求し、全く先例なき高給なりしに拘はらず、金主大久保今助は此の興行の爲め六百兩の純益を獲たりといふ。尚ほ彼れが性質の闊達なりしは左の逸事によりても知らる。

阿波徳島の藍玉問屋の某、義太夫を好み、金を遣つて文楽の人形芝居へ出勤し、三絃は鶴澤勇造が彈き、大變な人氣なりしが、梅玉（歌右衛門）の思付にて、人形と歌舞伎を一幕がはりに興行し、己が出し物は「日向島」にて、此の藍玉と勇造との出語りなり。内々お眼にかゝつて置きたいとて、大夫、三絃、人形遣ひ、其の他卅餘人を境久（芝居茶屋）へ招待し、自分は例の通り大廣間の眞ん中に座り、左右に路之助、歌七、鶴助、梅藏、など列りしが、大夫、三絃・人形遣ひは此方が（歌舞伎芝居よりも）本座だといふ權式にて、人が挨拶しても横柄に羽織の襟ばかり直して居る。其のうち、梅玉は日向島を一遍聞かして貰ひたいと所望し、後に酒宴酣となりし頃、密かに家より取寄せし用箪笥の抽斗二つに年來溜めし高價なる煙草入のあるを、惜げもなく三十二三ぶちまけて一同に取らせたり。翌日、芝居にて稽古をするに、一同は昨日の權式もなく、遠くから低頭平身して、夜前はと叮嚀に禮を言つて引下る。歌舞伎の方の一同その氣持のよさ譬へるに物なし。（「手前味噌」）

高砂町名主と吉原なる丸海老屋へ參り候處、右座敷にて歌右衛門へ祝儀を金一兩一分遣候處、野だいこ同樣に、大勢の中にて祝儀をくれ候事を怒り候て相歸り、其後鐵漿楊枝を右の金子にてとゝのへ、夥く包み、かの傾城の方へ遣候由。これは歌右衛門參り候節、かの傾城の齒鐵漿はげて有之候故也。それより丸海老屋大に腹たち、酒樽十駄、歌右衛門へさし送る。猶又此上歌右衛門返報を見合せ、蓑輪金杉の芋を買ひ、廿兩許送り遣可申などゝ申候由。歌右衛門大に恐れ、やう／＼高砂町名主より吉原町の名主へかけあひ事相濟候て、歌右衛門より青籠に鳥をあまた入れ、返禮いたし候由にて候由。（「玉川砂利」）

彼れは人を愛憎すること殆ど掌を反すが如くなりしかば、「猫の眼」と蔭口いはれしを聞き、自ら辯じて、

已が猫の眼ではなく、おのれらが猫の眼ぢや。此方はどこまでも世話をしをほす氣でも、先きが世話になりをほせる器量がないから、終には愛想を盡かすのぢや。

といへりといふ。又彼れは酒を嗜まず、「常に寒を恐るゝ癖あり。夏日のほかは机の下に爐を造り、こゝに座して人にもあひ、又は狂言の工夫」をなせりと。

歌右衛門に關する著述の多きも、亦彼れが一代に聲望の高かりし證とすべし。其の書名を擧ぐれば、

「芝翫帳」。「芝翫栗毛」。「芝翫隨筆」。「芝翫國一覽」。「芝翫國全圖」。「芝翫節用百戲通」。「芝翫百人一首玉文庫」。「盛梅今入船」。「中村歌右衛門七役當藝評」。「滑稽道中雲助噺」。「錦繪姿」。「四天王大阪入」。「梅玉餘響」。

彼れに實子橋之助あり、多病の爲め俳優を廢めて大阪の藥店を營みき。外に養子松江及び三世芝翫ありしも、孰も夭折し、歌右衛門の名は門人二世芝翫によりて襲がれしこと前に述べたる如し。尚ほ狂言作者としての金澤龍玉の稱は奈河本助によりて襲がれき。

●●●●●五世市川團藏（三河屋市紅、天明八―弘化二）は始め市川鰕十郎の門弟にして、森之助といひしが、後に四世團藏の養子となり、名を團次郎と改め、寛政七年（八歳）、大阪の中座へ子役として現はれしを其の初舞臺とす。同十年、父と共に江戸に下り、中村座に出で、又子供芝居へ現はれて「忠臣藏」の由良之助に扮し、頗る前途有望を以て目せられき。文化五年（廿一歳）、養父團藏の死してより、二世嵐吉三郎の庇護を受け、同六年、

大阪の中座、「潮來諷」に押小路主水に扮し、亡父の面影ありとて好評なりしが、是より濱芝居へ出て修練の功を積み、「八陣」の正淸、「長柄長者」の源之助、「但馬屋」の丁稚殺し、「卅三間堂」の平太郎、等の當り藝ありき。同十二年（廿八歳）春、市紅と改名して再び大芝居へ現れたり。以後、俳優としての經歷は、

文化十二年春、大阪、角座、「若榮切」に立濱兵部と鹽塚重太夫。同、中座、「大友眞鳥」に助八と兼道。「安永鉢」に花園三十郎、切に「法界坊」。「苅萱」に監物太郎、「出入湊」に孫三郎、「嫗山姥」に眞屋源七。同、中座、「大友眞鳥」に助八と兼道。「楠昔噺」に正成。上京、同上、「曾根崎村」に長藏。七月、堀江芝居、「日吉丸」に東吉、「古手帷」に八郎兵衞。八月、角座、「妹背山」に芝六と久我之助。それより尾張に下る。

文化十三年春、大阪、中座、「園の雪」に園部左衞門と來國俊。「磯馴松」に行平、松風、小ふぢ、「座敷八景」に奴關助と半十郎。堀江芝居、同上、「巖流島」に無三四。八月、中座、「孝源氏」に牛若丸と浪人勇介、「油賣」に長岡與太郎。九月、「小倉色紙」に小松屋宗七と岸田陸助。十一月、同座、「御所櫻」に伊勢三郎。

文化十四年春、「兒淵」に久次と島左近、切に「十二ヶ月」の景事。京都、南側芝居、「孝源氏」に牛若丸と勇助、「蝶紋日」に米屋長吉。兵庫へ下る。七月、大阪、堀江芝居、「奴請狀」に東吉、「廓色絲」に植木屋文藏。八月、堺へ下る。十一月、京都、北側芝居、「妹背山」に芝六と久我之助。

文政元年春、大阪、角座、「自來也」に自來也と速見政次郎、「加賀見山」にお初。三月、「廿四孝」に越名彈正と景勝、「物草」に岡平と雅樂之助。四月、「躄仇討」に勝五郎、「八百屋」に半兵衞。五月、北新地芝居、「大塔宮」に村上左衞門、「伊勢音頭」に貢。八月、京都、北側芝居、「太功記」に光秀と長左衞門、「廓色絲」に植木屋文藏。九月、「いろは歌」に判官と平右衞門。冬、備中へ下る。

文政二年春、京都、南側芝居、「石川染」に小鮒源五郎、久次、久吉。興行中燒失。大阪、堀江芝居へ轉じ、同上、切「姫小松」に俊寛。四月、

角座、「忍術池」に萬野兵庫と信濃藤藏、「布引」に實盛。閏四月、「忠臣藏」に由良之助と勘平。名古屋へ下る。秋、角座、「曲山論」に春藤治兵衛と奴伊平、切に刀屋新助、「盛衰記」に平次。九月、兵庫へ下る。十一月、京都、南側芝居、「遠江灘」に日本馱右衛門（吉三郎の代り）。十二月、「一谷」に忠度と熊谷、「戀湊」に玉屋新兵衛。

この「石川染」の時なるべし。五右衛門は七世仁左衛門なりしが、山門の場にて手裏劍を打つて、久吉が柄杓にて受止め、「順禮に御放捨」と何にもせずに屈み、顔を見せぬやうせしに、見物喝采して止まず。仁左衛門怪みて門弟をして此のさまを見分せしめ、始めて手を打つて感心し、「おれは大兵なる男、市紅は小がらの男ゆゑ、中々みえをしてもおれに叶はず。己が身を知りて顔を下へ向けるを見物に拾はれて譽めらるゝとは天晴名人なり」といへりと。尙ほ彼れは、此の年四月、角座にて始めて師名を嗣ぎ、團藏といひき。（三十二歳）

文政三年春、南側芝居、「小倉色紙」に笹原左門之助、立浪金兵衛、九右衛門。大阪、堀江芝居、「安永鉢」に小栗栖十兵衛、「菊畑」に加藤左衛門、「妹背門松」に山家屋淸兵衛、「嫗山姥」に八重桐。夏、宮島へ下る。

文政四年春、大阪、中座、「廓島臺」に淺井刀太郎、今津屋十三郎、足利氏春。三月、伊勢へ下る。八月、大阪、堀江芝居、「秋葉權現」に玉島逸當と月本圓秋。十一月、北新地芝居、「長柄長者」に源太左衛門と源之助。十一月、京都、南側芝居、「妹背山」に求女と大判事。

文政五年三月、大阪、角座、「五山桐」に久次と久吉、「露蝶」に幻瀧右衛門と南與兵衛。五月、北新地芝居、「楠由來」に平忠盛、檜曾根勾當、同平太郎、「戀飛脚」に忠兵衛、「布引」に實盛。七月、中座、「水滸傳」に向井金左衛門、「當世姿」に玉屋新兵衛、「井人作計」に高市

武右衞門と奴佐平。」九月、京都、南側芝居、「鬼一」に智惠内、「戀飛脚」に忠兵衞。

文政六年二月、南側芝居、「忠臣藏」に由良之助、師直、勘平、戸無瀬、與茂七。三月、「菅原」に菅丞相と松王丸、「桂川」に長右衞門。四月、大阪、角座、「夏祭」に磯之丞と釣船三ぶ、「姫競」に櫻井新吉、七月、「嫗山賤」に牧原靱負と夏梅專大郎、「古手屋」に錦屋新兵衞。九月、「崇禪寺馬場」に遠城宗左衞門、丹波屋十三郎、木曾兵衞。十一月、京都、北側芝居、「兒淵」に久吉、久次、高景。

文政七年春、大阪、角座、「花大矢數」に北畠靱負之助と藏人助國。三月、「忠臣藏」に桃井、石堂、平右衞門、彌次兵衞、山岡覺兵衞、戸無瀬、小間物屋彌七。夏、明石へ下る。七月、京都、北側芝居、「夏祭」に磯之丞と三ぶ。八月、「崇禪寺馬場」に宗左衞門、十三郎、木曾兵衞。閏八月、大阪、角座、「伊賀越」に丹右衞門、松野金助、饗田內記。九月、「佐野船橋」に重助、「國姓爺」に錦祥女、「女護島」に俊寛、「三代記」に三浦之助。

文政八年春、中座、「百千鳥」に萩塚鳴戸之助と宇田要助、「太功記」に長左衞門と光秀、「五人男」に鴈金文七、「忠臣藏」に師直、與茂七、定九郎、由良之助。三月、「秋葉權現」に圓秋、「座敷八景」に半兵衞。七月、「竹取物語」に田村丸、護法丸、吳道士、「蝶紋日」に南方與兵衞。八月、「千本櫻」に知盛・小金吾、權太、覺範、「桂川」に お半。九月、京都、北側芝居、「長柄長者」に源太左衞門と源之助。十月、大阪、堀江芝居、同上、「戀飛脚」に槌屋治右衞門。十一月、北新地芝居、「忠臣講釋」に由良之助、「天網島」に紙屋治兵衞。

文政九年春、中座、「先代萩」に名古屋山三、豆腐屋權兵衞、才原勘解由。三月、「菅原」に輝國、「伊勢音頭」に貢。四月、角座、「妹背山」に定香、求女、鱶七。「玉藻前」に那須八郎、「姫小松」に俊寛。八月、堀江芝居、「八陣」に正淸、「極彩色」に淸十郎と兵助、「月三河」に茜屋由兵衞。北新地芝居、「大友眞鳥」に兼道、「月三河」に同上、「戻駕」に吾妻與次郎。九月、角座、「伊賀越」に政右衞門と城五郎。

十月、「白石噺」に秋夜、「曾根崎」に德兵衞。十一月、京都、北側芝居、「五山桐」に久次と久吉、「五鴈金」に安平兵衞。

翌年正月の評判記より「上上吉」に昇りき。（四十歲）

文政十年春、大阪、中座、「遊山櫻」に加藤正清と瀨川要人。二月、和歌山へ下る。七月、京都、北側芝居、「盛衰記」に源太と重忠、「妹背門松」に油屋太三郎。八月、「躄仇討」に佐々成政、三左衞門、勝五郎、「阿波鳴門」、に櫻井主膳。十一月、同座、「いろは歌」に由良之助、上村左京、小間物屋源七。

翌年より「至上上吉」に進みき。

文政十一年春、大阪・角座、「天滿宮」に菅丞相、武部源藏、宿禰太郎。三月、中座、「鬼一」に智惠内と牛若、「戀飛脚」に忠兵衞と孫右衞門。四月、角座、「秋葉權現」に團秋、「宿無團七」に大治。七月、京都、北側芝居、「三代記」に三浦之助、「隅田川」に淺山主膳、八月、「天滿宮」に同上。九月、大阪・中座・「赤城鹽竈」に由良之助、「梅由兵衞」に長吉と金五郎。「御所櫻」に伊勢三郎・「非人仇討」に治郎右衞門。十一月、京都、北側芝居、「遊山櫻」に小西行長、淺野彌兵衞、佐竹新十郎。十二月、大阪、北新地芝居、「躄仇討」に勝五郎。

文政十二年春、角座、「歌清水」に國俊と兵衞。三月、中座、「楊柳櫻」に淀屋辰五郎と結城守、「加賀見山」に同上。四月、京都、北側芝居、同上。五月、中座、「盛衰記」に源太、「夏祭」に三ぶ、「戻駕」に與四郎。六月、宮島へ下る。八月、大阪、中座、「伊達競」に外記左衞門、「花川戸」に權八。九月、「譽二街」に高橋彌十郎と人足廻し孫七、「近江源氏」に盛綱と四の宮六郎。十月、奈良へ下る。

天保元年春、大阪、御靈芝居、「妹背山」に大判事、求女、鱶七、「桂川」に長右衞門。北新地芝居に同上。三月、角座、「忠臣藏」に判官、勘平、本藏。五月、「譽景清」に重忠、盛綱、伊葉重藏、「伊勢音頭」に喜助。「大塔宮」に土岐藏人と有馬之頭。「龜屋道靖」（改作）に左近太郎、「妹背門松」に久松。十月、「千本櫻」に彌助。十一月、京都、北側芝居、「菅原」に輝國と梅丸。

此の興行中、病に罹り、二三日出勤せしのみにて休業せり。

天保二年春、大阪、中座、「繁夜話」に齋藤司之助と向坂甚内。三月、角座、「伊勢物語」に荒川宿禰と豆四郎、「昔八丈」に才三郎、「吉原細見」に遠山甚三。五月、筑後芝居、「先代萩」に賴兼、「在原系圖」に閣平。七月、「拳褌」に傳七、「持丸長者」に但馬屋卯藏。九月、中座、「高音鼓」に富士太郎、「紅葉狩」に惟茂、「姫小松」に俊寛。十一月、同座、「扇矢數」に矢間重太郎。

翌年より「白大上上吉」に進みき。（四十五歳）

天保三年春、「品評林」に佐々木桂之助・梅津嘉門、片岡政元。三月、竹田芝居、「忠臣藏」に七役、「伊勢音頭」に貢。五月　堀江芝居、「長柄長者」に源太左衛門と源之助、「蝶紋日」に籠屋甚兵衛と南與兵衛、「五雁金」に文七。八月、角座、「自來也」に速見政次郎と椎津市之丞。九月、「戀女房」に由留木左衛門と馬士八藏、「八陣」に正清。京都、南座、「品評林」に桂之助、嘉門、山三。

翌年、彼れは三十五年目にして江戸に下りき。

天保四年春、江戸、市村座、「八陣」に正清、「琴責」に阿古屋。三月、「妹背山」に大判事、「五大力」に源五兵衛、「布引」に實盛。五月、「千本櫻」に忠信と小金吾、「夏祭」に三ぶ。九月、「忠臣藏」に由良之助と戸無瀨。十一月、休む。

天保五年春、同座、「姫小松」に俊寛。（興行中燒失、休む。）五月、「一谷」に熊谷、「鑑縷錦」に治郎左衛門。九月、「自來也」に自來也と名越長兵衛、「赦免狀」に俊寛。

此の翌年より「極上上吉」に進みき。

天保六年四月、中村座、「近江源氏」に盛綱、「鬼一」に鬼若と鬼一、「隅田川」に法界坊。八月、森田座、「忠臣藏」に本藏と由良之助、「双

面影」に俊寛。十一月、休む。

天保七年三月、中村座、「加賀見山」に岩藤、「千本櫻」に知盛。五月、「大塔宮」に齋藤太郎左衛門、「富岡」に出村新兵衛。八月、「非人仇討」に治郎左衛門、「嶋物語」に俊寛。「馬切」に信孝。

天保八年春、市村座、「根元曾我」に工藤、「博多織」に小松屋宗七。三月、「裏表」に三浦荒次郎、佐野兵衛、中老尾上。五月、「盛衰記」に源太。九月、「忠臣藏」に七役、「戀飛脚」に忠兵衛と孫右衛門。十一月、河原崎座、「八陣」に加藤正清。

天保九年春、「布引」に實盛、「一谷」に相模、「戻駕」に與四郎。四月、「菅原」に菅丞相、「琴責」に阿古屋。五月、「鎌倉山」に荒次郎と兵衛。

天保十年春、同座、「伊達競」に政岡と仁木、「二代勝負附」に高倉隼人。三月、「櫻色團」に正宗と園部兵衛、「國姓爺」に甘輝。十一月、大阪、角座、「三略卷」に鬼一、「琴責」に阿古屋、「桂川」に長右衛門。

天保十一年春、「青陽鶏」に信孝、今川義國、修理之助。三月、「忠臣藏」に師直・由良之助、彌七、「女護島」に俊寛。五月、堺に下る。七

此の時、彼れは八年ぶりに歸阪せるなり。

月、角座、「大湊」(新作)に櫻戸落葉之助、筑紫權六、足利義晴、「先代萩」に政岡と鐵之助。「自來也」に自來也と名越兵衛、「先代萩」に秋塚帯刀。十一月、京都、北側芝居、「青陽鶏」に信孝と藤右衛門、「義臣傳」に彌七、「女護島」に俊寛。

天保十二年春、大阪、堀江芝居、「八陣」に正清、「金持性」に但馬屋九藏。三月、中座、「天滿宮」に菅丞相、孔雀三郎、畑十作、「廓文章」に伊左衛門。五月、京都、北側芝居、「赤穂鹽竈」に由良之助、「天滿宮」に孔雀三郎と十作、「崇禪寺馬場」に遠城治左衛門。九月、「薩摩櫛」に六部快了、井上新左衛門、千島左衛門、眞柴久吉。十一月、京都、北側芝居、「倭莊子」に松並軍次兵衛、瀬戸十膳、岩倉隼人

「八陣」に正清。

次いで弘化元年、角座にて「石川染」に久吉と岩木屋藤三郎、「國姓爺」に甘輝と、同時に中座にて、「戻駕」に次郎作と、兩座を駈持せしが、是れより舞臺を休み、翌弘化二年六月六日、病死せり。歳五十八。

團藏は養父と同く小兵にして見榮えに乏しかりきといふ。而して其の藝風も質實にして俗に彼れを「澁團」といへり。天保八年の「役者早速庖丁」に彼れが江戸に於ける藝を評して曰く、

惣て此仁は場當りなこのます。おのれが藝を見る人は見ろであらうと落ついて居らるゝ所はかんしん〳〵。夫故花やかにはまゐりませぬ。されば年若な方々の御意には入るまいが、よく目をつけて見ろと感心する事が多うござり升。

彼れが江戸に留まること前後八年間にして、常に好評を以て迎へられしは、此れが故なりしと共に、寛政十年、其の再び大阪に歸るや、劇評家が口を極めて激賞せるに拘はらず、彼れの芝居は大かた不入に了りたりき。蓋し其の藝風が俗衆の幼稚なる趣味に適せざりしを以てならん。例へば、寛政十二年の「役者舞臺扇」に、彼れが「馬切」の信孝を三世歌右衛門と比較せる評の一節を見よ。

梅玉丈、信孝をいたされた時は、此早切もへと派手にしられ、見物が悦びました。此度團藏丈、ちよつとも動かず、この早切、若手の見物は精がないと申しました。……そりや、梅玉丈のお持まへとて、何役でも端手にしらるゝ、お人なれば、此信孝役は高家の人ゆゑ、馬士でも蟲同然のやうな者ゆへ、團藏丈のやうにからだをつかはず何の苦もなく大勢な切殺す方がようござり升る。……皆々の刀をあらためる所、梅玉丈は一々我が方から傍へいて改めたり、また一所に刀をぬかし、さし上さして改めたり、あまりやく過て不

評であつた。此度團藏丈、皆々に刀をぬかし、居ながら見やり改められた方がよいぞ〳〵。

又「役者早速庖丁」に彼れの齋藤太郎左衛門を評して曰く、

これまで、誰が致されても、顏を赤く、惣白髪でござり升が、市紅丈は薄肉にて、胡麿鹽で致されたゆゑ、ちと手よわく見へ升たが、惣たい此人はあまり顏を塗ることをこのまれ升ぬと見へ升た。

と。彼れは科白のみならで、其の化粧に於ても、當時の歌舞伎劇に通弊なりし誇大を忌み、力めて眞實を寫さんと欲せしなり。彼れが熊谷に扮せし時、「餘り顏が赤くなきゆゑ、傍より注意せしかば、御前、熊谷と近付であつたか」と笑ひしといふ。又同書に彼れが服裝に注意せる事を賞して曰く、

此人の流義として、親ごの市紅丈よりも感にたへる事がござり升が、とかく今の若い衆の氣には入り升ぬ。一寸としたことでござり升が、俊寛の着附のはぎ〳〵に紫のやつ藤のさしぬきをくづしてはかれ升たが感心でござり升。僧都故、明幕さしぬきを用ひたれば、是は第一の氣の附處でござり升。

尚ほ、江戸へ下りし時、「八陣」の正清にて天守閣の場に、初世團十郎が大百日の鬘なりしと變り、月代を剃りたる頭にて床几にかゝりし如き、「千本櫻」の小金吾にて、前髪を太く束ねたる鬘を用ひて元祿の風俗を寫したる如き、「夏祭」にて釣舟三ぶにて、昔は赤く顏を塗りしを、頭も眞つ白なる絲鬢奴の老體——(此は四世團藏の創めし型)にせし如き、「加賀見山」の岩藤にて、下郎を手討にする件を牛島主税にさせ、己れは扇にて顏を覆ひ、尾上を罵る所も奥女中に代らせて、己れは知らぬ顏にて時々見向くやうに

せし如き、「鎌倉山」の三浦荒次郎にて、三世歌右衛門及び四世宗十郎によりて創められし舊型を破り、當時佐野源左衛門に扮せし七世團十郎と計り、佐野田沼の服裝とし、欝中の實況を寫し、且つ饅頭を及



五世團藏の「後寛」（「似顔大全」より）

先へ貫きて突付ける所を、これまで立ちたるまゝせしに、わざと坐りてし、今日も此等の型を用ひらるゝ如き、「戀飛脚」の忠兵衛にて、梅川と對の衣裳を改めて別々の拵へにせし如き、

想ふに斯くの如き藝風は、終に明治時代の九世團十郎によりて祖述せられ、謂はゆる「活歴」の濫觴一派をなせるならん。

團藏が得意とせる所は最初「和事」にありたりき。例へば「妹背山」の久我之助、「伊勢物語」の豆四郎、「長柄長者」の源之助の如き是れなり。壯年以後も往々此の種の役に扮せしと雖も、別に「武道」「實事」をも兼ね、養父傳來の俊寛、鬼一、正清、大判事、齋藤太郎左衛門、由良之助、本藏、など孰

ゝ彼れが當り藝なりき。又養父と同く所作事を能くし、壯時は其の地藝に於てさへ餘りに「拍子がきゝ過ぎたり」と評せられ、「法界坊」、「忍責」、「戻駕」の如きは晩年まで屢舞臺に繰返して喝采を博しき。尙ほ女方にも指を染めて、お初、尾上、八重桐 錦祥女、お半、等に扮せしも大かた失敗に歸し、僅に「琴責」の阿古屋(三曲)、「先代萩」の政岡、「加賀見山」の岩藤、等に好評を得たるのみなりき。

彼れが壯時、「山門」の久吉に扮して七世仁左衞門に賞讃せられし事は既に述べたり。天保十年、河原崎座にて「薄雪」の正宗に扮せし時、「調伏のやすり目を知つたる者は」と眼鏡ごしに七世團十郎の團九郎を見るに、團十郎はいつもギョッと胸に應へ、見物も喝采するゆゑ、「何うすればあの眼があゝ利くものか」と聞きたるに、

それは前よりの運びと年功と申すものなり。御見物があいつ何をするであらうと見詰めて下さるのが數年の功なり。追ひ〳〵お前さんも見物が心を痛めるやうになられます。

と答へたりといふ。

第十一章　京阪に於ける其の他の立役と敵役

二世中山文七(鬘付屋由男、寶曆五―寬政十)は始め嵐雛助の門人にして伊八といひ、大阪の竹田芝居に出でたりしが、安

永六年（廿三歳）冬、猪八と改めて京都の南側芝居へ出でたり。此れを大劇場に於ける彼れが初舞臺とす。翌七年三月、初世文七が實弟たる二世中山新九郎の養子となりて姓を中山と改め、同八年冬より京都にて座元たりき。天明二年（廿八歳）冬、養父が始め二世新九郎の名を襲ぐと共に、其の舊名を承けて來助と改め、尙は京都に座元たること舊の如くなりき。養父新九郎は翌三年に死せしが、彼れは、四年冬、水木清藏へ中山猪八といふ藝名と共に座元を讓りたり。同六年、大阪へ下り、寬政五年（卅九歳）冬、始めて文七の名を襲ぎ、同七年春「上上吉」の位に進みしが、同十年、退座して油店を營み、同年二月十九日、四十九歳にて歿せり。彼れは小柄にて、其の長所はやつし方にありき。此の方面に於ては小川吉太郎の再生と稱せられしが、自らは寧ろ實事もしくは捌役を好み、文七の名を襲ぎてよりは、頻りに初世文七の當り藝を演じ、雷電源八及び神道源八の如き、好評を博せしと雖も、要するに初世よりは其の才能の區域に於て狹かりしなり。

●淺尾工左衛門（金田屋兕丸、寶暦八—文政七）は竹田太四郎の弟にして幼名を仁三郎といひ、明和の頃、竹田の子供芝居へ出しが、安永の末、中山楯藏の門に入り、中山太四郎といひ、天明二年、中山文七が一世一代の狂言をせし時、囃子方として出で、其の後、中芝居にて實惡を勤めて次第に昇進せり。寬政五年、師楯藏が泉川と改姓せしと同時に、彼れは朝井工左衛門と變稱し、同六年冬（三十七歳）、淺尾爲十郎の弟子となり、始め

て淺尾工左衛門と稱して、中座へ現はれたり。是れ彼れが大劇場へ出でし最初なりき。次いで、享和三年冬、中座にて、師爲十郎が一世一代の狂言に「戀飛脚」の七役早變り（馬士、下女、針醫、釣掛、十次兵衛、道場參の婆、假分限、孫右衛門）を演じ、此を名殘として江戸の市村座へ下りしが、翌年冬、歸阪して中座へ現はれ、同五年六月、再び中村座へ下りしも、其の冬、終に西歸し、同十年正月、始めて實惡の「上上吉」に昇され、更に十一年四月、「至上上吉」となり、同十一年十一月、三たび江戸へ下りて市村座へ出勤し、十四年正月より「功上上吉」に進みたり。同年春、江戸を去りて、七月より大阪の中座へ出で、爾來京阪を往來せしが、文政五年冬、京都北側芝居にて「石切梶原」の六郎太夫と伊達與三兵衛に扮してより病を獲て舞臺を休み、同七年八月廿二日、六十七歳にして同地に歿せり。

彼れが專門とせるは「實惡」にして、且つ其の師爲十郎の風を模倣せしと雖も、最も本領とする所は「實直なる老人の役」にありき。文化十二年の「役者聲草」に彼れを評して曰く。

親仁役の實事をせらるゝと評よく、師匠（爲十郎）の致された役をあてがふと評あしく……

といへる如く、彼れは爲十郎の如く、輕さと可笑みとに長ぜず、又重みと憎みとに適せず。例へば「油屋」の善六の如き半道役にては重くるしと評せられ、其の「忠臣藏」の師直は人品に乏しと言はれ、其の「龜山仇討」の水右衛門は憎み足らずと稱せられ、加ふるに華の少くして實の多く、且つ愁嘆の科は餘りに

泣過ぎる程なりしかば、謂はゆる「親仁役の實事」が唯一の得意なりしなり。例へば、「伊賀越」の平作、「盛衰記」の權四郎を首めとして、「菅原」の白太夫、「一谷」の彌陀六、「楠昔噺」の德太夫、「石切梶原」の



工左衛門の「久作」（「似顏大全」より）

六郎太夫、「白石噺」の庄屋、「戀飛脚」の孫右衛門、「八百屋」の島田平左衛門、等いづれも彼れの當り藝なりき。又稍時代がゝりし老人役にては「大塔宮」の齋藤太郎左衛門、「苅萱」の新洞左衛門、「忠臣講釋」の喜内、「國姓爺」の老一官、尚は敵役にては「忠臣藏」の九太夫、「伊賀越」の鳴見、「八百屋」の老婆、等も其の當り藝なれど、要するに、高貴よりも下賤、時代よりも世話、青年よりも老輩、獰惡よりも眞率、且つ輕きよりも重くるしきが彼れの特色なりしなり。

工左衛門は又その師爲十郎と同く、衣裳の好みに工夫と費用とを惜まず、其の光秀に扮せし時の甲冑の

如きは非常に華美なるものを用ひしといふ。尙ほ彼れは爲十郎の得意なりし早變りをも、屢演じ、前に述べたる「戀飛脚」の七役の如きは其の一例なり。

彼れが三世歌右衛門に敎へを垂れし事は既に前章にいへり。即ち歌右衛門の爲めには先輩にして、仁左衛門及び二世吉三郎と相匹敵せしが、其の藝風の寧ろ副人物の役に適して座頭たるに適せざりし爲め、終に第二流の俳優として世を終れり。二世工左衛門の名は柴崎林左衛門（初名大谷友次）によりて襲がれしが、著名ならず。

三世中山新九郎（折屋一蝶、寶曆十一—文政十）は初世新九郎の門人中山音十郎の子にして、始め、中山辰藏といひ、大阪の中芝居に出でしが、寛政六年（三十四歳）、新七と改めて始めて京都の大芝居へ出で、同八年、來助と改め、享和二年（四十二歳）、京都と大阪とにて「拳褌」に香齋典藏（尾上新七の傳七）に好評を博し、是れまでは立役なりしを實惡に轉じ、同年冬、始めて新九郎の名を襲げり。蓋し二世新九郎は、既にいへる如く、初世中山文七の弟にして始め父の名を襲ぎて松屋來助といひ、後に中山の姓を冒し、終に新九郎となりしが、天明三年、四十六歳にして死し、又其の養子は二世文七の名を襲ぎたればなり。文化十一年（五十四歳）四月、始めて「上上吉」に進み、同十三年冬、俳名一蝶を子來太郎に讓り、自ら喜樂といへり。文政三年春、「至上上吉」に進み、文政九年春、角座に於て更に新九郎の名を來太郎の一蝶に讓り、自ら俳

名の喜樂を藝名とし、此の前より病氣にて舞臺を休みがちなりしが、同年十月廿五日、六十七歲にて歿しき。

彼れは、最初、武道、實事、捌役を專門とせしが、稍堅くるしとの評あり、後には實惡をも兼ねたり。文化七年の「役者新綿船」に曰く、

どのやうな長いせりふも、短く思ふやうのめりはりはきついぞく。

蓋し彼れは音聲の活殺に巧みなりしなり。

三世嵐三五郎（京屋来芝、—天保九）は二世三五郎の子にして、幼名を松之助といひ、寬政九年十一月、京都の南側芝居にて父の名を襲ぎ、始めて三五郎と稱し、「忠臣藏」に勘平と判官とに扮し、好評を博せり。文化二年正月、「上上吉」の位に昇され、同十一年冬、江戸の市村座へ下り、「菅原」に飴賣五作にて輕業綱渡りの所作、二番目に塚本狐、翌十二年三月、傘の一本足の所作にて喝采を得しが、同年夏、同座が財政困難の爲め休業すると共に、暫く舞臺を退き、翌十三年春、大阪に現はれ、此の時の評判記に始めて「功上上吉」に昇されしが人氣の頓に落ちし爲めにや、文政二年より、大阪の大西又は竹田など中芝居へ出で、同四年冬、改めて京都の北側芝居へ現はれしも、評判記には其の位を貶して「上上吉」とせられき。文政六年十一月、三五郎の名を子馬太郎に讓り、自ら俳號の來芝を以て藝名とし、專ら伊勢、尾張、若しくは中

國、九州、等の地方へ巡業せりき。文政十年正月、再び「功上上吉」に上り、天保四年夏、病氣の爲め西國より歸阪せしが、天保九年に至り歿しき。



三世三五郎の「源九郎狐」（「似顔大全」より）

彼れの長所は父と同く、所作事と和事にありたり。然れども、文化二年の「役者正札附」に彼れを評して、

拍子事にかけて此上もなけれ共、拍子づくめ計にて、幽玄體の所作なし。これを見て親父の可笑味を思ひ出すぞ。

といへるを見れば、彼れの所作事は動作の律呂に合するを主として、其の意味の含蓄に乏しかりしならん。而も其の謂はゆる拍子事は、一方に於て屢地藝の累をなせり。同書に

何をしても餘りりゝし過ろ。ゆつたりとしてもらひたひと思ひます。

といひ、又その「植木屋」の小間物屋彌七を評して、「ゆるやかな味薄」しといひ、其の他、諸評書に、「何で

もかでも、拍子づくめ」といひ、「足先で藝をする」といひ、彼れは地狂言に於ても、所作事と同く、一定の律呂によりて科白を行りて、餘裕に缺けたりしなり。

和事の方面に於ける彼れの當り藝は、父と同く、鎌倉屋五郎八、藤屋伊左衛門、園部左衛門、小間物屋彌七、足利義教、淀屋辰五郎のほか、梶原源太、鮓屋彌助、油屋太三郎、和田志津馬、飯沼勝五郎、等あれど、彼れは體軀矮小にして肥滿し、且つ風采甚だ揚がらざりしかば、壯時より既に此の種の役には甚だ適當ならざりしものゝ如し。

寛政十年の「役者見物左衛門」に

　やつし形にはよい男ともいはれれども、仕内のよいのでかつこうの事はよそになつて、きつと三代目の色事師には慥々。

といひ、其の他「米俵」「伏見人形」など罵評の諸書に見えたり。

又文化十一年、江戸へ下りし時の實況を「戲場年表」に記して、

　この顔、横ぶとり、丈短く、不男。前貸七百兩、此の顔見世一興行三百兩の高値。

　三五郎とかけて、裏店の婚禮と解く。心は長持がなし。

然れば、晩年には和事以外なる雜多の役をも兼ね、老人役としては、「妹背山」の大判事、「八百屋」の島田平左衛門、「石切梶原」の六郎太夫、「浦朝霧」の門番松兵衛、「伊賀越」の平作、など殆ど淺尾工左衛門の得

意とせるものを演じて好評を得し、又武道實事としては、「信仰記」の春永、「富士見西行」の西行法師、「菅原」の源藏、「隅田川」の道具屋甚三、「加賀見山」の安田大將と鳥井又助、端敵として「菅原」の宿禰太郎、道外役としては「戀飛脚」の忠三郎なども彼れが當り藝たりき。

彼れは又二世三五郎と同く所作と地藝とを兼ね、「狐忠信」、「塚本狐」などに扮して屢喝采を博し、すべて小手の利きて舞臺の花やかなりし代りに、其の藝の深さに於ては終に父三五郎に及ばざりき。文化元年に彼れが扮せし「嫗山姥」の萇屋源七を彼の「役者正札附」に評して曰く、

隨分くひこぼしなく、古來芝(二世三五郎)形をよく呑込んでしられたれど、腹切つてから切の幕迄の所が、とんと魂ひがない。これは古來芝の仕られたは、何にも仕内のない、腹へ刀をつきこんでゐる計の狂言なれど、我魂八重桐に付したふといふ意氣有て、此間か甚面白い事で有たが、此度の仕内を見てもむかしこひしう思ひ出す事ぢや。

此は彼れが壯時の技藝ながら、如上の弊は老後に至るまでも脱せざりしもの丶如し。されば、晩年甚だ振はず、京阪の大舞臺に現はれずして、殆ど中芝居もしくは旅芝居に從事して身を終りしなり。尚は彼れが今一つの弊は衣裳の好みの質素にして、屢古き物を用ひし爲め、舞臺面の見すぼらしき事なりき。斯くて、四世三五郎の名を襲ぎし門人來太郎は天保八年に夭折し、門下亦著名の俳優を出さゞりしかば、三世の久しき間榮えたりし嵐家は彼れより以後殆ど衰亡に歸したりき。

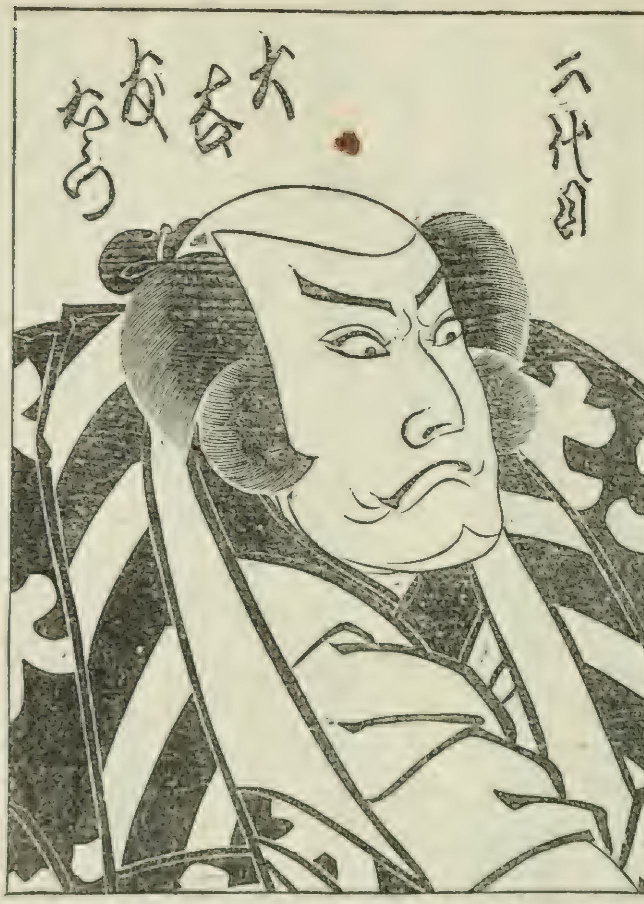
二世大谷友右衛門（明石屋此友、明和六―天保元）は始め谷村楯八の門人にして、大阪の竹田芝居に出で、虎藏といひ、寛政四年冬、江戸へ下り、同七年（廿七歳）十一月、桐座に於て大谷家を襲ぎ、初めて友右衛門と稱せり。蓋し初世友右衛門は初世廣次の門下たりし大谷廣八の弟子にして、初め竹田友三郎といひ、中ごろ大谷友三郎と改め、終に友右衛門と稱し、實惡を專門として、天明元年、卅八歳にて江戸に歿しき。二世友右衛門は其の名跡を受けしなり。寛政十一年十一月、澤村宗十郎と共に再び大阪へ歸り、中座の「鉢木」に佐野源藤太に扮し、此れより次第に聲名を高めしが、享和二年、同座にて「菊水卷」に奴歩藏、「水滸傳」に小倉傳右衛門、「伊賀越」に武助と林左衛門にいづれも好評を得、斯くて文化二年十一月、七年ぶりに江戸の中村座へ下りき。文化五年十一月、一旦西歸し、同九年夏、江戸へ下りて森田座へ出でしが、秋は大阪へ歸り、是れより京阪の舞臺を往來し、往々地方へも巡業せり。文政八年（五十七歳）正月、始めて「上上吉」に上り、文政十一年、「功上上吉」、翌十二年、「功上上吉」に進み、天保元年春、大阪の中座にて、「艶書合」に加藤正清、百姓權兵衛、天元居士、「艶仲町」に有松典膳に扮せしが、急に病に罹り、三月廿四日に歿せりき。歳六十二。

彼れの長所は、初世と同く實惡もしくは敵役にありき。文化三年の「役者大極丸」に彼れを評して曰く、

敵役ながら、顏付に愛もあつて、口跡の調子はよく、仕内は花やかにて、申分はないが、男の小兵なが殘念な事じやぞ。

而も立廻を巧みにし、又所作をも能くせり。文化二年の「役者正札附」には曰く。

奥山(淺尾爲十郎)の若ざかりの時分のおかしみの薄いのを見るやうで、氣轉よい顏の仕出しぢや。…(但し)實惡にかけては今少し



二世友右衛門の「重太郎純基」(「似顏大全」より)

小兵にて小手がきゝ過ぎて、どつしりとせいで殘念に存ずる。…… 位事にもそつと人品あらば則上もない事ながら、それぼかりが殘念に存ずる。

尚ほ彼れには餘りに「愛(嬌)ありて憎みなし」とは評書の言ふ所にして、即ち矮少と技巧と且つ品位に乏しくて愛嬌の多かりし事は、彼れをして、大惡漢大奸物、に扮するに不適當たらしめ、例へば、「盛衰記」の平治、「伊達」の鬼貫、「白石噺」の志賀團七、「非人仇討」の甚六、「夏祭」の義平次、「出村玉屋」の鵜飼九十郎の如き、平敵に於て最も成功したりき。同時に「盛衰記」の權四郎の如き親仁方、「近江源氏」の和田兵衛、「隅田川」の道具屋甚三、「鎌倉山」の勇助の如き荒事もしくは實事にも當りを取りたり。晩年には其の音調の蹩躄

なりしといふ難ありき。

三世友右衛門の名は京阪に於て嵐舎丸によりて襲がれしが、甚だ著名ならず。而も同時に江戸にて二世の弟子萬作も亦友右衛門の名を襲けり。假りに後者を四世となす。次ぎの時代の名優なりき。

坂東重太郎（鴫田屋岩子、後に賤獅。明和六―天保十一）は大阪幕下の力士江戸崎小三郎の子にして、幼時より坂東岩五郎に養はれ、天明年中、角丸芝居へ娘方として出でしを其の初舞臺とし、寛政四年（廿四歳）春、中座へ若女方として出でしを大劇場出勤の最初とす。同年冬、立役に轉じて、同座の「忠臣二葉藏」に足利義尚に扮し、翌五年春より同座の座元たること三年。同六年、「五大力」に千島萬太郎に扮し、同八年、角座の「伊勢音頭」に矢田萬次郎、「安榮錄」に三好要之助、翌九年、「布引」に多田藏人、「雁金小紋」に布袋市右衛門と山川屋權六、同十年、「彦山」に絹川彌三郎、同十一年、中座の「柱礎曆」に八丁礫喜平次、「隅田春」に金屋金五郎と長吉、「嫁威谷」に蒲生結城之助と丹波屋重三郎と百姓峰吉、これを出世の始めとして、角座の「忠臣藏」に勘平を勤めて大當りを取り、爾來、立役の「上上吉」まで進みしが、享和元年（三十三歳）四月、竹田芝居へ出で、是れより専ら中芝居を勤めて、文化四年、若太夫芝居にて金子の手代藤兵衛に扮して大喝采を博し、又竹田芝居にて「先代萩」の政岡と三田平に大當りを取り、其の他、團七茂兵衛、小栗栖十兵衛、赤根半七、呉服屋十兵衛、筑紫權六、猫間新太郎、福岡貢、里見伊助、小鮒源五郎、淺川內藏之助、猿廻し與次

郎、座頭慶政、又女方として、重の井、政岡、女賊お才、お初、板額、袖萩、お辻、等其の當り藝なりき。文化九年四月、江戸森田座へ現はれしが、六月に至り歸阪し、更らに同十四年(五十歳)三月も江戸へ下りて



重太郎の「猿廻與次郎」(「似顔大全」より)

市村座に出で秋に至り西歸して、同年十一月、京都の北側芝居へ現はれ、此れを大劇場へ復歸の最初として、文政二年正月、大阪の中座に二世吉三郎と一座し、「花都遊」に、三浦常陸、村川兵藏、山田軍助の三役に扮し、以後、二世璃寛と始終座を同うせり。文政七年正月より、「上上吉」に上り、同年八月、中座の「伊勢物語」に小よしを勤め、翌八年冬より、改名して壽太郎といひ、同十年正月、「至上上吉」に進められき。同十二年、「薄雪」に腰元籬と團九郎、天保二年、「繁夜話」に奴鳴平、翌三年、角座の「妹背山」に定香、など孰れも大當りを取り、此の後老衰して當り藝は無かりしも、劇壇の古老として尚ばれき。

天保十一年、中座の「双蝶々」に十次兵衞、切に猿廻の與次郎を出し、興行半ばにして病の爲め舞臺を退き、十月、更に大西芝居にて、「妹背山」に定香と入鹿に扮せしが、これを最後の藝として、同年十二月廿四日、七十二歳にして歿せり。

重太郎は容貌と音調にすぐれたりといふ。三世吉三郎の談話に、

昔も今も、上使に出て上使の趣を承れと言つても、何の爲に來しか、見物に分り、舞臺の人にも分るやうにいふ人稀なり。坂東壽三郎の調子にては、何程長き事にも一々分りし。（「名優言行錄」）

彼れが最初女方を專門とし、中ごろ立役に轉せし事は前に述べし如くなるが、寛政九年の「役者渡初」に曰く、

去とはきれいな男ぶりゆゑ、やつし形にはよい仕出しなれど、とかく立役の方がお好きと見えますぞ。

又寛政十三年の「役者太功記」には曰く、

由男（中山文七）以來のさつくりしたやつし……もたれげなく、さつく〳〵と由男のいき込あれど、とかく顏色に肝癪が起つてあるやうで、いつでも腹の立つやうなるもわるし。

然れば彼れは和事のみに滿足せずして、捌役、辛抱役を始めとし、實惡又は女方をも兼ねて、此等の孰れもに成功せるは、前に擧げたる當り藝の種目によりて知るべし。要するに、彼れは三世歌右衞門の藝風が多方面なりしが如く多方面なりしなり。只中ごろ久しく大劇場を退きて中芝居と旅興行とに在りし

爲め、其の藝に臭みあり且つ、「口跡に品なく」、「眼（睨み）が利かぬ」弊ありきといふ。

市川鰕十郎（播磨屋新升、安永六―文政十）は四世團藏の門人にして、幼名を市藏といひ、寛政元年（十三歳）六月、大阪の北新地芝居の首振に座元たりしを初舞臺とし、「布引」に藏人行綱、「靑柳硯」に漣軍太、「廿四孝」に景勝、「千兩幟」に鐵が岳に扮し、特に鐵が岳の好評なりしかば、後年必ず實惡としての名優たらん事を豫想せられきといふ。同年冬、稲荷の子供芝居へ現はれて立役を勤め、此れより次第に昇進して、同十一年（廿三歳）冬、始めて中座へ出で、「信仰記」に新作となり、此れを大劇場出勤の最初として、始終、師團藏に隨ひ、「薄雪」の妻平と國俊、「布引」の行綱、「鬼一」の智惠內、「千本櫻」の梶原、「廿四孝」の慈悲藏、「五山桐」の久次等に當りを取りしが、文化五年（三十二歳）、中座の「八陣」に隼人之助の役なりしを、師團藏急病の爲め、代りて其の正清の役を勤め、此れ實に彼れが出世藝たりき。

翌六年、堀江芝居、「在原系圖」の蘭平を名殘として江戸の中村座へ下り、專ら實惡を勤めて好評を得、同八年、森田座にて「忠臣藏」の七役（師直、由良之助、勘平、定九郎、與一兵衛、本藏、義平）に大當を取り、同十年正月、始めて實惡の「上上吉」に進みき。同十二年九月、三世歌右衛門の紹介によりて七世團十郎の弟子となり、市藏を改めて始めて鰕十郎と稱し、同年冬、七年ぶりに歌右衛門と共に歸阪して、角座に出で、「忠臣講釋」に九太夫、五郎太、宅兵衛、「妹背山」に鱶七、十三年春、「佐野船橋」に三浦荒次郎、次いで

堀江芝居に「忠臣藏」の七役、冬、中座に二世吉三郎と一座し、翌文政元年春、角座にて「加賀見山」に長玄と佐藤定七、同三年、同座にて、「花大樹」に山口九郎次郎に扮し、此れより再び江戸へ下りしが、同五年春、大阪の中座に上り、「染分總」に齋藤內藏之助、山形屋義平、關の萬兵衛、「水滸傳」に毛剃九右衛門、同六年春、角座にて「倭莊子」に和田雷八、「忠臣藏」に七役（歌右衛門、團藏と共に）、「崇禪寺馬場」に生田傳八郎、「夏祭」に德兵衛と義平次、「伊賀越」に又五郎に扮し、同七年正月より「至上上吉」に上れり。同年、同座にて「廓大門」に伊勢新九郎と非人丸鐵、「菅原」に松王と輝國、「救入濱」に濱地源左衛門と獄門庄兵衛、同八年、同座にて「百萬國」に鳥井又助と鹿の子勘兵衛、「腰越狀」（歌右衛門一世一代）に泉三郎、「彥山」に六助、「一谷」に彌陀六、「隅田春」に梅堀由兵衛、「龜山」に赤堀水右衛門、「廿四孝」に横藏、同九年、京都東芝居へ現はれ、秋、大阪の中座にて「極彩色」に藤兵衛と喧嘩屋五郎右衛門、「躄仇討」に瀧口上野、「五大力」に三五兵衛、同十年、同座にて「遊山櫻」に曾呂利新作と小西如淸（此の興行中類燒）、京都東芝居にて「拳褌」に典藏、次いで大阪の中座に同上、及び「棧物語」に强盜丹石と浮洲の岩松、「八百屋」に老母に扮せしが、此を終生の名殘として、同年七月十六日、五十一歲にして病死せり。

鰕十郎は、容姿と體格と音調と三拍子揃ひたる役者なりきといふ。師團藏の藝風を承けて、最初は立役を專門とし、特に團藏の當り藝を繰返して好評なりしが、已れより年輩の老けたる役がよしと言はれ、

又和かみに乏しと言はれ、其の最初の江戸下りより寧ろ實惡を本領とするに至れり。文政十一年の「役者三都鑑」に曰く、



鰕十郎の「佐藤虎之助」(「似顔大全」より)

數々の狂言の内にも、伊賀越の又五郎は故人奥山(爲十郎)の上には立れず、赤堀水右衛門は山村(儀右衛門)より上なしと昔故人の當り狂言は見くらべになるゆゑ左程に思ひませぬが、三浦荒次郎の役は、故人山友(山村友右衛門)丈、三德(三桝德次郎)丈の致されしより拔群によう厶りました。又山口九郎次郎、嶋川太兵衛、生田傳八、此三つ四つの役は當時外に仕手は厶りませぬ。此の役で見た時には極の字をつけてもおしい事はなかつた。

彼れは「鎌倉山」の三浦荒次郎を、是まで赤面なりしを、大名の若殿づくり、色白く上品にせしといひ、又「信仰記」の山口九郎次郎は、それまでは剃さげ鬢の赤面なりしを蟲でんの白つくりにして、以後誰人も此の型を用ふるに至りしといふ。彼れは又立廻りを巧みにし、且つ早變りに長じ

て、定九郎、與一兵衛、勘平の早變りの如き、師團藏よりも神速なりと稱せられき。

二世額十郎の名は其の子助藏によりて襲がれしが、文政十二年に早世し、更に門人瀧十郎、三世額十郎なりしが、甚だ著名ならざりき。

實川額十郎（井筒屋延若、天明二—天保六）は淺尾工左衛門の門人にして、八百藏といひ、其の後、大阪濱芝居の大立者中村仲藏の門に入りて姓を中村と改めしが、文化六年（廿八歳）春、更に淺尾勇次郎と改名して角座へ出で、同年冬、江戸の森田座へ下り、留まること八年にして、文政二年春、大阪へ歸り、同く角座に現はれ、同五月、中座にて「盛衰記」に延壽、「天網島」に治兵衛、秋、「遠江潟」に月本圓秋、これに大當りを取り、同五年、三世歌右衛門に勸められて始めて額十郎と改名し、勇次郎の名を養子かなめに讓りき。文政十年正月、「上上吉」に進み、天保二年、更に「至上上吉」に昇り、天保四年春、中座にて始めて姓を實川と改めて座頭たりき。同六年三月、同座にて「菅原」の菅丞相と源藏に好評を博し、次いで名古屋へ下り、七月より角座へ出でゝ、九月狂言の「黃鳥墳」に淀與三右衛門、「紙治」に孫右衛門に扮せしが、十月の初めより病に臥して終に十一月四日に歿せり。歳五十四。

額十郎は男ぶり綺麗にして、其の藝も多方面なりき。文化十年の「役者出情噺」に曰く、

兎も角も立役、あら事、ぬれ事、女がた、ちいばゞの所作事まで勤めらるゝは德用向の第一番。

而も彼れの缺點は淋くて花に乏かりし事にて、此等の中最も武道和實を得意とし、主なる當藝は、「先代萩」の賴兼と秋塚帶刀、「五山桐」の久次、「鎌腹」の彌作、「高音鼓」の富士右衛門、「拳褌」の山田幸十郎と泉之助、「八百屋」の半兵衛、「猿廻」の與次郎、「忠臣講釋」の五郎太、「忠臣藏」の本藏と判官、「秋葉權現」の玉島逸當、「一谷」の六彌太、「鉢木」の源左衛門、「薄雪」の民部、「伊賀越」の譽田內記、「曾我」の大藤內、「信仰記」の春永、「五斗」の泉三郎、「紙治」の孫右衛門、「布引」の木曾義賢、「妹背山」の芝六、「品評林」の佐々木藏人、等なりき。



顏十郎の「且元」（「似顏大全」より）

彼れが京都にて二世璃寛と一座せし時、興行主は「堀川」を出して、璃寛に與次郎を、彼れに傳兵衛を勤めさせんと思ひしを、彼れは故と先潜りして、與次郎は承知せしが傳兵衛は誰がするを問ひしかば、興行主も止むを得ず、與次郎を彼れに勤めさせ、在來とは變りたる工夫にて大當を

取り、大阪にありし三世歌右衛門より祝物を贈りしといふ。彼れも亦皮肉なる人なりしなり。尚ほ彼れは酒癖悪かりしといふ。彼れが養子かなめの二世額十郎たりし事は既に前に述べしが、別に養子延三郎あり、次ぎの時代の名優たりき。

●●●●●市川助壽郎（大和屋素桐、天明三―萬延元）は始め三世大五郎の弟子にして三桝米五郎といひ、大阪座摩の宮芝居を勤め、中ごろ大太郎と改め、濱芝居にて久しく修業せしが、後に富士松三十郎の名を襲ぎて大劇場へ現はれたり。文政六年（四十一歳）、初世鰕十郎の弟子となりて市川助十郎と改め、師と座を同うせしが、更に四世團藏と一座して武道事の立者となり、天保六年（五十三歳）春、角座にて「青陽鵯」に名主藤右衛門、「伊賀越」に和田靱負、「千兩幟」に北野屋七兵衛、同九年、同座にて三世歌右衛門の「石切梶原」に六郎大夫、孰れも好評を博しき。此れを彼れが盛時として、以後は筑後座に座頭を勤め、安政六年（七十七歳）の春、中座にて「阿國歌舞伎」に片岡幸十郎、「三國一」に松並靱負、これを一世一代とせしが、三月、更に「菅原」の覺壽に扮し、此を最終の舞臺として退隱し、翌萬延元年九月十三日に七十八歳にして歿しき。

彼れは老實の役を得意とし、石井兵衛、鮓屋彌左衛門、高市武右衛門、小山田幸内、土佐將監、吉岡太郎右衛門、犬塚番作、鬼王新左衛門、福島屋清兵衛、門番松兵衛、加古川本藏、鍛冶正宗、監物太郎、伊達與三兵衛、などの如きは無類と稱せられたり。彼れは亦資産を有し、其の子は俳優たらしめず、大阪戎橋のほと

りに戎湯といふ浴場を營ましめしといふ。

三世小川吉太郎（加賀屋英子、天）（明五—嘉永四）は三世歌右衞門の門人にして、始め中村元三郎といひ、文化二年（廿一歳）正月、京都の北側芝居へ出でしが、三月、小川の名を襲ぎて、歌右衞門と共に名古屋に下りき。同四年冬より大阪の中座の座元となり、翌五年冬、始めて江戸に下り、中村座に出でしが、六年冬、西歸して、是れより京阪の舞臺を往來し、又屢地方へも出でたりき。天保十年（五十五歳）十一月、再び江戸へ下りて市村座へ現れしも、此の頃は既に老衰の域に入り、次いで嘉永元年、「功上上吉」に進み、同四年八月十八日、六十七歳にして大阪に死せりき。

彼れは初世と同くやつし方を專門として、若殿もしくは若旦那の役を能くせると共に、「忠臣藏」の伊吾、「妹背山」のね太郎の如き阿房の役をも得意とせり。天保七年の「役者手柄競」に彼れの鹽冶判官を評して曰く、

お持前の口跡がびつくりしたように言はれるのと、そわ〳〵せられ、とんと大名のよふには見えなんだ。

此れやつし方としても彼れの病弊なりき。又往々、「隅田春」の小梅、「桂川」のお絹の如き世話女房に扮せしと共に、「曾我」の滿江、「時賴記」の母眞弓の如き老女役にも當りを取りしが、其の老衰せる晩年にはやつし方を捨てゝ花車方又は親仁方に轉じ、「品評林」の山左衞門、「桂川」の半齋、もしくは「廿四孝」

の勸助母、「安達原」の濱夕、等を勤めて好評を得たりき。

●●●●●二世嵐璃寛（伊丹屋、天明八―天保八）は大阪新靭町の出生にして、二世吉三郎の兄猪三郎の門に入り、徳三郎といひ、享和元年（十四歳）、竹田芝居へ出でしを其の初舞臺とす。文化五年（廿一歳）、座摩の子供芝居に現はれ、翌六年より、京都の宮芝居に出でゝ修練の功を積み、同十二年、大阪の竹田芝居へ下りて、「八陣」の正清、「伊賀越」の十兵衞に名を揚げ、翌十三年、同座にて新作「崇禪寺馬場」に遠城次左衞門と兒富丸とに大當を取りたり。此の後も専ら中芝居に出勤し、文政二年（三十二歳）、徳の字を諱みて壽三郎と改めしが、翌三年五月、更に舊名に復し、同十一月、江戸の中村座へ下り、實惡の地位に居れり。文政四年、師の弟吉三郎が病死せしかば、翌五年九月、大阪へ歸りて、其の橘三郎の名を襲ぎ、中座にて追善興行「禰物語」に頼政、「菅原」に櫻丸と宿禰太郎と源藏と、同七年、同座にて「朝顔日記」の駒澤次郎左衞門、「伊勢物語」の紀有常に扮し、同九年、堀江芝居にて、「盛衰記」の平次と松右衞門、角座にて「伊賀越」の幸兵衞、同十年、中座にて、「拳褌」の傳七、「阿波鳴戸」の十郎兵衞、先師七回忌「莩源氏」に教經と熊坂、「千兩幟」に千羽川、十一年、角座にて、「大搭宮」の太郎左衞門、「絹川堤」の累、等いづれも喝采を博し、且つ同年、始めて師の俳號璃寛を襲ぎて、其の藝名とし、「加賀見山」の太守と又助との早變りを勤め、翌十二年（四十二歳）春、始めて「上上吉」に進み、中座にて、「薄雪」の妻平、國俊、伊賀守、五平次の四役を角座と競爭に勤め、

次いで京都の東芝居にて始めて三世歌右衛門と一座し、「白石噺」の谷五郎に扮して明神の森の出合に大當りを取り、更に大阪の角座にて之を繰返し、「連歌評判」の藤吉と共に大出來と稱せられき。天保元年春、同座にて「雪月花」に久次、岩木藤馬、高木次郎太夫、小紺源五郎を勤め、次いで伊勢へ下りしが、秋、中座に出で、「彥山」に久吉と友平、「恨鮫鞘」に八郎兵衛、「阿漕浦」に平次、九月、角座にて「大内鑑」に與勘平、「油屋」にお染、翌二年春、同座にて「廓亭環」に尾形力丸と「隅田川」に法界坊に扮し、同三年春、「至上上吉」に進み、筑後芝居にて宮本無三四、秋、中座にて「殿下茶屋」に幸右衛門と伊織、同四年春、同座にて小栗判官と浪七、「川中島」に勘助と輝虎、五月、角座にて和藤内と雁金文七、冬、中座にて「大經師」に茂兵衛と「弓張月」に爲朝、同五年、同座にて「染分總」に馬切三吉、「出入湊」に獄門庄兵衛と奴小萬、同六年、同座にて「英双紙」に吉川左衛門とげら松但馬、七月、「狹間合戰」に久吉、「双紋」に權八と鎗持定助、「忠臣講釋」に判官と彌七、同七年、同座にて、「八犬傳」に信乃と金鞠大助、「鵺物語」に賴政と「油商人」に與兵衛、京都の南側芝居に「八陣」の正淸、同八年、大阪の角座にて、「小倉色紙」に笹原隼人、三吉狐、船頭小平次、五月、筑後芝居にて「利生記」に民谷源八、「戀湊」に出村新兵衛なりしが、興行中に發病して、六月十三日、五十歳にて歿しき。

璃寛は容姿にすぐれしかど、小柄にて眼大きく、其の面影の三世歌右衛門に似て、德三郎時代には「日德」

といふ綽名ありきといふ。其の江戸に在りし時は、頻りに歌右衛門の藝風を眞似て好評を博し、次いで歸阪してよりは、専ら二世吉三郎の科白を模倣せしが、晩年には終に一家の風を成せりき。其の得意の藝は二世吉三郎と同く色立役にして、和事と實事とを能くし、又力士に扮して成功し、「千兩幟」の岩川の如きは終生のうち屡之れを舞臺に繰返せしが、別に實惡と平敵とも兼ね、尚ほ「大塔宮」の齋藤太郎左衛門、「鎌倉山」の佐野兵衛の如き老人役、及び「加賀見山」のお初、「油屋」のお染、「出入湊」の小萬の如き女方に扮して好評を得たり。斯くの如く其の多方面なりし事は、吉三郎よりも歌右衛門に近かりしが、只歌右衛門の如く所作事には堪能ならずして、専ら地藝を事とせりき。文政四年の「役者甚考記」に彼れが江戸へ上りし時の藝風を評して曰く、



二世璃寛の「獄門庄兵衛」（「似顔大全」より）

一體器用肌にて惣身小きり目に動きまするゆゑ、仕過る場もござりざう。

此れ彼れが壯時の缺點なりしも、晩年には漸く此の弊を脫せしならん。

彼れが門下より出でゝ著名なりしもの三世璃寛と璃珏とあり、共に次ぎの時代の名優なりき。

第十二章　三世坂東彦三郎と五世松本幸四郎

三世坂東彦三郎――舞臺上の閱歷――彼れの藝風――由良之助の型――菅丞相の型――彼れの性癖

五世松本幸四郎――舞臺上の經歷――其の藝風――仲藏との比較――寫實劇との一致――凄き「睨み」――其の氣質

文化文政時代に於て江戶の劇壇に最も先輩たりしを三世坂東彦三郎(萬屋樂善、寶曆四―文政十一)とす。彼れは八世市村羽左衞門の末子にして、幼名を吉五郞といひ、寶曆九年、初めて舞臺に出で、明和七年(十七歲)、尾上菊五郞の子分となり、始めて彦三郞の名を襲ぎたり。蓋し菊五郞が初世彦三郞の子分たりし緣故により、其の名跡を保管せるを、改めて彼れに讓りしなり。安永八年(廿六歲)冬、市村座にて始めて若衆方より立役に轉じ、寬政六年(四十一歲)、河原崎座にて「曾我」の工藤、「忠臣藏」の本藏に當りを取り、翌七年、都座にて、「忠臣藏」の由良之助、「一谷」の忠度、「大內鑑」の道滿、八年、同座にて、「信仰記」に春永、「菅原」に菅丞相、「戀飛脚」に孫右衞門、同十一月、桐座に轉じて「松行平」に高松左衞門と磯馴松兵衞、等い

づれも喝采を博し、翌九年より始めて「上上吉」の位に進みき。以後舞臺上の閲歷は、

寬政九年正月、「曾我門松」に工藤、「青樓詞」に佐野次郎左衞門。二月、「菊水卷」に石堂勘解由。四月、「時雨櫻」に大炊之助。五月、「雁金五紋」に安平兵衞。七月、「秋狂言」に長尾內藏之助。九月、「菅原」に覺壽と源藏。十一月、中村座、「櫟錦木」に義家、和田左衞門、獵師文次。

寬政十年三月、「驪曾我」に鬼王。四月、「妹背山」に大判事。七月、「信田出來秋」に定家卿と百姓萬作。十一月、森田座、「太平記」に新田義貞、小山田太郎、畑六郎左衞門。

寬政十一年正月、「彥山」に木村帶刀。三月、「伊達衣裳」に賴兼と菅小助。五月、「菅原」に菅丞相と源藏。九月、「忠臣藏」に由良之助と勘平、「三度笠」に忠兵衞と孫右衞門。十一月、市村座、「雪世界」に青砥五郎（暫）、時賴、鹿島の事觸（所作）。

此の「菅原」の時、菅丞相の役について、四世團藏と隙を生ぜし事は既に團藏の條下にいへり。

寬政十二年正月、「譽曾我」に團三郎。二月、「五山桐」に久吉と此村大炊之助、「桂川」に幸之進、「蜘糸」の所作。四月、「男結」に仁木多門正と大馬主殿。五月、「盛衰記」に源太。七月、「忠臣藏」に由良之助と勘平。八月、「十帖源氏」に物草太郎と名古屋山三。九月、「菅原」に菅丞相と櫻丸。十一月、河原崎座、「戻橋」に渡邊綱と白拍子小蝶（所作）。

享和元年正月、「初寅曾我」に工藤、重忠、十郎、小姓吉三。三月、「江の島」に金かんざしの甚五郎。五月、「吉岡染」に富士常悅・三浦藏人、百姓三左衞門。七月、「妹背山」に鎌足、淡海、大判事。九月、「忠臣藏」に彌次兵衞と本藏。十一月、中村座、「伊達道具」に義經、大工彥惣、知盛幽魂・義時。

享和二年正月、「陽向曾我」に十郎と小藤太、「菅原」に菅丞相、白太夫、源藏。三月、「助六」に白酒賣。四月、「袷小袖」に中草庵淸水。六月、「戀女房」に逸平と左內、「姬小松」に俊寬。九月、「伊賀越」に丹右衞門、武助、內記。十一月、河原崎座、「千本櫻」に七役(川越太郞、銀平、維盛、覺範、忠信、源九郞狐、梶原。)

享和三年正月、「音羽瀧」に淸水淸玄と白拍子櫻木(「道成寺」の所作)、「琴責」に重忠。二月、「姬小松」に俊寬、「伊勢音頭」に貢。九月、市村座、「月名殘」(淨瑠璃)に木賊苅の翁と手白猿、「忠臣藏」に由良之助。十一月、大阪、中座、「色弓取」の所作事(賴政、陸奧道者、樂人、鵺)。

此の時、彼れは中村大吉と共に初めて西上せるなりき。

文化元年春、「菅原」に菅丞相、「妹背山」に大判事と求女、「姬小松」に俊寬、「風俗文選」に獅子堂多門と山陰生駒之助、切に龍王の所作事。それより伊勢尾張に下る。十一月、京都、南側芝居、「色弓取」の所作事、「菅原」に菅丞相、白太夫、源藏。

翌年より「至上上吉」の位に進みき。(五十二歲)

文化二年正月、「忠臣藏」に由良之助と若狹之助、「千本櫻」に忠信。三月、「新田系圖」に幸內、「伊勢音頭」に貢、「薄雪」に民部、「袖鏡」に淸玄、「道成寺」の所作。九月、北側芝居、「白石噺」に常悅、「鳰湖」の所作事(中將雅世、木賊苅の翁、所化僧、手白猿)。十一月、大阪、中座、「白石噺」に常悅と惣六。京都、南側芝居、「千本櫻」に銀平。

是れより角座の「土蜘」の所作を名殘として江戶に歸りき。

文化三年十一月、市村座、「平家物語」に梶原。

文化四年三月、「舗代曾我」に工藤、「元吉原」に羅屋次郎左衛門。五月、「岸柳島」に武者之助。八月、「金龍山」に帶刀。九月、「桂川」に幸之進、「反魂香」に又平。十一月、中村座、「雪木下」に光秀。

文化五年正月、「妹背山」に大判事、入鹿、淡海。二月、「蓬萊曾我」に工藤、「伊勢音頭」に貢。三月、「韓譜」に粟津六郎左衛門。五月、「千本櫻」に義經。八月、「寬仇討」に九十九新左衛門、「磯馴松」に太郎七。八月、「菅原」に菅丞相と源藏。十月、「夕霧」に伊左衛門。十一月、市村座、「二代源氏」に鬼童丸、仲光、土蜘の精。

文化六年四月、「曾我籬」に朝比奈と田邊文太夫。八月、森田座、「千本櫻」に彌左衛門、「反魂香」に又平（大津繪の所作）。十一月、中村座、「奥州牧」に實方と三浦國妙。

文化七年正月、「御攝曾我」に工藤と稻谷半兵衛。三月、「五山桐」に久吉、「隅田春」に勘十郎、「時頼記」に時頼。五月、「相合袴」に一味齋と武者之助。六月、「戀飛脚」に孫右衛門。七月、「娘菅笠」に本多彌惣左衛門、「繪馬」の所作に戸隱の鬼女。九月、「伊達遊」に豆腐屋三郎兵衛。十一月、同座、「花黑主」に大伴山主。

文化八年正月、「鶴曾我」に重忠。三月、「沙石川」に千利休、「お染久松」に大村屋九八。五月、「佐野八橋」に秋田城之助と白妙大介。七月、「菅原」に菅丞相と白太夫、「忠臣藏」に由良之助、勘平母、若狹之助。九月、「枝鶴」（所作事）に惟茂、懸想文賣、不動明王。

此の「菅原」と「忠臣藏」とを名殘として、五十八歲にして江戸の舞臺を退き、次いで、翌文化九年十一月、歌右衛門と共に大阪の中座へ上り、「錦鶴翼袖」に關原與市、「松島八景」の所作、「忠臣藏」に判官と本藏、同十年春、「繁夜話」に向坂甚内と遠藤司之助、三月、「一谷」に六彌太と義經、「伊勢音頭」に藤浪左膳に扮

し。次いで京都に上り、「一谷」のほか、「夢鮫鞘」に矢島才兵衛に扮し、更に六月は歸阪して、中座にて、「大塔宮」に洞院左衛門と永井右馬之頭、「夢鮫鞘」に同上、「盛衰記」に源太と重忠、「街紅摺」に出石宅右衛門、更に一世一代として「菅原」に菅丞相と白太夫と源藏、及び「山王猿」の所作を演じ、十一月、京都の東芝居に轉じて、同く一世一代として「忠臣藏」に由良之助に扮し、黑谷に於て剃髮して江戸に歸り、白ら半草庵樂善と號し、本所の原庭に退隱して德本上人の弟子となり、「紙屑拾ひ芝居者入るべからず」といふ札を揭げて念佛三昧に老後を送りしが、文政十一年二月十八日、七十五歲にして歿しき。

●●●●●彼れの藝風は義父菊五郎と實父羽左衛門とを折衷し、其の長所は和實と武道とにありき。寬政二年の「役者紋選」に「薪水國」として彼れの少時を評して曰く、

此國元大國にて至て實體なる氣質、民俗律義なり。武士は其魂金鐵のごとし。今其風とは異にして花美あり。次第に國名出べき風なり。武士町人ともやさがた、女に慕はるゝ風あるなり。

此れ初世彥三郎の藝風が餘りに堅くるしかりしに反し、彼れは和らかみありしを賞せしなり。而して謂はゆる「場當りを好まず」又「コセつかぬ藝風」なりし事は初世と同じかりき。文化二年の「役者よし〳〵」に京都に於ける彼れが「新田系圖」の幸内を評して曰、

薪水丈の仕内は藝功より心持至て高上にて、一から十まで仕つめるといふ上方仕込とは大ひにちがひ……。

然れば、彼れが西上の最初は、大阪にても、京都にても、伊勢及び尾張にても好評ならざりしが、後漸く其の伎倆を認めらるるに至りしなり。



三世彦三郎の「小田春永」（「似顏大全」より）

彼れが三都いづれにも、一世一代の興行に「忠臣藏」と「菅原」とを出せる如く、其の最も得意とせるは由良之助と菅丞相となりき。左に文化元年、彼れが名古屋にて演せし由良之助の型を「役者正札附」より抄記して其の藝風の一斑を示さん。

衣裳などは格別の好もなく、鹽冶切腹の場へ駈付の場も、只さら〳〵と正本の通ないたされ、城渡の所、門外へ出る所、力彌を初め諸士歸り、切腹せんといふを留、右の人數を左右にわけ、とくと顏色に氣を付、命を捨るはまだ早い、と九寸五分を出し見せ、切先の血を手に受、舐仕廻ふて、御無念の血潮、ゆらの助臟腑にきつと守護いたすといふ白にて諸士を殘らず先へ歸し、一人殘り、じり〳〵と無念の顏色にて跡じさりにて花道へ行所はきつとこたへました。又々諸士かけ出るを押へし、づ〳〵とはいる幕は、

初めの諸士をしづめらるゝと同樣にてありしが、今少し仕樣の有りそうな者とも思はれました。……祇園町の段も、酒に醉たる趣、成ほど上品にて自身盃臺を枕にして寢入、平右衞門懷より願ひ書を出し、左の手にもたせ、ちよつとかくれると、其書付を持たなりにて寢返らるゝ思ひ入よく、それより騷ぎの跡、人形廻しをして九太夫にこけかゝり、刀を取ちがひてはいり、後に文をよむ所、少しく卷よみにして、柴垣の枝を折、燈籠をかき立、よむうちに端の方を取おとし、おかるの簪落る時、後手に卷き〳〵、破れに心付、そこらを見廻し、椽の下に心を付、おくへ入、後九太夫を引出し、扇にて二つ三つ打擲すると、三人の侍段々誤り入ましたといふ時、後向に成て九太夫をおさへ、燈籠をけし、九太夫に我羽織を着せ、きつう醉たそふな、といふて例のかも川のせりふにて幕。此間はちと水くさ過てこたへませなんだ。……市紅（四世團藏）がゆらの助を勤た時、去淨るり三絃の功者の仁がいひよしたが、九太夫をてうちやくする時は、正本の通、獅子身中の蟲、四十四の骨々もくだくる樣にあつた、といふせりふがなければ此忠臣藏の一體の趣意が立ぬとかいはれたが、成る程これは尤に存る。

又、同年、大阪にて演ぜし菅丞相の型を同書より抄記せんに、

江戸仕込のもやう取かへ、位官の姿やあるきぶり、何かちとはまりかねました……。源藏が清書をしたゝめ、机ながらに差し出す時、それなりに一覽したいものであつたが、清書を取上、證文か何ぞ見る樣な仕組であつたぞ。……此所などは古東芝（三五郎）が仕たのは七日物忌の間の衣裝の好みもよく、位あつて打上つた物で有た。……二段目、はぎの戸の馬、奥道子の聖廟の龍の文句の間は誰も少しはもやうを付てすれど、只淨るりの文句にて聞す計にて、何の仕内なく、ちとさびしかつた。……かりや姬に別れの時、黑ゐ船と庄兵衞とが出合の樣な身がまへをなすとも、まつすぐに歩行て心にうれひをふくみて行たいものともおもはれた。……天拜山

の後、口の間は少し仕組かはりて、配所の假殿に眠りゐて、天氣よきゆへ野がけに御供せんと白太夫が牛をひき、むかひに來る。誘はれて牛にのらずに安樂寺へ詣る好みはよいと申ました。…いかさま、よこのりに牛に乘て出るよりは、新しうて氣がかはつてよかつた。……時平がむほんの樣子をきゝて梅が枝を以て平馬にねらひ寄て打おとさす。只いかりのあまりに、何氣なく平馬が首にさはると打おとす物好は大にできました。いかりの所も、大ぜい相手にする所は梅王にさせて、すぐに天拜山にかけ登り、天帝へ祈誓をかけてせり上のまくは大いによかつた。

此の他、「忠臣藏」の本藏、「菅原」の源藏、「妹背山」の大判事、「姫小松」の俊寛の如き實事も彼れが當り藝なりしと共に、櫻丸、求女、源太、伊左衛門の如き和事にも成功せりき。只敵役と世話事とは彼れに適せざりしにや、文化四年、「雪木下」に光秀を實事の役として演じ又、同二年、「白石噺」の大黒屋惣六に扮せし時、故さら下袴を着して出でたりといふ。奸邪もしくは下賤の人に扮するには、餘りに容姿と風采とに優れしならん。又彼れは音調の低かりしといへば、其れも敵役もしくは世話事に適せざる一因なりしならん。

彼れは和實に於て初世菊五郎の藝風を祖述せると共に、所作事の方面には實父八世羽左衛門及び實兄九世羽左衛門の系統を引きて頗る堪能を以て稱せられ、特に「蜘糸」及び「娘道成寺」の如きは屢々舞臺に繰返しき。彼の「役者正札附」に始めて西上せる時の彼れが所作事を評して、

拍子事はきつい事で、よい〳〵といづかたでも評判よく、又ゆつたりした事も此上もなく、和らかみ有て、當時これほどの所作の自

由なるは外にないぞ〳〵。

といひ「役者よし〳〵」には其の「娘道成寺」を評して、

何はともあれ、初中後、所作の間幽玄にして、拍子を合す所きつと合して、其餘はゆるやかにせらるゝは、きつと見所ありて、男の身ぶりある所作もかろくして、一段々々の所作のかはりに面を切所も、和らかにのんびりとせらるゝは上手のしるしが見ゆる。

といひ、京阪の劇評家すら口を極めて賞揚せるを見ても、其の拔群の伎倆を知るべし。

彼れの性癖は「常に野卑なる事を好まず、畫をなし、茶事を好み」、又晩年舞臺を退きて佛門に歸依せるが如き、其の人格も凡俗を脱せしならん。

或る時、骨董家が日蓮の眞筆なりといふ髭題目の一軸を持來りしに、金五十兩にて買求め、朝暮信心等閑ならざりし。然るに四五日經て、檀那寺の住職と講中世話人が來り、彼の軸を見て、全く眞筆ならずと和尚の詞につき、されど半分も損なされなば不佞がはめる所あり、張り給はずや、と世話人がいひしに、何の答へなく、一軸をサツと裂て火鉢に投入れ、我が鬮ひな人に及ぼすを欲せず、故に火中せりといひし。（「歌舞伎新報」）

鎭信派の抹茶を能くし、諸方より正午の茶會に招かるゝに、朝のうち、用事ある人など來り、刻限の後れん事を恐れ、早朝より弟子の家に身を潜め、刻限には必ず出席せり。或諸侯の隱居（抱一上人）樂善の事を聞き、駕を枉げさせらるべき由仰せられしを、殊更に悦び、御同席申上げて席を汚さんも憚りありと、撰拔きたる藁莚を綿の如くに打和らげ、御座の蒲團となし、其外總て用意の行屆きしは眞の茶人も遠く及ばずと人々感じたりとぞ。（同上）

彼れは實子なく、四世彦三郎の名は其の養子によりて襲がれ、是れ亦次ぎの時代の名優なりき。

五世松本幸四郎（高麗屋錦升、明和元―天保九）は四世の實子にして、幼名を純藏といひ、明和七年（七歲）春、中村座の「傾曾我」に人形に扮せしを其の初舞臺とし、安永元年（九歲）、高麗藏と改め、安永七年（十五歲）、子役より若衆方となり、天明三年（二十歲）、始めて立役に轉じて「上上吉」の位に進み、寛政九年（三十四歲）、始めて「上上吉」に至れり。此の前後より**舞臺上の經歷**は

寛政八年三月、河原崎座、「忠臣講釋」に十太郎と勘平、「戀飛脚」に忠兵衛。五月、「水滸傳」に石川五右衛門と佐々木巖柳。秋、「彦山」に京極内匠。十一月、同座、「雪顔觀」に奴伊達平と遠藤盛遠、二番目に賴豪阿闍梨。

寛政九年正月、「和曾我」に五郎、人買惣太、辨長。三月、「助六」と「鳴神」。五月、「菖蒲帷子」に放駒長吉。七月、「蓮先魁」に光秀。九月、「お初天神」に德兵衛。十一月、中村座、「櫓錦木」に荒川太郎、鳥海彌三郎實は宗任。

寛政十年正月、「驪曾我」に工藤、二番目に茜屋半七。四月、「妹背山」に鱶七。五月、「染分繦」に八平次。七月、「信田出來秋」に平親王の靈と岩倉左膳實は千原左近、「大内鑑」にやかん平、「忠臣講釋」に勘平。十一月、同座、「花三升」に勝仁親王と畑惡八郎。

寛政十一年正月、「伊達根引」に仁木。三月、「助六」に髭意久。四月、「忠臣藏」に由良之助と師直。十一月、同座、「躬親船」に杣よき藏實は由利八郎、石山五郎太實は惡源太。

此の時より、彼れは評判記の「實惡」の部に載せられたり。

寛政十二年正月、「幡隨長兵衛」に權八。三月、「高尾達染」に男之助と高尾亡魂、「俊寛」に龜王丸、「非人仇討」に佐兵衛。五月、「千

本櫻」に權太。六月、「出世太平記」に光秀、「庚申若」に非人湯島の三吉。七月、「屏風浦」に堀内満太左衛門、八月、「蝶兎見島臺」に奴しづ平實は荒川藏人、二番目に佐野次郎左衛門。十一月、休む。

享和元年四月、市村座、「伊達曲輪入」に浮世戸平と仁木彈正。五月、「信仰記」に松永大膳、八月、「隠雁的」に菊島傳藏と栗潟當三次。九月、「堂島」に獄門庄兵衛と濱地源左衛門。十一月、同座「女將門」に將門と俵藤太。

此の時、彼れの實父幸四郎が男女川京十郎と改めしと共に、彼れは初めて幸四郎の名を襲ぎたりき。（三十八歳）

享和二年正月、「三國一」に工藤、望月左衛門、淺間左衛門。三月、「天滿宮」に荒藤太と時平、「江戸八景」に正木甚三郎。五月、「忠臣講釋」に師直、十太郎、勘平、「本朝丸」に半時九郎兵衛。秋、「戀白浪」に阿波十郎兵衛、「信田妻」に道滿。十一月、中村座、「蘆踏花」に山本勘助、二番目に岩淵與左衛門。

享和三年正月、「壽曾我」に團三郎と範頼、二番目に船橋次郎左衛門實は石田爲久。「仕形講釋」に浮世又平、不破伴左衛門、八百屋嘉十郎。四月、「博多今織」に玄海灘右衛門。七月、「菅原」に輝國と松王、「播州長兵衛」に長兵衛、「姫小松」に俊寛。十一月、市村座、「物見松」に熊坂長範、壬生の小猿婆實は信西後家、八丁礫喜平次。

此の時より「靈上上吉」に進みき。（四十歳）

文化元年正月、「梅松櫻」に五郎と閉坊、「四花菱」に白柄十左衛門、「四紅葉」に行司長之助。四月、「鏡中山」に八百屋中兵衛。五月、「白石噺」に常悦、正成實、惣六。九月、「漢人韓文」に典藏と幸十郎、「假番附」に[illegible]。十一月、同座、「雪故郷」に[illegible]

は秦大膳、定景、木樵志賀義實は大伴黒主。

文化二年二月、「曙曾我」に鬼王、赤澤十内、京の次郎、河津の木像、八幡三郎、「男鑑」に獄門庄兵衛。三月、「伊達姿」に仁木と浮世戸平。四月、「浮木龜山」に水右衛門と藤兵衛、「五雁金」に案の平兵衛。八月、「小室節」に鷺坂左内、丹波與作、高島主計頭、「菊嫁入」に獄門庄兵衛、「狹間合戰」に五右衛門と春永。十一月、同座、「吉野鐘」に宇都宮公綱、相模次郎、漁師綱七。

文化三年正月「魁曾我」に近江小藤太、由利八郎、景清、「五大力」に源五兵衛、「河原噂」に坊主小兵衛。四月、「忠臣藏」に定九郎と石堂。九月、「照手松」に横山次郎。九月、「花兄」に幡隨長兵衛、「繼縷錦」に春藤治郎左衛門。十一月、同座、「平家物語」に爲朝と蛇骨婆。

文化四年三月、「盤代曾我」に近江小藤太、「元吉原」に三浦屋次郎兵衛と夢の市郎兵衛。五月、「巖柳島」に巖柳。八月、「金龍山」に濱成、二番目に手代吉六。九月、「桂川」に針の惣兵衛。十一月、同座、「八島凱陣」に教經、「戻駕」に次郎作。

文化五年正月、「和曾我」に近江小藤太、「戀山崎」に放駒四郎兵衛。三月、「伊達競」に仁木彈正と絹川谷藏、二番目に紺屋徳兵衛。五月、「忠臣藏」に師直、平右衛門、義平、「廿四孝」に越名彈正と勘助。七月、「出世請狀」に光秀、「高麗屋縞」に福島屋清兵衛。九月、「御未刻太鼓」に礒貝實右衛門。十一月、同座、「二代源氏」に相馬良門と袴垂保輔。

文化六年四月、「曾我離」に近江小藤太、幡隨院長兵衛、藤川水右衛門、「端午帷子」に團七九郎兵衛。六月、「振袖始」に巨旦將來。六月、「大内鑑」に道滿、「八百屋お七」に土左衛門傳吉。「盛衰記」に松右衛門、「戀山開」に鵜飼九十郎。九月、「雲井白波」に良助と石川五右衛門。十一月、同座、「鳥羽戀塚」に遠藤盛遠、賴豪阿闍梨、駕屋太郎七實は長田太郎。

文化七年正月、「松曾我」に工藤、「解色糸」に半時次郎兵衛。三月、「五山桐」に五右衛門、「勝相撲」に下駄商入權助と坂間傳兵衛。五

月、「合法」に早枝大學之助と立場太平次。八月、「八幡祭」に駕舁甚兵衞。十一月、「四天王」に伊賀壽太郎、栗の木又次、良門、山賤峠藏寶は碓氷定光。

文化八年正月、「蓬萊曾我」に工藤、「昔八丈」に佃屋喜藏と鐵壁武兵衞。二月、「助六」に意休。三月、「水滸傳」に日本駄右衞門。五月、「伊賀越」に内記、母鳴見、又五郎、「仕入茜染」に松波九郎兵衞と田島帶刀。七月、「玉藻前」に紂王と九尾狐、「一寸德兵衞」に大島團七。九月、「千本櫻」に川越太郎と權太。十月、森田座、「江戸紫」に幡隨長兵衞。十一月、市村座、「嚴島」に守仁親王、長田太郎、壬生小猿、鑄掛師惡三郎兵衞、田原又太郎。

此の年、中村座に歌右衞門が下りて大入を取りしより、幸四郎の出勤せる市村座は大かた失敗に了れりといふ。而して翌九年の評判記に、「眞上上吉」に進められき。（四十九歳）

文化九年正月、「鶯曾我」に鬼王と小藤太、「色一座」に引窓與兵衞と栗實仁太。三月、「伊達染」に道哲と仁木。四月、「山姥」に碓井荒童。五月、「菖蒲太刀」に堀口源太左衞門と狩人五郎左衞門、「妹背山」に入鹿、「帶屋」に長右衞門。六月、「五雁」に幡隨長兵衞。九月、「菅原」に宿禰太郎と松王。十一月、森田座、「雪吉野」に勘解由左衞門と相模次郎。

文化十年正月、「伊達染」に工藤と道哲後に羽生村與右衞門、島田十三郎、男達庄兵衞、劔澤彈正。三月、「[illegible]」に石川五右衞門と浦辻艮助、「お染久松」（半四郎の七役）に鬼門喜兵衞と松本屋左四郎。五月、「曾我祭」に釣船三ぶと義平次。九月、「男一疋」に藤川水右衞門、船頭猪之助、幡隨長兵衞。十一月、市村座、「戻橋」に袴垂保輔、白川廣文、鬼同丸。（興行中頓挫）

文化十一年正月、森田座、「賑曾我」に工藤、「戀山崎」に引窓與兵衞と南方十次兵衞。三月、市村座、「隅田川」に粂平内、山田三郎、猿

島徳太。尾州へ下る。七月、市村座、「博多縞入船」に十木傳七と道者二合半藏、「と」に福島屋清兵衛と按摩長庵。「染纈」に座頭慶政實は八平次、左内、丹波與作。十一月、同座、「菅原」に希世、松王、白太夫實は天闌敬、山伏松月院。

文化十二年正月、「色三組」に古手屋八郎兵衛、「江戸絵風流」に關兵衛實は黒主。三月、「千本櫻」に銀平、覺範、權太、「色夜話」に山伏隨樂院。五月、河原崎座、「時今」に光秀、「杜若」に船橋次郎左衛門と願哲。甲州へ赴く。九月、「忠臣藏」に七役（師直、定九郎、女衒、小兵衛、了竹、彌次兵衛 石堂、本藏）。十一月、市村座、「四天王」に修行者實は相馬良門、花賣茨木婆。

文化十三年正月、「比翼蝶」に近江小藤太、寺西閑心坊、幡隨長兵衛、大工六三。三月、「菜種御供」に天闌敬、白太夫、漁師松兵衛、春藤玄蕃。四月、「貞婦噺」に大崎本立と島川太兵衛。五月、「忠臣藏」に師直、彌次兵衛、定九郎、義平、了竹。九月、「布引」に義賢と瀬尾、「筏重」に蜷結才三郎。十一月、同座、「不破名古屋」に國阿上人、伴左衛門 赤松彦次郎。

文化十四年三月、「頃櫻」に近江小藤太、黒船忠右衛門、高市數右衛門。四月、「安達原」に貞任、「青樓詞」に唐物屋小兵衛。五月、「菖蒲刀」に赤堀水右衛門。八月、「累扇子」に薩島宗観と羽生屋助四郎。九月、「月光秀」に光秀、「鳴戸白浪」に順禮お鶴婆。十一月、同座、「和合太平記」に勘解由左衛門、淵部伊賀守、鍋蒔掛厚九郎。十二月、「姫小松」に有王。

前年の「菜種御供」に、彼れは其の女婿たりし七世團十郎と隙を生じ、舞臺に顔を合はす場合には、互ひに代人を登場せしめしほどなりしが、此の十一月興行に和睦し、同時に、彼れが斡旋により、曾て不和なりし三津五郎と半四郎も七年ぶりに同座して舊交を溫めしかば、脚本の表題を「和合太平記」となしき。

此の時、狂歌師紀眞顔も石川六樹園と不和なること三年なりしを、蜀山人の仲裁によりて親睦し、此の

劇を見物したりといふ。

文化元年正月、「曲輪曾我」に工藤と景清、二番目に古鐵買の源兵衛。三月、「東山殿」に不破伴左衛門、「精進俎板」に幡隨長兵衛。五月、「妹背山」に入鹿、「雁金」に雷庄九郎。六月、森田座、「妹背山」に入鹿、「紫久松」に鬼薊清七と鬼門喜兵衛。七月、中村座、「大山」(改作)に京極内匠。八月、「伊達競」に仁木と豆腐屋三ぶ。九月、「忠臣講釋」に師直と九太夫。十一月、玉川座、「四天王」に卜部季武、大江山の童子、鐵門喜兵衛實は六郎公連、山姥、栗の木又次實は伊賀壽太郎。・「伊豆暦」に近江小藤太。

翌二年より「極上上吉」に進みき。(五十六歳)

文政二年正月、「惠方曾我」に梶原平三、鍛澤一角、鬼王、坊主願山後に喜藏院。三月、「千人禿」に三條吉次と長田太郎、「助六」に意休。四月、「お染久松」に松本屋佐四郎と鬼門喜兵衛。閏四月、「忠臣藏」に師直、本藏、了竹、安兵衛、平右衛門。五月、「加賀染」に長寺望月、鳥居又助、筑紫權六。七月、「山崎踊」に倉岡郷左衛門と駕 甚兵衛。十一月、河原崎座、「江戸花館」に刷物師五郎太實は別所小三郎、百姓出來作實は今川義元、蓮葉局、齋藤龍興。

文化三年正月、「曾我門松」に工藤、伊豆次郎、重忠、「似顔繪本」に鎌田又八と稻田幸藏、「戀江戸染」に赤澤十内。三月、「隅田川」に粂平内、猿島惣太 渡守松兵衛。四月、五世半四郎と名古屋に赴く。十月、大阪、中座、「千世松本」に光秀、「妹背門松」に松本屋佐四郎、鬼門喜兵衛、飴賣甚次郎兵衛。十二月、「雪長柄」に修行者覺範と鰕ざこの十。

これ彼れが最初の上阪なりき。

文政四年正月、「廓島臺」に猪環伴藏、雲龍法印 三好長慶。三月、「隅田川」に後藤兵衛、岩藤、猿島惣太、船頭次郎作、「卜し」に[illegible]。

京都、南側芝居、「鳥羽戀塚」に遠藤盛遠、切に長兵衛。同、北側芝居、「布引」に瀨尾、切に下駄商人權助と傳兵衛、「廓鴬」に次郎作（三世三津五郎の與四郎）。七月、大阪、中座、「伊達競」に仁木彈正と田宮右内、切に筑波茂右衛門、「檀風」に本間三郎。九月、「狹間合戰」に官兵衛と五右衛門、切に幡隨長兵衛、「お七」に赤澤十内と土左衛門傳吉。十一月、京都、南側芝居、「妹背山」に鱶七、「わし」に福清。「加賀見山」に岩藤、「お染」に佐四郎と喜兵衛。

此の時、お初は五世半四郎なりしが、恰も北側芝居にて、同く「加賀見山」を出せし三世三津五郎は、此の初日と同時に己が座を閉場したりといふ。

文政五年正月、紀伊へ下る。二月、江戸、河原崎座、「鶯曾我」に景清、幡隨長兵衛、平井村の權八、工藤、切に「助六」。四月、「愛宕連歌」に光秀。（劇場燒失）。五月、市村座、「千本櫻」に銀平、河越太郎、權太、「戀山開」に出村新兵衛。七月、河原崎座、「龜山鉾」に水右衛門、卜庵、八郎兵衛。九月、「東伽羅」に仁木彈正、榮御前、絹川金五郎實は百姓與右衛門、「猿廻」に輪違屋八郎兵衛。十一月、中村座、「東百官」に將門、袈裟太郎、金五郎法印、「酒呑童子」に酒呑童子。十二月、「姬小松」に有王。

文政六年正月、森田座、「初夢曾我」に工藤、近江小藤太、山崎與次兵衛、幻長五郎。三月、中村座、「伊達染」に賴兼と大場道益。同時、森田座、「由縁紋日」に絹川谷藏、鷲の長吉、福清。四月、中村座、「二代勝負附」に庄九郎。五月、「菅原」に松王と土師兵衛。八月、「いろは短歌」に師直、石堂、由良之助、才兵衛、杢右衛門。九月、「高麗屋縞」に水右衛門、長兵衛、船頭伊之助。十一月、同座、「還木曾」に能登守、角兵衛獅子、袈裟太郎、膏藥屋松尾屋甚七。

文政七年正月、「曾我扇」に工藤、大磯の虎、粉屋孫右衛門。三月、「扇白浪」に岸田局と此村常陸、「花曇」に出村新兵衛。五月、「合法」に大學之助と太平次。六月、河原崎座、「狹間合戰」に官兵衛と五右衛門、「伊達浴衣」に丹波屋與作實は江戸平。八月、中村座、「高麗

戀」に日本駄右衞門と荒五郎茂兵衞。九月、「彦山」に京極内匠、「山姥」に山賤峯藏、十一月、河原崎座、「惡源氏」に惡源太、熊坂長範、長田庄司。

文政八年正月、中村座、「曾我中村」に工藤、赤澤十內實は寺西閑心、唐犬權兵衞實は有竹丹助、幡隨長兵衞、「後日」に岩藤玄蕃、五郎、曾我祐信。四月、「五人男」に布袋市右衞門。六月、河原崎座、「布引」に瀨尾、「五大力」に源五兵衞。七月、中村座、「忠臣藏」に師直、定九郎、鄕右衞門、本藏、「四谷怪談」に直助權兵衞。九月、「時桔梗」に光秀、「五大力」に源五兵衞と彌助。十一月、市村座、「東內裡」に伊賀壽太郎、彌六兵衞、三田の仕實は將門。

文政九年三月、「雛行列」に泉小次郎、梅由兵衞、長吉、「戻駕」に次郎作。同時、中村座、「五山桐」に五右衞門。四月、同座、「二代男達」に寺西閑心。六月、河原崎座、「繿縷茶」に景清、「五大力」に彌助。八月、「忠臣藏」に師直、定九郎、源右衞門、由良之助。十一月、中村座、「還花」に伊賀平內左衞門、非人關次郎助實は爲朝。

翌春より「眞極上上吉」に進みき。（六十四歲）

文政十年正月、「曾我島臺」に鬼王庄助と日天清兵衞、「妹背山」に入鹿。三月、中村座、「伊達劇場」に小助、榮御前、仁木、「お染久松」に佐四郎と喜兵衞。五月、「狹間合戰」に五右衞門と官兵衞。九月、「四谷怪談」に神谷仁右衞門と直助權兵衞。十一月、同座、「艶色源氏」に覺範、長範、銀平、川越太郎。

文政十一年五月、「水滸傳」に股野五郎、赤澤甚內、近江小藤太、閉坊、工藤。三月、「江戸男組板」に幡隨長兵衞。五月、「忠臣藏」に九太夫、定九郎、喜內、「廓文章」に喜左衞門。七月、「戀女房」に伊達新左衞門、鷺坂左內、「姉念坂街」に香具屋彌兵衞、「吃又」に將監。九月、「合法」に大學之助と太平次。十一月、同座、「御伽平家」に宗清、納所辨長、由良八郎、景清。

文政十二年正月、「封文曾我」に所化辨長後に取小僧、工藤、金澤彈正、「隅田川」に景清。三月、「千本櫻」に川越太郎、權太、覺範。劇場燒失。八月、伊勢へ赴く。十一月、京都、北側芝居、「連歌評判」に內藏之助と宇野豐後守、「江戶仕入」に幡隨長兵衞。

此れ彼れが二度目の西上なりき。

天保元年正月、大阪、角座、「雪月花」に小西妻、三浦常陸、角屋虎松。三月、「忠臣藏」に師直、鄕右衞門、「助六」に意休。上京、「盛衰記」に義經、「先代萩」に仁木、「五大力」に三五兵衞。これより伊勢と越中へ下る。八月、江戶、河原崎座、「眞砂御攝」に堅田の小傳と三浦常陸、「大內鑑」に道滿。十一月、同座、「澁谷兵」に伊賀平內左衞門と長田太郎。

天保二年正月、「曾我本說」に古鐵買喜藏と工藤。三月、「五大力」に彌助。五月、「矢口渡」に竹澤監物。六月、「物草」に賴定、「伊勢音頭」に喜助。九月、「菅原」に土師兵衞と時平。十一月、同座、「巴藤浪」に袈裟太郎、上總五郎、和田義盛（菊之丞と三津五郎が病氣にて中途より休業せしため興行を中止す。）

天保三年正月、「青柳硯」に逸成。三月、「伊達競」に仁木。同時、市村座、「助六」に意休。五月、河原崎座、「黃鳥墳」に源太左衞門と多門之助。八月、市村座、「苅萱」に義弘。九月、「信田館」に浮島彈正。十一月、市村座、「碁盤忠信」に敎經・尾形三郎、盛綱、覺範、傘張法橋。

天保四年正月、「愛敬曾我」に工藤と中間權助。三月、「花吉原」に武智左馬五郎。五月、「三銀杏」に幡隨長兵衞。七月、「布引」に瀨尾、「五大力」に彌助。九月、「菜種御供」に紀長谷雄。十一月、同座、「譬高松」に三浦平太夫、強盜松夜叉、荒川左衞門。

翌年より「古今無類」の位に進みき。（七十一歲）

天保五年五月、「中村座、「忠臣藏」に鄕右衞門、「四谷怪談」に直助權兵衞。同時、森田座、「花菖蒲」に下駄齒入權助。九月、市村座、「菅原」に土師兵衞と時平。十一月、中村座、市村座、共に新築中にて休む。

天保六年正月、森田座、「曾我雁」に月見三五郎。三月、「丹前俠客」に粂平內左衞門と老女藤浪。三月、中村座、「近江源氏」に時政、「隅田川」に皮剝の惣太。八月、「天下茶屋」に東間三郎右衞門。九月、「白石噺」に惣六。十一月、同座、「菅原」に松王(一世一代)。

天保七年正月、「曾我類湊」に工藤、「伊達競」に仁木。三月、「千本櫻」に權太。五月、「戀山開」に茨木藤兵衞。七月、森田座、「四谷怪談」に直助權兵衞。九月、「名古屋帶」(鞘當)に長兵衞、「妹背山」に入鹿。十一月、同座、「勢源氏」に景淸。同時、市村座「淸和源氏」に右大辨師秋(だんまり)。

天保八年正月、中村座、「比翼結」に工藤と幡隨長兵衞。三月、「大江戶入船」に劍澤彈正。八月、「忠臣藏」に師直と彌次兵衞、「廿四孝」に齋藤道三。十一月、同座、「四天王顏鏡」に路次番長吉。同時、市村座、「三升角鍔」に丹波次郎と山賊斧右衞門。

天保九年正月、中村座、「曙曾我」に赤澤十內と工藤。三月、「詠千本」に岸田局。同時、森田座、「菅原」に時平。

此れを最後の舞臺として、五月十日歿せり。歲七十五。

幸四郎は鼻高く、眼の窪み且つ瞳の小さくて凄みありしを特色とせり。最初その實父と同く、やつし方を專門とせしが、自らは敵役たらんことを望み、常に先輩として信仰せる中村仲藏に此の事を計りしに、「今は早し、吾等思ふ所あれば、矢張濡事師に氣を入れて大事に勤めらるべし、吾等死後までは決して敵役をしようと思はれな」と戒められたりと。然るに、果して仲藏が死せし頃より、實惡に轉じて次第に

聲名を高め、其の藝風は四世團十郎と仲藏とを折衷せりと稱せられたり。既に仲藏の條下に引ける如く、壽阿彌が幸四郎を仲藏に比して、「錦升は初めは一途に秀鶴の眞似なり。晩年には隨念（四世團十郎）一



五世幸四郎の「石川五右衛門」（「俳優卅六歌撰」より）

途なり。秀鶴も隨念なれども、それは隨念の小水なる所を取り、錦升は隨念の大場なる所を取りたるなり」といひ、又天保五年の「役者三世相」にも彼れを仲藏と比較して、

秀鶴（仲藏）は成程錦升丈より、女形、所作など名人で、敵役も致されたが、惣體時代な役者で、錦升丈のやうに世話狂言は少しも出來ませぬ。さればこそ、千本櫻の權太などは惡評で御座ります。藝の筋は、今の役者にたとへていはば、芝翫（四世歌右衛門）丈の形でござり升。ことに秀鶴は五十たらずでなくなり升た。錦升丈は七十近くにて大丈夫。こゝを思へば、年數も長く修行だけに二枚がたも強うござります。

といひ、即ち彼れの藝は纎巧なり、此れの藝は豪放なり、彼れは技巧を弄せり、此れは自然を尙べり。又彼れは重くろしく、此れは輕く、隨つて仲藏は時代物を專らとせしに反し、幸四郎は世話事をも能くせ

しなり。傳へいふ。幸四郎は當時梨園の習慣たりし厚化粧を忌み、成るべく紅粉を薄く塗れりと。又、天保二年、其の時平に扮せる時の如き、在來の隈取を廢して只髯を生やせしのみなりきと。尙ほ寬政十年、彼の半七の道行を演せし時、其れまで道行の濡事師は、紅の股引を着け、足の甲ばかり白粉を塗り、草履を穿き、着物の後を摘まみて帶に挿み、又冠り物は紫か黑か淺黃かを例とせしに、彼は素足に白粉を塗り、普通に尻をからげ、白の晒手拭を頰冠りして花道より出でしかば、座員も見物も共に例なき事なりとて驚嘆し、終に此の型は一般に普及して、今日も道行の扮裝は之れを踏襲せりといひ、彼の「お染久松」の鬼門喜兵衞に扮せし時、ぼろ〳〵の衣裳を着せしといひ、化粧及び服裝の絢爛たるを悅ばず、力めて淡泊なるを欲し、而も同時に其の科白も亦誇大の弊を避けて成るべく自然なるを期せしなりき。

此の點に於て、彼れの藝は五世團藏の其と同く現代の寫實劇と相一致し、即ち最近の九世團十郞が「活歷」は一面に於て仲藏式の技巧主義を取れると共に、一面に於ては幸四郎の自然主義を祖述せるものなるのみならず、最近の五世菊五郎が得意とせし生世話事は、其の源流の三世菊五郎及び小團次より出でしと共に、三世菊五郎及び小團次の源流は此の幸四郎より出でたるなり。されば、彼れが劇壇に貢獻せる功績は其の四世團十郎及び秀鶴を折衷せし實惡よりも、寧ろ其の生世話事を創めし上に於て大なりと言ふべし。

彼れが終生の當藝のうち、仁木彈正、武智光秀、高師直、工藤祐經、松王丸、惡七兵衛景清、佐々木巖柳、石川五右衛門、髯意休、岸田局、岩藤の如きは謂はゆる實惡に屬するものなり。而して別に世話事の實惡には、いがみの權太、斧定九郎、鬼門喜兵衛、直助權兵衛、等あり、又同く世話事にして武道もしくは實事を兼ぬるものは、幡隨長兵衛、福島屋清兵衛、大黑屋惣六、等あり。更に和事にも、帶屋長右衛門、薩摩源五兵衛の如きあり、而も彼れが眼附の鋭くして凄かりし爲め、立役に扮しても往々惡人らしく見ゆる弊ありきといふ。

同時に、敵役として彼れの喝采せられしは其の凄き「睨み」なりき。文政三年、初めて大阪へ上りし時なりき。

惡敵の名人、こわい人と聞きたるに、小男にして優き顏なるゆゑ、本物にはあらずかと評判なしたり。「太功記」の光秀、お目見得狂言にて、眉間割、本能寺は別段白眼みもなく、愛宕山の場にて白姿となり、「待兼た安田作兵衛、軍の樣子は何と〳〵」と始めて三寶を踏み壞しての見得、この時、幸四郎の本音を現はして白眼みたる、一同の見物は驚き、子供は泣き出すほどなりしと。（「積善翁筆記」）

次いで、中座にて二世嵐吉三郎と一座せし時、（正月の「廓島臺」なるべし。）

幸四郎はむしりの鬘、肩入物の寬博、三尺帶、いがみのやうなる惡者、璃寛（吉三郎）は浪人者にて、紫の長襷のかゝりし着附、これもむしりの鬘、好い男振なり。幸四郎が強請の件になると、璃寛はこれを受付けず、白渡つて「茶でも飲んで歸らつしやい」と立上り、唄になつて入る。初日には大受にて…さて、二日目にまた此見得になると、見物は璃寛を褒めず、高麗屋々々々と褒たり。璃寛合點

行かざれば、弟子共に聞きたるに、初日には師匠が後向きにて振かへり、「茶でも飲んで歸らつしやい」の處で、高麗屋は俯向いて居ましたが、餘り見物が岡島屋々々々といふので、二日目には幸四郎が懐から叺煙入を出し、舞臺へ打付けました、此音に見物が目を付けると、上座を見込んで横向に白眼んだ、その横向の鼻の高さ、眼の凄さ、見物は皆高麗屋に眼が付いて、あなたは居るか居らぬかのやう申します。……（同上）

との事に、吉三郎は驚き、「成程、藝は上に上のあるものなり」とて、幸四郎に嘆願し、翌日より其の睨みを止めて貰ひしかば、再び「岡島屋」と褒められたりといふ。又、天保二年、河原崎座にて「矢口渡」の竹澤監物に扮せし時なりき、

總浚の日に、チヨボが「竹澤監物」と語りしに「イヤ〳〵、それはいらぬ、鳴物も三味線もなく、素にて己が出て、者共引けと云つた時、太鼓を打てと囃子へ誂へたり。……海老藏（七世團十郎）、訥升（五世宗十郎）、など打寄り、親方もぼけるものぞ、竹澤の出がシヤでは間が抜ける、困つたなアと心配なしたり。然るに初日になつて、兵庫（七世團十郎）が捕手を弓にて鬪ひ、「何と〳〵」と呼はつたりといふ時、花道より幸四郎、竹澤にてツカ〳〵と出で、花道眞中にて「者ども引け」といふと、時の太鼓を打込む、本舞臺を見てグツと白眼んだる時は、舞臺に人は居らぬが如く、見物大受け。海老藏も訥升も呆れて仕舞ひ、まだ値打のあるものなりと感心……（同上）

したりといふ。又天保五年、中村座にて「四谷怪談」を出せし時、一幕にても幸四郎を出勤させたしとて、給料のほかに日々二兩づゝの立錢を與へ、彼れは書下し以來の直助權兵衞の役なりしが、隱亡堀にて

三人立廻りの場にて、後向きに見得をして幕切とせしかば、彼れが子高麗藏が何故にやと問ひしに、花方の八百藏（お岩と與茂七）を引立てんが爲めにせしと答へたりと。

此の最後の逸話は彼れの「睨み」が如何に見物を魅せるかを知ると共に、如何に其の氣質の篤實なりしかを證するに足る。或る時、

初日出て、宅に歸りしに、門弟の者來り、只今打出しの見物に混りて歸りしに、今度は内の親方の評判滅法に好く、幸四郎が一番の出來だと申升といひけるに、ア、困つた、芝居は不入だ、なぜと云へ、此芝居は半四郎、三津五郎が花形だ、此二人が評判が好ければ大入なり、それに己が評判の好いのは、二人に好い處がないのだらう、座頭役、敵役の評判が惡くては見物は來ぬと云ひし………

（同上）

が、果して不入なりしといふ。舞臺にては、惡漢に扮して成功せしに拘はらず、温順にして役不足を言はず、實父四世幸四郎が、屢世間より德義上の非難を受けしに反し、頗る人望ありき。而も其の性格の異りし爲めにや、父子相和せず、彼れは專ら父の競爭者たりし仲藏に就きて修練し、其の始めて「千本櫻」の權太に扮せし時、梶原を勤めし父に對ひ、「親父はのめつてくたばらうと構ひません、褒美のお金が貰ひたう御座ります」といふ白にて大喝采を博せしといふ逸話あり。

註　「手前味噌」に、四世幸四郎は五世の實子にあらずといへり。四世の妻の生める男子が死せしより、手代なる者、密に劇場の火

繩賣喜助の子と取替置きしが五世幸四郎にして、四世夫婦も此の事は知らざりしが、後に喜助の妻が五世幸四郎の妻おことに事實を告げて金錢の合力を受けたる事ありと。眞僞疑ふべしと雖も、一説として茲に掲ぐ。

又彼れは金錢に淡泊なりき。

全く錢勘定を知らず、十二銅は神様へ上るゆゑ、四文錢三つと覺え居るのみ。金錢は手に乘せぬ位の人なり、給金の渡りにて、今日の噺の付かれば、樂屋入せぬやう、と内儀が表方と掛合の内、庭口より密と拔出して樂屋へ入り、舞臺へ出たり。内儀が腹を立て、それでは表の者が馬鹿にいたし升と云ひしに、さうでもあらうが、見物に來たお客に濟まぬから拔けて來たといひし事ありと。（同上）

幸四郎は舞臺を勤むること前後七十年、極めて健康にして死するに先だつ三ヶ月前まで矍鑠として業を廢せざりしは俳優中異數なりといふべし。和泉町を本宅として、今戸に別莊を有し、又品川に増木といふ妓樓をも營めり。彼れが實子は高麗藏といひ、後に六世幸四郎と名を襲ぎしが早死せり。又次女は七世團十郎に嫁せしが、半ごろ離別せられ、尼となりて池上に隱遁せりといふ。

第十三章　三世坂東三津五郎と三世尾上菊五郎

三世坂東三津五郎――舞臺上の閲歷――彼れの長所――七世團十郎の評――彼れの氣質。
三世尾上菊五郎――俳優としての經歷――容貌と風姿――當り藝――「天竺德兵衛」と「累」――「白木屋」のお駒――「四谷怪談」――傲慢と燥急――金錢問題――無邪氣なる人。

三世坂東三津五郎（大和屋秀佳、安永四―天保二）は初世三津五郎の實子にして幼名を三田八といふ。安永八年（五歲）、森田座に子役として朝比奈の奴豆平に扮せしを其の初舞臺とす。　天明二年（八歲）、巳之助と改め、翌三年、更に勘次郎と改め、寬政五年（十九歲）、桐座にて簑助と改め、井筒女之助に扮して當りを取り、翌六年春、同座にて初めて「曾我」の五郎となり、同八年十一月、河原崎座の「嚴島雪顏觀」に渡邊亘に扮し、幸四郎の遠藤武者と石段の立廻りに喝采を博し、同十年六月、中村座にて、「千本櫻」に彌助と忠信、二番目「本朝丸」に綱五郎となり、其の水試合に大當りを取れり。　翌十一年（廿五歲）十一月、二世三津五郎が荻野伊三郎と改名せると共に、三世三津五郎と改名し、中村座にて、「爲朝弱親船」に多田藏人と渡邊丁七、二番目に神道者榊左近に扮し、當時、評判記の位は立役の「上上吉」たりき。　以後舞臺上の閱歷は、

寬政十二年正月、「幸曾我」に十郎と五郎。　三月、「高尾達染」に賴兼、「非人仇討」に奴伊兵衞。　五月、「千本櫻」に小金吾と義經。　六月、「庚申若」に嘉十郎と小姓の吉。　七月、「屛風浦」に猿廻與次郎、畠山生駒之助、四の宮主稅。　九月、「蟾兎見島臺」に今川仲秋、二番目に茶屋廻り日天淸兵衞。　十一月、休む。

享和元年四月、市村座、「伊達曲輪入」に賴兼。　八月、「昭雁的」に浮島甚七と下部大助。　十一月、河原崎座、「三升歌垣」に仕丁次郎又實は少將宗貞。

享和二年正月、「粉飾曾我」に十郎。　三月、「郭公」（伊賀越と御堂前）に下部友平と吳服屋十兵衞。　十一月、「越路花」に武田晴信。

享和三年正月、「壽曾我」に十郎。三月、「伊達染」に賴兼、八百屋半兵衛、名古屋山三。四月、「博多小女郎浪枕」に小松屋宗七。六月、「忠臣藏」に七役(由良之助、義平、平右衛門、勘平、本藏、定九郎、判官)。七月、「菅原」に菅丞相、梅王、源藏、「幡随長兵衛」に權八、「姫小松」に龜王。十一月、中村座、「鉢木」に仕出屋與四郎、奴浪平、浦島太郎作。

文化元年二月、「罷出村」に玉屋新兵衛。三月、「一谷」に熊谷と忠度、「長者丸」に道玄坂道玄と白拍子櫻木(「娘道成寺」の所作)。五月、「勧組帶」(伊賀越と非人仇討)に澤井又五郎、武助、春藤治郎右衛門。八月、「千本櫻」に六役(川越太郎、銀平、梶原、鯛助、忠信、源九郎狐)。十一月、「菊相撲」に賴風、五代三郎、高安左衛門。

翌二年春より「上上吉」の位となりき。(三十一歲)

文化二年二月、「虎女石」に工藤と東金茂右衛門。四月、「妹背縁日」に幸崎伊賀守と地藏五平次。五月、「夏祭」に德兵衛。七月、「[illegible]臺山」に鶴屋禮三郎、淺山鐵山實は太宰梅丸。八月、「餘慶仇討」に木津勘助、「白縁月就」に伊左衛門。九月、休む。十一月、同座、「清和源氏」に茨城次郎實は渡邊綱。

文化三年二月、河原崎座、「會稽曾我」に七役(工藤、十郎、五郎、朝比奈、鬼王、團三、滿江)、二番目に稻谷半兵衛。五月、中村座、「姫小松」に俊寛。八月、「二樹仇討」に奴友平と吳服屋十兵衛。十一月、同座、「雪降奥」に尊弘親王、八幡太郎、萬歳(實は善知鳥の精)、船頭次郎藏、三浦平太夫。

文化四年三月、「榮曾我」に工藤、十郎、鬼王、「助六」に助六と意休(男女藏と一日替り。)「五節句」の所作。八月、「[illegible]」に毛谷村六助、「八幡鐘」に傳兵衛。九月、「忠臣藏」に由良之助、勘平、義平。十一月、市村座、「八島凱陣」に[illegible]度、嗣信、花屋嘉七。

文化五年正月、「和曾我」に工藤と京の次郎、「戀山崎」に八幡屋與次兵衛と近藤德次郎。三月、「伊達[illegible]」に[illegible]屋三平、渡邊民部、二

番目に紺屋德兵衞。五月、「忠臣藏」に勘平と石堂、「惣賣」に大日坊と野分姫亡魂、「廿四孝」に高坂彈正。六月、森田座、「一谷」に熊谷と忠度、「姫小松」に俊寛。七月、市村座、「出世請狀」に久吉。八月、「高麗屋縞」に猫越十右衞門。九月、「末刻太鼓」に磯貝藤助と若徒八内。十一月、同座、「二代源氏」に栗の木又次實は藤原千晴。同時、森田座、「七變化」の所作（卒塔婆小町、猿廻、源太、桃太郎、田舍娘、三番叟）。

文化六年正月、同座、「新玉曾我」に朝比奈、「花暦」に隱家茂兵衞。三月、「戀江戸染」に土左衞門傳吉と白酒賣喜之助。八月、「千本櫻」に川越太郎、權太、忠信、源九郎狐、覺範。九月、「二代勝負付」に秋津島、「廓文章」に伊左衞門。十一月、市村座、「鳥羽戀塚」に渡邊亘、船頭與次、宗清。

文化七年正月、「松曾我」に十郎、「解色絹」に本庄綱五郎。三月、「五山桐」に高景、「勝相撲」に白藤源太。五月、「合法」に人足與五郎と合法。八月、「八幡祭」に夜蕎麥賣實南與兵衞と南方十次兵衞。十一月、同座、「四天王」に賴光、肴賣實は三田源太、二瀬源六、渡邊綱、山姥。

文化八年正月、「蓬萊曾我」に鬼王、重忠、十郎、「花昔八丈」に手代治兵衞實は尾花甚三郎と手習師匠尾花甚五右衞門。二月、「助六」に白酒賣。三月、「水滸傳」に玉島庄兵衞、「七變化」の所作、「お花半七」に香川源十郎。五月、「伊賀越」に丹右衞門と政右衞門、「茜染」に鬘結金神長五郎實は里見主計。七月、「玉藻前」に周の西伯と上總之助、「謎帶」に一寸德兵衞。九月、「千本櫻」に彌助と義經。十一月、同座、「嚴島」に賴政と瀧口競。

此の時、中村座へは三世歌右衞門が下りて大入を取り、三津五郎の出勤する市村座は常に失敗に了りたりき。

文化九年正月、「鶯曾我」に八幡と朝比奈、「色一座」(龜井戸の喧嘩)に葛飾十右衛門と名越四郎次郎。三月、「伊達競」に雷鶴之助と渡邊民部、五月、「菖蒲太刀」に早川藤兵衛と民谷源八、「妹背山」に求女と大判事、九月、「菅原」に覺壽と源藏、十一月、「兒島高德」に和田新左衛門、備後三郎、義貞。

翌十年春、「霊上卜吉」に進みき。(三十九歳)

文化十年正月、「勢曾我」に舞鶴屋傳三と工藤、「廓玉章」に忠兵衛と孫右衛門。二月、「娘景清」に日入佐治。三月、「伊達富鍮」に政岡、「十二か月」の所作。五月、「十帖源氏」に物草太郎、「封文」に土左衛門傳吉。七月、「薬水谷」に常悦、「三の替」に船越十右衛門、吉田屋彌兵衛、八百屋半兵衛。八月、「白石噺」に惣六。九月、「大内鑑」に保名とやかん平。十一月、同座、「坂東頌」に善知鳥安方實は實方靈、岩手御前、清原武則、金兵衛。

文化十一年正月、「延年曾我」に赤澤十内と十郎、「蝶花形」に南方十次兵衛、「宿色衣」に清玄と吃又平、「十二支」の所作。四月、「忠臣藏」に七役(師直、戸無瀬、喜多八、一文字屋、門番可内、伊吾、由良之助)。五月、「夏祭」に團七、「戻駕」に與四郎(歌右衛門と始めて一座)。六月、「双蝶」に長五郎。七月、「伊勢音頭」に喜助、八月、「伊賀越」に上松左内と政右衛門、九月、「八陣」に森三左衛門、「色世界」に稲野谷半兵衛、「琴責」に重忠。十一月、同座、「二人聟」に破軍太郎實は三條小鍛冶、紀有常、刀鍛冶太郎七實は左近狐、「戀女房」に逸平、「廓文章」に夕霧。

文化十二年正月、「曾我雛形」に工藤、仁木、豆腐屋與右衛門。三月、「五大力」に黒船忠右衛門と源五兵衛、「盛衰記」に源太。五月、「信仰記」に春永と新作、「菖蒲帷子」に梅の由兵衛。七月、「女吉原」に館林團七、「大塔宮」に右馬頭。九月、「綴錦」に奴伊平と武右衛門、「妹脊山」に求女。十月、「鬼一」に智惠内。十一月、同座、「四天王」に鳶綱五郎實は渡邊綱、梁の木又次、山賊本右衛門實は三田の仕

翌十三年春、「大上上吉」に進みき。（四十二歳）

文化十三年正月、「比翼蝶」に八幡、鬼王、梶野長兵衛、船越十右衛門。三月、「菜種御供」に宿禰太郎、漁師梅六、白太夫女房、「娘道成寺」の所作。四月、「貞婦噺」に駒澤主膳と阿曾次郎。五月、「忠臣藏」に數右衛門、本藏、平右衛門、「國姓爺」に甘輝。九月、「布引」に實盛。「褄重」に佃屋喜藏と肴賣喜三郎。十一月、同座、「不破名古屋」に力士犬神段八、名古屋山三、井戸屋堀拔の兼。

文化十四年三月、「曾我湊」に八木孫太夫、獄門庄兵衛、鳥羽平、重忠、工藤、「六玉川」の所作。四月、「安達原」に宗任、「青樓詞」に木屋文藏。五月、「菖蒲刀」に三木十左衛門。八月、「累扇子」に多門頭と渡邊與五郎。九月、「月光秀」に春永、「鳴戸白浪」に海賊十郎兵衛と阿波十郎兵衛。十一月、同座、「和合太平記」に駕舁次郎藏實は大塔宮の靈、畑六郎左衛門、佐川田喜六實は村上彦四郎。十二月、「姫小松」に俊寛。

是れより先き五世半四郎と不和なりしを、此の十一月興行の時、和睦して同座せるなり。

文政元年正月、「曲輪日記」に近江と十郎と山崎與次兵衛。二月、「三代記」に篝火。三月、「東山殿」に土佐又平、「幡隨長兵衛」に若徒助八。五月、「妹背山」に大判事と求女、「雁金」に安平右衛門。七月、「彦山」に轟傳五右衛門と奴佐五平。八月、「伊達競」に谷藏と與右衛門。九月、「忠臣講釋」に由良之助と十太郎、「鉢木」に時頼。十一月、同座、「伊勢平氏」に實盛、面打實は三浦之助、崇徳院、重盛、熊坂次郎、二番目に夜蕎麥賣新兵衛。

文政二年正月、「曾我模樣」に十郎、淨瑠璃に虎と源太、二番目に帶屋長右衛門と工藤。三月「草履打」に岩藤、「助六」に白酒賣。四月、「菅原」に覺壽。五月、「夏祭」に一寸德兵衛。七月、「薄雪」に園部兵衛、「千種結」に道具屋牛兵衛。八月、「いろは假名」に數右衛門と

由良之助、「阿漕」に平次。十一月、「和黒主」に五代三郎、按摩闇市、深草燒丸太郎實は少將の靈、大伴黑主、御厨屋惣五郎實は伴良卿。

文政三年正月、「仕入曾我」に朝比奈・十郎、盛久、五人男(五役)、工藤。三月、「五山桐」に此村大炊と五右衛門。五月、「千本櫻」に銀平、典侍局、彌助、覺範。七月、「染分繦」(みの吉殺し)に伊達新左衛門、八藏、香具屋彌兵衛。九月、「一谷」に熊谷と忠度、二番目に漁師浦七實は上總忠光、「七變化」の所作(上阪の名殘)。十一月、玉川座、「曳高綱」に片岡三木之正、虚無僧秀山、大和屋文右衛門・松田左近、臍村のおさん、大工ほぞ右衛門、傾城大淀實は宇治の方、船頭次郎作、佐々木高綱(九役)、二番目に諸藝指南花形甚三と花守正作實は泉小次郎。

此の冬、大阪の角座へ上るべき筈なりしに、玉川座の無人なりし爲め、其處に抑留せられしなり。又翌年春より「極上上吉」となれり。(四十七歳)

文政四年正月、大阪・角座、「太功記」に春永、「布引」に實盛、「神功皇后」の所作。二月、「双 鏡山」に多賀大將、岩藤、土佐庄司、谷澤内記。三月、「妹背山」に大判事、求女、入鹿、「七變化」の所作、「廓文章」に夕霧と伊左衛門(狀右衛門と一日替り)。五月、「忠臣講釋」に判官、由良之助、重太郎、「姫小松」に俊寛。京都、北側芝居、「布引」に實盛、「勝相撲」に白藤源太、「戻駕」に與四郎。七月、名古屋へ赴く。十一月、京都、北側芝居、「忠臣講釋」に由良之助、「鏡山」に岩藤。

文政五年正月、大阪、角座、「菅原」に菅丞相、覺壽、松王、「道成寺」の所作、「五大力」に源五兵衛。三月、「五山桐」に五右衛門、「廓名月」に南方十次兵衛。三月、江戸、中村座、「射家櫻」に頼政、「鐘淵」に顯哲坊(玄實)。四月、「廓文章」に伊左衛門。五月、「忠臣藏」に八役(師直、義平、平右衛門、戸無瀬、可内、勘平、彌五郎、由良之助)。七月、「伊賀越」に政兵衛門と十兵衛。九月、「信太妻」に保名と

野干平、「鬼一」に鬼一、「宵庚申」に半兵衛。十一月、同座、「東百官」に佞藤太、絹川繁頭與右衛門、村雲皇子、「姫小松」に俊寛。

文政六年正月、森田座、「初夢曾我」に十郎、八幡、南方十次兵衛。三月、中村座、「花伊達染」に仁木彈正、下田重三郎、豆腐屋三ぶ、土手道哲、細川勝元、「娘道成寺」の所作。四月、「二代勝負附」に秋津島。五月、「菅原」に梅王、源藏、覺壽、菅丞相。八月、森田座、「忠臣藏增補」に判官、勘平、由良之助、中間元助、坂尾樵四郎、「姿色同」の所作（傾城、福助、大山道者、見物左衛門、汐汲）。十一月、市村座、「花山樵」に渡邊綱、二番目に三星屋の源、「山姥」の所作。同時、河原崎座、「嫗山姥」に賴光、山姥、綱、保昌。

文政七年正月、「萬歳曾我」に工藤、鬼王、滿江、十郎、團三、朝比奈、「古手屋」に八郎兵衛、「萬歳」の所作。三月、市村座、「戀飛脚」に忠兵衛と孫右衛門。四月、「布引」に實盛。五月、「合法」に小あげ與五郎。八月、「妹背山」に大判事、求女、鱶七、「戻駕」に與四郎。九月、「双蝶々」に長五郎、「三組盞」の所作。十一月、同座、「平家物語」に田原又太郎、清盛、「姫小松」に俊寛。

文政八年正月、「曾我初夢」に工藤、朝比奈、若徒五郎八、二番目に黒船町の忠右衛門後に獄門庄兵衛。三月、「十帖源氏」に物草太郎と伴左衛門、「浮名替紋」に稻谷半兵衛と出石次郎右衛門。五月、「千本櫻」に川越太郎、彌助、覺範、忠信、典侍局。七月、「一谷」に忠度と熊谷、「重井筒」に德兵衛、「桂川」に長右衛門。九月、「未刻太鼓」に磯貝實右衛門と奴友藏。十一月、同座、「劇場正月」に鬼塚兵庫、彌六兵衛女房、米屋秀助後に田原藤太。

文政九年三月、「雛行列」に岩藤、「戀山開」に玉屋新兵衛。五月、「紫頭巾」に源兵衛堀の源兵衛。六月、「七いろは」に七役（由良之助、仲間元助、重太郎、一色左京、坂尾樵四郎、勘平、義平）「三人形」の所作。七月、「忠臣講釋」に重太郎、「戻駕」に與四郎。九月、「御伽草紙」に久吉。十一月、同座、「伊勢平氏」に盛久、矢文商人、崇德院の靈。

翌年春、「大極上上吉」に進みき。（五十三歳）

文政十年正月、「御攝曾我」に工藤、鬼王、朝比奈、重忠、南方十次兵衛。三月、「阿國歌舞伎」に鳴神齋之助、渡邊民部、外記左衛門、「雪月花」の所作。五月、「鬼一」に大藏卿と鬼一、「夏祭」に德兵衛、「盛衰記」に源太。六月、河原崎座、「五十三次」に法華長兵衛。七月、市村座、「忠臣藏」に本藏、由良之助、勘平、「廓文章」に伊左衛門、「布引」に實盛。十一月、同座、「源氏顔鏡」に鷲尾三郎、太鼓持やつとこ德次、景清母、おひやりこ傳兵衛、鈴木左衛門、重忠。

文政十一年正月、「花麗曾我」に鬼王、十郎、工藤、二番目に佐野次郎左衛門。三月、「五山桐」に此村大炊と久吉、「助六」に意休。五月、「菅原」に覺壽、白太夫、源藏。七月、「千本櫻」に川越太郎、彌助、梶原、覺範。九月、「合法」に多賀大守と人足俣七、「姫小松」に有王。十一月、同座、「源氏最屓」に高野聖、千歳屋彌平次實は宗清、藤原秀衡、色事指南實は時政、「戀飛脚」に孫右衛門。

文政十二年正月、「曾我大寄」に梅澤小五郎兵衛、大磯屋傳三、二番目に本庄網五郎。三月、「二代勝負附」に行司庄九郎と高倉隼人。八月、「小田雁」に春永と嘉平次、「紅のべ紙」に粉屋孫右衛門、「大塔宮」に右馬頭。十一月、同座、「智仁勇」に頼光、山姥、仲光。

翌天保元年春、「無類」の位に上されたり。（五十六歳）

天保元年正月、「曾我評判」に工藤と花川戸長兵衛。三月、「陸奥山」に絹川谷藏と榮御前。五月、「忠臣藏」に由良之助。八月、「一谷」に六彌太、「帶屋」に長右衛門。九月、「綴錦」に治郎右衛門、「二代勝負附」に秋津島。十一月、同座、「劇場年代記」に長田庄司と紀文。

天保二年三月、「五山桐」に高景、「鐘淵」に法界坊と野分姫の亡魂。

此の興行中より、病氣のため、養子簑助をして之に代らしめて草津の温泉に療養し、次いで越後より奥

州へ下りて、十月、江戸へ歸りしが、再び病に臥して、十二月廿七日、五十七歳にして歿しき。

彼れの長所は和事にあり。例へば、足利頼兼、梶原源太、藤原淡海（求女）、白酒賣、宮城阿曾次郎、小松屋宗七、藤屋伊左衛門、龜屋忠兵衛の如き孰も其の當り藝なりき。又武道もしくは實事に於ても、熊谷直實、齋藤實盛、松王丸、小田春永、大判事、粉屋孫右衛門、等に喝采を博し、尙ほ老女役にては覺壽及び岩藤、などに成功せり。然れども「やさしき顏色ゆゑ、敵役は十分にうつらず」、又餘りに「動き過ぎ」、餘りに「小手利き」にて、且つ若づくりなりしかば、往々憎みと重みとの無き代りに、勇み肌なる人物に適したりといふ。彼れが、濡髮長五郎、白藤源太、絹川谷藏、及び秋津嶋の如き力士に扮して屢好評なりしは一つは彼れの體格に因ると共に、一つは彼れが世話物に長じたればならん。尙ほ此等の地藝のほか、所作事にも堪能にし


三世三津五郎の「白藤源太」（「似顏大全」より）

て、「娘道成寺」、「葱賣」、「山姥」に當りを取りしのみならず、「五變化」、「七變化」もしくは「十二か月」の所作、等をも屢演じて喝采を博したりき。彼れの競爭者たりし三世歌右衛門が殆ど萬能なりしに反して、彼れが敵役に扮する能はざりしは弱點なりしと雖も、先輩にして且つ義兄の緣を結べる五世幸四郎が實惡を得意とせると相俟ちて、確かに文化文政時代の江戸に於ける劇壇を風靡せりき。

七世團十郎の評に曰く、

役者も澤山あれど、花あれば實なし、實あれば花なし。先づ永木三津五郎が花實備りしと思ふ。それとても末には不入續き、見物は九までしか來ぬとて、顏見せの役名に「九迄婆」と付けられたる事あり。幸四郎は實のあるうちに折々花あり、云はゞ返り咲ともいふべし。

此の言、三津五郎と幸四郎との相違を見るに足る。

傳へいふ。三津五郎が或る家老役に扮せし時、湯呑の緣を爪彈きし、それを時計の鐘に合はすな道具替りの知せとして毎日大喝采なりしが、後見をせし櫻田治助、折角評判の湯呑が張子では榮えないとて、わざ〳〵瀨戸物を買求めて取替へ置きたり。三津五郎は斯くと知らず、樂屋へ歸ると不興なる顏して誰があんな事をしたと云ふ。治助は意外におもひながら、自分の仕業なる事を白狀せしかば、少しく色を和らげ「瀨戸物を瀨戸物と見せるは誰にでも出來る、張子を瀨戸物と見せるが則ち俳優の腕といふものなり、此の頃漸う張子も眞物に見えるやうなつたもの

なことといへりと。

彼れの藝風の寫實を放れて幽玄なりしを知るべし。又、大阪にて三世歌右衛門と競爭的に「五山桐」の五右衛門に扮せし時なりき。

梅玉は黒の衣にて、後、南無阿彌豆腐の時、頭巾を脱捨、衣の裾をまくり上げ、兩肩へかけてぐつと引しめる。裏は黒天鵞毛にて、裾は下に四天付の形りとなる。是は當時專ら流行引拔の裏にて、引起しといふ好みなり。六法を振り、しづ／＼と入る。尤も梅玉小男にして、尻まくりしたりとも、痩せたる體にては當りまじくと新工夫にてする事なり。禪僧ゆゑに南無阿彌豆腐なれど、盜賊の容にては何とやら背けたるものなり。三津五郎も又痩地の男なれば如何あらんと見たりしが、是は又工夫妙なり。紫の衣頭巾にて、さして變る事なく、後、忍びをポンと當る。忍びタヂ／＼と跡へよる所、秀佳の頭巾を摑むゆゑ脱る。下、百日鬘にて、秀佳ふと頭冷たる思入にて頭を振る。頭巾脱て無きゆゑ、忍びを見て、扨はといふこなしにて頭巾を引とり、ちよんと着ると、忍びポンと返ると一時なり。懷より拂子を出して、南無阿彌豆腐／＼と輕くいふて向ふへ入る。見たる所淋しけれど難なし。（「傳奇作書」）

蓋し歌右衛門よりは工夫に長せしなりき。

彼れの氣質は溫和にして事を處するに公平なりき。市村座にて梅の由兵衛に扮せし時。其の子玉三郎（四世三津五郎）長吉なりしかば、

二人立の釣看板を、帳元橋屋治助、いまだ作者より注文の下繪出ぬ先に、鳥居清滿へ誂へ、揭げたりしに、三津五郎以ての外の立腹にて、まだ名題に乘らぬ玉三郎をなぜ釣看板に出したるか、外の人の思はくも恥かし、との事に翌日より一人立に書直したり。（「芝

居秘傳集」)

五世瀬川菊之丞は三津五郎と五世半四郎に引立てられたるに、大恩人たる三津五郎の妻と通し、終に出入すること叶はざりき。然るに、「鏡山」の狂言にて、三津五郎の岩藤、菊之丞の尾上にて草履打の處になると、此の事を知りたる見物、尾上を打殺してしまへと聲々に罵る。三津五郎は宅へ歸り妻に向ひ、「今日御見物が菊之丞の事を間男だから打殺してしまへと言つたぜ」と言つたきり、後は何も言はざりき。(「歌舞伎」)

四世歌右衛門が中村座へ下りて「双蝶」に放駒を勤め、彼の菊之丞に濡髮の役を振られたるに、永木の親方(三津五郎)に話をして、しろといへばする、聞かなければ出來ぬ、とて愈看板を上げる前日となり、出入の出來ぬ三津五郎の許へ裏口より入來り、此處の敷居は跨ぎがたきが、據所なき事ありて參りたり、と彼の事を取次にいひければ、三津五郎は、其れはするがよい、直ぐ上れ、とて其れより五日の間自宅に留め、自分手を執つて稽古をさせたり。(同上)

又松本五郎市といふ中女形の下手なるがありしに、三津五郎が「山歸」の所作を始めてせし時、「横にかすつて神奈川の」といふ振に窮したる處へ、彼の五郎市來り、遠眼鏡を見る振になされませと助言しければ、お前は振付になるべしとて、それより振付として名人となれりといふ。

三津五郎は永木に別居を構へしかば、俗に之を「永木の三津五郎」といへり。彼れの妻は二世三津五郎の長女にしておていといひ、おていの娘二人は三世菊五郎と藤川官吉(花友の父)に配せり。三津五郎には養子二人あり、一は四世坂東三津五郎、一は坂東しうか、孰も次ぎの時代の名優たりき。又門下に大

吉及び三津右衞門あり、共に道外方たり。特に大吉は家主の役を專門とし、三津右衞門は、伴内、助平、及び朝顔仙平などの役を得意とせり。

●●●●●●●三世尾上菊五郎（音羽屋梅幸、後に梅壽、天明四―嘉永二）は江戸小傳馬町なる建具屋仙次郎の子にして、幼名を辰五郎といひ、尾上松助に養はれて新三郎と改め、更に榮三郎と稱して、天明八年（五歳）、市村座に鳥若丸に扮せしを其の初舞臺とす。寬政十一年（十六歳）、同座にて犬坊丸に好評を得、享和元年（十八歳）、河原崎座にて始めて曾我五郎に扮し、同二年夏、中村座にて、「菅原」に櫻丸と宿禰太郎に當りを取り、同三年、上阪して座摩の子供芝居へ出で、「忠臣藏」に定九郎と勘平とを早變りに勤め、是より尾上鯉三郎の斡旋により、同地の中座へ現はれたり。

【註】此の時、彼れは甚吉といふ芳町の藝者と出奔せんとして、神棚にありし小判を盜出し、品川に泊まりしに、其は百足小判なりしかば、再び江戸へ歸りて、養父の兄弟分たる松本傳五郎といふ火消の部屋頭に便り、改めて女とは手を切り、養父の許しを得て上阪し、四世團藏の許に投じ、其の子五世團藏と義兄弟の約をなせりといふ。

文化元年（廿一歳）十一月、江戸へ歸りて河原崎座に出で、翌二年三月、「助六」に白酒賣、「忠臣藏」に判官、勘平、平右衞門、いづれも好評を得、同五年七月、市村座にて、養父松助が小幡小平次に扮して、水中の早替りに怪我をせしゆゑ、中途より代りを勤め、翌六年（廿六歳）正月より立役の「上上吉」に上れり。同年

六月、森田座にて「阿國御前」に、父松助の異人より妖術を傳へらるゝを發端とし、天竺德兵衞、土佐又平、座頭德市實は岩倉夜叉丸、不破伴左衞門實は赤松政則、木津川與右衞門及び重井筒の累を早變りにて勤め、同年十一月、市村座にて、父松助が松綠と改名せしと共に、其の名を襲ぎて二世松助と稱せり。以後俳優としての經歴は、

文化七年正月、「松曾我」に五郎、「解色絲」にお祭左七。三月、「五山桐」に久秋。五月、「合法」に女非人お松と道具屋與兵衞（早變り）。八月、「八幡祭」に山崎屋與五郎。十一月、中村座、「花黑主」に孔雀三郎、山賊立烏帽子、鹿島の事觸實は松の精、女郎花野の亡魂、高麥屋かつぎ。

文化八年正月、「鶴曾我」に五郎と鬼王、「東都名物」に髪結才三。二月、「加賀見山」に岩藤。三月、「妙石川」に筑紫權六、「浮名種油」に肴屋大吉。五月、「花菖蒲」に船橋勇助と、佐野次郎左衞門。七月、「忠臣藏」に勘平と義平、「菅原」に輝國と櫻丸。九月、「一谷」に敦盛と田吾平。十一月、同座、「岩井内裏」に逆髪皇子、袈裟太郎、貞盛。

文化九年正月、「富士根曾我」に十郎、「臺頭」に東金茂右衞門。三月、「清水清玄」に鳥羽平と八岩源五郎。四月、「龜山染」に田邊文藏。五月、「戀白浪」に左枝犬喜代と米屋孫三郎。七月、「忠臣講釋」に力彌と勘平。九月、「盛衰記」に源太。十一月、「島原高德」に大塔宮、伊賀守、恩地左近、熊手婆。

文化十年正月、「勢曾我」に十郎、五郎、朝比奈、「廓玉章」に槌屋治右衞門。三月、「伊達寫繪」に仁木辨之助後に彈正、高尾、島田十三郎。五月、「十帖源氏」に狩野之助、「封文」に五尺染五郎。七月、「菊水卷」に正行、照平、「仇[illegible]」に六三と[illegible]、「[illegible]」[illegible]

「三世聯」に嘉十郎。八月、「白石噺」に恩地左近。九月、「大内鑑」に左近太郎。十一月、同座、「坂東顏」に海女小礒、山伏金剛院、六部了海、召仕お初、八幡太郎。

文化十一年正月、「延年曾我」に團三郎と五郎、「曲輪蝶花形」に南與兵衞。三月、「花雪」に淀平と金魚賣金八。四月、「忠臣藏」に若狹之助、小濱勘平、山名、平右衞門、夜蕎麥賣、安兵衞。七月、「伊勢音頭」に貢。八月、「伊賀越」に志津馬。九月、「八陣」に隼人之助、「色世界」に庄次郎。十一月、同座、「二人婿」に虚無僧實は桂金吾、豆四郎と業平（早變り）。

此の十一月、彼れは父松緑の師たる初世菊五郎の俳名を襲ぎ、梅幸と改めたり。

文化十二年正月、「曾我雛形」に曾我十三郎、金貸金五郎、造酒之頭。三月、「五大力」に彌助、奴小萬、米屋娘。五月、「信仰記」に三好主馬之助と加藤正清、「菖蒲帷子」に金神長五郎。七月、「女吉原」に一寸德兵衞。八月、「千本櫻」に義經。九月、「綴錦」に春藤治兵衞。十一月、「四天王」に八大龍王實は美女御前、女郎花咲實は土蜘、賴光、快童丸。

此の十一月、始めて三世菊五郎と稱し、且つ「上上吉」の位に進みき。（卅二歳）

文化十三年正月、「春曾我菊」に工藤と傾城小紫。三月、「菜種御供」に菅丞相、輝國、奴宅内。四月、「貞婦噺」に磯貝藤助。五月、「忠臣藏」に判官と勘平。九月、「布引」に盛久、「褄重」にお駒、大經師茂兵衞、尾花六郎右衞門。十一月、「不破名古屋」に賴兼。

文化十四年正月、「曾我湊」に五郎、清玄、鎌倉屋五郎八。四月、「安達原」に義家、「青樓詞」に佐野次郎左衞門。五月、「菖蒲刀」に鳥井彌十郎と石井兵助。八月、「累扇子」（松緑三回忌追善）に七役の早變り（葛飾正作、天竺德兵衞、座頭德市、重井筒、かさね、木下川與右衞門、千原左近頭、浮島多門頭）。九月、「月光秀」に久吉、「鳴戸白浪」に隱岐丈助。十一月、都座、「判官贔屓」に義經、長田太郎

娘朝顔實は宗盛、松ヶ枝庵梅基實は忠信。

此の時、初めて座頭となり、且つ「絲上上吉」の位に進みき。

文政元年二月、「曾我梅菊」に五郎、團三郎後に大工六三、帶屋長右衛門後に針の宗庵實は神道徳次郎、「七變化」の所作(傾城、座頭、保名、暮仙人、玉藻前、鳶の者、振袖娘)。四月、「伊勢音頭」に貢。五月、「東鑑」に飯盛女さよ衣とお七。十一月、休む。

金主大久保今助は豫て彼れが專横を含みしが、其の役不足をいひしより口論を生じ、菊五郎は遂に退座せしを、翌年の春に至り、再び和睦して出勤せり。

文政二年三月、中村座、「助六」に助六。四月、「菅原」に櫻丸と菅丞相。六月河原崎座、「菊伊達染」に七役(傾城薄雲、八汐、仁木、絹川與右衛門後に高尾傳七、お祭金五郎、汐澤丹三郎、細川且元。)七月、玉川座、「山崎踊」に濡髪長五郎、「尿闇」に與四郎。十一月、同座、「七小町」に深草少將、修行者快全實は強盗立烏帽子、八代龍王、小町姫お七實は侍女女郎花、柴刈實は黒主、八百屋下男實は五代三郎、惟高親王、二番目に孔雀染五郎と般若庄五郎(九役)。

文政三年正月、「曙曾我」に範頼、鱶梅よし六兵衛、工藤、重忠、五人男(九役)。三月、「櫻舞臺」に島田重三郎、清水清玄、政岡、頼兼、下部小助、折琴姫の幽魂、仁木彈正(七役)。七月、大阪、角座、「入船噺」に天竺徳兵衛、狩野四郎次郎、累、與右衛門、「糸櫻」にお祭佐七。九月、堺へ赴く。十一月、江戸、河原崎座、「伊勢平氏」に景清、義朝、二番目に中働き半七。

此の上阪は十四年ぶりなりしが、僅に一興行にして江戸に歸りしなり。

文政四年正月、「曾我島臺」に梅澤小五郎兵衛、工藤、十郎、笹野権三、新造小いな、八百屋半兵衛。三月、「尾上岩藤」に岩藤。四月、「[illegible]

逆鐵」に高綱。五月、「櫓太鼓」（新作）に白山傳吉、八丈小僧吉三、安藤九郎。七月、「玉藻前」（新作）に木幡左衛門、橫曾根平太郎、玉屋新兵衛、山邊帶刀、花陽夫人の靈、玉藻前、九尾狐。九月、「月白浪」（新作）に曉星五郎、斧定九郎、桃井播磨守。十一月、同座、「妹背山一日千本」（新作）に忠信と百姓鐵七。

文政五年正月、「鶯曾我」に五郎、十郎、平井權八、「助六」に揚卷。四月、「愛宕紺」に久吉、「浮名纈」に道具屋與兵衛。七月、「龜山鉾」（新作）に石井源之丞、下部補助、武田多門正。九月、「東伽羅」に木津川金五郎と松枝關之助、「鉢木」に時頼。十一月、市村座、「竹馬友逢」に渡邊綱、二の瀨源六、丹波屋吉五郎、船頭喜之助。

是れより先き、文政二年に七世團十郎と「助六」を兩座競爭に演じてより兩者不和となれるを、此の時、京阪より歸來せる半四郎が仲裁して、始めて此處に一座せるなり。

文政六年正月、「曾我組絲」に工藤と近江（團十郎の八幡と石地藏のたて）。三月、「比翼稻妻」に名古屋山三と小紫。五月、「菅原」に菅丞相。六月、森田座、「法懸松」に日蓮上人、法華長五郎、蝦蟇仙人、累、神田の與吉。七月、市村座、「石尊贐」に澤井股五郎と大福屋宗六、「松竹梅」に小姓吉三郎。九月、「梅由兵衛」に由兵衛。十一月、中村座、「還木曾」に義仲實は朝日狐と占者實は入江冠者。

文政七年正月、「曾我扇」に五郎と鬼王、二番目に鎚屋治兵衛。三月、「扇白浪」に旅役者石川眞砂地實は石川友市、「花曇」に玉屋新兵衛と彥惣。五月、「合法」に合法、人足孫七、うんざりお松。八月、「音菊」に天竺德兵衛と五百機の幽靈・二番目に大經師茂兵衛。十一月、河原崎座、「惡源氏」に熊屋御前實は崇德院、渡邊亘、八百屋半兵衛實は金子十郎。

文政八年正月、中村座、「曾我中村」に權八と十郎。三月、「五人男」に極印千右衛門。五月、「初冠曾我」に尾上之助、お祭佐七、井筒屋

傳兵衞。七月、「忠臣藏」に由良之助、勘平、戸無瀬、「四谷怪談」(新作)に與茂七、お岩、小佛小平。九月、河原崎座、「何中好文侑」に菅丞相と源藏、「千代松稚」に伊勢參り權五郎、腰元庵崎後に牛の御前、幸崎甚内實は松若丸。十一月、大阪、角座、「早咲源氏」に權八と崇德院、「榮松稚」に松若丸と牛の御前。

これ彼れが三度目の上阪なりき。(四十五歲)

文政九年正月、「伊達摘」に仁木彈正、淺岡、大工六三實は鐵之助、「四谷怪談」にお岩、小佛小平、與茂七。「忠臣藏」に由良之助と勘平。中座、「菅原」に菅丞相と櫻丸、「伊勢音頭」に喜助。角座、「玉藻前」に横曾根平太郎、「九段目」に由良之助と戸無瀬。京都、「天竺德兵衞」に七役。「忠臣藏」に四役。名古屋へ下る。十一月、江戸、中村座、「還花」に順禮岸藏實は難波六郎、但馬守經正實は祈禱小僧長吉、越中前司。

文政十年六月、河原崎座、「五十三驛」に日本駄右衞門、天一坊、竹村定之進、猫石の精、「身替お俊」に傳兵衞。七月、中村座、「忠臣藏」に七役(師直、勘平、由良之助、定九郎、戸無瀬、小浪、平右衞門)、「伊勢音頭」に貢。九月、「四谷怪談」に與茂七、お岩、小平、「大内鑑」に保名。十一月、河原崎座、「判官贔屓」に田舍道者實は源九郎狐、長田太郎、宗盛、娵朝顏、義經。

前年冬、彼れが京阪より歸りし時、幸四郎、半四郎の給金が千兩なれば、自分は千二百兩ならではと言出し、一月より其のつもりなりしに、失火の爲め劇場燒失し、愈三月より開演するに當り、幸四郎、半四郎等が彼れに對して不平なりしかば、終に彼れは一座を脫して河原崎座へ投せしなり。而して「五十三驛」の大入なりしより愈得意となりし爲め、一座の三津五郎及び團十郎は市村座へ脫して「忠臣藏」を出せ

しを、彼れは更に中村座にて同じ狂言を演ぜしが、全く失敗に了り、九月の「四谷怪談」にて形勢を挽回せんとせしも、之れ亦市村座に於ける三津五郎の伊左衛門に壓せられき。

文政十一年正月、「曾我細見」に十郎、二番目に引窓小僧長吉と髪結長五郎。二月、「伊達抄」に仁木、政岡、大工六三、鐵之助。三月、「千本櫻」に靜と權太。四月、「盛衰記」に源太。加賀へ赴く。

文政十二年正月、市村座、「曾我大寄」に中間可内實は赤澤十内、鬼王、五郎、二番目にお祭佐七。三月「宿歸り」に岩藤、「二代勝負附」に金神長五郎。八月、伊勢へ赴く。十一月京都南側芝居、「千代萩」に仁木彈正、政岡、大工六三、「菅原」に源藏、菅丞相、櫻丸。

天保元年正月、大阪、中座、「加賀見山」に岩藤と神道徳次郎後に帶屋蝶右衛門、「猫魔殿」に猫の妖怪、狩野四郎次郎、鱶子お菊、薄雲御前の死靈、幸助。竹田芝居、「菅原」に菅丞相、櫻丸、源藏、「先代萩」に彈正と政岡。讃岐、備後へ下る。八月、堺と兵庫へ赴く。九月、大阪角座、「千本櫻」に權太と靜。十一月、京都、北側芝居、「菅原」に菅丞相、「千本櫻」に靜と權太。

此の角座にての權太が持前江戸つ子なりしを、大手、笹瀬などの連中より「下市に江戸つ子はないぞ」と言ひしかば、彼れは女房おせんに對ひ、親父に勘當され、江戸へ行つて鮓職人になつて居たゆゑ、江戸の言葉を遣ひ覺え、今ぢや下市の江戸つ子だといひて喝采を博せりといふ。

天保二年正月、大阪、角座、「席序環」に安達刑部之助、「稻妻草紙」に山三、「隅田川」に甚三と同女房。三月、若太夫芝居、「忠臣藏」に桃井、定九郎、勘平、由良之助、「四谷怪談」にお岩と小平、「伊勢音頭」に貢。五月、京都、北側芝居、「四谷怪談」と「伊勢音頭」に同上。八月、江戸、市村座、「四谷怪談」に與茂七、小平、お岩、由良之助、「千本櫻」に權太。十一月、同座、「菊伊達染」に仁木、政岡、大工金五

郎、お國、小助、「對編笠」に名古屋山三。

天保三年三月、河原崎座、「伊達鏡」に清水左門之助、金神長五郎、八汐、清玄（「惣實」の所作）。七月、「天竺德兵衛」に狩野四郎次郎と德兵衛、二番目に木下川與右衛門と累。九月、「忠臣藏」に師直、小波、勘平、由良之助、定九郎、戸無瀬、「花川戸」に井筒屋傳兵衛。十一月、市村座、「坂東武者」に源信僧都實は良門、「關扉」に墨染。

天保四年正月、河原崎座、「三升曾我」に大藤內實は近江小藤太、工藤、十郎、「戀江戸染」に小姓吉三。三月、「忠臣藏」に師直、おかる、九太夫、勘平。同時、市村座、「琴責」に重忠。六月、河原崎座、「玉藻前」に華陽夫人靈、橫曾根平太郎、玉藻前、「菖蒲帷子」に玉屋新兵衛。八月、市村座、「忠臣藏」に九太夫、勘平、おその。九月、「絹川染」に累と與右衛門。十一月、同座、「對弓取」に賴長、渡邊丑、熊坂小僧牛七。

天保五年正月、「書初曾我」に赤澤十內、重忠、傾城逢州幽魂、工藤、二番目に小松屋宗七と玉屋新兵衛。「姫小松」に龜王。劇場燒失、伊勢へ下る。

天保六年二月、江戸、市村座、「五十三驛」に稻葉幸藏、傾城薄雲、桑名屋德藏、猫の妖怪、旅役者實は權八、土左衛門傳吉、丁稚。九月、「忠臣藏」に師直、本藏、おかる、九太夫。十一月、中村座、「菅原」に櫻丸、菅丞相、勘平、玄蕃、「關扉」に宗貞と

天保七年二月、市村座、「伊達大寄」に政岡、羽生之助、那迦尊者、高尾、非人助、重三郎、累、仁木、大工六三實は關之助。「伊勢音頭」に貢、八月、森田座、「廿四孝」に勝賴、「四谷怪談」に與茂七、お岩、小平。九月、「妹背山」に定高、「雲絕間」に山三、「淺間嶽」に重州。十一月、休む。

天保八年三月、中村座、「大江戸入來」（松綠廿三回忌）に岩藤亡魂、小天狗長吉、清水冠者、手代牛七實は曉星五郎。八月、「忠臣藏」

に桃井、勘平、由良之助、「廿四孝」に勝頼。十一月、河原崎座、「梅顔競」に景清、「八陣」に娘雛衣、「関扉」に墨染。
天保九年正月、中村座、「曙曾我」に彫物師甚五郎、月小夜、帯屋長右衛門實は新藤徳次郎、曾我五郎、針の長庵。三月、「一目千本」に矢田平と久吉、「千本櫻」に權太と靜。五月、「扇讎」に佐々木岸柳と笠原隨軒齋。六月、「家怪談」に天竺徳兵衛、狩野四郎次郎、二番目に累と與右衛門。九月、「鬼一」に牛若、「梅由兵衛」に長吉と小梅。十一月、中村座、「一世一代」に東條左衛門、鵜飼勘作、非人片瀬の松、東條杢四郎、良觀律師、吉祥太郎、息子柴王丸、七面傳吉。

この「日蓮記」を一世一代として向島の寺島村に退隱せしが、翌々年に至り再び舞臺に現はれき。

天保十一年正月、河原崎座、「若木場曾我」に十郎と大藤内實は近江小藤太。三月、「五山桐」に久吉と矢田平、「帯屋」に片岡幸左衛門とお半。伊勢へ赴く。
天保十二年正月、京都、南側芝居、「先代萩」に仁木、政岡、六三、お菊、木津川幸助、狩野四郎次郎。三月、大阪、角座、「五十三驛」に鼠小僧實は桑名屋徳藏、傾城瀬雲、夜泣石の幽靈、猫石の精、平井權八、土左衛門傳吉、飯盛お七、梅澤屋女房お時。「伊達染」に政岡、六三、仁木、四郎次郎、與右衛門、累。伊勢へ下る。八月、大阪、大西芝居、「忠臣藏」に由良之助、勘平、戸無瀬、「菅原」に櫻丸、源藏、菅丞相。九月、「天竺徳兵衛」、「四谷怪談」に與茂七、お岩、小平。

これより備中へ下りしが、翌年、江戸へ歸りて再び舞臺に現はれたり。

天保十三年十一月、江戸、河原崎座、「室町殿」に狩野四郎次郎、土佐の又平、座頭徳市 不破勘解由實は赤松彦四郎、重扇屋おきく、木津川幸助、「盛衰記」に源太、「猿廻」にお俊親方。

天保十四年五月、河原崎座、「菅原」に菅丞相、源藏、櫻丸、千代、「忠臣藏」に師直、勘平、由良之助。十月、「鯛本話」にいがみの權太と福岡貢。

弘化元年三月、中村座、「鏡山」に岩藤、「助六」に白酒賣。五月、「菅原」に菅丞相、八重、玄蕃、時平。七月、「四谷怪談」に與茂七、お岩、小平。九月、「玉藻前」に華陽夫人、藻屑三平、金毛狐、「色菊月」にお祭佐七。

弘化二年正月、河原崎座、「魁源氏」に崇德院、頼長、重忠、京の次郎、工藤。二月、「帯屋」に片岡幸左衞門とお半。三月、「鏡山」に岩藤亡魂と北條時政、「錦畫初」に秋月一角。五月、「戀山崎」に與次兵衞、駕舁甚兵衞、八幡屋竹右衞門。七月、「忠臣藏」に師直、九太夫、おかる。九月、「同上」に五郎太、師直、おかる、「花川戸」に傳兵衞。十一月、中村座、「大江山」に茨木童子、兒殺若丸、鬼同丸。

弘化三年正月、「大江山入」に般若丸後に酒吞童子、茨木童子、工藤、十郎、「猿廻」に傳兵衞。三月、「伊達寫繪」に赤松則正、[illegible]利、下人小助、乳母五百機、大工六三、松枝關之助。八月、「累扇」に狩野四郎次郎、木下川與右衞門。十一月、市村座、「[illegible]龍丸」に玄海灘六、土蜘の精、鍾馗半兵衞實は赤松彦次郎、不破伴作、大内義弘。

弘化四年正月、「書初曾我」に箱王丸と大藤内實は工藤、「椀久」に椀久右衞門。三月、「尾上岩藤」に惣太。五月、「仙臺河岸」に羽生屋の助。七月、「一代噺」(五十三次)に天竺德兵衞、薄雲・猫の妖怪。九月、同「後日」に權八、傳吉・小夜衣・お七・[illegible]の團七、死神。

再び此れを一世一代として、猿若町三丁目の居宅に餅屋を營み、菊屋萬平と號せしが、翌五年四月、大川橋藏と變名して名古屋の舞臺に現はれ、次いで大阪に上りき。

嘉永元年八月、角座に天竺德兵衞と權八。同時、中座に「伊達」に赤松則政、政岡、仁木、六三。九月、角座「菅原」に菅丞相、玄蕃。

十一月、京都、北側芝居、「菅原」に菅丞相、白太夫、源藏、「見取曾我」に工藤。
嘉永二年正月、角座、「薄雪」に大膳、「馬切」に信孝、「後日話」に岩藤（骨寄せ）。

此れより病に罹りて劇場に出でず、稍輕快なるを待ちて江戸へ歸る途中、四月廿四日、遠州掛川にて歿しき。歳六十六。

菊五郎は容貌と風姿に秀でたりき。

故默阿彌翁の話に、同優が壯年ころ、樂屋の鏡臺に向ひ居りて、我知らず、己は何うして斯う好男子だらうと云ひしを、側に聞居し者の可笑とも思はず、誰が見ても好男子ゆゑ、親方自身が其う思ふは尤も千萬の事なりと言合へりとぞ（「俳優百面相」）。

而して養父松助が實惡を主とせるに反し、彼れは最も和事もしくは實事を得意とし、菅丞相、櫻丸、勘平、貢、等は屢之を繰返して喝采を得しが、敵役にても、仁木、權太の如き、又女方にて、岩藤、お初、政岡、おこま、お半、累、お岩の如き、孰れも彼れが當り藝の重なるものなり。尚ほ父と同く世話事を能くし、特に江戸子の意氣なる風俗を寫すに適し、お祭佐七、大工六三の如き其の傑作たり。只所作事には巧みならずして、往々「荒つぽい」と評されたり。「俳優百面相」に曰く、

技藝は「兼る」と稱せられし名人にて、立役、濡事は勿論、實惡、女形、其他、何にても出來ぬと云ふ事なき故、「兼る」といふ稱を得た

ろなり。されば菅丞相は梁善（三世彦三郎）寫しにて品位備はり、京大阪にても無類の評なるに、お祭佐七は世話狂言にて、其後も屢々勤め、是又無類なり。時代狂言のお公家樣と、世話狂言の鳶の者と、双方無類と稱せらる。實に文化以來、他に比すべき俳優一人もなし。又お半に幸左衛門、お輕に九太夫など、飛違ひた役廻りにて、實惡は實惡、娘形は娘形と其れ〴〵仕分けて見せ、看客を感服させしは上手の技藝なり。



三世菊五郎の「いがみの權太」
（「役者細見三葉草」より）

天保四年の「役者四季詠」に曰く、

世話狂言にて、姿かつかうのよい人は、故人中車（八百藏）今は錦升（五世幸四郎）、梅幸、此三人位なものはござりませぬ。

又天保十年の「外題撰」には曰く、

此の人くらゐ姿の替る役者は昔から覺えませぬ。立役、女形、老人、若衆形、立敵から三枚目敵まで、そのまゝ姿で替ります。

されば同一の狂言にて七役もしくは九役を勤むるを得意とせしが、同時に父松助と同く、早變りの仕掛物を能くし、此れを妖怪又は亡靈の役に應用して喝采を博しき。例へば、文化六年、彼れが松助より讓られて始めて演ぜし「天竺德兵衛」と「累」とを見よ。

お國御前（父松助）嫉妬にて髪の毛を引きむしると抜ける仕掛。この毛を握りて下へ血が垂るゝ仕掛大出來なり。明き御殿、結構なる金襖、忽ち茅屋になる仕掛大評判。即時に骸骨の姿を現はす所は別して妙なり。次ぎに粂三郎（即ち菊五郎）座頭にて木琴を打つ所大いによし。蛙の脊割れるも大出來。蛇を遣ふ所正眞の如し。又累にて、きれいなる湯上り女の出にて化粧する仕打、お國御前が乗移り、きれいな顔へお國御前がしやれかうべを付けると放れず、痣になる仕掛。それより樋口になりて、與右衛門へ無體の嫉妬。早變りて與右衛門、累を絹川へ殺す仕内二人の如し。其の幽靈、流れ灌頂より出づる仕掛、又行燈より出で、壁へ入り消ゆる仕掛、門口のしめてある所を押して入る跡、先の如く格子になり居る仕掛大當りなり。（「戯場年表」）

又文化十三年の「白木屋」のお駒を見よ。

二十五六の中年増うつくしい事。香箱を取返さんと才三とのぬれごと、喜藏の聟入に、繼親庄兵衛の慾ばりに我身のつまり、才三が持つた香箱を取らんとして刺殺したと思ひの外に、亭主の喜藏を殺した惡に繩目のはりつけ。生の者を生で見せるはりつけのお駒には見物も肝をつぶし、驚き入つて無言なり。少し柱下ると胴ぬけの早業、屏風と變じ、掛物とかはり、香化茶湯の仕掛古今の評判。……土間の眞中より人玉が出ると怖ろしさ。せり上げの幽靈物すごく、背の高さ一丈餘、黒髪の長さ五尺計、舞臺へかゝり物語りの姿を見ては、女中子供はこわい〳〵と見ること能はず。れんじ窓を破りてはいる仕掛。する〳〵と內へ入り、井戸より出て、本土へ歸ると虚空へ上り玉ふ仕掛の大出來。（「役者名物合」）

云々と。次いで、「四谷怪談」に於けるお岩と小佛小平との戸板返しに至りて愈その巧妙を極めたり。

文政九年、彼れが二回目に演せし時の光景を見よ。

伊藤喜兵衛にたばかられ、お花が持來りし血納めの藥を呑んで苦み、段々髮もぬけ顏の形變る所、誠に恐ろしうござりました。——三光の櫛な妹にやりたき一念にて轆轤首となり、屏風の内より出、欄間を傳ひ二階へ行く所奇妙にて……。小佛小平、直助役、古主のために藥を盜み、事顯はれ、指を折られ、叩き殺される所、いぢらしう御座りました。——是より小兵衛、お岩、板がへしの段、一手相傳、お家のからくり、妙でござえます。……夢の場、振袖姿にて絲を續ぎ居る所きれい〳〵。伊右衛門、鷹狩の姿にて來り濡事よし。それより後いろ〳〵變化する所、殊に化物屋敷の如く、恐入つた事でござりました。——秋山長藏、密書を持ち居るゆゑ、逆さまに下り、首を手拭にてしめ、其儘上る所物すごう御座りました。……挾箱より出で、民谷 源四郎を殺し、其儘上へ上る所、妙々。

此の他、「玉藻前」の狐、「五十三次」の猫、「鏡山」の岩藤の骨寄せ、など要するに奇術を以て人を驚かせしなり。彼れは父松助と同く、作者鶴屋南北と結托し、新作の當り藝は彼の「四谷怪談」を初めとして大かた南北が筆に成り、又仕掛物については南北が子鶴十郎の意匠與つて力ありきといふ。「芝居秘傳集」に彼れが養父松助より讓られ、もしくは自ら工夫せる仕掛物を列記す。曰く、

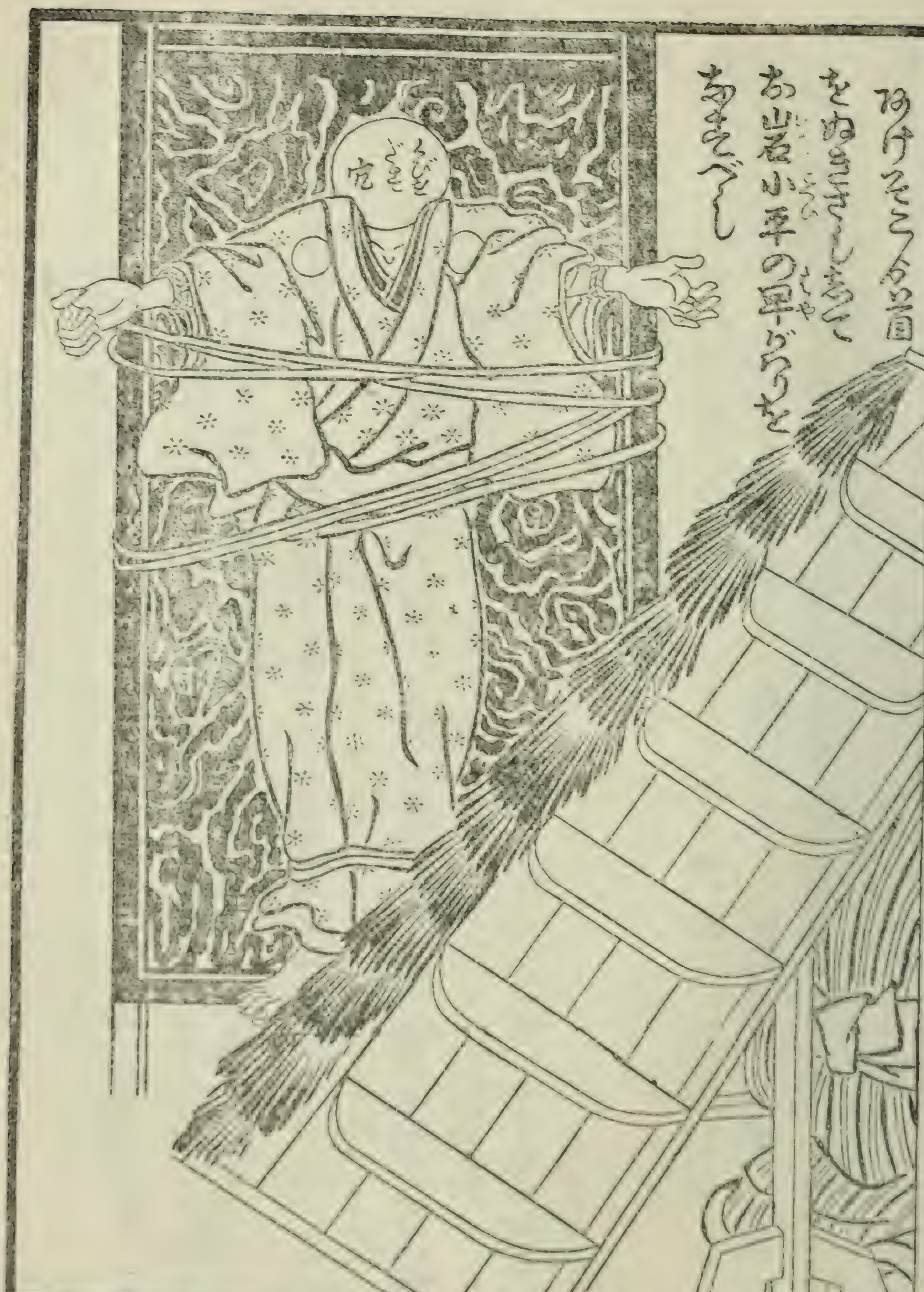
天竺徳兵衛、樋の口より出る。墓割れて、中より徳兵衛にて出る。太刀をさしてる唐裝束を引かけ、りゝしき拵らへ……同じ役の世話場に、行燈の内より幽靈出で、〆りたる門口の出入り、壁に消る……。同じ狂言に、館へ座頭徳市にて入込、前なる水[illegible]へ飛こみ、水氣たつ、此内早替りにて、向ふ揚幕より二役上使の出。

累の幽靈にて、與右衛門の庭の南瓜に目鼻ついて、亡靈佛壇の下へ消る。

菅丞相の天拜山と、九尾の狐が破風より出で、土間の見物の上を渡りて向ふへ宙乘り……。



「四谷怪談」の戸板返し



（御狂言樂屋本說より）

累と與右衞門、二役、上手の上の早替りは、藪の中へ、與右衞門、鎌にて累を引込ながら咽をゑぐるうちに、累、與右衞門に替る……。

「四谷怪談」に例の戸板返しで、小佛小平にて戸板へ打つけられ居るを、戸板を返すと、お岩にて縛りつけられ居るを、伊右衞門打つとばら〳〵と、骨になる。是にて見物ワイ〳〵といふ内、下手の樋の口より、與茂七にて、菊五郎、三役、狀箱を口にくわへて出る。

「五十三次」の狂言にて團十郎（七世）の懷ろより、菊五郎幽靈にて出で、直に奇麗の女郎の姿となりし……。

風呂敷包をかけたる柱の内より出る幽靈も、菊五郎、長谷川勘兵衞と相談の上にて工風に工風を凝せしものなり。

斯くの如く、彼れは意匠に長ぜしと共に、故實に通じ、且つ技藝に熱心なりき。

彼れは曰く、

「忠臣藏」の六段目のお輕を世話女房にしては惡し。六段目は三段目の腰元の意でやり、七段目の女郎は六段目の世話女房の意でせねばならず。總じて移り替りのある役は斯樣な用意が肝腎なり。又九太夫をするにも、動もすれば只可笑味な風やら、ねぢくれ根性のやうにして、由良之助の下風に立つ如くに見ゆる者あり。しかし九太夫は由良之助より一枚上の家老なれば、由良之助より上手に出るやうにすべし。（五世菊五郎談話）

又團藏が中村座にて「葱賣」をせし時、彼れは見物して、

鐘の內より、白衣を冠り、團藏衣を取ると、菊五郎、そりやこそ知らぬと笑ふ。團藏が顏の拵へやら、道成寺も葱賣も知らず、道成寺は女の鬼女にて眉毛なし、葱賣は男にて法界坊の執付ものゆゑ眉毛ありといふこと松綠より聞傳へたり。團藏、般若隈の拵へ知つて居るか知らぬか、見たいから見物に來たが、まだ團藏は故實をば知らぬと笑ふ。（「芝居秘傳集」）

「四谷怪談」のお岩が大當りなりし時、或る客、お化と幽靈の仕分は如何にと問ひたるに、彼れは答へて、

お化は心易く、幽靈は心苦しく勤むるなり。只後の怖さは、死ぬ時に見物に心をいれさせて置かねば、幽靈ばかり出しも怖くなき事なり。されば死ぬ時に十分怨みの殘る事を大切に勤むるなり。(「積善翁筆記」)

といへりと。尚ほ當時、門弟音次郎がお岩の吹替に出でゝ寐て居たりしを戒めて、

お岩の死骸はまだ念が殘つて居るのなり。手前のやうに好い心持で寐て居ては困るぢやねえか。足を縮めるとか、手を握るとか、何か苦い口惜い格好がありさうなものだ。(同上)

と一喝せしといふ。同じお岩の時、

奈落にて小の藏といへる弟子に、お岩の姿にて、小の藏、恐いかと聞けるに、毎日の事ゆゑ、別に恐くも御坐いませんといふ。そうかと暫らく油斷をさして、そつと隅へ入り、小の藏が探して居る處へ出て來りしに、思はずキヤツと眼を廻しける。次番の者介抱して生返りけり。菊五郎部屋へ來り、一分出して小の藏に遣り、こわいと言へば其れで安心して舞臺へ出るものを、こわくないと言つては氣が拔けるから其れで脅して見たのだ、眼の廻し賃なりと言ひし。(同上)

叉「俳優百面相」には小の藏が恐くないといひしを怒り、頭を撫つて、其の賃に一兩を與へしとあり。前の逸話を傳訛れるなるべし。

始めて「四谷怪談」を演せし時、秋山長兵衛に扮せし坂東善次(後に彦右衛門)の評に、

菊五郎のお岩、おのが首筋を捉へて引窓より拔出で、昇天する場、日々狂言にてする事ながら、お岩の顔を見れば恐ろしき事言はん

方なく、眼を開きては居られぬ程なり。後に八百蔵がお岩の時にも同じ役なりしが、さほど恐ろしとも思はず、不出來の所は差圖したり。（「筆まかせ」）

尚は伊右衛門の役は七世團十郎なりしが、お岩の亡靈が石地藏を渡し、顔を覗込みてエヘヽヽと笑ふさまの恐ろしさに、何時も顔を反けしに、それでは情うつらず、明日より能く吾等の顔を見るべしと戒められしも其の場になれば、自然に顔を反けて菊五郎の顔色を損せりといふ。又菊五郎が二度目にお岩を演せし時は、團三十郎が伊右衛門なりしが、蛇山庵室の場の餘りに怖ろしさに、終に病を獲て舞臺を休みたりと。

彼れは傲慢にして容易に人に下らず、且つ燥急にして屢事を争ひたりき。

大阪、中の芝居、「菅原」に菊五郎の菅丞相、加賀屋歌右衛門（三世）の兵衛、芝翫（四世歌右衛門）の宿禰太郎、富十郎（二世）の立田、道明寺の場、梅玉差圖にて、鶏の場の道具、奥庭に變る注文なりし。總浚に菊五郎腹を立て、道明寺は菅丞相を勤むる自分の場なり、誰が注文で無斷に道具を變へた、と言出し、一座手に汗を握る。梅玉、いや、是れは私が失策なりしとて、例の通りの道具となる、其頃飛ぶ鳥も落す勢ひの梅玉に一本參る菊五郎の氣性はえらいものなり、と皆感心せしとなり。（「俳優百面相」）

八代目（團十郎）暫の受にて、「何だ、成田屋の小僧か」といふと、立派な座頭ゆゑに、何とか言ひ直して下されといひしに、「それなら成田屋の餓鬼か」、それにても惡しとていろ／＼頼み、漸う「成田屋の息子」といつて貰ふ……。（「積善翁筆記」）

弘化四未年、一世一代の年の春、市村座にて「鏡山」と「女清玄」の索交ぜの狂言の時、自分は岩藤の心にて居たるを、是れより先き彼

れが俳優の似顔にて春畫を出版せしめたる事より、女婿にして市村座の座主たる十二世羽左衛門の感情を害し、且つ八世團十郎も其筋を憚り、彼れを一興行だけ休座せしめんとし、長十郎（五世宗十郎）に岩藤、羽左衛門（十二世）に尾上、菊五郎にお初と役を振りたり。菊五郎大立腹、おれの出る芝居で、外の役者に岩藤をさせる太夫元が解らぬ、おとわ（彼れの女にして羽左衛門の妻）を取返すといふ。羽左衛門も女房を返すとて送らして遣りしが、色々人が入りて漸くに納まり、惣太を勤むる事になりて、其の時、不承知ながら五十兩なりし。この惣太評判よくて大入、若手三人は皆惣太に喰はれたり。渡し場の幕切「舟が當りやす」といふ洒落なれど、當られえ芝居に當りやすとは言へねえ、とて「船が着きやすぜ」といふ。漸う納めて「當りやす」にして貰ひたり。（「俳優百面相」）

一世一代の時、羅漢の相手になりし日本駄右衛門に澤村長十郎（五世宗十郎）なりしが、此役納まり兼ねたるを、柳原治郎吉といへる當番、納め方にて、十日間勤むる事に賴みて初日は出し、十日目になれば又十日と段々延ばし、三十三日勤め、最早替りにして貰れと言ひ、朝になりても幕明かず。據所なく菊五郎の耳へ入れたるに大に立腹し、大聲にて、馬鹿め、日本一の菊五郎の一世一代だ、有難く勤めたが可い、増長しやアがつて、紀の國屋を此處へ呼んで來い、己が言つて聞かせると怒鳴る。長十郎これを聞いて部屋へ來り、手をつきて謝まる。菊五郎いはく、心得違ひなら勤めなさい、又先へ往つて、お前が一世一代をする時、誰にでも此の通りに言つて遣んなさい、役者の法だ、といへり。（同上及び「積善翁筆記」）

天保十五辰年、中村座、春狂言「鏡山」、岩藤に菊五郎、尾上に七代目半四郎、お初に杜若（五世半四郎）で此の時、菊五郎の岩藤いはく、大太夫もまづい岩藤ばかり相手にするから、お初の仕打がまづくなつた。杜若のお初いはく、音羽屋も舞臺でまづいお初を相手にするから、岩藤の仕打がまづくなつた、と双方で惡く言合ひ居れり。半四郎の尾上、草履打の場では菊五郎の岩藤にまづい／＼と責められ、部屋の場にては杜若のお初にまづい／＼と責められ、終に病氣になりしと。（「俳優百面相」）

「菅原」に白太夫（冠十郎）、櫻丸（業若、七世宇四郎）八重（菊五郎）、櫻丸の切腹に白太夫の鉦を叩くを、菊五郎のお八重傍から、其處ぢやない、其處だよ〳〵、と毎日小言いふ。然るに此の冠十郎の白太夫は、一生七十度もせし好評のものにて、お八重の方却て不出來なりしも可笑し。（同上）

彼れが亦金錢問題に淡泊ならざりし事は、無法なる高給を請求して同僚に疎外せられしにても知らる。弘化四年、退隱して猿若町に餅屋を營みし時なり、

店の看板は六角の臺に朱と金にて菊唐草の模樣ありて、菊壽餅と書けり。座敷へ通れば、庭には鉢植物、珍らしき品々を並べ、來客あればゼンマイ仕掛の人形、唐子の姿にて茶臺へ茶を載せ持來り、茶碗を取れば引返し、注文すれば餅もお萩も必ず人形の運ぶなり。菊五郎も素人拵にて庭の掃除などして挨拶し、中々大からくりなりしが、ある日、客人來り、いろ〳〵見物し、梅幸にも噺しかけ、餅の錢二人にて六十四文拂ひて出行けり　後にて梅幸いへるは、べら坊め、此庭を見て、おれに世事をいはせ、二人で六十四文置きしを見れば、迚も役者は止められねえ、と追ひ〳〵倦きて餅屋を止め、程なく大阪にて再勤したり。（「積善翁筆記」）

然れども、彼れも無邪氣なる人なりき。

若き時、或る大名のお姫樣に想はれ、腰元の手引にて寢所へ忍込みたりしが、姫樣はにかみて固くなつて居るゆゑ、其れぢや暇して御暇致しませう、と立上ると、あれ彼んな事を、と姫樣のいひし聲、今も耳につき、其の美き顏を眼のあたり見るやうなり、と老年に至るまで、時々のろけ貝を出しては人に語れりと。是れは默阿彌の咄なりき。（「俳優百面相」）

八代目團十郎、河原崎座にて勘平の役、三代目菊五郎、おかるに九太夫なりしが、六段目、腹切の所を菊五郎に聞き、總浚ひに八代目、

勘平をやつて居しに、菊五郎向うへ廻り見て居たりしが、差圖しながら何時か團十郎を脇へ退け、自分が勘平になつて腹切までやつて仕舞ひ、直に七段目の鳴物、踊地になると、今糊紅を遣つた者が直に九太夫で出られるものかと例の癇癪を起すと、あなたは九太夫とお輕なればいけぬ事はないといふ。菊五郎心付き、ほんにそうだつけ、といつて九太夫になりし。（「絶句帳」）

弘化四年の「尾上梅壽一代噺」に白井權八にて六郷の渡しにて立腹を切り、刀を腹へ突込む途端にドン／＼と鐵砲の音がして煙硝あがり、一際凄みに見せるといふ大切な場なりしに、或る日刀を腹へ突込まぬうち鐵砲の音が聞こえ、腹へ突込みても血が出ぬのみか、幕を引くキッカケさへ誤りしかば、樂屋へ歸つて烈火の如く怒り、座元にて彼が聟なる羽左衛門と甥のしうかとが詫びたるも、帳元の澤田屋和助が顏を見せぬとて不平なりし處へ、和助は鉢に植ゑたる大輪の菊を持來りしかば、盆栽が好める彼れは此れにて全く心解けたり。扨その鉢植を自宅へ運ばせ、妻に示すと、先つき和助が借りに來て渡せし自分が秘藏の代物なりしにぞ、思はず苦笑して其れなりに濟みしとぞ。（「篠田五柳筆記」）

彼れは非常に盆栽を愛し、印籠の中へ松竹梅を植込み、梅は花咲き、實もあり、竹は筍も出でたり。其の他、すべて細工事に器用なりきといふ。

菊五郎の妻はおさくといひ、二世三津五郎の次女にして三世三津五郎が妻の妹たり。中國の某侯の妾たりしが、菊五郎と通じて、其の妻となり、三男二女を生みき。長男は三世松助といひ、二男は菊之助、後に榮三郎といひ、三男は熊吉、後に菊之助といへり。共に夭折して著名ならず。又長女は十二世羽左衛門に、次女は四世菊五郎に嫁し、其の羽左衛門の子にして彼れの孫は即ち明治時代に九世團十郎と並び

稱せられし名優五世菊五郎なりき。更におきくの歿後、京都祇園の藝子にして同名なるおきくを娶り、此のおきくの妹は門下たる菊次郎の妻たりき。後妻おきくも幾もなく死せしかば、劇場の帳元甲子屋藤吉の養女にして吉原彥太樓の遊女たりし長尾を受出して妻となせり。

第十四章　七世市川團十郎

俳優としての經歷――彼れが面影――彼れが事業――舞臺の服裝――彼れが苦心――脚本に新解釋――文筆の才――彼れが生活――傲慢と專橫――三人の妻と三人の妾。

文化文政時代の末より次ぎの天保嘉永時代に跨がりて、獨り江戶のみならず、京阪の劇壇にまで重せられしを七世市川團十郎（成田屋白猿、寬政三―安政六）となす。彼れは實に寬政期の代表的俳優たりし五世團十郎の外孫たりき。蓋し五世の次女お住、中村座の芝居茶屋和泉屋勘十郎の養女たりしが、和倉同心の御家人長谷某が墮落して劇場の囃方となり、「笛吹勝」と通稱せられし者と通じて彼れを生めり。斯くて「笛吹勝」は一時和泉屋の養子たりしも、後に離別して丸屋七兵衞といひ、別に芝居茶屋を營みき。

七世團十郎は童名を小玉といひ、寬政六年（四歲）秋、市村座の「矢口渡」に、新田德壽丸に扮し、由良兵庫之助の森田勘彌に介抱されて登場せしを其の初舞臺とす。もし泣入る時は、代り役を出して之れを勤めしめたりといふ。其の時、叔父六世團十郎の弟子となり、市川新之助といへり、蓋し此は二世門之助

の命名する所にして、門之助の「之助」と其の俳名「新車」の「新」の字とを合せたるなり。

寛政八年十一月、河原崎座の「嚴島雪顔觀」に頼政次男源太丸といふ役名にて初めて「暫」を勤め、翌々十年九月、中村座の「大内鑑」に阿部童子に扮し、且つ改名して海老藏といへり。同十一年、六世團十郎が病死せしかば、十二年五月、其の追善として、中村座に「外郎賣」を勤め、同年十一月、市村座にて七世團十郎の名を襲ぎ、「浪滚渦」に般若五郎といふ前髪の荒事役を勤めき。次いで文化四年(十七歳)十一月、元服して若衆方より立役に進み、市村座の「八島凱陣」に熊井太郎(暫)に扮し、更に以後の俳優としての經歷は、

文化五年三月、市村座、「阿國戯場」に男之助。六月、「御伽草」(松助の小幡小平次)に細川勝元。十一月、同座、「二代源氏」に坂田公時。

文化六年四月、「曾我籬」に工藤(初役)。六月、「振袖始」に素盞雄尊、「端午帷子」に一寸徳兵衛。七月、「お七追善」に五尺染五郎。十一月、同座、「鳥羽戀塚」に金王丸と猪早太。

文化七年正月、「松曾我」に伊豆次郎、「解色絲」に神原佐五郎。六月、「墨染櫻」に奴軍助。十一月、同座、「四天王」に鬼同丸、貞信、貞門。

文化八年正月、「蓬萊曾我」に五郎と團三郎。二月、先代善追に「助六」(初役)。三月、「水滸傳」に大塔宮鐵、濱名左門之助、若黨五郎八、「お花半七」に半七。五月、「伊賀越」に志津馬、城五郎、武助、「茜染」に司之助。七月、「玉藻前」に斑足太子、雷震、坂部和田五郎・「一寸徳兵衛」に釣舟三吉。九月、「千本櫻」に小金吾、銀平、忠信、源九郎狐、覺範。十一月、同座、「嚴島」に金王丸(暫)と義平。

文化九年正月、「鶯曾我」に五郎と範頼、「色一座」に木場文藏。四月、「伊達染」に男之助と勝元、「山姥」に怪童丸、「村川」に陸助。

月、「妹背山」に鱶七。六月、「鳴神櫻」に粂寺彈正と鳴神上人。二番目に寺西閑心、大工六三、福島屋清兵衛。九月、「菅原」に梅王と輝國。十一月、森田座、「雪吉野」に篠塚伊賀守（暫）と不動明王。

文化十年正月、「曾我伊達染」に十郎（初役）、五郎、男之助、賴兼、狩野之助、百姓金五郎。三月、「濱眞砂」に高景と筑紫權六、「お染久松」（半四郎の七役）に久作。四月、「五大力」に八右衛門、「布引」に實盛。五月、「曾我祭」に團七と道具屋清七、「佛舍利」（森田座壽狂言）に長者。七月、「尾上松緑洗濯噺」に吃又平、江戸都、石見太郎左衛門、切に「八景」の所作（乙姫、浦島、景清、水賣、節季候、心猿、さらし、石橋）。八月、市村座、「累淵」に所化祐念、切に「八景」。九月、森田座、「男一疋」に寺西閑心、絹賣彌市、大岸主水。十一月、市村座、「戻橋」に碓氷貞光（暫）、相馬良門、賴光。（同座焼失につき、更に森田座にて演す。）

此の時、初めて座頭たり、且つ「評判記」の位を「上上吉」に進められき。（廿三歳）

文化十一年正月、森田座、「假粧曾我」に五郎、二番目に八幡與次兵衛、大切に「四變化」の所作。三月、市村座、「隅田川花御所染」に吉田松若、局岩藤、下部軍助。五月、「刑部話」に深尾清十郎、猿廻與次郎、小早川高景、天竺德兵衛、別所長治。二番目に「十二か月」の所作。六月、「桂川」に長右衛門と幸之進。七月、「博多織入船」に玄海灘右衛門と李榮君昇龍、「〽文月」に大工六三、「廓文章」に喜左衛門。九月、「染纈」に伊達與平、奴逸平、由留木左衛門、山形屋義平次。十一月、同座、「菅原傳授」（新作）に宿禰太郎、道眞。二番目に町抱鰕ざこの十、「吉野山」に道行。同月、森田座（スケ）、「雪陣幕」に信玄、勘助、同母敷浪、夜蕎麥賣三吉。

文化十二年正月、市村座、「富士見西行」に松浪靭負と木曾義仲、「色三組」に茶賣長藏と油屋九平次、「關扉」に宗貞。三月、「千本櫻」に義經。四月、「色夜話」に茜屋手代忠助。五月、河原崎座（再興）、「攝提兒」に久吉と春長、「艷色染」にお守傳兵衛と佐野次郎左衛

門。此の間に仙臺に赴く。七月、「汗顔見勢」に外記、政岡、仁木、男之助、道哲、與右衛門、累、頼兼、勝元、高尾(十役)。八月、「桂川」に長右衛門、「千本櫻」に忠信、源九郎狐、覺範、「安宅松」に辨慶。九月、「忠臣藏」に勘平、一文字屋、義平、由良之助(初役)、「博多高麗」に木津川藏人、「山姥」に源七。十一月、中村座、「四天王」に貞光(暫)、保昌、鰕ざこの十、山姥。

文化十三年正月、「春曾我菊」に十郎、五郎、白井權八。三月、「梅櫻」に時平、源藏、兵衛、船曳荒木左藏、「道成寺」(三津五郎)に成田八郎(押戻)。四月、「貞婦噺」に呉服屋半兵衛、菊池權之頭。五月、「忠臣藏」に桃井、一文字屋、由良之助、「國姓爺」に和藤内。九月、「布引」に多田藏人、「噂菊月」に手代文八。十一月、河原崎座、「清盛榮花臺」に河津三郎、金石丸、成田不動、「戀曲者」に熊坂長範。

此の時「至上上吉」に進みき。(廿六歳)

文化十四年正月、「曾我賜物」に伊藤祐清と艾賣五郎兵衛實は景清、「利生組絲」に半時九郎兵衛と本町綱五郎。二月、「東文章」に清玄、稻谷半兵衛、忍惣太、百姓彌左衛門、切に「五節句」の所作。(大神樂、櫻草賣、矢根五郎、玄宗皇帝と子守女、三社祭)。八月、「一谷」に庄屋、忠度、義經、「紙治」に治兵衛と傳海おさん。九月、「巖流島」に吉岡帶刀と宮本無三四。十月、「戀女房」に伊達與作と馬方八藏。十一月、中村座、「和合太平記」に正行、衛士又五郎、鰕ざこの十、篠塚伊賀守(暫)。二番目に大工長藏と坊主小兵衛。

前年の「梅櫻」に五世幸四郎と不和なりしを、此處に於て和合せしなり。

文政元年正月、「曲輪日記」に五郎、鬼王(初役)、團三、「濡髮長五郎」、「鎌倉三代記」に三浦之助。三月、「東山殿」に下部兎藏と佐々木桂之助、「幡隨長兵衛」に關心。五月、「妹背山」に久我之助と鎌足、「雁金五紋」に文七。六月、森田座、「妹背山」に大判事、[illegible]、鱶七、求女、「東染」に非人勘太と稻葉幸藏。七月、中村座、「彦山」(增補)に絹川彌三郎。八月、「阿國戲場」に八汐、頼兼、男之助、勝元。九月、

「忠臣講釋」に喜平と石屋五郎太、大切所作に敦盛、米搗、渡守。十一月、玉川座、「四天王」に金時、良門、綱、貞光（暫）、成田屋三升。十二月、「伊豆暦」に工藤と河津三郎。

文政二年正月、「恵方曾我」に工藤、十郎・玉川湯の三助、佐野次郎左衛門、三宅島の丈八、景清。三月、「千人禿」に茜屋半七實は熊坂長範、今市善右衛門、清盛、二番目に「助六」に助六、「お染久松」に久作と飴賣。四月、「忠臣藏」に七役（判官、桃井、勘平、となせ、定九郎、善平、由良之助）。五月、「加賀染」に多賀大領、湯島の三吉、長谷部重左衛門、木屋辰五郎實は合邦太郎。七月、「山崎踊」に山崎與五郎、成田屋三升、野手の久作、生駒長吉、「戻駕」に次郎作。十一月、河原崎座、「江戸花鎗」に正清、信孝、久吉、指物師清兵衛實は大内義弘。

文政三年正月、「似顔繪本」に科野幸藏、薩島兵衛之助、花守杵藏、「帯屋」に長右衛門と蒔繪師粂次。二月。「戀江戸染」に小姓吉三郎、五尺染五郎、仁田四郎。三月、「隅田川」に松若、岩藤、軍助、山田三郎。四月、「盛衰記」に源太、齋藤吾、「兜軍記」に重忠、切に「五節句」の所作。五月、「双蝶々」に長吉と十次兵衛、「五大力」に源五兵衛。七月、「いろは建前」に堀部安兵衛・石切五郎太、重太郎、由良之助、「お染久松」に久作と久松。八月、「妹背山」に求女と入鹿。九月、「大内鑑」に保名と野干平、「梅由兵衛」に由兵衛。十一月、中村座、「瓢軍配」に久吉、小猿、白吉、岩窟の五郎藏、明智左馬之助。

文政四年正月、「曾我昔初」に五郎、梅澤屋小五郎兵衛、「極彩色」に喧嘩屋五郎右衛門。三月、「解脱絹川」に豆腐屋丁稚、谷藏、與右衛門、祐念和尚。四月、「出入湊」に孫三郎。正月、「御所櫻」に義經と押小路左衛門、「忠臣藏」に桃井、石童、彌平。七月、「白石噺」に常悦と惣六、「昔繪双紙」に油屋林孝、「帯屋」に長右衛門。十一月、市村座、「龜顔觸」に般若五郎（暫）、宗貞、五代三郎、高安左衛門。

文政五年正月、「御攝曾我」に十郎、五郎、南與兵衛實は引窓小僧與五郎、船頭鷲の長吉、「兜軍記」に重忠。三月、「信仰記」に藤吉、直信、春永、「時鳥」に稲谷半兵衛。五月、「千本櫻」に忠信、源九郎狐、彌助、「色深川」に玉屋新兵衛。八月、「敵討名歌曙」に河星大領、小

割傳内、奴文字助。九月、「大内鑑」に保名、「色分限」に淀屋新兵衛と武左衛門、「女鉢木」に時頼、「妹背山」に求女と入鹿。十一月、同座、「竹馬友達」に仲光、袴垂、貞光、頼光、筏乗角藏、火の車鬼七、伊賀壽太郎。

文政二年に「助六」に扮してより、三世菊五郎と不和なりしを、此の時、和解して再び一座したりき。

文政六年正月、「曾我組絲」に赤澤十内、半時九郎兵衛、本町綱五郎。三月、「比翼稲妻」に不破伴右衛門後に寺西閑心、幡隨長兵衛(初役)。五月、「菅原」に輝國と松王、「夏祭」に道具屋清七と赤坂奴龜吉。六月、森田座、「成田利劔」に不動明王、三國太大相國、白菊丸、備前坊、船頭彌三郎、二番目に百姓與右衛門、久保田金五郎、祐念。七月、市村座、「石尊贈」に志賀の宿無團七、荒木政右衛門後に月本武藏、「松竹梅」に土左衛門傳吉と仁田四郎。九月、「梅の由兵衛」に金谷金五郎後に赤手拭長五郎。十一月、同座、「大和大和」に孝武、伊賀壽太郎、三田の仕、夜番人吉六、純友一子十太丸、貞光(暫)。

此の年、彼れが子新之助生れき。

文政七年正月、「假名曾我」に絲竹庵加古川實は工藤、其角實は大岸藏之助。二月、「茶湯景清」に景清。三月、「牡丹蝶」に局岩藤、「實途飛脚」に丹波屋鬼藏。四月、「布引」に瀬尾十郎(初役)。五月、「合邦衢」に多賀大領、佐栁大學之助、立場太平次。六月、甲州に赴く。七月、成田へ赴く。八月、市村座、「妹背山」に入鹿、「利生組絲」に本町綱五郎と半時九郎兵衛、「屋舖」に次郎作。九月、「双蝶々」に放駒と南與兵衛。十一月、「惠源氏」に文覺、宗盛、宗清、稲野屋半兵衛實は澁谷五郎、八郎爲朝(暫)。

文政八年正月、中村座、「曾我中村」に五郎、笹野權三、茜足袋屋婿長九郎、白藤源太。三月、「五人男」に雷庄九郎實は小見川傳藏、野田角右衛門。五月、「初冠曾我」に下部初平後に尾上伊太八、鶴賀時次郎、曾我五郎、本町綱五郎。六月、河原崎座、「布引」に實盛、「五

大力」に源五兵衞。七月、中村座、「忠臣藏」に桃井、石堂、彌五郎、義平、文吾、「四谷怪談」に民谷伊右衞門。九月、「時桔梗」に春永、「三五大切」に船頭笹野屋三五郎。十一月、同座、「鬼若」に鬼若丸後に辨慶、不動明王、俊寛實は有王丸後に熊坂長範、鬼門喜兵衞、猿廻桃太。

此の時より、始めて「大上上吉」となれり。（三十五歳）

文政九年二月、河原崎座、「三升曾我」に十郎實は團三郎後に縄拔長吉、五郎、大藤内實は備前平四郎。三月、「花雨」に稻野屋半兵衞、「三人形」に勇み商人、景清。四月、中村座、「五山桐」に久吉、「彌生壽」に土左衞門傳吉、「花川戸」に幡隨長兵衞。五月、「藤川船」に藤川水右衞門、力持金五郎。七月、河原崎座、「腰越狀」に龜井、「陸玉川」に奴三太郎、「五大力」に源五兵衞。八月、中村座、「曾我中村」に天日坊實は清水冠者、雛鶴屋傳三實は京の次郎。九月、「盛衰記」に平次と松右衞門。同月、河原崎座、「信仰記」に東吉。十一月、市村座、「伊勢平氏」に猪野早太（智）、獵人義藏實は惡源太、華賣六郎兵衞實は瀨尾太郎、

文政十年正月、河原崎座、「曾我島臺」に作左衞門、五郎、景清、「妹背山」に玄上太郎。三月、市村座、「阿國歌舞伎」に土手道哲實は島田重三郎、若徒團助、賴兼實は道哲、仁木、「雪月花」に使丁、納豆賣、草摺曳。五月、「鬼一」に鬼若、喜三太、「盛衰記」に平次、「夏祭」に團七。六月、河原崎座、「五十三驛」に中野藤助後に由井民部之助、江戸兵衞後に藤川水右衞門、牡丹獅子の八、廻し次郎吉、幡隨長兵衞。七月、「草色時」に白藤源太。同月、市村座、「忠臣藏」に寺岡、桃井、定九郎、下部角助、石堂、文吾、義平（七役）。九月、「反魂香」に又平、「廓文章」に喜左衞門。十月、「布引」に瀨尾十郎。十一月、同座、「源氏顔鏡」に海野小太郎、強盜あざ丸、景清、町抱權吉、有田五郎。十二月、河原崎座、「盛衰記」に平次と松右衞門、「花川戸」に幡隨長兵衞。

文政十一年正月、市村座、「花贔曾我」に伊豆次郎、船橋次郎左衞門、箱根の閉坊、足駄齒入權助、日雇取傳三　五郎、三月、「五山桐」に

高景と五右衛門、二番目に「助六」。五月、「菅原」に道實と松王、「曾我祭」に五郎の靈。六月、「廿四孝」に越名彈正・助助、「千兩幟」に岩川。七月、市村座、「千本櫻」に義經、權太、相模五郎、中間角助。九月、「合法衢」に佐枝大學之助と立場太平次、「姫小松」に鬼王丸。

十一月、河原崎座、「魁源氏」に鬼源太、難波六郎、奴木場平、伊藤祐清、金王丸(暫)、籠屋甚兵衛、湛蓮長五郎、清盛。

文政十二年正月、「魁曾我」に箱根の閉坊、辻八卦高島甚内實は粂平内、駕かき八藏、京の小次郎實は松若丸、白柄十右衛門、景清、「吉野拾遺」に正行。三月、「阿國戯場」に絹川谷藏、仁木、八汐、男之助、劇場燒失につき、成田、善光寺、高野山へ參詣して上阪。五月、大阪、中座、「盛衰記」に平次と松右衛門、「夏祭」に團七。六月、「戻駕」に次郎作。八月、「阿國戯場」に仁木、道哲、男之助・八汐、谷藏、頼兼、勝元(七役)。「花川戸」に長兵衛。九月、「合法衢」に大學之助と太平次、「鬼若」に兒鬼若丸・切に所作(安宅松、多田藏人、冷水賣・矢根五郎)、「近江源氏」に和田兵衛と高徳。堺へ赴く。十一月、京都 北側芝居、「連歌評判」に春永と正清。

これ彼れが最初の西上にして、此れより「極上上吉」に進みたり。(三十九歳)

天保元年正月、大阪、角座、「雪月花」に左枝政右衛門。三月、「忠臣藏」に桃井、石堂、寺岡、切に「助六」。四月、京都、北側芝居、「容貌記」に平次と松右衛門、「阿國戯場」に勝元、「五大力」に源五兵衛。伊勢より岡山に赴く。八月、江戸、河原崎座、「[illegible]」に此村大炊之助、髮結綱五郎、石川五右衛門、「大内鑑」に保名。十一月、同座、「澁谷兵」に金王丸(暫)、牛飼ほう六、遠藤武者、[illegible]實は惡源太、宗清。

天保二年正月、「曾我本説」に梅澤屋小五郎兵衛、五郎、景清、喧嘩屋五郎兵衛、朝比奈藤兵衛、露の五郎兵衛。三月、「牡丹[illegible]」に[illegible]左衛門、局岩藤、「五大力」に三五兵衛。五月、「矢口渡」に兵庫之助と頓兵衛、「山姥」に源七、「曾我祭」に[illegible]と奴。六月、「[illegible]太郎」に

に團平と伴左衛門、「伊勢音頭」に青江兵助。七月、「一谷」に六彌太と直實、「廓文月」に願鐵坊と船橋次郎左衛門。九月、「菅原」に松王と道實。十一月、市村座、「菊伊達染」に男之助、三浦屋四郎兵衛、伴左衛門。

天保三年三月、「隅田川」に松若と岩藤、二番目に「助六」。四月、「盛衰記」に平次と松右衛門、「矢口渡」に由良兵庫と頓兵衛、「矢根」に五郎、「三代記」に藤三。五月、「隅田川」に松若と猿島惣太。地方に赴く。十一月、河原崎座、「御攝綱」に親王將平、鰕ざこの十貫は渡邊綱、本町丸綱五郎、しつぺい太郎、山姥。

此の三月、子海老藏に團十郎の名を讓りて、自ら海老藏と改稱せり。（四十二歲）

天保四年正月、「三升曾我」に八幡三郎實は赤澤十内、箱王丸、「戀江戸染」に土左衛門傳吉。三月、「忠臣藏」に桃井、由良之助、勘平、平右衛門（蜂巣）、直助權兵衛、天川屋義平。五月、「玉藻前」に木幡左衛門、鳥羽帝、上總之助、「菖蒲帷子」に出村新兵衛。七月、中村座、「一谷」に景清（錣引）、義經、「布引」に實盛、「五大力」に三五兵衛と源五兵衛（歌右衛門と一日代り）。四月、市村座、「夏祭」に團七、「忠臣藏」に義平。九月、河原崎座、「吉原雀」に賴兼、谷藏、道哲、八汐、仁木、勝元、與右衛門。十一月、市村座、「對弓取」に遠藤武者、惡源太、瀨尾太郎。四月、森田座、「四天王」に茨木屋鬼七。

天保五年正月、市村座、「書始曾我」に閉坊、京の次郎、五郎、毛剃九右衛門、出村新兵衛、「姬小松」に有王。劇場燒失につき上阪、三月、大阪、角座、「五山桐」に高景、久吉、「淺澤紫」に小寺十内、「二代鑑」に秋津島、「鳴神櫻」に鳴神上人。五月、「三代記」に三浦義村、「夏祭」に一寸德兵衛。下の關より九州へ赴く。

天保六年六月、備中に興行。八月、江戸へ歸る。九月、市村座、「忠臣藏」に桃井、由良之助、勘平、平右衛門、定九郎、宅平。十一月、中

村座、「菅原」に梅王、覺壽、源藏、「關扉」に關兵衛。同月、市村座、「詠千本」に雑木善太、辨慶實は不動、修行者讃由實は景清。

天保七年三月、森田座、「國字曾我」に工藤、鬼王、不動明王、近江小藤太、船頭伊豆屋次郎、「琴責」に岩永。四月、「八犬傳」に左母次郎、信乃、道節、鳴神上人、小文吾。七月、「廿四孝」に花作關兵衛、越名彈正、「四谷怪談」に田宮伊右衛門と直助權兵衛。九月、「妹背山」に大判事、「名古屋帶」に不破伴左衛門。十一月、同座、「勢源氏」に成田五郎、山賤松藏、熊谷(扇屋)、番太郎仁三。

天保八年正月、市村座、「根元曾我」に六部實は景清、閉坊、五郎、「博多小女郎」に毛剃。三月、「櫻彩幕」に佐野源左衛門、岩藤、「源平躑躅」に熊谷。五月、「盛衰記」に平次、「嫁きり」に浪人沼五郎。六月、尾州へ赴く。十一月、市村座、「三升角鐔」に鮭坊主、貝門、山姥、「關扉」に關兵衛。

天保九年正月、河原崎座、「布引」に瀬尾、「一谷」に熊谷、「戻駕」に次郎作。三月、「菅原」に覺壽、松王、「木場稿」に才三、「琴責」に重忠。五月、「雨鉢木」に狩野源左衛門、二番目に船頭長吉。七月、「雲井曲」に淺間左衛門。八月、「日高川」に純友と剛寂僧都。同月、市村座、「精進俎板」に長兵衛。九月、河原崎座、「大當記」に光秀、松永大膳、山口九郎次郎。十一月、同座、「平家世話」に長田庄司、股野五郎、木場平、寒念佛實は熊坂長範、宗清、雷の源。同月、中村座、「功力妙法字」(菊五郎の一世一代)に貫名八郎。

此の時、「大極上上吉」の位に進みき。(四十八歳)

天保十年正月、河原崎座、「陽向曾我」に工藤、閉坊、八汐、勝元、男之助、「二代勝負附」に鬼も獄。三月、「禅書」に伊賀守と潮太郎、「國姓爺」に和藤内。六月、市村座、「忠臣藏」に桃井、定九郎、直助權兵衛、飾磨宅平、義平、由良之助。七月、河原崎座、「戀江戸染」(男草履打)に岩藤、彈正左衛門、土左衛門傳吉、仁田四郎、「千本櫻」に權太、忠信、辨慶(手洗)。九月、「安達原」に貞任と老女岩手。十一月、

同座、「曳綱坂」に渡邊綱、伊賀壽太郎、親猿實は金平、「阿漕浦」に次郎藏。同月、中村座、「琴責」に重忠、「阿漕浦」に同上。

此の「戀江戸染」の興行中、お七に扮せし五世半四郎が舞臺に卒倒して開演すること能はざりしかば、彼れは同じ鬘と衣裳にて間に合ふものを即座に工夫し、即ち「千本櫻」にて其の日は椎の木場だけを出し、傳吉の鬘に五尺染五郎の衣裳を着て自ら權太となり、小姓吉三の鬘を散らして五世宗十郎に小金吾、下女お杉を其のまゝ小せんを勤めさせ、翌日より次第に後幕を出し、半四郎の急病にて引籠もりしに拘はらず九日まで一日も休みなしに演じたりといふ。

天保十一年正月、河原崎座、「若木場曾我」に五郎、八幡三郎實は赤澤十內、半時九郎兵衛、本庄綱五郎。三月、「五山桐」に五右衛門と大炊之助、「勸進帳」(新作)に辨慶。五月、「忠臣藏」に師直、由良之助、數右衛門、直助。六月、中村座、「達浴衣」に船橋治郎左衛門と願鐵坊。八月、「信仰記」に松永大膳と光秀。九月、「菅原」に松王と覺壽。十一月、河原崎座、「雪武田」に山本勘助、鬼兒島彌太郎、鵜飼の七、越名彈正、橋大工吉五郎、遠藤武者。

天保十二年正月、「和合曾我」に五郎、門番五郎吉、若徒藤兵衛。四月、「一谷」に彌陀六と田吾平、「八幡鐘」に香具屋彌兵衛。五月、「矢口渡」に由良兵庫と頓兵衛、「初冠曾我」に五郎。これより旅行。九月、中村座、「双蝶々」に濡髪長五郎。十一月、河原崎座、「菅原」に梅王、覺壽、源藏、「七人男」に毘沙門の庄九郎。

天保十三年正月、「曾我門松」に五郎、近江小藤太、濡髪長五郎　景清。三月、「景清」。(歌舞伎十八番)

然るに、四月六日、町奉行の檢擧する所となり、　手錠の上家主に預けられ、六月に至り、江戸十里四方追

放に處せられたり。彼れが罪狀は前年十月、其筋より下されし質素儉約の令に觸れたるにて、即ち舞臺に武用の甲冑を用ひし事、居宅を長押造りにし、床に塗かまちを用ひし事、其の他華美高價なる小道具を所持せし事等にありき。（五十二歲）

斯くの如くして、江戸を追放せられし彼れは下總の成田に赴きて新勝寺内に蟄居せしが、翌天保十四年秋、幡谷重藏と變名して伊勢の劇場に出で、十一月に至り、海老藏と復稱して、大阪に現はれ、是れより近畿の各所に出演せりき。

天保十四年十一月、大阪、角座、「菅原」に道實、覺壽、松王、「月景清」に景清。

弘化四年正月、同座、「飛馬始」に駒木根八郎、「矢口渡」に由良兵衞と頓兵衞、「近江源氏」に時政、「千本櫻」に義經。三月、「太功記」に光秀と慶覺上人、「お染久松」に鬼門喜兵衞。五月、京都、北側芝居、「太功記」に同上、「月景清」に景清、「千本櫻」に義經、覺範、權太。「伊賀越」に大内記、丹左衞門、「時雨傘」に西澤一風。七月、大阪、若太夫座、「小倉色紙」に向井金左衞門と宮澤十内、「大塔宮」に齋藤太郎左衞門、「繿縷錦」に春藤治郎右衞門。九月、中座、「廓源氏」に不破伴左衞門、猪の熊門兵衞、「鬼一法眼」に鬼一、「五雁金」に堤團右衞門、「布引」に實盛。

嘉永元年正月、大阪、中座、「曾我」に五郎、景清、梅澤屋小五郎兵衞、熊谷蓮生坊。三月、「いろは假名」に由良之助、石堂、早野三左衞門、矢間喜内。五月、京都、南側芝居、「彦山」に六助、毛利音成、轟傳五右衞門、「先代萩」に男之助、「勝相撲」に白藤源太。六月、明石へ赴く。七月、大阪、角座、「三國一」に日本駄右衞門、幡隨長兵衞、寺西閑心、「白石噺」に常悅、宗六、鶴羽九郎右衞門、「忠臣講釋」に矢

間十太郎。九月、「彦山」に六助と音成、「菅原」に覺壽と松王、「双蝶々」に濡髪。十一月、京都、北側芝居、「菅原」に同上、「白石噺」に同上、「曾我」に五郎、「巣鶴」に次郎作。
嘉永二年正月、大阪、中座、「石川染」に五右衛門、石田局、阿波座太郎助、「曾根崎」に淺田宗次。三月、「伽藍鑑」に小野妹子、守屋大臣、「近江八景」に深見十郎右衛門と金屋市兵衛、「繿縷錦」に春藤治郎右衛門。五月、筑後芝居、「秋葉權現」に日本駄右衛門、「双蝶々」に濡髪、「五大力」に三五兵衛。七月、京都、北側芝居、「石川染」に石田局、相模屋治兵衛・神部信孝、「伊勢物語」に紀有常、「五大力」に三五兵衛。八月、大阪、中座、「伊勢物語」に名虎亡靈、斑鳩藤太、小よし、「木津川八景」に堀口萬右衛門、腕の治郎兵衛。九月、角座、「夫婦塚」に出村龍覺と南宮内膳、「紅梅靮」に梶原平三、「八百屋献立」に山脇牛十郎。十月、竹田芝居、「日蓮記」に南部十郎、波木井庄司、船頭彌三郎、「關扉」に關兵衛。十一月、京都、北側芝居、「忠臣藏」に桃井、石堂、千崎彌五郎、「薄雪」に伊賀守と大膳、「双蝶々」にお關、「繿縷錦」に春藤治郎右衛門。これより岐阜に赴く。

此の十二月、追放赦免の命下りしかば、一旦大阪へ引返し、更に東下の途次、翌年二月、名古屋の舞臺に現はるゝこと六日間にして、九年ぶりに江戸へ歸りたりき。

嘉永三年三月、江戸、河原崎座、「御江戸景清」に熊谷と景清、「花川戸」に幡隨長兵衛。五月、「伊勢物語」に名虎亡靈、斑鳩藤太、紀有常、「色吉原」に佐野治郎左衛門、「蓮生問答」に蓮生坊、「矢口渡」に頓兵衛。同月、中村座、「國姓爺」に甘輝。七月、河原崎座、「花紅葉」に宇治常悅、局岩藤・大黑屋宗六。九月、「合法衢」に佐枝大學之助と立場太平次、「虎の卷」に鬼一、「兜軍記」に岩永。十一月、同座、「小田雪」に光秀、「布引」に瀬尾、「關扉」に關兵衛。

嘉永四年正月、「伊達競」に仁木、八汐、不破伴左衛門。三月、「濱眞砂」に石田局と五右衛門、「戀飛脚」に丹波屋忠蔵、「戻駕」に次郎作。五月、「鶯墳」に佐々木源太左衛門と淺香十左衛門、「四谷怪談」に伊右衛門と直助權兵衛。六月、「盛衰記」に松右衛門。八月、「月宮本」に隨翁軒、白倉傳五右衛門、百姓七助。九月、「大塔宮」に齋藤太郎左衛門、「五大力」に三五兵衛。十一月、同座、「瀧白旗」に教經、閻魔小兵衛、辨慶、「青柳硯」に駄六。

嘉永五年正月、「雁金染」に比企義員、肥前屋重兵衛、雷庄九郎、「女舞鶴」に城の九郎。閏二月、「妹背山」に大判事と蝦夷、「蓮生譚」に蓮生坊、「双蝶々」に治部右衛門。四月、「三桝太夫」に三荘太夫と鬼柳一角、「伊勢音頭」に銅脈金兵衛。九月、「一谷」に彌陀六、「安達原」に貞任、「勸進帳」に辨慶。十一月、同座、「假名書講釋」に矢間喜内、不破數右衛門、植木屋杢右衛門、「勸進帳」に同上。

此の「勸進帳」を一世一代と號せしが、再び大阪へ上りき。

嘉永六年正月、大阪、角座、「曾我」に五郎、百姓木場七、岩永右衛門、景清。三月、「忠臣藏」に桃井、神田與左衛門、伯母おくよ、平右衛門、赤垣源藏、長濱十太夫、義平、定九郎、「双蝶々」に濡髪。五月 京都、北側芝居、「曾我」に五郎、景清、「大内鑑」に惡右衛門。これより宮島へ下る。九月、中座、「出世請狀」に光秀、「誠心錄」に大賀悅善之頭、「富士見西行」に義仲。十一月、京都、北側芝居、「忠臣藏」に桃井、由良之助、「關扉」に關兵衛、「太功記」に光秀。

安政元年正月、大阪、若太夫芝居、「布引」に實盛と瀨尾、(國藏と一日替り)「鏡山」に岩藤、「極粉色」に梅の由兵衛。三月、筑後芝居、「天滿宮」に時平、覺壽、孔雀三郎、「客競」に奈良屋權右衛門。名古屋へ赴く。八月、大阪、中座、「兒雷也」に惡名眼八、仙素道人、澤見十左衛門、「與話情」に番頭多左衛門。十月、「廿四孝」に越名彈正、横藏、「薫伽羅」に八汐、仁木、「雪後朝」に山名屋四郎兵衛。十一月、

京都、北側芝居、「先代萩」に仁木と八汐、「江戸仕入」に幡隨長兵衞。

此の「兒雷也」の前に、彼れの名古屋、大阪に同伴せる長男八世團十郎が自殺を遂げ、急に其の弟猿藏をして兄の代役をさせしが、猿藏も翌年に病歿したりき。

安政二年正月、大阪、中座、「五十三驛」に下人久助、鈴鹿の田村太郎、大賀悦善之助、「鏡山」に牛島主税。三月、「岩見重太郎」に廣瀬軍藏、岩見重藏。四月、伊勢より尾張に赴く。七月、大阪、角座、「龜山」に赤堀水右衞門。九月、中座、「花繪合」に不破伴左衞門、杣六母小わた。十一月、京都、北側芝居、「薄雪」に團九郎と伊賀守、「芋源氏」に狼の谷治、「重井筒」に治右衞門

安政三年正月、大阪、中座、「浪乘曾我」に大藤内後に近江小藤太、五郎 文覺、鼠小僧、景清。三月、「昔鐙」に大父母孫右衞門と萩山長兵衞。五月、「譽高輪」に定九郎、師直、由良之助、「雁金五紋」に雷庄九郎。八月、「相宿噺」に郷戸龜四郎、「近江源氏」に和田兵衞と時政。これより堺に赴く。九月、大阪、若太夫芝居、「源平躑躅」に蓮生坊、「薄雪」に伊賀守、「盛衰記」に平次と松右衞門。十一月、京都、北側芝居、「青陽鷄」に木羽孫右衞門、「一谷」に六彌太と彌陀六、「三略卷」に鬼一、「近江源氏」に時政、「お七」に厚倉十内。

安政四年正月、大阪、中座、「長者鑑」に唐絲、頼豪阿闍利、清水義高、「勸進帳」に辨慶、「紅梅靮」に大場三郎。三月、「伊賀越」に澤井又五郎、母鳴見、山田幸兵衞、「磯馴松」に此兵衞。これより堺と宮島とへ赴く。九月、角座、「近江八景」に醫師玄龍、八百屋伊右衞門、「大塔宮」に齋藤太郎左衞門、「江戸櫻」に助六。兵庫に下る。十一月、京都、南側芝居、「小野道風」に法輪尼、「芋源氏」に松枝屋五郎兵衞、大父母孫右衞門、「布引」に瀨尾、「戻駕」に次郎作。

安政五年正月、大阪、角座、「英草紙」に尼子秀丸と白猿丹後、「女舞鶴」に荏柄平太、「御傳話」に鼠壁次郎吉、「戻駕」に次郎作。三月、京

都、南側芝居、「妹背山」に大判事と鱶七、「大塔宮」に齋藤太郎左衛門、「江戸仕入」に幡隨長兵衛。七月、江戸、市村座、「太功記」に光秀、「返魂香」に、將監、「千兩幟」に鐵が嶽。十一月、「白石噺」に宗六、「時頼記」に時頼、「比翼塚」に幡隨長兵衛。十一月、同座、「柳島」に金谷金左衛門、「關屏」に關兵衛。

此の時、七年ぶりにて江戸へ歸れるなり。（六十八歳）

安政六年正月、中村座、「伊賀越」に又五郎、鳴海、幸兵衛、「草摺曳」に五郎。

此れより病を獲て、三月は「妹脊山」に大判事と入鹿の筈なりしも、終に舞臺に出でず、四月廿三日に歿しき。（六十九歳）

團十郎は小柄にて眼大きく、且つ音調にすぐれ、口跡に巧みなりきといふ。「俳優百面相」に曰く、

顔は親子とも九代目と違はず。九代目よりは男振が好かつたかも知れねど、一寸恐い方にて、眼はもう一つ大きく、何方かといへば出眼でありしゆゑ大きく見えたのかも知れず。調子は九代目の風にて、市川代々特有の名音聲でありき。九代目は時世と共に改良して段々サラリとして居たれど、そこは昔の役者だけ多少粘つた風でありたり。

又四方梅彥翁の談話に、

眼玉は今の九代目よりまだ少し大きい位で、片眼の黒玉が少し藪睨みといふ風になつて、却て其れで睨みが利きました。聲色は九代目其の儘……。

此等によりて彼れが面影の一斑を知るべし。而して彼れの特色は其の藝の多方面なるにありき。市川

家累代の得意たる荒事と武道とは又彼れの本領とする所にして、「國性爺」の和藤内、「勸進帳」の辨慶、「一谷」と「扇屋」との熊谷、「菅原」の松王、「盛衰記」の樋口、等は其の當り藝なりしのみならず、稍世話物



七世團十郎の「辨慶」（「死繪」より）

的なる桃井若狹之助、大賀悦善之助の如き殿樣役、及び權八の如き武道と和事とを兼ねたる役を能くし、又紙治の如き、長右衞門の如き、純和事にも長じ、且つ大工六三の如き、生世話物の勇み肌にも成功したり。一方に於て、先輩幸四郎式なる仁木彈正、赤堀水右衞門の如き實惡に適せしと共に、又民谷伊右衞門の如き色惡をも得意とし、且つ時代には「盛衰記」の平次、世話には「白木屋」の丈八の如き安敵をも能くし、鬼一、頓兵衞、時政の如き老人役に扮すると同時に、岩藤、八汐、覺壽、石田局、山姥の如き老女方をも勤め、兼ねて「四季」「十二か月」等の所作事に堪能なりしと共に、早變を

能くし、別に、辨慶（「勸進帳」）、石田局、鬼一、實盛など、能の場面、動作及び服裝を歌舞伎に寫したるは彼れが事業の著しきものゝ一つなりき。

要するに、彼れは三世團十郎の如く、時代と世話と、荒事と和事とを兼ね、而も四世團十郎の如く、實惡に長じ、且つ五世團十郎及び五世幸四郎の如く、生世話物をも能くし、和實を專らとせし三世三津五郎の江戸風に加味するに、殆ど萬能なりし三世歌右衛門の上方式を以てし、此等を打して一丸となせるもの即ち七世團十郎の技藝なりしなり。特に累と高尾との如き若女形にも扮せしは、彼の四世團十郎が老女役を勤めし先例と異り、實に市川家には破格の事たりき。而も晩年屢京阪に去來せしかば、前にいへる歌右衛門等の上方の藝風に通じて而も江戸風に之を折衷せる所に彼れの特色を認め得べし。

補 阪野積善翁の談話に、七代目の「勸進帳」は九代目のやうに踊の間にうまみは無かりしが辨慶といふ凄みは遙かに優れたりと。又「市川團藏自傳」に、「平がな」の瀬尾にて「腹に腕があるからは胸に思案がなくちや叶はぬ」といふ所を能く演つていふが、海老藏はセヽラ笑つて言つたとあり。此等彼れが藝風の一斑を知るに足る。

彼れは亦その舞臺の服裝に種々なる意匠を有しき。前にいへる如く能の風を模せしと共に、一方には、時代物にも、世話物にも、其の年代の風俗を寫實する事に力めたり。現に其の眞物の甲冑を舞臺に用ひし事が彼れの江戸を追放せられし罪科の一つなりしといふ事も、單に豪奢といはんよりも寧ろ此の寫

實熱が累をなせるならん、又彼れが「四谷怪談」の伊右衛門に扮したる時の逸話あり。

　四谷の組屋敷へ何うかしたる事ありて、顏を出さなければならぬ事になり、顏役などに連れられて行きしに、其の組にて今ならば副頭取ともいふべき、十五俵か廿俵取の三十格好の人が、黒に肩入をしたる着物へ手拭で肩襷をして、内職に傘を張つて居たる其の拵へが大に海老藏の氣に入り、何かで一つあれを用ゐようと心掛けて居たる處、「四谷怪談」の伊右衛門を勤むる事になり、早速幕明の傘張をして居る處へ之を用ゐしが、今日まで傳はつて居れり。(「俳優百面相」)

其の他、天保五年に初めて「毛剃」に扮せし時、彼れが豫て長崎に巡業して舶來の器財織物等を齎らし歸り、且つ其の地の方言を覺えたるを舞臺に應用して大喝采を博せる如き、如何に彼れが寫實に苦心せしかを知るに足る。而も此の風俗の寫實は彼れが實子たる九世團十郎に傳はりて、明治に謂はゆる「活歴」といふ新藝風を生ずるに至りき。

彼れが苦心は獨り其の舞臺の服裝のみにあらざりき。其の能を模せる藝のうちに最も傑作と稱せらるゝ「勸進帳」を始めて演せし時、

　屹度今度は「勸進帳」だから弓町さん(能役者觀世清孝)が見物遊ばすに違ひないと、茶屋といふ茶屋へ手を廻して、御出でなされたら知らしてくれ、と頼んで置いたから、吾々が見物した事は筒拔に知れてしまひました。頓て中幕の「勸進帳」になつて、まだ辨慶も何にも出ないうちに、弓町がフツと吹出しました。然し笑つては惡いと思つたから、扇子を顏へ當てゝジツと堪えて見物して、茶屋へ歸つて飯を食ふなんて皆が騷いで居ますと、只今海老藏が挨拶に伺ひます、といふ事で吃驚しました。……あなたがたが

御覽遊ばして如何思召す、といろ〳〵尋ねまして、時に伺ひますが、中幕が明きますと何か御笑ひ遊ばして御顏へ扇を御あて遊ばしましたが、あれは如何致したもので御座いませう、と言つたので吃驚しました。何だつて辨慶が未だ舞臺へ出ない前だから知れる筈はないと思つて居ますと、海老藏はチヤンと三階から見て居たんださうで、弓町さんが何んな風をして居るか、と幕が明くから眼を放さないで見て居ると言ひます。あれは笑つたんぢやない、と言譯しても、確かに御笑遊ばしましたといふ。すると、弟子が傍から、あれぢや樂屋が大騷ぎご御座いました、弓町さんが辨慶も出ない先きに笑ひなされたのは餘程可笑い事があるに違ひない、此れやダメだから幕をしめつちまい、中幕だけ飛ばして次の狂言をしようといふので、表方や何か氣を揉んで、笑つたのは一人だが、何千人といふ見物が來て居るのは皆「勸進帳」で呼んだので、其の肝腎な幕を出さないでは仕方がないと、其れでも海老藏は氣がさして出來ないと言つたのを、漸と賴んで中幕を出して貰つた、と弟子の談で觀世は惡い事をしたと後悔して居りますと、彼處は如何思召します、衣裳は如何で御座いませう、と一々聞きますので、弓町は善いも惡いも言はないで、始から終まで結構だとばかりの返事ですから、海老藏も利口な男だから、其から何にも言はないで、有難う存じます、假初にも結構だといふ御聲がゝりを頂戴致しますれば明日から好い心持で藝が出來ますと禮を述べて歸りました。（梅若實翁談話）

其の技藝に忠實にして且つ細心なりしは右の逸話に盡せり。又

まだ若き時分の事、江戸狂言の「合邦」にて立場の太平次といふ惡黨を勤む。女を縛つて二階へ置くを、その亭主が知らずに尋ね來り、それに留守を賴んで出て行き、歸つて來て殺しになるといふ場にて、この太平次は鼻高幸四郎（五世）が名代の役なれば其の通りに演じて、大谷候兵衞といふ老優に、「爺さんのと違つて居るか」と聞けば、「たつた一ヶ處違つて居ます、あの白の時、兩膝を突

く、あの突きかたが違ふのです、親方のは立つたまゝに突きますが、和泉町(幸四郎)のは立つたまゝ直ぐ突かないで、突く時一寸膝と膝となくつつけて突きました」と聞き、成程それで凄味が大いにつくといふ事を語れりと。(「俳優百面相」)

前に記せし如く、半四郎が急病なりし時、即座に工夫して「千本櫻」を出せし如き、彼れが能く技藝に熟達し且つ當世即妙の才ありたればなり。此に類する逸話はまだ多し。

春の對面に、十郎(菊五郎)、五郎(七代目團十郎)、舞鶴(半四郎)、此の三人七草のせりふあり。作者二三治は七草の故事に苦み、いろ〱の本をあさりて漸う書きたり。團十郎、このせりふ覺ゆるにむづかしく、出たらめに毎日々々違ひしが、見物が三人の役者を褒める聲にて、せりふは少しも聞えず。菊五郎、半四郎は其れにも拘はらず正直にせりふいひたり。(「芝居祕傳集」)

京都、南の芝居にて齋藤太郎左衞門を勤め、妻花園は山下金作にて、「ばた〱なさると頭に埃が立つわいなあ」の所、場中破れるが如き大受けなり。三吉といふ成田屋の男衆、明部屋に腹ばひしながら、金作の當りしを褒め、自分の親方の陰口をいひ居りしを、團十郎が聞取り、金作の受けるのは自分が受けさせるやうすればなり、翌日は樂の日なれば、金作へ聲のかゝらぬやうにして見せようとの事に、果して其の日は、金作には少しも聲が掛からず、「木場々々」とばかりなり。樂屋へ歸つて其の譯を聞けば「ばた〱なさると頭に埃が」といふ時、己がムツと惡見得で呼吸を入れてやるから、跡の「立つわいなあ」と扇で煽ぐのが引立つて昨日まで受けたるが、今日のやうに己が上手を向いて、苦き顏をしては金作のテレ加減見られたものでなしと言ひしに、成程名人は格別なりと、三吉後に人に語りぬ。(「トチリ帳」)

その翌年、大阪中芝居にて、「鏡山」と据り、岩藤は無論成田屋なれど、お初の役は當時人氣取りの、嵐璃珏にさせたき興行主の

思はくながら立女形の富十郎が自分で此の役を取りし爲め、璃珏の役にこまり、漸く花見場の江戸平といふ事となりたり。少しの出場なれば眼新き事をして落を取らんと璃珏が成田屋へ相談せしに、江戸平ごときに工夫も入るものか、大内姫の供をして來る奴なれば、「在原系圖」の蘭平と違つて、黑天鵞絨などを著ず、澁く拵へさへすれば、若手だから乾度受けると敎へられ、鳶色木綿に「江戸平」と白の紋付した縕袍を着て出でたるが、非常の大請なりしと。（同上）

「菅原」の松王をせし時、源藏は鰕十郎なり。首桶の中へ小太郎の首を入れ置く事を忘れて出づ、松王その蓋を明けて始めて氣が付きたるに、流石に透かさず、「源藏、改めて受取らう」と突返したり、鰕十郎は引込みて再び首を入れて出づ。其の間、松王は玄蕃に向ひ、「主の首さへ討つ程な源藏ゆゑ、首を忘れるも無理は御座らぬ」と早速の白に穴を明かせざりき。樂屋へ歸りて、鰕十郎おのが疎忽を詫びたるに、お前が「汝の眼玉がでんぐり返り」と勢込んで奥へ入つた工合では、首を忘れる氣遣ひもなきが、暖簾に入つてから汗を拭いて湯でも呑みはしなかつたかと言はれ、實は其の通りなりと答へしかば、其の間に源藏を忘れ鰕十郎になつてしまつたから首を忘れたのだ、と後來を戒めたりと。（「五世菊五郎自傳」）

彼れは亦屢脚本に新解釋を下して、在來の型を變更せしが、其は當れると當らざるとがありき。

松王丸にて、首實檢の前に、此首は贋首なるべし、と問うて後、我子の首を見て、實に菅秀才の首なり、はて討ました、よく討つたといふ思入、是は故人の誤りの穴を埋めしにあらず、我のみの才覺にてする事なり。實に穴をふさぐといふは、道明寺の場にて、始め贋迎ひの來りたる時、後室覺壽は誠の迎ひなりと思へばこそ丞相を渡したれ。輝國を呼返して誠の丞相一間より出れば、驚くも尤なり。然れば、先に木像と別るゝ時にも、苅屋姫を連出で、詞はかはさずとも見送るべき筈なり。先に其事なくて、段切にのみ顯な

連れ出る時は、先に質迎ひに渡したは木像なりと知りたりと思はる。依て、余海老藏に是を云ふ。海老藏成程と思ひしにや、先質迎ひの時にも、娘二人に囁きて、苅屋姫にそつと見送らせ、手にて仕方して奥に入りたり。(「傳奇作書」)

流石に彼れは祖父なる五世團十郎の衣鉢をつぎて文筆の才をも有せりき。「漕戻す奴が闇なり花火船」といふ句を作つて三世歌右衞門を刺りし事は既に前に述べしが、其はいまだ彼れが廿五歳の時なりき。生涯の吟詠のうちに、最も佳什として傳へらるゝは、

寢ようもう八幡鐘やほとゝぎす。(木場に住ひて)

いそげ〳〵月へ乘込め鰹舟。

白魚は雪と氷にうまるゝか。

狂歌も頗る多し。其の追放中、京都にて祇園會を見て詠せし、

長刀の月は山より先へ出でめでたき御代のまつりごとかな。

後に赦免せられて歸府せし時

冥加至極故郷へかへる毛ごろもはにしき三疋四疋御贔屓。

といへる如き、彼れが諧謔の才を代表せるものならん。其の江戸を追放せられて成田に寓せし時、「しもふさの身旅喰」と題せる旅中の雑記を著はし、これより先き、天保三年、遠州へ旅行せし時も、其の紀行を自筆の版下に刷りて「遠く見ます」と題し、同く東海道にての狂歌集を「腰かけざる」と名づけて知人

に頒布せる如き、彼れが文筆の方面にも多大の趣味を有せるを見るべし。

大阪に至りし時、八代目(實子)の門人にて市川眼助といふ中廻り、八代目の使に來り、着するや、直ぐに嵐璃珏の許へ使に遣られ、馳走になりて大醉して戻り、返辭も言はぬうちに反吐をつきたり。海老藏は之れを見て「今日(京)大酒(大阪)反吐(江戸)」と即座に地口つくり。此の眼助、江戸へ歸る前、海老藏は白扇廿本ばかりを求め、眼助の似顔を鳥居風に描き、

　眼助が浪花みやげの汗ゆかた、草より蟲の多く出來秋。

と讃して、それを客先へ持廻りて買つて貰ふべしと遣はしければ、一本一分或は二分に賣れ、意外の金儲けをして江戸へ歸りしとぞ。(「俳優百面相」)

或る芝居中、湯殿にて半十郎(澤村長十郎の門弟、後に阪野積善)を呼べといふゆゑ、何事かと思ひ行きたるに、海老藏の曰く、一句浮んだ。

　睾丸に白髪が生えて泪かな。

團十郎の昔を思出すとて笑ひし事ありと。(同上)

彼れが大阪に漂泊中の事なりき。

「菅原」で松王、千代が富十郎で、賀の祝ひの引込みになると、見物から「お伊勢さん」といふ褒詞がかゝつた。親方が大層喜ばれて、見立てたのはえらいものだと褒めると、「あれは惡口だ、江戸拂ひになつた事を當てつけて、御はらひ箱といふ心に違ひない」と苦笑をしたといふ。(「市川團藏自傳」)

彼れは又斯くの如き當意即妙の機才を應用して、舞臺に愛嬌を振蒔きたりき。

旅芝居へ行く事が何の好きにて、相手は誰彼を撰ばず引連れ、偏に己れを見せるのだといふ見識なり。いつも初日の出し物はダンマリの大百日、「一の谷」の熊谷二幕と「實盛」の物語、「鈴が森」の長兵衛と極めて居たり。此の長兵衛の白には、其の土地の地名、又は名物、顔役などの名を入れていひ、看客を悦ばせる事上手にて、無理なる白も何うか斯うか纏めて言へり。例へば、甲府にては「甲州方の御屋敷へ多く出入りは私が商賣」といひ、また「三升に緣の三升桝、升田の菓子の味を占め、石和の水を飲んだお蔭にや氣がつえい」といひし、升田は甲州にて其のころ有名の菓子舖なり。又名古屋にて「此の四かの津の御屋敷方」といひ、「金の鯱の光りを受け、水道の水を飲んだお蔭にや」など、斯やうなる事にて看客をワツと言はせたるが、自分にも可笑しく思ひたる故か、いつも三升亭小勝をやらかさうかと言ひたり。小勝といふは落語家にて海老藏の門弟なりしとぞ。（「俳優百面相」）

文筆と諧謔との才に富みしのみならず、骨董を好み、其の鑑識にも長じたりき。

京都の芝居の樂屋へ、道具屋が古き陣太鼓を持來り、直段は七兩二分なりといふ。やがて海老藏打鳴らし見て暫く考へ居りしが、言ふが儘の代金にて買求め、直ちに道具屋の眼の前にて裏皮を剝がし見しに、金の板がれ七枚貼つけありたり。其の頃の相場にて三十五兩ほどなり。道具屋驚き、如何して此れを知り給ひしやといふに、太鼓の音色に何か響く樣子ゆゑ、不思議と思ひて中を改め見たるなりとて、道具屋には金十兩に求め遣はし、元の如く祕藏せしといふ。（同上）

藝州の宮島へ參詣に行きし時、廻廊の額に昔繪の古びたるがありしを下させて見しに、先祖の竹拔五郎の畫なりしかば、修復して改めて金子を附して納め、又此の竹拔五郎の圖をも加へし扁額集といふを出版して諸方へ配りたり。此の費用百兩以上かゝりたる

よし。（同上）

赦免後、江戸へ落付くと、先づ入歯を取り、眼鏡を掛け、質素な道行拵にて、默阿彌を連れ、下谷から本郷の邊へかけて、古道具をひやかして何かと掘出し物をして歩き、今の上野の揚出しの側の清涼亭といふ精進料理へ折々入つて飯を食ひたりといふ。（同上）

彼れが生活に奢侈を極めし事は、幕府の忌憚に觸れて江戸を追はれし一事にても明かなるが、當時の官告文を見るに、前に記せし如く武用の甲冑を舞臺に用ひ、自宅を長押造りにし、塗かまちに床をなせしのみならず、其の深川島田町の邸は

赤銅七々子釘隱打、庭向へは御影石の燈籠其他數多差置、土藏内へ不動之像を飾り、惣金箔有之、須彌壇朱塗彫物、惣金流入、合天井にいたし、或小簞笥等へ赤銅七々子に金丸桐之紋、小柄等を金物にいたし、唐櫃、升額、奈良細工木彫彩色之類迄追々買取、右類道具は島桐にて金砂子を敷、胡粉紺青にて瓢簞を菊桐之形に置、右壇へ猩々緋を敷、……又先代より持傳ふ、小珊瑚樹の根付緒〆付て高蒔繪の印籠等、狂言之節相用、又は銀無垢ちろり所持致候……殊に前年買置候其高さ一丈七尺之石燈籠一對、深川永代寺に於て開帳有之候不動へ奉納可致と、高價之品右境内へ差送候……。

彼れが住居は正しく王侯の富を淩ぎしなりき。又天保元年の事なりき。

佐久間町の火事にて芝居町も類燒し、江戸役者の散りし時、大阪へ上りしが、何か目覺ましき事をして人の眼を驚かしてやらん……、螢を幾らでも買ふから持つて來いといひ、數萬疋を買集めて我が宿から一度に放ちたり。

一つは廣告手段とは言ひながら豪奢なる彼れならでは出來ぬ事なり。尚は天保十一年、始めて「勸進帳」

を演せし時、樂屋から揚幕まで行くに薄縁を敷詰めさせたりき。狂言作者河竹默阿彌この事を「俳優百面相」の著者に語りて、「これを九代目(團十郎)に話したらば眞似かねまじと思ひ、優には告げざりし」といへりといふ。蓋し薄縁を敷けるは能舞臺を寫せしにて、此れも技藝に熱心の餘なりと言はゞ言ふべけれ、歌舞伎の小屋としては僭上の沙汰たるを免れざるなり。隨つて居常の飲食の如きも贅澤を極めたりき。

菓子類では、牛皮とカステラが大好物にて、上野附近の菓子屋へ注文するが人並と違ひ、牛皮ばかりは出來たてゞはいけずとて、必ず昨日のを誂へて買はしたり。カステラは庖丁で食べてはうまくなしとて、一釜を握つて食べたり。(「俳優百面相」)

斯くの如く、多血質にして且つ神經質なりし彼れは往々傲慢にして且つ專橫なりき。

安政五年、初めてのコロリのありし年の秋の中頃、大阪から歸りて、惡疫は稍治まりたれど世の中は非常の不景氣とて、金主が錢を出さぬゆゑ芝居は出來ず。其の時、奥役を呼んで「好い加減に開けたら宜いぢやないか」といへば、「此の不景氣で金主がありませんから」といふ。「そんなら金主は後にして皆を呼べ」と、座頭は小團次、書出しは關三、四代目菊五郎、權十郎(九代目團十郎)、等の座組なりしを三階へ呼寄せ、「金主は後にして芝居を開けようではないか」と、狂言も役割も自分で極め、給金は後だと命令的に言ひたるが、小團次も關三も弟子分なり、菊五郎は甥同樣なれば孰れも返す詞なく、一番目が「太功記」、中幕「白石」の揚屋、二番目「花川戶」の長兵衞、次狂言は「馬方問答」、中幕「吃又」、切が「關の扉」と二興行つゞけたり。此の時、出勤俳優の誰やらが、「私も永らく芝居をして居るが、手金もなくやつたのは初めてだ」といひしと。(同上)

此の「馬方問答」に、最明寺時頼が海老藏、馬方が小團次、二階堂が淺尾與六で演じて居るうち、大向の見物が「三千両」と褒めたり。幕がしまると海老藏は以ての外の立腹にて、「三千両とした所で、己が二千両、小團次が八百両としても、與六が二百両では高い」といひしを漸く他で納めしが、翌日になつてもまだ怒つて居るゆゑ、それ〴〵言合はして、前日褒めた所へ廻り、「お天道様、お月様、鼈」といふと、「今日の奴は芝居を少しは知つてる」とて急に機嫌が直りしといふ。（同上）

「馬方問答」にて與六の二階堂が歩く後より見て、「下手糞め〳〵」といひたりと。又齋藤太郎左衛門にて、長十郎（澤村）が水井石馬之頭、花園が四代目菊五郎の時、花園に「貴様の亭主はのろ〳〵ぐづ〳〵」と言ひたり。（同上）

「五大力」に、海老藏の三五兵衛、訥升（前の長十郎の事）の源五兵衛、榮三郎（四代目菊五郎）の小萬なりしが、小萬が氣に入らぬか、書五兵衛が氣に入らぬか、不機嫌でありしゆゑ、訥升が機嫌取りに、「今度は濱（瀨川菊次郎）の時とは大層違ひますね」といひしを還かさず、「あの時は濱の出し物で、お前（當時訥升は同じく源五兵衛を勤む。）と己れは付けものだ」と言ひしは大いに味のある言葉なりき。（同上）

大阪の九郎右衛門町に小かつといふ藝子あり。海老藏常より此れに眼をつけ、序幕に「七笑の時平」を勤むるに、小かつの來るまでは幕を明けず。璃玕の見せ場は大詰なるに、序幕の遲るゝ爲め之れを見せる事が出來ず。先代團藏や金主の植木屋久兵衛より賴んでも其の甲斐なければ、終に小かつを買切りにして早くより見物に來てもらうやうにし、始めて序幕も早くなりたり。（七世團藏談話）

嘉永二年の冬、岐阜の芝居へ出勤中、江戸構が御赦免となりしより、一先づ大阪の住宅へ立戻り、江戸へ下る途中、名古屋で一興行打ちて芝の待合茶屋へ落付くと、八代目團十郎（長男）を始め門弟一同、芝居掛りの者等多人數出迎へ、表晴れての乘込みなれば其

の町内より隣町へかけて見物人は黒山のやうに群集したり。久しく江戸の人に顔を見せなかつたものだから、こんなに大勢で此の老爺を見に來たな、と大滿足でありし處、八代目が都合あつて一足先きへ歸ると共に、見物は大概歸つてしまひたるより、流石の海老藏も呆氣に取られしといふ。これは日數僅とはいへ、名古屋で興行せしが人氣に障りしともいひ、又海老藏當年五十九歳にて、若い者は左のみ見たくもなかりし故ともいふ……。（「俳優百面相」）

晩年に於て彼れが老衰せるにも拘はらず、尚ほ舞臺には餘裕を有したりき。彼の「馬方問答」と同時なりき。

「吃又」の將監が海老藏、又平が小團次、お德が菊五郎、雅樂之助が羽左衞門（五代目菊五郎）なりしが、毎日この幕が明くと、羽左衞門が「おぢいさん、行きませう」と上手の二重へ二人で入るに、一日、例の如く羽左衞門が誘ふと、「菓子を買ひにやつたが、まだ歸らない、」と言ひつゝ二重屋體へ入らうとする時、向うから菓子を買つて來りしを見て、「オイ〳〵」と呼んで菓子を取りしまゝ屋體へ入り、入齒を外して菓子を食べ始めると、舞臺からキツカケが來りしより、羽左衞門に「何とか言つてくれ」といふ。「只今御師匠樣がこれへ御出でに」と捨白をいふと、又聲を掛けてもう一つ食べ始めしゆゑ、此の間の舞臺は又平お德で繋いで居たりといふ。（同上）

死ぬ時の狂言は、「伊賀越」で又五郎を勤め、鶴藏（中村仲藏）の靭負に切つてかゝつて外され、直ぐ芝翫の荒川に切付けて刀を押へられると、其の刀を置きしまゝ、荒川に紙を一枚くれといつて鼻紙を貰ひ、平氣で鼻をかんだり。（同上）

彼れは前後三人の妻と及び三人の妾を有しき。第一の妻は彼れが先輩たりし五世幸四郎が妾腹の子に

しておこうといひ、始め澤村宗十郎に嫁し、宗十郎の死後一旦再嫁して復歸せしを娶りしなりき。夫婦の間に一女さへ儲けしが、中ころ故ありて離別し、更に幸四郎が正妻の子たるおしなを娶り、是も亦離別して市村座の茶屋福地善兵衛(菊屋)が女たりしおすみを娶りしかば、幸四郎は己が恩義に背けるを怒りて一時絶交せりき。三人の妾は、曰くかう、曰くさと、曰くため。而して此の三妻三妾の間に七男五女を儲け、自ら壽海老人子福長者と號せり。長男は次ぎの時代に人氣役者たりし八世團十郎にして、即ち第三の妻たりしすみの生む所なりしが、安政元年、大阪に於て自殺したりき。二男は明を失ひて商人となり、三男は妾さとの生む所にして六世幸四郎に養はれて高麗藏といひ、四男より七男までは妾ための生む所にして、就中その五男は明治時代に第一の名優たる九世團十郎これなり。門人又頗る多し。特に四世蝦十郎と三世小團次と五世門之助と及び六世團藏と最も著はる。

補 右に記せる三妾のほかに、本所一つ目の賣女おきたといふを妾とせしこと「市川家雜話」に見えたり。

第十五章　江戸に於ける其の他の立役と敵役

嵐冠十郎——彼れの當り藝——溫厚篤實の人——性急の癖。市川男女藏——彼れの得意——高慢の癖。——二世團三十郎——得意の藝。

嵐冠十郎（具足屋慶舎、安永三―弘化三）は始め江戸にて坂東萬吉といひ、寛政八年（廿三歳）、大阪の堀江芝居へ上り、苗字を荒木と改めしが、後、二世吉三郎の門に入りて嵐冠九郎と稱し、更に冠十郎と改め、寛政十二年（廿七歳）十一月、江戸へ歸りて市村座に現はれたり。文化六年（三十六歳）、河原崎座にて土佐將監と鬼が嶽とに扮し、此れを暇乞として大阪の角座へ乘込みしが、文政三年（四十七歳）、江戸へ歸り、同十年の評判記に「上上吉」に進められたり。同十年六月、甲府より大阪に赴き、中座に現はれ、翌年に至り東歸し、天保九年、「功上上吉」に上り、同十二年（六十八歳）、師の兄の名を繼ぎて猪三郎と改名し、弘化三年七月晦日、七十一歳にして歿しき。

冠十郎は容貌醜く、「音調低く、しやがれ聲にて白廻し上手なれど急き込む癖」ありき。敵役と親仁方とを專門とし、特に力士の敵役を能くし、「千兩幟」の鐵が嶽、「二代勝負附」の鬼が嶽は三都に上手の名を轟かしき。其の他、「千本櫻」の彌左衛門、「菅原」の土師兵衛、「忠臣藏」の九太夫、「矢口」の頓兵衛、「戀山開」の鵜飼九十郎などは彼れの**當り藝**なり。

彼れは亦、「端役の思付き上手に屢當りを取り」き。

成駒屋歌右衛門（四世）が宮本無三四をせし時、白倉の風呂場にて、柴薪を運ぶ仕出し、種々思付きて出でたるが、十日目頃に、此の具足屋（冠十郎）が思付きにて亡者の姿にて花道の切穴よりドロ〳〵にて出で、我れ先年無三四の爲に討たれ、無念には思へ

ども、無三四は強し、叶はぬ事と迷ひ居たるに、今日白倉の計略にて無三四を風呂場にて煮殺すよし、我も焚木を運び、怨みを返さん、エッサッサ〳〵とひよろ〳〵と歩きしに、見物大悦び大笑ひなりき。此の爲に、大道具、穴番へ祝義を出し、白面衣裳にて出でたり。歌右衛門悦びて、是れ第一等なりと、褒美を與れたりと。（「俳優百面相」）

冠十郎は溫厚篤實の人なりき。「生涯給金の事も役の事も不足を言ひたる事なし。されば立者の受よく、又下の者にも情深かりき」。

ある時、中村座にて尾上多藏、三立目に上下衣裳にて出づる役なりき。此の頃はすべて自分衣裳なれば、上下を大丸屋へ誂へ、初日に持込む約束なりしが生憎持來らず、當人は青くなつて心配せしを、自足屋氣の毒に思ひ、自分の部屋より上下を持來り、五幕目に自分が着る爲とて、まだ着ぬ衣裳を借したるに、多藏泪を流して難有がりぬ。（同上）

總領勘八といへる相中上分くらゐの役者、二番目狂言に番頭を勤めたるに、同人宅より子供が疱瘡にてむづかしと知らせ來りしが、まだ二幕仕舞はねば歸られず、親子の情とて泪にくれたるを、冠十郎見て、おれが代りなしてやるから、早く歸つて死水でも取つてやれと勘八を歸して、自分は海老藏（七世團十郎）と訥升（五世宗十郎）の部屋へ行き、此の事を告げて番頭役に出でたり。見物は大悦び、表も樂屋も其の情深きを褒めたりとぞ。（同上）

本姓を松田といへり。何か仲間に評議寄合等ある時は、我等は松田尾張守の末孫ゆゑ、小田原籠城の時の故事もあれば、評定には御免くだされとて立寄らざりしとなり。（同上）

先代猪三郎の子（三世吉三郎）が上方より下りし時、わざ〳〵迎へに出掛け、江戸に居る間は其の世話をなしたり。（「相撲と芝居」）

彼れは**性急**の癖ありき。



冠十郎の「久下玄蕃」（「似顔大全」より）

常は極せつかちにて、早くより拵へなして待受る人なり。車挽の場の明けぬ先から時平の拵へをなして、部屋にも居たゝまらぬと見えて、三階の梯子段の所まで來りて、明くのを待つ程の人なりき。老年に至り、人形町より駕籠にて通ひけるが、或朝すこし遲くなりたるゆゑ、駕の者に急げ〳〵と言ひながら、駕の中にて、兩手で駕の前の方を押したりといふ話あり。（「俳優百面相」）

實子冠之助あり、病身の爲め俳優を廢して畫工歌川豐國の門に入り、國春といひ、傍ら人形町に繪草紙の店を營みしが、父に先きだちて早世せり。

市川男女藏（瀧野屋新車、天）（明元—天保四）は二世門之助の實子にして、五世團十郎の門に入り、始め辨之助といへり。寛政元年（九歳）春、男女藏と改め、同九年、桐座の夏芝居に、「忠臣講釋」の由良之助と重太郎、「關

扉」の關兵衛に扮し、是れより名聲を高めたり。同十二年、伊勢の古市に赴き、其れより京都の北側芝居に出で、「忠臣講釋」に勘平、「關扉」に關兵衛を勤め、直ちに東歸せり。文化元年（廿四歳）春、市村



男女藏の「森闌丸」（「似顏大全」より）

座にて「四紅葉」に力士白藤源太に扮して大當りを取り、此れを彼れが一代の傑作となす。文政二年（三十九歳）、大阪に上り、若太夫座にて座頭となり、「信仰記」に大膳を勤めしが、上方の趣味に適せず、幾もなく江戸へ歸り、同六年、實惡の「功上上吉」に進みたり。同八年より舞臺を退き、天保四年六月七日、五十三歳にして死せりき。

彼れの得意とせるは、「菅原」の時平、「琴責」の岩永、「曾我」の朝比奈等なりき。彼れは高慢の癖あり。「役を納めに行けば、上でやらうか、中でやらうか、それとも下でも好いか、など大言を吐くを常とせり」。又俳諧を能くし、書は憲齋に

學びて絹絲を散らしたる如き筆法大の自慢なりき。鳥渡としたる往復の書面にも「侍る」「かし」「らむ」など長々しく書き、貰ひし者は判讀する事の煩はしければ、最屓客の何がし、當方への書面は三行にて充分なりと言ひ遣りしに、其の後は卷紙を縱になし、何時もより永々しく三行に認め送りしといふ。祝儀又は加役等にて給金外の收入ある時は、其の金のあらん限り、筆墨、紙、綵、絹地、色紙、短冊、等を買入れ置き、粗末なるものを持參して揮毫を賴めば、買ひ置きたる絹地など取出して書きて遣るを娯みとなせりといふ。

彼れはまた手工を巧みにし舞臺に用ふる衣裳は自から裁縫し、且つ臺付の繡までも自からせりといふ。

彼れの妻は五世中村傳七の女にして、夫婦の間に十子を儲けたり。第七子は男寅といひ、女方を專門として、後に三世門之助の名を襲ぎしが、文政七年、三十一歲にして變死せり。第十子は男熊といひ、母の實家を襲いで八世中村傳七といひ、後更に祖母の實家を襲いで俳優を廢め、四世常磐津文字太夫となり、傍ら俗稱を門之助（四世）といへり。

●●●●●●●二世關三十郎（尾張屋歌山、天 明六―天保十）は大阪の出身にして、始め嵐吉三郎の門に入り、嵐宗太郎といひ、中ごろ三世歌右衞門の弟子と爲りて中村歌助と改め、更に文化五年（廿三歲）、關三十郎の名を襲ぎ、歌右衞

門と共に江戸に下り、中村座に出でたり。蓋し初世三十郎は始め荻野吉三郎といひ、嵐雛助の門下に入りて嵐山十郎といひ、後、關三右衛門と改め、文化年中に死せしも甚だ著しからざりしが、二世に至



二世三十郎の「寺岡平右衛門」(死繪より)

りて大いに其の家名を揚げ、俗に之れを「名人三十郎」といひき。文化十四年(三十二歲)より「上上吉」となり、天保四年(四十八歲)「功上上吉」に進み、晚年は龜井戶に住し、多病の爲め舞臺を休みがちなりしが、天保十年九月二十八日、五十四歲にして歿しき。

三十郎は和實を專門とし、「菅原」の源藏、「忠臣藏」の平右衛門、「曾我」の鬼王など最も得意の藝なりき。殊に鬼王は生涯に三十幾度も演じ、「鬼王か三十郎か」と言はれし程なりしといふ。然れども、人氣に乏く、「芝居の中で感服されながら、外へ出ると忘れる」と七世團十郎が彼れを評せりと。

場。猿若町へ移轉せぬ前、三世菊五郎と七世團十郎とが一座して非常の大入なりしかば、菊五郎が「二人でやつて斯う來るのだ」といひしに、團十郎は答へて「見物は二人の名前で來て、實は團三に感服して歸るのだ」といひしとぞ（「團洲百話」）

第十六章　京阪の女方

二世中村富十郎――舞臺上の閲歷――其の長所。――中村歌六――彼れが當り藝。――四世嵐小六。――二世澤村國太郎。――二世藤川友吉。――嵐かのふ。――嵐璃光。

文化文政時代の代表的女方としては、京阪に二世富十郎あり、又江戸には富十郎よりは先輩なりし五世半四郎ありき。此の二人を東西の中心として順次左に述べん。

●●●●●●二世中村富十郎（八幡屋慶子、天明六―安政二）は大阪の產にして、始め四世團藏の弟子たる市川甚之助の門に入り、熊太郎といひ、子供芝居へ出勤せしが、文化九年（廿七歲）冬、三世歌右衛門の門下に投じ、中村三光と改めて大阪の中座へ現はれ、更に文化十年十一月、三世松江と改めて江戸の中村座へ下り、「坂東頌」に中老尾上とお關とに扮し、翌春の評判記に「上上吉」と記されたり。以後舞臺上の閲歷は、

文化十一年正月、「延年曾我」に月小夜おさよと三浦片貝、「蝶花形」に傾城みやこ後に十次兵衛女房お早（三曲）。三月、「花雲」に妻木と深川藝者〻。四月、「忠臣藏」にお輕とお園。五月、「夏祭」にお辰〻。六月、「双蝶々」に吾妻とお花〻。七月、「伊勢音頭」に槇〻。八月、「伊賀越」に笹尾、お谷、お袖〻。九月、「色八陣」にお時、千種姫、正清奥方、「色世界」に小ひな、「琴責」に阿古屋（三曲）。

十一月、同座、「二人聟」に黒木賣信夫、金吾妹お浜、井筒姫。

文化十二年正月、「曾我雛形」に高尾、田舍娘お卷、外記左衛門娘松枝。三月、「五大力」にお濱と小萬、「盛衰記」に千鳥。五月、「信仰記」に几帳の前とお露、「菖蒲帷子」に小君。七月、「女吉原」に一寸徳兵衛女房お辰とおはつ(早變り)。八月、「千本櫻」に靜、「繼縺錦」にお六、「妹背山」に橘姫。十一月、同座、「四天王」に辨の内侍實は泉式部。

文化十三年正月、「春曾我菊」におてる、月小夜、舞鶴姫。三月、「榮稀御供」に立田の前と千代。四月、「貞婦噺」に鶴喜小菊。五月、「忠臣藏」に戸無瀬とお園。「國姓爺」に錦祥女。九月、「布引」に小萬と葵重」に喜三郎妹お玉、「七小町」(上京の名殘)の所作(傾城、惣賣、大臣、老女、小萬、女太夫、石橋)。十一月、京都、北側芝居、「時頼記」に勇助女房お袖、「戻駕」に禿。

彼れは江戸にて好評を博し、四年ぶりにて西歸せるなり。

文化十四年正月、「兒淵」に瀧川、七浦、娘おまつ、「御堂前」に實右衛門娘小雪、「猿廻し」にお俊、「女護島」に千鳥、「廿四孝」に濡衣と唐織、「重井筒」に徳兵衛女房。天神寄進芝居、「盛衰記」に巴とおよし。十一月、北側芝居、「妹背山」に芝六女房と雛鳥、

文政元年正月、大阪角座、「自來也」に傾城よし衣と娘みどり、「戻駕」におよし。三月、「廿四孝」に濡衣、入江、おたね、「物草」に娘早枝とお國御前。四月、「躄仇討」に政所、筆助女房・初花、「八百屋」におらよ姉と伯母お槙。五月、北新地芝居、「大塔宮」に花園、「伊勢音頭」に貢伯母。七月、角座、「八陣」に三左衛門妻と正清妻葉末、「女鉢木」(先代松江卅三回忌)に白妙、「隅田春」に小梅。九月、「高音鼓」に右門妻三くもと傾城浪路。十一月、京都、北側芝居、同上、及び「隅田春」に同上。

文政二年正月、大阪、角座、「青陽鶏」に小谷の方、「琴責」に阿古屋。三月、「忍術池」におすわの方と笠森お仙。閏四月、「出世鏡」にお輕と戸無瀬。尾張へ下る。十月、兵庫へ赴く。十一月、角座、「双蝶々」にあづま、「小栗」に淺香、「重井筒」にお房。

文政三年正月、「花大樹」に几帳の前、太平治女房、仲居おしげ。三月、「千本櫻」に權太女房と靜御前、「廓色揚」にお町の方、「隅田川」に甚三女房。五月、京都、北側芝居、「巖流島」に傾城むさしと白倉娘、「岩井風呂」にお梶、「女鉢木」に玉笹。八月、「大塔宮」に早咲と花園、「戀寐刄」におつま、「在原系圖」におりく。九月、大阪、角座、「八陣」に春姫・お時、三左衛門妻、「持丸長者」におきく、「在原系圖」におりく、「吃又」に女房。十一月、京都、北側芝居、「八陣」に三左衛門奥方、「重井筒」に德兵衛女房。

文政四年正月、大阪、角座、「太功記」に久吉妻、「双鏡山」に腰元おつると尾上。三月、「妹背山」にめどの方と雛鳥、「紅梅箙」に六郎太夫娘、「廓文章」に吉田屋女房。五月、「忠臣講釋」に顏世とお北、「姫小松」にお安。七月、中座、「先代萩」に政岡、「三勝半七」にお園。八月、角座、「菊水卷」に正行妻と秋夜女房。九月、「英勇記」に傾城武藏と娘糸萩。十一月、中座、「三十石」に左衛門奥方と仲居お舟、「鬼一」に皆鶴姫、「出入湊」に小萬。

文政五年正月、「染分總」に傾城花の戸、八藏妹お露、重の井。三月、「五山桐」に園生の方とおりつ、「五雁金」に清川。三月、「大石摺」に顏世、柏木太夫、娘お才、「淀屋橋」に吉兵衛女房。六月、兵庫へ下る。八月、角座、「戀女房」に藤浪と關の小萬、「切子曙」に樽屋お仙。九月、中座、「釜淵」に瀧川、「鵺物語」に腰元おりきと母春日。十一月、江戸、中村座、「東百官」に將門姿桔梗前、「女猿廻」に猿引小よし。

彼れは六年ぶりにして再び江戸に來りしが、滿一年にして京都へ歸りき。

文政六年三月、「花伊達染」に豆腐屋女房と政岡、「二代勝負附」に秋津島女房。五月、「菅原」に御臺花園と千代。六月、「女舞鶴」に板額、「戀傳授」に三島お仙。八月、「いろは短歌」に浮橋、お高・お石。九月、「高麗屋縞」に長兵衛女房と勝元妹、「五節句」（名殘）の所作（三番叟、官女、傾城、歌比丘尼、奴）。十一月、京都、北側芝居、「稚兒淵」におりつとお松、「琴責」に阿古屋。

文政七年正月、大阪、角座、「花大矢數」に奥方濱荻、後家磯町、娘小松、角助女房、三月、「忠臣藏」にお軽、お園の方、お園、「盛衰記」にお筆。五月、堀江芝居、「女猿廻」に小よしと娘お雪。七月、京都、北側芝居、「夏祭」に娘お仲と德兵衛女房。八月、「崇禪寺」に娘寄浪と宗左衛門女房。八月、大阪、角座、「伊賀越」に濱町御前、お種。九月、「佐野船橋」に東助女房、「三代記」に宇治方とおくる。十一月、同座、「東山殿女狩」に花園。

文政八年正月、「百萬國」に又助女房、御部屋花の井、傾城萬國。三月、「腰越状」に高の谷、「一谷」に玉織姫と相模、「姫小松」にお安、「靭猿」に女猿曳。五月、京都、北側芝居、「百萬國」に同上、「出入湊」に黒舟女房。九月、堺へ下る。十一月、北側芝居、「伊賀越」に淀町御前とお種。

文政九年正月、「木下蔭」に几帳の前、東吉女房、娘お早、「姫小松」にお安、「曾根崎村」に娘おきた。堺へ下る。五月、大阪、堀江芝居、「一谷」に相模、「小栗」に淺香、「岩井風呂」にお富。七月、中座、「木下蔭」に女賊お仙、官兵衛娘、傾城更科、「[illegible]色」に娘お品、「男鉢木」に月小夜尼、八月、「鑓仇討」に久吉奥方と初花。九月、京都、北側芝居、「五山桐」に五右衛門女房、「五人男」に清川、十一月、大阪、角座、「布引」に待宵姫。

翌十年春より「上上吉」に進み、且つ女方の巻軸たりき。（四十二歳）

文政十年正月、「遊山櫻」に「正清妻八代、娘おかち、石塚左市女房。三月、堺へ下る。四月、堀江芝居、「忠臣藏」に顔世、お軽、「お戸無瀨」、「在原系圖」に與茂作女房、「隅田川」におくみ。六月、北新地芝居、「彦山」にお園。七月、角座、「[illegible]」にみやこ、「おもと亀松」（新作）に娘おもと、「黒船」に忠右衛門女房。九月、「伊賀越」に柾尾とおたに、「重井筒」に徳兵衛女房と重井筒女房。十一月、京都、北側芝居、「いろは歌」に傾城柏木、彌次兵衛娘、お園の方。

文政十一年正月、大阪、角座、「天滿宮」に娘待宵、藤太女房、澤瀉屋のお菊、梅の精、三月、中座、「鬼一」に皆鶴姫、「戀飛脚」に梅川。四月、角座、「秋葉權現」に操の前と芽のお才。六月、宮島へ下る。七月、京都、北側芝居、「三代記」に三島のお仙と宇治の方、「隅田川」に甚三女房。八月、「天滿宮」に待宵と藤太女房。九月、大阪、中座、「赤穗鹽竈」にお石、お組、お北、「隅田春」に小梅。十月、「千本櫻」に靜とおわさ、「非人仇討」に治郎右衛門女房。十一月、京都、北側芝居、「遊山櫻」に同上三役。

翌十二年より「至上上吉」に進みき。

文政十二年正月、大阪、角座、「歌清水」に園部奥方と娘おみつ。三月、「淺草靈驗記」に十内女房、水茶屋お升、娘おいし、「蝶花形」に妻眞弓、「舞扇」にお園。五月、京都、北側芝居、「白石噺」に信夫、「腰越狀」に關女、「雁金」に清川。七月、大阪、角座、「白石噺」に同上、「木津川」に勘助女房。九月、「連歌評判」に光秀妻と嘉平次女房、「吃又」に又平女房。十月、奈良へ下る。十一月、京都、北側芝居、「連歌評判」と「吃又」とに同上。

天保元年正月、大阪、角座、「雪月花」に娘綾織、傾城司、源五郎女房。三月、「忠臣藏」にお輕、戸無瀨、お園、「助六」に揚卷。五月、「譽景清」に重忠妻と阿古屋（三曲）、「伊勢音頭」に伯母おみれ、「大塔宮」に早咲と花園。歌右衛門と宮島へ下る。八月、中座、「彦山」にお園、「花筐」に彌兵衛女房。九月、「千本櫻」にお里。十一月、京都、北側芝居、「菅原」に覺壽、八重、戸浪、「千本櫻」にお里。

天保二年正月、大阪、中座、「繁夜話」に傾城青葉と娘お波。二月、角座、「伊勢物語」に信夫、「昔八丈」にお駒。五月、「吉原細見」に姉小わた、「娘景清」に糸瀧、「曉烏」に雇人おたれ。七月、中座、「一谷」に菊の前と相模、「戀飛脚」に梅川。九月、「高音鼓」に傾城浪路と額藏女房、「惟茂」に琴鶴姫、「姫小松」にお安。十一月、京都、北側芝居、「忠臣藏」に戸無瀨、お輕、お園、「黒船」に

仲居お松。

天保三年正月、大阪、中座、「品評林」に藏人女房と傾城葛城、三月、角座、「妹背山」にお三輪、「女鳴神」にお文。五月、「北國梅」に中老尾上、「黑船」に寄進役者女房と奴小萬。八月、「自來也」に源吾女房と娘みどり、「戀女房」に重の井、「信風」の景事。十一月、京都、北側芝居、「品評林」に藏人女房、傾城葛城、又平女房。同月、大阪、角座、「日蓮記」に奥方紅井、「隅田春」に小梅と長吉。

天保四年正月、「稚兒淵」に五右衛門女房、菊川、娘小雪。二月、備前へ下る。三月、京都、北側芝居、「妹背山」に定高とお三輪、「戀手鏡」に娘小雪。五月、大阪、角座、「國姓爺」に小むつ、錦祥女。七月、京都、北側芝居、「國姓爺」に小むつ、「極彩色」に娘お品と兵助女房。九月、眼病にて休む。十一月、大阪、角座、「一谷」に熊谷。

此の時、三世歌右衞門の斡旋により、初めて二世富十郎の名を襲ぎ、且つ翌五年より「大上上吉」の位に上りき。(四十九歳)

天保五年正月、「天滿宮」に松月尼、澤瀉屋お菊、藤太郎女房。三月、「五山桐」に五右衛門女房、「鳴神」に雲の絶間。五月、「三代記」に時姫、「夏祭」にお涙。七月、「九重錦」に時澄妹と柳のお柳、「桂川」にお絹。十月、「將門」に乙姫實は將門妹と寄藤姫方(早變り)、「重井筒」に徳兵衛女房、「吃又」に又平女房、「鬼念佛」と「春駒」の所作。十一月、京都、北側芝居、「一谷」に相模、「五斗」に關女、「重井筒」と「吃又」に同上。

天保六年正月、大阪、角座、「入相櫻」に腰元妻木後に傾城花扇、「二人道成寺」に娘おみつ亡魂。三月、「英勇記」に傾城武藏、白

倉姫、「黒船」に忠右衛門女房。四月、中座、「箱傳授」に娘三瀬、「伊勢音頭」にお紺、「小栗」に淺香。五月、角座、「三吉野」に靜、お里、典侍局。八月、中座、「木下蔭」に娘千里と綾の臺、「姫小松」にお安、「双紋」に小紫。九月、「忠臣講釋」に九太夫後家とお闇の方。十一月、京都、北側芝居、「双蝶々」に姉お關とお早、「二人道成寺」に同上、「姫小松」に同上。

天保七年正月、大阪、中座、「菅八線」に伏姫と濱路。三月、「同後編」に小文吾女房、伏姫神靈、犬坂毛野。七月、北新地芝居、「伊達姿」に政岡、「女團七」に仲居お梶。八月、中座、「鵺物語」に娘山吹、頼政奥方、「油商人」に藤屋あづま。十月、北新地芝居、「錦扇」に三勝、「御所櫻」に靜。十一月、京都、南側芝居、「八陣」に春姫、娘お時、佐藤奥方、「油商人」に同上。

天保八年正月、大阪、中座、「玉手綱」に重の井、娘お三、關の小萬。四月、「船橋」に玉笹、「極彩色」に兵助女房と娘お品。七月、堀江芝居、「妹背山」に定香とお三輪、「恨鮫鞘」にお妻。八月、北新地芝居、「三島暦」に三島のお仙、「三代記」に時姫とお時、「義臣傳」にお闇の方。九月、中座、「鬼一」に皆鶴姫、「曾根崎村」にお北、「雪鉢木」に玉笹、「廓文章」に夕霧。十一月、京都、南側芝居、「先代萩」に高尾と政岡、「五大力」に菊野、「大經師」に娘お三。

天保九年正月、大阪角座、「廓船諷」に管領關の戸、小原の小督、娘おみつ、「加賀見山」にお初。四月、中座、「苅萱」に夕幣、「女盜賊」に牙のお才、「紅梅鞘」に娘こずゑ。六月、堀江芝居、「夏祭」に奥女中呉竹、「女猿曳」に小よし。七月、「三代記」に時姫。八月、中座、「播州廻」に召使お菊。九月、「一谷」に相模、「戀取組」にト゚と。十月、「品評林」に傾城葛城、銀杏の前、又平女房三八女房、「大内鑑」に葛の葉。十一月、京都、北側芝居、「一谷」に菊の前と相模、「伊賀越」にお谷、「女猿曳」に小よし。

天保十年正月、大阪、角座、「濱眞砂」に祇園のお梶、石川眞砂路（女五右衛門）、娘お瀧、「先代萩」に政岡。三月、「妹背山」に雛鳥とお三輪、「合法」に玉手御前、「小栗」に淺香。五月、「島原染」に腰元梅の井と島原の小蝶、「紅梅鞘」に娘こずゑ。九月、中座、

「女舞鶴」に娘お浪と板額、「戀緋縅子」に下女お杉。十一月、京都、北側芝居、「[illegible]」に娘小みつと母小[illegible]、「女舞鶴」に板額、「吉原街」に小紫、「廿四孝」にお種、「廓文章」に夕霧。

天保十一年正月、大阪、中座、「雪月花」に石田局、傾城七浦、腰元ふさ、五右衛門女房、三月、「双蝶々」にお関とお早、「義臣傳」にお蘭の方、「猿廻」にお俊。堺へ下る。六月、北新地芝居、「盛衰記」に延壽とおよし、「合法」に玉手、「五大力」に菊野。七月、中座、「姫競」に照手の前、浪七女房、浅香、「隅田川」におくみ。九月、「いろは評林」に傾城柏木、曾兵衛女房、嫁お[illegible]、下女お直、春月尼、「二代鑑」に秋津島女房、十一月、京都、北側芝居、「青陽鳴」に小谷の方、「義臣傳」に春月尼、お高、「紅梅[illegible]」にこすゑ。

天保十二年正月、大阪、中座、「楊柳櫻」に奥方[illegible]、後室萩江、傾城七浦、嫁お松。三月、「天満宮」に覚壽、十六夜、娘お[illegible]、荒藤太女房、「廓文章」に夕霧。五月、京都、北側芝居、「[illegible]」に顔世御前、腰元ふさ、お輕。六月、「天満宮」にお[illegible]、「[illegible]」にお妻。七月、大阪、中座、「百萬國」に梅の井、姉勝野、妹小むつ、作十郎女房、又助女房、「獅子」の所作。九月、「高砂松」に[illegible]、娘おまさ、「戀女房」に重の井。十一月、京都、南側芝居、「石川染」に石田局、辻浦十内娘お瀧、「盛衰記」におよし、「戀女房」に重の井、(一世一代)、「椀久」に女房おさん。

彼れは此の「重の井」を一世一代として舞臺を退くべく思ひしが、天保十四年に至り、其の生活の奢侈なりし事が政令の禁に觸れて、永へに大阪の土地を放逐せられ、堺に退きて其處の舞臺を根據とし、まゝ京都に出勤せり。(五十八歳)

弘化三年十一月、京都、南側芝居、「矢口」にお船。

弘化四年春、古市及び名古屋へ下る。

嘉永元年正月、京都、南側芝居、「楊柳櫻」に寢覺御前、傾城七草、田邊龍女、娘鈴代、「女護島」に千鳥。六月、堺へ歸る。五月、上京、南側芝居、「彥山」にお園、「勝相撲」にしの。十一月、北側芝居、「菅原」に輝國妻と千代、「白石噺」に信夫、「曾我」に虎御前と滿江、「戻駕」に傾城小車太夫。

嘉永二年三月、京都、北側芝居、「石川染」に腰元ふさ、「伊勢物語」に信夫、「五大力」に菊野。八月、「九重錦」に池殿御前とお柳、「三代記」に時姫。伊勢より名古屋へ下る。

嘉永三年十一月、京都、北側芝居、「鬼一」に皆鶴姫、「御所櫻」におわさ、「廓文章」に夕霧。

嘉永四年春、堺、南芝居。次いで北芝居に現はる。京都、南側芝居、「天滿宮」に道實、葉櫻、澤瀉屋お菊、「吉野山」に辨内侍、「戀女房」に重の井、「恨鮫鞘」に丹波屋お妻。堺へ歸る。

嘉永五年春、堺に現はる。三月、京都、北側芝居「躄仇討」に初花、「鏡山」にお初、五月、堺へ歸る。秋、京都、南側芝居、「繁夜話」に操御前、仲居おはし、娘お濱、「伊勢音頭」にお紺。堺へ歸る。

これより翌年は江戸へ下りたり。

嘉永六年九月、市村座、「彥山」にお園、「小栗」に淺香、「室楓」に女太夫の所作。十一月、同座、「御所櫻」に靜とおわさ、「女瀧出入湊」に源左衛門妻。

弘化元年三月、「三十三間堂」にお柳、「無間鐘」に梅が枝。五月、「戀女房」に重の井、七月、「更科譚」に更科姫、「双蝶々」に姉お關。

十月、眼病にて休む。十一月、同座、「安達原」に袖萩、「妹脊山」にお三輪。

此の東下は赦免の運動すべき爲めなりしも、事の成らざりしゆゑ、此れより京へ歸りしなりといふ。斯くて、翌弘化二年二月十三日、七十歳にて歿しき。


二世富十郎のお園（「似顔大全」より）

富十郎は容貌甚だ揚がらず、「眼はシヨボ／＼してハツキリせ」ざりしも、姿と背格好よく、且つ音調にすぐれたりき。其の長所は初世と同く、地藝と所作とを兼ぬるにありたり。且つ地藝に於ては、時代物と世話物とを共に能くし、「先代萩」の政岡、「加賀見山」の尾上と岩藤、「大塔宮」の花園の如き女武道、「吃又」のおとく、「腰越狀」の關女の如き世話女房、及び「妹脊山」の雛鳥とお三輪、「三代記」の時姫、「白石噺」の信夫の如き娘方、など其の技藝の範圍は頗る多方面に渉り、特に音聲よくして音明らかに聞

え、且つ唱歌にも音曲にも堪能なりきといふ。然れば、彼れが壯時の當り藝には阿古屋の三曲あり。大かた歌右衛門もしくは吉三郎と提携せしが、往々初世富十郎と同く、婦人を主人公とせし「女猿廻し」又は「播州廻」のお菊の如き役に扮し、女方として座頭の地位を占め、特に晩年、大阪を逐はれて堺に蟄居するや、第二流の立役及び敵役を集めて自ら其處に一座を率ゐたりき。

彼れが大阪に在りし時は、其の居を難波に卜せしかば俗に之を「難波の太夫」といへり。實子を中村加雅彌といひ、子役なりしが、多病なるを以て俳優を廢め、終に天保二年に夭折し、其の嗣を絶せりき。富十郎より先輩にして稍聲名の下れるもの、中村歌六あり、四世嵐小六あり、二世國太郎あり。●●●中村歌六（播磨屋梅枝、安永八―安政六）は大阪高麗橋の三井の番頭丹波屋仁助の子なりしが、播磨屋作兵衛といふに養はれき。富十郎と同く三世歌右衛門の門人にて、始め中村もしほといひ、後歌六と改め、大阪の座摩稻荷の宮芝居に修練を重ね、文化三年（廿八歳）には角座の座元となり、二世吉三郎に引立てられて始終座を同くし、大役を勤めしが、文政元年（四十歳）、江戸へ下り、女方にして工藤に扮し好評を得、翌二年に歸阪して愈聲名を高め、同八年、中座にて「鳴門白浪」に蜑お浪を一代の當り藝となす。同十年、再び江戸へ下り、天保三年（五十四歳）、歸阪して角座へ現はれ「曾我」に五郎、「高木屋橋」に土手のお春、次ぎに「自來也」に代々絹、「八陣」に雛衣を勤め、翌四年、中座にて「姫競」に傾城江の島、「川中島」にお勝、其の他、「秋葉權現」

に牙のお才、「忠臣講釋」におりえ、「隅田川」にお組、等に扮して喝采を博し、嘉永五年（七十四歳）、三たび江戸に下り、同七年歸阪して中座に出でたりき。



歌六の「熊坂お松」（「似顔大全」より）

安政三年正月、角座「白髮」に小車、女六部、三月、「双蝶々」にお關、女房お次、仲居おてふ、「安達原」に袖萩、「春霞」に紅梅屋お富と女房おりつ。堺及び兵庫へ下る。大阪、角座、「信田妻」に女非人お町、「藥腸」に母とは。堺へ下る。十一月、京都、南側芝居、「いろは歌」にお蝶・母お幸、「曾我」に月小夜、「安達原」に袖萩。安政四年正月、大阪、角座、「八犬傳」に安平女房お米、奥方小芹、「初雁絲」に宜鶴姫。「宇都谷峠」に奥方流浪と母お幸、「忠臣藏」に戸無瀬と一文字屋お才。下の關へ下る。

安政五年三月、金比羅に興行。

安政六年正月、大阪、中座、「伊達競」に高尾と沖の井、三月、「菅原」に千代、「油賣」に姉お龜・娘お照。五月、京都、東芝居、「菅原」に

同上、「黒舟」に忠右衛門女房。六月、和歌山へ下る。

これより大阪へ歸りしが、コロリ病に罹りて、七月一日、八十一歳にして死せりき。

歌六は大兵なりしも容姿にすぐれ、且つ音調逞ましかりき。「角の芝居を打出し、太左衞門橋北詰西入る濱川の自宅へ歸る折から、橋の上にて咳拂をするが常にて」、家人は其の咳の聲にて主人の歸宅を知れりといふ。白尻をプルゥと吹くは二世吉三郎を眞似たるにて、且つ琴三味線にも堪能なりき。彼れが得意とせるは傾城なりしかば、俗に「傾城歌六」と稱せられ、其の他、女賊牙のお才、「川中島」のお勝、「安達原」の袖萩、「苅萱」の夕幣、「先代萩」の政岡と高尾、など其の當り藝なりき。特にお勝の役は、長州侯の御前に勤め、其の琴に掛けるべく紫の油簞を賜はりしより、始めて俳名を紫琴といへりき。

彼れは豪奢を好み、家内の暗きを忌みて、己れの歸る時は、百目蠟燭二本を門口に立てゝ迎へさせたりといふ。晩餐には必ず酒一升を傾け、晝間も茶と稱して湯呑にて煽り、朝は飯を輕く三椀と定めて必ず焼豆腐一挺と梅干とを菜にせり。地方へ赴きて宿に着くや否や、先づ豆腐屋の在處を探がさせたりと。而して壯健にして殆ど醫藥を知らず、晩年まで矍鑠として舞臺を勤めたり。

彼れが先妻をお貞といひしが、病死せしかば、堺筋の商人平野屋伊兵衞の娘にして、己れの齢の半分も違ふを後妻に娶りたり。妻の間に十二子を儲け、長女お松は三世嵐吉三郎に嫁して近代の故璃寛を生み、二女お里は四世市川小團次に嫁して、今の小團次を生み、三女お島は八世片岡仁左衞門に嫁して故九世

仁左衛門と今の仁左衛門とを生み、四女小絲は山下金作が養子三勝の妻たりき。又長男は常次郎といひ、夭折し、二男を種太郎といひ、後に二世歌六たり。三男を米吉といひ、米吉は近頃三世歌六となりし時藏なり。斯くの如く諸名優と姻戚の緣を結び、其の枝葉の今日まで蔓延せるは、遠く元祿期に於ける初世あやめ、近くは同時代に於ける五世半四郎と其の軌を同うせるものといふべし。

●●●四世嵐小六（吉田屋湖鹿・天明三―文政九）は雛助（二世小六）の子にして幼名を岩次郎といひ、寛政七年（十三歳）、大阪の角座にて、尾上新七の帶屋長右衛門にお半を勤めしを初舞臺とす。翌八年、父雛助の死してより、子供芝居に出で、同九年、叶三右衛門と改めて再び大劇場に現はれ、更に享和元年（十九歳）四月、叶珉子と改めて京都の北側芝居に出で、其の後三世吉三郎と同座して始終其の相手たりき。文化十四年（三十五歳）十一月、大阪の中座にて父の名を繼ぎ小六といへり。是れより先き、三世小六の名は父の弟子姉川菊八によりて襲がれしを以て、此れを第四世となす。當時、江戸に於ける六世半四郎と共に、東西女方の大關と稱せられしが、手足に痼疾を獲て動作自由ならず。文政九年春、大阪の角座と中座とを兼勤し、「伊達抄」に娘お菊、「忠臣藏」にお輕に扮し、次いで堀江芝居にて「浦朝霧」に娘おきよ、七月は上京して「忠臣藏」に顏世、九月、歸阪して角座の「伊賀越」にお米、十一月「白石噺」に宮城野、次いで京都の北側芝居に轉じ、「伊勢物語」に伊勢侍從、「女雁金」に布袋のお市を勤めしが、病の爲め中

途より舞臺を退き、同月十四日、伏見に於て歿しき。歳四十四。

●●●●●●●二世澤村國太郎（荻野屋其答 ―天保七）は始め泉川龜吉といひ、寛政十年の頃、大阪の子供芝居にて、「矢口渡」のお舟、「御所櫻」の靜に好評を得、これより久しく竹田芝居に出勤し、半ごろ荻野錦子と改名せしが、文政元年五月、堀江芝居にて二世吉三郎と一座し、「源平躑躅」に敦盛と鷲尾女房、「五人切」に菊野に扮し、八月は吉三郎と共に中座へ轉じて、「娘景清」に阿古屋、腰元春葉、敦盛の靈、「嫁入雛形」にお夏に扮し、此れを大劇場出勤の最初とす。翌二年、國太郎の名を襲ぎ、中座の「遠江潟」に、嵐小六が病氣なりし爲め代りて女賊牙のお才に扮し、十一月、京都の南側芝居にて同じ役を勤めて大當りを取りき。同八年七月、大阪の中座にて「千本櫻」に忠信と源九郎狐とに扮し、次いで京都にても之を繰返したり。同十一年春、始めて「上上吉」に進み、次いで天保元年、「白至上上吉」、同三年、「至上上吉」に上れり。同年、中座にて「一谷」に忠度に扮せしが、同年より病氣に罹りて屢舞臺を退き、同五年三月、初世國太郎の十七回忌として久しぶりに舞臺へ出で、「淺澤紫」に春月尼に扮せしが、起居自由ならずして、二間ばかりを動くにも引摺られて出でたりといふ。斯くて天保七年春に至り歿しき。

國太郎は、御臺所、奥方、世話女房、などを能くし、又所作事にも長ぜしが、初世の如く色つぽき役は甚だ得意ならざりしもの丶如し。尚ほ三曲をも奏し、立廻りに妙を得て特に長刀つかひに名あり。斯くの

如く多能なりしも其の缺點は動き過ぎる事にありたり。彼の女方以外に源九郎狐に扮せしは其の輕妙なる動作を得意とせしなるべく、忠度に扮せしも其の立廻りを見せ場とせしならん。

此の外、二世藤川友吉、（江戸屋、花友）、嵐かのふ、及び嵐璃光（伏見屋、天明四－天保十）あり。共に「上上吉」の位に至りて止み、前に記せる諸優に比しては第二三流たり。友吉は天保の初めより病氣の爲め休みがちにて、同四年五月、江戸へ下り、市村座の「千本櫻」にお里の役なりしが、四月に出勤せしきり病氣にて退隱し、且つ其の翌年の評書に彼れが名を逸せり。思ふに當時歿せしならん。かなふは「功者なれども舞臺さびし」と評せられ、天保十三年と弘化四年との間に死せり。璃光は始め中村里好といひ、後に二世吉三郎の門に入り、最も仲居の役を得意とし、特に「大經師」のお玉を一代の當り藝とせしが、尚は「近江源氏」の徽妙、「八陣」の三浦の母などをも能くせりといふ。

第十七章　江戸の女方

五世岩井半四郎――俳優としての閲歴――彼れの本領――彼れの缺點――藝道についての逸事――江戸趣味の鼓吹――彼れが性質。――二世中村大吉――彼れの弊――其の當り藝。――四世瀬川菊之丞。――二世澤村田之助――彼れが傑作。――市川團之助。

五世岩井半四郎（大和屋杜若、安永五―弘化四）は四世半四郎の實子にして幼名を粂三郎といひ、天明七年（十二歳）十一月、桐座に出でしを其の初舞臺とす。寛政九年（廿二歳）、娘方となり、文化元年（廿九歳）十一月中村座にて始めて半四郎の名を襲ぎ、當時評判記の位は「上上吉」たりき。以後、**俳優としての閲歴**は、

文化二年二月、「虎女石」に少將と乳母おみれ。四月、「遂供養」に妹おみつと腰元まがき。五月、「夏祭」に女釣舟。七月、「鏡臺山」に傾城錦木と妹おてる。八月、「餘慶仇討」に木津勘助女房。九月、「姫小松」にお安。十一月、同座、「清和源氏」に周防内侍、七綾姫、怪童丸。

文化三年正月、「箭立杉」に十六夜、「歌祭文」に綾瀬源十郎妻と久松、「七變化」の所作（官女、座頭、田舍巫子、人麿、手習子、草刈、石橋）。四月、「加賀見山」にお初。五月、「姫小松」に小督。八月、「二木仇討」に仲居お色と兵助姉。十一月、同座、「雪陸奥」におしやらく入道妹初花　春駒およし、實は安方の靈、女馬士實は貞任妹、放鳥賣實は景政妹、赤染衛門。

文化四年三月、「柴曾我」に舞鶴と月小夜、「助六」に揚卷。五月、「五節句」の所作事。八月、「彥山」にお園、「八幡鐘」にお俊。九月、「忠臣藏」にお輕、お石、お園。十一月、市村座、「八島凱陣」に建禮門院、草刈お松實は寅童子化身、蛋若松、次郎八女房實は熊坂妹。

文化五年正月、「和曾我」に月小夜、「戀山崎」に下駄のお市とお早。三月、「伊達競」に政岡と累、二番目に四つ木村お袈、平井屋娘。五月、「忠臣藏」にお輕と戸無瀬、「廿四孝」にお種と濡衣、「葱賣」に渡守。七月、「出世緒狀」に久吉妻、「高麗屋綿」にとしとお園。九月、「御未刻太鼓」に仲居おさだと帶刀妹、「三人形」の所作。十一月、同座、「二代源氏」に園女おまさ實は將門娘、小女郎、笹女丸。

文化六年正月、森田座、「新玉曾我」に片貝と舞鶴、「花暦」に大經師おさん。三月、「江戸染」にお七。四月、市村座、「曾我綉」に白井權八。七月、「魂祭」にお七。八月、「盛衰記」におふで、「戀山開」に小女郎。九月、「雲井白波」に五右衛門女房。十一月、同座、「鳥羽戀塚」に辻君、袈裟御前、傾城常磐木實は逢島姫、熊野御前。

此のお七に扮せし時、淺黃の麻の葉鹿の子の衣裳を着せしかば、江戸中の流行となれり。斯くて翌七年春、「上上吉」に進みき。（三十五歳）

文化七年正月、「松曾我」に片貝、犬坊丸、侍女近江、「解色絲」に絲屋おふさ。三月、「五山桐」に圓生の前、「勝相撲」にお俊。五月、「合法」に彌十郎女房と佐五右衛門娘。八月、「八幡祭」に奥女中關屋實は駕昇甚兵衛妹お早。十一月、同座、「四天王」に村岡實は桐花女、周防内侍實は三日月お仙、怪童丸。

文化八年正月、「蓬萊曾我」に月小夜と阿古屋、「昔八丈」にお駒。二月、「助六」に揚卷。三月、「水滸傳」に奥女中[illegible]と奴小萬。五月、「伊賀越」にお谷、「茜染」に長吉とおよし。七月、「玉藻前」に妲己、「誂帶」に團七女房。九月、「千本櫻」に靜とお里。十月、森田座、「江戸紫」に權八。十一月、中村座、「岩井内裡」に十六夜、「臺頭」に松島兵衛娘、女馬士、觸屋娘實は龍女。

文化九年正月、「富士根曾我」に十六夜と五郎、「臺頭」に三勝と妙貞。三月、「清水清玄」におかち。四月、「龜山噺」に千塚と女房おしづ。五月、「戀白浪」に藤吉女房と仲居おりつ。七月、「忠臣講釋」に顏世とおりゑ。九月、「盛衰記」に千鳥とお筆。十一月、森田座、

「[illegible]吉野」に千枝狐、勾當內侍、立引のおやつ、侍女小村路、備後三郎女房、せいたか童子。

文化十年正月、「伊達染」に高尾・累、政岡、三月、「濱眞砂」におりつ、「お染久松」に七役（お染、久松、瀬川、お六、母昌貞、おみつ、お作）。四月、「五大力」に小萬、「曾我祭」にお仲と琴浦。九月、「男一疋」に權八と藝者おまつ。十一月、市村座、「戻橋」に七綾姫、操御前、賤女お岩、おつれ、此絲、山姥、地藏尼。

文化十一年五月、森田座、「戀山崎」に與次兵衛女房お早と下駄のお市。三月、市村座、「隅田川」に花子姫後に清玄尼、お初。七月、「博多織入船」に伊勢參お市實は玉闌女、「〽文月」に〽。八月、「廓文章」に伊左衛門。九月、「染纈」に關小萬と馬士お三、「俊寛」にお安。十一月、同座、「菅原傳授」に刈屋姫實は時平、八重、戸浪。同時、森田座、「雪陣幕」に女達雷のおつると龍宮乙姫。

文化十二年正月、市村座、「富士見西行」に新造寫繪、「色三組」に重井筒おふさ、「戻駕」に女馬士。三月、「千本櫻」にお里と嗣信女房、「色夜話」に茜屋丁稚半七と片瀬のお岩。五月、河原崎座、「時今」に光秀妻、「杜若」に土手のお六、萬字屋八橋、同姉。夏、新潟へ赴く。十一月、同座、「大和名所」に熊井太郎實は娘お仲、靜御前實は小女郎狐、知盛靈、傾城玉蟲、お里、女ゆすり青梟常磐木。

文化十三年正月、「富士根曾我」に月小夜と小林朝日丸、「封文」に〽と夢のお市。三月、「局岩藤」に權八、橋姫の靈、岩藤、「七變化」の所作。五月、「妹背山」にお三輪と立野の里のおきじ。八月、「蝶桔梗」に濡髮お關實は光秀娘と放駒長吉。九月、「日蓮記」に勸作女房と七綾姫、十一月、同座、「榮花臺」に櫛巻のおさん、梛の葉、爲朝妻八丈局。

文化十四年正月、「曾我賜物」に月小夜と阿古屋、「利生組絲」に藝者おふさ、「東文章」に櫻姫と班女御前、「五節句」の所作。越後と奥州へ赴く。十一月、中村座、「和合太平記」に呉羽の前の靈、勾當內侍實は三日月お仙、喜六女房およし。十二月、「俊寛」にお安。

文化八年以來、三津五郎と不和なりしを、幸四郎の仲裁にて、此の時同座せしなりき。

文政元年正月、「曲輪日記」に割竹のおとわ、子守娘おとら實は藝者長吉、小梅。三月、「東山殿」に仲居お宮、「幡隨長兵衞」に權八。五月、「妹背山」にお三輪、「五人男」に清川。七月、「彥山」にお園。八月、「伊達」に政岡と累。九月、「忠臣講釋」に九太夫後家とおりゑ。十一月、玉川座、「四天王」に非人薦垂の安實は純友娘。同時、中村座、「伊勢平氏」に櫻町息女雲井の前實は殺生石の靈、二番目に三國小女郎。

文政二年正月、玉川座、「惠方曾我」に孝謙女帝、三日月おさよ、萬字屋八橋、白木屋お熊。三月、「千人禿」に笠屋三勝と白妙お民、「助六」に揚卷、「お染久松」に七役(二度目)。五月、「加賀染」に紅梅姫、又八娘淺尾、藝者千代女、女曲持淺妻お俊、「山崎踊」に娘お早、十一月、河原崎座、「江戸花鎗」に鵜遣ひお鐵、小荷駄のお市、藤の精、石川屋眞砂路、二番目に五郎太女房お鐵實は尼子娘。

文政三年正月、「御歳玉」に九重姫、多九郎妹、仲居お仲、「戀江戸染」にお七。三月、「隅田川」にお初、酒賣お濵、女淸玄。名古屋へ赴く。十月、大阪、中座、「岩井壽」に雷おつる、「お染久松」に七役。十二月、同座、「雪長柄」に傾城玉蟲、知盛靈、三日月お仙。

此の時彼れは五世幸四郎と共に始めて下阪せるなり。

文政四年正月、「廓島臺」に娘園花。三月、「隅田川」に女淸玄とお初、「卜と」に惣嫁お園。五月、京都、南側芝居、「江戸仕入」に權八と長兵衞女房。七月、北側芝居、「勝相撲」にお俊。九月、大阪、中座、「京紅藍」に三勝と尼妙淸。十月、「花川戸」に權八、「戀緋鹿子」にお七。十二月、京都、南側芝居、「加賀見山」にお初、「お染久松」に七役。

此の時、北側芝居には三世三津五郎が上りて、同く「加賀見山」の岩藤に扮せしが、半四郎病氣なりし爲め、南側は初日出でず、終に北側は大入を取りたり。漸く半四郎全快にて初日を出さんとせしに、山

城屋吉藏といふ金主、京都にて十二月に入りて芝居の入りし例なきゆゑ、來年五月に延期したしと言ひしを、彼れは肯んぜず、もし損失とならば來年五月に上京して償ふゆゑ、是非開演したしとて、初日を出し、果して大入を取れりといふ。

文政五年春、紀州より、名古屋、古市、岐阜へ赴く。十一月、江戸市村座、「竹馬友達」に辰夜叉御前、二番目に大和屋お大。

京阪に滯在中は病氣にて舞臺を休みがちなりしを、茲に於て二年ぶりに江戸へ歸り、自ら市村座に立女方たると共に、長男粂三郎は中村座に、次男紫若は森田座に、父子三人立女方として三座に鼎立せりき。

文政六年正月、「曾我組糸」に人丸姫、二番目に糸屋娘お糸。三月、「浮世柄」に權八と長兵衛女房。五月、「菅原」に八重。七月、「石尊贐」に賤の女おのぶ後に仲町藝者。八月、「松竹梅」にお七。十一月、休む。

文政七年正月、同座、「假手曾我」に藝者お輕。三月、「加賀見山」にお初、「戀飛脚」に梅川。五月、「合法」に彌十郎女房と與五郎女房。八月、「妹背山」に定香とお三輪。九月、「双蝶々」にお關。十一月、同座、「平家物語」に女熊坂と龜王女房お安。

翌八年、始めて「極上上吉」に昇れり。（五十歳）

文政八年正月、「曾我初夢」に梛の葉と瀧川。三月、「物草」に芦屋姫、「浮名香紋」に植木屋娘おあい。五月、「千本櫻」にお里。七月、「重井筒」に紺屋女房と重井筒女房、「桂川」にお半。九月、「御未刻太鼓」に惡婆氣まぐれのお坂。十一月、同座、「東内裡」に七綾と龍姫。

文政九年三月、「雛行列」に大姫とお初。八月、「忠臣講釋」におりゑ、「戻駕」に禿。十一月、中村座、「還花」に女順禮おせん、白峰姫、非人物見のお松。

此の年は病氣の爲め、舞臺を休みたりき。

文政十年三月、河原崎座、「妹背山」にお三輪。四月、中村座、「お染久松」に七役。夏、幸四郎と甲州に赴く。九月、中村座、「四谷怪談」に妹お袖。十一月、同座「金峰山」に玉蟲賀は知盛靈、いがみのお里、錦戸太夫。

文政十一年正月、「曾我風說」に月小夜。三月、「江戸男狃板」に權八と長兵衛女房。五月、河原崎座、「桂川」にお半。是れより病氣にて休む。

翌年春の評判記に「無類」に進みたりき。

文政十二年正月、市村座、「曾我大寄」に糸屋娘おふさ。三月、「宿錦繪」にお初。十一月、同座、「智仁勇」に傾城英木、同時、河原崎座、「いろは鏡」に幡隨長兵衛女房。

天保元年正月、市村座、「比翼男」に權八。三月、「陸奥山」に政岡。五月、「忠臣藏」に戸無瀨と一文字屋女房。七月、「桂川」にお半と上手のお六。十一月、休む。

天保二年春、箱根に保養。四月、古市へ赴く。六月、江戸に歸りしも舞臺に出でず。

天保三年三月、市村座、「隅田川」に女清玄、「助六」に揚卷。

此の興行中、四月中旬、中風症の爲め舞臺を退き、五月半ばは再び出でたりしが、七月は、奥羽に下り、冬に至りて江戸へ歸り、十一月、中村座にて半四郎の名を子条三郎に讓り、自ら俳名の杜若を藝名となし、同時に、河原崎座にて女六部と三日月お仙とに扮しき。(五十七歳)

天保四年正月、中村座、「愛敬曾我」に人丸、「戻駕」に禿。三月、「花吉原」に三筑のお仙と葛城、「忠臣講釋」におりゑ。五月、「盛衰記」に千鳥、「三銀杏」に權八と長兵衛女房。九月、河原崎座、「吉原雀」に累。十一月、森田座、「四天王」に順禮お岩、鬼七女房お綱、切見世女房。

天保五年正月、市村座、「書初曾我」に博多小女郎と藝者小女郎。劇場燒失につき旅行。

天保七年九月、市村座、「妹背山」にお三輪。同時、中村座、「俊寛」にお安。十一月、森田座、「勢源氏」に女暫、二番目に熊井町番人女房。

此の四月、彼れが子六世半四郎が病死せしが、彼れは漸く九月に至りて江戸へ歸りしなり。

天保八年正月、市村座、「根元曾我」に月小夜、二番目に博多小女郎。同時、中村座、「比翼結」に女長兵衛。三月、市村座、「櫻彩幕」にお初と大姫、「嫁きり」に小いな。五月、「盛衰記」に千鳥。六月、森田座、「忠臣藏」に一文字屋女房。七月、「合法」に孫七女房。九月、市村座、「戀飛脚」に梅川。十月、「忠臣講釋」におりゑ、「連理帶屋」にお半と土手のお六。

天保九年正月、「全盛曾我」に累。三月、「加賀見山」に松林尼、「八犬傳」に毛野、「廿四孝」に八重垣姫。秋、「桂川」にお半。九月、「花川戸」に權八と長兵衛女房。同時、河原崎座、「大當記」に雪姫。

此の「八犬傳」の不入なりしに、彼れが發言して、自ら八重垣姫を出し、六十三歳の老年とて最早身體自由ならず、狐火の所へは袴股立の侍兩人にて立廻りをし、後見しながら、例の狂ひの間をなせしが、彼れは少しも老體を露はさず、色氣の垂るばかりなりしより、頓に景氣を挽回せりといふ。

天保十年二月、市村座、「眞砂白浪」に傾城眞砂路と樂が崖のお友。五月、「浮木龜山」に長兵衛妻と重左衛門妾。七月、「忠臣藏」にお

輕とお園。七月、河原崎座、「江戸染」にお七。

此の興行中より病を發して舞臺を退きしが、此れより大かた休みがちにして、偶出勤するも餘りに重要ならざる役に扮し、斯くて、弘化の初めに至り剃髮して松下庵永久と號し、淺草の富士下に退隱し、同四年四月六日、七十二歳にして歿しき。

半四郎は美貌にして俗に之を「眼千兩」といひ、頗る顏面の表情に富み、且つ愛嬌と色氣とに優れり。又白廻しにも巧みなりき。「俳優百面相」に曰く、

昔より女形は臺辭もねばくしたるものにてありしを、此人より臺辭を碎いて面白く言廻したりと云ふ。例へば揚卷の臺辭に「硯の海も鳴門の海も海といふ名は替られど淺いと深いは客と間夫」、また鏡山のお初が花道にて「長刀の一手も教へ置かれましてお座ります」など、此類數多あり。此の「硯の海」といふ臺辭の言廻し、吾等が知りてより、今日まで誰がしても一樣なるは昔この杜若の型を典れるなるべく………。

吾等が見たる頃は既に老年とて、聲に錆がありて高き調子は出でざりき。後に坂東しうかが此の半四郎の口跡を惡くり眞似たりと言へど、其のしうかも故人なれば今の人に語りたりとて通ぜず。しうかの臺辭に跡へ引く調子のありしも、半四郎の癖を取りたるなるべし。

尙ほ「團洲百話」に曰く、

われら（九世團十郎）は、先年新富座にて、お三輪をつとめし時、花柳壽輔より大太夫（五世半四郎）の型なりといふを聞き、感服のあ

まり其儘につとめたることありき。彼の「エヽ、此のおだ巻の糸がきれくさつたばつかりで、道からとんと見失ふた、然りながら爰より他に家は無し、大方此家へ入つたに違ひはない」と臺詞のあと、「お頼みまをします」と聲高に呼かけ、尚一ト聲高め「御留守かえ」といふところ、如何にも、お三輪の情を露にし、面白味いと深し。



五世半四郎の「三日月おせん」（似顔大全より）

彼れの最も本領とする所は娘方にあり、「妹背山」のお三輪、「千本櫻」のお里、「桂川」のお半「八百屋」のお七、「油屋」のお染の如き、孰れも晩年に至るまで舞臺に繰返して常に大喝采を得たりき。されど、父四世半四郎の藝風を汲みて「生世話物」を得意とせる故にや、お姫樣役を好まず、八重垣姫又は雪姫の如き、晩年に至りて始めて之れに扮したりき。而して、此等の娘方のうち嫉妬事を能くし、累及び女淸玄は其の適例なり。尚ほ此の以外に於ける彼れの當り藝は、四世半四郎と同く、意氣地を張る遊女、もしくは

任侠なる年增役にして即ち揚卷とお俊とは前者に屬し、長兵衞女房と雷お鶴とは後者に屬す。又同時に武藝に達して力量に秀でたる女性に扮するを得意とし、即ちお初の如き、政岡の如き、是れなり。尙は別に、盜賊、詐欺等い謂はゆる「惡婆」を好んで勤め、土手のお六、三日月お仙、及び女五右衞門、女熊坂の如き當り藝あり。文化三年の「役者開帳」に彼れが女五右衞門を評して、

近頃は尾上松綠(松助)の致されたやうな惡てん女のにくしみを好んで致されど、女形の情が薄らいで氣の毒じや。何うぞ本業はがりして、亡父相傳のちやつぴいで見たいものて御座る。

と曰へる如く、四世半四郎の扮せるは、只おきやん、もしくは御轉婆なる下流の女性なりしが、彼れの扮せる性格は其の區域を進めて愈複雜となりしなり。

彼れの缺點は愁嘆に拙なりし事なりといふ。これ其の餘りに美貌なると餘りに愛嬌あるとが、此の種の表情を打消したればならん。然れば「妹背山」の定香は彼れの適まり役ならずと當時の評家はいひき。彼れが父、四世半四郎と藝風の範圍を異にせるは、最も此の一點に於て著しかりしなり。

彼れは又四世半四郎と同く所作事を能くし、「七變化」、「五節句」、等の當り藝あり、又早變りをも能くし、「お染久松」の七役は其の最も顯著なる例なりき。加之、四世半四郎が女方以外なる立役又は荒事に指を染めし如く、彼れも、女暫、曾我の五郎、怪童丸、放駒長吉等に扮し、特に白井權八は一代の當り藝なりし

のみならず、彼れより以來、岩井家の藝として傳へられき。

彼れが藝道についての逸事は頗る多し。

「平假名」に三津五郎（三世）の源太、半四郎の千鳥なりしが、三津五郎の贔屓連が、三津五郎を茶屋へ呼びて馳走しながら、源太のよきは言ふまでも無きが、取分け千鳥が歸り來て茶を出す時、湯呑を取りながら千鳥を見る具合、色氣もあり情もありて、若殿と腰元との間ながら、抱寐した女に違ひなく見えしは感心なりと褒めたるに、彼れは全く半四郎のしむけが好きゆゑ情合がうつります、茶を出す時、口の中で、御歸り遊ばしましと言ふ、其の一言に自然と女房よりも可愛くなります、と答へしとぞ。（「俳優百面相」）

われら（九世團十郎）此度大太夫がつとめたる（八重垣姫の）型をば繁松に諳り演め居ることなるが、このやり方はあたり場のなき、如何にも仕惡きやり方ながら、大太夫は實に名人にてありしと覺ゆ。彼の人のは狂ひになりてよりも、兜を持てば狐が憑き、兜を離せば八重垣姫となる事なり。忽地にして狐、忽地にして美人、隨分やり惡きことは遣り惡くけれど、斯くてこそ作者の書きたる八重垣姫の本意に適ふものといふべし。（「團洲百話」）

或る人、松本幸四郎（五世）に永木三津五郎（三世）、加賀屋歌右衛門（三世）、岩井半四郎、それ〴〵相手にしたる舞臺の工合如何にと尋ねたるに、幸四郎の曰く、永木は上手で御座います、三津五郎と狂言をなしますと、茶の湯の席へ列なりましたやうに、何となく、心持がよう御座ります、歌右衛門は二三日おかして碁を打つやうで面白う御座います。又半四郎とは櫻の散る中を歩くやうで御座りますといひしとぞ。（「俳優百面相」）

〔補〕坂野積善翁筆記には「永木と狂言をなする時は、芝居の心持でなく、茶座敷にて茶をなする如く、心落付て手順宜く好き心持なり、

加賀屋と狂言する時は劍術の試合をする心にて少しも油斷ならず、杜若と一座の時には、櫻の花の眞盛りに櫻の枝にて花軍をする心にて、只々何となく心嬉しく、然し鼻の先があぶなくてならぬと云ひし」とあり。「俳優百面相」は翁の談話を記せしなるべければ、此の方信を措くべきか。

半四郎と鼎立せるは、立役に於ける五世幸四郎と三世三津五郎とにして、此の三人によりて殆ど當時に於ける江戸の劇壇は代表せられたりき。然れば文政三年、彼等が殆んど同時に西下するや、京阪の劇壇は彼等の爲めに非常なる影響を受けたりき。「文政雜記」に曰く

戲場役者の京大阪へ上る事、初代中村仲藏、松本幸四郎(四世)、女役にて岩井半四郎(四世)など上りし頃迄は、上方狂言取組の中にて一役を請取り勤めし故、土地の風俗も違へば、上手下手の外に殊の外心勞せし事なりとぞ。然るに、夫より年月相隔り、文政三年辰の秋、松本幸四郎(五世)、岩井半四郎(五世)、大阪へ上りし處、大評判大入にて、外の芝居には、其頃の大立者、片岡仁左衛門、中村歌右衛門、嵐小六など居て狂言を替へしかども見物少く、十日とは續かずして、休んでは始め、六七度狂言を替へしかども見物なし依て坂東三津五郎(三世)、其頃江戸役者の日の出なれば、手を盡くし呼登せて、巳年(文政四)の春より左右へ分れて、芝居二軒興行せしとぞ。其の狂言を聞くに、作者は江戸より連上り、江戸きおひ、又は部屋頭何がし、白藤源太の相撲取、お七吉三、御殿女中竹川など勤め、地名は吉祥院の、柳橋大のし屋の、風景は本所割下水、鈴ヶ森、などにての事、常磐津の淨瑠璃又は江戸長唄にての所作事、都て皆江戸の趣を寫しての狂言故、江戸役者は腹の内から見習ひ聞馴れたる事のみ故、骨折らずして物好格好相當せり。其外の狂言といへども、仙臺萩、忠臣藏、草履打、など皆御殿女中の俤を寫しての狂言なれば、立役女形とも專ら江戸風を第一に用ゐて大當

大入を取りしといへり。上方の風俗いつとなく化せられて、江戸風俗を好む心より斯く成行きしなるべし。是より以後、次第に其の風俗盛んに修行がんには、上方の役者は旅芝居の役者を見るごとく賤めらるゝに至るも遠からじ。

蓋し藝術の中心が次第に上方より江戸に移らんとせるは、文學に於て、西鶴、近松、出雲が廢れて、京傳、馬琴、三馬が興りしが如く、謂はゆる江戸趣味が京阪に歡迎せらるゝに至りしは氣運の然らしむる所に他ならずと雖も、而も其の氣運に乘じて此の三人が江戸趣味を鼓吹し、且つ寫實の藝風を彼れの劇壇に移せしは吾が演劇史に特筆すべき事實ならん。而も此の著書が豫言せる如く、上方の藝風が江戸に影響せるは三世歌右衞門を最終とし、其の以後は、三世菊五郎といひ、七世團十郎といひ、寧ろ江戸の藝風が上方に影響し、斯くて藝術の中心は次第に西より東に移りたるなり。

半四郎の性質は活達にして放膽なりき。

大廻しといふ親船にて長崎へ行きし事あり。玄海灘にて夜中用達しに行くとて過ちて海中へ落ちたるを運よく船頭に助けられて引上げられたり。其時も落ちたる儘にて慌てざりしゆゑ怪我もなく濟みしとぞ。其歸途、尾張名古屋にて興行の約束ゆゑ、自分は陸路尾張へ廻り、荷物は種々長崎より船にて江戸へ廻したるに、柳島の別莊へ到着の夜、自火を出し、別莊も家財も殘らず燒失し、番人の吉といへる親爺燒死たる知らせの狀、名古屋の興行先きへ着たりしが、又二日程たちて六代目半四郎死去の旨、住吉町なる同人宅より知らせ來り、重ね〳〵の不幸に杜若は常に替らず、斯樣の時に陰氣では往かぬ、と鳴海へ誂へて杜若の絞りの浴衣を揃にし一座へ出し、眼の樂みでもしませう、と平氣なりしと云ふ。（「俳優百面相」）

彼れが京都にて冒險的に「加賀見山」を演せし如きも、其の平生の意氣を知るに足る。而も、其の弊は專横にして他を凌ぐに至れり。

昔は女形は何處までも立役の内儀さんにて、狂言は立役次第に任せ、其の代り淨瑠璃だけ女形の出し物とす。されば囃子方だけは女形の支配に屬したるものなりしが、此の半四郎より、七役のお染など二番目狂言を女形で持つ事となり。其より次第に勢力を增して、近代の田之助(三世)などに至りては、一番目二番目とも女形で持つが如き奇觀を呈したるなり。(同上)

彼れが半ごろ三世三津五郎と隙を生ぜしも、此れが爲めなりき。

半四郎の妻は三世宗十郎の女にしてお千代といひ、溫和にして歌道に通じたり。「狂言といひながら夫の色狂ひや心中を見るは愚かし」とて半四郎の舞臺を終生見たる事なかりき。夫婦の間に二子あり、長男粂三郎は前に記せる如く六世半四郎たり、次男紫若は後に七世半四郎たり。共に五十歳に足らずして歿せしと雖も、孰れも次ぎの時代の名優たりき。一門の繁榮を極めしは、彼の文政五年に父子三人が江戸三座の立女形たりしにて知るべし。而して此の二個の少半四郎より區別して、五世半四郎を「大太夫」といひ、又「杜若半四郎」ともいひき。

●●●●●●二世中村大吉(鳴尾屋巴丈、安永二—文政六)は京阪の出身にして、始め藤川友吉の門に入りて大吉といひ、大阪の角丸芝居に出勤せしが、初世中村富十郎の女婿たる二世中村のしほの弟子となり、中ごろ湘川と改め、また鳴

尾彌太郎といひしが、享和元年（廿九歳）、江戸の河原崎座へ下りたり。三月「草履打」に尾上、七月「妹背山」に定香と橘姫、九月「忠臣藏」にお石とお園、等に扮し、翌二年六月、中村座にて「戀女房」の重の井に當りを取り、十一月、再び河原崎座に「千本櫻」の典侍局とお里と靜とに扮せしが、享和三年冬、坂東彦三郎と共に大阪へ歸りて中座へ出でしも左程の評なく、暫く名古屋へ下り、更に、翌文化元年冬より京都南側芝居へ現はれき。是れより次第に名聲を高めしが、文化十一年、（四十二歳）冬、十二年ぶりにして江戸へ歸り、中村座に出で、十三年春、始めて「上上吉」に進みたり。此の後も



二世大吉の「梅王女房はる」（「似顏大全」より）

愈〳〵女方の先輩として重んぜられしが、多病にて左手自由ならず。終に文政五年九月、河原崎座にて「東伽羅」の政岡、「猿人交」の女猿廻し、及び「時賴記」の女鉢木を一世一代として舞臺を退き、翌六年三月廿

二日、五十一歳にして歿せり。

大吉は美貌にして且つ音聲鮮かに、又義太夫節の素養ありて、丸本物を演じては江戸の劇壇に有數の人なりきといふ。文化二年の「役者よし〳〵」に、

御きりやうはよし、口跡はつきりとしてよく、此の上に品やかにやられたら、下には置かれぬ御人ぢやに、これのみ惜い事ぢや。

といひ、同四年の「役者眞行草」に、

御臺樣や傾城事より、しやんとした女房役ではいつでも當り多く、おし出といひ、お顔もようて、申分はなけれど、此上にやはらかみを加へてなされたら、下に置かれぬ立者株でござります。

といひ、同九年の「役者出情噺」に、

行義といひ、器量といひ、物すきもよき、先づ當時の若女形の玉株。それしやの果ての世話女房にかけては、外にいらいてのない巴丈さん。……いや又愁事などにかけては本とく心をさしてぢや故。……しかし女の情も今一いき行屆かぬように見える場もござり升れば、此御工夫を賴みます。

といひ、同十年の「役者出情噺」に同時代の四世小六と比較して、

大吉丈は世話女房がよい代り、太夫事につかはれず、珉子丈はあちらこちらゆゑ、双方ともに一つづゝ缺ける所あるゆゑ、甲乙が定めにくい。

といひ、同十年の「役者謎懸論」に、

中村大吉とかけて、からしれりの名人と解く。心は笑はぬ所が直打でござる。

といひ、彼れの弊は顔面の表情に愛嬌なく、且つ女性としては科白の强過ぎるにあり。隨つて遊女又は娘方には不適當にして、世話女房若くは女武道を得意とせるなり。例へば、世話物にては「腰越狀」の五斗女房、「八百屋お七」の下女お杉、「双蝶々」の姉お關、「阿波鳴門」のお弓、「伊勢音頭」の貢伯母の如き、又時代物にては「先代萩」の政岡、「加賀見山」の尾上、「菅原」の千代の如き、孰れも其の當り藝なりき。然れば同時代の五世半四郎が專ら娘方に扮して喝采を博せるに對し、彼れは別の方面に於て伎倆を逞くせしなり。尙ほ女方として斯くの如き缺點は晚年に往々彼れをして男性の人物に扮せしめ、即ち「一谷」の忠度（文化十年）を始めとして、濡髮長五郎（同十四年）、工藤（文政元年）、小田春永（同二年）川越太郎、忠信、知盛、覺範、（同年、「千本櫻」の十二役）、松王と菅丞相（同三年、「菅原」の五役）、能登守範經（同四年）、髭意久（同五年）等、大かた好評を以て迎へられたりき。

註　大吉の母は大阪曾根崎新地の妓家花屋の娘にて雛子たりしが、落籍して江戸に赴き、大吉を生めり。其の姉も藝子たりしを、崇禪寺馬場仇討に主人公たる生田傳八郎が此の處に寓せしうちに通じて子を儲け、其の子は即ち上田秋成なり。即ち秋成と大吉とは從兄弟たりしも、兩人とも此の事を人に語らざりきと。

四世瀬川菊之丞（濱村屋路考、天明二―文化九）は木挽町の芝居茶屋猿屋伊八の子にして、始め坂東千之助といひ、後中村

十藏の養子となり、中村千之助と改めて桐座の若太夫たりき。寛政十年（十七歳）冬、中村座にて子役より娘方に進み、同十一年冬、三世菊之丞の養子となりて瀬川菊之助と改め、市村座に出でたり。享和元年、菊の字を忌みて更に路之助と改め、文化四年（廿六歳）、養父菊之丞が仙女と改名せると共に、自ら路考と改め、又菊之丞ともいへり。同八年、「上上吉」の位に上りしが、翌九年十一月廿九日、僅に三十一歳にして死せりき。



四世菊之丞の「お三輪」（「瀬川ぼうし」より）

路考は舞臺の經歷極めて短かければ其の技藝に於ても特筆すべき作なしと雖も、能く養父三世菊之丞の風を模倣し、且つ、娘方と女房役とを兼ね、例へば「菅原」にて、八重にも戸浪にも、「忠臣藏」にてお輕にもお石にも好評を得たる如き、彼れが尙は年齒の若くして多能なりしを見るべし。其の生家の猿屋なりしより俗に之れを「猿屋路考」といへり。

●●●●●●● 二世澤村田之助（紀の國屋曙山、天明八—文化十四）は、三世宗十郎の三男にして、四世宗十郎の弟なり。母は二世嵐小六の

妹にして、京都に生まれ、幼名を鐵之助といふ。寛政五年（六歳）春、中村座へ出でしを初舞臺とし、同九年（十歳）冬、父及び兄と共に始めて大阪へ下りしが、同十二年冬、江戸へ歸り、次いで享和元年（十四歳）、父の死してより其の幼名を襲ぎて田之助と改め、娘方となり、義母貞昌尼と共に京都へ上り、七月より北側芝居へ現はれたり。享和三年春より、修業の爲め大阪の稲荷芝居へ出で、次第に好評を得て、文化二年に堀江芝居へ轉じ、翌三年四月、名古屋へ下りしが、七月、歸阪して中座へ出で、「三代記」に時姫に扮し、之れを大劇場の再勤とし、其の後、京阪の舞臺を往來せり。文化六年（廿二歳）春、江戸へ歸りて市村座に現はれしが、同十年冬、再び大阪に上り、十二年冬に至り東歸し、翌十三年の春、傷を獲て舞臺を休み、自殺せりとの風說傳はりしも三月より出勤し、同年冬、再び傷を發して御殿山の邊に保養せしうち、翌正月廿八日（三十歳）にして歿しき。

田之助は美貌にして、地藝も所作も能くし、其の藝風は三世菊之丞を寫し、又衣裳及び鬘の好みよかりしが、口を開いて愁嘆する癖あり、彼れの泣けるは笑へる如く見えたりといふ。而も其の短き一生の間に彼れが傑作とすべきは、「筑紫琴」の娘深雪ならん。此の原作は最初司馬芝叟が自ら脚色して舌耕の用に供せしを、三世吉三郎をして宮城阿曾次郎に扮せしめんとて、狂言作者近松德叟が筆を執りしも、深雪に扮すべき女方のなかりし爲め、空しく四五年を經しうち、馬田柳浪が稗史として出版し、後此の書

によりて堀江芝居に上場せられしと雖も、左程好評ならざりしうち、文化十一年、田之助が上阪し、彼れは容貌にも秀で、琴三絃にも達したれば、深雪を扮するには最も適當なるべしと、奈河晴助が更に潤色して舞臺に演ぜしに、果して吉三郎の阿曾次郎と共に非常の大喝采を博し、次いで田之助は名古屋にても江戸にても之れに扮して同く好評を得たりしなり。其の他、娘方は言ふまでもなく、女房役、傾城事、等の當り藝の尠からざると共に、又往々男性に扮し、久松、久我之助、權八、伊左衛門、賴兼、梅の由兵衛、苅萱、菅丞相、など好評を以て迎へられたる所以の一は、此等の役が父宗十郎の家に傳來せる藝なればならん。



二世田之助の「深雪」（「似顔大全」より）

此の他市川團之助（三河屋三紅、天明六―文化十四）あり。四世團藏の第二子にして地藝と所作と共に能くし、又大刀打の

上手と稱せられしが、桐座の經營に失敗せし爲め、僅に卅二歳にして自刄したりき。

第三編　天保嘉永時代の俳優と其の技藝

第十八章　四世中村歌右衞門

俳優としての經歷——彼れの體格——當り狂言——長所は舞踊——二世嵐吉の後繼者——腹のない事——形と動き——稽古の狀態——精力と忍耐——襟度と雅量——謙讓と德望——一代の人氣。

天保以後は國事多端にして政治の衰ふると共に、藝術も亦振はず、德川幕府の末路として江戶時代の文化は僅に其の餘喘を保てるのみなりき。例へば、小說界に於て、種彥、馬琴、等死して其の後繼たるべき文豪のなかりしが如く、劇界に於ても、天保八年には七世仁左衞門と二世璃寛とが死し、九年には三世歌右衞門と四世幸四郎と共に歿し、前代の老優相踵いで物故して、之れに代るべき名手殆ど地を拂ひたりき。此の間に稍異彩を放てるを四世中村歌右衞門（成駒屋、翫雀、寬政十—嘉永五）となす。

圕「代々の接木」には死せる時、五十七歲とあり、さすれば寬政八年生ならざるべからず。玆には彼れが追善句集「はなち鳥」に寺門靜軒が撰せし傳記に五十五歲とあるを執る。

歌右衞門は江戶下谷なる孔雀茶屋の悴にして、本姓を平野、幼名を吉五郎といへり。彼れが母の姉は振付藤間勘十郎の妻なりしかば、其の緣により、踊の師匠たらんとして勘十郎の門に入り、文化三年（九

歳)、神田紺屋町の祭禮に矢の根五郎に扮して家臺に出で、好評を博しき。翌四年、終に勘十郎の養子となりて龜三郎と改め、同五年、三世歌右衛門が中村座に下りし時、其の弟子となり、藝名を中村藤太郎といひしが、同九年(十五歳)、師歌右衛門が歸阪するに及び、其の跡を追ひて出奔したりき。

【註】「代々の接木」を始め諸書に幼名を吉太郎とあれど、「はなち鳥」の傳記に從ふ。又「俳優百面相」に彼が俳優となりし動機と其の上阪せし事情につき、異說を掲げて曰く、「藤間龜三郎と云はれし若冠の頃、師の勘十郎、何かの淨瑠璃の時、見物の評判に振付の功をいふ人なきを歎息したるに、側に居たる龜三郎聞て、私も振付はつまらぬ者と思ひます、それゆゑ役者になりたいと思ひますといひしに、さらば大阪へ赴き修行して來よ、稻荷町にても役者になれとて加賀屋歌右衛門へ宛て依賴の書狀を認め、大阪へ出立させたり。……此時大阪にては、歌右衛門(三世)、六歌仙の淨瑠璃を出したしと相談のところ、振に忘れし所あり、江戸まで藤間を呼びにやれば三十日もかゝろ、困つたなアといふ處へ、吉太郎が來りしかば「直ぐに振付となり、重寶がられて藝子仲間にも知られ跡が役をなして、持囃され、居候の苦みなしに一足飛の役者となり」たりといふ。又寺田勘彌の談話には、勘十郎の代りとして四世半四郎に招かれしに、彼れが振のつけかた心に協はぬとて打擲せられしより、發奮して俳優となれりともいふ。

翌年三月、中座の「一の谷」に出勤せしも未だ世間の注意を引くに足らず、次いで御靈の子供芝居へ出で、改名して鶴助といひ、師の當り藝たりし「七變化」を演じたりき。これより北新地もしくは堀江の小劇場にて專ら師の藝風を寫して喝采を得たりしが、文政元年(二十一歳)、道頓堀の竹田座にて「四天王寺伽藍鑑」に赤井丸、大工與五郎、ちやうし丸の三役に扮し、これより次第に名聲を揚げ、次いで筑後座に、

柿木金助、玉藻前、葛の葉、石井源藏、多賀の大領と召使お初、石川五右衛門、茜屋半七など孰れも好評嘖々たりしが、文政八年（廿八歳）三月、角座にて彼れが師歌右衛門か一世一代に三番叟と浦島の所作を演じ、次いで伊勢尾張に赴き、十一月、京都四條の北側芝居へ師と共に初めて現はれ、「伊賀越」に掛田内記と栢榴武助に扮し、此の時、芝翫と改名したりき。以後、俳優としての經歷は

文政九年正月、大阪、中座、「先代萩」に浮世渡平、松ヶ枝的之助 大江鷹元、「七化」の所作、「琴責」に岩永。三月、「[illegible]」に[illegible]太郎と松王、「伊勢音頭」に藤浪左膳。四月、角座、「妹背山」に久我之助、入鹿、お三輪、「玉藻前」に鳥羽院、「反魂香」に吃又平。五月、堀江芝居、「一谷」に熊谷、「小栗」に横山太郎と星川雲八、「時雨傘」に團七。六月、宮島に下る。七月、大阪、中座、「[illegible]」に[illegible]と前田犬清、「極彩色」に清十郎、「鉢木」に佐野源左衛門、「戻駕」に浪花次郎作。九月、「躄仇討」に佐々成政と飯沼勝五郎、「五大力」に八右衛門。十一月、京都、北側芝居、「五山桐」に矢田平と正清、「五人男」に雁金文七。十二月、大阪、角座、「布引」に多田藏人、「千本櫻」に靜御前。

文政十年正月、「遊山櫻」に小西行長、淺野彌兵衛、佐竹新十郎、所作事に曾我五郎、土佐繪の奴、石橋。劇場燒失せし爲め堺より名古屋に赴く。七月、角座、「双蝶々」に長五郎、「おもと龜松」に大倉吉兵衛、「黒船」に判じ物喜兵衛。九月、「伊賀越」に内記、又五郎、[illegible]見、武助、「重井筒」に徳兵衛、「信田妻」に葛の葉と狐勘平。十一月 江戸、中村座、「金峯山」に尾形三郎と[illegible]。

此の「葛の葉」を名殘狂言として、彼れは故郷なる江戸へ十六年目に歸來せしなり（三十歳）。當時江戸にては四世三津五郎（坂東簑助）最も聲望ありしかば、是れより天保四年に歌右衛門が西上せるまでは、兩

優の競爭によりて劇壇に活氣を呈したりき。

文政十一年正月、「水滸傳」に河津三郎、宇佐美市五郎、鴛鴦の精、「五大力」に源五兵衛。三月、「一谷」に熊谷、「幡隨長兵衛」に本庄助市、「七變化」に傾城、ごみ太夫、供奴、乙姫、浦島、瓢簞鯰、石橋。五月、「忠臣講釋」に師直、由良之助、一文字屋、百姓彌作、十太郎、太鼓持市八、彌次兵衛、「廓文章」に伊左衛門。七月、「戀女房」に定之進と逸平、「姉念坂街」に古手屋八郎兵衛、「返魂香」に吃又平。八月、「妹背山」に入鹿とお三輪。九月、「合法衢」に高村瀬左衛門、合法、人足孫七、下部金平、「後の月」(所作事)に三番叟と角兵衛獅子。十一月、同座、「雪御伽平家」に清盛、義朝嬌男雷震丸、上方商人紅屋長兵衛實は小姓吉三、三浦義純、安倍保名實は惡源太。

文政十二年正月、「振袖曾我」に奴梶平後に鹽澤丹三郎(男政岡の飯焚)、曾我五郎(男之助の役)、小僧吉三、「隅田川」に法界坊。三月、「千本櫻」に忠信、知盛、梶原。此の興行中に劇場類燒せしゆゑ休む。十一月、同座、「猿島都」に田原藤太、坂東太郎、土蜘之助、藤原忠文、白拍子花子實は忠文靈(「道成寺」の所作)。

此の時、始めて座頭となり、且つ評判記の位を「上上吉」に進められき。(三十二歲)

天保元年正月、「虎石相曾我」(男草履打)に曾我祐信、同十郎、工藤、岩藤、大學、金谷金五郎。三月、「清水清玄」に清玄、奴淀平後に信夫惣太、後鳥羽院の靈、「九變化」に辨慶、官女、布刈、牽牛、七夕祭、夜這星、喜撰、茶屋女と勇み男(後面)、「腰越狀」に後藤。五月、「いろは日記」に師直、勘平、堀部安兵衛、判官、由良之助、九太夫、同娘小濱、鹿間宅平、伊吾、近藤源四郎。八月、「妹背山」に鱶七、求女、大判事、「双蝶々」に長吉、「雪月花」に木賊苅と關兵衛。「小栗街」に横山太郎、椀久實は幇間才介、星川雲八、小栗判官、鼠小僧伊之助、「河原達引」に猿廻與次郎。十一月、同座、「紙顔鏡」に袴垂實は將軍太郎、山賤斧藏、山姥、大工次郎吉實は渡邊綱、辻占後家お熊、「女鳴

神」に絶間之助。

此の時の評判記より急に「大上上吉」の位となれりき。

天保二年正月、劇場類燒の爲め休む。三月、「眞砂白浪」に捨若丸後に石川五右衛門、早川高景、石田局、「六歌仙」の所作事。五月、「夏祭」に團七。七月、「伊賀越」に又五郎、丹右衛門、政右衛門。九月、「信田盛」に左近太郎、葛葉。途中にて負傷し、休む。十一月、同座、「相馬館」（九月狂言の增補）に芦原十郎、其他は九月と同じ。

天保三年正月、「魁曾我」に朝比奈、工藤、小美川平内、男達破軍太郎。三月、「女行列」に木田隼人と召仕お初、「淺草祭」に武内大臣、武成、惡玉。五月、「菅原」に松王、宿禰太郎、輝國、お八重。七月、「加賀文章」に高橋作十郎、左近之進、「木町丸」に縄五郎、「四變化」に夷、龍王、海士、玉賣。八月、「近江源氏」に盛綱と注進小藤次。九月、「布引」に實盛、「二代勝負附」に鬼ケ嶽、「廓文章」に夕霧と伊左衛門（四世三津五郎と一日代り）。十一月、同座、「碁盤忠信」に景清、辨慶、庄屋庄作實は江田源三、いがみの權太、忠信。

天保四年正月、「愛敬曾我」に大日坊、五郎、獄門庄兵衛、「戻駕」に次郎作。三月「稻妻表紙」に名古屋山三、さくら三八、梅津嘉門、「九變化」に文使の娘、老女、丁稚、雨乞小町、雷、越後獅子、契情、座頭、朱鍾馗。五月、「盛衰記」に梶原、樋口、「鈴森」に團侍、寺西閑心、小紫。六月、「忠臣譯釋」に十太郎。七月、「一谷」に三保谷（錣引）と熊谷、「五大力」に源五兵衛と三五兵衛（海老藏と一日代り）。九月、「菜種御供」に時平、宿禰太郎、松月尼、白太夫、倶利伽羅太郎、「舌出三番叟」と「道成寺」。十一月、大阪、角座、「一谷」に熊谷、「嫗山姥」に八重桐。

此の時彼れは六年目に大阪へ歸りたりき。

天保五年正月、「棠棣御供」に時平、宿禰太郎、十作、孔雀三郎、荒藤太、「六歌仙」。三月、「五山桐」に五右衛門と大炊之助、「二代鑑」に高倉隼人と鬼が嶽。五月、「近江源氏」に盛綱、「夏祭」に團七。七月、「九重錦」に横曾根平太郎と奴矢正平。九月、「女將門」に相馬太郎と秀郷、「重井筒」に徳兵衛、「反魂香」に吃又平、「大津繪」に藤娘と瓢箪鯰。十一月、京都、北側、「一谷」に熊谷と六彌太、「腰越状」に泉三郎、「重井筒」に徳兵衛、「大津繪」に藤娘、

天保六年正月、大阪、角座、「入相櫻」に清玄と遠山甚三郎、「二人道成寺」(富十郎と)。三月、「二島英勇記」に吉岡太郎右衛門と宮本無三四、「出入湊」に黒船忠右衛門。四月、中座、「寳傳授」に筑紫權八、「伊勢音頭」に貢、「小栗」に横山太郎と運八。五月、「詠千本」(「千本櫻」の改作)に知盛、狐忠信、「三枚續」の所作に乙姫、布刈、傾城、石橋。六月、京都、北側、「女將門」に相馬太郎と秀郷、「時雨傘」に團七、「五枚續」の所作に文使、ぞめき奴、惣嫁、布刈、石橋。これより大津に赴く。七月、大阪、角座、「布引」に實盛、「大塔宮」に村上彦四郎と齋藤太郎左衛門、「拳禪」に今木傳七。九月、「黄鳥塚」に佐々木源太左衛門と同源之助、「紙治」に治兵衛、「矢口」にお舟。十月、「太平記士鑑」に師直、由良之助、與茂七、彌作、勘平、錺間宅兵衛、「吉野山」に仕丁又五郎。十一月、京都、北側、「双蝶々」に長五郎、「庵室曙」に清玄、「二人道成寺」(富十郎と)。

翌春、はじめて師の名を襲ぎ、四世歌右衛門といへり(三十九歳)。當時、同門の高弟たる富十郎等これに反對し、師の養子鶴助のあるに、歌右衛門の名を芝翫に讓ること然るべからずと言ひ、三世歌右衛門は彼等を招き、己れ決して「藤間の吉」には名を讓らず、彼の藝に讓るなればとて一同を說得せりといふ。

天保七年正月、大阪、角座、「青陽鶴」に柴田修理之助、河田勝左衛門、鳥屋兵助、與惣太夫、「蔦の精」の景事。三月、「伊賀越」に丹右衛

門と政右衛門と細川丑元、「千兩幟」。岩川次郎吉。五月、堀江芝居、「腰越状」に五斗、「隅田川」に法界坊、「渡初」に奴文字助。八月、北新地芝居、「腰越状」に五斗、「重井筒」に徳兵衛、「千草亂咲」に椀久。十月、「大内鑑」によかん平、狐葛の葉、芦屋道滿、「出入湊」に黒船忠右衛門と八木孫三郎。十一月、京都、北側、「稚兒淵」に石田局、捨若丸後に五右衛門、小早川高景、「出入湊」に忠右衛門と奴の小萬、「六歌仙」の景事。

天保八年正月、大阪、中座、「玉手綱」に奴逸平（「道成寺」の所作）、菊池多門守、入間屋喜十郎。四月、「嬉心船橋」に三浦荒次郎と佐野兵衛、「極彩色」に朝比奈藤兵衛。八月、「物草太郎」に葛城と不破伴左衛門、「五大力」に源五兵衛。九月、「鬼一」に鬼若丸後に辨慶、「曾根崎心中」に徳兵衛、「鉢木」に時頼。十一月、角座、「崇禪寺馬場」に遠城宗左衛門と治左衛門、「嫗山姥」に源七。

天保九年正月、大阪、中座、「忠臣藏」に師直、勘平、定九郎、となせ、數右衛門、由良之助、義平、「七變化」に傾城、座頭、業平、曲使獅子、小原女、仕丁、鍾馗。三月、江戸、中村座、「櫻門縁千本」に大炊之助、五右衛門、梶原、狐忠信、「三幅對」の所作に俳諧師、花見姐、狂言。四月、「雨刀扇鎌」に吉岡太郎右衛門と宮本武藏。七月、休む。九月、「鬼一」に鬼若丸後に辨慶と鬼一、「伊勢音頭」に貢。十一月、同座、「功力妙法字」（菊五郎の一世一代）に船守彌三郎、法華長五郎、日朗。同時に市村座、「一谷」に熊谷、「靱猿」に猿曳。

此の時、彼れは五年目に再び江戸へ下りしなり。

天保十年正月、「岩井歌曾我對面」に鬼王、梶原源太、百足の金藏、稲田幸藏。同時に市村座、「椀久」の所作。三月、中村座、「八變化」に天女、助六、隱妻、飴賣、丹前、船頭、鷺娘、雀踊。四月、「腰越状」に五斗。七月、「忠臣藏」に師直と由良之助、「おさめ額七」に額右新七。九月、「花街稲妻」に清玄、櫻姫實はおつろ亡靈、物草太郎。十一月、市村座、「入船篠塚」に篠塚伊賀守、奴富士平、片桐春之進、足利義詮、釣船三次、正成の靈。

天保十一年二月、「宮曾我」に工藤、鬼王、白藤源太、八百屋半兵衛。三月、「十二ヶ月」の所作（羽左衛門と）。四月、「盛衰記」に樋口、「戀女房」に座頭慶政。八月、「信仰記」に松永大膳、「返魂香」に吃又平、「戻駕」に次郎作。九月、「成渡讎」に千原千左衛門と芳野屋治兵衛、「吉野山」に衛士又五郎。十一月、同座、「鎭西八郎」に爲朝、清盛、大工石松、船乘の吉、「二人道成寺」に佛御前。

天保十二年正月、「曾我稲晶屓」に工藤、黑船町の忠右衛門、大黑舞音吉。三月、「物草太郎」に紫大臣、雀大和尚、道具屋武助。五月、「いろは連歌」に由良之助、平右衛門、重太郎、角兵衛、早野勘左衛門、義平、師直。八月、「色成穐」に濡髮長五郎と南與兵衛、「六歌仙」に遍照、康秀、喜撰、黑主。十月、劇場燒失。十一月、河原崎座、「菅原」に松王、宿禰太郎、相模次郎、「七人男」に布袋市右衛門。

天保十三年九月、市村座、（猿若町に新築）、「荒木新舞臺」に唐木政右衛門、武助、城五郎、「月雪花」に仲居、晒男、常磐御前、蝶々賣、雄蝶の精。十一月、「兜軍記」に岩永、景清、阿古屋實は菊五郎、「猿廻」に與次郎、「布引瀧」に實盛。

天保十四年正月、「曾我花輪」に祐經、男藝者德兵衛、小達甚十郎、鬼王、小藤太、「曾我祭」の所作に才藏。二月、「姿稲妻」に伴左衛門、南無右衛門、三八、土佐又平、「關扉」に關兵衛。五月、「一谷」に熊谷、主馬判官、六彌太、「妹背山」に入鹿とお三輪、「あやめ木偶」の所作に甚五郎。十月、「盛衰記」に松右衛門、「廓文章」に伊左衛門。十一月、河原崎座、「振袖武藏」に鬼若丸後に辨慶、村上太郎、物川藏人、北條四郎、清盛、「男道成寺」に狂言師外六。

此の年七月、加役（立役にて女方を勤むること）の報酬に三十兩を請求せしは、前年規定せられし所に違反せりとて、三世菊五郎及び訥升（五世宗十郎）と共に過料金十貫文づゝに處せられき。

弘化元年正月、「曾我評判」に祐經、十郎、五郎、狩野之助、「天浮橋」の所作に伊弉諾尊と大礒屋傳三、「薩摩歌」に鞘師彌助と勝間源五

兵衛、「小栗判官」に太郎、運八、判官。三月、「金花山」に松ヶ枝關之助と仁木彈正、「七變化」に乙姫、浦島、座頭、傾城、供奴、仕丁、執著。四月、「腰越状」に五斗。五月、「自來也說話」に自來也、民部太郎、名越長兵衛、「兩國夜店始」に雙結博多の新七。七月、「いろは實記」に師直、彌平、宅兵衛、義平、勘平、由良之助、「宵庚申」に八百屋半兵衛(人形振)。九月、「清水清玄」に清玄、奴壬生平、吉田少將、惟貞、「反魂香」に又平、「嫗山姥」に八重桐。十一月、中村座、「忠臣講釋」に十太郎と由良之助、「伊勢音頭」に貢。

弘化二年正月、「源平曾我」に淸盛、惡源太、黄金餅賣助六、河津三郎、景清、「俄曲突」に「道成寺」の所作。三月、「契情廓宮本」に宮本六三四と海津屋治右衛門、「在原系圖」に蘭平と名虎。五月、「妹背山」に大判司、「黄金鷄」に柿木金助と神田丸與吉、「扇屋熊谷」に熊谷。七月、「石田局」に高景、石田局、五右衛門、「夏祭」に團七。九月、「綴錦」に須藤六郎左衛門、春藤次郎右衛門、渡守又六、備後屋重兵衛、「戻駕」に次郎作。十一月、市村座、「會稽信田」に葛の葉、惟忠、經基、雲助又七、千枝狐。

弘化三年正月、「武繪懸額」に曾我五郎、賴政、朝倉主水、手代彦七、佐藤正淸、「どんつく」の所作に大神樂荷持亦六。二月、「二人道成寺」に白拍子薫。四月、「胡蝶絞」に濡髪長五郎、南與兵衛、枇杷葉湯賣正八。五月、「忠臣藏」に師直、勘平、由良之助、「五大力」に三五兵衛。七月、「青砥稿」に貝屋善吉、名倉劉齋、青砥左衛門、「邯鄲」の所作に公家。九月、「六歌仙」に遍照、康秀、喜撰、黒主。十月、「布引瀧」に瀨尾。十一月、河原崎座、「一谷雪見櫓」に熊谷、雀屋忠兵衛、主馬判官、修行者實は教經、阿波十郎兵衛、「廓文章」に伊左衛門、「妹背山」に入鹿とお三輪。

弘化四年正月、「曾我通双六」に祐經、澤井城五郎、石塔武助、唐木政右衛門、「俄」の所作に風呂番黒助。四月、「[illegible]」に名古屋山三、南無右衛門、淺間左衛門、「淺草八景」の所作に左甚五郎、和歌三神人形、漁師惡玉。七月、「齋藤太郎左衛門」に太郎右衛門、「隅田川」に法界坊。九月、「千本櫻」に知盛、梶原、狐忠信。十一月、中村座、「八島裏梅鑑」に松浦兵庫之助、菊池右門正、教經、網屋嘉

兵衛(人形振)、拳指南洒樂、「靭猿」に猿曳。
嘉永元年正月、「攝景清」に熊坂長範と盲目清、「梅由兵衛」に由兵衛。三月、「忠臣講釋」に彌作、勘平、宅兵衛。五月、「矢口渡」に由良兵庫と頓兵衛、「古手屋八郎兵衛」に八郎兵衛。八月、「高木織右衛門」に織右衛門、下部袖助實は大高主殿、「今様望月」に能師武太夫。十月、「反魂香」に吃又平。十一月、市村座、「碁盤忠信」に忠信、巴御前、辨慶、義仲、權太、北條義時。
嘉永二年正月、「青砥調」に紂王、鍾馗甲助、賣卜者三國軒、漁師次作、青砥左衛門、「おもと新助」に新助。四月、「鏡山」に又助、岩藤、楠關白、若徒喜兵衛、「土佐畫」の所作。五月、「佐野船橋」に次郎左衛門、饅頭屋與五作、三浦荒次郎、最明寺・「盛衰記」に松右衛門。八月、「嗣花紅咸盛」に天一坊、阿波民部、伊東祐清、本町丸綱五郎、井場十藏、「五節句」の所作に傾城、釣狐、曲馬乘、武内、紅葉狩、「腰越狀」に五斗、「近江源氏」に盛綱、「鬼一」に鬼一、「紙治」に願人坊傳海。十一月、「阿波鳴門」に櫻井主膳、「戻駕」に次郎作。

此の「天一坊」を江戸に於ける名殘狂言として上阪すべき筈なりしが、不評にして僅に廿日間にして舞納め、且つ市村座の興行人たりし澤田屋和助は引續いての不入に經濟の困難なりしかば、他座へ交渉して是までの習慣なりし十一月に於ける俳優の交代を翌春に延期し、同月、重ねて歌右衛門の名殘狂言を出したりき。十一月に顔見世といふ事の廢れたるは此れを始めとすといふ。斯くて彼れは十二年目に大阪へ上りたり。

嘉永三年正月、大阪、中座、「饗兩刀」に唐木政右衛門と武助、「新雀躍」に傾城、馬乘・景清。三月、「妹背山」に大判事と鱶七、「黑船」に忠右衛門。五月、「一谷」に熊谷、「夏祭」に團七。七月、「兒淵」に石田局と五右衛門、「腰越狀」に五斗。九月、「稻妻表紙」に不破伴左

衛門と又平。十一月、京都、北側、「稲妻表紙」に同上、「鬼一」に鬼一、「廓文章」に伊左衛門。
嘉永四年正月、大阪、中座、「清船諷」に加藤正清と勝五郎、「初戎」の所作。三月、「蝶紋日」に濡髪長五郎、南與兵衛、「日向島」に景清。五月、「忠臣藏」に師直、彌作、由良之助、「岩井風呂」に團七茂兵衛。七月、「盛衰記」に平次、松右衛門、「五大力」に源五兵衛。九月、「菅原」に輝國、松王丸、「嫗山姥」に八重桐。十一月、同座、「三略卷」に鬼一、
嘉永五年正月、「平清盛」に清盛、「お六櫛」に貝屋善吉、「六歌仙」に遍照、康秀、喜撰、業平、黒主。

此の興行中、腫物を發して二月十四日より舞臺を休み、十七日終に死せりき。年五十五。

〔補〕「俳優百面相」に彼れが病狀を詳く記せり。「二月十三日より腮の下に錢程の丸さの腫物出來て痛み甚し、翌十四日は苦痛を堪へて出勤せしが、清盛、康秀、黒主、等の冠又は烏帽子の紐さはりて殊更痛みを増したれど、押て大切六歌仙まで勤め、打出し後は最早堪兼ねて部屋に打倒れ、顔の白粉を落す氣力もなく、黒主の顔の儘にて駕に乗り歸宅せり。十五日は枕も上らぬ大病人となり、……十六日は大熱發し、譫言などいひて眼も當られぬ苦みにて、………十七日の朝、去る贔屓の世話にて來りし醫師の疔なる事を發見したれど、最早手後れとなり、竟に同日夕刻死去せしといふ」。

彼れの體格は「大兵にて丈も高く、肉もあり、頭大きく、目鼻口とも立派にて、日を招ぐ清盛、山門の五右衛門、等其後見競ぶべき俳優なし」といふ。斯くの如く、風采の點に於ては其の師たりし三世歌右衛門も彼れに及ばざりしなり。而も音調は皺枯れて「せりふ廻し重くろしく、世話物には不向なりし」のみならず、一藝風も世話物より時代物によろしく、其れゆゑ當り狂言は時代物に多かりき。天保八年の「役

者早速庖丁」に彼れが黒船忠右衛門を評して曰く、

御持前にてせりふが堅いゆゑ、世話狂言のやうになく、何とやらすると矢張謀叛人で本名もありさうに見える。其段は親玉(三世歌右衛門)はえらいものぢや。世話は世話、時代は時代ものと狂言を仕分けられます。

此れより先き、天保二年の「役者大福帳」にも、彼れが鼠小僧伊之助に扮せるを評して、

茶屋場へ盗人に入り、仲居の路考(菊之丞)丈の酔倒れしを見て戀慕なす所、……これまでかやうな役は高麗屋(五世幸四郎)のお株で度々いたされ、今では三升(七世團十郎)が役となつた。第一姿の拵へがわるかつた。……わたしらには田舎大工かと思つた。……此人は時代ものにかけては申分なけれど、とかく世話狂言はいきそこないます。

といへり。これ彼れが三世歌右衛門をはじめ五世幸四郎もしくは七世團十郎に及ばざりし缺點なりしなり。但し世話物に於ても「貝屋善吉」だけは彼れが當り藝として全く例外なりき。

彼れが最もなる長所は舞踊にありき。「俳優百面相」に曰く、

所作事に至りては無類の名人にて、坂東樂善(三世彥三郎)及び永木の三津五郎(三世)は知らず、其以來此人の右に出づる者なし。

彼れが師歌右衛門に「六歌仙」の振を教へてより俳優として出世の早かりしといひ、及び「七變化」を演じてより大阪に於て頓に名聲の揚がりしといひ、壯時より既に此の方面に於て天才を發揮せしなり。此のほか、彼れが舞踊に堪能なりし逸話は數多あり。

天保十一年子年の秋、市村座にて女夫狐の所作を出し、男狐は翫雀歌右衛門、女狐は羽左衛門(十二世)勤めたり。其時、歌右衛門の

足は揃ひてモロに着けど、羽左衛門の方はどちらか後れて付きしよし。(「俳優百面相」)

團十郎(九世)いまだ若太夫なりし時、歌右衛門、其の養父河原崎權之助の處へ來り、四方山の話ありし折、お前さんの様な體で好く女形が出來るといひしに、歌右衛門、女形は膝頭さへ離さぬやうにすれば形は附くものです、若太夫さんも今に女形をする時は、能く御心掛なさいといはれたり。此の教が今になると何程役に立つか知れぬと團十郎語りたり。(同上)



四世歌右衛門の「狐忠信」(「はなしどり」より)

明治廿三年の春、歌舞伎座にて團洲が道成寺を演ぜし時、おのれ故默阿彌翁と見物せし折、今度の道成寺は故人成駒歌右衛門でも、是よりよくはありますまいと尋ねしに、默阿彌少し笑を含みて、左樣さ、成駒屋はモウ一杯ようございますと云はれたり。(同上)

或夜、歌右衛門來りて色々の話の末、養父(河原崎權之助)は云ふ、親方は尋常勝れし大兵肥滿の身なれば、お姫のやうなる役は如何なるやと思ひしに、其色氣のあることは大したものにて、實に名人のすることは恐入るの外なしといへば、歌右衛門は笑ひながら、師が云はるゝ如く、われらは決して女形などすべき身體にあらず、然れど有難き事には踊がわれを助くると、今一つは女形が守るべき規律を嚴重に守りたるが爲なり、一體男と女とは元來の骨格が違ふものなれば、男にして女になりて見せんとするには、自然何處か皆

める處なくては適はぬものなりと語りたり。（「國洲百話」）

其の所作の當り藝としては「道成寺」「双面」「葛の葉」「六歌仙」等のほか、「靭猿」の如き、「三社祭」の如き、彼れが爲めに書下されて、而も今も舞踊道に行はるゝもの尠からず。

蓋し、所作に巧みなりしは流石に師歌右衛門の衣鉢を襲ぎしによると共に、地藝に於ても次第に師の藝風を擬し、文政八年、名古屋へ下りし時の評に、前よりは地藝上達せりと言はれ、同九年に扮したる松王は師匠そつくりなりと賞せられき。しかのみならず、其の先天的の體格と風采に於て寧ろ彼れよりも此れに似たりし故嵐雛助の藝を寫し、例へば、其の得意とせる役々のうち、熊谷、松右衛門、五斗兵衛、吃又平、彌作、法界坊の如きは前者に屬すると共に、五右衛門、時平の如きは寧ろ後者に屬せり。斯くの如くして謂はゆる、立役、實惡、武道、荒事、女方、所作に至るまでを兼ね、其の藝の多方面なりし事亦師歌右衛門もしくは雛助に讓らざりき。但し彼れの弊は「色氣に乏き」事にあり、此の點に於て彼れは却て二世嵐吉の後繼者たりともいふべく、且つ力士に扮するに妙なりし事も吉三郎と同じかりき。特に彼れは力士阿武松綠之助と親く、其の風采を舞臺に寫したりといふ。天保八年の「役者早速庖丁」に曰く、

> 此のお人、角力取の作りは妙に上手ぢや。兩の手を上げて肩をいからし、後へこけかゝるやうな歩行樣して出らるゝと、關取衆が町をあるいて居る風に其の儘ぢや。

彼れが今ひとつの弊は腹のない事なりき。

文政十一年、三代目芝翫(四世歌右衛門)熊谷、成程師匠によく似てゐると思ひ、其後、天保五年、京四條東側の芝居にて芝翫熊谷、梅玉(三世歌右衛門)見て、こりや芝翫、貴さまが己の眞似をする内では、熊谷がいつそ能いわいと賞られしゆゑ、成程さうであらうと思ひしに、翌六年、梅玉、伊勢中地藏芝居へゆく、我もつれられたり。爰にて梅玉の熊谷を見るに、する業は同様なれど、能さは格段の違ひなり。其意味一向に分らず、瀨川路之助、金澤龍玉に向ひ、右の不審を物がたり、不斗心付きしは、親方は、熊谷は此くらゐな身分で斯ういふ氣質であらうかと、之を倣つて勤められしと思はるゝ、成駒屋のは斯うしたら師匠に似るか、斯くいたさば歌右衛門に成らうかと凝つてなされし事ならん、熊谷と歌右衛門、元が違ふゆゑ斯様に能さが違ふかと思はるゝと申せば兩人手を打つて笑ひける。(三世中村仲藏手翰)

蓋し所作に巧みなりし彼れは、地藝に於ても餘りに形式もしくは動作の美に重きを置きたればならん。

されば形と動きとについて喝采を博せし逸話は夥く傳へられたりき。

天保九戌年、中村座、四月狂言「文武藏雨刀扇讐」山の場、尾上菊五郎(三世)の笠原老翁評判よく、特に幕切、羅漢の見得に大當り。音羽屋〳〵と座中割れるばかりの喝采。宮本無三四の歌右衛門は有ふれし六法にて這入りしゆゑ一向に響かず、しまつたりと思ひしが、翌日は振をかへて、跡へ〳〵と見せて向うへゆく跡六法にて花道へ這入りしに、見物はあまり見た事なき六法に、其形ちも勇ましく花やかなりしかば、前日に引かへ、音羽屋に勝りしほどの響聲なりしとぞ。(「俳優百面相」)

天保十亥年、中村座、春狂言「岩井歌曾我對面」、曾我の世界に稻田幸藏ながらみたる脚色にて、僞幸藏の首實檢にかゝり居る場、爰

へ歌右衛門の幸藏、寒念佛の拵へにて出で、首に暫く回向して花道へ行き、よき處にて提灯を吹消す。是をキッカケに本釣鐘を打込む。歌右衛門頭巾を取ると、百日鬘、鼠の衣をぬぎ、輕さん、一本ざし、熊の皮のジンベイ、後向に舞臺を見込む。是と一所に薦の垂をあげ、民部左衛門の三十郎(二代目)ぶつさき羽織、野袴、黒縮緬の頭巾、大小にて出で、獄門の首を探り取り、頭巾をとつて廣げ、首を包まうとする。爰へ歌右衛門探り寄り、互に首へ掛る手を打合ひ、トド双方の手こくらがり、前の手にて首を押へ、後の手を持合ひ、下座の一つ鉦に合せ、後へ開き急度見得。此時見物のうなり芝居も崩るゝばかり。此双方手をピシャリ／＼と打合ふ音、表木戸の外まで聞えしといふ。是イタチゴッコのだんまりといひて、故仲藏(三世)いまだ鶴藏とて相中の頃、此立廻りの手を付けしなりとぞ。(同上)

同年、同座、九月狂言、「世界吉田御稻妻」、清玄庵室の場、清玄歌右衛門、櫻姫尾上菊次郎、侍女いなせ小佐川常世、下部淀平坂東彥三郎なり。清玄櫻姫をとらへ、戀慕の情をかたり、無體に迫らんとす。爰へ常世の侍女いなせ出で、支へれどもきかず、尙追廻す處へ彥三郎の淀平出で來り、遂に清玄を殺すといふ筋なりしが、……此常世は「佐野に似た鎌倉河岸の常世貧」といへる狂句も通りし程の貧乏人なり。此の日、高利貸の何某、揚幕の内に待つて居て、常世がいなせにて出で來る處をとらへ、嚴しく掛合込んで放さず。其中追々時間も立つゆゑ、據どころなく彥三郎の淀平に先へ出てもらひ、いつもの通り狂言をはこんで幕にしたり。彥三郎の出で來しまで隨分長き間なりしが、歌右衛門は少しも騷がず、櫻姫を追廻すのにいろ／＼新手を交へし仕打面白く、見物はいつも斯うと思ひて一向に氣が付ぬ樣子なりしとて、樂屋の者一同感服せしとぞ。此菊次郎の櫻姫、清玄長セリフの間、とらへられし振袖をふるへながら振る仕打、長い間大體の者にはあゝ振つて居られるものではないと、歌右衛門が大層褒めたりといふ。(同上)

此のほか、彼れが始めて「夏祭」の團七に扮せし時、見物に眼だつやう文身をせしが、今も型として傳は

れりといふが如き、要するに彼れの苦心と長所とは藝の外形にありしならん。然れども更に内容についても彼れの意匠なかりしに非ず。

齋藤太郎左衛門の時、瀧野屋新車（五世門之助）早咲にて、宮様御無念の件、長ぜりふ充分に骨を折つて旨く云切りけるに、眼を閉ぢて聞入りし齋藤の歌右衛門がム、と考へて息をつくと、見物「成駒屋」と褒むる事の夥し。新車は骨折りても誰も褒むる者なし。部屋にて新車、歌右衛門に向つて、私が長白を一生懸命に骨を打つても貴方のム、には叶ひませぬと云ひし時、歌右衛門曰く、いやいや、お前が汗を出して白を云ふ程、私も骨を折つて聞いて居る。それ故に双方の氣合にて私のム、が利くなり、人の白を縁に聞くか、又は聞かずに居る人あり、それでは何事も利かぬものなり、舞臺は大切に勤めればならぬと云ひしと（「積善暇筆記」）

弘化元辰年、中村座、十一月狂言「忠臣講釋」、歌右衛門重太郎、菊次郎おりゑとなりしが、夜鷹場にて重太郎笹の中へ狀箱を埋め、しるしに引裂紙を結びし竹を立て、這入ろとて夜鷹小屋のおりゑと顔見合せ、氣をかへて「おあまりくだせえ」淨瑠璃「河原を上へ」と引込の時、見物にも知らさぬやうに、しるしの付し竹を倒して這入りしはエライ腹ぢやと樂屋の評判よかりしといふ。其時の二番目は伊勢音頭にて、歌右衛門福岡貢、おこんの文をよむところ、始めは怒りを帶びし顔色にて讀み、中程は笑みを含み、終りは戀ひになるまで聲を出さず、顔にて文を讀分けして大評判なりし。（「俳優百面相」）

三世歌右衛門が一寸法師のちよこ兵衛に扮して蜀山人の嘲笑を買ひたる如く、彼れも當時の市井に流行せる見せ物又は物貰ひを舞臺に寫して俗衆の喝采を博しき。天保十年、「八變化」のうちにお萬が飴賣に扮せる如き、同十二年に淺草の乞食芝居吾吉に扮して狐拳を演じたる如き其の例なり。當時の評家は

之れを野卑として貶したれど、要するに彼れも亦藝道に腐心せる名優なりき。彼れが稽古の状態は其の好き例證なりけり。

夜は氣が沈んで好いと、稽古はいつも昔の七つ、今の五時頃より始めて、夜の九つ時分、今の十二時、又は八つ頃迄する人なり。附立くらゐにて考の附ぬ時には、一寸俟つてくれ、と平手を顔へ當て、右左へ揉む癖あり。其時はシンとして口を利くことなし。一ときも考へてサア跡をやらうといふ事あり。それが出ると長いぞとて一同言合へり。爰は稽古の内にて自分の面白き捉まへ物したる時にて、初日が出れば、いつも一日の呼物の所なり。海老藏(七世團十郎)は、稽古の時、朝飯を仕舞ふと早々入つて來て、今の五時頃までには仕舞ひしが、此方は又朝早いので一同困りたりと。それ故、大阪にては、兩優の事を朝蝙蝠に夕雀といひたり。(同上)

而も熱心なる結果終に穿鑿に陷る弊なしとせず。

吃の又平、手水鉢にかゝり、是れ今生の名殘の畫、姿は苔に朽るとも、名は石魂にとゞまれと、厚さ尺餘の御影石といふ文句の内、こなたより畫を書ば、手水鉢の内へ道具方這入て、向うへ書く事定例なり。操にては向うの畫像に紙張付有て、是をまくるなり。歌舞伎にて、又平鼻を書ば、道具方後ろを見かへて向うへ鼻をかく。梅玉すら是をする。今の歌右衛門、か樣なる事に至つて念を入るゝ癖あり。余に問うて曰、古筆の名畫向ふへ拔ると云は、半身書たれば半身拔るものかと、余答へて、いかなる名畫といへども、未だ書さしたるは拔まじ、全身書終つて後じつと見詰る、此時、魂具つて向ふへ拔るなるべしと云ば、そうなくては叶はじ、此度の手水鉢の仕かけは、中より書とも我書く内は筆をとらせず、ぐつと見込む折、一時に書くべしと誂ふ。いかなる早筆の者にても、狹き所にかゞみ、一時に書く事甚かたく、色々工夫の上、形をはり、針にて縫つけ、刷毛にて摺つて間に合せたるが、個樣な事數百人の見

物知るべからず、又平の狂言こそ見れ、手水鉢名畫の拔ようは見物心にとめれば皆むだ事なり。(「俳奇作書」)

彼れは又精力と忍耐とに富めりき。

何事にも上根の人にて、遣り掛ればどこ迄も遣つて見る風あり。極釣好なりしが、或時、觀左衛門、鶯助など同道にて淺草首尾の松の處へ釣に行きし事あり。半日中に一匹も掛らず。船頭が、親方、河岸を變へませうかと言ひしに、イヤ、釣れずとも此河岸に意地が附いたといひて動かず、漸う日暮までに二疋釣りしことあり。(「俳優百面相」)

精力に富める彼れは又襟度にも豐かにして、且つ下を憐むの雅量を有しき。

嘉永年間上阪の時、梅田治助より淸水正七といふ作者を賴まれしにつき、伴ひて大阪へ歸り、自分の家に置けり。此の正七、坂町の竹葉屋の住江といふ女にはまり込み、成駒屋へ歸つて來ず、稽古の差支になりし故、據なく他の者を賴みて間に合せしが、當人を連來らせ小言をいひしに、連來りし者、どうすれば親方の傍に居られるかと云ひしに、住江と一所に置いて下されば居られますといひしかば、六十兩出してその女を請出し、正七に遣はしたりと云ふ。(同上)

江戸にて劇場の燒けたりし時、田舍より招聘せしに、己れだけは遠國へ行つても金が取れゝど、芝居の者一同が職を失ひて困窮するを見るに忍びずとて、田舍行を斷はれりとぞ。(「都新聞」)

彼れは又謙讓にして社交に長じたりき。

嘉永元申年八月、中村座にて血達摩の狂言中、今樣望月を能掛りにて勤めしが、此頃は衣裳は自分持ゆゑ、能裝束師なる觀世町の關岡長右衛門方へ自身に行き、此度望月を勤むるに付き、大口其他裝束切を求め度旨申遣べしに、團岡力にては能役者並に諸人衆の

外題ひ致さゞりし故斷りを、達て相賴み、切地品々を見せしに、歌右衛門は兩手を疊へ付き、更に品物へ手を觸れず、自分好みし品を買求め立歸りし由。其後、七代目海老藏も、嘉永四年亥三月、河原崎座にて石田の局を勤めし時、關岡へ參り、約束切を求め度旨相賴みし故、品を見せしに、海老藏は品を手に取上げ見し故、外品は見せざりしよし。(「俳優百面相」)

相撲の大關阿武松緑之助は歌右衛門贔屓なりしが、或る時歌右衛門が怪我して贔屓先なる接骨醫名倉氏に治療を乞ひに行くと、阿武松も來合せて、名倉氏と三人散歩に出づるといふ談になりしに、歌右衛門は弟子に言付けて自宅より雪駄を取寄せたり。自分は役者にして大柄なるに、阿武松は力士に似合はず小男なりしゆゑ、故と雪駄に穿替へたるなり。(「相撲と芝居」)

斯くの如くして彼れは一代の人氣を其の双肩に擔ひたりき。

淺草猿若町へ三座移轉(天保十四年)後は、翌年其座々々へ抱へる役者の割取に、三座の太夫元始め帳元奥役手代大茶屋のあるじ等一座より十人位づゝ出席して取極る仕來りなりしが、歌右衛門ばかりは割取外にて、毎年三座をぐる／＼廻りといふ事に定まりありしなり。是は同人の事をカラッ八と唱へて、歌右衛門出勤の芝居は不入なりといふても、八までは見物が來るとて、しか云ひしなりとぞ。(「俳優百面相」「手前味噌」)

猿若町に居りし時、歌右衛門と關三十郎の家は路次を隔てゝ臺所向合せなりしが、或狂言の時、奥役歌右衛門の處へ來り、今度は尾張屋が役不足で納りませんから、どうか宜しくと賴みたるに、どうかしませうから後にお出で下さいとて歸し、臺所へ出て大聲にて、なに吉(三十郎の名)が役不足だと、生意氣な事をいひやがる、いやならよせ、あいつが居ないからつて少しも差支ない、と獨言をいひしにぞ、内の者は膽を潰して居たり。その内奥役來り、いかゞでせうといふ。もう大體ようござんせうから行つて御覽下さい。奥役、三十郎方へ行きどうか一つ願ひたいものですといひしに、今度は仕方がありませんから、此の次ぎにはもつと好い役を

附けておくんなさいとて納まりしとぞ。(「俳優百面相」)

彼れが蓑笠を着けて向島へ雪見に赴き、裾に氷の塊の生ずるを行く〳〵碎かせたりといふ逸話あり。彼れは亦迷信の癖ありき。「若き時より恐ろしく緣起を祝ふ人なり。菓子にても何品にても一つ殘りあれば慌てゝ取りたり。これは餘り物には福があるといふ心なり。又毎月三ヶ日(朔日、十五日、廿八日)には、菜と油揚の露物を拵へて膳部に供へたり。これは名を揚げるといふ心なりと。」

歌右衛門は江戸に生まれ、其の練習時代は全く大阪に過ごしたれども、晩年名優として彼れは寧ろ江戸の劇壇に於て多くの歳月を費やせり。而も江戸に於ける彼れの競爭者は五世宗十郎と四世三津五郎となりしが、終に二人を凌ぎて一代の泰斗と仰るゝに至りしなり。妻は四世八百藏(藤間勘十郎弟)の長女にして三世關三十郎の姉なりき。江戸にては深川の常盤町に住し、劇場の淺草に移されしより猿若町に轉じたりき。

彼れに實子なく、養子四世芝翫及び翫雀あり、後者は早く死し、前者は長壽して明治時代の名優たりき。

第十九章　京阪に於ける其の他の立役と敵役

尾上多見藏――其の技藝――虛名に汲々――豪奢と濫費。――四世三枡大五郎――彼れが特色。――片岡市藏。――嵐三幸。――四世中村友三。――淺尾與六。――四世市川鰕十郎。――三世嵐吉三郎――彼れの得意――個人としての彼れ。――八世片岡仁左衞門――彼れの本領。――三世嵐璃寛――彼れの特色。――嵐璃珏――技藝は多方面。――二世實川額十郎――其の藝風。

●●●●●尾上多見藏（音羽屋松玉、寬政九―明治十九）は京都の建仁寺町に生れ、龜右衞門といふ床山の子なり。三世菊之丞に由緣ありしかば、幼名を瀨川和市といひ、文化の頃は、大阪の宮芝居にて、石童丸、坊太郎、安倍の童子、「安達原」のおきみ、など子役にて喝采を博せしが、後に三世歌右衞門の門に入りて姓を中村と改め、文政三年（廿四歳）、大阪の座摩座にて、宮本無三四と法界坊、次いで北新地芝居にて「拳褌」の今木傳七と「七變化」を演じ、唯者ならぬと評せられき。同年、堺の大寺芝居にて三世菊五郎と一座して、「菅原」に宿禰太郎と梅王とを勤め、其の年、菊五郎が江戸へ歸りしかば、其の弟子となりて共に中村座へ現はれ、始めて尾上多見藏といひき。

文政六年、大阪へ歸りて竹田芝居へ出で、是れより濱芝居にての大立者となりしが、天保二年（三十五歳）冬、中座にて「五變化」を演じ、始めて見たる歷々の人たちも其の伎倆に驚きしといふ。以後、再び濱芝居に在りしが、同四年春、三世歌右衞門の後援により角座へ出で、それより始終大劇場へ現はれしも、

濱芝居もしくは地方へ出勤すること多かりき。

天保十二年春（四十五歳）、堀江座にて「在原系圖」の蘭平、京都、南側芝居にて「釜淵」の石川五右衛門、これを京阪の名殘として再び江戸に下り、五月、「千本櫻」に狐忠信、「壽松若」に新田梅次郎と腰元おつる、七月、「天竺德兵衛」に七役と雷の所作事、九月、「双蝶々」に放駒に扮し、翌十三年正月は河原崎座へ現はれたり。其れより幾もなく大阪へ歸りしが、弘化三年（四十歳）正月、三たび江戸へ下りて中村座にて、「猿廻」の與次郎、「七變化」の所作、「三代記」の高綱、翌四年は、「忠臣藏」に平右衛門、「兜軍記」に岩永を勤め、これより伊勢尾張を巡業し、嘉永二年（四十三歳）冬、京都南側芝居へ出でゝ「三代記」の高綱と「切籠曙」の里見伊助に大當りを取れり。同四年冬、同座にて石川五右衛門に宙乘の葛籠ぬけにて喝采を博し、翌五年春も、大阪の若太夫座にて再び五右衛門にて七八十日の大入を取れり。同年、四世歌右衛門が死してより、彼れは三都第一の人と稱せられて、專ら京阪の劇場に現はれ、明治に入りても東西の劇壇を通じての古老たりしが、明治十九年三月五日、八十七歳にして歿せり。蓋し彼れは濱芝居の出身たりしゆゑ、四世歌右衛門よりは一歳の年長たるに拘はらず、其の昇進遲かりしが、健康にして長壽なりしが爲め名聲を擅まゝにするを得たりしなり。

彼れは容貌揚りたれど矮小にして肥滿し、且つ音調野卑なりき。其の技藝は派手にして俗衆に悅ばれた

れど餘りに場當りに過ぎ、且つ科白を仕過ごす弊ありき。例へば、寛政二年に天一坊に扮せし時、騙り場の引込みに花道にて舌を出せしが如き、安政四年に唐木政右衛門に扮し、岡崎の場にて妻のさまよひ來りしを知り、砥盤に跌く仕草をなし、又帶屋長右衛門に扮してお半の書置を讀み、花道まで跡を追ひ行きて坐り、「お絹さん、どゑらい事をやらかしました」と言ひて見物を笑はせし如き、萬延元年に、由良之助に扮して、城明渡しの門外にて諸士を逐歸し、ホッとせし思入にて舞臺にて欠伸をせし如き、又元治元年に同じく由良之助にて、泉岳寺の燒香場に、三枡梅舍が師直の首より不破數右衛門に早變りせしを指さして「數右衛門殿は武藏守殿の面影によく似て御座る」といひし如き最も著しき彼れの弊なりき。



多見藏の「佐々木高綱」（「似顔大全」より）

又嘉永五年には、能と歌舞伎とを一場おきに演じ、安政元年、和藤内に扮せし時は、早竹虎吉といふ輕業師を雇ひて虎に扮せしめ、千里が嶽の場に虎の一曲を見せ、慶應元年にも同じ技巧を繰返して見物の喝采を博せしが如き、すべて彼れの藝術は低くして賤しかりしなり。これ其の天賦にもよるべけれど、一つは久しく濱芝居に在り、壯時を過ぎて漸く大劇場に入りし爲めならん。

九州にて由良之助をし、揚幕より出で、花屋でパタリと倒れ、眉に皺を寄せて身體を崩し、鬢の毛はバラ〳〵に落ち、上下の紋は違ひ、目は据つて放心したやうなり。後に「御乗物」といふ時、駕籠を中央へ据えると、他に構はず、下手奥へ入つてしまつて、二度目の出では、以前に替り、無事に装ひたりしに、或る田舎大盡、多見藏を招き、早馬で乗りつけた身體で、うろたへた端に紋服まで違つた處は大懲りに違ひないが、其れだけ懲るのに、何故城外で九寸五分を眺めて入つた、夜中に寝床にでも入つた處で、思はず九寸五分を見るやうに何故しない、と一本やられて閉口したりと。又平右衛門で、お輕の話を聞き、例の「よめた」といふ白から、チンチリ〳〵と調子に浮いて踊出す仕草がありしが、可笑くて妙なりき。（七世團藏談話）

されば、彼れが和事、實事、敵役、女方、所作を兼ね、頗る多能にして多方面なりしに拘はらず、品格もしくは風采を要する人物には適せざりき。故に由良之助は其の柄になしと言はれ、鹽谷判官は下品なりと評せられ、船頭松右衛門は男達らしく、横藏は後に山本勘助となりて軍師らしからず、其の他、「陣屋」の熊谷も、「七笑」の時平も悉く不成功に歸したりき。而して最も彼れの得意なりしは、下郎、力士、俠客などの類にして、「金毘羅利生記」の寸度平、「覺仇討」の筆助、「忠臣講釋」の宅兵衛、「鏡山」の又助、「稻妻表

紙」の南無右衛門、「昔鐙」の一心太助、「在原系圖」の蘭平、「双蝶々」の放駒、「千兩幟」の岩川、「出入湊」の黒舟、「岩井風呂」の團七、など其の例なり。和事には「拳褌」の傳七、「恨鮫鞘」の八郎兵衛、「桂川」の長右衛門、「大經師」の茂兵衛、敵役には石川五右衛門、矢田平、天一坊、法界坊、郷戸龜四郎（「お六櫛」）、老人役には、紀有常、百姓久作、女方には、お七、お三輪、所作事には、奴凧、雷、橋辨慶、など孰も當り藝なり。

彼れは又其の師たりし三世菊五郎の流を汲み、怪談もしくは早變りを得意とし、天竺徳兵衛、狐忠信、など著名なり。特に宙乘りを能くし、天保九年春、大阪の筑後座にて、「七草駒」に駒木根八郎に扮せし時、菊五郎より傳授されたりとて、身體に胴金を入れ、首筋にて留めて、見物場の上にて前後左右へ自由に旋轉する工夫をなし大喝采を博したり。又石川五右衛門の「大鼓ぬけ」と稱して、最初見物場の上へ太皷を釣り上げ、其れが四つに割れて鷲となり、其の鷲の中より五右衛門が現はれて宙乘りをなす仕掛にして屢大當りを取れり。

彼れは舞臺の伎倆よりも寧ろ世間の虚名に汲々たりし人なりき。

多見藏の親、或年、梅鶴の手拭千反許りを注文し、手附として金二十兩を渡したるまゝ受取に往かず。三年の後に至り、此手拭大阪市中の手拭屋に掛り、割引の安物なりとて評判高し。然るに安物の手拭には多見藏の紋所が染出しあるゆゑ、其名忽ち四方に廣まり、到る處多見藏の噂ならぬはなし。此奇智に富む親の血統を受けたる多見藏なれば、頗る人氣を取る事に達し、其頃・大西と呼べる

筑後座にて、百村百太郎といへる人氣役者、「金比羅利生記」の寸度平な勤め、興行半ばにして死せしかば、此替り役多見藏に當りたり。毎朝、寶善寺の金比羅へ參詣して水垢離を取り、何卒百太郎が十分の一の人氣を授け玉へと祈り、一心不亂に舞臺を勤めしにぞ、其評判忽ちに高くなりて、百太郎同樣の人氣を得たりとなん（「歌舞伎新報」）

彼れが、生活に豪奢を極め、浪費を意とせざりしも、一つは賣名の爲なりしなり。

義俠の心深く、輩下を潤ほしければ、幕内の連中、大阪幡隨と稱へて渠が氣風に靡かぬものとてなかりける。されば平素食客絶えず、旅稼ぎの合詰ものなどは次興行の喘聲ふまで喰ひ潰すを常とせり。嘉永安政の熾んなりし頃、尾上家の門人なる者、七十餘名の多きに及び、歳暮の祝儀を述べに來る者どもへ揃への仕着一反づゝを與へ、又直門人より納むる鏡餅は玄關の傍らへ夏櫓を組み、名標を貼りて松の内までは飾り置きける。されど内部は借金の山を築き、文久年間に、島の内、宗右衛門町に五間々口の住居を新築し、京風に赤煤ぬりの出格子を取付け、中庭に青丹の彩色したる稻荷の社を祠り、門人または贔屓より赤鳥居、紅燈などの寄附を促し、すべて赤盡しなれば奇觀なりし。此の時、誰が落首にや「音羽屋は稻荷のやうな家たてゝとりえが內はガラ／＼」折から五十日間、鳴物停止の布令下りしかば、白米大に缺乏せしゆゑ、搗米屋不拂のため飯米を仕送らざれば、大勢の家內を養ひかね、大與より五日間、まむし（鰻丼）をとりて其の日を凌ぎしに、食客の連中、鰻が鼻につき、溫飩の方があつさりして宜しと、又二三日溫飩のみを用ひたり。堂島の仲買商何がし、同家を訪ひ、此の有樣を見て、今日は何でござる、と聞きければ、多見藏答へそくれて、私の誕生日なりといひしを、其れと覺り、翌朝、肥後米三俵を馬につけて贈り越し、やつと兵糧に在付きたり。翌月なる歳暮に、大與より請求したるまむし代十三兩二分三朱なるに、自雷也に使ふ仕掛ものゝ巨蛇を質入して埒を明けたり。（半醉筆記）

翌年、中の芝居に石川五右衛門の太鼓ぬけ、古今の大當りなりしが、名護町の非人ども、太鼓賊けを稲似顔にして、多見藏の門先へ

「評判々々、親方おめでたうさん」と遣つて來りしに、多見藏は祝儀を遣らんにも金なく、手代の才覺にて梅鶴の染手拭を遣はせしが非人共は其れを捻鉢卷とし、手拭を下さつたから今度は御祝儀ぢや、皆お禮申して置け、と大鼓を叩き立てられ、負けず嫌ひの多見藏堪り兼ね、奥の間より帛紗包みの封金を取來り、出格子の間より往來へ投付けしが、跡にて聞けば、門人多見五郎が死したる香奠にて、手代が工面せし二百疋なりしと。（同上）

舞臺の意匠にも派手なるを好み、安政の初年に、京都宮川町の芝居にて、石橋の所作事を出すとて、冬興行は陽氣なやうに牡丹の釣枝などつさり張込んで貰ひませうとの誂へに、仕打の松徳は吹き出し、なんぼ芝居事でも、釣枝にする程の牡丹はない筈ぢやと受付けざれば、多見藏ぐつと詰り、なんの、お前さん、唐土にはあるかも知れんて。（同上）

彼れは一丁字を解せざりき。

宮島の芝居にて、「千兩幟」に松緑、鐵が嶽にて、「今日の角力は我と己とぢやといやい」の所にて、角力割を開きて綸面どほりに見得を爲したく思へども、如何に間違ひけん、前狂言「龜山噺」の宮場に用ひたる「人相、家相、周易」と認めたるを使の役が投込みし事とて大苦みで猪名川を勤めし多見藏、穴の明くことにのみ氣を揉み、「關取、何をして居やんすぞい、どれ己が」と件の紙をもぎ取りてさらりと展き、なに、猪名川に鐵が嶽」と大音に讀上げ見物に示したれば、ドッと惡落が來て匆々に幕となりぬ。（同上）

大西の芝居部屋にて稽古の時、書抜を前へ置き、少し居眠りしにキッカケが來たれば、もしと起す。目を覺して、取敢す「十二」といひ、「十二」とは何の事ぢやと聞く。狂言方、それは「ナニ」でござります。多見藏、こんな「何」が何處にあるものか。それは片假名でござります。なんぼ己が字が讀めぬからといつて、十二と書て何と讀めとは、餘り人を馬鹿にしたと、立腹して歸る。（「絶句帖」）

多見藏の妻は初世鰕十郎の女にして、三男一女あり。長男は尾上和市といひ、更に松鶴と改め、又松光

と改め、次男は外戚の姓を襲いで市川市藏といひ、共に父の藝風を受けて聲望ありしが、孰も夭折せり。

四世三枡大五郎（京枡屋梅升、寛政十—安政六）は三世大五郎の養子なり。是れより先き、初世大五郎は、藤川八藏の弟子たりし時藏を養ひて、安永十年、二世の名を讓りしが、二世大五郎は寛政五年、四十六歳にて死せり。三世大五郎は京都の出身にして始め芳澤五郎市の門に入り、龜藏といひ、寛政十二年、大五郎の名を襲ぎしが、後に三枡清兵衛と改め、文政七年、四十三歳にして江戸にて歿しき。四世は三世の男にして幼名を三枡由龜といひ、子供芝居に出でゝ座頭たりしが、後に他人と改め、文政二年（二十二歳）の春、始めて大阪の角座へ現はれ、同年三月、中座にて二世吉三郎の代りに「新田系圖」の助市を勤めて好評を得たり。翌三年の春、京都にて「小倉色紙」に小松屋宗七となり、其の冬、江戸の中村座に下ると共に、三世歌右衛門の門下に入り、中村源之助といひ、專らやつし役を勤めき。同五年、同座にて「忠臣藏」に若狹之助となり、三世三津五郎の本藏との出合に大當りを取り、同年の冬、舊姓に復して三枡源之助といひき。同六年（二十六歳）の冬、始めて名題に上り、當時、芝翫と稱せし四世歌右衛門が東下するや、大かた彼れと一座して、其のワキ役を勤めて愈昇進せしが、天保の初め頃に至り稍名聲を減じ、其れゆゑにや往々敵役を勤めたり。天保八年（四十歳）の春、十八年ぶりにて大阪へ歸りて、中座に出で、同十二年の評判記に始めて「大上上吉」の位に上されたり。弘化三年（四十九歳）の冬、養父の名を襲いで四世大五郎とい

ひ、降つて、安政六年五月、京都の東芝居へ出勤中、卒中を病みて其處に歿せり。齡六十二。

彼れの特色は體格偉大にして、「男はよし、人品はよし」特に衣裳の好みに長じ、「狂言が大まかにてコセついた小細工を」せず、「落付いたる藝風」なりきといふ。只その缺點は「せりふ廻しの伸べつゞけ」にて長短抑揚に拙かりし事、「睨みの利か」ざりし事、藝の淋かりし事、愁がこたへざりし事、及ひ世話物に適せざりし事とにありたり。天保十一年の「役者金剛力」に、彼れが「秋葉權現」の月本圓秋に扮せるを評して、



四世大五郎の「岡部六彌太」（「似顔大全」より）

> 此樣な上品な時代事をさすと、きつと見ごたへがござります。世話狂言の輕いのより、長上下を著せると男はよし立派な物ぢや。

といひ、「三十石」の神道源八を評して、

かやうな下郎役より、位のある役が見ごたへが御座ります。

といへり。而して彼れの本領は最も和實にあり、曾我の十郎、源太、頼兼、古手屋八郎兵衛の如き色立役より、「伊賀越」の大内記と政右衛門、「伊達」の勝元、「忠臣藏」の若狹之助、「鎌倉山」の源左衛門、「一谷」の熊谷、「近江源氏」の盛綱、「盛衰記」の松右衛門の如き武道事を得意とし、又その體格の偉大なりし爲め、力士に扮するに妙にして、岩川次郎吉、濡髪長五郎、白藤源太など、孰れも彼れが當り藝なりき。斯くの如く風采ある士人と肥滿せる力士とを長所とせるは先輩たる二世吉三郎と相一致し、且つ彼れ自身も其の藝風を摸して、頻りに吉三郎の當り藝を演じたりしなり。又敵役にても「拳褌」の香齋典藏、「天下茶屋」の東馬三郎右衛門、「伊達」の仁木彈正、「稲妻表紙」の不破伴作、「忠臣藏」の師直、もしくは稲葉幸藏及び熊坂長範など彼れが傑作として稱せらる。尚ほ品位ある老女に扮する事も彼れが得意とする所にして、即ち「菅原」の覺壽、「盛衰記」の延壽、「千本櫻」の磯禪司などの當り藝ありしのみならず、老女の敵役なる岩藤の如きも當時の評家が激賞する所なりき。而して最も得意とせるやつし役は晩年に於いて、其の體格の大きく、もしくは年齒の長じたる爲め、却つて不適當なりと貶せられたり。彼れは又幕切れに拙く、且つ立廻りに機敏ならざりしといふ。

大五郎には實子大三郎あり、娘方たりしが早世せり。又養子二世源之助あり、安政七年、四十三歳にし

て歿しき。三世源之助の名は大五郎の死後、其の女婿によりて襲がれしが、後に離縁して中村宗十郎と稱し、明治の劇壇に於て九世團十郎と並び稱せられたり。又大五郎の門下には三桝梅舍あり、後に五世大五郎の名を襲ぎたりき。

多見藏及び大五郎よりは先輩ながら、終に其の下に在りしを片岡市藏、嵐三孝、中村友三とす。

●●●片岡市藏（松島屋我升、寛政四―文久二）は父を藤川鐘九郎とて敵役の俳優たり。鐘九郎に三子あり、長男を藤川柳藏といひ、二男は同よしのとて女方たりしが、後に立役に轉じて三升富士太郎といへり。三男は卽ち市藏にして、幼名を鐘三郎といひ、鐘彌と改めしが、文化七年（十九歲）、七世仁左衞門の門に入りて始めて片岡市藏といひ、大阪の座摩芝居に出で、「千本櫻」に權太を勤めたり。此れより濱芝居にて修行を重ね、終に實惡の立者となりて、文政十二年（三十八歲）十一月、江戸の市村座に下れり。翌天保元年、「伊達」に仁木彈正、「忠臣藏」に師直、與一兵衞と定九郎の早變り、九太夫、「巖流島」に巖流、正清、白倉傳五右衞門、「綴纏錦」に宇田右衞門、「二代勝負附」に鬼が嶽、「馬士」と「石橋」の所作、同二年、「戀山開」に鵜飼九十郎、「四谷怪談」に直助、同三年、「靑柳硯」に駄六、「苅萱」に新洞左衞門、同四年、「五大力」に彌助、「千本櫻」に彌左衞門、「夏祭」に義平次、（七世團十郎の團七）等を勤め、特に義平次は江戸にて、三世歌右衞門が團七に扮せし時、此の役を勤めし淺尾奥山以來と稱せられき。

天保五年五月、五年ぶりに歸阪して角座に現はれ、義平次と「近江源氏」の和田兵衞とに扮し、義平次は江戸と同じく好評なりき。次いで筑後座と京都南側芝居とにて「伊賀越」に又五郎と政右衞門とを勤め



市藏の「齋藤内藏之助」(「似顏大全」より)

同八年春、中座にて「八犬傳」に山下定包、百姓糠助、左母次郎、現八、房八、孰れも好評なりしが、同八年、師仁左衞門死してより、伊勢尾張を巡業し、同十一年春、西に歸り、此れより專ら京阪の劇場を勤め、「實惡の名人」と稱せられしが、安政の末頃より老衰と眼病との爲め、時々芝居を休みがちなりき。同五年十月、大阪、鰻谷の子供芝居に竹川市藏と變名して現はれ、「釜淵」の五右衞門に扮し、歌舞伎役者の名折と言はれたり。此の後も大劇場へ出で矍鑠たりしが、文久二年五月、角座にて「近江源氏」の四斗兵衞、「合邦辻」に合邦を勤めしより舞臺を退きて、七月二十二日、七十一歳にて

死せりき。

市藏は體格大きく辯舌爽かなりしかど、風采揚がらざりしかば、其の實惡を本領とせるに拘はらず、品格に缺ぐるが爲めに失敗せりき。例へば「安達原」の貞任は「品なくして五右衛門めく」と言はれ、「忠臣藏」の師直は同く下品にして寧ろ九太夫の方が好評なりしが如き、其の例證なり。彼れの得意とする所は寧ろ品位を要せざる世話敵にあり、「阿漕浦」の次郎藏、「青柳硯」の駄六、もしくは「釜淵」の五右衛門、「太功記」の光秀、等の當り藝なりしは此れが爲めなり、又愚直なる、野夫もしくは堅實なる老人に扮するも彼れの長所なりき。即ち、糠助（八犬傳）、權四郎、六郎太夫、孫右衛門（「梅忠」）、彌陀六、新洞左衛門、竹中官兵衛、などの如し。

彼れは己れが意に充たざる役に扮する場合には、非常に不熱心にして全く藝を棄つるの弊あり。而も晩年には敵役を忌みて立役を兼ねたりしが、其は彼れが本領にあらざりしなり。

●●●嵐三幸（倉橋屋）三世歌右衛門及び二世吉三郎よりも先輩にして、市藏と共に古老第一と稱せられしが、終世大劇場に出でず、濱芝居の大立者と稱せられき。由良之助、吃又、俊寛、仁木、など當り藝尠からず、只彼れが病は藝のセヽこましきにあり、蓋し境遇の然らしむる所なりしならん。濱芝居にて多見藏は市藏と三幸との次位にありしが、終に大劇場に出でゝ二人を凌ぎたりしなり。

此のほか道外方の上手として**四世中村友三**(京屋丸幸、寛政七—文久元)あり。三世友三(寶曆十二—文政三)も道外方に名あり、特に「桂川」の丁稚長吉、「朝顔日記」の萩野祐仙、「膝栗毛」の喜多八など其の當り藝なりしが、四世友三は其の子にして、始め貞吉といひ、後に桃三と改め、大阪の小芝居にて次第に名を揚げ、天保二年(三十七歳)の春、二世璃寛の後援を得て始めて大劇場たる角座へ現はれたり。此れより三十年の間京阪の舞臺に榮えしが、文久元年三月十六日、六十七歳にて歿しき。友三の特色は父と同じく道外、若しくは半道敵に扮するにあり。又「盛衰記」の權四郎、「狹間合戰」の治右衛門の如き老實なる役をも勤めたれど、愁事にはまらずして屢滑稽に陷りたりき。

淺尾與六(淺田屋一圓、寛政十一—嘉永四)は初世爲十郎の門人にて幼名を丹平といひ、大阪の子供芝居へ出勤せしが、文化十一年(十七歳)の春、始めて角座へ敵役として現はれたり。文政元年(廿一歳)三月、三世歌右衛門と共に江戸の中村座に下りしが、當時の評判記「役者夢合」に彼れを評して、

一體男ぶり立派にて、何役でもはまりさうなる骨柄。……にらみ役者だ。どこやら鰕十郎丈(初世)の面ざしが少しある。……せりふないはぬ先き先づ一つにらんだ物さ。……御師匠の傳授でがなござりませう。

といへり。これより江戸に留まること九年間、次第に地位を高め、文政九年(二十九歳)十一月、大阪へ歸りて角座に現はれ、「布引」に九郎助と「千本」に覺範に扮したりき。同十一年、内匠と改名し、濱芝居

へ出でゝ實惡の大役を勤めしが、天保元年（三十三歳）十一月、始めて與六と改めて、京都の南側芝居に出で、「時頼記」に三浦荒次郎に扮したりき。翌年の評判記、「役者大福帳」に曰く、

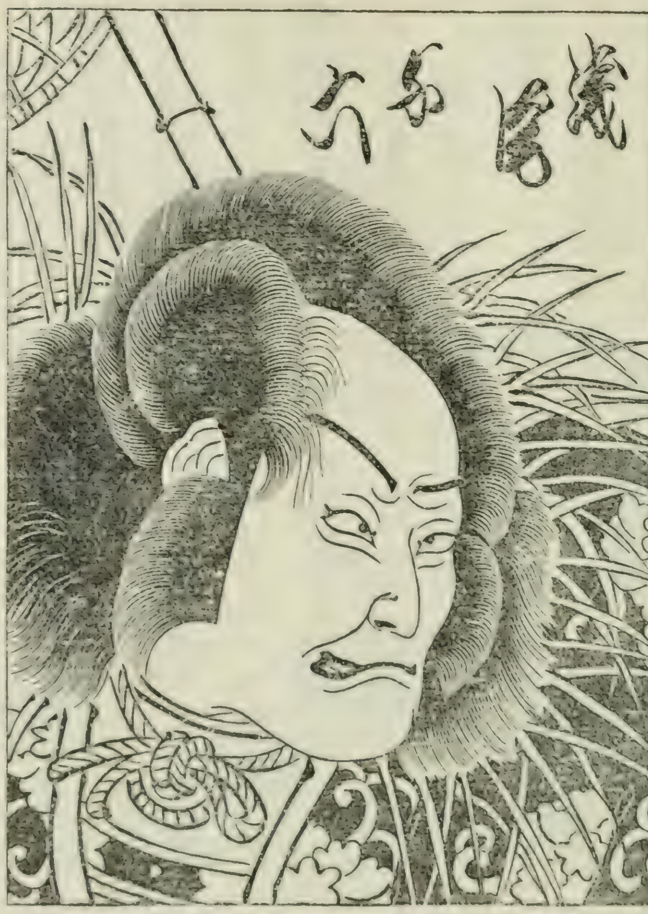
故人新升（初世鰕十郎）の俤があつて、惡は手づよく、色氣あり、舞臺は端手にて申分なく、よい實惡を堀出しました。

是れより京阪の劇壇に重用せられ、天保九年（四十二歳）の「役者金剛力」に始めて「上上吉」の位に擧げられたり。弘化四年、暫く姓を改めて山村内匠といひ、幾もなく舊名に復せしが、此の頃より道頓堀及び四條の大芝居へは稀れに現はるゝのみにして、濱芝居もしくは地方の興行を專らとし、嘉永四年も三州吉田へ出稼せしが、其處にて興行中に死せり。歳五十四。

【註】「代々の接木」及び「名人忌辰錄」には五十五歳とあれど、玆には嘉永五年の評判記「役者智惠鏡」の説に隨ふ。

右に引用せる諸評の如く、彼れは體格に優れ、又風采も揚り、其の技藝も大阪風の粘りけ薄く、さらりとしたるゆゑ、江戸の人氣に適まりしのみか、五世幸四郎の庇護を得しため、昇進速かなりしといふ。又右の諸評の如く初世鰕十郎に似たりと言はれしのみならず、師爲十郎、もしくは恩人たりし幸四郎の風を模し、「戀湊」の鵜飼九十郎は最も其の當り藝と稱せられ、其の他、横山大膳、島川太兵衛、生田傳八、京極内匠、赤堀水右衛門、佐々木巖流と白倉傳五右衛門、石川五右衛門、日本駄右衛門、稲葉東藏、毛剃九右衛門、三荘太夫、師直と九太夫、香齋典藏、笹野三五兵衛、三河屋義平次、猿田彦太夫、番頭善六などの敵役

に喝采を博し、親仁方としては竹中官兵衛、新洞左衛門、貴屋幸兵衛、帯屋仁右衛門、荷持平作、百姓徳太夫。又女方の敵役としては仲居萬野、もしくは局岩藤の如き當り藝たり。しかのみならず、立役にても



與六の「武智光秀」(「似顔大全」より)

毛谷村六助の如き、當時の評家も柄になき事をよくすると賞美せり。要するに彼れが技藝の方面は比較的に廣かりしなり。但し彼れは其の師爲十郎が病なりしと同く、餘りに場あたりを主とし、大惡漢に扮しながら、曾て滑稽に陷る如き弊ありたり。彼れが犬上兵庫に扮して不評なりしが如き其の一例なりき。

彼れは立廻りに巧みにして、特にトンボ返りの名人と稱せられたり。「江戸出勤中、名人關三十郎の鬼王、鐘樓堂の立廻りの相手となり、高き堂の屋根よりトンボ返りして見物の膽を冷させ、大評判を取りし事あり」。又彼れには酒癖ありき。

或時、三十石船にて京都へ通ひたるに、牧方にて例の喰らはんか船來りて惡態をつきたり。與六は醉に乘じて喰らはんか船に乘り、「己は淺尾與六ぢや、船の物は惣仕舞にしてやる、もつと惡態をつけ」と面白半分からかひたるが、品物を惣仕舞にするといふ滅多になき大事の客ゆゑ、大きに困り、親方、もうあやまりました、と機嫌を取りやう〳〵元船へ返したるが、其の後は與六が乘りたる船と聞くや、惡態をつく處か、喰らはんか船は逃出したりと。

彼れは市藏と互に相頡頏せる名優なりしも、斯の如く酒癖のあしかりしため、他の俳優たちに疎んぜられ、一時道頓堀に與六の出づる劇場なくなりし事ありしといふ。前に記せる如く、濱芝居または地方に赴きて、大劇場へ現はるゝ事の稀なりし一つの理由は此れならん。然るを三世璃寛（德三郎といへり）が氣の毒におもひ、中の芝居に斡旋せしも、狂言は「小栗」にて風間八郎と不寐兵衛とは現に片岡市藏にきまり、與六に適當の役なりしかば、横山大膳にて出勤したり。璃寛が横山太郎にて「親でない子でないとは能く言つた」と二重の上より大膳を投げる處、與六は長袴朱鞘のまゝ、二重よりトンボ返りをし、舞臺へ腹這ひになりて畫面の見得となる。此の處大當りにて見物のどよみ止まず、此れより又々人氣よく、終に座頭株に數へらるゝ事となれりといふ。

彼れは舊誼に厚き人なりき。江戸に庇護の恩を受けたる五世幸四郎が死後、

其の忰高麗藏（後に六世幸四郎）上阪し、疊屋町に世帶を持つと聞いて、簞笥火鉢、その外種々の道具を送り、引越の後、酒肴を持參して叮嚀に取扱ひ、其れより中の芝居へ周旋し、自分の持役を讓りて出勤させ、大切になして世話をしたり。

といふ。二世與六の名は門人山村内匠によりて襲がれしが、初世の如く著名ならざりき。

●●●●●●●四世市川鰕十郎（小紅屋眼玉、文化六―安政五）は始め松島巳之助といひ、濱芝居の實惡たりし松島清藏の弟子なり。文政



四世鰕十郎の「鎊間宅兵衛」（「似顔大全」より）

の初年には大阪の濱芝居にて座元たりき。其の後、三世歌右衛門の養子たりし玉之助（後に松江）、同く駒之助（後に二世芝翫）と共に北新地の子供芝居へ出で「太功記」の淸水長左衛門、「五人男」の案の平兵衛、「千本櫻」の知盛、などを勤め好評なりしが、京都の宮芝居へ轉じ、又大阪の濱芝居へ出でゝ知る名聲を博せり。天保元年（二十二歳）三月、江戸の河原崎座へ下り、同時に七世團十郎の門に入りて市川市十郎と改名せり。幾くもなく西に歸りて京都と大阪の濱芝居に現れ、弘化元年（三十六歳）に至り、始めて鰕十郎の名を襲ぎ、師團十郎と共に大阪の角座に出で、是れより始終團十

郎と一座せり。弘化四年（三十九歳）、坂東壽太郎と改め、嘉永元年（四十歳）七月、尾張伊勢へ下り、同二年春、大阪の筑後座に現はれてより、直ちに江戸へ赴き、四月、眼玉と改名して河原崎座に「忠臣藏」の由良之助に扮せしが、翌三年春、同座にて再び鰕十郎に復名したりき。安政の半ばより多病にして屢舞臺を休みしが、同五年十月十九日、竹田座へ出勤中、疝癪の爲めに死せり、年五十。

彼れは瘠肉にして、其の藝風は小手が利き過ぎ、こせ付き、白廻しは巧みなりしも、音調下品なるが缺點なりき。和實の役を其の本領とし、特に師團十郎の風をまねて武道事を長所とせり。例へば「忠臣藏」の若狹之助、「先代萩」の勝元、「大岡政談」の越前守「五大力」の源五兵衛、「伊賀越」の政右衛門、「武藏鐙」の松前屋五郎兵衛、「薄雪」の團九郎、「千本櫻」の權太、など其の當り藝たり。石井常右衛門も彼れが得意の藝なりしが、總て其の弱點は「色氣の薄」きにありたり。又稀には岩藤の如き女性の敵役をもしたれど、其は不評なりきといふ。

●●●●●三世嵐吉三郎（岡島屋鱗昇、文化七—元治元）は初世吉三郎の長男にして二世吉三郎の兄たる猪三郎の實子なり。幼名を大三郎といひ、文政五年（十三歳）、大阪の中座にて三世歌右衛門が釜入の五右衛門に扮せし時、忰五郎市となり、始めて吉三郎の名を襲ぎたり。是れより嵐璃寛に事へて技藝を磨き、文政十三年、京都の因幡藥師芝居にて、熊坂長範と岩川次郎吉に扮せり。天保四年（二十四歳）九月、大阪の中座にて、二世吉

三郎の追善として出で、これより三世歌右衛門の援助を得て、屢〻京阪の大劇場へ現はれ、「一谷」の軍次、「千本櫻」の小金吾などを勤めしが、同六年より八年に至るまで、濱芝居に出でゝ修練を重ね、同十年



三世吉三郎の「樋口次郎」(「似顔大全」より)

(三十歳)正月、始めて江戸へ下り、市村座の「眞砂白浪」に石川五右衛門に扮したり。留まること七年にして、弘化三年(三十七歳)、大阪の角座へ上りしが、嘉永三年(四十一歳)正月、再び江戸の市村座に下り、安政二年(四十六歳)に、名古屋へ赴き、翌三年、大阪へ六年ぶりに歸りたり。これより愈名聲を高めたりしが、元治元年二月、長子鱗子が二十三歳にて夭折せしより、俄に健康を損し、同年七月、中座にて「忠臣藏」に師直、石堂、となせ、平右衛門の四役に扮して、九月二十六日まで舞臺を勤め、二十八日の朝に至り歿したりき。年五十五。

彼れは體格偉大にして、容姿と風采とに優れしが、早口にして「締りのない調子で、白の痰火が切れ」ざりしといふ。「俳優百面相」に曰く、

> 男振の好き事は、老生も七十年來芝居を見し中、舞臺にてあの位な好男子は未だ曾てあらざりき。そは丈高く、さのみ肥らずして格好のよさ、鼻高くして眼の利きたるなど、つまり顔と道具（鼻、眼、口）の取合せの好く適ひたる、役者としての特色たるべし。調子ないへば敢て立たなくはなけれども、少しく早言にて、稍締らざる氣味なりしゆゑ、今一締め締つたらば宜しからんと思はれたり。

而して彼れの得意は先代吉三郎と異りて敵役にあり、例へば、熊坂長範、石川五右衛門、「信仰記」の松永大膳、「兒雷也」の大蛇丸、「天下茶屋」の東間三郎右衛門、「龜山仇討」の赤堀水右衛門、「崇禪寺」の生田傳八、「伊達」の仁木彈正、「太功記」の山口九郎次郎、「鎌倉山」の三浦荒次郎、「拳褌」の香齋典藏など、其の當り藝たり。右にいへる如く風采のよかりしだけに、大百日の鬘をつけたる如き役に最も適したりしなり。又立役にて「八陣」の正淸、「千本櫻」の知盛、「菅原」の松王、「御所櫻」の辨慶、など其の押出しの立派なる爲に好評を得、尙ほ「双蝶々」の放駒、「千兩幟」の岩川など、力士の役に適する事は三世と同くして、特に「八犬傳」の小文吾は彼れが傑作と稱せられたり。其の「忠臣藏」の判官に扮せし時、「五萬三千石にしては立派過ぎて、六萬石以上なり」と見物に評せられしを見ても、彼れが如何に風采の揚れるかを知るべし。更に老人に扮しては「紙治」の孫右衛門の如き、女性の敵役に扮して「鏡山」の岩藤の如き、孰れも其

の當り藝たりしのみならず、安政六年には「信仰記」の侍從に扮し、「近頃は女方で當てらるゝと評書に言はれたり。只先代吉三郎の如く「色氣のある藝」としては「朝顔日記」の宮城阿蘇次郎に扮せし事ありしも、此の種の役は彼れの得意にあらざりしもの如し。

彼れが今一つの缺點は其の技藝の器械的にして、同情と熱心とに乏しかりし事なりき。天保十二年の「役者舞臺扇」に曰く、

かつぼくはよし、調子はよし、しらるゝ事もさすが大李寛(三世吉三郎)の血筋ほど有てよけれども、外の役者のせりふの內は、脇見したり、からだを見たりして、體が崩れてならぬ。

此れ卅二歲の彼れに對する非難なるが、更に安政四年の「役者都名所」は、四十八歲なりし彼れを評して曰く、

せりふが御持前にて早口なりしが、貫目がつくに隨つて、口跡も餘程落付かれました。しかし、どうかすると、場や模數へ目が行つて、時々舞臺がすいて見えます。

當時彼れが早口なりし弊は稍改まりたれど、他優の動作する間、舞臺を疎かにする病は終に癒えざりしなり。更に安政六年の「役者名山盡」には彼れの石川五右衞門を評して、

じつとして居られる處は成程五右衞門といふ値打もあつたが、あろく風俗の悪さ、始終に足が浮いて見えます。此役には限らず、是は御心得ありたきやうに存じます。

といへり。要するに、彼れの技藝は其の外形に於てまさり、内容に於て劣りしなり。されば、世間には喝采せられしに拘はらず、具眼者には伎倆拙劣なりと稱せられき。

當時の三座頭は、寺島菊五郎（三世）成駒歌右衞門、助高屋となりし宗十郎（五世）にてありしが、何かの事にて、此の三座頭が町奉行所へ呼ばれての歸りがけ、食事を爲せし其の時、菊五郎が「己達が死でしまつたら、座頭は誰だらうか」といへば、歌右衞門は「八代目（團十郎）に極つてゐるが、其の他は男振が好いから吉三郎かな」といふに、助高屋は「吉三郎も押出しは座頭に違ひはないが、下手だからのう」といへば、寺島は透かさず、「あれが上手だつたらたまるものでない」と言合ひて笑ひしをありしとぞ。（「俳優百面相」）

江戸にて、「先代萩」と狂言が極りし時、優は仁木をやる積りにて、切りに一人で稽古をなしゐるを、助高屋（五世宗十郎）に見られ、あの通り熱心ゆゑ、やらしては」と言ひしとか。其の時、八汐を持つて行きしが、八汐は御免、岩藤をしてから後にして與れ、と言ひし由なれど、座方は八汐ゆゑ持つて行きしも、誰が岩藤をさせるものかとの意氣なりし。されど、大阪へ歸り、京都の南芝居の顔見せに出で、常に望みし岩藤を出して大に當てしといふ。（同上）

或時、序幕のだんまりに嵐吉が大百日の天鷲絨姿と、菊次郎の女形とへ、鶴藏（後に仲藏）の下人か何かゞ混つてのだんまりなりしが、どうしても幕が切れず。そは嵐吉がのつそり、二人がはしつこき爲の始末にて、愈困りての結果、一日二日經ちて、急に舞臺へ五輪の塔を出し、此れが割れて紫若（七世半四郎）が十二單衣で檜扇を持ちて立つと、それにて難なく幕が閉りしといふ。優が如何に優長にてありしかを知るに足れり。（同上）

●●●●●●●●●個人としての彼れは溫順なる好人物なりき。

小言家の寺島（三世菊五郎）が、同優に舞臺惡しとて大變小言を云ひたり。他の者其れを聞きて氣の毒に思ひ、執成し半分に慰むれば、「何と言はれても仕方がない、先年、大阪で大菅原の時、七十歳の中山文七が、法性坊を勤め、寺島の菅丞相が其の方丈へ幽靈で花道から出で、何事があつても御所へ行つて祈禱をして吳れるなと、師弟の間柄で賴むと、法性坊は勅命があれば行かなければならぬといふので、菅丞相は柘榴を食つて火を吹くといふ、此の二人切の幕が大一座で一番利いたのだから、其の親力に何と言はれても、私などは仕方がないのだ。」と言ひしとか。（同上）

彼れが後援者には「江戸の十八衆にて、三谷三九郎など丶肩を並べし森川」といふがあり。「衣裳は此の大盡が拵へて遣りしゆゑ、何時も立派に出來、其の上、當人が天鵞絨を好みて用ゐる事の多かりし爲め、仇名を「天鵞絨々々々」と呼ばれたりといふ。

吉三郎に三子ありき。長男鱗子が夭折せし事は前に言ひしが、次男を猪三郎といひ、三男を寅三郎といひ、俳優として孰も其の名著はれざりき。

八世片岡仁左衛門（松島屋我童、文化七—文久三）は始め市川新之助といひ、大阪に子供芝居の座本たりき。又三桝稻五郎と改めしが、後に二世璃寛の門に入り、嵐橘二郎といひ、京阪の宮芝居にて修行し、天保三年（廿四歳）春、七世仁左衛門の養子となりて我當と改め、同年九月、始めて大阪へ出で、「弓張月」に鰐島庄五郎、「大經師」に意春、同年十一月、京都、南側芝居にて、「千本櫻」に小金吾と彌助、翌四年も養父と一座して「伊賀

越」に志津摩、「染分縄」に奴逸平、等好評を得たり。これより濱芝居へ出でて色立役を專らとせしが、天保八年、養父の病死せしかば、其の俳名我童を襲ぎて藝名とし、同十年春、角座にて「濱眞砂」に久次と鯛屋源五郎とに喝采を博し、次ぎで三月は同座と中座とを兼ね、「伊賀越」に譽田內記、「蝶紋日」に山崎屋與五郎、「夕霧」に伊左衛門、孰も大當りを取れり。此の前後より、彼れは二世芝翫（三世歌右衛門の養子）と相頡頏せしが、弘化四年に芝翫が三十八歳にして夭折してより、更に二世額十郎（當時延三郎といへり）と對立して立役の花方と稱せられたり。

安政元年（四十六歳）の春、始めて江戸へ下りて中村座へ現はれしが、其の年、大阪にて自殺せし八世團十郎の面影の何處やら彼れに似たりとて、世間にて「八代目の綿入」なりと持囃し、是れより愈俗衆に悦ばれ、翌二年五月、「伊勢音頭」に貢を勤めて同時に市村座に同役に扮せる四世彥三郎を壓倒したりき。同四年正月、始めて仁左衛門の名を襲ぎ、中村座の座頭たりき。同六年、「伊賀越」に渡邊靱負と佐々木丹右衛門、「菅原」に源藏、「妹脊山」に芝六と大判事と鱶七、「いろは實記」に判官と由良之助と彌作、萬延元年には「忠臣藏」に師直と本藏と義平、翌文久元年、「苅萱」に新洞左衛門、「八陣」に正淸、「反魂香」に吃又など、此の頃より彼れは色立役以外なる老人役又は武道事にも指を染めて成功せりき。

文久二年十月、八年ぶりにて大阪へ歸り、角座にて「伊賀越」に佐々木丹右衛門と唐木政右衛門、「戀飛脚」

に紙屋忠兵衛に扮せしが、藝風の江戸化されし爲にや上方人の不評を買ひたり。翌三年正月、「一總神事」に若徒八藏と船頭梶六と茸切三吉とを勤め、同時に中座にては多見藏の八藏、延若二世額十郎」の梶六



八世仁左衛門の「藤屋伊左衛門」（「似顔大全」より）

と三吉とにて、兩座競爭の興行なりしに、八藏が誤ちて己が主人定之進に鐵砲にて撃殺す場にて、舞臺に於て發病し、二月十六日、終に五十四歳にして歿したりき。

仁左衛門は男振よく、舞臺綺麗なりしが、體格の小さかりしと、捨白を飾りに多くいふ癖とが其の缺點なりき。天保十二年の「役者舞臺扇」に曰く、

當時、大芝居で色氣たつぷり、其の上藝の仕出し上品にしてやわらかみあり、仕内に味みのある……

といへり。即ち彼れの本領は謂はゆる「色立役」にあり、特に二世吉三郎の風を襲ぎて、其の當り藝を

屡上場せり。「筑紫琴」の阿蘇次郎、「南柯夢」の半七、「弓張月」の爲朝、「猿廻」の與次郎の如き是れなり。而も吉三郎より和みに於てまさり、藤屋伊左衛門、古手屋八郎兵衛、油屋與兵衛、淀屋辰五郎、鰯屋忠兵衛、小間物屋源七、梶原源太など亦彼れが當り藝なりしが、其の阿漕の平次が本名を名乘りてよりも餘りに世話に過ぎたりといひ、小栗判官が前の時代の場よりも後の世話の場が見よかりしといひ、彼れは時代事よりも寧ろ世話事を得意とせしもの丶如し。而も上方の世話物には適せしも、江戸狂言の世話物には不適當なりしといふ。又彼れは踊をも能くし、稀には「鏡山」のお初の如き女方をも兼ねたりしが、後者は不評なりき。尚ほ晩年に至り、老人役もしくは武道事をも能くせしは前にいへる如し。彼れは癇癖強くして感情に鋭く、隨つて舞臺にても、「伊勢音頭」の貢、「馬切」の三七、「忠臣藏」の若狹之助の如き役を能くしたりき。

既に中村歌六の條下に記せし如く、三世璃寛と小團次と彼れとは共に歌六の女を娶りしが、後に小團次が其の妻を離別せしかば、彼れは其の無情を憤りて交を斷ちたりき。中村座にて兩優一座せしも、仁左衛門が清玄をすれば小團次は其の狂言に出でず、小團次が男重の非をすれば、仁左衛門は出でずといふ如く、一緒に舞臺へ並ばざりしが、次の興行に仲裁する人のありて、二番目に「伊勢音頭」と「夏祭」と二つを出し、前の方は仁左衛門が貢、小團次が伯母お峰、後の方は小團次が團七、仁左衛門が徳兵衛とい

ふ役割にて、和睦の心にて顏を合せしも、中心終に解けずして彼れは河原崎座へ轉じたりき。

彼れは妻との間に數子を儲け、長男は我童の名を襲ぎしが、明治四年、三十三歳にして死し、二男と三男とは相前後して仁左衞門の名を襲ぎ、共に明治時代の名優たり。

●●●●三世嵐璃寛（葉村屋巖獅、文化九―文久三）は生島岩五郎といふ旅役者の子なり。京都二條新地に生まれ、初め三世菊五郎の門に入りて尾上和三郎といひ、父と共に旅芝居を巡業せしが、文政十年（十六歳）春より、京都の宮地芝居へ若女方として現はれ、天保二年（二十歳）春、二世璃寛の弟子となり、嵐德三郎と改名して始めて大阪角座に入り、「廓苧環」に妾柏木と娘おれん、「隅田川」に野分姫に扮したり。これより伊勢へ下り、更に角座へ歸りしが、次いで竹田座と筑後座とに出で、同三年、「朝顏日記」の深雪にて喝采を博し、京都の北側芝居にて「巖流島」に傾城武藏野に扮せり。天保五年、橘蝶と改めしが、翌六年は舊名の德三郎に復しき。此の前後より專ら濱芝居へ出勤して大劇場に出でず、天保十年には、師璃寛の三回忌として、大西座に「靑柳硯」の道風を勤め頗る好評を得、次いで同座に「千兩幟」の岩川に扮し、「女方で立役をして當てたは元祖の小六玉（嵐雛助）より外にあらしの橘蝶丈」と評せられたり。同十一年は同座へ「伊勢物語」の有常、「近代源氏」の盛綱、十二年は「巖流島」の無三四、「南柯夢」の半七、など女方にして立役をも兼ねしが、同十四年（卅二歳）九月、終に立役の部に入り、且つ中座にて師の名を襲ぎて、三世璃寛と改め

たり。此れより先き、彼れが改名につき三世吉三郎より故障の出で、璃寛及び德三郎は吉三郎が先代よりの名なれば他名に改むべしとの事に、孰も二世璃寛より讓られたりとて聽かざりしかば、町奉行所へ訴訟を提出せられ、結局璃寛より吉三郎の許へ歳暮の餅を贈るといふ條件にて和解し、尚は嵐冠十郎が吉三郎の味方なりしゆゑ、璃寛側にても、別に嵐橘五郎といふを冠十郎と改名せしめ、江戸と大阪とに同時に二人の冠十郎ありしを、同時に融和せしめ、天保十五年春、江戸の冠十郎は先師猪三郎の名を襲ぐ事となりたり。

弘化三年（三十五歳）三月、中座にて「忠臣藏」に平右衛門、おたか、石堂、七月、「菜種御供」に時平、「國姓爺」に和藤內、「嫗山姥」に八重桐、翌四年正月、「八犬傳」に信乃、など始終立役と女方とを兼ね、特に信乃は大當を取りしが、槪して立役は不評にして女方は好評なりき。

嘉永四年（四十歳）十一月、始めて江戸へ下り、河原崎座にて「青柳硯」の道風と「嫗山姥」の八重桐に扮し、翌五年正月、「女舞鶴」に板額、三月、「妹脊山」に定高と入鹿とお三輪、「双蝶々」に放駒、四月、「三莊太夫」に山岡權六と娘おさん、七月、「兒雷也」に大蛇丸、九月、「一谷」に相模、「安達原」に貞任と袖萩、十一月、「假名書講釋」に平右衛門とお高と近江屋次郎右衛門、六年二月、「白縫譚」に菊池貞行と乳母秋篠と漁師浪六、四月、其の後編に鳥山秋作、「千本櫻」に覺範、九月、「白石噺」に宇治常悅と宮城野、翌安政元年三月、

「初霞」に女猿廻し、六月、「天下茶屋」に伊織と幸右衛門、八月、「五十三次」に伊賀之助と下男久助と妹おたつと貢屋喜八、十一月、「忠臣蔵」に由良之助と定九郎と戸無瀬、同二年三月、「花上野」に乳母お辻、五



三世璃寛の「板額」（「似顔大全」より）

月、「兒雷也」に勇美之助と刀屋娘おはな、七月、「龜山仇討」に石井兵衛と中野藤兵衛等に扮し、同年十二月、五年ぶりにて大阪へ歸りたり。

安政三年（四十五歳）正月、角座にて「白縫譚」に若菜姫と秋篠と浪六に扮し、孰れも好評なりしかど、番附に大五郎は客座にして自ら座頭たりしより人氣を損し、中途より「安達原」の袖萩と加へしかど是亦不入に歸したりき。されば、三月は大五郎を座頭とし、「妹脊山」に入鹿とお三輪、「双蝶々」に放駒、「春霞」に遠山甚三と女猿廻、十一月は京都南側芝居にて「お六櫛」に松山與三、「鉢木」に時頼と玉章、「安達原」に袖萩に扮し、特に後者に

大喝采を得たり。降つて文久三年春、角座に出勤の筈なりしに病發り、是より屢〻舞臺を休みがちなりしが、翌三年二月、義兄たる八世仁左衛門が彼れと同く角座に出勤中病死せしかば、遂に我當（後に九世仁左衛門）に其の代り役を勤めさせ、自ら愁嘆の口上を述べて大入を取り、次いで自身も四月二十一日に五十二歳にて歿しき。

彼れの特色は女方と立役とを兼ぬる事にありしが、寧ろ女方が其の長所にして、立役には成功する藝稀なりき。大兵肥滿なりしも、音聲は至つて綺麗にして、女形には好き調子ながら立役には不向の上、折々卷舌になる癖あり」、且つ辯舌の巧みなるに任せて捨白の多きと、小手の利き過ぎ動き過ぎる爲め、男性に扮しては輕薄らしく、女性に扮して蓮葉に見えたるのみならず、其の體格の大きかりし爲め、少女の役に適せざりきといふ。女方としての當り藝は袖萩、八重桐、花園、板額、重の井、乳母お辻、深雪、お三輪などあり、立役にては小野道風、放駒長吉などあり。又實は男子にして女性に擬せる、犬塚信乃もしくは犬坂毛野の如きも得意の藝なりしが、只「伊賀越」の鳴見の如き老女役は彼れに不得意なりき。彼れは多藝にして能く「三味線を彈き、手跡も見事なり、料理も上手にて、鼈などは營業の人にも及ばぬと言はれ、釣網等も素人離れなしたる功者といひ、又算盤も達者に彈き、俳優中の金滿家なりし」といふ。璃寛の妻は歌六の女にして八世仁左衛門竝び四世小團次が妻の姉なり、又實子は和三郎といひ、明治に至

りて璃寛の名を襲ぎたりき。

●●●●二世嵐璃珏（豊島屋、文化九―元治元）は大阪道頓堀の芝居茶屋にして其の筋の手先たりし豊重といふ者の子なり。幼名を市太郎といひ、二世吉三郎の門に入りて嵐芳三郎の名を襲ぎ、子供芝居へ出でたり。蓋し芳三郎といふは師吉三郎の實子にして中途より俳優を止めたる者の名なりしなり。文政六年（十二歳）、大阪の若太夫座にて中將姫雪責の奴に扮して好評を得、これより二世璃寛の預り弟子となり、京都の道場芝居にて修練せしが、天保二年（二十歳）冬、二世璃寛の俳名を襲ぎて、璃珏と改名し、同四年、始めて中座へ現はれ、同七年春、同座にて「八犬傳」に、師璃寛の病氣となりし爲め、其の代りとして金椀大助と信乃とに扮して喝采を博せり。同九年、堀江座にて「後太平記」に谷五郎を勤め、其より暫く浪花座に出でしが、弘化二年（三十四歳）春、角座へ現はれ、翌三年三月、同座にて「太功記」の孫市と十次郎、嘉永元年（三十七歳）、筑後座にて「皿屋敷」のお菊、同五年春、角座にて「佐倉曙」の佐倉當吾、同年秋、筑後座にて三番叟と釣狐の所作事などに大當を取り、次ぎに角座にて「倭人船」に安部仲麿を名殘として、始めて江戸に下りたり。

嘉永六年二月、河原崎座にて「白縫譚」に鳥山秋作及び所作事の操三番と百眼を御目見得狂言とし、四月、「千本櫻」に狐忠信、九月、小幡小平次の怪談と「枕慈童」の所作、十一月、「鬼一」に牛若丸、「出入湊」に喜

兵衛」「姫小松」に龜王、など孰れも江戸の看客に喝采せられしが、座主河原崎權之助と隙を生じて直ちに西上したり。

〔附〕璃珏は犬を愛する癖ありしに、其の飼犬が玉鮨といふ鮨屋の犬と噛合ひたりしを、其處の雇人が打擲せしを見て怒りしより、權之助が端たなしと罵りぬ。彼れは愈憤りて呉服屋の大丸に預けし爲替金より前借を支拂ひて即時大阪へ歸りきといふ。「俳優百面相」に當時座主權之助が、證文にした金を返すはよきが、證文にせぬ約束は如何に、千兩以上の大金で下りしは見物にやんやと言はれるつもり、又吾も大入をさして貰ひたさなり、と言ひたるに、璃珏も理の當然に押され、さらば次の一芝居を無給で出でん、とて小幡小平次を出し、果して大入を取りしまゝ歸阪せりとあり。然し、小平次より後の興行にも出でたるを見れば此の傳説に誤れる所あるべし。

安政元年（四十三歳）春より大阪の筑後座へ出で、「關寺小町」及び「百眼」の所作を演じ、同年冬、京都の南側芝居に「釣狐」を出し、翌二年春、大阪の筑後座にて「鉢木」の白妙、「八重霞」にしろし、同三年、筑後座にて吃又平、同四年、角座にて「宇都谷峠」の慶政、など好評を博せしが、文久二年三月より發狂して舞臺を休み、翌々元治元年十四日、五十三歳にして歿しき。

璃珏は「男前は中位、音聲は皺枯れてゐたれど、役者は確かに上手でありし」といふ。而も二世額十郎と異りて其の技藝は多方面にして、且つ「小手利き」と稱せられ、立役のほかに女方をも兼ねて、如何な

る役と雖も殆ど演ぜざる事なかりしが、體格の小さきと、餘りに動き過ぎて品格の足らざりしと、及び色氣に乏しかりしが其の缺點なりき。されば其の小姓吉三は「强過ぎる」と言はれ、藤屋伊左衛門は「動



二世璃珏の「牛若丸」（「似顔大全」より）

き過ぎて下品」なりと評せられ、狐忠信にて道行の物語は「働き過ぎて奴のやう」なりと非難されたり。往々其の藝風は二世吉三郎そつくりなりと稱せられしに拘はらず、彼れは正侠よりも寧ろ士卒、情郎よりも寧ろ義侠に適し、佐倉當吾、小割傳内、鈴木條市、石井源藏、法界坊、藤彌太、女方としては、しらし、お半、お染、信夫、など當り藝たり。特に怪談物と早變りとを得意として、鰻小平、お菊、累、お岩、お染の七役などあり。又所作事にも堪能なりき。

彼れは手先の子なりしゆゑ世間に羽振よく、又俳優には稀なる資産を有せり。其の人に屈せざりし事は

河原崎權之助と隙を生じて急に歸阪せるにても知るべく、且つ此れに類せる逸話まゝあり。

大阪中の芝居にて「八犬傳」の伏姫の役を、序幕の事とて夜明け前の薄暗がりにてありしゆゑ、誰もやりてなきを自分が買つて出でたり。蠟燭のあかりにてやるなら引受ける、もし夜が明けて明るくなれば斷るといふ約束なり。然るに、見物は璃珏の伏姫を見ればならぬといつて、暗き内より押掛けたれば、仕打の方は評判の好きに、成るべく夜が明けてより見せたしとて、富山の場の處へもう一幕つけようと相談を始めしが、其の約束を變じるに於てはやめるばかりとて、ついに仕舞まで蠟燭火にてやり通したりと。それが爲に、お客は朝飯前に見物して、一先づ朝飯に歸りしかば、序幕が濟むと客が引きしゆゑ、當人大いに得意がりし。（「俳優百面相」）

「四谷怪談」のお岩をせし時、例の提灯を誂へ、やがて出來上りしが、注文よりも詰まりて、出づるに具合惡かりしゆゑ、小道具に小言を言ひたり。「それでも誂へ通り拵へました」といひければ、「それでは宜しい、鉋を持つて來てくれ」といふ。何事か知らず鉋を持ち行けば「誂へる時より己の體が太つたのであらう、體へ其の鉋を掛けて削つてくれ」といひて小道具を困らせ、漸くあやまりて事濟みになりしといふ。（同上）

彼れは又金錢を愛する人なりき。

安政四年、堀江芝居の九月興行に權八を出して、七世團十郎に長兵衛を附合ひくれと頼みしに、お前さんはシヤクシ面だから權八には適らずとて、自分の件作にて、「八犬傳」の信乃を勤めさせしが、天井より落つる青竹の筒の中に村雨丸のなかりしゆゑ、璃珏は驚きて舞臺に穴の明かんとせしを、件作が「いや過てり、一時は其れに入れ置きしが、盜難を恐れて奥の納戸へ納め置けり、それ、信

乃、取出しまゐられよ」といひ、漸く無事に濟みたるが、團十郎の部屋へ禮に行き、狂言の不注意を侘びければ、いや、狂言や小道具の仕落ではなし、中幕はお前さんの持場だから、毎日幕あき前に舞臺へ出て、掛りの者を叱るほどにせねばならず、其れを探ぐ程な奴等を動かせるには、買ひ藥を澤山持てゐられるでは無きかと言ひしに、大部屋連は之れ聞いて痛快に思ひしと。（中醉雷筆記）

●●●●●●●二世實川額十郎●（井筒屋延若、文化十一—慶應三）は京都寺町二條上る町に生れ、大阪の南本町四丁目にて成長せしが、後北堀江の高臺橋邊に入家せり。幼時より劇を好みしかば、初世額十郎の門に入りて淺尾延三郎といひ、京都の宮地芝居にて修行し、天保二年（十九歳）、師と共に始めて大阪の中座に出でたり。此れより大阪の濱芝居へ現はれ、且つ師の養子となりて實川と改姓せりき。天保八年「廿五歳」の夏、名古屋へ赴きて七世團十郎と一座せしが、九月、歸阪して若太夫座に出で、天保十年春、中座にて「百千鳥」に藤屋伊左衛門と萩塚萬次郎とに扮せしが、當時の評判記に彼れの萬次郎を賞揚して、

始終延若丈の藝風を捨てず、餘人のやうに無理に身ぶり物まねなしられんだけが直打でござります。三五郎（三世嵐）丈は故人となられる、小川（三世吉太郎）丈は最早色氣なく、此のやうな上品な花殿役は當時此人々々。（役者金剛力）

といへり。六月、京都の北側芝居にて「拳褌」に若殿和泉之助、「三代記」に三浦之助、七月、同座にて「一覺仇討」に勝五郎、など孰も大當りを取り、同年十一月、京都の北側芝居にて「廓船諷」に高丸龜次郎、及び富十郎の「板額」に淺利與市に扮し、特に與市は大阪にて多見藏が演せしよりも優れりと評せられ、

藝風おのづからゆるやかにて腹もあり、小芝居めかす、めき〳〵と御上達でござります。……當時大芝居の立者にもならるゝは、今

芝翫丈（三世歌右衛門の養子鶴助）我童丈（八世仁左衛門）、つゞいては此お人かと存じまする。（同上）

と激賞せられたり。

天保十一年春、大阪の角座にて「青陽鶴」に瀬川采女と大工與四郎に好評を博し、次いで「土壇場」の若狹之助に扮せしが、此の時より眼病に罹りて屢々舞臺を休みたり。同十二年春、中座にて「楊柳櫻」に足利義教と宅間才三郎と奴布平、五月、京都北側芝居にて「赤城鹽竈」に鹽谷判官と木浦新吾、同十三年春、中座にて「繭佳節」に栗島甲斐之助、同十四年春、同座にて「薄雪」に來國俊、弘化二年（卅三歳）、同座にて「英艸紙」に門松但馬と吉澤采女、九月、同座の「信田妻」に保名、同三年冬、同座にて「八犬傳」と金椀大助と犬川額藏、同四年九月、同座にて養父額十郎の十三回忌追善として「重井筒」の德兵衛に扮しき。

嘉永元年（卅六歳）正月、中座にて「曾我」に十郎、三月、「いろは假名」に堀部安兵衛、「猿廻」に與次郎、五月、若太夫座に「盛衰記」の平次、九月、中座の「戀飛脚」に忠兵衛、十一月、筑後座の「油商人」に與兵衛、同二年十月、竹田座にて、「日蓮記」に日蓮上人、「大網島」に治兵衛、同四年正月、中座にて「清船諷」に木村又藏、九月、養父十七回追善として「菅原」に源藏と宿禰太郎と櫻丸、同六年正月、中座にて「誠心錄」に莨屋喜八、三月、「忠臣藏」に判官と勘平と平右衛門と與茂七、五月、京都の北側芝居にて莨屋喜八、九月、大阪竹田座にて「苅萱」に道心と女之助、「今朝噂」に刀屋新助、十月、中座にて再び莨屋喜八、安政二年（四

十三歳）正月、角座にて「當玉兎」に狩野四郎次郎、同五年三月、中座にて「伊賀越」に佐々木丹右衛門と重兵衛、六月、伏見の伯耆町芝居にて「日蓮記」に日蓮上人、十月、大阪の筑後座にて同上、十一月、京都北側芝居にて同上、など彼れの當り藝なりき。慶應元年正月、延三郎の名を子延太郎に讓り、自ら師の名を襲ぎて顔十郎といひ、大阪の中座にて「戀闇札」に伊達新右衛門、三月、「達大礎」に宇治兵部之助と大福屋宗六、「女夫盛」に梅堀の由兵衛を勤め、五月は三十四年ぶりに伊勢へ下りたり。八月、京都の南芝居へ出で、「八犬傳」に大助、「五大力」に源五兵衛、「天網島」に治兵衛、十月、大阪堀江座にて「重井筒」に徳兵衛、同二年正月、中座にて「花通矢」に越野勘右衛門、三月、「八陣」に正清、「今朝噂」に刀屋新助、五月、「夏祭」に釣船三ぶ、「大和橋」に三七信孝、九月、「會稽山」に上田慶次郎、「大經


二世顔十郎の「宮城阿蘇次郎」（「似顔大全」より）

師」に茂兵衛に扮せしが、是れより先き、彼れは能勢の妙見へ祈願して一旦その眼病の癒えたるも、再發して終に明を失ひ、同三年二月廿二日、五十五歳にして歿しき。

額十郎は容貌と風采とにすぐれ、又辯舌爽かなりき。其の藝風は大やうにして小芝居めかず、且つ嫌みなく、即ち品位と餘韻とに富みしのみならず。「實意ありて狂言に身を入れ」、即ち舞臺に忠實にして、能く役柄を咀嚼し、能く之を再現するに力めたりといふ。而も彼れは師額十郎の風を寫せしのみならず、三世三五郎そつくりと評せられ、其の本領とする所は時代よりも世話、武道もしくは實事より謂はゆる「色立役」にありたり。例へば、紙屋治兵衛、紺屋德兵衛、龜屋忠兵衛、帶屋長右衛門、手代茂兵衛、油賣與兵衛、刀屋新助、狩野四郎次郎（乳貰ひ）、早野勘平、飯沼勝五郎、など此れなり。又朴訥なる野人に扮するも彼れが得意とする所にして、貝屋善吉、萱屋喜八、槍持定助、百姓彌作、などの當り藝あり。其の風采の揚りしかば若殿役をも能くし、特に性急短慮なる性格に適し、久次（「石田局」の）、輝虎、（「配膳」）、賴兼、若狹之助など其の例なり。晩年には此等以外の役にも扮せしが、由良之助の如き、熊谷の如き、毛谷村六助の如き、和藤内の如き、孰れも不評に了れり、以て彼れが特色を知るべし。

彼れは法華信心を以て名あり。其の「日蓮記」を演じて常に大入を取りしは、其の伎倆と天品とのほかに斯かる事情の與つて力ありしならん。又彼れは終生江戶へ下らざりしのみならず、他の地方へも出

でし事稀にして殆ど京阪の舞臺を去來せるのみなりき。

第二十章　江戸に於ける其の他の立役と敵役

四世大谷友右衛門――「天下茶屋」の元右衛門――傲慢不遜。――六世市川團藏――彼れの特色――才能は多方面――居常と死狀。――四世坂東彥三郎――彼れの藝風――負けぬ氣。――四世坂東三津五郎――輕妙なる味――江戸子氣性。――五世澤村宗十郎――彼れの本領――長所と弱點。――三世關三十郎――多方面なる伎倆――皮肉の人。――三世中村仲藏――新解釋と新意匠。――十二世市村羽左衛門――其の當り藝――和事と實事――豪奢と恬淡。――四世市川小團次――舞臺上の經歷――其の得意――今一つの功績――先天的の風采、――燥急にして猜疑、――八世市川團十郎――舞臺上の經歷――容姿と風采――藝風――「切られ與三郎」の型――人氣と愛嬌――江戸子と貴公子。

四世大谷友右衛門（明石屋此友、寛政三―文久元）は大阪の狂言作者出來島專助の子にして、幼名は福藏といひ、二世友右衛門の門に入りて大谷福藏と號し、後に萬作と改めき。二世が死せし翌年（天保二年）十一月、江戸の河原崎座に下り、始めて師の名を襲いで友右衛門と稱せしが、同時に大阪にては嵐舍丸が同く、友右衛門の名を襲げるあり。東西に二人の友右衛門を生ぜしが、舍丸は幾くもなく死したれば、假りに此れを三世とし、萬作の友右衛門を四世とす。天保六年八月、中村座にて「天下茶屋」の安達元右衛門に扮して好評を得たり。蓋し此の役は曾て大阪にて屢演じ、七世團十郎に激賞せられしものなりといふ。此の頃、

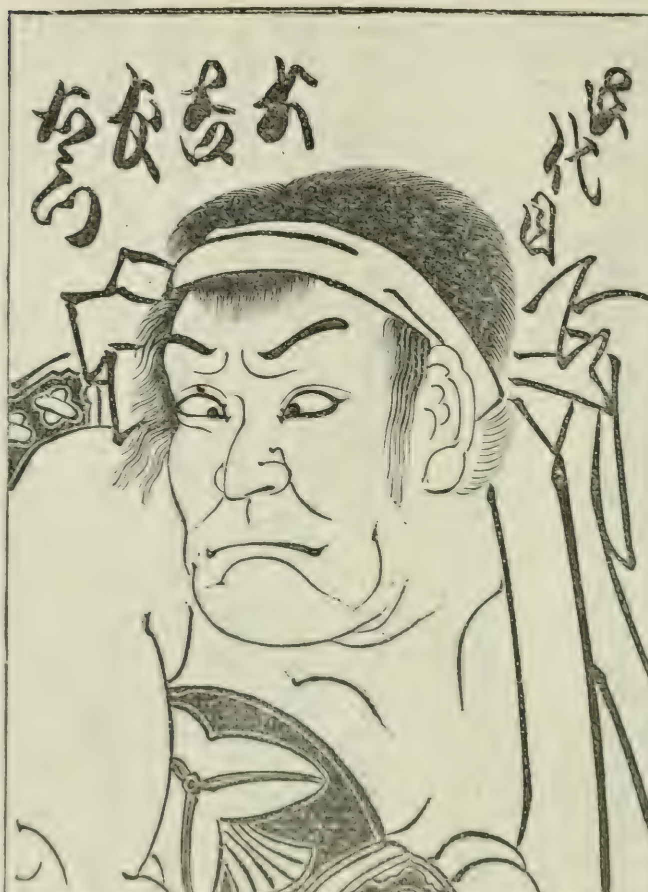
彼れは名題の地位に推選せられしが自ら辭退せしより愈内外に尊重せられ、七年四月は森田座にて「八犬傳」の蟇六、八月は「黄鳥墳」の大仁坊、など彼れが當り藝なりき。天保十二年、歸阪せしが、弘化二年春、再び東下して河原崎座に現はれき。後安政四年、駿河より伊勢尾張を巡業して久しく江戸の劇壇に見失はれしが、文久元年正月、終に病歿せり。年七十一。

彼れは「震えたやうな調子で、三角眼に番臺面」、即ち容貌醜惡にして風采の揚らざりし爲め、仁木彈正もしくは光秀の如き立敵に適せざりしも、謂はゆる三枚目敵に至つては天下一品なり、特に「天下茶屋」の元右衛門は其の傑作として、俗に「元右衛門が友右衛門か、友右衛門が元右衛門か」といへりき。

似音にて彌助に異見され、錢を貰ひ、悄然として外へ出で、花道の中程にて振向き、カツと眼を開き、錢を大地へ投付けてクルリと着物の尻をまくり、舞臺へ戻りて路次へ入り、屋根へ上りて引窓から入るに、紐へ足を掛けてクル〳〵と廻りながら下り、二人の寢姿を見て、源次郎を先へ殺さば彌助が眼を覺ます、さうすれば自分が切られるといふ事を振にて見せ、彌助から殺さんと決心し、馬乗になりて刺すと、彌助が袖を捕へて居るゆゑ、手を切り落し、次に人が來る氣合に、慌てて源次郎の財布を奪り、門口へ出ると、伊織が歸り來りしかば、引違ひに提灯を切落し、膝を斬ると、伊織が擬となるので逃出し、花道の中程へのめつてより、引込みになるのであるが、その憎々しさは今にでも眼に殘り居る位なり。

これ以來、小團次のを見、伜の友右衛門のを見、五代目菊五郎のを見、馬十のをも見しが、小團次は今の花道の引込みにて、幕を引付けると軈て起上り、一人にて相手が居る如くいろ〳〵と拔身を振廻し、しまひに右の肩へ擔ぎ、中腰のやうなる格好をなし、右の足

より出して刻み足に引込みしが、役者がよきゆゑ旨くはありしも愛嬌が邪魔をしたり。友右衛門は何處までも憎體に、成るべく見物にも憎まれるやうに持つて行きしが、見物の受けは宜しかりき。次の伊織が返り討になる處の友右衛門は、腕助を連れて花道から火繩を振つて出で、蒲鉾小屋の中の伊織が寝入る樣子を覗つて横から刺し、當麻も忍んで後から刺し、引出してより元右衛門と伊織との割白になるが、最も憎くしき所は、元「實になつたが」伊「さては其の夜の盗人は」元「問ふにや及ばん」伊「うぬであつたか」元「實に、なつたが」といふうちにも、始終伊織の顔を眺めて居り、元「やーあーれ」にて刀をトンと大地へ挿し、「不憫やーなーア」にて其の柄頭の上に両手を重ねて、其の上に顎を付け、顔をしやくるやうな樣をしたり。それより伊織を殺すに、仕掛にて刀を咽喉の横より貫き抜けし形になるが、小團次はその科が續き代りに、「腰抜の分際で、親の仇を討たうとは、何んな肝だか見てやらう」で疵口へ手を差入れ、肝を引出して見、「何だ、ちひぽけな肝だ」といひて捨て、手拂ひをして「腕助、莨にしよう」は愛嬌のある高島屋(小團次)としては可なり憎體にてありき。(「俳優百面相」)



四世友右衛門の「箱根の閉坊」(「似顔大全」より)

「黄鳥墳」の大仁坊も彼れが傑作なりき。

狂言中に土間へ逃げ込む所あり、例の如く這入ると、中に居る中婆さん、彼が仕打の憎しと、思ひさま尻を抓りたり、其後當人の話に、彼の時ほど我等身に取り難有かりし事はなかりしといひし由。飽くまでも敵役を性根にして居りしなり。（同上）

敵役として彼れの如何に憎々しかりしと且つ如何に其の藝道の熱心なりしかを知るべし。

「菅原」の狂言にて土師兵衛を勤めし折、出になる前かた、舞臺の後より持出す鼓を弄び、子役を相手にして居る樣のやさしかりしも、いざ出になるといふに及んで、鼓を抱へるや、直に其の樣の一變するには驚く外なかりしと。（同上）

初めて「鈴木主人」の狂言が出でし時、筑波山平といふ白糸の兄に當る敵役を勤め、麹町の貝坂の場にて嵐小六の老婆を殺し、行きかけると人魂が飛ぶを振返りて見送り「なーんーだ、人魂かー面ー白くもねえ」と言廻したる其の太々しさは、筆紙に盡されぬ程にてありたり。（同上）

「天一坊」に赤星大八の役、古寺の場で「何、それほどの事でもねえ」と見物に後を向き、くるりと尻をまくつて悠々と正面へ入る所は憎かりき。（「相撲と芝居」）

彼れは斯くの如き敵役を得意とせしのみならず、世話狂言の親仁方にも妙なりき。「鮨屋」の彌左衛門にて、

片肌脫の鉢卷にて尻を端折り、花道へ行きかけると、向うから出る梶原が成駒屋歌右衛門（四世）といふ立派な役者にて、此の梶原に睨まれ、恐入つて肌を入れ、鉢卷を取り、小さくなる處非常に好かりし。（「俳優百面相」、「相撲と芝居」）

彼れは又己が伎倆を恃んで往々傲慢不遜なりき。

河原崎座にて「龜山仇討」に、八つ橋村の又四郎といへる老爺を勤め、澤村宗十郎(五世)は三木重左衛門といふ武張つたる立役を演じたり。此の幕が閉るや、又四郎の拵へ其の儘にて紀の國屋(宗十郎)の部屋の入口に突立ち居り、軈て宗十郎が歸つて來るを見、顎にてしやくりつゝ「下手糞め〳〵」と蔑みていひたりと。(同上)

斯かりしかば「役者中にも性根の良くなき男」と言はれて「大勢の者に憎まれ、三階にて袋叩きに遇ひし事など屢々あり」たりき。嘉永元年、河原崎座にて彼れが安達元右衛門を勤めし時、

年も取り居るゆゑ、一世一代の元右衛門といふ口上書を番附へ入れて貰ひたしと願ひし處、一人しうか(坂東)が不承知を唱へて入すにしまひたり。しうかは、其んな口上を入れて出し、此の芝居が入つたなら、彼奴が威張つて仕樣がないと云ひしといふ。(同上)

ひとり伎倆に誇るのみならず、人と爲り禮節を缺き、且つ酒癖ありて能く人と爭ひたりき。

七代目團十郎が滯在中、彼れが伎倆を賞し、江戸へ來らば何時にても世話すべしといひしに、酒ゆゑ身上不如意となりしより、單身江戸に出で、七代目の宅に尋ねしも、身なりの宜しからねば誰も敎へてくれず、尋ねあぐむうち小便を催し、七代目宅の臺所の羽目板を汚し、雇人等に打擲せられたり。此の騷ぎに七代目は始めて彼れが出府せし事を知りしも、此の日は知らぬ顏して路次口より突出して仕舞ひ、又の日改めて面會せしが、江戸は敵役が多過ぎる程なりといふを口實に拒絕したり。後年に至り、甲子屋某が呼下し、始めて江戸の舞臺を勤めて好評なりしも、酒癖は止まざりけり。(「五柳耳袋」)

道中にて御用の物を乘せて曳き來りたる馬方が、何やら粗忽をなして挨拶をせぬゆゑ、其の馬の耳をそぎし事ありとて、何ぞとい

へば耳切を持出して啖火を切りたり。或日、河原崎座にて相變らずいさかひして、「耳斬の己を知らぬか」と威張りし折、頭取の川重太郎に捕まり、二つ名前のある人は使へぬゆゑ、断るといはれし時は、流石の耳斬先生も大いに凹みたりといふ。（「俳優百面相」「五柳耳袋」）

或時、茶屋の客衆と爭論の結果、仕返しを爲す積りにて、芝居を打出したる後、茶屋の前に待ち居りしも、客の出で來らざるを待ち詫び、天水桶に腰を掛けし處、生憎に其の中へ陷りて出る事叶はず、助舟を呼んで揚げて貰ひ、終に仕返しも無にしてしまひしなどは、何處までも三枚目の本性を失はざる所なりき。（「俳優百面相」）

顏見せ狂言の寄初に、例の酒に醉ひ、上下のまゝ頰杖をつきて、五瓶（作者）が小名題を讀み初めると、「いよ並平〳〵」と賞める。他より制すれば聽かず、そちらへ退けよと七代目團十郎の目くばせに、大勢引張り出さんとせしが、終に喧嘩となり、中通りの頭大谷馬平に燭臺にて小鬢を傷つけられたり。初日近ければ此の騷ぎ納まり、長田の庄司一役だけ出勤せしも、廿日ほどたちて江戸を奔り、諸處の旅芝居を廻りたり。（「五柳耳袋」）

されども、子の友松が子役として舞臺に出るやうになりしより、社交も圓滿となりて、温良の人物に變りしといふ。此の友松は後に五世友右衛門の名を襲ぎ、明治の初年に榮えたりき。

六世市川團藏（三河屋市紅、寛政十二―明治四）は四世團藏の門下たりし市川荒五郎の子なり、幼名を照世といひ、文化八年（十二歳）、江戸の中村座に出で、同十年冬、七世團十郎の弟子となりて三藏と改めたり。同十三年、更に百々太郎と改名して立役の部に加へられ、文政十一年（廿九歳）、始めて大阪の筑後座へ上り、「大經

師」のお玉、「忠臣藏」の定九郎、「琴責」の阿古屋に喝采を博しき。其れより中國九州を巡業して歸阪し、竹田座の御靈芝居へ現はれしが、再び伊勢尾張へ赴き、天保二年（卅二歳）の春、白藏と改名して、大阪の若太夫座へ出でたり。次いで天保六年十一月、九藏と改め、江戸の森田座へ下りしが、弘化三年秋、十二年ぶりに上阪して、大阪の角座と京都の東側芝居へ出勤して直ちに東歸せり。嘉永五年（五十三歳）十一月、始めて團藏の名を襲ぎ、大阪の角座にて吉備大臣（新作）と物草太郎、「先代萩」の仁木彈正、及び「白石噺」の常悦と宮城野を勤め、それより京阪に滯まること五年にして、安政三年十月、江戸の森田座に下りき。以後、明治二年まで東都に留まること十年にして再び西に赴き、明治四年十月廿二日、そこに歿しき。年七十二。



六世團藏の「工藤祐經」（「似顔大全」より）

彼れの特色は小柄にして「眼のくり〳〵とし、甘たれ調子にて、何事も餘りにさらりとこなし、見物を引受けて場當りをせぬ、山のなき藝風なれば役者は上手でありし割分に評判は立たざりし」といふ。天保九年の「役者ひめ飾」に曰く、

お持前が小音にて殊に小兵ゆゑ、只器用のみにて兎角大手に狂言が參らぬは此の仁の疵……。

といへり。然れども其の才能は多方面にして、立役としては和事も武道をも兼ね、俊寛、鬼一、菅丞相、實盛、山田幸兵衞、外記左衞門、矢間重太郎、八百屋半兵衞、など其の當り藝たるのみならず、「勸進帳」の富樫、「弓張月」の阿蘇三郎、「玄冶店」の多左衞門など副人物に扮して名あり。又女方は老若ともに能くして「廿四孝」の勘助母、「五斗」の關女、「琴責」の阿古屋、「日高川」の清姬、「鏡山」の尾上とお初なども、彼れの得意とする所なりき。特に地藝のほかに所作事をも能くし、江戸に於て、四世歌右衞門の相手として、「靭猿」の太郎冠者、「三社祭」の善玉など好評を博し、又今も常磐津の曲として知られたる「將門」は彼れが其の瀧夜叉姬に扮して舞臺に上せたるものなりき。只敵役だけは彼れに適せざりしといふ。斯くの如く小兵たると共に藝風の淋しかりし爲め、餘り世間に歡迎せられず、特に其の晩年は四世彥三郎(龜藏)と共に老朽を以て目せられ、「龜藏は下手のかたまり、團藏は上手のかたまり」と言はれしが、四世歌右衞門もしくは五世宗十郎など、彼れを相手にすれば「心持のよき格別なり」とて喜びしとぞ。

小團次が和國橋の藤次を演ぜし折、優は神崎屋吾兵衛といふに扮し、樂なる役を更に樂にして「我は唐土稀代の甘輝」といふ處など少しの儲け氣もなくやりしより、小團次は「此の狂言は何處までも國姓爺をもちつてゐるのだから、あすこの見得などは一寸甘輝が髭を握る心で、羽織の紐でも持つてやつてくれたら好からうに」と云ひし事のあり。（「俳優百面相」）

此は晩年の事にして、一つは老朽の爲といひながら、一つは彼れの藝風に當込みのなかりし事を證するに足る。

彼れには養子あり、七世團藏の名は之れによりて繼がれ、團菊についで明治の名優と稱せられたり。其の談話に、養父の病氣と死狀とを語つて曰く

朝起きて、顔を洗ふ間に掃除をさせて膳部を運ばせ、壺から酒を出すのを氣持よく見ながら、それを自分で燗をして、歯がわるいから、肴は小さい金槌で碎いて、其れを食べながら手酌で酒を飲み、後生の爲め念佛を書くといふので「南」といふ一字を書くと、何うも行けないと筆を投じ、其れから花を引くといふので、巾着に金の入つたのを、サア此れを貸してやるから皆勝負しろ、と自分が櫻の札を一枚ポンと置いた途端に頓死をしてしまつた。これくらゐ往生際のよかつた人は珍らしい。

●●●●●●●

四世坂東彦三郎（音羽屋薪水、寛政十二―明治六）は市村座の帳元たりし福地茂兵衛の子にして、幼名を竹三郎といへり。文化九年（十三歳）、市村龜三郎と號して始めて舞臺に出で、三世彦三郎が退隱して三年後たる文化十三年、四世彦三郎の名を襲ぎたりき。此の後、坂東蓑助（後に四世三津五郎）及び三桝源之助（後に四世大五郎）と三人互ひに若立役として相頡頏せしが、文政十二年、名古屋へ赴き、翌天保元年（卅一歳）の春、

始めて大阪へ上りて中座に現はれ、此れより京阪の大小劇場をはじめとし、中國、東海道、紀伊等に巡業せり。天保六年五月、六年ぶりにして江戸の中村座へ歸りしが、安政三年正月（五十七歲）、彥三郞の名を養子竹三郞に讓り、自ら龜藏と稱し、同五年春、十四年ぶりにて子彥三郞と共に上阪し、文久元年春、江戸へ歸りたり。降つて明治四年三月、中村座にて一世一代として「鎌倉山」の佐野兵衞と所作事の始皇帝に扮し、同六年十一月死せりき。七十四歲。

彼れの藝風は三世菊五郞に似たりと言はれたれど、容貌振はず、音聲低く、且つ花に乏しくて淋しかりき。天保十一年の「役者金剛力」に曰く、

しらろゝ事に申分はなけれども、一人だつて見物をよぶやうに御なりなさるが第一にござるぞ。花がすくなくてはどうも成らぬ。

是れ彼れが弱點なりしなり。謂はゆる「龜藏は下手のかたまり、團藏は上手のかたまり」と冷評せられたる如く、人氣の薄かりし事に於て團藏と彼れとは同時代に於ける一好對をなせしが、而も彼れの長所は輕妙にありたり。

輕味は此の優の特色にして、「梅忠」に槌屋治右衞門を勤めし事ありしが、梅川の身受が濟みて歸りがけの白に「そんなら梅川－ちやアれえ　お梅さん、おうめでたうございます」など氣を利かしての輕さは無類にありき。（「俳優百面相」）

始めは色立役を本領とし、「双蝶々」の與五郞、「油屋」の太三郞、「菅原」の櫻丸、「一谷」の義經など當り藝

なりしが、晩年には武道事、實事をも兼ね、又「汐入堤」の彌市、「雪駄直し」の長五郎の如き世話事をも長所とし、三世菊五郎と同く怪談物の早變りをも能くせり。



四世彦三郎の「武智光秀」（「似顔大全」より）

彼れは負けぬ氣の男なりき。

若き時分、獸右衛門（四世）の向うへ貰りたれど、素より役者も適ふ事とて、常に不滿に堪えず、獸右衛門が先に鶴助と呼びしより、俄かに思付きて鶴助といへる弟子を拵へて、「鶴助々々」と呼捨にして腹いやせりといふ（同上）

安政四年、市村座の春狂言には「鼠小僧」の書卸にて、此の時、彼は鼠賊に扮したるが、何か癪に障りし事ありしと見え、舞臺の中へ「これで座頭が聞いてあきれらア、座頭ならば大かた廿日鼠の座頭だらう」と云合して小團次の高島米山實は鼠小僧を罵りしより、小團次も亦立腹して既に大事にならんとせしが、有名な顔役など立入り無事に和解したりと（同上）

文久元年、市村座にて「菅原」の白太夫を龜藏が勤む、櫻丸は羽左衛門（五世菊五郎）にて、「さぞ待ちつらん」と刀を杖に立身になり、

八重の田之助と愁嘆、看客ドッと受けるに、上手、障子家體の内にて、龜藏大きな聲にて「ざまあ見やがれ」といふ。後の「勿體なや冥加なや」の所にても同様なるに、二人は恐る〳〵龜藏の部屋へ行きしに、見向もせず。引違つて團藏が入來りしに、彼等は今日の賀の祝ひに踊りやがつたといひしを、二人は團藏より聞き、其の夜の十二時過ぎまで稽古して貰ひ、尚ほ尾上菊次郎を尋ねて敎へを受け、漸く曉がたに歸りたり。然るに其の日も龜藏の心に叶はぬにや前日の如く言罵りしが、三日、四日、五日目となり、思ふ所に符合せしにや、常に變らず機嫌よく、白太夫も思入も一倍心に入りしかば、見物喝釆して大入なりしと。（「歌舞伎新報」）

天保の末、淺草へ劇場の轉ぜし時、彦三郎、中村座の座頭なりしが、宅より路次を拔ければ直ぐ芝居の西の入口にて、樂屋口へ通るよりも便利なれば始終そこより出入せしを、轉座後は役者の顔さへ知らぬ留場のありしかは、彦三郎を見物と思ひて足にて留め、何處へ行くかと問うても、己が勝手だといふより、終に臺より飛下りて表の方へ突出す。彦三郎怒りて其のまゝ宅へ歸り、幕明きとなりても、樂屋へ入らず、一同困りきつて居るを、茶屋中島屋の金次といふ者、自分に任せよとて彦三郎の許に至り、表の口は客をはじめ茶屋出方のみの通行口なれば、其れを彼れ此れ言ふは、通らぬ所を通つたが誤まりなりと言ひまくられ、よし、おれが悪かつたと直に樂屋へ入りたり。（「手前味噌」）

四世坂東三津五郎（大和屋秀朝、享和二―文久三）は三世三津五郎の養子にして初め簑助といひき。文化十三年（十五歳）、子役より立役の部に入り、文政四年（二十歳）正月、養父と大阪の角座へ下り、次いで京都の北側芝居へ現はれしが、父に先だちて東歸し、翌五年正月は、河原崎座へ出でたり。是より幾もなく再び西上し、大阪の筑後と若太夫芝居、及び京都の因幡藥師芝居など小劇場に出勤して其の伎倆を磨き、文政十年冬に

至り、江戸へ歸りて市村座へ現はれき。彼れの名聲は此の時より高まりしが、恰も中村座へ四世歌右衞門（當時芝翫といふ。）が下りしかば、猶ほ三世三津五郎が三世歌右衞門と勢力を爭へると同じく、双方の競爭烈しく、三津五郎の側に「勝見連」などの後援者を生ずると共に、歌右衞門の側には「イ菱連」などの團體を組織し、此れより天保四年に歌右衞門が西上せしまで七年間、江戸の劇壇は兩優の驅逐によりて活氣を呈したりき。


四世三津五郎の「石川五右衞門」（「役者細見三葉草」より）

天保二年、養父三世三津五郎が死せしかば、翌三年（卅一歳）三月、市村座にて四世三津五郎の名を襲ぎ、且つ始めて座頭たり。次いで競爭者たりし歌右衞門か西上せしかば、聲望共に其の身に集まりしに、同五年の頃より中風を病み、歩行の自由を失ひ、舞臺も休みがちにて、俗に「よひ三津」と綽名さるゝに至れり。天保九年、身延山參詣より東海道を巡業し、冬は大阪の角座に現はれ「嫗小

一間まであるいて行き、足どりはもむなし、又後に黒んぼがついて居て、船に引かれて磯端をコロ〱の文句の間も始終介添ひ腰を以て人形つかふやうにして居

松」の俊寛に扮せしが、

れりといふ。此れより諸國を巡業せしが、天保十四年十一月、江戸へ歸りて市村座に出で、嘉永三年（四十九歳）十一月、市村座にて森田座の座主たる十一世勘彌の名を襲ぎたり。此の時、森田座は休業して河原崎座その代りに興行中なりしかば、尙ほ俳優を專らとして、次いで安政三年五月、河原崎座休業して森田座再興せらるゝに及び、座主たる傍ら俳優を兼ね、文久三年十一月に至りて死せりき。年六十二。

彼れは大がらにして、「細面の鼻隆く」、其の風采と容貌にすぐれて、和實と所作とを能くせしは養父の如くなりしが、而も實惡さへ兼ねたるは彼れよりも多方面なりしなり。特に生世話物に長じ、「音聲は低き方なりしも全然生世話の調子にて」、其の輕妙なる味ひは六世團藏もしくは四世彥三郎なども遙かに及ばず、「時代物に向ひても世話にならず、時代にて飽くまで」輕く言ひたりといふ。

「白不斷」に富十郎の信夫、粂三郎（後に半四郎）の宮城野にて、優は惣六に扮し、曾我物語を讀み聞かすに、全然で生世話で行きて、極る所の極りて居りしなぞ感服の外なく、「鏡に寫る二人が姿、似たりや似たりや花あやめ杜若」を世話にていひ、確かりしたる所、いふに言はれぬ味ひありき。（「俳優百面相」）

大久保彦左衛門に扮し、龜藏(四世彦三郎)の栗川内膳が殿樣を諫めかねて、兜を抱へて出て來る、衝立の蔭より内膳を呼びながら煙草盆を持つて出で、内膳の戻るよりその心腹を聞き、贊成して勸めやり、花道を行くを見送り白あるより、龜藏は早替りにて殿樣となり、後の襖を明け、「今こゝへ内膳が來りしか」と聞くに、「内膳は來たとも／＼」と答へ、殿が「何か言ひしか」といふに「言つたとも／＼」と答へて、内膳は忠臣なりと褒めそやすれば、殿は怒りて、「何が忠義だ、不忠者」と手荒く襖を閉めてゐるを見送り、「あれだもの」といひ、一人にて内膳を褒める白あり、幕切りに「三萬石を棒に振つて、いたづら者に突を揃へやうとは、栗川内膳」といひて、煙管の灰を一寸拂ひ、「いや話せる男だ」と時代狂言の白廻しにてあるべきを、世話句調にいひて車みを充分に持たしたるなど、聊越(九世團十郎)とは又行き方の違ひて旨きものと思ひたりき。(同上)

其の六世團藏及び四世彦三郎より年少なりしに拘はらず、一時は二人を凌駕せしに、癇疾の爲め其の才を伸ぶる事能はざりしは惜むべし。彼れは文筆の才をも有し、俳句などを詠せしのみならず、頗る機智と意匠に富みしが、錢つかひの荒かりし爲め、常に貧窮せりといふ。

或年、双蝶々の芝居の折、餅番に當りしかば、土俵を三階に作り、蠟燭その他のものをつかひて趣向をなし、いろ／＼綺麗な趣向をなしたれば、中役者連中は今日は豪氣だとて互に喜び居りしが、景物を渡す前になるや、次の方にて雨の音の鳴物を聞かせ、□の男が出ていろ／＼の飾物を外して持ち行くに、好き景物に當らんとせし人々は呆氣に取られて居る處へ、口上が出て「今日は雨でカケになりました」といひて、蕎麥の切手を一同へ配りたりといふ。(同上)

或時、下廻りの連中へ、吉原の御馳走をしたけれど、年を取りて隠居の身分にてあれば、身分相應に小塚原にて饗應すべしといふに、

下廻りは小塚原でも宜しと喜び居ると、軈て急しく一同に向ひ、今遊所場へ押出すといふ景氣をつけしが何時しか八町堀の聞き込む所となり、手先がお出になるといふ事ゆゑ、それでは靜かにして小塚原の勤めだけ取つて呉れと、竹柄杓を四百文（シヒヤク）に利かして配りしとか。

彼れが作にて數字がくしの歌あり。曰く、

霜夜。　八萬三千八　三六四　三三四九　一八二　四五十二　四六　百四億四萬。

桃。　五二七九　二八二　三九百　七九三三四　九六三四八　八七十　三千四萬。

彼れは又江戸子氣性の喧嘩早き男なりき。

魚河岸の者に何か惡感情の事あり、一つ大和屋を毒突いてやらんと、二三十人土間へ陣取りたるが、それを三津五郎に注進するものありたれば、三津五郎は幕の間より樂屋拵へにて顏を差出し、土間の連中をズツト見廻したるに、若い衆達は其の意外に驚きて調子の變りし樣子を見て取り、「見や、今日は大變雜魚がはいりやがつた、こゝへ一網打つたら好からう」といひて引込みたれば、若衆達は毒氣を拔かれ、何事もなかりし中に、口を利く者あり、無事に濟みしといふ。（同上）

中仙道にて雲介に強請られし折、附人が幾らか遣りしも承知せざりしより、「どうとも勝手にしろ」と傍の辻堂へ大の字形になりしかば、雲介共も驚きて安上りにて事濟みになりしと。

彼れの義弟坂東しうかは女方としての名優なりき。しうかの實子即ち五世三津五郎の名を襲ぎしも早く死して著名ならざりき。

五世澤村宗十郎（紀の國屋訥升、享和二―嘉永六）の父は江戸市村座の茶屋泉屋の僕にして、三河國西尾生れの濱崎長吉といひ、母は府内木下川村なる農家の女にして、さよといへり。彼れは幼時より四世宗十郎の門弟となり、藝名を源平といひき。

〔補〕八歳ばかりの時なりし、松平出羽守の御留守居衆、其頃有名の關取雷電爲右衞門を連れて淺草の年の市へ參られし時、源平を雷電の掌へ乘せ、群集の中を右の掌、左の掌とかはる〳〵葺屋町より淺草觀音へ參り、又歸りにも同じやうに乘せて歸りし事ありしと（「俳優百面相」）

師たりし四世宗十郎は和實を專らとして有望なる俳優なりしが、文化九年、僅に二十九歲にて夭折せしかば、源平は三世菊五郎に引取られ、「おれが預かつて役者にしてやる、紋所は重扇の中へ梅の花の丸を書いて中へいの字を付けてやらう」と云ひしを、親達はじめ悅びしに、十歲（十一歲か）の源平不承知にて、師匠の紋所へ疵をつける事、死んだ親方へ濟まぬといひしゆゑ、此の相談止めになりしといふ。非凡なる英氣は既に此の時より發せるなりき。文化十四年（十六歲）の冬、元服して源之助と改名し、市村座にて曾我十郎に扮し、淨瑠璃にせり上げにて出でたるも不評にして、當時一年の給金十八兩、一興行四十二日間三兩なりしを、春より二兩二分に減せられしといふ。これより專ら五世幸四郎の庇護を受けたりき。

■ 高麗藏（幸四郎の子、後に六世幸四郎）の守などとして高麗屋の食客となり、朝顔の模樣のある單物に茶に染めたる木綿の纏を着て冬を凌ぎたる事もあり、又夏は雲龍の幕を蚊屋にして、其の中へ市川壽美藏と二人寢たる故、奥の引けたる時、サア雲龍だ〳〵と寢床へ入りし事もありしといふ。（同上）

文政二年頃は奥州二本松あたりへ出稼し、同三年（十九歲）の春、河原崎座へ現れしが、四月、幸四郎及び五世半四郎と共に名古屋へ赴き、十一月は大阪の中座へ出でたり。

八百屋お七半四郎にて、自分は吉三を勤めけるに、何となく舞臺にても遠慮勝なりしに、杜若（半四郎）曰く、常は太夫さんでも、舞臺は八百屋の娘お七なり、お前は吉三になつてお七を下に見て呉れねば情が映らず、舞臺が增長して立者を立者と思はぬ樣でなければ出世は出來ぬなり、と小言を云はれたりと。訥升の噺なりし。（「積善翁筆記」）

此年の大晦日の夜、金三分にて年を越さんといひしに、其夜、心齋橋の道具屋にて右三分にて朱塗重箱を求め、元日は一文もなしとて一笑せり。此の重箱は後まで保存せしが、安政の震災に燒失せり。（同上）

此の時の一座は、囃子、大道具、下男等を合せて百二十八人なりしが、孰も同五年に東歸し、源之助だけは出世して歸れよとて、幸四郎及び半四郎より八百勝といふ興行師に預けられ、此れより近江美濃を巡業して、同年の冬は和歌山へ乘込みたりき。

■ 大晦日の夜、疲れて座敷に寢たるに、若い者早朝より起きて戸を明けなどせしを少しも知らず、天窓をつゝく者あるに目覺めて見れば、鷄三羽庭に下りてける。穩かなる天氣にて、枕元に昨夜の寢酒の杯ありしを幸ひ、一同を呼んで祝ひける。其年出世の數

十八度に及び、五十歳の時、此事を祝して三羽鶴の紋を拵ふ。(「積善翁筆記」)

文政七年(二十三歳)の夏、大阪の竹田座へ出で、お染の七役を勤めて大當りを取り、此れより小劇場にての人氣役者となれり。

隨 片岡市藏座頭にて興行のところ、敵討ばかりにて色氣なし、源之助を引上げるといふ相談整ひ、口上看版に、岩井半四郎に附添ひ見覺置候ゆゑ、源之助にお染の七役を相勤めさせ候間、半四郎面影と思召御見物を願ふといふ事にて出したり。(「俳優百面相」)

此の間に彼れが藝道に於ける佳話は多くあり。

「駒ヶ池」といふ狂言にて永井源三郎といふ役を勤めける。長白あつて如何にも工夫つかず。嵐三五郎曰く、此の狂言は元大璃寛の書卸にて、璃寛は調子の好き人ゆゑ一日の狂言なるたけ分らぬ様に書いて、大詰自分の長白にて、ア、成程と分る様にしてあるなり、されば璃寛の調子にて書きたる白を並の人が中々云へるものでなし、お前は江戸役者なれば、助高屋高助の白廻を聞き居るべし、助高屋風に碎きて云つて見るべしと敎へたり。此時の敎へに、總て自分の體調子の分限を考へて工夫すべし、是第一の事なりと云ひしが、後年に至り、中々此詞が役に立ちしとの物語なり。(「積善翁筆記」)

刈萱道心の山の段を勤めたり、石童丸は市川紅助(後に嵐雛助)といふ子役なりし。四人の坊主は其の頃、片岡市藏、嵐三五郎(後にでば三津)、市川桃太郎(後六世團藏)、大谷萬作(後に四世友右衛門)といふ立派な顏揃にて御馳走に出で居たり。立者だけに別段白も覺えず出で、初日に坊主が子役と相手になる處にて白が前後したるに、子役が後を向いて違つてゐるわいと叱りたり。四人の坊主は立派な立者なれど、各々吃驚りギヨッとしたり。樂屋へ這入つての四人の噺に、商賣にと恐ろしきものはなし、子役にも

られて大人が吃驚りするは各々役目を素略にせし故なり、これに凝りて自は氣を付ければならぬものなりと云ひし。（同上）

五代目團藏、京都芝居にて「忠臣藏」を出さんとするに、判官をする者なく、其頃竹田芝居にて源之助は人氣ある事故、之に勤めさせては如何といへるに、マア人が見てからといふ事にて、團藏の宅へ源之助連れられて行き、何分お賴み申しますといふを、團藏よく〳〵見て、お前が源之助か、エ、男振ちや、歌舞伎で辛抱さんせ、中芝居に居て自分の好きな事ばかりしてはいかん、行儀も覺えさんせ、と此時判官を勤めしが大芝居へ出る始めなり。（「俳優百面相」）

文政十二年（廿八歲）の春、河原崎座に俳優の不足なりし爲め、七世團十郎の聘を受けて、九年目に江戸へ歸りしが、幾くもなく同座類燒して、團十郎の上阪せしかば、獨り孤壘を守りて、天保元年二月は「千本櫻」の七役と法界坊、三月は「刈萱」、五月は「忠臣藏」の十一役を勤めて、特に「苅萱」は五十三日間興行の大入を取り、同座の破損せしを漸く普請する事の出來たれば、「木挽町まづ苅萱で屋根を葺き」といふ落首のありきといふ。此れより彼れが名聲は愈高まりしが、翌二年十一月、改名して訥升といひき。蓋し源之助の名義にて借財の嵩みしゆゑ、宗十郎代々の俳名たる訥子の號を襲がんとせしも、障りあつて果すを得ざりしかば、恩人幸四郎の俳名たる錦升の升の字を假りて訥升と稱せしなり。

天保六年二月、三座類燒して主だちし俳優は大かた名古屋もしくは京阪へ出稼ぎせしが、彼れも同じく大阪の中座に現はれたりき。然れども幾くもなく東へ歸りて、七月より元の森田座へ出で、天保十一年、

始めて座頭たり。次いで弘化元年（四十三歳）七月、市村座にて始めて五世宗十郎の名を襲ぎ、四世宗十郎三十三回忌追善として梅の由兵衛に扮しき。嘉永元年（四十七歳）十一月、中村座にて長十郎と改名し、更に嘉永五年九月、將軍家に長吉郎君出世の爲め、「長」の字を諱みて、市村座にて三世助高屋高助の名を襲ぎ、翌六年の秋、一世一代の興行を企てゝ其の事成らざりし爲め、名古屋へ赴き、橘町芝居に出勤せしうち膈を病みて十一月七日より舞臺を退き、十五日、終に歿したり。年五十二。



五世宗十郎の「鈴木主水」（「當時の錦繪」より）

彼れは大がらにて容姿にすぐれ、「男振上品にして、白廻しは粘あり、少し震へたり」といふ。此の先天的の條件が彼れの成功を早め、何等名門の出にあらずして、世間に歡迎せられし所以の一つなりしならん。而して彼れの本領とする所は宗十郎代々の其れと同じく和事にあり、「黄島

墳」の源之助、「伊達」の頼兼、「毛剃」の宗七、「平假名」の源太、「稲妻表紙」の山三、「戀飛脚」の忠兵衛、「五大力」の源五兵衛、「忠臣藏」の判官と勘平等は其の傑作と稱せらる。特に鈴木主水は始めて彼れに書下されしものにして、御家人の道樂者といふ役が其の柄にはまりて好かりきといふ。此のほか、武道事もしくは實事にて、苅萱道心、由良之助、菅丞相と源藏、春永、熊谷、勝元、佐野源左衛門、なども其の當り藝なりしが、松王丸の不評なりしを見れば、此の方面に於て萬能なりといふべからず。然れども別に彼れの特色は所作事に長ぜしのみならず、女方をも兼ねたる事にして、葛の葉、梅が枝（無間鐘）、錦祥女、袖萩、政岡、重の井、等のほか女方の敵役たる岩藤は最も其の得意の藝なりき。「相撲と芝居」に曰く、

品のある所はどうしてもお局様で、れと／＼した調子に底意地の惡く見えるのは大當りでした。

彼れは又「好き嫌ひのある役者」にして、「芝と山の手に贔屓」が多く、特に婦女に悦ばれたりといふ。此の事實は能く彼れが伎倆の長所と弱點とを證據だつるものといふべし。前に記せる如く、彼れは京都の大劇場へ引上げたる五世團藏が江戸へ下りし時の事なりき。

天保十亥年、河原崎座春狂言、一番目「薄雪」、二番目「國姓爺」に妻平、國俊、錦祥女を勤め、伊賀守、團九郎、和藤内に海老藏、兵衛、正宗、甘輝に團藏にて大入なりしが、ある日、狂言なかば、贔屓の女客夢中になりしものと見え、「紀の國屋さん、お前さんに限ります、團藏なんぞは居なくてもようございます」、とかなきり聲にて褒めしかば、舞臺の役者も見物も呆れて其棧敷をのみ見て居たり。團

藏是を聞て以ての外に憤り、私はモウ歸るといふに、樂屋一同驚きてさまぐ\に宥むれども中々承知せず。夫が爲め幕間非常に長くなりしゆゑ、見物は沸いて來る、其混雜一方ならず。漸く折合ひて次の幕を明しに、打出しは夜八ッ時（今の二時）頃なりしと。

（「俳優百面相」）

其の壯時に非常の人望ありしに拘はらず、晩年頓に寂れたるは、彼れが同時代の四世歌右衛門に比べて大器ならざりしを知るべし。然れども、流石に名優たるを失はざりし彼れに對しては、當時の泰斗たりし四世歌右衛門だも推賞する所ありき。

嘉永二酉年、市村座にて、成駒歌右衛門、上方行名殘狂言濟みて顔見世時節となりぬ。大阪は二の替よりの約束なれば、顔見世に體が遣へば遣へる處から、丁度市村座の座頭が長十郎と極りしゆゑ、もう一興な顔合せの狂言なしたら好からんとて、歌右衛門も長十郎も納まり、狂言は「鎌倉山」にて、歌右衛門が荒次郎と兵衛、長十郎が源左衛門と役割極りたり。然るに、中村座、河原崎座より故障出でゝオクラとなりぬ。その時、歌右衛門が、長十郎と一座でなければ「鎌倉山」は出來ぬ、殘念だ、といひしとぞ。（同上）

晩年には「小言多く、誰も息が合はぬ、彼れもいけぬといふ」ゆゑ、夫でも、近年心持よく勤めた事はありませんかと問ひけるに、さればなり、菊五郎（三世）石切の勘平の時、我等由良之助にて出でたり、幕の中頃まで菊五郎と小佐川常世にて見物をしづめ置きくれたる後へ出で、幕まで菊五郎と差向ひの所は、丸で由良に成りすまし、音羽屋も勘平になりすまし、幕になつて、アヽ面白かつた、と自分にも思ひし程ゆゑ、見物は尚の事なりし、此外どうも其役になれぬといひしとぞ。（同上）

此等眞の藝術家の言なり。

彼れは「生得まじめの人物にて、金毘羅神の大信者なり。されど風雅の道にも疎からず、茶湯俳諧を好み、松壽軒といへる俳士の門に入り」、家業の暇には吟咏を以て樂みとせりき。

子供はあまたありたれど、女子のみなりしが、或俳席にて「春駒やひとりにほしき男の子」といへる句をなしたる處へ、宅より力奴といふ門弟來り、俳席なれば遠慮して耳元によりて、只今お産がありました、又女か、イエ、今度は男の御子でございます、嘘をいへ、ほんとに男でございます、夫では春駒の句が前兆になりしと大悦び。一座の連中皆々も祝したりといふ。又或年、狂言相談中、これも或俳席にて、「春隣り柱に藁の光りかな」といふ句をなせしに、藁止の狂言を勸め來りしゆゑ直ぐ納まり、此狂言大入をなしたり。藁止といふは、「江戸名物錦繪始」といふ名題にて、永木の三津五郎（三世）書おろしの南與兵衛の狂言なりしとぞ。

宗十郎には二男四女あり、長男は後に二世訥升の名を襲ぎ、次男は三世田之助となり、共に明治の名優たりき。

以上五人のうち、團藏、彥三郎、三津五郎、及び宗十郎は同時に座頭として相頡頏せり。而も最も先輩たりし友右衛門だけは第二流にして彼等の下に殘されき。

●●●●●●三世團三十郎（尾張屋默山、文化二—明治三）は江戸の振付師藤間勘兵衛の子にして、四世歌右衛門と義兄弟たりき。幼名を勘五郎といひ、七世團十郎の門に入りて市川團吉といひ、天保六年（三十一歳）三月、五世八百藏の

名を襲ぎたり。同年、二世三十郎と伊勢より讃岐に赴き、以後も旅芝居を巡業せしと見え、同十一年の「役者金剛力」に、



三世三十郎の「日本駄右衛門」（「似顔大全」より）

〔頭取〕中村座、曾我に近江の小藤太、鎌澤五郎、島物語に有王丸、忠臣藏に若狭之助、石堂、何れも評よく、千崎彌五郎所々の旅芝居にて御修行ゆゑ、何役を致されても愚かはござりませぬ。〔芝居好〕助高屋の名前は大事な名で御座るぞ。あまり飛びあるかずと、江戸芝居に尻を落付けて、しんぼうなされい。

といへり。同十一年四月、市村座にて歌右衛門の兄弟子たる三十郎の名を始めて襲ぎ、是れより主に敵役に扮し、弘化五年の「役者豐年藏」には實惡の卷頭として「至上上吉」の位に進みたり。

嘉永六年（四十九歳）、久しぶりにて大阪の中座へ上りて「七變化」の所作、其れより筑後芝居へ轉じて、

「姫小松」の俊寛、「廿四孝」の謙信、翌安政元年春は、角座にて「國訛」の阿波十郎兵衛に扮せしが、彼の地にては餘り喝采せられず、次いで大五郎と共に名古屋より岡崎に下りたり。安政二年（五十一歳）春、江戸へ歸り、「伊勢音頭」に伯母お峯に扮し、同時に四世小團次が中村座にて同じ役に扮せしが、見功者は三十郎の方まされりと言へり。これより江戸に留まりて次第に劇壇の古老として重んぜられ、明治三年十二月十八日、六十六歳にして病歿し、三十郎の名は第二世の養子によりて襲がれたりき。

彼れの容貌は五世幸四郎に酷似し、幸四郎と同じく敵役を得意とせしが、又和實と所作事をも能くし、比較的に多方面なる伎倆を有せり。而も其の藝風さびしく且つ堅かりしかば、大阪に於ては餘りに歡迎せられず、江戸に於ても見巧者の間に喝采せられたるのみなりき。「俳優百面相」に曰く、

「十六夜清心」の大寺庄兵衛、「雪駄直し」の梶井主膳など、取分け喝采を得たり。此の大寺庄兵衛などは、「あれは和泉町（五世幸四郎）の型そつくりやつてなる事ならん、どうも私より一枚がた上の盜ばうだ」と、小團次は自分が清心の役にてありしかば、斯く言ひてたゝへたりと。

此れは又五代目菊五郎より聞きし話なるが、優が大寺庄兵衛の白廻しのうらに「ちつと違つた泥棒さ」といふ、此の「ちつと」といふ呼吸が頗る好かりしと。

小團次及び菊五郎が激賞せるによりて、其の伎倆の非凡なりしを知るべし。又曰く、

老生は「雪駄直し」の狂言書卸しに龜藏（四世彥三郎）の長五郎にて、此の優の梶井主膳を見、次ぎに小團次の長五郎の時、錢形平次が鶴藏（三世仲藏）、主膳が嵐雛助でありしが、何うも雛助は其の人でなく、團三とは大いなる相違にてありき。優が白の如何にも押が利きて、長五郎と名乘になる様子の段々圖太く變つて行きて、龜藏は大いにひるんだものなり。先づ龜藏の長五郎が「首を洗つて待つてゐやがれ」と片褄取つて尻をまくると、優の主膳は「長五郎、待て」といふ。長五郎が「なに、待て」といふので、きつぱりとなり、「今聞きやあ首を洗つて待つてゐろと、片褄取つて強おもて、そんな事にびりついて、金を遣らうといふぢやアねえか、……」といふ邊にてありき。

先輩たりし四世彥三郎の龜藏を壓服せんとす、畢竟、彼れは白廻しに長じたりしなり。又曰く、

「瀨川五京」とて入組みし江戸狂言にて、優は桐山撿挍といふ僞盲人に扮し、惡事が露顯しかゝり、赤手八丈の小袖着流しにて大小を挿し、目を開いての見得、「もう盲目ぢやゐられぬわい」といふ處は大層惡が利きて結構なりしと。

彼れは亦皮肉の人なりき。「俳優百面相」に曰く、

「四谷怪談」にて優の直助權兵衞を見しが、此の時は彥三郎のお岩、仁左衞門の伊右衞門といふ役割なりき。然るに生憎仁左衞門病氣にて、太夫元の弟子なる中村勝五郎とて、男振のよき一風變りし者が代り役をせしが、勝五郎の白に「皆おめへに仕込まれたんだ」、優が「いや、さうぢやあるめえ、寄席で覺えたんだらう」など言つて冷かせしが、此れは勝五郎が寄席へ出て芝居をしたる所より、當てこすりし文句にて、隨分ひどい事を言ふものかなと思ひたりき。

八世團十郎の「切られ與三」に赤間源左衞門を勤めしが、人氣役者の團十郎を惨殺にする役にて、見物よりの惡口甚しく、或る日、花

道際に居たる若者が爛醉ながら、三十郎引込みに頻りに悪口を吐きしゆゑ、「だまれ喧しい」と吾れ知らず言返すや否や、煙管で關三の脚を擲りしかば、此方も刀を拔いて相手に切付け、一方ならぬ騷ぎなりしが、十年たちて佛參がてら深川の寺町邊を通りしに、今は一組々頭に昇進せし件の若者に呼止められ、彼の時より酒を絶ちし御かげなりとの事に、それより互ひに親く交際する事となれりと。（五世菊五郎談話）

三●●●●●世中村仲藏（初鶴屋秀鶴、文化六―明治十九）の母は初世仲藏より系統を引ける志賀山流の踊の師匠にして、第十一世志賀山せいといへりき。本白銀町の玄米問屋稻田久兵衞の二女にして、初世仲藏の義妹たる九世志賀山せいの高弟なり。十世せいの名は九世の姪によりて襲がれしが、十世死するに及び推薦せられて十一世の名を襲ぎ、且つ十世せいの夫たりし村田市兵衞と結婚して仲藏を生めり。此の市兵衞は越中富山藩の足輕なりしが、中ごろ江戸に出で、淺草の旅店に番頭たり、仲藏が二歲の時、病死せしかば、是れより母の手ひとつに養はれて幼名を富太郎といひ、文化十三年、八歲にして、五世中村傳九郎（後に十二世中村勘三郎）の門に入り、中村鶴藏といへり。文政元年（十歲）十一月、始めて中村座の舞臺に現はる。同九年、中通りの位置に進み、同十二年、江戸の劇場の燒失せしかば、大阪へ上り、それより諸國を巡業し、天保九年（卅歲）三月、四世歌右衞門と共に中村座へ下り、翌十年九月、相中に進みたり。嘉永三年（四十二歲）正月、岐阜に赴きて七世團十郎と一座し、それより尾張三河を巡業せしが、同五年正月、大阪の四世

歌右衛門の許に投じ、中座へ現はれ、幾くもなく歌右衛門が死せしかば、其の遺骨を携へて江戸に歸り、中村座へ出でたり。此の時、一か年の給料百五十兩なりきといふ。



三世仲藏の「蝙蝠安」（「似顏大全」より）

翌嘉永六年（四十五歲）三月、同座にて八世團十郎の「切られ與三」に蝙蝠安を勤めて好評を博せり。此れ彼れが出世藝たりき。翌安政元年正月、同座にて名題に昇り、次いで慶應元年（五十七歲）十月、同座にて始めて仲藏の名を襲げり。これより次第に劇壇の古老として重んぜられしが、明治十九年十二月廿四日、七十八歲にして歿しき。

彼れは容貌甚だ揚らず、巨口厚唇なりしかば、幼時は「鰐口」又は「夜着の袖」と綽名せられしといふ。實母せいの嚴格なる訓練によりて舞踊に長じ、又先輩中村千代之助の薫陶によりて立廻りに堪能なりき。而も地藝に於ても、時代と世話と共に

可ならざるはなく、特に敵役とふけ役とを專らとせり。其の藝風の實に過ぎて華に乏しかりしかば、四十六歳にして始めて名題の地位に上り、彼れの飛躍は寧ろ其の晩年に屬する明治時代に於てなりき。彼れは幼時より讀書を好み、又文章に親み、俳句を能くし、「手前味噌」と題する自叙傳の大册あり、且つ「絶句帖」とて舞臺の滑稽を集めたる雜筆あり。俳優としては優れたる學識と趣味とを有せしだけに、彼れによりて創められたる脚本の新解釋と舞臺の新意匠とも亦尠からざりき。其の當り藝なりしといふ「切られ與三」の蝙蝠安に扮せし時の事なりき。

此の本讀の日、序幕を讀むからというて來る。序幕には己れの役はないとの事だ。迎ひの人「イヤ、八代目(團十郎)がお頼み申す事があるからお呼び申して來いと仰やりました」といふゆゑ、何事ならんと早速樂屋へ行く。………直ぐに瀬川如皐、濱の本讀にかゝる。此の幕に鼈甲職人金五郎といふ役、與三郎に一寸と異見をいふ役なり。高麗藏に振つてあれど、親方いふには、弟に異見なされるのは何うも見た目が惡いから、どうか之を一つお前して下さらぬかとの頼みなり。………異見の跡、濱見物に二人出で、われ火繩を持ち、東の歩みを廻り花道へ來る。舞臺上手より梅幸のお富、赤間の子分、大勢ほろ醉ひ機嫌にて出で、舞臺にて行き違ふ、互ひに見染めるもやう、梅幸の連中は皆々揚幕へ入る。團十郎跡見送り、見とれて居る所へ、上手より米五郎の丁稚、相藏と鰈を一匹取合ひ出で、團十郎に突當る。此のはずみに鰈を落す。砂にもぐりし思入にて探す。團十郎は米五郎を叱る。之にて相藏と探しながら下手へ逃込む。團十郎は向うへ氣を取られ、うつかり踏出す足の下より落ちた鰈刎上がる。鶴藏(仲藏自身)砂が目へはいりあはてる。團十郎も驚き小岩に躓き、其れへ腰をかけるが木のかしら、向うを見込むがキザミにて幕といふ仕組なり。しかるに、われ

不斗胸に浮みし工夫は、二人も出さず、向うを見送りながら上手へ行き、ぶら〳〵と又下手へ来る。われも向うを見ながら團十郎と行合ひ、上手へ行く時、團十郎の羽折を落とす。われフト心付き、羽折を持ち、「もし〳〵」と着せやうと、二度ほど追つかけると、團十郎夢中に下手へ行くを、漸々肩へかける。團十郎ふり向き顔を見合せ、につこり笑ひながら右の手にて左の肩の襟を持ち、引つたくり裏返しに肩へかけるが木のかしら、通らぬ袖を通すがキザミ、われは只呆れて見てゐるが幕といふのはいかゞといふ。親方ひどく氣に入り、幕は是れときまる。(「手前味噌」)

仲藏の訂正が原作の指定にまされるは萬々たり。されば此の型は今日まで舞臺に墨守せらる。又曰く、

此の夏休みに、靈岸島向井樣の御内、土屋へ行きしに、そこの内の船頭、わり蝙蝠安をひどく惡め……あの煙管を袖の内へ入れて煙草をついで居なさつたが、あれは何ぞ譯のある事かへと問ふ。われ、「別に子細もなけれど、あんな無心などよく遣るから、いやな素振だと思ふから、一寸眞似をして見たのさ」といふ。船頭それでは手が違ひます、あんな小ゆすり押借などをする奴は、師手にあへば墨がはいるが定法だ、跡ですると消したになつて咎を喰ふから、墨の入られえ先に、左の腕へ彫物をして置くのだ、[illegible]物は重に右へするものを、左にあると直ぐに墨を消す爲と思はるゝから、成るたけ手を出されえやうにするので、煙管を持つても袖の内で莨をつぎ、右へ持ちかへて呑むのだ」と言はれて、是れも一つの德を得たり。(同上)

彼れは未だ其の理由を知らざりしが、平素綿密なる觀察によりて、能く惡漢の特色を舞臺に扮し出せるなりき。又「忠臣藏」に山名次郎左衛門に扮せし時なりき。

いつものは嫌ゆゑ、麻上下に海老茶のシヾラ熨斗目、張り毛の鬘・意地のわるい親仁にて、お目付荒木十左衛門でやりたいが如何あら

んかと勘彌さんに相談す。勘彌さん暫く默つておられしが、「昔のやうに岩永の拵へはする人が無くなつたが、また親仁でした人はないから、屹度よからう、やつて見な。」と大乘りで言はるゝゆゑ、其れでやる。四段目、石堂御書を讀上げる間、床几を放れ坐り、刀をぬき兩手をつき、聽聞し、讀終ると元の如く床几にかゝり、判官「お盃の用意いたせ」といふ。われ「判官殿、おだまりなせえ、又しても酒々と、我々ども物見遊山には參らぬぞ、じてえ、この度、貴殿の科は縛り首にも仰付けらるべきの所、先祖の佐々木が舊功を思召され、格別の御沙汰をもつて切腹仰付けられしは有りがたき事と、早速用意もあるべき所なれど、平服にて上使への應對は上を輕蔑のなされ方、ア、ア聞こえた、こりや貴殿狂氣召されたか、いやさ、血迷ふたか、いづれ本氣の沙汰とは相見えぬわえ、第一、台命を蒙り、上使になつたる石堂殿へ近頃もつて失禮であらう」と白を直し、石堂はいる。われ「死骸取片付ける其の間、暫時一間で休息いたさう、誰か案内。」立かゝり、下手の由良之助の方へ來り、右の膝をつき、「由良之助、圖らざる凶變にてさぞ當惑であらう、相應の用事もあらば、此の方の屋敷まで、必らず心置かれな。」淨瑠璃「並み居る諸士に目禮し」と立ち　皆々を見て、「ア、皆愁傷ちやな」と、淨瑠璃「一間へこそは入りにけり」、由良之助を尻目にかけ、上手唐紙へ入る。此の思付よいと大評判なりし。(同上)

此の時、脇屋某といふ旗本の隱居が見物して、「山名は今まで形のなき事を、能く思付きたり」とて激賞せしが、「あれで、シヾラ熨斗目でないと尚よかつた、シヾラは五位以上で無ければ着られず、石堂は本文庄田下總守ゆゑ、着ても諸大夫以上だからまだしもなれど、山名は御目付荒木十左衞門の穴なれば、着られぬが本文なり」と敎へられ、仲藏も後悔したりといふ。彼の蝙蝠安と同じく、識者の眼より見ては缺點ありしも、彼れが寫實的なる新工夫に腐心して且つ其れに成功せるは、此等の逸事を以て例と

すべし。而も彼れは形の上の寫實に腐心せると共に、技藝の精神を沒却せざりき。彼れが得意の藝として屢演じたる「膝栗毛」の喜多八について、「己がした後に立派な達者衆もしたが、失禮ながら皆己より惡かつた」といひ、且つ其の理由を說いて曰く、

一體喜太八だの彌次だのといふ人は、見た所のをかしい人では決してないに違へねえが、する事には自然とトンチンカンがあつてをかしい事があるのなり。己はそれだから極眞面目な江戸つ子の拵へで、する事も極眞面目でしたが、すべてする事がをかしいから、能く人情にはまつて見物を笑はせたり。己れからをかしい事をして見せやうと思つては却つて見物の眼にはをかしくないものなり。（「歌舞伎新報」）

此の言、彼れが脚本を解釋する上に於て一隻眼を有する事を證するものにあらずして何ぞや。

彼れは天稟の才能に加ふるに熱心なる努力を以てして、終に能く下廻りより一代の名優となりしなり。

彼れよりは後輩ながら明治劇壇の名星たりし九世團十郎は彼れを揭げて曰く、

仲藏の名優なる事は人の知る所なるが、尤も人を驚かしめたるは水戸黃門記の書卸しの時、仲藏、明盲目景清の役を勤めたりしが、其の科のさながら明盲目の如く眞に迫れるさまは眞に絕妙といふの外なかりき。されども、之れにも增して驚きたるは、同人舞臺に後を向けて居る間、其の白を聞きたるのみにても、確に其の明盲目たる事十分に判りたり。是等は眞に至藝といふの外なし（「團洲百話」）

仲藏の先妻は母せいの弟子にしておせんといひしが、故ありて離別せり。後妻は師中村勘三郎の始め五

世傳九郎）の妹にして千鶴といひ、彼れの母せいに次いで志賀山流の家元を繼げる者なりき。

●●●●●●●十二世市村羽左衛門（立花屋家橘、文化九―嘉永四）は市村座々主たる十一世羽左衛門の二男なり。幼名を豐松といひ、文政元年（七歳）十一月、子役として初舞臺を蹈み、同時に改名して龜之助といへり。同四年十月、羽左衛門の名を繼ぎて市村座の座主たりしが、幼年なれば、親戚なる福地茂兵衛、後見及び帳元たりき。天保元年（十九歳）、元服して立役となり、これより座主たる傍ら、俳優としても次第に名聲を高めしが、嘉永四年二月、二男九郎右衛門（後に五世菊五郎）に座主を讓り、退隱して竹之丞と改め、同年八月廿日、四十歳にして病死せり。

彼れは丸顔にして愛嬌あり、上品にしてやさしき容貌なりしも、音聲は胴間聲にて調子あしかりしといふ。幼時、三津五郎に愛せられ、其の秋津島に一子國松に扮せしほどなりしかば、藝風も三津五郎を信仰し、賴兼、曾我十郎、鹽谷判官、秋津島、椀久、紙治、「忠臣藏」の十二段返し所作事など、其の當り藝たりき。而も所作事は四世歌右衛門に仕込まれて巧妙なりしといふ。

ある時、「女夫狐」の所作で、歌右衛門が又五郎狐に、羽左衛門は女形にて千枝狐なりしが、互ひに手を引合つて一所に二重舞臺へ飛上る所あり。舞臺の後から見て居るに、二人の足が二重の臺につくと、歌右衛門は兩足一緒に着きしも、羽左衛門は一足づゝちよいくと一度ついたりといふ。其れだけ藝の相違はありしとぞ。（「相撲と芝居」）

彼れが和事と實事に堪能なりしは左の逸話によりても知らる。

天保二年の秋、菊五郎(三世)、大阪より歸り、市村座にて「四谷怪談」の通し、中幕「千本櫻」の木の實と鮨屋を演じたり。羽左衞門は「四谷」にては小汐田又之丞、「千本櫻」にては彌助なりしが、菊五郎の言に、家橘め、何ぼ役が悪いといつて、又之丞をイヤ／＼勤めてゐやあがるから、親の目で見ても悪い、さうかと思ふと、鮨屋の彌助はよつぽど手に入つたのだ、夫だから御見物が彌助と三十郎の鮨左衞門を大層譽るが、おれの樣な者が何ともいはない、して見ると悪い方かな、と門弟に噺したり。(「俳優百面相」)



十二世羽左衞門の「櫻丸」(「似顔全大」より)

天保四年の秋、市村座にて「忠臣藏」を出せしことあり。師直には、此年大阪より下りたる五代目團藏(眼團)、判官に羽左衞門なりしが、眼團が師直の拵へにて出を俟つて居る時いふやう、此まで若い役の色々の判官に附合つたが、今度の判官はどことなしに位があつて上出來だ、大序はさしたることはないが、三段目で私の師直は小六玉以來よいのを手本にして自慢の師直ぢやが、判官に喰はれてしまうて居る、四段目もよう仕て居る、白廻しに動きがあつて、上方の若い者等に見せて

欲しいといひしかば、傍聽せし人、あれは永木の三津五郎（三世）の型をそつくり遣つて居るのですといへりと。是にても判官の出來の好かりしを知るべし。（同上）

彼れは日常の談話に拙なりき。

北新町にて敵討のありし時、羽左衛門、樂屋の者に向ひ、「おい、今日北新町で敵討があつたといふ話を知つて居るか」。「さうださうですが、敵を打つたものは何といふものです」。「さうさ、その敵を打つた者は、えい何だつけ」。「敵を打たれた奴は何といふ奴で。」「敵を打たれた奴は、えい何とか云つたつけ。吉や〳〵、お前、知つて居たつけ」。「夫は私ぢやあ御座いますまい」。「うゝ、お前ぢやあなかつた。秀だつけ。おい、秀をこゝへ呼んで呉んねえ」。「秀は今お使ひに參りまして居りません」。「むゝ、左樣か。ぢやあ仕方がねえ。まあ打たれた奴は彈正とでも云つて、打つた奴が釆女とか何とか云つたと左樣思ひねえ。」（同上）

彼れは豪奢にして酒を好み、家事に恬淡なりき。

大酒家にて毎夜酒宴あり。嘗て勝手には石の室を構へ、之に魚河岸より魚を取寄せ、始終生けてあり。酒は新川の鹿島より半架で始終送りつけて居り。出入の役者、狂言方、留場、其他のもの毎夜詰込む。日々の料理殊の外むづかしく、料理の仕方氣に入らぬ時は、女房（梅壽の娘おとわ）叱り付けられ、惡き時は椀盛などを打付けられし事あり。おとわが借金の言譯よりは、日々の料理の事に吐胸を突くといひし位なりき。（同上）

酒盛の中頃になりて一通寢入るを例とす。眼を覺せし時、宵に居りしものが座に缺けると不機嫌なる爲め、一同居合せて、十人宵にゐるとすれば、五人は殘るといふやうに順を立てたり。（同上）

天保九年三月、一番目「加賀騒動」、大切「雛祭」の所作事、がんどう返しにて「田舎源氏」になるといふ趣向なり。この雛の所作大當利きて、三日目より賣切となり、非常の大當なりき。本町の鹽瀬といふ金主、當振舞と名附け、本町の自宅へ役者作者を招きたり。客の間の正面に金屏風を建廻して、高座に花毛氈を敷詰め、左右には大花瓶に桃櫻山吹をさし、眞中の下に大いなる大銚子一對あり。五人の俳優を其上に座らせ、後の一段高き所に、重助、五瓶の二人を男雛女雛の代りに座らせたり。人並より醜男の兩人弱り返りてまじ〳〵して居たり……。主人一同に向ひて今度の大入を祝し、私も豐太閤になりし心地して、肴を名古屋より取寄せましたとの事に、銘々吸物椀の蓋を取り見れば、長手の小判が一枚、貞字小判が二枚入れあり。追々亂酒となり、例の毛氈を外して仕舞ひ、下を見れば酒樽ずつと並べあり。五瓶醉つて来しゆゑ、旦那、小判よりは酒の方が好きで御座いますといへば、羽左衛門、私も酒の方がよしとて前の小判を突返せり。九藏、訥升、氣を揉み、主人と共に言を揃へて納めさせたり。醉ひての上なれど、その無慾なるは大名のやうなりと人噂せり。(同上)

芝居休みの時、出入の者などに、翌日は遠方へいくから一所にいけといふ。晝頃、供揃が出来ると、羽左衛門は脚絆、麻裃といふ拵、臺所には鮪と大根とを煮たのが磨鉢に山盛になり居る。一同は遠方へ行くとの事ゆゑ、この惣菜で充分飯を食ひて出掛けると、一町半ばかり先の北新町の鮒新といふ鰻屋に入る。皆々腹が一杯ゆゑ殘念がりしとあり。其後、又遠方へゆくといふ觸込ありしゆゑ、今度は一同何も喰はずに出掛けると、堀の内へ参詣し、其歸り、四谷千葉慶昂といふ贔屓の醫者の所へ寄り、夜の四つ過に歸りしかば、皆々腹を減し目を眩まし困りしことあり。かやうなる悪いたづらな樂みし人なり。(同上)

或時、庭を一面の木賊原にし、兎を放して十五夜に一同を招き、酒宴の處へ兎が飛んで出る趣向なりき。當日、月はよく冴えしが、兎は隅へ塊まりて出です、折角の趣向メチャ〳〵になりて大笑なりきといふ。(同上)

箱庭の流行せし事あり。三疊敷許の箱庭を拵へ、山を築き、瀧を落し、流れの水に水車を仕掛けるといふ趣向なり。之に一面の金網をかけ、小鳥を中に離したり。二三日は面白かりしが、段々小鳥が糞をするため、山も岩も糞だらけになりし。（同上）

彼れが三世菊五郎の女を娶り、且つ菊五郎と不和を生ぜし事は既に第十三章に記せしが、此れより病氣に罹りて浮立たざりしかば、弘化四年の夏、妻に勸められて、義太夫語、幇間、藝者、狂言方、床山など四十餘人を伴ひ、成田に詣で、歸りに新宿にて義太夫の稽古をなし、夜は川遊びなどに十日あまり逗留せしが、一行中の坂東三八と同村助が過ちて溺死し、其の費用千二百餘兩を負擔せしのみならず、再び氣鬱症を發し、嘉永四年、大阪へ上るべき約束成り、半金千兩を受取りて、荷物一切を送りし後にて終に重態に陷り死去せるなり。

彼れの實子は五世菊五郎にして且つ女婿は五世彥三郎たり。共に明治の名優なりき。

四世市川小團次（高島屋米升、文化九―慶應二）は、江戸市村座の火繩賣榮藏の子にして榮太といひ、始め新場の本牧屋といふ仲買の丁稚なりしが、文政三年の冬、七世團十郎の門に入りて榮藏と改め、翌四年三月、中村座の「伊達模樣」に團十郎が不動の像に扮せるに、彼は兒千松の役にて初めて舞臺へ出でたり。實母の姦通して逃走せしより、父と共に名古屋に赴き、中山楯藏（後に二世市川男女藏）の周旋より、三世市川升藏（七世團十郎門下）の弟子となりて市川米藏といひ、松坂、古市、等の子供芝居へ出勤せしが、文政七年（十

三歳）、京都、和泉式部座の子供芝居へ出で、「忠臣藏」の由良之助、「四谷怪談」のお岩、「千本櫻」の狐忠信を勤めて好評を得たりき。天保三年（廿一歳）の春、始めて大阪の竹田座に現はれ、米十郎と改名し、此れより濱芝居にて修業を重ねしが、同十三年の秋、竹田座にて座頭の嵐璃珏が早野勘平を勤め、彼れは千崎彌五郎にて、三日目に腹痛の爲め厠に入りて登場すること後れ、璃珏に上草履にて蹴飛ばされて樂屋の梯子段より墜落したり。それより彼れは病氣と稱して同座を退きしに、翌十四年（三十三歳）、恰も七世團十郎が江戸を追はれて角座へ上りしかば、此れに一座して、「菅原」の宿禰太郎とお八重とに當りを取り、翌十五年の春、始めて小團次と改名して「石川染」の矢田平に扮せり。

當時、五世團藏も一座して、彼れと同列たらん事を恥ぢ、何となく不和なりしを、團十郎が周旋により漸く出勤する事となりしも、貴樣は勝手に働けとて、暗闘の場にて呼吸合はず、彼れは大に迷惑せしが、其の矢田平の立廻りの好評なるを、團藏が隙見して、始めて其の絶技に感じ、此の者必ず名優たるべしといへりといふ。次いで同年七月は璃珏と久しぶりに一座し、其の名古屋山三に、彼れは奴鹿藏にて先年の怨みある草履の當て白をいひ、大當りなりき。其の他、「忠臣藏」の師直、「源平躑躅」の小萩に喝采を博し、弘化三年（三十五歳）、同座にて「七變化」に雷の宙乘を演じて好評を得、同年冬、「腰越状」に五斗、翌四年春、「矢口渡」にお舟、「太功記」に蘭丸、「お染久松」に七役を勤め、此れを名殘として、京都の出雲座

に狐忠信に扮し、其の冬、三十六歳にして江戸へ歸り、市村座にて「七變化」の所作を演じたりき。以後、●●●●●舞臺上の經歷は、

嘉永元年（三十七歳）、「壽曾我」に五郎、植木屋六三、「毛剃」に茶屋亭主。三月、「稻妻表紙」に左京之助、奴岡平、吃又平、「千本櫻」に狐忠信、（三絃の胴ぬけ）。五月、「太功記」に光秀、「お染久松」にお染、土手のお六、お染母、在所娘およれ。六月、「艷文月」に因幡小僧、長五郎、駕かき佐渡七、「隅田川」に法界坊と野分姫。八月、「葬物語」に多賀大守と岩代瀧太。九月、「四谷怪談」にお岩、小平、與茂七。十一月、河原崎座、「花良門」に季武、快童丸、ちよこ平、蜘蛛の精、浮世戸平。

嘉永二年正月、「曾我鏡臺」に朝比奈、白井權八、小間物屋藤兵衞、伊場十藏。三月、「伊達競」に鹽澤丹三郎、豆腐屋丁稚、羽生屋金五郎、「勸進帳」（八世團十郎）に富樫。閏四月、「忠臣藏」に判官、小間物屋彌市、與茂七、勘平。八月、「一谷」に忠度、「玉屋出村」に鵜飼九十郎。十月、「繿縷錦」に左兵衞、「返魂香」に又平、「在原系圖」に大江音人。十一月、同座、「孝源氏」に牛若丸。

嘉永三年正月、中村座、「雁金曾我」に赤澤十內、鶴木主水、舞鶴屋傳三、秩父重忠。三月、「廿四孝」に横藏と八重垣姫、「助六」に意久。五月、「猿廻」に與次郎、「國姓爺」に和藤內母。七月、「菅原」に時平、白太夫、源藏、宿禰太郎。九月、「皿屋敷」に淺山將監、おきく、馬士胴八。十一月、同座、「音高木蘇山」に無三四、吉岡太郎左衞門、塚本狐。

嘉永四年五月、「木下曾我」に石川五右衞門。四月、「小栗外傳」に横山太郎、濵七、寢す兵衞。八月、「櫻荘子」（新作）に淺倉當吾と東雲。十一月、同座、「盛衰記」に平次と梅枝、「腰越狀」に五斗。

此の五右衞門の宙乘と釜入とに好評を博し、正月より三月まで七十八日間の興行を續け、新作の「佐倉

宗吾」、（淺倉當吾）も十月まで百四日間打續け、是れより彼れが名聲頓に揚りたりき。

嘉永五年正月、「倭入船」に安倍仲麿、石川五右衛門、玉藻前、三筋綱五郎。二月、「伊賀越」に政右衛門、武助、平作、丹右衛門。五月、「布引」に瀬尾、「娘扇」に喧嘩屋五郎兵衛。八月、「博多新織」に孝養法師。

嘉永六年正月、「三升伊達染」に仁木、累、道哲。三月、「鏡山」にお初、「浮名横櫛」に観音久次。九月、「八幡祭」に山崎與次兵衛、蔦の甚兵衛。十一月、「手向花川戸」に白柄十右衛門。

安政元年三月、河原崎座、「廓白浪」に忍惣太、「七變化」の所作。六月、「天下茶屋」に三郎右衛門と彌助。八月、「五十三驛」に天日坊、三作、手越の方、猫の精、直助權兵衛、清水冠者。十一月、同座、「忠臣藏」に師直と平右衛門。

安政二年三月、中村座、「闡若曾我」に稻葉小僧、松若、伊達新左衛門。五月、「夏祭」に團七、「伊勢音頭」に伯母お峯。七月、「[illegible]」に萬野矢四郎、一心太助、愛妾菊野、松臺四郎兵衛、七房七郎。八月、「自來也」に自來也と名越長兵衛、「盛衰記」に梅枝、「太功記」に光秀。十月、震災、それより名古屋へ赴く。

安政三年七月、市村座、「千本櫻」に狐忠信、知盛、權太。九月、「宇都谷峠」（新作）に文彌と提婆仁三。十一月、同座、「長田忠孝」に宗清、木葉天狗、八百屋お七。

安政四年正月、「鼠小紋」（新作）に鼠小僧次郎吉と俄師新玉。五月、「噂古市」に正直清兵衛。七月、「燈籠菊桐」（新作）に小猿七之助。九月、「菅原」に松王、覺壽、お八重。

安政五年三月、「江戸櫻」に清水清玄、黑手組助六、渡守惣太。五月、「假名手本」に由良之助、彌作、與茂七、[illegible]長兵衛、赤垣源藏。七月、「太功記」に久吉。「白石噺」に信夫、「時頼記」（馬士[illegible]）に馬士[illegible]六、佐野源左衛門、「比翼塚」に開心。十一月、同座、「柳島」新

作）に秋月一角と尾花屋才三郎。

此の年の春より、彼れは始めて座頭たりしが、三月に至り、嵐璃珏が森田座へ下りしかば、彼れは妙見の靈像を拜ませんとて璃珏を自宅へ招き、彼の古草履を示して、此れぞ吾が出世の守本尊にして、御身は吾れの恩人なり、今より此れを讓るゆゑ、御身の守本尊として三座の座頭になられよ、と辱めたるに璃珏は己が罪を謝し、悄然として歸りたりといふ。

安政六年二月、「小袖曾我」（新作）に近江小藤太、所化淸心後に鬼坊主淸吉、工藤祐經、「妹背山」に大判事、子太郎、鱶七。四月、「蝶々小紋」に山崎屋與四兵衛と信樂勘十郎、「記念海老胴」（七世團十郎追善）に杉木佐兵衛、「橋辨慶」に辨慶。七月、「小幡怪異」に小幡小平次、「勸進帳」に富樫。十月、同座、「忠臣藏」に師直、與一兵衛、由良之助、赤垣源藏。

萬延元年正月、「三人吉三」（新作）に和尚吉三と文里。三月、「再岩藤」に岩藤の靈と鳥井又助、「左彫物」に甚五郎。四月、「天下茶屋」に元右衛門と幸右衛門。七月、「八幡祭」に小天狗正作、蝙蝠安、觀音久次、縮屋新助。八月、劇場燒失。

文久元年二月、守田座、「相生源氏」に賴豪阿舍利 唐糸、竹川正忠。五月、「高根雲霧」に雲霧仁左衛門、因果物師小兵衛、大工喜三郎、山猫三次。八月、「櫻莊子後日」に朝倉當吾と光然和尚。十月、同座、「双波巴」に石川五右衛門。

文久二年正月、「白縫譚」に鳥山豐後と漁師浪六。三月、「蝶小蝶」に雪駄直長五郎と南方十次兵衛。五月、「二刀傳」に笠原隨意軒、「太功記」に光秀、「お染久松」に久作と、善六。八月、「村井長庵」（新作）に長庵と久八。十月、「吾妻八景」に秋月一學と神田與吉、「安達原」に貞任

文久三年二月、市村座、「一谷」に熊谷、「三題噺」(新作)に和國橋藤次。四月、「伊賀両刀」に荒木又右衛門。八月、「虎溪三笑」に喜太八、「小腕達引」(新作)に腕の喜三郎。十一月、同座、「忠臣藏」に本藏、平右衛門、九太夫。

元治元年二月、「俠御所染」(新作)に百合の方、御所五郎藏。四月、劇場燒失。八月、「一谷」に六彌太、「月出村」に九十郎、出村新兵衛。十一月、同座、「沖津白浪」に日本駄右衛門。



四世小團次の「朝倉當吾」(當時の錦繪より)

此の御所五郎藏が腹を切りて尺八を吹くといふ件あり。前年、彼れが作者河竹新七に其處許の作ならば如何ほど難澁の役にても見事に仕おほせて見すべしといひたるよりなりしが、其の蟲眞に迫りて喝采を博せしかば、新七も彼れに敬服せりといふ。

慶應元年正月、中村座、「曾我島臺」に[illegible]太郎、角屋宗治、船頭五平次。四月、「千種[illegible]子」に大日坊、倉賀野儀兵衛、道心西念。五月、「忠臣藏」に鳥取逸平、女定九郎、山名次郎左衛門。八月、「上總棉」(新作)に俊寛、百姓市兵衛。十月、同座、「石切」に大場、「腰越狀」に五斗、「大經師」に帶屋仁右衛門。

慶應二年二月、守田座、「扇曾我」（新作）に河津亡靈、工藤、鑄掛松。

此の興行中、其の筋より「近年世話狂言、人情を穿ち過ぎ、風俗にも拘はるゆゑ、以來は萬事濃くなく、色氣なども薄く、成るたけ人情に通せざるやうに致すべし」と劇場へ命せられしを、彼れは作者河竹新七より聞きて、色を變じ、「御同樣に最早世話物は勤めがたし、人情に通せぬやうにしろとは泣く子に地頭是非もなけれど、止むるより外に仕方なし」と嘆息せしが、翌三月十日より病氣の爲め舞臺を休み、五月八日、五十五歳にして死したりき。新七その日記に此の事を記して曰く、「全く病根は右の言渡しなり」と。即ち不當なる政令の干渉は一代の名優を殺したるなり。

小團次は體軀矮小にして容姿揚らず、音調爽ならずして卑しかりき。且つ餘りに技巧に走りて舞臺の小さくなる弊ありしといふ。然れども、動作輕くして最も活躍に長じ、怪談物の早變り、もしくは宙乘は最も其の得意とする所なりき。彼れが江戸へ下りし初め、法界坊の釣鐘ぬけ、五右衞門の葛籠ぬけ、又は狐忠信の見臺ぬけにて喝采を博せしが如きは其の適例なり。此れより先き弘化三年、彼れが大阪の角座にて演ぜし狐忠信の如何に技巧的なりしかを見よ。

> 靜の鼓に姿を現す時、此度は出語りの見臺から出られましたが、此跡（前年、若太夫座にて演ぜしもの）の三絃の胴から出た方が、きれいにあつた。……此の立廻りの間、階より下へそつたり、下より高い御殿へ飛上つたり、丸で骨なしぢや。……後、天井へ拔け、ま

だ長上下のあろうちに、御殿の左り手より狐の丸絎の帯にてちうな出で、引くりかへつて遙か下の平舞臺へ飛下りた所、見物一統に驚きました。……それより鼓をもらひ、惡僧ばら夜討に來るを言上し、衆徒二人を相手の立廻り、おもしろいこと〳〵。……此間にいつもの如く首筋へ鐵をかけると、つり上り、舞臺の下手より上手へはいると、直ぐに淨瑠璃床より出で、はすかひに向ふ棧敷へ凧の日の丸の行く如く、一散に宙渡り、又中程で留つたり、跡へ戻つたり、身のかるい事大當り〳〵。……早竹小團次と當氏を顰へるとよい。丸で輕業師ぢや。……（「役者五十三驛路」）

然れども斯くの如き輕業的なるケレン事のほか彼れの本領は別に存したりき。即ち、彼れは地藝をも能くし、又所作をも能くし、特に地藝に於ては、立役も女方も、實事も敵役も、善惡老少男女、行く所として可ならざるはなく、其の技藝の多方面なりしは實に驚嘆するより外なきなり。例へば、「菅原」に於て、松王と覺壽と八重とを同時に扮し、「廿四孝」に横藏と八重垣姫とを兼ねたる、「村井長庵」に於て長庵の如き惡漢に扮すると同時に、久八の如き忠僕に扮して二つながら成功せる、彼れが單に謂はゆる「業事師」なる者のみにあらざりしを知るに足る。

小團次が今一とつの功績は、五世幸四郎もしくは、三世菊五郎によりて發達したる謂はゆる「生世話」の藝風をして更に進歩せしめたる事なりき。歌舞伎劇といへば、其の服裝も、其の言語も、其の動作も、亦其の性格も、實在せる人世とは遙かに隔絶して、誇大的に且つ架空的に演出するを例となせるに拘はら

ず、彼れが其の世話物に於て扮せる人物は、從來の劇の如く、錦繡燦爛たる貴公子もしくは英雄にあらずして、半天着に三尺帶しめたる下流の人物なりき。即ち彼れは超人的にして且つ貴族的なりしに反し、此れは凡人的にして且つ平民的なりき。彼れは殿上の夢幻を描けるに反して、此れは市井の現實を寫せるなりき。されば、小團次の芝居は非美術的なり又は野卑にして見るに堪へずといふ非難は保守主義なる看客の間に喧しかりしに拘はらず、餘りに架空なる在來の劇に倦ける多數の世衆は、頻りに彼れが寫實の藝風を歡迎したりしなり。但し彼れが舊脚本にも此の種の寫實を試み、例へば「陣屋」の熊谷にて撫付鬘にて出でたる如き、寧ろ弊なりき。小團次は、只其の性格と服裝とに於て斯くの如くなりしのみならず、其の白廻しに於ても一機軸を出したりき。前に言へる如く、彼れは音調に劣れるに拘はらず、抑揚長短の妙は老優三世仲藏の激賞する所なりしなり。

村井長庵の狂言に、伊勢屋の番頭久八にて、御家定と早乘三次が強請に來て、金と見せて溫石の包みを出すのを、三次が白を言つてゐる間に一寸手で輕く目方を見て、「金か知らぬが溫石の、石によく似た金包、明けていつたら物がない、其の溫石より十兩で、お前の腹も溫まらう、ウンと言つてもよいではないか」といふ、この「金か知らぬが溫石の」といふ白廻しが滅法甘いと申しました。（「相撲と芝居」）

杵屋柳藏といふ長唄の師匠の弟で、極芝居好きの男の話に、小團次が下つた時に狐忠信をして、出語りの三味線の絃が切れると、直

ぐ胴が割れて此れから忠信が出るといふ仕掛、都が刀を拔いて斬掛ける處で、下手で忠信は左手を擴めて之を留め、また右手は狐手をして、「斬らるゝ覺え、背て」といつて右手の狐手に氣が付き、直ぐ手を擴げて、「なし」といふ所、滅法よいと賞めたのが、どうして樂屋へ知れたか、小團次から大きな菓子折を貰つて迷惑したといふ事です。（同上）

彼れが亦此等の新技藝を演出せんとするや、自ら新脚本に依らざるべからず。玆に於て彼れは當時の脚本家として天才たりし河竹默阿彌（新七）と結托し、其の作を頼りに場に上せたりき。即ち、彼れが當り藝たりし「佐倉宗吾」を始めとして、「宇都谷峠」「鼠小僧」「小猿七之助」「鬼坊主」「三人吉三」「村井長庵」「和國橋藤次」「腕の喜三郎」「御所五郎藏」「上總市兵衛」など、大かた默阿彌の筆に成り、且つ小團次によりて初めて演ぜられしものなり。斯くの如くして吾が歌舞伎劇は彼れによつて新しき生命が吹込められ、更に明治に至りて、五世菊五郎其の衣鉢を襲ぎて、愈寫實の藝風を擴張したりき。而も其の濫觴は始めて小團次に起れるに非ずして、五世幸四郎もしくは三世菊五郎以前に在りし事を忘るべからず。小團次が好んで下流の男子に扮せしは、前に言へる如く、彼れが藝風の寫實を主とするにもよるべけれど、半ばは又彼れが先天的の風采の貴族的人士に適せざりしにも因るならん。安政六年、彼れが由良之助に扮せし時、其の箝まり役に非ざるを以て此の役割を意外に感せしが、彼れ自身も口上看板に「仕初の仕納め」と斷り書きせりといふ。此れ其の品格に乏き事を自らも意識したればなるべし。又明治第一

の名優たりし九世團十郎は彼れを評して曰く、

故人小團次は中々の名人にて、われらも四五年行きて種々聞きたりしが、派の違ひし故一度も信仰せしことなく、隨て眞似をしたこともなし。一體の動作は「油がなくなつた」といへば「下皿をさらへたら善からう」といふやうな所で受けらるゝ方なりし。此の人世話もの尤も得意なりしが、時代物も又善かりし。（「團洲百話」）

四世仲藏も彼れを評して曰く、

菊五郎（三世）も小團次も腹は梅玉（三世歌右衞門）なり。然れども菊五郎は梅玉を腹ごもりにして、上へ菊五郎の衣がかゝり居るゆゑ、何とかして衣は剝げても梅玉で結構なり。小團次は上は梅玉で、腹が小團次ゆゑ、衣が剝げると小團次の正味が顯はれるゆゑ、見劣りがするなり。（「俳優百面相」）

此れも彼れが藝品の卑きを言ひしならん。而して團十郎の彼れを評せる如く、時代物、もしくは舊脚本にも其の當り藝多けれど、彼れが最も本領とする所は其の寫實式の新作にあり、特に前に擧げたるうち、鼠小僧、小猿七之助、鬼坊主、三人吉三、など盜賊の役が大部分を占めたりしかば、俗に彼れを「盜坊役者」といへりといふ。

彼れは燥急にして癇癖多かりき。

十二三歳にて竹田芝居に出勤中、「薄雪」の伊賀守を勤めしが、蔭腹を切りて浮足にて花道より出づるを、切落しより「浮人形」と冷評し、枝折戸を跨ぐとて、腹の痛手を押へひよろ〳〵とする時、やれどつこいしよ、と更に聲をかけて、見物一同どつと笑ひしかば、

腰に帯びたる本身の刀にて其の見物の頭へ切付け、其の者は京都の歴々へ出入する職人にて、威光を笠に掛合ひ込まれ、竹田の芝居へ出勤する事叶はずなりたり。(市川左團次談話)

細君が好人物ゆゑ無理が多りしが、二度目の妻となつて改まつた。人づきあひの好き人とて、容易に其の場では怒らず、蟲を殺して宅へ歸ると、圍爐裡の火を掬ひ、日常の潔癖は燒焦の痕もない疊の上へぱつと撒く。養母(小團次の後妻)は一向氣に留めず、さて翌日になると、小團次が祕藏の菊、何百兩といふ鉢植を片つ端から石の手水鉢に抛つけ、あれ又猫のいたづらな、と斯ういふ復讐の仕方ゆゑ、此奴は己より上手だと、以後は八つ當りをしなかつた。(同上)

其の頃の芝居の三立目(序幕)に大立者は出なかつた。其の三立目の稽古にすら、小團次は樂屋へ出て眺めて居ると自分の氣に喰はぬことがあれば、天窓の上へ手を重ねて、一時間でも二時間でも考込むのが癖だ。(同上)

稽古ですら斯の通り、「曾我」の敷皮の諫言の場に、並大名の小文治が睡氣を催し、兩手を延ばして欠伸をすると、突然小團次が飛掛つて背骨を蹴倒し、己の弟子で無法な奴だと舞臺で踏みにぢつた。小生(左團次)なども其の一人で、廿四の春、養子に貰はれ、一所に踊つて見ると小團次の顔が頗るまづい。家へ歸つてからの立腹が恐ろしい……。(同上)

「櫻餅」の狂言……歌右衛門(四世)のやつた梅若の殺しが小團次の氣に喰はぬ。例の二葉町(河竹默阿彌)を迎ひにやり、名案はあるまいかと一心不亂に問懸ける。二葉町も頻りに頸を拈つて、これは何うだと示す。處が氣に喰はぬ。修正してくれろと突出すと、さあ始まつたと閉口しながら書直す。幾度やつても同じだから、二葉町が腹を立て、何ういふ風に書いたら可いか、御注文を願ひませうと切込むと、調謔いつちやいけません、小生に巧い工風の付くものなら、作者は要らない筈だ、と言はれるので立腹しながら書直す。それが大當り。斯ういふ趣向なら立派に大入を取つて見せると、夢中になつて賞める。これが抑も小團次と師匠の氣の合

ふ原で、何役につけて聞も好い。これは二葉町が生前の直話であつて、いけれえ奴だと思つた時は、實にくやしかつた、と度々晒つて話された。（同上）

然れども彼れは外に對して謙讓なる人たりき。

宅は一丁目（猿若町）の役者新道、舞臺へ何時も一所に出かけたが、黒羽二重の羽織着流し、小生は紫縮緬の着物に緋博多の帶、絲柾の下駄といふ風で、兩人ながら大編笠を冠り、皮羽織の男四人を隨へ、其途中、小團次は誰に遇つても腰を下げ、一々挨拶する中に、下駄の歯入、紙屑拾ひなどにも叮嚀に辭義をなし、彼んなにせずとも可からうものをと吹出しながら歩いた事も度々あつた。（同上）

小團次が歌六の女を娶りて後に離別し、其の爲に八世仁左衛門と隙を生ぜる事は、既に仁左衛門の條にいへり。後妻お琴との間に實子なかりしが、別に庶子あり今の市川小團次これなり。又養子は明治の名優たりし市川左團次なりき。

●●●●●●八世市川團十郎（成田屋三升、文政六―安政五）は七世團十郎の長男なり。母は市村座の茶屋福地（菊屋）善兵衛の女にしてすみといへり。彼れは幼名を新之助といひ、文政八年（三歲）三月、海老藏と改め、同十年（五歲）十一月、中村座にて五世幸四郎の懷に入りて初舞臺を勤め、役名なしにて、泣出せし日は出でざりしといふ。同十二年十一月、河原崎座にて楠多門丸を勤め、天保三年（十歲）三月、市村座にて「助六」に外郎賣に扮し、始めて八世團十郎の名を襲ぎたり。

天保十四年（廿一歳）六月、河原崎座にて始めて「和藤内」と「鳴神上人」に扮して、是れより次第に名聲を揚げ、翌弘化元年三月、中村座にて「助六」の初役に大入を取りしが、是より先き天保十三年六月、實父七世團十郎は政府の忌諱に觸れて江戸を追放せられしに、彼れは父の爲めに藏前なる成田不動の出張所に日參し、且つ母に孝に、同胞に悌なりし事の町奉行へ聞え、弘化二年（廿三歳）五月、褒美として鳥目十貫文を賜はりたり。

圖 當時、町奉行より團十郎へ渡されし全文は左の如し。

猿若町一丁目專助地借
歌舞伎役者
團十郎

其方儀、幼年より柔和にて父母の心に背く事なく、藝道に心掛、去る寅年、父海老藏御仕置に相成、其方若年故、父より給金高も相劣り、其上借財厄介多、難儀之暮方に有之處、給金受取候度毎に初穗と號し除き置、其頃海老藏住居致下總國幡谷村へ相贈り、同人大阪表へ旅行致候節も、旅用其外厚く手當致し、好の品等は勿論、書狀を以機嫌を聞、返書之趣、委細母すみへ申聞、安心爲致、同年八月、同人病氣之砌には水をあび、成田不動へ平癒之祈願致、藥灸治食事拵等者自分取扱、看病も行屆、其後歌舞伎役者共一統寄宿町へ引移るに付、其方儀當時の住居へ罷越、麤服麤食を心掛候に付、不勝手之樣子を母心配致候間、市中賃業に致故、困窮には無之趣に申成置、芝居興行中狂言の幕間も有之時は宅へ立歸り、母之機嫌を聞、妹ます、弟新之助とも相睦に身分片付致遣はし、幼年之

弟幸藏ないたはり養育致、姉みつをも睦敷厄介致置、其方父之弟子團兵衛者七十歳に相成、養ふ者も無之に付引取置、病中より死後に至る迄厚く世話致遣、其方年頃にも相成候間妻を迎ひ候樣申進め候者も有之候得共、母之氣に入らぬ節は心遣の趣相斷り、四年程以前より毎朝精進茶斷にて、成田村新勝寺旅宿之不動へ日参致、父之身分無事之歸國を祈り、母之心をも慰め、大體孝心を盡し、兄弟の世話行屆候段奇特之儀に付、爲褒美鳥目十貫文取らせ遣す。

右者北町御本行鍋島内匠頭殿於御役所被仰渡候。

俳優にして斯くの如き恩典に浴する殆ど稀有の事たり。是れより世間の同情は益彼れが一身に集まりて、同年七月、河原崎座にて「裏表忠臣藏」に若狹之助、勘平、平右衛門、宅兵衛、定九郎、石堂、九月、「義士銘々傳」に力彌、宅兵衛、里見佐五右衛門、平右衛門、與茂七、大鷲文吾、「花川戸」に白藤源太、十一月、同座、「繪本太當記」に大膳、新作、左馬之助、直信、光秀、「千兩幟」に鐵が嶽、いづれも好評嘖々たりき。以後の舞臺上の經歷は、

弘化三年正月、「比翼稻妻」に白井權八と不破伴左衛門。四月、「兜軍記」に岩永。五月、「梅松櫻」に時平、宿禰太郎、櫻丸、「鮫鞘」に丹波屋治郎三と野田新十郎。七月、「龜山染」に赤堀水右衛門、縮屋清七、鳥井彌十郎、「姿八景」に乙姫、浦島、景清、俳諧師、冷水賣、節季候、心猿、晒女、石橋。八月「扇屋」に熊谷。九月、「松竹梅」に小姓吉三郎、五尺染五郎、長谷部十右衛門、冠者太郎。十一月、中村座「三升桝」に足利義照、武田勝頼、染物師鯉吉、長尾三郎、鬼小島彌太郎、髮結綱五郎、「關扉」に關兵衛。

弘化四年正月、「曾我初夢」に五郎、河津、久次、石川五右衛門、丁稚久松、本町丸綱五郎、景清。二月、「薄雪」と「女清玄」に園部左衛門、

團九郎、松若丸、山田三郎、軍助、「勝負附」に秋津島。六月、「忠臣列撰」に判官、勘平、文吾、義平、與茂七。八月、「五人男」に雷庄九郎、非人新米の三、野田角左衛門、勝間右京之助、「兜軍記」に重忠。十月、「布引」に行綱、「花川戸」に源太と傳兵衛。十一月、市村座、「源家八代」に義平、鰕ざこの十、盛久、重盛。

嘉永元年(廿六歳)正月、「壽曾我」に十郎、鬼王、小猿七之助、「博多禱」に毛剃九右衛門、「六歌仙」に業平。三月、「稲妻帖」に不破、狩野元信、下男與四郎、勝元、「千本櫻」に義經、「瓢簪」に久吉と金吾、秀家、「お染久松」に鬼門喜兵衛と船頭三吉。六月、「艶文月」に眉與兵衛、「隅田川」に軍助と左馬之助(押戻し)。八月、「蕣物語」に大學之助、阿蘇次郎、立場太平次。九月、「四谷聞書」に民谷伊右衛門と大高源吾、「姫山姥」に坂田藏人。十一月、河原崎座、「東都内裡」に頼光、鬼同丸、貞光、山姥。

嘉永二年正月、「曾我競臺」に十郎、五郎、笹野權三、茜足袋屋半七。三月、「伊達競」に頼兼、谷藏、其角、勝元、彈正、八汐、男之助、「勸進帳」に辨慶。

これを江戸の名殘りとして大阪に上りぬ。蓋し八年間他郷に漂泊せる父を訪はん爲めなりしかば、幾くもなくして東へ歸りて再び河原崎座へ現れたり。

八月、「一谷」に六彌太と重衡、十八番の「景清」、「月出村」に玉屋新兵衛。十月、「阿漕浦」に次郎藏、「遠纏錦」に武右衛門。十一月、同座、「孝源氏」に教經と金賣橘次、「曾根崎心中」に德兵衛。

此の興行中なる十一月廿六日、父七世團十郎は文恭公七回忌の法事につき追放を赦免せられたり。

嘉永三年正月、中村座、「鴈金曾我」に文七、十郎、祐經。三月、「武田勝凱」に勝頼、小山田太郎、直江山城、「廓花見時」に花川戸助六。

五月、「大内鑑」に保名、「堀川」に傳兵衞、「國姓爺」に和藤内。七月、「菅原」に道眞、松王、長谷雄。九月、「金菊月」に淺山鐵山と三平、「小三金五郎」に金五郎と曾根崎主膳。十一月、市村座、「碁太平記」に陸奧之助、谷五郎、松江藏人、惣六、「足柄山」に山姥。

嘉永四年正月、「世嗣曾我」に祐經と仁田四郎、「黄八丈」に才三。二月、「裏表忠臣藏」に桃井、平右衞門、勘平、與茂七、義平、「明烏」に時次郎。五月、「振袖妹背」に小姓吉三、土左衞門傳吉、五郎、「鳴神」に鳴神上人、「皐月夜話」に三浦之助。（舞臺に急病を發し、人事不省となりしが幾くもなく全快す）。九月、「源氏模様」（新作）に光氏、不動明王、糸屋佐七、梅津掃部、夏目四郎三郎。十一月、同座、「瀧白旗」に夜叉太郎、船頭伊之助、熊井太郎、梶原源太、「青柳硯」に頼風。

嘉永五年正月、河原崎座、「鴈金染」に清水清玄、北條義時、燗酒賣六助、鴈金文七、「板額」（璃寛）に淺利與市。閏二月、「妹背山」に求女と鱶七、「蓮生物語」に主馬判官、「双蝶々」に濡髪。四月、「山椒太夫」に元吉要之助と小野宮實頼、「伊勢音頭」に貢。七月、「兒雷也」（新作）と「大内鑑」に保名とよかん平。九月、「一谷」に熊谷、「安達原」に義家、「勸進帳」に富樫。十一月、同座、「忠臣藏」に重太郎、勘平、小間物屋彌七。

此の「板額」に與市の役は不服なりしかば、廿五兩の菓子料を持參して懇願せしに、彼れは其の金を斥けて、富本の淨瑠璃を出すといふ條件にて承諾したり。蓋し富本節の廢れしを嘆きて、豐前太夫が曾て彼れに屢乞ふ所ありたればなり。

嘉永六年三月、中村座、「鏡山」に岩藤、「浮名横櫛」（新作）に與三郎と爲朝。九月、「八幡祭」に南與兵衞、十次兵衞、幻蝶五郎、黄金餅三五郎、橋本治部右衞門。十一月、同座、「幡隨長兵衞」に寺西閑心、「扇屋」に熊谷、「關扉」に關兵衞。

安政元年（卅二歳）三月、市村座、「三十三間堂」に横曾根平太郎、「盛衰記」に梶原源太、「五大力」に源五兵衛。五月、「忠臣藏」に師直・勘平、文吾、與茂七、由良之助、「六歌仙」に黑主。

此の時、彼れは先輩中村富十郎と一座せしが、其の老功を恃んで傲慢なるを憎み、互ひに相執つて下らざりき。

狂言は「三十三間堂」に太夫（富十郎）がお柳、八代目が平太郎を勤む。稽古中よりいろ〳〵の間違ありしが、八代目、太夫に負けまい、と毎日三階一同へ八百善の料理を取寄せ、みんなに、さあ、おまんまを喰べなさい、上方ぜい六は大方箸喇り、おかずは昆布に油揚ぐらゐきやア喰ふめえ、翌日は鰻をおごるぜ、さあ〳〵喰ひな〳〵、と太夫へ當付けが言ひたいばかりに奢る事毎日なり。また大丸より反物を取寄せて中通りに買つてやつたりする。（「歌舞伎新報」）

富十郎付きにて大阪より下りし床の太夫、富太夫、三味線富七、八代目の所へ近付に來る。其のなりを見ると太夫の仕著せ、木綿小紋の紋付を著てゐるゆゑ、在合せたる銘仙縞一反づゝ出して、是れは始めて遇ひました、何分お願ひ申すよ、これは是れでも絹で織つたものだから木綿より高いよ、その氣で、とは皮肉の言ひかたなり。（同上）

始めて三階で稽古の時、富十郎は江戸の勝手を知らねば、男衆が上方流義に遊從ぞめの大座布團を作者の左り、立をやまの居所へ敷きたり。頓て八代目團十郎來て座頭の所へ坐らうとして、難波の太夫が座布團を見て、おい〳〵、誰がこんな物を敷きやがつた、江戸ぢやアこんな事はねえ、退けろ〳〵と大喝一聲。頭取餘儀なく退けしが、遙かかなたへ立つて居た梅幸（四世菊五郎）を見て、太夫さん、爰へ〳〵と言つて立をやまの居所へ坐らせ、富十郎を客座へ下げたり。一同手に汗を握る。（同上）

五月の「忠臣藏」の時なりき。己が實弟猿藏をして小浪を勤めしむべく戸無瀬に扮すべき富十郎に交渉せしに、野郎頭の猿藏を女方にするは不服なりとて富十郎が聽かざりしかば、止むを得ず二段目を省きしが、或る日、暴風にて興行中止の命令あり、

中幕の「重の井」に、富十郎三吉の子役をつかまひて愁嘆中、打出せとの急御達しに、難波の太夫、是非なく見物へ向つて、風烈につき先づ今日はこれぎりといふ。只でさへ仲の惡き八代目團十郎が聞かず、他人に切口上を言はれては座頭はあつてなきが如し、市川代々へすまぬから暇をくれと言出し、此の時の帳元澤田屋和助クリ〳〵坊主になつて、全體鼻でもそいで持つて參られば成りませんが、鼻をそぐと物の匂ひがしませんから、此の髷で御勘辨と詫びる。是れでやう〳〵事濟みになり。（同上）

當時、團十郎の父は前年の「勸進帳」に辨慶に扮せしより再び西上して、名古屋に至りしかば、此の夏休みの間に同地へ赴き、父と一座して、「切られ與三郎」、「扇屋熊谷」、「對面」の十郎、次いで「忠臣藏」の四役、「琴責」の重忠に扮して喝采を博したり。此れより父と共に大阪に上りて、中座へ出勤すべき筈なりしに、八月六日の朝、島の内なる旅宿に於て自殺したりき。歳三十二。

團十郎の死因について、普く世に信ぜらるゝは、父と其の愛妾おためとが彼れを抑留して名古屋の劇場に出でさせ、尚ほこれに饜かずして、大阪の舞臺へも登らせんとせしより、小心なりし彼れは既に十一月までの出勤の契約を結びたる江戸市村座の太夫元に食言せる事を耻ぢて自殺せしといふ説なり。蓋し其れも一つの原因なりしならん。又彼れが實母たりし父の正妻を措きて、妾のおためが擅まに家政を左右したる不滿も彼れをして絶望的の死に至らしめたる多少の動機なりしならん。然れども彼れが性癖の

餘りに神經過敏に、而も燥急にして物に激し易かりしこと其の主なる原因たりしなるべし。古老のいふ所によれば、その前にも彼れが自殺を企てたる事たび／＼なりしといひ、常に多病にして、現に嘉永四年に舞臺にて急病を發して倒れたるが如き、或ひは既に精神に異狀ありしかとも思はる。現に彼れが遺筆のうちに、「黄の泉を渡らんとせし夢さめければ」と題して、「雨露に濡返りたるふくべかな」といふ句を詠めるを見れば、彼が腦中には始終「死」といふ事の宿れるならんか。



八世團十郎の「早野勘平」(死繪より)

團十郎は容姿と風采とにすぐれたりき「俳優百面相」に曰く、

勝れて美男子といふにもあれど、所謂いきで、高等で上品で色氣は溢れる程あれども當味でなく、澄まして居れども愛嬌があり、女子の好くのは勿論ながら男子の好くのも非常…

なりきといふ。音聲は掠ばしつて高く七代目及び九代目に等しく、市川家代々特有の名調子にして、口上などは辯舌爽か」なりき。而して「藝風は時代にも世話にもよく、切られ與三、時次郎、光氏、兒雷也、そのほか大當りの狂言少なから」ず。只彼れが僅かに三十歳前後にして、遽か

に先輩たる老優を凌ぎ、能く一代に聲名を專らにせしは、其の伎倆よりも、寧ろ其の人格により、特に其の名家の嫡流なりしといふ事、及び其の孝悌を表旌せられしといふ事が、彼れの人氣を引立てしは無論なれど、要するに夭折せる天才たりしなり。「俳優百面相」は又曰く、

何分廿二歳にて死去せしなれば、上手といふ評は附し難からんと思ひ居りしが、其の後多くの俳優を見來るに、團洲（九世團十郎）、梅幸（五世菊五郎）、故彦三郎（五世）、田之助（三世）を除き、其他の俳優が廿二歳前後の腕前と照らし合せて一人として及ぶ者なし。されば慥に上手にてありしなり。

前に舉げたる當り狂言を見るに、與三郎と時次郎とは世話にして、光氏と兒雷也とは時代なり。以て彼れが藝の多方面なりしを知ると共に、此の四つとも新作脚本たり、又以て、彼れが創造の才に富めるを知るべし。茲に彼れが當り藝の最たる「切られ與三郎」の型を揭げて、其の面影の一斑を示さん。

源氏店の場、鶴藏（三世仲藏）の蝙蝠安と肩を比べて花道よりの出、藍微塵の袷、じや形の單物、白木の三尺帶をねぢつて〆め、七分三分の尻端折、五木鼻緒の冷飯草履、大豆の手拭にて、例の頰冠りといふ拵へ。素より形のよき人ゆゑ、意氣でいやみがなく、凄みの中に色氣があつて、先づ見物をうならせたり。（着物の前をだらしもなく明けたり、叺煙草入を三尺に挾むなどいふ事はせず。）安に呼込まれて内に入り、下手に座りて安とお富との掛合せりふの中にお富をよく〳〵見て、それだと氣のつく思入も仰山でなく、夫より膝を崩して體を振かへ、入口の方へ向て居る間もなく、安が一分で歸らうといふを得心せず、釜の下の灰までも、おれが物にせにやアならねえ、といふせりふで安と入替り、立身で少し前へかゞむやうにして、おかみさん、お富さん、いやさお富、おぬしやアお

れを見忘れたか、とて膝を突き、頬冠りの折目をほぐして、與三郎だ、手拭を取り、久しぶりで逢つたなア、と着物の裾を後へはなり、足をやり違へ、膝を立て、其の上へ兩手を掛ての見得、また見物がうなりたり。夫より、しがねえ戀の情が仇、とよく人の知つて居る長ぜりふよろしく、其中の格子造りの圍ひ者ア、といふせりふは正本に格子造りの圍ひ女は、とありしを、圍ひ女では時代なりとていひ替しなりといふ。とり分け、夫だからおらアあの時いやだと言つたぜ、そうしたら手めえ何と言つた、逢つてくれにやア死ぬといつたぜ、言つたらう〳〵、夫みやな、夫だからおいらア逢つたのだ、といふあたりのせりふ廻し、色氣があつて凄みがあつて、實に露の垂れるやうでありし。お富が言譯すれど聞入れず、安と二人で藤八と責める件より、其譯は私が話して聞かせませう、と多左衛門が入來りしを見ての思入よろしく、多左衛門が話を聞き、膝を直して、お禮はお禮で申しやす、が夫から氣に喰はえ、と掛合のせりふ手強く、私はお富がと言掛るを側からお富が、兄さん、兄さんで御座んすわいなア、と冠せかけて言ふのを聞て、なに兄だ、兄のやうなもの〻やう者され、といふ所、見物大受なりし。多左衛門より金を貰ひ、心を殘して表へ出で、花道にて安に別れ、路次口に入り、後、奥より出で藤八をおて、お富がいふ事を聞いて心とけ、夫より藤八を葛籠へ打込み、其上へ腰を掛て、よかつたねえ(其頃の流行ことば)と猪口を差出し、お富に酌をさせる幕切まで、初中後とも大當りなりし。此の與三郎の役、汐干見初めより妾宅の場のうぶな若旦那のはまる役者は、源氏店のゆすりの場がはまらず、源氏店の場のはまる役者は前の場がはまらず、夫ゆゑ與三郎は八代目に限るといはんも過賞にはあらざるべし。(董坡翁筆記)

彼れが人氣と愛嬌とは殆ど豫想外なりき。

猿若町一丁目に住みける時、借金乞ひ四五人詰めかけ、代り者を相手に掛合ひこめども埒明かぬゆゑ、今日は是非とも親方に面會せねば歸らぬと、追々野暮になりかゝりたるに、最早樂屋入の時刻となりしかば、八代目は泰然として黑の紋付の衣服にて、奥より

出で來り、皆樣、よく御出でなされました、眞に申譯がござりません、私は樂屋へ參らればなりませぬ、どうか御免を蒙ります、御ゆるりと、と叮嚀に挨拶をなせしに、金貸一同今までとは打つて變り、へい御自由に御出でなさいましと辭義をなしける、……後にて一同顏見合せ、どうも親方に逢つては一言もないと笑つて歸り行きし事ありといふ。（「俳優百面相」）

嘉永三戌年の春、市川海老藏（七世團十郎）江戸構ひ御赦免となり、江戸へ歸り着きし日、まづ芝の水茶屋へ到着、此處へ八代目はじめ親族門弟其他出迎ひとして到りしに、一町ばかりの間、見物人の山をなしたり。海老藏二階より此の景氣を見て大得意にて居たりしに、八代目は何か都合のありし事と見え、先きへ歸り行きたりしが、是を見ると黑山の如き見物も皆散り〳〵に歸り行きて、果は一人も殘る者なかりしかば、扨はおれを見に來たのではなく、八代目を見に來たのであつたかと、呆れて言葉もなかりしといふ。（同上）

同、中村座、春芝居に助六を勤めしが、幕切に助六が入る天水桶の水が一德利金一分づゝにて注文多く、一桶の水にては足らぬほど賣れ、掛りの者はじめ思はぬ金儲けをせし者多し。是れは贔屓の女連が白粉を溶き顏へ塗る爲に買求めしなりと。（同上）

菊五郎（三世）が葬式の時、寺は今戸の廣樂寺なるが、猿若町より出棺して送り戻りに、女連の見物、三升が乘りし駕籠を取卷き、中には引戸に縋りて覗くを左右より其手を拂ひ〳〵するのにて困りしといへり。（「歌舞伎新報」）

斯くの如き生前の人氣は又彼れが死後まで影響を與へたりき。

江戸にて八代目の後、七代目が盲人にて杖を失ひしさま、又おためが猿を廻す處など、色々の一枚繪草紙三百餘通出で、淺草福井町尾張屋といふ羽子板卸賣にては二百兩の損、飯田町の同業、これは百兩餘り損したり。これは八代目の羽子板最も賣れるゆゑ、秋より仕入れ置きし故なり。又吳服屋にては、三枡格子、六彌太染の類、大流行にて澤山仕入れしが、これも損となれり。（「戲場年表」）

尙ほ團十郎が死せる翌年の春、淺草奥山にて彼れが一代記を生人形の見世物にして、百廿日の間興行し、其の利益千五百兩ありきといふ。

彼れは一代の人氣を負へる愛嬌役者たりしこと斯くの如くなりしも、一面に於て強愎自尊にして、往々他を凌ぐの行爲ありし事、彼の先輩富十郎に對する態度によりても明かなるが、要するに彼れは活達なる江戸つ子なりしと共に、梨園場裡の貴公子たりしなり。

富十郎と中の惡き時、三階で稽古の最中へ、或る大名の御殿女中が二人來るとの知らせ、八代目には大事の客ゆゑ、お茶、菓子といふ支度のうち、三階の板の間へつけてあるカンテラへは皆駄蠟がつけてあるゆゑ、いゝ蠟燭を買つて來いといふ。カンテラ長八、へい／＼と猶豫して居るのが癇に障り、紙入の中より古金襴の金入を取るより早く、金が無けりや是れで買て來やアがれ、と此の拍子に、二分金、一分額、十兩二分散亂する。中通りの頭觀右衛門、長八を搔除けて其の金を拾ひ、二貫ばかりの蠟燭を買つて來て、跡は懷中へ。(同上)

弘化三年年、河原崎座夏芝居に八景の所作事を勤めしが、何分大暑にて見物も薄かりしに、水賣の淨瑠璃の文句に「日向の[illegible]じやあるめえし、水でも呑みやアな、おいてくれ」といふ處、清元の喜代太夫非常にまづく、樂屋にて皆々眞似なして「おいてくれ／＼」と流行詞になつたるが、八代目立腹して「おいてくれ／＼」といふ芝居は今日限り千秋樂にするがよからうと表へ言出したり。まだ日もある事ゆゑ、誰が言出したと吟味の末、中通りの者五人遠慮と申す事になりたり。翌日は將軍家淺草筋へ御成にて芝居休なりしが、猿若町三丁目の新道に叶新平といへる中通りの家へ、前のしくじり連中集まり、やけ酒盛りを始め居たりしに、團三郎とい

へる者、今日は新作の祭文を語らんとて、「八代龍王逆鱗まし〱〱、皆が芝居へテラレン〱、」と語り興じ居たるに、此の隣家は丁子風呂といへる薬湯なり。折柄八代目入浴に來り、翌日、坂野老人、五人の詫に行きたるに、思ひのほか機嫌よく、一同を連れて行き事済となり、引下らんとせし時、八代目、三助さんと一寸と留め、金一分紙に包み水引をかけたるを出し、是は昨日の祭文の褒美です、薬湯で聞いて居ましたが面白うございました、と言はれ流石の三助赤面なしたり。ちよつと見ると氣むづかしきやうなれど、中々捌けたる洒落者にて、世間では女嫌ひと噂せしが、內實は大違ひなりしと坂野老人の話なり。（「俳優百面相」）

彼れは書畫を能くし、且つ俳句にも長じたりき。而も彼れの句には大かた畫趣多し。

蝶舞ふや絲立のうろさき繩手道。
魚刎れて涼しき月や水の隈。
枯れし野に一筋青し隅田川。
冬木立鳥居の赤き入日かな。
山畑は鎧の袖か五月あめ。

など佳吟ならん。又小唄の「梶の枕」と「露は尾花」とは彼れがすさびなりといふ。

第廿一章　京阪の女方

中山南枝――其の得意。――四世山下金作――彼れが傑作。――八世嵐三右衞門。――三世中村大吉。――三世藤川友吉

二世富十郎に次いで、京阪の劇壇に女方の先輩たりし者を中山南枝（大黒屋、寛政二―安政五）とす。彼れは二世文七の

門弟にして幼名を中山虎吉といひ、更に吾妻と改め、子供芝居の立者たりき。後に一德と改めて濱芝居へ現はれしが、暫く一枝といひ、濱芝居の大立者たり。文政十一年（三十九歳）秋、筑後座にて「朝顔日記」の深雪に扮し、此れを名殘として、道頓堀の大劇場たる角座へ出で、同時に一德に復名せしが、天保二年、南枝と改め、次いで同九年、師文七の俳名に因みて、よしをといひたり。最初は、稀に大芝居へ出づるほか、從前の通り濱芝居か又は地方の興行を專らとし、名聲も甚だ振はざりしが、天保の半ば頃より頓に重んぜられ、殊に富十郎死後は京阪の女方中に一品と稱せられたり。弘化元年、更に舊名の南枝に復し、安政四年三月、大阪の中座にて「行平磯馴松」の松風亡靈に扮せしを一世一代として舞臺を退き、戎橋の傍に鬢附油の店を開きしが、翌五年七月廿三日、六十九歳にて歿しき。

彼れは容貌甚だ揚らざりしも技藝にすぐれ、最も其の得意とせるはウブなる娘方、もしく情事纏綿たる色女方にして、「廿四孝」の八重垣姫、「八犬傳」の伏姫、「銘々傳」のお蘭、「朝顔日記」の深雪、「合法」の玉手御前、「小栗」の照手、「妹背山」のお三輪、「忠臣藏」のお輕、「玉藻前」の夕しで、「菅原」の八重、「八百屋」のお七、「油屋」のお染、「桂川」のお半、等は孰れも當り藝なり。特にお蘭は富十郎と競爭的に演じて對等といふ評を得たりき。遊女の役も無論彼れが長所にして、「盛衰記」の梅枝、「曾根崎」のお初、「紙治」の小春、「戀飛脚」のお妻、「伊賀越」の瀨川、「伊勢音頭」のおこん、等も同く當り藝なりしが、藝者の役は彼れ

に適せず、例へば「五大力」の菊野の如きは不評なりきといふ。蓋し彼れの本領は濃艶にありしだけ、洒脱にして淡泊なるべき此の種の妓女に扮する事は彼れに不得意なりしならん。又「大經師」のおさん、「桂川」のお絹、「大岡政談」の莨屋喜八女房、「佐倉曙」の藤五郎女房の如く世話女房の役にも當りを取り、「先代萩」の政岡、「小栗」の淺香の如き武家女房をも能くせしが、「彥山」のお園に扮せし時、「女の情に深いゆゑ斯かる役はぢやらつ」きて惡しゝと評せられ、又「兒淵」の淀町御前に、「女の情に深く、口跡和き」爲め不評なりしを見れば、女武道の捌き役には不適當なりしなり。又嘉永元年、大阪の中座にて「矢數譽」の彌生姬に扮せし時、姬君としては蓮葉なりしと言はれたり。されば娘役にても貴族的に品位の高きものは同じく彼れの壇場に非ざりしならん。彼れは又所作事にも堪能にして、富十郎についでの上手と言はれ、「關扉」の小町姬と墨染は屢舞臺に繰返したりき。

彼れは久しく濱芝居に在りしだけ、大劇場に現はれし當初は藝卑しく、且つ動き過ぎると貶せられき。文政十三年、大阪の中座にて「薄雪」の娘小みつに扮せし、其の嫉妬の場を評して

隨分よう出來たが、餘り動き過ぎて、間には稲子の飛ぶやうに飛びあるく事が折々見えました。（「役者始開曆」）

と言はれ、天保二巳年、筑後座に於ける「拳褌」の高尾を評して

とかくほひ〲飛びあるくのが癖でござります。（「役者武勇問答」）

と言はれたり。又娘方にて振袖を顔へ當てる癖ありしといふ。晩年には此等の弊を脱せしのみか、六十餘歳にして尚ほ能く少女に扮し、老いて益若くなると屢評判記に賞揚せられたり。尚ほ「秋葉權現」の牙のお才に扮せし時、「やさしくて盗人に見えぬ」と言はれたる如き、蓋し彼れの特色を知るべし。彼れは一德時代より晩年に至るまで、常に衣裳に美麗なるものを用ひ、群優のうちに抽んでゝ看客の眼を引きたり。又藝道に苦心して新機軸を出せし事尠からず、「合法」の玉手御前にて、腹切の間に、何時もは篠笛の合方なるべきを、天王寺の近邊といふ心にて樂の笛を吹かせたる如き、「信仰記」の侍從にて、住吉の場に癪を起す仕草に、刀の柄で胸を押したるが如き、其の例の一二なりき。

●●●●●●四世山下金作（天王寺屋里虹、寛政三―安政五）は三世三五郎の門人にして嵐三藏といひ、後に三勝と改めき。子供芝居に出でゝ喝采を博し、終に濱芝居の大立者となりしが、天保四年（四十三歳）十一月、四世山下金作と改めて江戸河原崎座へ下りたり。蓋し三世金作の名は二世の養子たりし芳澤崎太郎によりて襲がれしを、更に彼れは其の後を承けしなり。翌五年三月、「忠臣藏」におらん、七月、中村座にて「一谷」（四世歌右衛門の熊谷）に相模に扮し好評なりしが、幾くもなく西歸して、同六年春、大阪の角座と中座とに出で、次いで京都の北側芝居にて「合邦辻」に玉手御前に扮したり。此れより二世富十郎に隨ひて、大劇場に留まり、同七年五月、堀江芝居にて四世歌右衛門の五斗に女房關女を勤めて喝采を博せり。安政五年冬、京

都の東芝居へ出勤せしが、病氣の爲め休業して大阪へ歸り、十二月廿三日、終に六十八歳にして歿しき。
金作は小劇場の出身なりしだけ、技藝に老練なりし代りに、寧ろ其の榮達は遲かりき。彼れは格幅よく特に音調と白廻しとに妙を得たり。「お染久松」の油屋後家にてお染に向ひ、「ひよんな事してたもつたが、出來た事ならしよことが無い」といふ白廻しの氣の變りさ實に好く、是を靭太夫が眞似て其の義太夫節に語れりといふ。而も音調のあまりに朗かなりし爲め愁嘆に適せず、又色氣に乏かりしかば、娘役や遊女に扮するよりも年増役を得意とし、最も世話女房に適したりき。彼れが熊谷の妻相模に扮して餘りに蓮葉なりと非難され、鹽谷判官の妻顔世に扮して、仲居の如しと評せられたるは、要するに貴族的の品格に缺けたればなり。



四世金作の「お國御前」（「似顔大全」より）

前に言へる油屋後家の如き、「八百屋お七」の下女

お杉の如き「夏祭」の一寸徳兵衛女房お辰、「岩井風呂」のお梶、「五斗」の閨女、「双蝶々」のお關、此等最も彼れが傑作として稱せられたり。

彼れは四十歳に至るまで濱芝居に於て其の伎倆を練磨したるのみならず、藝道について頗る熱心なりき。彼の油屋後家に扮せし時、

久作が久松へ異見の間、暖簾口にも聞いて居るなり。見物も氣がつかぬにジツと聞いて居て、後にて出で、様子はみんな聞きましたといふ。或人感心なりと褒むるに、金作曰く、其のキツカケまで部屋に居つても別に用もなき故に、同じくは暖簾の蔭にて異見を聞いて居ると、後に心よく白のいへるものなり、是等が親切といふものにて、萬事此心にて勤めれば情は乗らぬと云ひし。（積善翁筆記）

彼れは又世話女房の秘訣を説いて曰く、

世話女房役が能ければ夫を尻に敷くものにて、こゝを宜しく用心して夫より利口にならぬやう如何にも親切に勤むべし、夫を馬鹿にするはこれ世話女房第一に愼むべきものなり。（同上）

といひきとぞ。

●●●●●●八世嵐三右衛門（吉田屋眠子、文化二―安政六）は四世小六の門人にして雛三郎といへり。文政六年（十九歳）、始めて三右衛門の名を襲ぎ、同時に娘方より若女方に進み、嘉永の始めより次第に好評を得たりしが、多病にして屢舞臺を休み、安政六年三月十六日、終に五十五歳にして歿しき。

彼れは幼時より大劇場に在りて、先輩の名優を目撃せしかば、其の造詣するところ淺からず、娘方も年増役も、遊女も世話女房も、殆ど可ならざるはなく、京阪の女方としては、中山南枝の次位なりと稱せられしが、惜いかな健康のすぐれざりし爲め、未だ其の驥足を伸ばすに至らずして死せり。



三世大吉の「腰元房野」（「似顔大全」より）

三世中村大吉（鳴尾屋巴丈、文化十二―安政四）は始め、五世瀬川菊之丞の弟子にして瀬川多門といひ、江戸の劇場に在りしが、後に澤村富三郎と改め、嘉永元年（三十四歳）秋、大阪の中座に初舞臺を勤め、同年冬、二世中村富十郎の養子となり、始めて大吉と改めたり。安政二年（四十一歳）七月、江戸の河原崎座へ下りしが、震災の爲め劇場の壞れしかば、同年冬、三世吉三郎と共に名古屋に赴き、これより三河伊勢を巡業して、翌三年七月、大阪の中座に現はれ、同四年冬、京都の南芝居にて「染分總」

に娘お梅、「奴請状」に東吉女房お菊に扮せしが、十一月十一日、お梅にて鳥部山の場を演じ、樂屋に入りて鬘をも脱がぬうち絶命し、舞臺の場面と同じ鳥部山の本壽寺に葬れり。年四十四。



三世友吉の「お六」(「似顔大全」より)

彼れは器量よく、稍肥滿したりといふ。而して其の藝風は養父富十郎を模倣せしも、缺點は白痴しの早口にて蓮葉なりしと、女性の情に乏しく、愁嘆の表情に拙く、舞臺に身の入らぬやう見えたる事なりき。又彼れは女方を專門とせる傍ら立役にも指を染め、嘉永三年冬、京都の北側芝居にて「三略卷」に牛若に扮し、安政三年、名古屋にて苅萱道心を勤めしが、孰れも不評に了りたりき。

●●●●●●●

三世藤川友吉（江戸屋花友―――）は二世友吉の實子にして、始め勝三郎といひ、天保九年、父の俳名を襲ぎて花友と改め、弘化三年、江戸の市村座へ下りたり。嘉永五年正月、大阪の中座へ出で、始めて友吉といひ、四

世歌右衞門の貝屋善吉にお六を勤め、三月は角座にて璃珏の佐倉當吾に女房お三に扮したり。文久三年、更に荻野扇女と改名せしが、其の廢せし時を詳かにせず。

彼れは「器量よし口上よし」、然れども體軀の肥滿せしと、音調の下品なりしと、又舞臺に不忠實にして愁嘆の表情に拙く、且つ女性の情に乏かりしを缺點とす。されば奥方、姫君、及び娘役は其の得意とする所にあらずして、蓮葉なる女、もしくは男らしき婦人に扮して成功したり。「忠臣藏」のかほよ、「一谷」の相模などの不評にして、「彥山」のお園、「忠臣藏」の一文字屋女房などが好評なりしは此の故なりき。然れども、如何なる種類の役と雖も之に扮するを拒ます、其の放膽なりし事と、且つ衣裳に美を盡せし事とは彼れが一特色なりき。

第廿二章　江戸の女方

五世瀨川菊之丞。――六世岩井半四郎。――七世岩井半四郎――皮肉と警句。――四世尾上菊五郎――其の當り藝。――坂東しうか――其の當り藝――活達と豪放。――尾上菊次郎――俳優としての經歷――其の當り藝――彼れが日常。――五世市川門之助。

此の時代に於て江戸の女方の先輩なりし者を五世瀨川菊之丞（濱村屋路考、享和二―天保三）とす。四世菊之丞の女婿に

して俗に「多門路考」といひしが、僅に三十一歳にして死したり。彼れは大男にして、足袋は十一文甲高を穿き、不愛敬にて物いひも荒々しく、長谷川町に住して樂屋へ行く道、床屋大勢居並びし前を通りても挨拶なく、人に遇ふも顔を反けて通る程ゆゑ、近邊の者憎みしが、舞臺には此の人ほどの愛敬又あるべからず、日頃憎みし者も思はず濱村屋と褒めざるは無かりしといふ。又彼れが「車引」の梅王に扮せし時、

臺詞のうち「時平どんの」と稽古中は常に徒な口の中にて胡魔化せしは、尻といふ辭のあればなりしが、初日になりて、「時平どんの御面相」と言ひはぐせしかば、看客は濱村屋なりとて賞しける。（積善翁筆記）



五世菊之丞の「藝者小萬」（「似顔大全」より）

惜いかな夭折して、其の功績多く傳はらざりき。菊之丞に次いで聲望ありし者は五世半四郎の二子たる、六世半四郎及び七世半四郎なりしが、此の二優も壽久しからず、吾が劇壇に多大なる貢獻をなすに

至らざりき。

六世岩井半四郎（大和屋梅我、寛十一―天保七）は其の長男にして幼名を久次郎といひ、文化元年（六歳）、子役として初舞臺を勤め、同五年、娘方に入り、同九年（十四歳）十一月、名題に上りて粂三郎と改名せり。文政十二年（三十一歳）四月、江戸の劇場類燒せしかば五世幸四郎と共に伊勢に赴き、それより京都に上り、十一月、北側芝居の顔見世に出で、白井權八と幡隨長兵衛女房を勤め、翌春、歸府したり。天保三年（三十四歳）十一月、中村座にて半四郎の名を襲ぎしも、此の頃より多病にして舞臺も休み勝にて、同七年三月、七世團十郎と一座して森田座に出勤の中途より退き、同年四月八日に歿せり。年三十八。



六世半四郎の「白井權八」（死繪より）

彼れは容貌と風姿と音調とに於て共にすぐれたりといふ。而して彼れの藝は早熟なりき。文化十三年、

十八歳にして既に「八百屋」お七、「菅原」のお八重と覺壽を勤め、文政二年には、廿一歳にして「先代萩」の累と政岡とを勤めたり。これ一つは當時の劇壇に勢力ありし實父の後援にも因るべけれど異數なりと言ふべきなり。彼れが終生の當り藝は大かたは父祖傳來のものにして、若女方にはお七、お三輪、お初、等最も著しく、其の他、お駒、お三輪、累、女清玄、女鳴神、等あり。例の四世及び五世半四郎が得意とせし傳法なる女性も亦彼れが得意とする所にして、「三日月おせん」は其の一例たり。又早熟なりしだけに、其の若くして死せるに拘はらず、前に記せし覺壽もしくは政岡のほか、「妹背山」の定香、「反魂香」の又平女房、「姫小松」のお安の如き老けたる女方を勤めて夙に好評を得たりき。しかのみならず、父祖と同く男性に扮する事をも能くし、權八、牛若丸、五郎、賴兼、敦盛、等の當り藝ありき。只その壽の永からざりしため、自家獨創の妙を發揮するに至らざりしは惜むべし。

七世岩井半四郎（大和屋紫若、文化元―弘化二）は五世半四郎の第二子にして、六世半四郎の實子たり。幼名を松之助といひ、文化三年（三歳）十一月、中村座にて初舞臺を勤め、同十一年、娘方に加へられ、文政三年（十七歳）夏、父半四郎と共に名古屋へ赴き、次いで上阪して、中座に父の代りにお染の七役を勤めたり。同五年（十九歳）十一月、江戸へ歸り、森田座にて紫若と改名し、降つて天保二年（廿八歳）冬、大阪へ上りしが、同六年四月、東歸し、弘化元年（四十一歳）三月、中村座にて半四郎の名を襲ぎ、八世團十郎が初役の「助六」に揚

卷、父五世半四郎が一世一代のお初に自ら尾上に扮したり。然るに此の前より病を獲て次第に休みがちとなり、終に翌二年四月一日に歿せり。年四十二。



七世半四郎の「重の井」（「似顔大全」より）

彼れは「眼付最もよかりき。青ぶくれといふ顔なれど、舞臺にては如何にも美しく花やかなる女形にて、背は高く、體も隨分大きかりしが、娘形も傾城も藝者も世話女房も皆よき風なりき。調子は高き方、臺辭廻し極めて上手にて音聲に露を含みし如き所ありき」といふ。彼れも舍兄と同じく父祖の藝風を襲ぎて娘役には八重垣姫、お三輪、「鮨屋」のお里、「扇屋」の小萩、「白石」の信夫、「鏡山」のお初、傾城役には梅が枝、小紫、揚卷、高尾、梅川、女房役には重の井、政岡、尾上、山姥、又平女房、等の當り藝あり。男子に扮しては、五郎、權八、敦盛のほか、「先代萩」の鳴神梶之助、荒獅子男之助など

あり。又所作事にも堪能なりしこと岩井家代々の通りなるが、別に板額に大當りを取りて、故山下金作以來と稱せられ、彼れの又平女房は中村大吉の腹にて演ぜしと言はれ、又評判記に彼れが舞臺に愛嬌薄くして藝風淋しかりしを往々非難せり。蓋し、彼れが技藝は華麗よりも質實に傾きて、家例以外、別に地藝に於て一生面を開拓せしものゝ如し。

天保九戊年 河原崎座の顔見世狂言に、スケにて彦惣女房と古今と二役を勤め、芝居茶屋の場にて、百眼の目鬘をかけての愁嘆ありしが、見物いづれも大泣なりしとぞ。大抵の顔にては目鬘をかければ可笑くなるものなれど、夫れにて見物を泣かせしは、顔も美く藝も上手なればなり。(「俳優百面相」)

中村座にて「白〻噺」の宮城野を勤めし時、湯上りにて出で、舞臺にて化粧をする件、いかにも珍らしく、且つ仕打書割雅しに至るまで、どう見ても江戸吉原の太夫なりけり。その後、何人が勤めても浪花新町の太夫然として、孔雀の羽根を飾りし唐机に寄掛り居る例の上方種のやうにて重くるし。位があつて而も輕き所、紫若のやうなるは稀なり。(同上)

彼れは皮肉にして頗る警句を吐けりといふ。

清水屋源七といふ表方、紫若の宅へ來り、今度は一番目も二番目もお役が不足なれば、淨瑠璃所作事をお出しなさいでは如何で御座いませう、其れには、あなたと大太夫(父の五世半四郎)さんと「戻り駕」をなすつては、と頻りに勸めければ、そうして兒は誰が致します、それは粂さん(七世の子粂三郎、後に八世半四郎)に致しましては、と言ふゆゑ、宜う御座いませう、併し左樣いふ飴屋が此の節歩きますねえ、と。是れは此の頃、親子の飴屋が孫に踊らせて市中を賣り歩きたるに當て付けたるなれど、而も本面にて打ち

〳〵の體にて逃歸りたりと。(同上)

河竹默阿彌が尚ほ勝諺藏といひしころ、紫若より注文を受けて新狂言を書き、其の脚本を送り置き、又の日紫若に面會せしかば、紫若は眞面目に、先日は有難うございました、併し餘り能く出來まして惜うございますから、彼のまゝ大事に仕舞つて置きませう、と言はれ、流石の默阿彌も赤面せりと。是れは同翁の直話なりき。(同上)

「國姓爺」樓門の場にて錦祥女を勤めし時、唐人の役樂屋總出にて、皆々毎日種々と顏を隈どり道化たるつくりをなしたるに、餘りに興に乘じて中村鴻藏が小道具部屋より金箔を持來り、顏へ一面に箔を置いて出でたり。ピカ〳〵と光るゆゑ、見物も役者も大笑ひなりしが、幕になりて紫若は作者を呼び、私は唐へは未だ參りませんから唐人に近付はしないが、あちらの國には金の顏がありますか、お調べ下さいと言出しぬ。作者も返事に困り、直に表方へ言出し、鴻藏は大しくじりにて、頭取表方一同より詫に出でたり。然るに紫若の又言ひけるは、いえ〳〵決してお詫びには及びません、隨分金の顏もありませう、此のお仕切場には鐵の顏の方もありますから、とて一同いよ〳〵痛み入りたりといふ。(同上)

俗に六世半四郎は「粂三半四郎」、七世は「紫若半四郎」といへり。紫若半四郎の妻は、四世菊之丞の次女にして、即ち五世菊之丞が先妻の妹なり。實子久次郎あり、後に粂三郎といひ、終に八世の名を襲ぎて明治の名優たりき。

〔附〕半四郎は代々腕を病みて夭折せり。俗にいふ、四世半四郎が愛妾の腕を打ちて死に至らしめしより其れが祟れるなりと。或は云ふ、曾て京阪へ上りし時、伏見稻荷に大入を祈りて管狐を申受けしが、後に其の眷屬の蕃殖せるを厭ひて僕をして伏見に返さし

めんとせしに、其の僕竊かに狐共を大井川に投ぜし神罰によれりと。又曰く四世半四郎が庭に寝込みし狗兒に鐵瓶を投げて火傷させ、死に至らしめたる悪報により、代々中風症に罹れりと。



四世菊五郎の「お軽」(「似顔大全」より)

●●●●●●四世尾上菊五郎(音羽屋梅幸、文化五―萬延元)は大阪に生れ、始め中村歌六の門人にして歌蝶といひき。天保二年(廿四歳)三月、三世菊五郎の女婿となり、尾上菊枝と改めて大阪の角座へ出で、次いで同年八月、榮三郎と改めて、養父と共に江戸の市村座へ下り、「四谷怪談」にお袖、「千本櫻」にお里に扮したり。これより次第に名聲を高めしが、弘化二年(三十八歳)冬、梅幸と改め、安政元年(四十七歳)、大阪へ上りて七世團十郎と一座し、翌三年春、伊勢を巡りき。同年九月、始めて養父の名を襲ぎて、菊五郎と稱し、江戸市村座にて「伊達」に政岡と累と頼兼とに扮し、此れより江戸の舞臺を離れず、萬延元年

六月廿八日、五十三歳にして死せりき。

彼れは容姿餘りにすぐれざりしも、品格ありて風采立派なりき。劇評家の彼れが壯時を評せる言葉に「愛嬌なし」といへり。されば、娘方よりも年増役に適し、世話物よりも時代物を得意とし、「伊達」の政岡、「戀女房」の重の井、「鏡山」の尾上、「千本櫻」の典侍局、「妹脊山」の定高、「忠臣藏」の戸無瀬、「菅原」の千代、「鎌倉山」の玉笹、「伊賀越」のお谷、「桂川」のお絹などは其の當り藝なりき。「俳優百面相」に曰く、

此の戸無瀬を見て、後年に及び坂東彦三郎（五世）のを見たりしが、「御無用と聲をかけしは修行者の手の内か、但し又かう振下げた刀の手の内か」の白廻し、彦三郎は年若き爲にてもありしにや、どぎ強くしてありたりしが、菊五郎は何處までも、此のせり合の間、女の心持の失せざりし、其の結構さは今だに思浮べることありき。それに、大概は「刀の手の内か」の所にて、右で刀を振上げ、それを横に下して柄がしらへ左の掌を掛けるが常なるに、此の優のは、右へ振上げしを左へ持替へ、右の手を左の二の腕の邊へ掛けての工合、靜かに穩かなる行作が無類にてありたりき。

銀平女房實は典侍局にて、義經主從より船出をするにつきての天氣模樣を聞かれ、それを話す所にて、時代のうちの世話口調は云ふに云はれぬ直打がありたり。

海老藏（七世團十郎）の死せし年、即ち安政六未年の春芝居は「伊賀越」にて大入を占め、三月狂言は「妹背山」にて、海老藏の大判事、菊五郎の定香、仁左衛門（八世）の鱶七、福助（故芝翫）のお三輪と久我之助、田之助（三世）の雛鳥、梅幸（延若）の求女と決りしに、海老藏は前狂言の仕舞時分より病氣となりしかば出勤出來ず、大判事は仁左衛門と替りてあけしに、此の時、海老藏病床にありて、菊

五郎の定香に對して、大判事が仁左衛門にては落ちるならん、己れでなくてはいけぬと言ひし……。

彼れは養父の衣鉢を襲ぎて怪談物をも能くしたりき。

「四谷怪談」お岩は、梅幸の直傳にて申分なかりしが、その内にも、彼の蛇山の庵室にて、伊右衛門に石地藏を赤子といつて手渡ししてより、例の示指を出して引笑ひの處、梅壽のは別として、小團次、彦三郎、五代目(菊五郎)のを見しが、此の優のが一番凄かりしと覺ゆ。(同上)

彼れの「調子は甘たれ」、傳法肌の役柄には適せざりしといふ。

御主殿お熊などいふ惡婆をせし時は、元來落付きてベタ〳〵したる白廻しなれば、「御主殿お熊と異名を取り、いーよーぢやア、なア、か刀屋の、お、れえ、株」などいひしやうなる調子は映りわるくして、人柄の好き此の優には向かざりき。(同上)

されど「切られ與三」の新作にお富を勸めて成功せしは、彼れが伎倆の凡ならざりしを知るべし。彼れは亦、女方以外に立役にも扮し、「双蝶々」の濡髮長五郎、「伊達」の賴兼、「菅原」の菅丞相、「八百屋お七」の吉三郎、など相應に好評なりき。

菊五郎の妻お蝶は、三世の女なりしが、偶然にも彼れと同日に死せしかば夫婦を同時に送葬したり。

三世中村仲藏の自傳に當時の實況を詳く記せり。曰く、「廿八日、四代目菊五郎死去、早速悔みに行き、お蝶さんに挨拶す。同人宅にて酒を飲み、おとはさん、(お蝶の妹、十二世羽左衛門の妻)ちつと賴むよといふて戸棚の前へ横になる。傍の者枕などを當てがひ、暫くこちらで梅幸夫婦、おとはさんなどゝ茶を呑み咄して居る。市川新車(五世門之助)、二丁目の旦那(中村座々元)、其外兩三

人來る。旦那お出でなりとお蝶さんを起すに、一向返事なし。人々、御新造、一寸、何だかをかしな様子でございますといふ。おとは、側へ行き、姉さん〳〵といへど答へなし。姉さんが何うかしたよ、と震へ聲でいふ。皆々驚き、側へゆき、手を取り見るに、脈もなく最早冷たくなりゐる故、ワツと泣出し一同當惑す。新車、「何、お蝶さんが、ム、、計らざる珍事」と高慢にいふ。是にて一同株なやつて居るぜと吹出す。實に珍らしき往生なり。昔聖徳太子は御夫婦同時に御臨終とは聞きたれど、今時かやうな不思議があらうとは皆々呆れて居る。此の中で一人が、その筈な事がある、太夫も生得大酒だからと言つて大笑ひしたり。（「手前味噌」）

坂東しうか（大和屋秀歌、文化十一—安政二）は市村座の帳元橘屋治助の二男にして、三世三津五郎に養はれて幼名を玉之助といひ、文政七年（十二歳）、玉三郎と改めて、始めて市村座に子役として現れ、唐子の所作を演じき。同十二年、四世彦三郎と名古屋へ赴き、「夕霧」に扮して喝采を博せしが、翌十三年、三世菊五郎と共に大阪の中座へ上り、「鏡山」の大姫に扮し、此の時、岩井粂三郎（六世半四郎）が急に歸東せしかば、代りてお半の役を勤め、大當りを取れり。以後、同地の稲荷の宮芝居にて修行せしが、天保三年（廿歳）十一月、市村座へ下り、同八年夏、森田座にて「初袷雁五紋」に田舎娘雁金お文、宿場女郎極印おせん、お針雷のおらい、盗賊安のおちか、水茶屋布袋のお市、山川屋權六の六役に扮せり。蓋し養父三津五郎が當り狂言なりし「五人男」を女性に改作せしなるが、大好評を博し、是より愈其の聲名を高めたり。同十年、養父の俳名に因みて秀歌と改め、後にしうかと假名に替へたり。

弘化元年(卅二歳)十一月、市村座にて「女暫」と「女鳴神」とに扮し、同四年三月、同座、「初櫻尾上以丸藤」にお初と女清玄との早替りを勤め、大出來との評を得、「女清玄」の家元たりし五世半四郎これを見て激



しうかの「鬼神お松」(「似顔大全」より)

賞したりといふ。同年五月、「先代河岸」に高尾と累、九月、三世三津五郎の十七回忌として「七變化」を演じ、十一月、同座、「源家八代」に三ケ月おせん、翌嘉永元年(卅六歳)八月、「葬物語」に朝顔(八世團十郎の阿蘇次郎)、同四年二月、市村座「明烏」に浦里(團十郎の時次郎)、同年九月、「越白浪」に鬼神お松、同五年正月、同座、「八犬傳」に伏姬、信乃、船蟲、三月、「隅田川」に召仕お初と橋本屋白糸(五世宗十郎の鈴木主水)と清玄尼、同六年二月、河原崎座、「しらぬひ譚」に若菜姬と青柳春之助、安政元年(卅二歳三)月、同座、「廓白浪」、(小團次の惣太)に松若丸、十一月、同座、「忠臣藏」に顏世御前と

お輕とに扮したり。翌二年二月、同座、火災後の新築成りて、「比翼花鳥」に中老尾上、三浦屋小紫、藝者お八重、長兵衞女房お時の四役を勤むる筈なりしに、口の邊に面疔の出で丶、其れを摘み切りしため、終に三月六日、四十三歳にして死せり。

彼れは容貌さほど美しからざりしも、風采と音聲とにすぐれ、舞臺の藝ぶり派手にして、特に傳法肌の女性に扮するを得意とし、「明烏」の浦里、「櫻餅」の松若、鬼神のお松、女淸玄、橋本屋白糸、などを其の當り藝とす。玉三郎時代には五世菊之丞の藝風を慕ひしが、「夏祭」の泥試合にて女義平次に扮せし時、菊之丞と同じ衣裳なりしも、麁惡なる品を用ひしより「泥濱」と綽名されたり、蓋し「濱」は菊之丞の屋號たる「濱村屋」にして、彼れが之れに似て非なるを意味せるなりき。其の後の評判記に、彼れの藝風は四世門之助に似たりと言はれしが、嘉永安政の頃には五世半四郎を模倣し、十二世羽左衞門の三世三津五郎に於ける、三世三十郎が五世幸四郎に於けると並び稱せられたり。

彼れが舞臺に於て傳法肌の女性を得意とせると同く、其の平生も活達にして豪放なりき。己れと殆ど相頡頏せる八世團十郎の訃を聞くや、彼れは齒嚙みをして、「一人で死ぬ事があるものか、己なら憎いと思ふ奴を突殺して死ぬ」といひきとぞ。隨つて金錢には頗る淡泊なりき。

深川木場の材木問屋の贔屓客より金百兩を年の暮に使の者に持たせて呉れられし事あり。取敢ず木場へ行き、主人に厚く禮を述

べたろに幇間醫者某といふもの傍より口を出して、「太夫、大晦日前に百兩といふ藏入ではさぞ好い心持でありましたらうね」といひしに、「しかし戴いた時より人に奥れて遣つた時の方が好い心持でございます」といひしを聞き、主人はます／＼贔屓にしたり。（「俳優百面相」）

同客より土藏を建てたが宜からうとて、費用を送られし事あり。其の金子にて白米を買ひ、貧困なる者に悉く分ち與へ、其れより禮かた〴〵木場の客の方へ參り、「考へて見ますと、藏を建てた所が何も入れる物はなし、衣裳そのほか少しばかりの類は、伊勢太（質屋）の藏へ預けて置きました方が、第一火事といつても安心でございます」といひしかば、材木屋の主人も其の處置の意外なるに感服せしとぞ。（同上）

客先にて、幕の内の力士天津風に出逢ひしところ、亂醉のあまり、俳優といふを侮り、足の胛に杯を載せ、喘延ばして、しうかに獻せしに、恭しく振袖の袂にて受けたる仕打、感心なりとて、其客の周旋にて兩人兄弟分となりぬ。（積善館筆記）

斯くの如くなりしかば、常に貧にして、樂屋の惡口に「借金のお分さん」（彼れが扮せる五人女の雁金お文に擬せるなり）などいひたり。又彼れを諷して「いつも錢なき家で買ふ松魚かな」といふ句ありしが、米屋魚屋など借だらけなれど心に介せず、一生を盛んに暮らしたりき。

顔見世の夜、宅には蠟燭を需むる錢もなく、ところへ大勢連にて入來り、貰ひ來りし祝儀の金包を開き、金を剝ぎて、附添ひ來れるものに頒ち與へ、殘の金を懷中へ入れて一同と吉原に行きぬ。後にて其の紙包を改めしに、剝ぎ殘りの金三分紙層より現はれ、其れにて蠟燭も買へば酒肴も調へ、都合よく顔見世を濟したり。（同上）

出先より落語家四五人を連れ來りしに、午飯時分になりても酒飯の用意なし難く、昨夜客人より貰ひし銀の煙管を質屋に遣りしに、鍍金にて、至つて安物なりしを、番頭の働きにて銀の値にて用立ける。其の後、しうか本銀の長煙管を貰ひ、早速彼の鍍金のものと入替させしに、正直なる人なりとて、是より、しうかの質とさへいへば、不足にても通りける。（同上）

給金が多くなるほど錢遣ひ荒く、借金は増すばかりなれど更に苦にせず。其のころ衣裳は自分持なりしが、懐都合の悪しきにもかゝはらず、いつも立派なるを着たるも、手許には置く事なく、毎朝樂屋入の時、着て往きし振袖は、樂屋へ落付くと直ちに脱ぎて、古くから使ひたる金公といふ男衆に、伊勢太といふ質屋へ持たせて遣り、衣裳葛籠と入替へ、其の日の舞臺が濟ませ、また衣裳葛籠と樂屋入の振袖と入替へて着替へ、茶屋より贔屓の客が呼びに來れば、客より貰ひし祝儀を、其の客の歸りし跡にて直ちに開き、居合せし者に分け遣りし事など度々ありしゆゑ、人望ありて、朝夕出入りするもの、弟子は勿論、相中の役者、土場、木戸藝者、落語家、幇間、等臺所にて飯を食ふ者二三十人ありたり。（「俳優百面相」）

或時、夜食に焚く米が切れたれば、家内の者をはじめ、來合せたる人を合せて三十人餘りの者に鰻飯を取寄せて喰せしといふ。此の事當時評判の話なりし。（同上）

或年の夏、駿河の府中へ行きし時、自分は勿論、一同の駕の左右の日除に揃ひの浴衣を掛けさせ、府中へ着くと浴衣は其のまゝ駕舁にやりたり。此れを見てゐし出迎ひの者が豪い氣性と言傳へ、遂に府中々の評判を取りたり。又出入の幇間その外の者に、時々羽織浴衣等の仕着を出したるが、此れは氣前の好き故のみならず、彼等は世間を廣く附合ふゆゑ、成るたけ多く着せるのが引札なりといひしとぞ。（同上）

要するに、彼れが豪奢は天性といひながら、一つは廣告手段として利用せしなりき。しうかに吉彌とい

ふ實子あり、後に五世三津五郎となり、女方たりしが、其の名甚だ著るゝに及ばずして夭折したり。又彼れが伯母（父の姉）の子は四世坂東彥三郎なりき。

尾上菊次郎（音羽屋梅花、文化十一―明治八）は大阪の座にして、始め片岡仁左衛門の門に入り、市松といへり。後、三世富十郎の弟子となり、中村歌柳といひ、大阪の宮芝居に出勤し、更に三光と改名せり。天保六年（二十二歳）十一月、江戸中村座へ下り、三世菊五郎の門に入りて始めて菊次郎といひ、「菅原」にお八重に扮したり。これより江戸に留まること二十二年間、四世菊五郎及び坂東しうかと相鼎立せり。

安政四年（四十四歳）春、俳名の梅花と名のりて大阪の角座へ上り、「八犬傳」に房八女房ぬひ、「鏡山」に尾上、「琴責」に阿古屋、三月、「宇都谷峠」に文彌姉おきく、「雲稻妻」に葛城と下女お國、「忠臣藏」にお輕を勤め、五月は京都の東芝居にて「彥山」にお園に扮し、これより名古屋へ下りしが、翌五年春、再び角座に現はれ、「英艸紙」に傾城春雨、娘お仲、「鼠小僧」に松山、これより西の宮と岸和田とに赴き、五月、京都の南芝居へ出でしが、次いで宮島に下り、十月、角座に歸りて、「薄雪」にまがき、お梅の方、娘おみつ、十一月、京都の南芝居にて「忠臣藏」に顏世、お輕、おりえ、お石、「八犬傳」に雛絹、「桂川」にお八重とお絹、同六年正月、大阪の角座、「廓門松」に山三妻八重垣、娘小田井、言號おみわ、喜與藏女房お里、「國姓爺」に和藤內母、三月、「天滿宮」に女房おそねと妹おみつ、「五雁金」に妻吳竹、五月、京都の南芝居、「白石噺」に宮

城野、「阿波鳴門」にお弓、「極彩色」に娘お品と兵助女房おまき、七月、角座、「廓苧環」に娘おれん、女賊蜘手の小蝶、娘おきく、女房おまき、十月、同座、「幼稚子仇討」に腰元お才、十一月、京都の南芝居、「品評判」に三八女房磯菜、又平女房左枝、葛城太夫、「重井筒」に女房お辰、萬延元年正月、中座、「百千鳥」に夕霧と寐覺の前、「賑倍我」に菊御前と和田の舞鶴、三月、「忠臣藏」に顔世、娘おきそ、お輕、四月、京都の南芝居、「先代萩」に高尾とおちか、「川中島」におかつ、「八百屋」にお千代、七月、中座、「譽兩刀」に言號おその、お谷、娘お袖、「六歌仙」にお梶、九月、「秋葉權現」に操の方、「御所櫻」におわさ、「袖が浦」におふさに扮したり。文久元年（四十八歳）二月、江戸へ歸りて守田座へ出で、八月、「櫻莊子」に當吾妻おみね（二度目）とお賤の方、十月、「双級巴」に芙蓉とお瀧に扮し、以後、俳優としての經歷は、

文久二年正月、守田座、「しらぬひ」に乳母秋篠と浪六女房。三月、「蝶小蝶」に女太夫おこよ、熊坂お長、長五郎女房。五月、「宮本無三四」に姫絲萩、「太功記」に操、「お染久松」におみつ。閏八月、「村井長庵」に道十郎女房と傾城遠山。十月、「吾妻八景」に額の小三、兵衞娘おみち、傾城瀧川、「安達原」に袖萩。

文久三年二月、市村座、「一谷」に菊の前と相模、「和國橋」に妾おきく。四月、「伊賀兩刀」にお谷、お米、笹尾。八月、「腕喜三郎」に喜三郎女房。十一月、「忠臣藏」にかほよ、戸浪、おかや。

元治元年二月、市村座、「俠御所染」に淺間後室遠山尼、名古平女房、五郎藏女房。八月、「一谷」に新宮後室千壽、六彌太妻、「月出村」に藝者おしん。十一月、「沖津白浪」に船玉お才、駄右衞門妹。

慶應元年正月、市村座、「曾我門松」に大磯の虎と岩藤。五月、「菖蒲太刀」に仙女九六姫、妻長總、正直妻。八月、「處女評判」に杣右衛門女房と雲切おさか。「太功記」に皐月。十月、「大内鏡」に左近太郎妻。

慶應二年二月、守田座、「扇曾我」に滿江、月小夜、鑄掛松女房。五月、「六玉川」に傾城高窓、同高尾、藝者累、政岡、彌十郎妻淺香。八月、「六十餘集」に伊賀平内娘、西王母、丹波の小雪、遣手おつめ。

慶應三年二月、中村座、「御攝曾我」に中老尾上、女舍人お浪、甚内女房、和田の舞鶴。五月、「石川染」に淀町御前、「彦山」におその、「幡隨長兵衛」に女房お時。八月、「廿四孝」に慈悲藏女房、「八陣」に正清妻。十月、「伊賀越」にお谷、お袖、德尾、「小栗」に淺香。

明治の初年まで健在なりしが、終に地方を巡業し、明治八年六月十四日、六十二歳にして歿したり。

菊次郎は容姿あまりに揚らず、師富十郎の藝風を汲みて、而も最も世話女房を得意とし、「佐倉宗吾」の女房おみね、「腕喜三郎」の女房小磯、など其の當り藝たりき。九世團十郎彼れを賞して曰く、

妙なひよつとこ面にて、容貌は惡かりしかど、藝の妙に達せしため、自然と婦人の如く見え、果ては其面の可笑しきさへ心にとまらぬ程になりたり。(「團洲百話」)

「俳優百面相」に曰く、

優が全盛の頃は、四代目菊五郎、坂東しうかと共に、一しきり三櫓の立女形にして、優は其の三人目に置かれたれど、役者には一番上手にてありしやうに思はれたり。

又曰く、

佐倉宗五郎の女房など鈍類にて、小團次（宗五郎に扮す）とは好一對の夫婦役者なりけれど、本當の評を下さんには、女房の方亭主に勝つてゐたりしと言ふ。そは、歌右衛門、海老藏、なんどといふ一騎當千の處の女房を間に合して來りし役者なれば、高島屋（小團次）には食過ぎてゐたりしとは、坂野翁の物語なりき。



菊次郎の「主水妻お安」（當時の錦繪より）

「腕の喜三郎」の時、優は女房小磯の役なりしが、稽古に入りても身を入れざりしゆゑ、喜三郎役者の小團次は「弱つたな〳〵」と言ひたるのみにて、大に困り居しが、さて初日になると、弟源太を位牌にて打ち、強異見する所、眞の生世話にて大に身に染みて見られ、素晴らしき出來榮にてありしかば、小團次は「憎い若衆だが、併し旨いものだ」と歎賞せしといふ。

彼れは日常に於ても女性的にて柔順なりき。

濱倉といふ名高き人、菊次郎の近所まで用達しに行き、計らず往來にて出會ひしゆゑ、「太夫どこへ」と聲を掛くれば、「おぶうへ」といひたりと。此の時、優は五十前後にてありしならん……。（「俳優百面相」）

上方より下りし天保の頃、中村座にて神樂の十二座の所作を出せし事あり。菊次郎はお龜の面を被りし王女にてせり出し、踊一くさりして面を取るといふが正本通りにてありしに、嵐冠十郎、「お前はお龜の面を取りても矢張お龜だから、見た目が變らなくて面白くない、一層外道の面にした方が好からう」といふに、優は更に怒りもせずして、直ちに其の通り外道の面を被り替へて出でたり……。(同上)

市村座の中幕へ「太閤記」の十段目を出すに就いて、彦三郎(五世)が光秀、五代目菊五郎が十次郎、三津五郎(五世)が初菊、團藏が久吉、鶴藏(三世仲藏)が加藤、新車(門之助)が操にて、菊次郎の役は皐月といふ事に極りたり。然るに千田德五郎が役を收める役なれば……「貴方は操があたりまへ、又初菊は若過ぎますゆゑ、今度は一つお婆さんを御迷惑ながら願ひたい」と恐る〳〵いへば、優は一寸考へて居たりしが、「ようございますか、併し德五郎さん、何かお土産があるだらうれ」といひたり。「はい、思召し次第幾らにても」といへば「では三味線(義太夫をやりしかば)の絲を一箱買つて下さい」といひしに再び安心の思ひをしたりと。德五郎の言にては、何れ五十か百と出るならんと思ひしを僅に五兩出でざるものなれば、甚だ安上りにて濟みしと。(同上)

●●●●●●五世市川門之助(瀧野屋新車、文政四―明治十一)は江戸東兩國の料理屋青柳喜三郎の子にして、始め五世菊之丞の門に入り路太郎といひ、中ごろ五世半四郎の弟子となりて粂太郎と改め、幼時より京阪に修業せしが、六世松本幸四郎の中國へ下りし時、其の弟子となりて松本七藏といへり。弘化二年(二十五歲)正月、江戸へ歸りて河原崎座へ現はれ、同時に七世團十郎の門に入りて市川新車と改めき、蓋し新車は門之助の俳名なり。

嘉永六年（三十三歳）春より尾張伊勢に赴き、翌安政元年春、大阪中座に上り、同二年冬、京都南側芝居に現はれしが、これより伊勢尾張に轉じ、同五年（三十八歳）七月、江戸に歸りて中村座へ出でたり。明治三



五世門之助の「常磐津文字瀧」（「似顔大全」より）

年（五十歳）二月、始めて門之助の名を襲ぎしが、同十一年五月十二日、五十八歳にして歿しき。

彼れは容姿すぐれ、音調高くして辯舌爽かなりしが、其の弊は男らしく荒々しくして、女人の情に缺け、「女方と立役との間」と評せられたり。されば娘役もしくは傾城事よりも、女房役もしくは老女役に長じ、晩年には立役を兼ね、最も能く先輩たりし諸名優の型を記憶せしかば、斯道の故實家として重んぜられ、明治の名星たりし九世團十郎の如き、特に彼れに教へを受けたりといふ。「團洲百話」に曰く、

瀧野屋新車は中々の名人にて、われらは此の人に敎へられたる事甚だ多し。曾て菅原の源藏をつとめし時、團三(二世三十郎)の型にて演じたるが、これも三十郎が其伜に敎へしを門之助傍に見て居りて敎へくれしなり。われらは此人とは年齢の二十も違へど、殊の外昵近に爲せしかば、桃山譚(地震加藤)の二度目に、この人幸藏主をつとめ、われら加藤をつとめしが、年來中々敎へてもらひし交情とて、大きにあまつたれ好くて、舞臺の都合誠によかりき。……又この人は尤も朝比奈を能くせり。故人多見藏は有名なるものなれど、われらが見た中にては此の人のが一番よかりし。足のふんばりなど女形とは覺えざる程なりしが、これ皆先輩の手藝を十分會得し居りし爲めなるべし。

團十郎にして斯かる賛辭を惜まず、彼れの名優たりしを知るべきなり。又七世團藏の談話に曰く、

瀧野屋には隨分小言をいはれましたが、何處がいけぬ、何うでいかぬと聞いて容易には言ふてくれず、或る役者がお櫓にて、半右衛門に「勘平は死んだわやい」と言はれ、癪を起して倒れるを、瀧野屋が見て例の小言をいひたり。其の晩、自宅へ音づれて譯を訊けたるに、漸く口を開き、直ぐ目を廻す奴が何處の世界にあるものか、勘平が死んだと聞いて、あの勘平さんがと驚いて、二度も三度も聞返すうちに差込んで來て、ウーンと倒れるやうにすべしと敎へぬ。(「歌舞伎新報」)

門之助は書畫俳諧を能くし、特に名筆を以て知らる。性至孝にして三十歳まで妻を娶らざりしが、後に砂村新田の農內田次郎兵衛の長女まさを妻とし、一子房丸を生みしが早世せり。次いで辨藏を生み、市村座の名義人たりき。養子清吉、女寅と號して女方たりしが、父に後るゝこと僅かに一年にして死せり。

第四編　近世期の脚本と劇場音樂

獨創の作を減す。――「評判記」の衰微。

操りと淨瑠璃とが發達して歌舞伎劇に多大なる影響を與へし事は既に寶暦期に於て説きたり。近世期に至りて此の傾向は愈甚しく、歌舞伎の脚本として義太夫の淨瑠璃を代用すること益盛んに行はれ、歌舞伎獨特の脚本と及び其の作者とに優秀なるもの稀なるに至りき。

「妓用袋」（天保十五年著）に曰く、

大昔、江戸芝居には義太夫狂言なし、中昔より忠臣藏をせし時は、操座より太夫を頼みしといふ。……上方より役者下りて、淨瑠璃狂言は、故人の勤たる型のあるもの、書狂言（新作）は新しきものゆゑ嫌がり、江戸の役者も新狂言は近年覺えぬ、勝手あしきゆゑ之もつて嫌がり、操狂言のみにて、三四十年跡、木挽町の顏見世に、彦三郎、千本櫻の忠信を勤めし事、その時江戸の見物は悔りして、けしからぬ、顏見世に千本などゝ、珍らしきやうにいへども、今は、おしなべ義太夫狂言は殘念々々。

といへり。尙ほ同時に小說界に京傳、馬琴、種彥、等の名家現はれて、其の作の世間に歡迎せられしより、歌舞伎の脚本としても其等を仕組むこと頻りなりしのみならず、他の一方には、昔の「軍書讀み」が進步して「講釋」となり、「輕口噺」が發達して「人情噺」となり、此等の舌耕的文學が、市井に持囃されしかば、小說を劇化せると同く、其等を劇化して上場し、隨つて歌舞伎には愈獨創の作を減じたりき。

「傳奇作書」に曰く、

山東京傳が作「稻妻表紙」の發板なりしは文化二三年の頃なりし……文化五辰年に、浪華、角、中の兩劇場にて是を潤色して外題名を出けり。新作の小說を狂言に脚色しは、是を起原とす。……

稻妻表紙の當りを取りしより、同年秋、櫻姫曙雙紙（京傳作）を清水清玄契約櫻とし、三國一夜物語（馬琴作）を復讐高音鼓、三七全傳南柯夢（馬琴作）を舞扇南柯夢と潤色せしが、三勝は大當りせしが、餘はさのみ當りもなかりし。此冬の顏見世に、椿說弓張月を島廻月弓張とし、中の芝居にて出しける……。

忠孝潮來府志（種彥作）をけいせい潮來節、新累解脫物語（馬琴作）を草紅錦絵川、自來也物語（鬼武作）を柵自來也譚、[illegible]（鳥本にて雲水錄）を敵討義戀柵、等新を挑み、奇を爭ひ、出せしも、後には珍らしき小說もなく、專ら戲作者より是を脚色、其内を舞臺にさせよと、歌舞伎作者の心になつて作るが、歌舞伎に潤色ならず、小說の作者、歌舞伎の作者共、文化中に大約故人となりて、脚色すべき稗史もなく、潤色すべき歌舞伎作者もなくなり、文政中には古き淨瑠璃を見出して、仕はやらせる事には成たり。

尚ほ事實に於ては、文化以後と雖も、小說を劇化する事は頻りに行はれしなり。曲亭馬琴が「江戸作者部類」にも同く上方にて自作の劇化せられし事實を列記し、且つ江戸の方面に論及はして曰く、

江戸にても、文化年間、中村座の秋狂言に、曲亭のよみ本、稚枝鳩の復讐の所を狂言にして、瀨川仙女が烈女の五人殺しをせし事あり。此後、又顏見世狂言に勦盜異錄の木曾棧道の所を狂言にせし事あり。この後、又中村座にて、春狂言の二番目に、京傳子の[illegible]、曲亭子の筆意、八百屋お七物語といふ名題の狂言を興行したり。（此狂言作者は二代目如皐也。）此後、又曲亭の姥櫻女淸玄といふ趣

子の趣を歌舞伎狂言に飜案したり。岩井半四郎も女清玄、時好にかなひて、看客群衆、三十日に及べり。（此狂言作者は鶴屋南北也。）こは葺屋町市村座の春狂言なりき。……又中村歌右衛門が江戸に來りて、中村座に久しくありし頃（文化年間）、南柯の夢を飜案したる狂言案出したり。其儘狂言に作る事を恥ぢ、或は人の姓名を同じくせず、或は別の世界に取易るなどするに、江戸の俗客、婦女子は、讀本を見ぬもの多ければ、其狂言の憑る所を知らずして、新規なりと思ふなるべし。……

と。又四方梅彥翁談話（「唯玉集」）に講談と草册子との始めて江戸の劇場に脚色せられたる事情を語りて曰く、

講釋を芝居にして當てたは小團次が初まりで、「切れ與三」の芝居は文車の講釋が種で御座いますが、丁度その頃、私が彼れを草册子に綴らうと言つて居ると、瀨川如皐が、芝居に仕組みたう御座いますと言ふから、芝居でさせたので御座います。……一體、昔の狂言作者には一見識あつて、戲作物を芝居には仕組まぬ、戲作者も芝居を草册子には出さぬといふ事で御座いましたのを、如皐が「田舍源氏」を狂言に作つてから此區別が頓と混じて仕舞ひました。

されば、一面より見れば脚本の退步なるが如しと雖、尙ほ一面よりいへば、歌舞伎劇の內容が其れだけ豐富となりしなり。而も其の內容の豐富となりしは、斯くの如く脚本の取材の範圍が廣くなりし爲めなるのみならず、劇場音樂が複雜となりし事も其の一原因たらずんばあらず。

然れども、斯くの如く脚本の創作の才を要せずなりし事は、他の一面に於て彼等を墮落に導き、又彼等を俳優の奴隷たらしめき。中村重助の「芝居乘合話」（寬政十二年著）に昔の作者に權威ありし事を述べ

て、且つ曰く、

今は夫に引かへ、座頭、女形の手引をもつて、作者の身分極候。誰が座頭ゆゑ作者は誰といふ様になり行、扨又狂言の事とても、座頭、若女形の座頭へ、當顔見世の狂言に何ぞ思召もあるやと、狂言作者より役者へ尋ね、其役者いろ／＼好み事ありて、當春はかやうの役、また秋は此役たりし儘、此顔見世は目の替るやうに、是をあれをと役々のあつらへ有て、中々狂言出來ぬ筈、夫故近年の狂言、二つ目より打出しまで、一幕々々切の狂言のごとくに相成て見物に一向わからず。……又其中に上方より數代の古狂言本を買出し、此狂言は誰がしたの、…是を誰にし、あれを誰にしてと、狂言を作らせし族もあり。是等は狂言作者ではなく、古本の買出し、看板や番附に狂言作者とあるは笑ふべき事也。

「傳奇作書」(天保十四年著)にも、

此歌舞伎作者といへる者も、明和安永の比、寛政の末までにて、享和文化に移りて一兩輩も殘り居しが、其後は一人もなく、大方は狂言方とて拍木子を叩くもの。鼻垂も次第送りとかにて、おこがましく作者と番附に名をのするのみ……。

云々とて、同じく彼等が俳優の奴隷となれるを痛嘆せり。

[備] 脚本と作者との振はざると共に、「評判記」の衰微せる事も近世期に於ける一現象にして、要するに、演劇が文藝より次第に遠かり行くを證明するものなり。蓋し、評判記は京阪の通人粋士が集まりて其の月旦を俳諧師幇間などに筆記させ、京都の書林なる八文字屋自笑の名にて出版せしめしが、初世自笑の曾孫四世自笑に至り、家道衰へて大阪に轉住し、其の子、放蕩無賴にして家道を綴がず、卯作といふ僕、梅枝軒泊鶯と號して、漸く評判記を繼續せしも、天保九年に歿したりと。而も、今は價の高きと紙數に限あり、

悪口を書時は、其役者より板元へ彼是といはせる故、只何役もよう出來ました〱と譽て計有、尙は昔は作料[illegible]かりしに、「今は、三都、伊勢、尾張、田舍の部まで書集、年耕代までこめて金何程との限り有。夫を受取人、一週の狂言見物に行ば年中の作料をとらるべし。夫故に芝居は見ず、役割番附を内にて詠め、人傳に聞たるを書なるべし。」と、「傳奇作書」に誹れり。されば、「嘉阿彌筆記」に、評判記と聲色づかひの衰へたるを芝居の流行せぬ故とあれど、（第廿七章を看よ。）一つは評判記それ自身の内容が貧しくなりたればならん。斯くて、天保改革以後、評判記の絶えたるを、江戸にて二世並木五瓶が七文舍鬼笑と變名して之れを再興したり。

第廿三章　京阪の作者と其の脚本

辰岡萬作——彼れの佳作。——並木五瓶——其の傑作——彼れが功績——「戯財錄」。——近松德叟——彼れが作（二つの分類）。——奈河七五三助——彼れが當り狂言。——奈河篤助——「作意編」。——奈河晴助——彼れの作。——濱松歌國。——金澤芝助。——金澤一洗。——二世金澤龍玉。——西澤一鳳——劇道の古實家。——清水正七。——嶺琴八十助。

寶曆期の奈河龜助に次いで、京阪の劇壇に並び榮えたる作者は辰岡萬作及び並木五瓶の二人たりき。**辰岡萬作**（寬保三―文化七）は女方の俳優たりし辰岡久菊の男なり。安永五年（卅五歲）二月、大阪の中座にて「北條五代記」に、彼れは狂言方たりしが、座頭の三枡大五郎が三浦彈正に扮して、叛逆露はれ、軍兵大勢と立廻りのうち、ふと萬作を見れば、褌はずれて男根を出しながら、一心不亂にツケを打ちたり。大五郎をかしく小聲にて注意しながら立廻りをし、軍兵共も之れを聞いて、長柄の鎗にて突掛け、又は大音にて掛聲

の如く口にはいへども、彼れは更に心付かず、此の立廻りを打ち了りぬ。大五郎樂屋に入りて、我が役を大事に勤めるは頼もし、適れの作者となるべしと賞せしといふ。翌六年十一月、角座にて五瓶を立作者として彼れは二枚目の作者たりしが、同七年十一月、京都の染松座にて立作者の地位に在り、蓋し此れ彼れが立作者たりし始めならんか。

彼れは始め京都に住せしが、寛政四年(五十一歳)、大阪に轉じ、島の内疊屋町に居れり。而して彼れの佳作として傳はれるものは大かた此の頃よりの著なり。即ち、

「初嵐元文噺」　寛政元年、大阪、中座。曾根崎五人斬。

「忠孝響二街」　寛政四年九月、大阪、角座。

「けいせい楊柳櫻」　同五年正月、中座。嵐三五郎の淀屋辰五郎。柳澤騒動を淀屋事件に附會して脚色す。

「東海道戀の關札」　同年四月、同座。芳澤いろはの重の井、尾上新七の伊達與左衛門。

「けいせい青陽鶪」　同六年正月、大阪、角座。宇都宮騒動と日本橋の馬切とを脚色す。淺尾爲十郎の三[illegible]五郎左衛門、嵐小六の柴田勝重、市川團藏の三七信孝。

「吉原細見圖」　同年五月、中座。

「姉妹達大礎」　同七年正月、角座。白石の姉妹仇討。中山文七の遠山甚三郎、山下八百藏の傾城花扇。

「艶競石川染」　同八年四月、同座。嵐雛助の石川五右衛門と石田局。

「けいせい遊山櫻」　同九年正月、中座。毒酒の清正を脚色す。市川團藏の佐藤正淸。
「遠州中山染」　同年九月、同座。中山問答を脚色す。淺尾爲十郎の白須賀大炊。
「雪國嫁威谷」　同十一年七月、同座。澤村宗十郎の老女おそま。
「花競淀川語」　同十二年正月、同座。片岡仁左衞門の馬士平太、澤村宗十郎の渡守源八。
「傾城忍逢淵」　享和元年正月、角座。淺尾爲十郎の石川五右衞門。
「濱砂傳石川」　文化元年九月、中座。市川團藏の石川五右衞門。
「けいせい高砂松」　同四年正月、角座。

此の「高砂松」を絶筆として、文化七年九月三日、六十八歳にして歿せり。

右に示せる如く最も彼れは史上の事實を脚色するを得意とし、堅くるしく言へば、社會劇よりは史劇に長せしなり。而も其の基礎を史上の事實に置くと共に、擅まに時代と人名と事件とを捏造して、自己の空想中に活動せしむるに妙を得たりき。例へば、彼の「けいせい青陽鷄」に於て、徳川時代を豐臣時代となし、本田上野之介を柴田勝重に、伊井掃部頭を眞柴久吉に、大久保彦左衞門を三輪五郎左衞門に變へ、瀨川采女と傾城園菊を釣夜具の中に臥さしめ、以て宇都宮の釣天井を暗示したる如き是れなり。此れ一つは當時の政令が斯かる史上の人物もしくは事實を脚色するを禁じたるより、在らゆる淨瑠璃作者、狂言作者、もしくは戯作者が止むを得ざる必要上より執りし常套手段なりしと雖も、萬作の作は特に其の點

に於て一種の才筆と伎倆とを有せしなり。

彼れは屢後輩たる近松徳叟と合作したりき。前に掲げたる「姉妹達大礎」も其の一つにして、「萬作は金襖物を得意、徳叟は御家狂言を得意とすれば、初幕の馬場より甚内殺しの和かみは徳叟、二つ目の出立は萬作、三つ目の岡崎は徳叟、四つ目の菅傳の場は萬作、五つ目の返り討道行は徳叟、敵討は萬作にして、「時代世話と氣のかはりめ、双方共に筆力を揮ひしゆゑか、古今の當り狂言となりけり」とぞ。「艶競石川染」も二人の合作なるが、

辰岡は實より花を得、徳叟は花より實に入るの腳色にて、此の二人歿してより後、斯る作者を見ず……。

と「傳奇作書」の著者は激賞せり。

並木五瓶（延享四—文化五）は大阪道修町の產なり。和泉屋といふ役木戸の子にして、始め吾八といひ、萬作の門人なりしが、後に並木正三に事へたり。安永六年（卅一歳）、五兵衞と改め、後に文字を變へて五瓶といひ、當時既に立作者たり。曾て師事せし萬作よりは早く昇進して且つ其の傑作多かりき。卽ち、

「天滿宮菜種御供」　安永六年三月、大阪、角座。天神記。嵐雛助の時平七笑ひ。

「鍋祀貞婦競」　同年七月、同座。筑摩祭。

「日本花赤穗鹽竈」　同七年正月、同座。赤穗義士傳。尾上菊五郎の大星由良之助。

「金門五山桐」同七年四月、同座。嵐雛助の石川五右衛門。
「棹歌木津川八景」同年七月、同座。嵐雛助の木津勘助。當時ありし木津屋騒動を脚色す。
「袖簿播州廻」同八年三月、同座。嵐雛助の小坂部狐。
「歸命曲輪文」天明元年正月、同座。中山文七の鈴木喜多之頭（本願寺騒動）。
「けいせい黄金鱐」同三年正月、同座、淺尾爲十郎の柿木金助。
「富士見月通者塚」同五月、同座。
「けいせい倭荘子」同四年正月、大阪、中座。淺尾爲十郎の和田雷八。
「思花街容性」同年七月、角座。市川團藏の幡隨長兵衛。
「けいせい忍術池」同六年正月、同座。淺尾爲十郎の稻田當藏。
「けいせい飛馬始」寛政元年正月、同座。三桝大五郎の尼子四郎、（天草騒動）。
「けいせい路島臺」同二年二月、同座。市川團藏の田川惣左衛門（八人切）。
「けいせい誰伏水」同三年正月、同座。淺尾爲十郎の千利休。
「入間詞大名堅義」同四年正月、中座。
「平井權八吉原街」同五年三月、同座。
「島廻戲聞書」同六年二月、同座、澤村宗十郎の薩摩源五兵衛（島津の琉球攻と曾根崎五人切）。

此の「島廻」の第四齣は今も舞臺に繰返さるゝ「五大力」の狂言にして、大當りを取り、これより三世宗十

郎に重んぜられて、同年十月、共に江戸へ下りき(四十八歳)。

江戸に於ける最初の作は「花都廓繩張」(寛政六年十一月、都座)と題し、天草軍記を脚色したる上方風の傾城狂言なりしが、散々の不評にして、次いで左の如き諸作を場に上せき。

「閏訥子名歌誉」　寛政六年閏十一月、都座。
「江戸砂子慶曾我」　同七年正月、同座。
「五大力戀緘」　同上二番目。
「遊君操吉原養育」　同年七月、同座。
「源平柱礎暦」　同年十一月、桐座。澤村宗十郎の清盛火の病。
「曾我大福帳」　同八年正月、同座。
「隅田春妓者容性」　同二番目。
「戀闇皐月嫐」　同年五月、同座。
「時花唄比翼三紋」　同年七月、同座。
「銀積松行平」　同年十一月、同座。

「大注連門松曾我」　同九年正月、同座。
「青楼詞合鏡」　同二番目。
「けいせい時雨櫻」　同年四月、同座。
「月武蔵野秋狂言」　同年七月、同座。
「雪女諸鉢木」　同年十一月、同座。
「青衣始小袖曾我」　同十年正月、同座。
「富岡戀山開」　同二番目。
「澪標涙色眺」　同年三月、同座。
「智仁勇三面大黒」　同年七月、同座。
「大内山戀墓白浪」　同二番目。

此等悉く宗十郎及び三世菊之丞の爲に筆を執れるものなり。就中「五大力」は彼の「島鵆」の一部分ながら、大阪と同じく喝采を博し、これより五瓶の名を高め、「隅田春」「富岡」と共に今尚は劇壇に繰返され

つゝあり。斯くて、寛政十年冬、彼れは宗十郎に伴はれて歸阪せり。

「傀儡淺妻船」　寛政十一年正月、大阪、中座。澤村宗十郎の松並庄九郎。新大橋の仇討を脚色す。

この他、江戸にて上場せし「柱礎暦」「隅田春」等を繰返せしが、一年にして再び江戸へ來り、櫻田治助と一座して、四世團藏の爲め、二番目狂言に、

「幡隨長兵衛」　寛政十二年正月、中村座。

の作あり。これより團藏がために筆を執ること二年間。

「源氏雲金隈取」　寛政十二年十一月、同座。
「辻花戀待合」　同二番目。
「全盛鳴門噺」　享和元年五月、同座。

偶彼れと因縁淺からざりし三世宗十郎歿せしかば、其の遺子源之助（後に四世宗十郎）を率ゐて五世幸四郎に屬し、これより筆を絶つに至るまで、大かた幸四郎の爲めに作せり。即ち、

「男哉婦將門」　享和元年十一月、市村座。
「歳男德曾我」　同三年正月、同座。
「三國一妹盃」　同二年正月、同座。
「江戸紫由縁十德」　同二番目。
「江戸八景戀譯里」　同年三月、同座、二番目。
「初雪物見松」　同年十一月、同座。
「棹歌戀白浪」　同年八月、同座。
「梅櫻松相生曾我」　文化元年正月、同座。
「當奥羽壷碑」　同年十一月、同座。
「四花菱比翼吉原」　同二番目初日。

「四紅葉想思深川」同二番目後日。
「卯花戀中垣」同年四月、同座。
「漢文韓文手管始」同年九月、同座。
「吉原俄番附」同二番目。
「顔見玉簾雪故郷」同年十一月、同座。
「花雲曙曾我」同二年正月、同座。
「江戸性男鑑」同二番目。
「伊達姿花見御殿」同年三月、同座。
「小室節錦江戸入」同年八月、同座。
「茲來著綿菊嫁入」同二番目。
「けいせい吉野鐘」同年十一月、同座。
「梅柳魁曾我」同三年正月、同座。
「河原噂京諺」同二番目。
「湖月照天松」同年九月、同座。
「壯平家物語」同年十一月、同座。
「橘盤代曾我」同四年三月、同座。
「往昔元吉原」同二番目。
「金龍山創礎」同年八月、同座。
「萬代不易戯場棊」同年十一月、河原崎座。

これを絶筆として、文化五年二月二日、六十二歳にて歿しき。
五瓶の作に敬服すべきは其の脚色の整然として統一を失はざる事と、且つ時代物をも世話物をも能くせし事なり。而も始めは京阪の劇壇に人となりて、中ごろ能く江戸風の長所をも折衷し、東西到る所として其の作の歡迎せられしは彼れが才能の大なりしなればならん。すべて、江戸の人氣は理智よりも感情に走り、特に勇壯を好むがゆゑに、其の脚本も彼の「荒事」の如き、荒唐にして單純なるものゝ悦ば

れ、之れに反して、京阪は感情よりも理智を、勇ましきよりも賢しきを尙べるゆゑ、例へば、同じ俠客の仕打にても、江戶にては只腕づくにて取捌くを、京阪にては理を說いて相手を懲らすといふ趣き多し。加之、脚本の結構に重きを置き、其の條理の滅裂なるを嫌ひ、「筋が通らぬ」「理窟に詰まぬ」、もしくは「淺はかにして喰ひ足らず」とは上方人の常に江戶狂言に對する非難なりき。斯くの如き嗜好は專ら好奇に走り、「身代り」「やつし」など趣向の變化極まりなきこと、殆ど今の探偵小說の如きものを悅びたり。されば「狂言あまりに入組みて腑に落ちず」とは江戶人の上方狂言に對する不滿なりき。これも弊に屬すと雖も、要するに、京阪の脚本は江戶に比して複雜なりしのみならず、人心の機巧を尙びしと、操り芝居の盛んなりし事とは、謂はゆる大道具の發達を促がし、隨つて其等の大道具を利用したる上方の作風は愈江戶に比べて一日の長ありしなり。五瓶卽ち之れを東に移植して、江戶に門戶を張ること前後十五年、櫻田治助以後の立作者として重んぜられしは故ありといふべし。

五瓶はまた江戶の劇場の古例を改むること多かりき。其のうち最も彼れが功績とすべきは、寛政七年正月、都座にて、第一番目「江戶砂子慶曾我」、第二番目「五大力戀緘」と一日の脚本を二つの標題に分ちたる事なり。蓋し、江戶にては彼の津打治兵衛が時代狂言と世話狂言とを一つの脚本中に收め、例へば曾我の狂言へ八百屋お七を交へ、お七の本名を三浦の片貝、小姓吉三郞の本名を曾我の禪司坊となし、

或ひは曾我五郎が國姓爺と名を變へ、十郎が平野屋德兵衞となり、「太平記」へお花半七を出すの類にして、一日の狂言いろ〳〵に眼先き變りて面白ければ、此の作風は終に後世の模範となり、斗文、二三治、三笑、治助、なども此の例を守りて、即ち四番續きの中にて、第一番は純粹曾我、第二及び第三番目には、お初德兵衞、小栗判官、又は梅忠などを附會し、終に第四番目に至り、此等の局を統ぶる事となれり。尚ほ一方に、寶永五年正月、中村座にて「傾城嵐曾我」を演じて大入を取りしより、毎年の正月狂言には必ず曾我を題目とすること永く各座の吉例となり、明治前後までも此の慣習を廢せずして、年々の新作いづれも趣向を異にするも、對面と貧家の場とは必ず之を出すを法則としたりき。斯くの如く種々なる時代と人物と事件とを強ひて同じ脚本に網羅する事と、其の脚本の題目を必ず曾我に限る事とは、其の作を不自然ならしむると共に、其の作法を不自由ならしめたりき。されば、天明元年二月、市村座の「戲場花萬代曾我」に於て、作者櫻田治助は、其の四番續きの第二番目へ、お夏清十郎、お千代半兵衞、お半長右衞門、この三つの古脚本を三日替りに出し、始めて在來の如く、甲乙何等の關係なき人物事件を挿み、其の間の連絡を強ふるの弊を破りしが、今や五瓶によりて、第一番目と第二番目との標題を別にするの例を創め、全く相異れる脚本を並べ演ずるの自由を許せしかば、此れより第一番目は時代物、第二番目は世話物と二樣に分つを得ること、今日の如きに至りたり。尚ほ正本を十三行に記す事、何段目

といふべきを何の場と書きし事、また「顔寄せ」と稱へて、顔見世興行の前に、部下の作者を自宅へ集合せしめし事、など此等劇場の小事に於て彼れによりて改革せられしもの尠からざりしといふ。

彼れは亦機智頓才に富みたりき。寛政四年、彼の宗十郎が歸阪の目見得として、中座にて其の「入間詞大名堅義」を上場せし時、

宗十郎、大友宗麟の養子大友市之正にて、二幕目行列の場に、屋號紀伊國屋といふに因み、暗に紀州侯の鹵簿を擧び、座中總勢、長方、茶屋の若者までを卒伍となし、舞臺より花道まで續いて目ざましく、殊に馬は小道具のにては面白からればとて、二頭の馬を借受け、鞍置きて曳かする事となしけり。こは皆五瓶の畫策なりしが、觀客は皆奇として初日より好景氣なりしかど、第九日目に至りて、花道にて一馬放溺し、他の馬も共に遺矢せしより觀客の喧囂甚しく、馬は驚いて奔跳し、此の事町奉行の知る所となり、與力同心出張して此の紛擾を鎭靜し、負傷を救護して芝居は是が爲め三日間の遠慮休場をなし、其の頃の落首に、

引き連れて馬に小便かけられて年（誦子）の始めの御幣（五瓶）かつぎは。

これより小道具の馬に改めたりといふ。此れ一笑話として人口に膾炙すれど、彼れが寫實に熱心なりしは多とすべきなり。又翌五年の事なりき。

「勝武華奴道成禮」に尼が崎武庫川などにて年々催す花火狼烟を舞臺にして見せ、花道、戸屋の内へ筒を向け打こめば五色の絹など、向ふ棧敷の上に現れ出る趣向なり。作者並木五瓶奇を好む癖ありて、朝四つ時とも思ふ頃、序切にて木鐵砲の音二三十も鳴らせば、舞臺にてはいかなる事をなするやらんと、早く見物をよせる巧みにありし。子持の見物は音に恐れて泣子を抱へ逃て出るなど騷動な

り。甚不評にて「けいせい陸玉川」とかはりたり。

五瓶は作劇の方式及び故實を著はし、題して「戯財錄」といふ。其のうちに彼れは劇の價値を說いて曰く、

戯場の作文は他(物語、詩歌、連俳等)に劣りて聞ゆれども、淨瑠璃五段、歌舞伎六段物の狂言中に 當時老若男女によらず、一文不通の鈌物まで、早く其意に通達して勸善懲惡を元とし、喜怒哀樂目前に情をうつし、心意を貫き、感能たる事は嘘と知りながら、腹を抱へて涙を膝に流すも、其實の萬人に徹する故なりかし。……

又作者の責任を說いて曰く、

芝居は城廓、金主座元は大將、役者は勇士、作者は軍師なり。軍師に威勢なくば勇士下知に從はず、狂言といふ魚鱗鶴翼の備へ亂れるゆゑ、見物の敵に勝つ事能はず、終には雜兵の如く成て堀の埋草にならん……。

彼れは、又事實と脚色と修辭との關係を說いて曰く、

筋は骨、仕組は肉、せりふは皮なり。骨肉皮の三つ連足すれば名作と知るべし。時代は骨太になるがよし、御家は肉みちたるがよし、世話は肉薄きがよし。何れ一場に限らず、骨より肉に渡り、肉より皮に渡り、連足して皮を洗ひ、見よくせざれば一人の美男美女は全からず。是までの當り狂言を見ても考へ見るべし。

其のほか、春夏秋冬の人情によつて作を異にすべしといひ、「机に居る時、三千世界は我物と思ひ、向うに敵なしと心得、役者は我者にして遣ふべし」といひ、心中狂言を一夜漬けにて書くには、「噂の虚說と內證の實說とを合す」べしとて、「實說ばかりにては御上に差支へる事多し、元より遠方の見物にこたへ

す、虚説は段々人傳に遠方までも聞えてあるゆゑ人氣に合ふものなり」といひ、彼れが經驗より悟入せる言として耳を傾くべし。

又彼れは作者となるの祕訣を語りて

第一氣轉、第二氣儘、第三上根、第四大膽、第五愛嬌、作者は此の五ヶ條を守るべし。（「作者店卸」）

といへりと。

或る人彼れに難じて、奈河龜助が表號は字義にかへり、「曲輪文章」の外題に足下は「歸命」と書いても「あなかしこ」とは如何といひしに、彼れ笑つて曰く、

狂言綺語とは是をいへり。戲場の表號は學者に見せんとにはあらず。作者に學文の心あつて「金門五山桐」と呼ばるべきか。我が書く所は芝居の外題とはいふなり。

と答へしとぞ。彼れが狂言作者としての抱負は此の言によりても知らる。寛政十二年、櫻田治助と中村座に一座せし時、五瓶は二番目の作を受持しかば、一番目に「富士三升幸曾我」と命名せし立作者の治助

五瓶さん、二番目の名題は如何といふ。ハイ、二番目は幡隨院長兵衛といふ。あの名題は何と申しますといへば、五瓶又幡隨院長兵衛といふ。櫻田は恟りして手を打つ、さすがは、五瓶大人なり、中々江戸の作者に向うて名題なぞは付けられぬものゆゑ、斯く幡隨院長兵衛とばかり付けしは濟れの作者なり。

と激賞せりと。此は寧ろ五瓶の皮肉なりしかも知るべからず。又「五大力」のうち「いつまで草のいつま

で」といふ獨吟をうたふ件あり。此の一句より以下は在來りの上方唄なるを「並木五瓶述」と署名して出版せしかば、其は穩當ならじと門人松井由輔が詰りしに、己が名を記さずば誰か買ふ者のあるべきと答へたりしが、此の小唄の摺物江戸に持囃されて二千餘部を賣りたりといふ。

大阪に在りし時は煙草店を營み、後に今宮にて酒屋を出せし事ありといふ。江戸にては高砂町に宅を構へて淺草堂と號し、「並木といふ名から思付いて横店に表間口二間の藥見世を出し、雷神風神の門を彼風づくりにして、敷石と見せたる半疊の疊を敷き、雷香といふ丸藥に風の振出し藥を商」へり。又門人並木陸六を雷次、高柳宗次を風次と改めらせ、雷神と風神を弟子にして、己れを觀音菩薩に擬せしなり。

【補】森羅萬象が「反古籠」に曰く、「五瓶始て東都へ下れる時、古人松貫四紹介して、予に謁せん事を乞ふ。一日畫工北洲が家にて會す。其人沈默にして辯少なく、形り梨園中の人に似ず。夫より後、時々來て事實の典故を問ひ、一事を得ることに草稿に記して何もせず。去年春、病間ある時、いひけるは、我近來精力薄く、加ふるに、去にしより老病こもゝ至る。依て一生一代の作をなして舞臺を退き、日ごろたしなめる俳諧道に遊ばんとする事我心願なりといひしが、遂にその事意の如くならずして、淺草精舍中一堆の墓の土となる事惜むべし」と。

門人多かりしうちに、篠田金治最も著はる。後に立作者となりて二世五瓶の名を襲ぎしが幾くもなく死せり。

萬作と五瓶とに次いて近松德叟（寶曆二—文化七）あり。俳諧師小野紹連の孫にして、父は大和屋勝右衛門とて

大阪の伏見阪町に娼家を營めり。彼れの幼名を勝助といひ、少時より劇を好み、淨瑠璃作者近松半二の門に入り、恰も伏見阪町の伏算といふが劇場の金主たりしゆゑ、其の勸めにより、終に歌舞伎の作者となり、德三（又德叟とも）といひ、萬作五瓶の下に屬しき。寛政七年（四十四歲）、始めて立作者となりしが、翌八年五月四日、伊勢の古市の油屋にて遊客孫福齋宮が多くの人を殺傷せし事を聞き、急に脚色して七月廿五日より大阪の角座に上場し、題して「伊勢音頭戀寐劔」（二世文七の福岡貢、芳澤いろはの女郎お紺）といへり。此の狂言大當りしなりより彼れが名聲頓に揚り、續いて左の如き諸作をなしき。

「敵討安榮錄」　寛政八年九月、角座。二世文七の小栗栖十兵衛。
「百千鳥鳴門白濱」　同九年二月、同座。
「淺草靈驗記」　同年五月、同座。尾上紲三郎の大川友右衛門、芳澤いろはの印南數馬。
「けいせい狹妻櫛」　同十年正月、同座。
「けいせい會稽山」　同十一年正月、同座。當時ありし新大橋の仇討を脚色す。嵐吉三郎の寺子屋慶三郎。
「紅楓秋葉話」　同年九月、同座。小説「棧物語」を脚色す。
「けいせい花山崎」　同十二年正月、同座。
「俠競廓日記」　同年九月、同座。油賣與兵衛。芝屋芝叟が支那小説「賣油郎」を翻案せるを更に脚色す。
「名作切籠曙」　享和元年九月、大阪、中座。高槻騷動の里見伊助、

「けいせい廓源氏」同二年正月、物草太郎と金魚屋金八、

「けいせい筥傳授」文化元年正月、角座。筑紫權六。

「いろは歌譽櫻花」同三年正月、同座。

「けいせい英艸紙」同四年正月、中座。

「柵自來也談」同年九月、角座。栗杖亭鬼卵が小說を脚色す。

「けいせい輝双紙」同五年正月、同座。京傳の小說「稻妻表紙」を脚色す、中座に於ける蔦助の「品評林」と競爭なり。嵐吉三郎の名古屋山三と梅津掃部と佐々良三八。

「鏡ゝしの紅翅」同年五月、同座。當時ありし曾根崎の藝子兒殺しを脚色す。嵐吉三郎の船越十右衛門。

「舞扇南柯夢」同年九月、中座。曲亭馬琴の小說「南柯夢」を脚色す。

「島廻弓張月」同年十一月、同座。馬琴の小說「弓張月」を脚色す。

彼れは亦司馬芝叟が講演を脚色して「朝顏日記」を作せしも、盲女深雪に扮して琴を彈くべき俳優のなかりし爲め、上場するを得ず、後年、奈河晴助、更に修正して「筑紫琴」と題し、始めて劇壇に實演せられたりき。斯くて文化七年八月廿三日、五十九歳にして死せり。

〔補〕或ひは六十歳といひ、或は五十六歳といふ。玆には假に「名人忠長鉄」に從ふ。

彼れが作は凡そ二つに分類し得べし。第一は當時の出來事を脚色したるものにして、彼の古市の九人

切な脚色せし「伊勢音頭」を首めとし、新大橋仇討の「けいせい會稽山」、高槻騷動の「切籠曙」、藝子兄殺しの「しらし」など其の例なり。第二は新刊の小說を脚色し若しくは飜案せるものにして、彼の「自來也」「南柯夢」「弓張月」の如く、露に表題に示せるもののほか、「秋葉話」「桟物語」に於ける、「廓日記」「賣油郎」に於ける、又「筥傳授」の中に上田秋成が「秋雨物語」を、「いろは歌」の中に曲亭馬琴が「四天王剿盜異錄」を取りたるが如きものなり。蓋し當時小說家には京傳馬琴を始め名家の續出し、隨つて其等の作が歌舞伎の脚本に移植せられたるは自然の趨勢なりしと雖も、先輩の萬作五瓶等之れを能くせずして、德叟に至りて始めて之を實行せしは、彼れが創作の才に乏くして、寧ろ編纂の技に長ぜしを證するものといふべし。

德叟以後名手なかりき。以下揭ぐるものは殆ど凡庸の器を免かれず。

奈河七五三助（寶曆四―文化十二）は大阪道頓堀の福新といふ茶屋の子にして、通稱を金次郎といひ、後に日本橋に末吉屋といふ旅宿を營めり。龜輔の門に入りて作者となり、寛政の始めより著作を出せり。

「けいせい北國曙」　寛政元年正月、大阪、中座。嵐雛助の柴田勝重と奧方小谷の方。

「大振袖粧湖」　同年三月、同座。關が原軍記。嵐雛助の石田爲久と佐々木盛綱、山下金作の宇治の方と微妙。

「墻礎花大樹」　同四年二月、大阪、角座。市川團藏の木下藤吉、淺尾爲十郎の山口九郎次郎。

「色競續箭戰」　同年五月、同座。「花大樹」の續編、尾上松助の伴天連。

就中「花大樹」と「北國曙」とは彼れが當り狂言なり。寛政十二年（四十七歳）冬、江戸中村座へ下りしが、享和二年十一月には大阪へ歸りて中座の立作者たり。翌三年冬、再び江戸の河原崎座に在り、同五年は大阪の角座に其の名を見しが、同十一年十月廿日、六十一歳にて歿しき。彼れは「永く此道に染みながら、多くは院本を評文し物、或は古狂言を添削するのみにて、一部の趣向立ちたるもの少し。それゆゑ戲場者流より洗濯物の七五三助と異名を附けたり」といふ。

奈河篤助（明和元―天保十三）は泉州の一向宗の僧なりしが、還俗して大阪へ來り、七五三助の門に入りて、始め十九助といひ、後に篤助と改め、狂言方より次第に昇進し、寛政八年、德叟が「伊勢音頭」を上場せし時、彼れは京都南側芝居に在りて、同じ事實を脚色し、題して「川崎踊拍子」（二世三五郎の遠山齋宮、山下八百藏のおこん）といひ、「伊勢音頭」よりも十日後れて八月四日に初日を出せしが、終に德叟の作に其の名を奪はれたりき。其の後の作は、

「けいせい薺佳節」　文化三年正月、大阪、中座。三世歌右衛門の花園道常、切に「鴛鴦」の所作。

「けいせい品評林」　同五年正月、同座。京傳の小説「稲妻表紙」を脚色す、角座に於ける德叟の作「草双紙」と同事なり。片岡仁左衛門の梅津掃部と佐々良三八。

「復讐高音鼓」同年八月、大阪、角座。馬琴の小説「三國一夜物語」を脚色す。片岡仁左衛門の淺間左衛門、嵐三五郎の富士太郎。

文化七年（四十七歳）、三世歌右衛門に招かれて江戸の中村座へ下り、同九年正月、同座の二番目、「臺頭霞彩幕」（三世歌右衛門の茜屋半七、半四郎の美濃屋三勝）を櫻田治助と合作して大當りを取れり。同年冬、歌右衛門と共に大阪へ歸り、翌十年正月、中座にて「けいせい繁夜話」（歌右衛門の柿木金助）を作せしが、十一月、再び江戸の中村座へ下り、名を一洗といひき。蓋し一洗は初世歌右衛門の俳名なりしを、三世歌右衛門より讓られたればなり。翌十一年正月、「色情曲輪蝶花形」（「双蝶々」の改作、三世三津五郎の南方十郎兵衛）に大當りを取りしが、十二年十一月は、大阪の角座へ現はれ、更に二世龜助と改名せり。同十四年三月、三たび江戸へ下りて桐座に現はれ、文政二年は舊名篤助を名乘りて大阪の角座に出で、次いで翌三年十一月、中村座の金主大久保今助に招かれて再び東下し、一洗と稱せしが、同四年五月、市川鰕十郎が「御所櫻」の辨慶にて大失敗を取りしかば、今助は其の罪を篤助に歸して、上方へ逐ひたりき。此の頃より京阪にても彼れが聲名既に衰へしかば、一洗の名を歌右衛門に返して絶交し、濱芝居の興行師京友に聘せられて其の作者となり、剃髪して金龜堂一泉と號し、晩年に京都の眞葛が原へ茶店を開きて一服一泉といひ、天保十三年二月三日、七十九歳にて歿しき。

彼れは「趣向放曠にして狂言を手廣に書き、首尾調はぬ事多」かりき。されば師七五三助と共に其の伎倆

に於て賞賛の價値なかりしが、彼れの長所は先輩龜助と同く、本讀（脚本の朗讀）にありたりき。

披講の間にて、一座中の顏色を詠めて、正本を實讀みし、さも面白く、よき役のやうに讀むがゆゑに、俳優手を打つて納まる。後、書抜を取ればさまでよき役にもあらぬゆゑ、又一洸に欺されしとつぶやくもをかし。（「傳奇作書」）

されば、歌右衛門と絶ちてより、京都に於て座敷へ招ぜられ、脚本を披講せし事ありきといふ。

彼れは又作劇の法を説きて「作意編」の著あり。其のうちに曰く、

或人一泉に云て曰く、何ぞ新しく面白き趣向ありや。一泉無しと答ふ。難じて曰く、作者にして趣向無しとは如何。一泉答へいふ、狂言は役者にあり、譬へば、千金を求るもの千兩の力あり、百兩を與ふるものは百金の術あり……。

以て彼れが作劇に對する主張を窺ふべし。

若太夫座にて多見藏源之助なぞの顏觸に狂言を書いて本讀せし時、三幕目に至り、金方より、誠に面白く出來たり、併し先狂言も三幕目御殿なりしに、又今度も三幕目御殿なり、同じやうになりはせぬかと云ひしに、御尤の事なりとて、其の正本を見る前にて破り、明後日になり、前後を其儘にて世話場に書替へ來りたるに皆々驚入りたり。（「名優言行錄」）

彼れは達筆にして且つ當意即妙なりしなり。

傳へいふ、彼れは頭髪の赭かりしゆゑ、綽名して「猩々の篤助」といへりとぞ。

奈河晴助（天明二―文政九）は京都に生れて宮島屋嘉兵衛といひ、素人俄狂言の作を好み、篤助の門に入りて、京都の小劇場に筆を執りしを、西澤一鳳の父利右衛門に勸められて大阪に下り、専ら二世嵐吉三郎の爲め

に筆を執り、佳作として後世に繰返さるゝもの尠からず。

「敵討義戀柵」文化九年九月、大阪、角座。二世吉三郎の永井源三郎と百姓藤作。

「けいせい筑紫琴」同十一年正月、角座。二世吉三郎の宮城阿蘇次郎、澤村田之助の深雪。實は近松德叟の遺作を修正せるなり。

「敵討浦朝霧」同十二年九月、大阪、中座。女盜賊と巡禮殺し。二世吉三郎の綱干右兵衛輔と小割傳内。

「越前三國夫婦塚」同十四年十一月、同座。二世吉三郎の玉矢眞平。

「遠江瀉戀賊」文政二年九月、京都、南側芝居。二世吉三郎の日本駄右衛門、嵐小六の牙のお才。

彼れは後に奈河の姓を改めて豐晴助といひ、文政九年正月廿九日、四十五歳にて歿しき。

晴助も三世歌右衛門の自作を助け、其の「けいせい染分手綱」の三幕目は彼れの筆に成りしが、本讀の時、序幕の筋が三幕目へ通らざるを憤り、歌右衛門と刺違へんとて匕首に手を掛けしを西澤一鳳が止めて、事なきを得たりといふ。彼れの作は「狂言の筋すら〳〵として能く解れども、世界狹くして端手になく」只、二世吉三郎、嵐小六、淺尾工右衛門などの如き名優によりて仕活かされしゆゑ、生命を長くせるなり。

此のほか俳優三世歌右衛門が金澤龍玉と號して作者たりし事は既に第二篇第十章に於て述べたり。龍玉が部下に濱松歌國（安永五―文政十）、金澤芝助（安永六―文政十一）金澤一洗（――）等あり。歌國は島の内布袋町に住して、布屋氏助、又清兵衛といひ、颯々亭南水と號して小說家たり、且つ役者評判記にも筆を執りしが、

三世友右衛門より抗議せられて終に評判記を書かずなりぬ。狂言作者としては始め濱松氏助といひ、二枚目若しくは三枚目の地位にありたり。別に「南水漫遊」及び「攝陽落穂集」の著あり。前者は劇道の來歴を記し、後者は大阪の故事を述べたり。芝助は始め奈河十喜助といひ、一洗は始め奈河恒助といひ、此等いづれも作者として特筆すべき功績なかりき。

又二世金澤龍玉（天保十三―）あり。奈河篤助の門人にして始め元助といひ、後に本助と改む。師の妻に隨ひ、嵐德三郎と共に江戶へ下り、嵐冠十郎に紹介せられて、三津五郎の庇護を受け、二世治助の死後終に立作者となりしが、天保六年歸阪して、歌右衛門より龍玉の名を讓られ、同八年正月歌右衛門の命によりて筆を執りし「けいせい玉手綱」（テレメンといふ藥屋にて嫁に轆轤首なりと惡名をつけし筋）あり。

又西澤一鳳（享和二―嘉永五）あり。彼れは元祿享保時代に淨瑠璃作者にして且つ小說家なりし西澤一風の曾孫なり。一鳳は傍ら書肆を兼ねて正本屋九左衛門と稱しき。一鳳の孫利右衛門、また文才あり、當時の作者文人と交り、且つ始めて劇場に用ひらるゝ脚本を版行せしが、一鳳は其の次男にして俗名を利助といひ、堺筋淸水町に分家して書肆と貸本業とを營み、傍ら狂言を脚色して之れを舞臺に上せ、而も最初は自家の名を出さゞりしも、後には「スケ」の名義にて番附に署名し、狂言綺語堂といへりき。天保の初めには大かた三世歌右衛門もしくは二世冨十郎の爲に筆を執り、

「けいせい雪月花」その第三幕目。天保元年正月、大阪、角座。歌右衛門の石川五右衛門。
「扇屋熊谷」「源平躑躅」の追加。同三年二月、角座。歌右衛門の熊谷。
「花櫓木吉野山路」「千本櫻」の鮨屋の改作。同六年五月、中座。富十郎のお里。
「花魁莟八總」同七年正月、中座。「八犬傳」を脚色す。富十郎の伏姫。
「紅色桔梗女團七」同年七月、北新地芝居。富十郎の女團七。
「女猿曳門出諷」同九年六月、堀江芝居。富十郎の女猿廻し。
「けいせい濱眞砂」同十年正月、角座。富十郎の女五右衛門。
「葉越廼月女熊坂」同年夏、天滿天神本納芝居。富十郎の女熊坂。

天保十二年（四十歳）三月、江戸に遊びて市村座に客分たり。同年十月、同座燒失せしかば暫く河原崎座に寓し、同年冬、歸阪せしが、七世團十郎が江戸を追はれて同地に漂泊せしより、時に彼れが爲めに筆を執りき。

「花菖いろは連歌」天保十二年五月、江戸、市村座。「忠臣藏」の改作。歌右衛門の七役。
「秋花蝶々色成秋」同年八月、同座。「双蝶々」の改作。歌右衛門の濡髪長五郎と南與兵衛。
「岩藤濱白石」同十三年三月、河原崎座。「鏡山」と「白石噺」を合せし新作。七世團十郎の宇治常悅と岩藤。
「紅楓いろは文庫」同年秋、大阪、角座。富十郎の爲め。

「伊達姿」　弘化元年九月、中座。「先代萩」の追加、七世團十郎の鹽澤丹三郎。
「松山開城」　同三年三月、角座。「忠臣藏」追加、團十郎の由良之助。
「昔語稻妻帖」　嘉永元年三月、河原崎座。八世團十郎の不破伴左衛門」

弘化四年（四十六歳）正月、市村座へ聘せられて再び江戸に下りたり。居ること三年にして歸阪せしが、祖父の名を襲ぎて九左衛門と改め、以後劇作を爲さず、專ら雜著に從事し、嘉永五年十二月二日、五十一歳にして歿しき。

一鳳の作は舊劇の部分的修正を施せるものか、もしくは二三齣を追加せるもの多く、眞の創作とすべきもの無かりき。彼れは作者としてよりも寧ろ劇道の古實家として重きをなし、「傳奇作書」廿一卷、「脚色餘錄」九卷、「忠臣藏類聚大成」四十八卷、「當世榮花物語」十八卷、など此の種に關する著述もしくは編集多し。

此のほか清水正七あり、或ひは賞七といひ、先勝軒とも松壽軒ともいへり。又嶺米八十助あり、後に七五三助と改めたり。二人は天保以後の作者たりしも共にさしたる作なかりき。

第廿四章　江戸の作者と其の脚本

櫻田治助——彼れが作の大略——彼れが長所——豐後淨瑠璃の作。——中村重助。——増山金八。——瀬川如皐。——寶田壽來。——笠縫專助。——木村園治。——村岡幸治。——松井由輔。

文化文政時代な代表せる作者——四世鶴屋南北——世話狂言——怪談物——彼れが短所。——二世勝俵藏。——二世瀬川如皐。——福森久助。——二世櫻田治助。——二世並木五瓶。——本屋宗七。——松井幸三。——立川焉馬。——花笠魯助。

三升屋二三治。——寶田壽助。——二世中村重助。——三世並木五瓶。——五世鶴屋南北。

三世櫻田治助。——彼れの伎倆。——三世瀬川如皐——彼れが當り作。——二世河竹新七——彼れが長所。

さすがに全盛なりし二三治及び三笑も今は年老いぬ。俳優にては四世團十郎すでに耳順に垂んとし、其の子五世團十郎、其の門人四世幸四郎、並びに初世仲藏などの名手漸く輩出するに及び、江戸の劇壇は自ら一轉機を生じき。櫻田治助（狂言堂左交、享保十九—文化三）、恰も此の時に出で丶此等新進の諸優と相結託し、その富贍なる文才は能く一世の好尚を風靡して、前後四十年の久しき間、江戸作者の巨擘として稱せられき。

〔註〕「作者店卸」及び同書を引據せる書に寛延元年の出生なりとせるは誤れり。

治助は二三治の門下にして、本姓を田川、通稱を笠屋善兵衛といひ、幼名を治三郎といひき。寶暦八年（廿五歳）十一月、作者見習となりて市村座へ出でしが、同十年春、大阪へ上り、四年を經て、明和元年（卅一歳）に江戸へ歸りき。

彼れを引立てたるは三世團藏なりき。明和五年の春、團藏が座頭たりし市村座に於て、始めて立作者となり、左の如き諸作あり。

「都鳥東小町」明和五年春、市村座。　「男山弓勢競」同年十一月、同座。
「伊達模樣雲稻妻」同年秋、同座。

翌六年十一月、中村座へ轉じき。當時、同座は江戸役者の最も先輩たりし四世團十郎を座頭とし、五世團十郎(當時幸四郎)、四世幸四郎(當時高麗藏)、初世仲藏、初世歌右衛門、二世菊之丞などの歴々なりしかば、去年漸く立作者たりし彼れが此の一座の爲に筆を執れるは實に異數の榮なりしならん。

「常花榮鉢木」明和六年十一月、中村座。　「鵺森一陽的」同年十一月、同座。
「鏡池俤曾我」同七年正月、同座。　「堺町曾我年代記」同八年正月、同座。

此の「年代記」に工藤祐經の役を四世團十郎に振りたるに、座元傳九郎が役割帳を見て、四世團十郎のを仲藏へ振替ふべしと言ひしより苦情を生じ、脚本いまだ脱稿するに及ばずして退座せしかば、中村重助更に補筆せりといふ。これより一年間は劇場に見えず。翌安永元年(卅九歲)十一月、再び中村座に現れたり。

「大鎧海老胴篠塚」安永元年十一月、中村座。　「傾城片岡山」同年七月、同座。
「和田酒盛榮花鑑」同二年正月、同座。　「御攝勸進帳」同二年十一月、同座。

此の「勸進帳」は彼れが傑作と稱せらるゝ一つなりき。當時、同座は四世團十郎父子、幸四郎、團藏など名題役者のみ十八人の大一座なりければ、治助の工夫にて、次の狂言は十二月の淺草市の群集を見かけ、木戸口へ「役者澤山につき、春狂言曾我の役割入札下され」との口上看板を掲げ、即ち見物の投票によれりとて、

「御誂染曾我雛形」　安永三年正月、中村座。

を出だし、是れ亦大入なりしが、座元と役者との間に苦情を生じて、中ごろより市川一門は袖を連ねて退座し、跡は仲藏を座頭として彼れが筆を執りき。

「顏鏡天岩戸」　安永三年十一月、同座。
「色模様青柳曾我」　同四年正月、同座。
「出世太平記」　同年八月、同座。

などの新作ありしが、安永四年十一月より一年間は劇場に出でず。其の翌年に至り、五世團十郎及び四世幸四郎の一座へ聘せられて再び筆を執れり。

「妻花雪黒主」　安永五年十一月、市村座。
「常磐春羽衣曾我」　同六年正月、同座。
「將門冠初雪」　同年十一月、中村座。
「國色和曾我」　同七年正月、同座。
「伊達競阿國劇場」　同年八年、同座。

此の「阿國劇場」の興行中、團十郎は幸四郎と不和を生じ、こゝを退きてより兩優久しく同座せざりしが、

治助は專ら幸四郎に隨身して、彼れが爲めに作劇をなしき。蓋し、是れより先き、彼れが恩人なりし三世團藏は既に安永元年に歿せしかば、主として團十郎及び仲藏の爲に筆を執りしと雖も、此の輩の長所は寧ろ時代物にありしを以て、治助は其の得意とせる世話狂言に於て伎倆を揮ふ事を得ず、ひとり幸四郎のみは世話事に長せるより自ら相結托するに至れるなり。以後幸四郎が爲めに作すること三年。即ち、

「瞻雪榮鉢木」　安永七年十一月、同座。
「御攝牽曾我」　同八年正月、同座。
「吾嬬森榮楠」　同年十一月、市村座。
「梅暦曙曾我」　同九年正月、同座。
「群高松雪幟」　同年十一月、同座。
「戲場花萬代曾我」　天明元年正月、同座。
「室町殿榮花舞臺」　同年七月、同座。

就中「萬代曾我」に至り、二番目に、お夏清十郎、お千代半兵衞、お半長右衞門を三日がはりに出だし、是れより一日の狂言を分ちて、一番目は時代、二番目は世話と互ひに趣向を異にするに至れり。偶々幸四郎が出勤せる市村座に財政困難の事あり、治助は同座を去つて團十郎及び仲藏に投じき。其處にての作は、

「四天王宿直着綿」　天明元年十一月、中村座。
「七種粧曾我」　同二年正月、同座。
「伊達染仕形講釋」　同年八月、同座。
「五代源氏貢振袖」　同年十一月、同座。
「江戸花三升曾我」　同三年正月、同座。
「傾城吾嬬富士」　同四年正月、市村座。

「大商蛭小島」同年十一月、中村座。

「初花觀曾我」同五年正月、同座。

斯くて、團十郎と幸四郎との確執は、天明六年に至りて和解せしが、以後治助の作は幸四郎の爲にせるもの最も多かりき。

「雪見月榮花鉢木」天明七年十一月、中村座。
「契情吾妻鑑」同八年正月、同座。幡隨長兵衞。
「唐相撲花江戸方」同年十一月、同座。
「富士陽曾我」寛政元年正月、同座。
「在柄天神利生記」同年三月、同座、佐野刄傷。
「平家評判記」同年七月、同座。
「小町村芝居正月」同年十一月、同座。
「春錦伊達染曾我」同二年正月、同座。
「女達高麗屋縞」同三年九月、「夏祭」の改作。
「松太夫雪伊達染」同五年十一月、桐座。松助の岩藤。
「舞臺花若榮曾我」同六年正月、同座。清玄と鏡山。
「振分髮青柳曾我」同八年正月、都座。

「富士見里和曾我」同九年正月、河原崎座。
「爲朝射親船」同十一年十一月、中村座。
「富士三升幸曾我」同十二年正月、同座。
「戻橋綱顔鏡」同年十一月、河原崎座。
「名歌德三升玉垣」享和元年十一月、同座。
「初紋日粉飾曾我」同二年正月、同座。
「越路花御江戸侠」同年十一月、中村座。
「松春壽曾我」同三年正月、同座。
「幡隨長兵衞精進俎板」同年八月、同座。五世幸四郎の長兵衞。
「樫花御利生鉢木」同年十一月、同座。
「敵討割組帶」文化元年五月、同座。
「菊相撲爵定」同年十一月、同座。

以上は彼れが作の大略のみ。斯くて文化三年六月廿七日、七十三歳にして歿しき。蓋し、五世團十郎の死せると同年にして、四世幸四郎よりは四年後なりしなり。

彼れが長所は時代と世話とを兼ね、而も時代物に於ては、荒唐にして勇壯なる江戸狂言の衣鉢を傳ふると共に、世話物に於ては市井の情態を盡くし、當時の流行を穿ちたり。松島半二、彼れの作を評して曰く、

人の趣向を盜むに、其の狂言の模樣を其儘には盜ます、筋の裏を盜むゆゑ、新作のやうにて化を顯さず。

と。これ治助を抑へたるやうにして、却て彼れを揚げたりといふべし。又彼れの作は警句に富み、能く江戸子的のユーモアを寫しき。「作者店卸」に曰く、

松本幸四郎(四世錦紅)をしたひて幡隨長兵衛など、せりふの口合に妙を得、世話狂言の時代違ひ、趣向を取組んで面白し。

蓋し、四世幸四郎が警句に長ぜし事は前にいへり。治助は其の風を學びしならん。彼の「助六」の脚本に主人公を始めとして登場の人物いづれも奇警の句を吐かざるなきは、其の著しき例なりとす。

當時江戸脚本の習慣として、狂言ごとに其の一齣もしくは二齣に必ず淨瑠璃を挿み、特に彼れが時代は豐後節の全盛なりしかば、豐後淨瑠璃の作に其の絢爛なる詞藻を擅まにし、著作の淨瑠璃凡そ百二十餘番のうち、「身代りお俊」、「戻駕籠」、「忍賣」、「高尾懺悔」など最も傑作として知らる。傳へいふ、彼れは小說家山東京傳と親交あり、京傳が其の著作せんとする時は、彼れに脚色を計り、彼れも亦淨瑠璃の新

作ある毎に京傳に敎へを受けたりき。天明二年、彼の「伊達染仕形講釋」の大切に、「高尾懺悔」の曲を出さんとせし時、其の草稿を京傳に示して益を乞ひしに、

　年が明いての樂みは、やがて御の字の名をつけて、無理酒飲まぬ身とならば、素足も野暮な足袋になり。

といふ句を見て「無理酒飲まぬ」を「二日醉ぬ」と改めなば尙妙なるべしと注意せられ、彼れは即座に其の通り添削せりといふ。片言隻句だも忽がせにせざること斯くの如くなりしかば、櫻田の淨瑠璃といへば當時に於ける梨園の名物として賞讃せられき。享和三年、彼の「御利生鉢木」のうち、常磐津伊勢太夫の語るべき「命懸色二番目」を彼れ自身に筆を執り、富本齋宮太夫の語るべき「よしや男袍着綿」を松島半二が擔當せしかば、齋宮は甚だ不滿の氣色にて「なぜ私の語る淨瑠璃を書いて下さらぬ」とて怨言を放ちきとぞ。

彼れは亦脚本の表題と、之れに加ふべき細書の文案とに妙を得、此れを櫻田風と稱して、後の作者の典型となれりき。寛政十一年の頃、江戸にて瓢の簪大いに流行せしが、此の冬、森田座にて、「太閤記」の狂言に、村岡幸治彼の櫻田風に傚ひ、「八百八町瓢簞簪」と題せしを、治助は評して、余ならば「八百八町瓢指物」とすべしと言ひきとぞ。

彼れは自ら持することを高くして、後進の俳優に膝を屈するを屑とせざりき。晩年、坂東簑助及び尾上榮

三郎の爲に曾我の對面のつらねを書きしが、

さて〳〵作者も情なき事になりしものかな。われ大和屋や音羽屋の忰につられて書かんとは思掛なき事なりし。

とて筆を投じて嘆じきと。されば、彼れが死するに臨み、遺言して曰く、

吾が歿後決して佛事追善をせざれ、唯務めて江戸狂言を滅絶せしむべからず。今より三十年を經なば、必ず京阪の如くに狂言は俳優より出づるに至るべし。汝等努力して此の弊を防げ。

といひしとぞ。果して彼れが歿後、狂言作者は全く俳優の奴隷となり、脚本は俳優の好惡によりて左右せらるゝに至りたりき。

門人淸水正七が讀書を好まざりしを、彼れは戒めて曰く、

北山先生は數冊の書を日日見て暇なき故に、雪隱へ行く時は義太夫本を讀みしといふ。貴樣、本を讀む事をきらひにして心掛あしく。兵書を見れば心に和らげ、歌書を見れば心に堅く持ちて、俳書を見る時は心に風流を用ふべし。この心にて狂言を考へてせりふ付くべし。(「作者店卸」)

といへりと。

治助は居を轉ずるの癖あり、始め淺草花川戸に住せしが、後に辨天山に移りて其處にて歿せり。又彼れは虛名を賣るに汲々たりき。

辨天山の池の端に住みし時、戸棚の後ろへ穴をあけてあり。いかがと問へば、此の内の米櫃へ米を入るとき、二朱が米みぐろしく、

前の戸棚の戸あいた時、米屋が來たこと人に知れるゆゑ、後ろへ穴あけて米を入れる魂膽、至つて見え坊と知るべし。(同上)

顏見世に花川戸より木挽町へ行き歸りとて、江戸橋より小船に乘り、船宿へ錢を出して炭一俵買うて、右の炭を火鉢へ入れ、火をくわつ〳〵と起してゐたるに、小網町通り行合ふ家根船、深川通ひの客など、あれ小舟に炭をおこして櫻田が乘つてゐる、あつたかい好い思付き、きついい櫻田ぢやアれえか、と言はれるを、是れ評判の第一となる趣向なり。(同上)

葛西より南瓜を賣りに來るを、殘らず買取つて、其のうち二つを酒手に進ぜませうといふ。商人嬉しく、又町内の長屋へ入り、今殘らず南瓜を買つた内は何商賣かと聞く。是れにて田舍へ歸り、村中へ櫻田の噺せし事、全く南瓜の惣仕舞にて名を賣りし工風なり。

(同上)

彼れは吉原を好み、夜毎に行かねば眠られざりき。

中の町を一週通りて、兩側の茶屋女房呼掛けるのを嬉く思ひ、江戸町より三丁目京町の格子で噺して、馴染の女郎、あすこからも此處からも、左交さん〳〵と言はれたく、中にも鶴屋の店で未だ知らぬ花魁ひとりありて、何うかして物を言ひかけられたい、と其の春の正月に、作り花の梅の枝に文を書いて括り付け、懸想文の心にて、名宛をして細々と認め、格子から內へ投げ込み、明日の晩、また格子へ立つと、その女郎立ちて、もし昨宵の御返事をと言はれ、逃出せしも可笑し。(同上)

治助の事を俗に「桃木」といへり。彼れが市村座にて名もなき書役の時、座主羽左衞門が櫻田といふ事のうろ覺えなるゆゑ「桃の木」とやらを呼びに遣れといひしに始まれりといふ。門人頗る多く、後に大かた立作者たり、而も二世治助の名は其のうちの松井半二によりて襲がれき。

治助と同輩に中村重助（故一——）あり。明和元年十一月、二三治に從ひて始めて中村座に出て、治助が市村座にて立作者となれる同五年十一月、彼れも森田座にて立作者たり。生死の年月を詳にせざれど、寛政六年以後の番附に其の名見えざれば、當時筆を絶てるなるべし。重助に「芝居乘合話」（寛政十二年）の著あり、芝居の故實、興行の手續等を詳述せり。

増山金八（吳山——）は治助及び重助より稍後輩たり。立作者として番附に出でしは、安永三年十一月の森田座を始めとし、寛政八年以後その名を見ず。而も此の間廿三年のうち立作者として出勤せるは、僅に其の半ばぐらゐにして、隨つて其の作も多からざりき。彼れが傑作と稱せらるゝは「四天王樓礎」（文化七年十一月、市村座。五世幸四郎の三日月お仙と怪童丸。）を第一とす。

瀨川如皐（元文四——寛政六）は三世菊之丞の兄にして、瀨川乙女といふ女方なりしが、天明三年（四十八歳）十一月より作者に轉業して、中村座の二枚目に出で、翌年十一月、桐座にて立作者たり。是より十年を經て、寛政六年正月廿三日、五十六歳にて歿しき。

寶田壽來（劇神仙、元文五——寛政八）は通稱を鈴木和八郎といひ、増山金八が門下たりき。彼れは立作者たらず、只重助、如皐等を助けて一齣づゝを綴れるのみ。就中、淨瑠璃「關扉」（天明四年十一月、桐座「重重人重小町櫻」のうち。）は彼れが傑作と稱せらる。寛政八年十七日、五十七歳にて歿しき。

笠縫專助（米夫――）は治助の門人たり。生死の年月詳ならざれど、天明元年十一月、市村座にて始めて立作者たりき。

其の他、木村園治（園夫――）村岡幸治（龜玉――）松井由輔（――）等あり。園治は治助の門人にして、晩年に紅粉助といひ、立作者たりしは寛政七年の河原崎座が最初ならん。始め小佐川常世に隨身せしが、四世團藏が大阪より下りしより此れに附屬し、「振袖隅田川」（寛政十年九月、森田座。團藏の惣貢。）は當り作の一たりき。彼れは淨瑠璃の詞章に巧みにして、且つ和歌俳諧を能くしき。性燥急にして面體口唇烏に似たるを以て「烏」と綽名せり。幸治も治助の門下にして、實は四世幸四郎が甥なりき。始めて立作者なりしは寛政八年の河原崎座なるべきか。「八百八町瓢簞簪」（寛政十一年十一月、森田座）は彼れが作として知らる。由輔は金井三笑が子なりしこと、既に「日本演劇史」第三編第十一章に述べたり。大和屋（半四郎）兄弟の庇護によりて作者となり、其の立作者として番附に見えたるは、寛政十一年十一月、市村座の「花櫓橘系圖」が始めにして、其の一年後より名を逸せり。さしたる文才もなかりしにや、「むき腹立ちの大野暮なり、三笑の血筋惜いかな〳〵無學俗物なり」と「作者店卸」に冷評せり。

此等の作者が榮えたると殆ど同時に京阪の作者たりし並木五瓶が、江戸に下りて治助と共に寛政時代の代表的作者たりし事は前編に述べたるが如し。而も此の二人に次いで文化文政時代を代表せる作者

を四世鶴屋南北（寶曆五―文政十二）となす。彼れは江戸乘物町の紺屋の形付職人伊三郎の子にして源藏といひ、後に伊之助と改め、父と共に紺屋の職に從事せしが、安永四年（廿一歲）、金井三笑の門に入りて作者となり、勝俵藏と號せり。始めは專ら三世彥三郎に隨身せしが、後に尾上松助に屬し、其の推薦によりて、文化元年（五十歲）、始めて立作者たりき。此の年、河原崎座の立作者は大阪より下れる奈河七五三助にして、俵藏は漸く二枚目の地位に在りしを、座頭たりし松助、特に七月狂言の執筆を俵藏に托したり。「天竺德兵衞韓噺」（松助の天竺德兵衞）は此の時の作にして、一座不人なりしに拘はらず、德兵衞の水中早替りに非常の好評を博し、七十餘日の大入を取りき。これより愈松助の爲に重んぜられて、同年十一月、同座にて始めて立作者となり、「四天王楓江戸粧」（松助の辰夜叉姬、男女藏の四天王）の作ありしが、當時、男女藏は別に立川焉馬をして己が出づる幕に筆を執らせ、又治助が高弟たりし木村園夫もスケとして出でたり。されば俵藏の名は立作者たりしも、實權はなかりしならん。次いで「御江戸花賑曾我」（文化二年正月、同座。二番目は小糸佐七）あり。焉馬は前回きり作者を斷念せしも、園夫のスケなること故の如くなりき。それより二三年間、俵藏は再び二枚目もしくは三枚目に下りて、同じく松助の一座に屬せしが、其の間にても、「彩入御伽艸」（文化五年閏六月、中村座。松助の小幡小平治）の如き、全く彼れの筆に成りき。斯くて、先輩たりし治助と五瓶とが殆ど相續いで歿しければ、彼れは再び立作者の地位に復

せり。これ實に文化五年（五十四歲）十一月なりき。

此の時、松助は既に老衰して、幾くもなく病死し、次期の名優には、立役に三世三津五郎、敵役に五世幸四郎、女方に五世半四郎等あり、尙ほ後進には三世菊五郎及び七世團十郎あり。彼れは此の輩の爲めに筆を執れり。

「松二代源氏」　文化五年十一月、市村座。賴光四天王と仲光。
「靈驗曾我籬」　同六年四月、同座。二番目に幡隨長兵衛と龜山仇討。
「高麗大和皇白浪」　同年九月、同座。幸四郎の石川五右衛門。
「心謎解色糸」　同七年正月、同座。田之助の小糸、松助の佐七。
「勝相撲浮名花觸」　同年三月、同座。三津五郎の白藤源太。
「當秋八幡祭」　同年八月、同座。風鈴蕎麥の娘殺し。

文化八年十一月に至り、彼れは俵藏を改めて始めて鶴屋南北といひき。蓋し初世より三世までの南北は道化方の俳優なりしが、彼れは三世南北の女お吉を妻とせしかば、作者として四世の名を襲げるなりき。

「雪吉野木悲顏鏡」　文化九年十一月、森田座。幸四郎の犬神、松助の伊賀局。
「例燭曾我伊達染」　同十年正月、同座。伊達騷動。
「お染久松色讀販」　同年三月、同座。半四郎のお染七役。

「曾我祭俠競」同年五月、同座。夏祭の改作。
「尾上松緑洗濯噺」同年七月、同座。轆轤首と累の化物づくし。
「御贔屓繋馬」同年十一月、同座。相馬御所と信太妻。
「戻橋背御摂」同年十一月、市村座。二番目に茨城屋鬼七。
「隅田川花御所染」同十一年三月、同座。鏡山と女清玄。
「復再松緑刑部話」同年五月、同座。天竺德兵衛とお夏清十郎。
「新織博多縞入船」同年七月、同座。博多小女郎と十木傳七。
「もとゝら〳〵との文月」同年同月、同座。お園六三の改作。
「世界花菅原傳授」同年十一月、同座。天神記の改作。
「清盛榮花臺」同十三年十一月、河原崎座。團十郎の清盛火の病。
「木挽町曾我賜物」同十四年正月、同座。團十郎の景清大日坊殺し。
「妹背縁利生組糸」同年同月、同座。本町綱五郎。
「櫻姫東文章」同年三月、同座。隅田川と清玄と小雛半兵衛。
「巖流島勝負宮本」同年九月、同座。巖流島の増補。
「惠咲梅判官贔屓」同年十一月、都座。菊五郎の源九郎狐。
「曾我梅菊念力弦」文政元年二月、同座。神道德次郎と帯屋長右衛門。

「松竹梅東鑑」同年五月、同座。菊五郎の八百屋お七。
「四天王産湯玉川」同年十一月、玉川座。幸四郎の相馬太郎。
「恵方曾我萬吉原」同二年正月、同座。團十郎の佐野次郎左衛門。
「宿花千人禿」同年三月、同座。團十郎の清盛と茜屋半七。
「梅柳若葉加賀染」同年五月、同座。幸四郎の鳥井又助。
「蝶鵆山崎踊」同年七月、同座。菊五郎團十郎の長五郎長吉。
「七小町櫓雫」同年十一月、同座。菊五郎の小町とお七。
「梅暦曙曾我」同三年正月、同座。菊五郎松助の清川文七。
「櫻舞臺幕伊達染」同年三月、同座。伊達の狂言。
「伊勢平氏額英幣」同年十一月、河原崎座。團十郎の崇徳院。
「三賀庄曾我島臺」同四年正月、同座。小萬源五兵衛、小雛半兵衛、お千代半兵衛。
「松　尾上岩藤」同年三月、同座。菊五郎の岩藤お初一日がはり。
「敵討櫓太鼓」同年五月、同座。お八つ太鼓と八百屋お七。
「菊宴月白浪」同年九月、同座。「忠臣藏」の改作。
「妹背山眺望千本」同年十一月、同座。妹背山と千本櫻。
「松柏鶯曾我」同五年正月、同座。平井權八と稲葉小僧。

「現金浮名羅」同年四月、同座。大吉のおかめ、菊五郎の與兵衛。
「靈驗龜山鉾」同年七月、同座。龜山仇討の改作。
「御贔屓竹馬友達」同年十一月、市村座。菊五郎團十郎和睦。
「八重霞曾我組絲」同六年正月、同座。お園六三と小糸佐七。
「浮世柄比翼稻妻」同年三月、同座。不破名古屋と幡隨長兵衛。
「𢶠雜石尊贐」同年七月、同座。伊賀越と巖流島。
「造物梅の由兵衛」同年九月、同座。菊五郎の梅の由兵衛。
「大和大和花山樵」同年十一月、同座。三津五郎の山姥。
「假手曾我當蓬萊」同七年正月、同座。曾我と忠臣藏。
「御國入曾我中村」同八年正月、中村座。權三權八と茜足袋屋。
「初冠曾我皐富士根」同年五月、同座。曾我祭。
「東海道四谷怪談」同年七月、同座。菊五郎のお岩と小平次。
「盟三五大切」同年九月、同座。忠臣藏と五大力。
「鬼若根舞臺」同年十一月、同座。鬼若丸とお染久松。
「舞扇千代の松稚」同年九月、河原崎座。菊五郎の松若丸。
「藤川船𦪷話」同九年五月、中村座。龜山仇討の改作。

「紫女伊達染」　同年六月、同座。伊達騷動の改作。

「曾我中村穐取込」　同年八月、同座。小雛半兵衛と三日月お仙。

「還花雪梅勝波鯨」　同年十一月、同座。源平盛衰記。

「獨道五十三驛」　同十年閏六月、河原崎座。菊五郎の東海道五十三次怪談。

「蝶蝶孖梅菊」　同年正月、同座。双蝶々の改作。

「雪御伽平家」　同年十一月、中村座。源平盛衰記とお七吉三。

「紅葉龍封文曾我」　同十二年正月、同座。曾我とお七吉三。

「金幣猿島都」　同年十一月、同座。相馬御所。

此の「猿島都」を一世一代として、文政十二年十一月廿七日、七十五歳にして深川黒船稻荷の地内にて歿しき。

南北が得意とせるは世話狂言にして、巧みに市井の風俗と流行とを穿ち、且つ其の間に滑稽の趣を盡し、此れ生世話狂言といへり。是れより先き、櫻田治助が幸四郎半四郎と結托して、謂はゆる二番目物に力を致せし事は既に述べたる如くなるも、未だ荒唐なる元祿劇の餘臭を脱するに及ばず、並木五瓶、また世話物を以て知らると雖も、上方狂言の理に落ちて、眞に江戸の社會を描くに至らざりき。南北に至り此の缺點を補ひたるは、一つは松助、四世幸四郎、菊五郎等、當時俳優の伎倆に因るべけれど、作者の功

また鮮少ならずとせんや。又怪談物は彼れが獨特の壇場たりき。これ怪談を演ずる名手たりし俳優の、前に松助、後には菊五郎のあるありて、彼れが作と相待ちて其の伎倆を發揮したればなり。而も彼れは此等怪談物に於て脚色の妙ありしのみならず、傍ら、道具、仕掛け、早變りなどの技巧によりて見物の好奇心を引くに力めたりき。然かのみならず、彼れは此等の技巧を工夫すると共に、世間の耳目を聳動すべく頻りに權謀を用ひたりき。彼の文化元年の「天竺德兵衞」に彼れが松助と計りて此等の早變りを切支丹の邪法なるべしとの噂を立て、町奉行より臨檢されし事は既に尾上松助の條下に述べしが、更に文化五年の「御伽草」（小幡小平次）の時、

或る夜、市村座の三階にて本讀をせしに、雨戸に恐ろしき音二度までしたり。翌日より松緑俄に熱病に罹り、是れは小平治の亡靈の祟りなるべしとて、回向院にて大施餓鬼を執行し、此の日は見物道の兩側に山をなし、怪我人も多かりきとぞ。翌日、はや松緑の病愈えて跡もなし。……然るに中日頃に至りて又もや病氣引をなして、榮三郎に持役を讓りける。

此れも實は例の世間の耳目を聳動せしめんため、南北と松助との間に計畫せられし詭謀なりき。

尚ほ南北が長所にして且つ短所なりしは、舊作の彼處此處を綴合せて新作とする事なりき。彼れが傑作と稱せらるゝ「花御所染」に鏡山と女清玄とを、「比翼稻妻」に幡隨長兵衞と不破名古屋とを、綯ひ交ぜにせるは稍その佳なるものなれど、「忠臣藏」の改作たる「月白浪」にて、猪の代りに越後獅子を出し、鐵砲

の代りに花火をつかつて「玉屋」と呼ばしめたる如き、「妹背山」と「千本櫻」とを組み合せたる「妹背山眺望千本」に「忠信質は鱶七」などの役名を附せる如き、當時の評者さへ、「例の南北が茶番」なりと冷評せり。而も此の弊晩年の作に最も甚しく、「五十三驛」の怪談に至りて殆と極まれり。又殘酷と卑猥との甚しき彼れが作の如きは前に比なかるべし。これ一つは文化文政に於ける人心の下りたればなるべし。

彼れが三世菊五郎の爲めに「五十三驛」を新作せし時なりき。本箱に手を差入れて、手に當れる本を引出せしに「播州皿屋敷」の院本なりしかば、此れを基礎とし、偶隣家より十二單衣の官女の錦繪を猫が啣へ來りしかば、其れより思付きて菊五郎の猫の妖怪を官女姿にして登場せしむる事に脚色せりといふ。又高砂町に住せし頃、机に對ひて筆を執れるうち、妻お吉に飯米を促されて戸棚より蚊帳を取出し、自ら質屋へ驅付けたるを、後年「四谷怪談」にて民谷伊右衛門が妻お岩の蚊帳を奪ふ筋に應用せるなりき。南北は斯くの如く往々自己の實境を其の筆に寫して且つ結構と對話とに妙を得しと雖も、文字に乏く、例へば「其の籏渡せ」と書くべきを「其の畑渡せ」とし、「先づ今日は此れぎり」を「待づ今日は此れぎり」とするなどの類、多かりしといふ。

彼れも治助と同く、當意卽妙の才に富みたりき。まだ作者見習として彼の二枚目に筆を執りし時、舞臺一面に墨に汚れし双紙を張らせて鯨の胴と見せ、此れを切破りて、大百日の鬘に四天にて、金冠を小脇

に抱へて出づといふ趣向を立てしに、人皆その奇拔なるを感嘆したりと。
傳へいふ。彼れが上野不忍辨天境内の料理屋にて、部下の作者たちと「咄初め」とて脚本の趣向を語り、「大殿を毒殺して近習に科を塗り、用金を盜んで女郎買ひに遣ひなくして、寶の刀を奪取り、贋物を質に入れ」などいひしを、盜賊と見誤られて捕吏の出張せし事ありと。又彼れの作には、舞臺へ棺桶を出す場面往々あり。死する時、遺言して屍を素棺に收め、さし擔ひにして寺へ送らしめ、己が葬式を脚本に擬して作りし「寂光門松後萬歳」といふ冊子を會葬者へ頒たしめたり。

南北の子に二世勝俵藏（天明元―天保元）あり。始め俳優となり、三世三津五郎の門下にして鯛藏といひ、後に鶴十郎と改めしが、文化十二年、俳優を廢めて深川に妓樓を營み、直江屋十兵衞といひ、更に文政十年より作者となりて父の初名俵藏を襲ぎしが、天保元年十二月十七日、五十歳にて歿しき。彼れは其の前より父の作を助け、文政八年の「四谷怪談」に、本讀みをなせし時、「戸板がへし」の件むつかしくして自分に勤めがたし、と菊五郎が言ひしを、此の俵藏の工夫により、仕掛の雛形を拵へて示せしかば、菊五郎も始めて納得せりといふ。彼れは俳優として舞臺に經驗ありしを以て、筆を執るにも用意綿密にして、只首尾貫徹せざる弊はありしも、時代違ひの事を組合はすに妙を得、趣向複雜にして面白く、特に父の風を嗣ぎて生世話の作多かりき。又速筆頓作を得意とし、仕掛物の意匠などせるを筋書に綴りて、役者を納

得さすことに妙を得たりしゆゑ、養父の肱股となり、半四郎のお染七役、松助の幽靈、なども彼れが功與つて大なりしが、更に晩年には七世團十郎の顧問たりき。」

南北と同時代に二世**瀬川如皐**（狂言堂、宮曆　六―天保四）あり。始め河竹文次、又御園文次ともいひ、天明七年、大阪へ上り、中村仲藏と共に角座へ出でたり。後仲藏と共に東歸して、享和元年（四十六歲）十一月、中村座にて如皐の名を襲ぎ、同時に立作者に上りしが、專ら瀬川菊之丞に隨身せり。同三年、再び上方へ赴き、「好孺子帶屋」（菊之丞のお半、仁左衛門の長右衛門）、「けいせい筥傳授」の第二幕等に筆を執れり。幾もなく菊之丞と江戸へ歸りしが、當り作尠からず。天保四年十一月四日、七十七歲にて死せり。南北より若きこと二歲、而も其れに先だちて立作者となり、且つ後れて歿し、死前には作をなさず、只表題のみを附せり。彼れは「博識にして外題書割等は字義を正し、聊も誤なし、仕組は時代王代ものも書く事を得たり」と「傳奇作書」に褒揚せり。

福森久助（一雄、明和　四―文政元）は玉卷惠助の門人にして、始めは玉卷丘治、又喜宇助といひ、三世三津五郎に引立てられて、文化四年（三十八歲）十一月、市村座の「雪八島凱陣」に始めて立作者となれり。當時南北（俵藏）は二枚目に出でたれど、松助の狂言は大かた其の筆に成り、久助は專ら三津五郎の爲に作し、兩々對立せしもの丶如し。これより十年間、彼れが作尠からざりしが、文政元年九月八日、五十二歲にて歿しき。

彼れの本領は自己の創作よりも、寧ろ京阪の院本を江戸狂言に引直すにあり。「傳奇作書」に之れを暴きて曰く、

譬へば、「關取二代鑑」の秋津島を民谷源八に直し、鬼が嶽を堀口源太左衛門とし、翌日、殿の御前にて、若殿の贔目な試合の勝負にまかせるを、堀口門弟を連來て民谷を罵り、額を割つて歸る。内記は高倉隼人の如く、推量の誤りにて切腹する分の事と、屋敷へ歸る。跡にて源八切腹して坊太郎に血潮を呑ませて、翌日の試合に勝たすなんど、無雜作に譯文たり。

右の二人は南北より若年なれども、先きに進みて、晩年終に彼れが爲め壓倒せられし者なり。尚ほ南北の後輩に左の數人あり。

●●●●●二世櫻田治助（左交、明和五|文政十二）は始め笠縫專助に事へて陽助といひ、更に治助の門に入りて松島半二といひ、一たび治助の名を襲ぎて師の未亡人を扶持せしが、隙を生ぜしかば名跡を還して松島調夫と改めき。立作者となりしは、文化十四年の中村座が始めなるべく、半二時代には松助に隨身せしが、治助と改めてより、福森久助に代りて三世三津五郎に從ひ、晩年には零落して門人松島陽助（二世半二）が許に寄食し、文政十二年四月十四日、六十二歳にて歿しき。彼れが實父は芥船の株を持ちし程の者なりしかば、壯時は各藩の留守居など上流の士人に侍り、多少の學識もあり、作風は舊師の衣鉢を襲ぎて、豐後節の淨瑠璃に佳作多く、中にも常磐津の「源太」、清元の「傀儡師」と「玉兎」、又は歌右衛門が爲に作せる「三番叟」

「鳥羽繪」など著名なり。

二世並木五瓶（蔦葉山人、明和五―文政二）は本所割下水の旗下野々山大膳の次男にして正三郎といひ、放蕩の末、五瓶の弟子となりて、始め篠田金次といひ、專ら三世彥三郎に隨身せり。文政元年、師名を襲ぎ、翌二年七月七日、五十二歲にて歿しき。さしたる當り作は無かりしも、其の趣向に滑稽の才ありき。

此の他、木屋宗七及び松井幸三（寬政四―文政十二）あり。宗七は龜井戶の社家より出で、初め武井藤吉、後に豐島大東といひ、文化十一年、河原崎座に立作者なりしが、二三年後の番附に其の名を逸せり。幸三は始め鴻三といひ、桑門の出なりしかば、佛學にも通じき。おもに五世宗十郎に從ひ、南北の部下に屬して一幕づゝの作は多けれど、立作者としての作は稀なり。尙ほ淸水正七、曾根正吉、穗住惠助（共に治助の門下）及び田島此助あり。就中、正七は拍木幕の上手として知られたれども、立作者に至らざりき。

別に門外より作者となりしものに立川焉馬（烏亭、寬保三―文政五）あり。市川男女藏の紹介にて作者となりしも、一興行きりにて止めたる事は南北の條にいへり。又花笠魯助（文京、安永五―萬延元）あり。越後高田藩の侍醫東條氏の長男にして實は儒者たりし琴臺の兄なりき。醫業を嫌ひて所々を漂泊し、終に南北の弟子として作者となれり、其の風俗派手なる衣服して、黃天鵝絨の足袋を穿ち、拍子木を持ちて舞臺を立廻るさま、祭禮に花笠を冠り山車の前後に立つ體なりとて、南北その姓を花笠と號けたり。胸中文字ありて狂文の筆

才に長けたれども、俗に疎く、且つ俳優に適せず、漸く二枚目の地位に至りき。文化の末、蜀山人に勸められ、文京と號して戯作者となり、次いで文政中、蜀山人の妾を妻として大阪堀江に寓居し、角座の作者たりしが、同十二年の春、七世團十郎が上阪して、其の東歸せる時、行を共にし、是れより三世菊五郎に隨身せり。天保四年、三芝居士と變名して「役者必讀妙々痴談」を著はし、重なる俳優を誹謗せしが、菊五郎は其の子松助を短れるを怒りて作者たる事を禁ぜしかば、再び上阪し、天保の末、江戸へ歸り、二世焉馬の斡旋によりて菊五郎の免を乞ひ、中村座へスケとして出で、豐島新造と稱せしも、次第に落魄して、萬延元年三月二日、深川佃の辻番所にて七十六歳にして窮死せり。

南北歿してより、二三十年間、作者の秀でたるものなく、只先輩故老の故を以て稱せられしは、三升屋二三治（天明三―安政三）となす。彼れは始め伊勢屋宗三郎とて、代々淺草の藏前に札差を業とせる富家なりしが、七世團十郎を最屓にして、遊戯半分に狂言作者となり、初世治助が門下たり。芝居者を集めて奢侈の行ひありしかば、此れが爲めに家を逐はれて終に全く劇道の人となりき。文政十一年十一月、河原崎座にて始めて立作者となり、嘉永元年春、市村座を名殘として退隱せしが、前後二十年の間、三世菊五郎、七世團十郎、及び四世歌右衛門の爲に筆を執れるもの尠からず、而も大かたは他人との合作か、若しくは故狂言の綴り合せにて、特筆すべき作なかりき。彼れは傍ら劇道に關する雜著をなし、「歌舞伎品定」、

「作者店卸」、「戲場書留」、「紙屑籠」、「妓用袋」、「歌舞伎之式」等あり。安政三年八月五日、歿す。七十二歲。

註　二三治は初世南北とも親交あり、南北が風邪にて臥し居たる時、奥詰醫師吉田快庵を賴み、高砂町の裏店へ長棒の乘物にて趣かせ、二三治より賴みによつて見舞ふと、案内させければ、南北驚き、床の上より這出で、恐れ敬ひ、誤り入る。典醫は御立にて、後に若黨中間殘り酒代を乞ひ、何れの町人にても金百匹なりといふに。詮方なく一歩出して歸せしが、此れぞ二三治のいたづらなれば南北は其の返報に、二三治が常に白銀の淸正公へ月參りし、聖坂の水茶屋に休みて、其處の娘と浮名の立てるを幸ひ、女の名と二三治との比翼紋つけたる提灯を淸正公の前へ掛けさせ、二三治を困らせたりと。

二三治と同時代の作者に寶田壽助（寬政九―天保九）二世中村重助（―――）三世並木五瓶（―安政二）及び五世鶴屋南北（寬政八―嘉永五）あり。壽助は始め松川寶作といひ、神田邊の質屋に生まれ、操り芝居の作者なりしを、二世松井幸三（噺方より作者に轉じて南北父子に隨身し、吉原に住して傍ら幇間を業とせり。）に引立てられて歌舞伎の作者となりき。おもに三世菊五郎に附屬せしが、天保三年、長島壽阿彌の命により、寶田壽來の跡を襲ぎて壽助と改めたり。蓋し立作者となりしも此の時が最初ならん。幾くもなく天保九年二月十九日、四十二歲にして歿しき。二世重助は來歷詳ならず、立作者として現はれたるは天保六年十一月の市村座が始めなるべく、天保の末には既に番附に其の名を逸せり。三世五瓶は二世五瓶の門人にして始め篠田惣六といひ、中ごろ師の舊名を襲ぎて篠田金次といひ、天保四年十一月、更に五瓶と改め、安

政二年十月十四日歿しき。七世團十郎の始めて演ぜし「勸進帳」(嘉永十一年三月、河原崎座)は此の人の作なり。

五世南北は、四世南北が婿勝兵藏の養子なりき。初め鶴屋孫太郎といひ、天保八年十一月、南北の名を襲ぎて始めて河原崎座に立作者たりしが、嘉永五年正月二十一日、五十七歳にして歿しき。俗にこれを「孫太郎南北」といへり。

此のほか、大阪の作者たりし奈河晴助及び西澤一鳳が江戸に下りて作者たりし事は前章に述ぶる如し。

此の輩は孰れも二三治に後れて出で、且つ先んじて世を辭せしものなるが、ひとり三世櫻田治助(狂言堂左交、享和二―明治十)は此の輩と同時に現はれ、後の三世如皐及び二世新七と共に明治時代まで榮えたりき。彼れは二世治助の門人にして、始め音助といひ、後に師の舊名を襲ぎて三世半次といひ、天保六年(三十四歳)、治助の名を襲ぎて、始めて中村座の立作者たりき。

「後太平記[illegible]錦帳」　天保六年九月、中村座。半四郎の宮城野、紫若の信夫。
「四天王顔鏡」　同八年十一月、同座。三津五郎と訥升の土蜘蛛退治。

等の作ありしが、彼れとは年來の因みあり、其の寵遇を受けたりし四世歌右衛門が大阪より下りしかば專ら之に附屬せり。

「世吉田花街稲妻」　同十年九月、同座。清水清玄と十帖源氏と葱賣。

「太平記入船篠塚」　同年十一月、市村座。篠塚伊賀守と楠亡靈。

「磯馴成渡讐」　同十一年九月、同座。阿波の十郎兵衛。

「鎭西八郎降魔鏑」　同年十一月、同座。爲朝と淸盛。

「種花蝶色出來龜」　同十二年八月、同座。双蝶々の改作。

「祭禮歌曾我花櫺」　同十四年正月、同座。曾我祭。

「玉藻椿源氏曾我」　弘化二年正月、中村座。淸盛日輪招き。

「蝶々絞成觀新模」　同三年四月、中村座。双蝶々の改作。

「青砥稿」　同年七月、市村座。貝屋善吉。

「福聚海駒量傳記」　同四年四月、河原崎座。富士淺間の仇討。

「高木織右武實錄」　嘉永元年八月、中村座。細川の血達磨に望月。

「詞花紅成盛」　同二年八月、市村座。天一坊。

尙ほ此の他にも、歌右衛門が爲めに作せる「お萬が飴」、「太神樂」、「狐拳」等の淨瑠璃、いづれも當時の流行を穿ちて俗衆に悅ばれき。又此の間に他座を兼ねて、左の諸作あり。

「讐兩人合法」　弘化元年八月、市村座。羽左衛門と宗十郎。

「尾上梅壽一代噺」　同四年七月、同座。菊五郎一世一代の五十三次怪談。

嘉永二年の冬、歌右衛門が歸阪してより後、彼れは一定の俳優に屬せず、而も大かた市村座の作に從事せり。

「黄八丈三筋竪縞」　嘉永四年正月、市村座。團十郎のお駒才三と梅の由兵衛。

「戀模樣振袖妹背」　同年五月、同座。團十郎としうかの八百屋お七。

「源氏模樣娘雛形」　同年九月、同座。團十郎の田舍源氏。
「新板越白浪」　同二番目、しうかの鬼神お松。
「里見八犬傳」　同五年、同座。
「隅田川對高賀紋」　同年三月、同座。宗十郎の鏡山と鈴木主水。
「名譽仁政談」　同年七月、同座。宗十郎の青砥左衛門。
「花吉田岩尾松若」　同六年三月、同座。高助菊次郎の男草履打と女清玄。
「松扇杏鶴龜曾我」　安政元年正月、中村座。我童菊次郎の弓張月。
「花觀臺大和文庫」　同年三月、同座。我童菊次郎の釋迦八相記。
「旅雀我好話」　同年七月、同座。市藏鶴藏の龜山仇討に膝栗毛。
「初紅葉小倉色紙」　同年八月、同座。我童の小笠原騷動。
「花舞臺團若曾我」　同年七月、同座。小團次の一心太助と延命院。
「一曲奏子寶曾我」　同三年正月、同座。二番目に粂三郎小團次の瀨川五郎。
「三世相緣の緒車」　同年八月、同座。粂三郎我童のお半長右衛門。
「歲德曾我松島臺」　同四年正月、同座。我童の石井高尾に小夜中山仇討。
「陸奧群客娘菅笠」　同年七月、同座。訥升半四郎の白石噺にお園六三。
「いろは假名金捺」　同年九月、同座。仁左衛門の由良之助。

「晴模様染衣更着」　同五年二月、同座。薄雪の二番目へ團藏の蒲屋喜八。
「戀夫帯娘評判記」　同年四月、同座。桂川心中に白木屋。
「染分紅地江戸褄」　同年十月、同座。五人女と五人男。
「織脚浮世江戸褄」　同六年七月、同座。菊五郎仁左衞門のお花半七。
「百鵆賑曾我」　萬延元年正月、守田座。二番目に田之助和市の一重文里。
「復讎大橋立」　同年七月、同座。市藏の岩見重太郎。

斯くて文久二年正月、門人木村園治に四世治助の名を讓り、自ら狂言堂左交と改めて各座を助けたりしが、其の後著しき作なく、明治十年八月七日、七十六歳にして歿しき。

●●●●●彼れの伎倆は初世及び二世に劣りたれども、頗る頓才に富みたりき。當時の風習として、初幕の前に二立目とて中通りの役者のみにて演じ、作者も此の一幕だけは見習作者に筆を執らしめ、以て修練の餘地とせしかば、作者も役者も意匠を凝らし、隨つて華美なる衣裳道具を要するの弊を生せり。而も當時衣裳は總べて俳優の自辨たりし事とて、彼等は其の失費に堪へ兼ね、質素なる衣裳にても見物に喝采せらるゝ如き脚色を特に立作者たる治助に乞ひしかば、彼れは快く承諾し、安政三年十月、中村座にて、源賴朝公の病氣平癒の祈願に諸大名が鶴が岡へ裸參りといふ仕組にて、箱提灯に、三鱗、五三の桐、又は四つ目など、諸大名が紋所を見するといふ趣向。

にせり。一同もその奇抜なるを賞嘆せしが、十一月末の而も未明に開演するなれば、登場の俳優いづれも風邪に犯され、衣裳の入費よりも一倍に困難せりと云ふ。彼れが作者として機智の非凡なりしは此の類なりしなり。

三世瀬川如皐（文化三―明治十四）は始め糶呉服商を營み、俗稱を吉兵衛といひしが、渡世の餘暇に脚本を綴り、豫て知己なりし五世南北に添削を乞へり。南北その文才を愛し、己が弟子として絞吉兵衛と號せしめ、狂言方見習たらしめしが、終に本業を廢めて劇場に出勤せりき。後、南北の舊名を襲ぎて姥尉助といひ、又藤本斗文が名跡を受けて藤本吉兵衛ともいひき。是れより先き、弘化三年、三世治助が歌右衛門の爲に「青砥稿」を作せし時、吉兵衛は二枚目の地位に在りて、大かた其の立案を爲せしかば、是より漸く名を知られ、嘉永元年（四十三歳）十一月、中村座にて始めて立作者たりき。

「伊達旭盛櫻彩幕」　嘉永二年四月、中村座。長十郎の伊達と鏡山。
「假名手本忠臣藏」　同年九月、同座。長十郎の銘々傳と十八か條申開き。
「實成金菊月」　同三年九月、同座。皿屋敷の怪談。

斯くて、同座に四世小團次の入りてより最も當り作多かりき。

同年十一月、三世治助に勸められて如皐の名を襲ぎしが、治助が瀬川の別號たる狂言堂を自稱せるを不

滿とし、自ら「馬道の狂言堂」と號しき。

「木下曾我惠礫路」　同四年正月、同座。釜入の五右衛門。
「東山櫻莊子」　同年八月、同座。田舍源氏と佐倉宗吾。
「御伽譚博多新織」　同五年八月、同座。箱崎文庫の孝養法師。
「與話情浮名橫櫛」　同六年三月、同座。團十郎の切られ與三。
「花野嵯峨猫魔稿」　同年九月、同座。佐賀の猫騷動。

此の「猫魔稿」は有馬侯より故障の生じて興行を禁ぜられしかば、漸く維新後に至りて上場せり。
以上の諸作、大かた小團次の爲に筆を執りしが、其の後、小團次は如皐を捨てゝ專ら河竹新七と結托し、如皐また此處を去り、主に中村福助（芝翫）及び五世坂東彥三郎の爲に筆を執りき。蓋し此の二人は小團次よりも後進ながら、當時の花方として彼れの競爭者なりしなり。

「繪本更科譚」　安政元年七月、市村座。更科物語、福助の山中鹿之助。
「鏡山再盛花見曳」　同二年三月、同座。彥三郎の岩藤と膝栗毛。
「滑稽七福人」　同年六月、同座。歡太郎と村右衛門の八笑人。
「新臺いろは書始」　同三年正月、森田座。三津五郎の忠臣藏改作。
「初時雨浮名双彈」　同年十月、同座。團藏の彥惣。

「挿頭菖蒲閨高綱」 同四年閏五月、同座。團藏の佐々木と福助の三浦。
「金瓶梅曾我松賜」 萬延元年正月、中村座。福助仁左衛門の金瓶梅。
「御國松曾我中村」 文久元年正月、同座。彦三郎の花屋德兵衛。
「百猫傳手綱染分」 元治元年八月、同座。彦三郎の山猫と座頭慶政。
「魁駒松梶梅曙微」 慶應元年三月、同座。芝翫の佐野源左衛門と田之助の缺皿。
「魁花岩尾伊達染」 同二年四月、同座。芝翫訥升の男鏡山と伊達。
「朝夷巡島記」 同三年六月、同座。米升の朝比奈三郎。
「於玉池ー津娘讐」 同二番目、三津五郎のお玉。

是れより先き、治助は其の左交と改名せる頃より、名聲昔日の如くならず、只如皐と新七の二人相駢びて榮えたりしが、明治以後に至りては如皐また漸く世尙に後れ、新七ひとり全盛を極めたりき。斯くて如皐は明治十四年六月二十八日、七十六歳にして淺草馬道の宅に歿せり。

彼れが當り作の最たるものは「浮名横櫛」と「櫻荘子」となり。蓋し前者は八世團十郎、後者は四世小團次の伎倆と相待ちて能く成功したりしなり。彼れの作はすべて趣向緻密に過ぎ、正本を細字に書きて而も他の作者より紙數多く、俳優は臺辭の長きに倦みたりといふ。これ彼れが弱點なりしならん。如皐よりは若年にして、而も彼れを凌ぎて後の明治時代に至るまで其の全盛を擅まにせしを、二世河竹

新七（默阿彌、文化十三—明治廿六）とす。彼れは江戸日本橋通三丁目の式部小路に質屋たりし吉村勘兵衛の長子にして、幼時より歌舞演劇と稗史院本とを好み、十七歳の時（天保四年）、家業を棄てゝ、京橋尾張町の貸本屋後藤某に事へ、書を負うて遠近に使する暇に脚本及び雜書を耽讀し、又芝宇田川町なる踊の師匠澤村お紋（俳優澤村四郎五郎の娘）に就きて舞踊を學びしが、後にお紋が紹介によりて、五世南北に識られ、天保六年三月、其の門人として始めて市村座の狂言作者見習となり、勝諺藏と號しき。幾くもなく師と共に甲府に赴きしが、歸府して傷寒を病み、劇場に出でざること二年間なりき。

同九年、再び師と共に河原崎座に出で、其の三月興行より始めて一場を預りて筆を執ることを許されしが、同十一年三月、七世團十郎が始めて「勸進帳」を上場せし時、彼れは初日に後見と同じ拵へになり、無本にて白をつけしゆゑ、團十郎に賞與せられたり。又三世菊五郎の爲に幕切の拍子木を打ちて、彼れに褒揚せられし事ありといふ。然るに同年九月、實弟の死せしかば、已むを得ず、實家を繼ぎて芝新網町に住し、暫く作者を廢せしが、翌十二年四月、河原崎座の立作者たりし二世中村重助に勸められて、再び同座に出で、斯波晋輔と改名して二枚目の地位に進みたり。當時、同座の座主たりし河原崎權之助は彼れを愛して、己が姓を與へて櫓附の作者たらしめんとせしが、作者にして俳優に隨身するの不可なる事を重助に忠告せられしかば、之れを辭し、又師南北と三世治助とが三世如皐の名を襲ぐべく勸めしをも肯

かざりしが、更に治助に勸められて、天保十四年十一月、始めて、二世新七の名を襲ぎ、次いで弘化二年(三十歳)十一月、河原崎座にて始めて立作者となりき。然れども、尚ほ、南北、五瓶、治助等より筋を受取りて一部分だけを執筆するのみなりしが、嘉永四年(三十六歳)より、始めて自ら一部の脚本を作するに至りき。

「升鯉瀧白旗」　嘉永四年十一月、河原崎座。八世團十郎の伊之助、粂三郎の若草。

「戀衣雁金染」　同五年正月、同座。團十郎の淸玄と五人男。

「兒雷也豪傑譚話」　同年七月、同座。團十郎の兒雷也。

「しらぬひ譚」　同六年二月、同座。璃珏の秋作、しうかの若菜姫と青柳春之助。

「怪談小幡小平次」　同年九月、同座。璃珏の小平次怪談。

「都鳥廓白浪」　安政元年三月、同座。小團次の惣太、しうかの松若。

「吾嬬下五十三驛」　同年八月、同座。小團次の天日坊と猫石の妖怪。

蓋し小團次が彼れに望みを囑し、己れの爲めに筆を揮はん事を乞ひしも、當時同じく南北の門下たる三世如皐が之れに附屬せしかば、其の乞ひを辭せしが、此の「五十三驛」の大當りなりしより、愈〻兩者相提挈し、是れより彼れは專ら小團次の爲めに作するに至れり。

「夢結蝶鳥追」　同三年三月、市村座。龜藏の雪駄直し長五郎。

「梅雨濡仲町」同年六月、同座。龜藏の古手屋權三、菊五郎の小萬。
「蔦紅葉宇都谷峠」同年九月、同座。龜藏の十兵衞、文彌殺し怪談。
「松竹梅雪曙」同年十一月、同座。小團次のお七、彦三郎の吉三。
「鼠小紋東君新形」同四年正月、同座。小團次の鼠小僧治郎吉。
「敵討噂古市」同年五月、同座。小團次の正直清兵衞。
「網模樣燈籠菊桐」同年七月、同座。小團次の小猿七之助、菊五郎の玉菊。
「絲時雨越路一諷」同年十月、同座。龜藏の大工逆目喜藏、菊五郎の女房おそよ。
「江戸櫻清水清玄」同五年三月、同座。小團次の清玄と黑手組の助六。
「假名手本硯高島」同年五月、同座。小團次の赤垣傳藏。
「小春宴三組杯觴」同年十月、同座。海老藏の時頼、馬士問答。
「小袖曾我薊色縫」同六年二月、同座。小團次の鬼坊主清吉。
「牡丹記念海老胴」同年四月、同座。小團次の泣男佐平、權十郎の楠正行。
「小幡怪異雨古沼」同年七月、同座。小團次の小幡小平次。
「三人吉三廓初買」萬延元年正月、同座。小團次の文里と和尙吉三。
「加賀見山再岩藤」同年三月、小團次の岩藤、（骨寄せ）と鳥井又助。
「八幡祭小望月賑」同年七月、同座。小團次の縮屋新助、粂三郎のみよ吉。

「相生源氏高砂松」文久元年二月、守田座。小團次の賴豪阿闍梨。
「龍三升高根雲霧」同年五月、同座。小團次の因果物師小兵衛、市藏の因果小僧六之助。
「轡音繦染分」同年五月、市村座。芝翫の稻田幸藏、いろは新助。
「東驛いろは日記」同年七月、同座。義士五十三次。
「櫻莊子後日文談」同年八月、守田座。小團次の光然和尚祈り、佐倉宗吾追加。
「青砥稿花紅彩畫」同二年三月、市村座。羽左衛門の辨天小僧。
「月見曠名畫一軸」同年八月、同座。血達磨と若草伊之助。
「勸善懲惡覗機關」同年閏八月、守田座。小團次の村井長庵と紙屑買久八。
「三題噺高座新作」同三年二月、市村座。小團次の和國橋藤次。
「茲江戶小腕達引」同年八月、同座。小團次の腕喜三郎。
「花卯木伊賀兩刀」同年四月、同座。傘張武助腹切。
「曾我綺俠御所染」元治元年二月、同座。小團次の御所五郎藏、家橘の時鳥。
「若葉梅浮名橫櫛」同年四月、守田座。田之助の切られお富。
「一谷凱歌小謠曲」同年八月、市村座。小團次の根の井左衛門、鳥目の上使。
「身光お竹功」同年十月、守田座。田之助の下女お竹。
「小春穩沖津白浪」同年十一月、市村座。小團次の日本駄右衛門、家橘の小狐禮三。

「鶴千歳曾我門松」慶應元年正月、同座。彦三郎の酒賣又六、家橘の野晒悟助。
「月缺皿戀路宵闇」同年三月、守田座。田之助の缺皿。
「菖蒲太刀對俠客」同年五月、市村座。增補俠客傳。
「處女評判善悪鏡」同年八月、同座。白浪五人女、孝女お作自殺。
「怪談月笠森」同年同月、守田座。田之助の笠森おせんと下女おむつの幽靈。
「上總綿小紋單地」同年同月、中村座。小團次の上總市兵衛。
「富治三升扇曾我」同二年二月、守田座。小團次の重忠と鑄掛松。
「櫓太鼓鳴音吉原」同年同月、市村座。彦三郎の明石志賀之助。
「孝悌譚六十餘集」同年八月、守田座。友右衛門の飛驒內匠、三津五郎の加賀の千代。
「契情曾我廓亀鑑」同三年二月、市村座。田之助の岩藤太夫とおしづ、家橘の手代禮三。
「善悪兩面兒手柏」同年五月、同座。家橘の妲妃お百と和尚次郎。
「新累女千種花嫁」同年七月、同座。家橘の累。
「群清瀧贔屓勢力」同年十月、守田座。芝翫の神力民五郎。

續いて維新以後も、五世菊五郎、九世團十郎、及び左團次、等の爲めに年々新作多く、四座の作者を兼勤して其の名聲嘖々たりしが、明治二十六年一月二十二日、七十八歳にて歿せり。

新七が明治以前の作を見るに、他の狂言作者と同じく、全く自家の創作とは言ふべからず、故脚本を改作増補したる「加賀見山再岩藤」「東驛いろは日記」「櫻莊子後日文談」の如き、當時の稗史小說を脚色したる「兒雷也豪傑物語」「しらぬひ譚」「三人吉三廓初買」(文里の一重の條は谷峨の「契情買」「筋道」より取る。)「相生源氏高砂松」(馬琴の「怪鼠傳」。)「鶴千歲曾我門松」(京傳の「醉菩提」。)「月缺皿戀路宵闇」(馬琴の「皿々郷談」。)の如き、また軍談講釋を材料とせる「夢結蝶鳥追」「おこよ源之丞」「江戸櫻清水清玄」(黑手組の助六)「假手本硯高島」(銘々傳)「勸善懲惡覗機關」、大岡政談「善惡兩面兒手柏」、妲妃お百)の如きありと雖も、此等の諸作に於ても、彼れが其の原料を如何に劇化すべくを取扱ひたるかの點に於て充分に脚本家として伎倆を認め得べきのみならず、全然彼れが創作せしものに至りて、愈彼れが眞價を知るに足る。蓋し彼れが長所は第一に結構と配合とに巧みにして能く舞臺上の効果を收めしめ、而も登場する俳優の特色を各自に發揮せしむるに在りき。又第二には主に世話物に筆を執りて、而も先輩の治助南北よりも一層寫實を尙び、其の詩材を自己の目擊し若しくは感想せる實際より採りたりき。前者は劇場付の作者としての彼れが才能の非凡なりしを示せると共に、後者は一層廣き意味にていふ脚本家としての彼れが天分の偉大なりしを證するものなり。而も此の例は彼れが創作に於て最も著はる。新七が立作者として最初の作たる彼の「升鯉瀧白旗」を執筆せし時なりき。柴晋

助といふ納所上りの弟子が痴情より事を構へて自身番に拘引せられしを引取りて、後來を盟ふべく證人を立てしめしに、

寺へ出入の佛師が龜井戸に居れば、同道仕らんと、天神から一丁あまり、廣い明地に九尺二間の茅葺き屋根、入口の腰障子に佛師高浮丈山と記し、折しも七月、蚊の多き本所ゆゑ、今戸の燒物に蚊を燻し、主人は卅八九、蛇形の單衣に、夕方は寒いといふ思入れで女物銘仙の綿入半天、そのくせ女房は見かけず、色白い苦み走つた男、頭は後だけ剃つた五分月代、水髮の傳法肌、いぶしの煙に顔をしかめた所いかにも物凄く、盆前で忙しいと見え、二疊敷ばかりは金箔置きかけた閻魔、左の脇には出來上りの三途の婆、右には釋迦地藏の立像、首ばかり出來た諸菩薩、煤ぼけた位牌まで薄暗き所に列べたり。（久保田彥作談話）

彼れは此の實況よりヒントを得て、其の二番目に龜井戸佛師屋の場を脚色せりといふ。其の他、雨宿りせし軒下にて、貧き父に連れられたる子が、蕎麥をねだるのを見兼ねて、自ら蕎麥を與へしを、彼の「三題噺高座新作」の和國橋藤治の件に脚色せしといひ、「網模樣燈籠菊桐」にて小猿七之助の出づる吉原の局店の實地を觀察して舞臺に其の儘を寫せしといひ、彼れが此の種の逸話に富めるを以て、其の作風を推すべきなり。

當時の芝居者といへば、種々なる惡德を連想するに拘はらず、獨り彼れは德操に高く常識に富みて、謹嚴、溫厚、精勵、綿密、謙遜、淸廉など有らゆる美德を有しき。一生に道樂のなかりしといひ、酒を飮まざりしといひ、決して脫稿の期日を誤まらざりしといひ、衣食に費すこと薄く、能く窮者を恤みて惜まざ

りしといひ、舊師小南北の看護及び葬祭を厚くせしといひ、初世新七の墓を探りて之れを祀りしといひ、斯くの如き彼れが人格は又その作の上にも表はれたりき。彼れが作に屢因果應報を說き、又勸善懲惡を諭すが如き傾向ありしは、當時の文學及び演劇の常套にして寧ろ厭ふべしと雖も、其れ以外に彼れの作が常に人生の光明と正義の勝利とを歌ひしは蓋し此れが故ならん。

彼れは又大南北の風を襲ぎて屢怪談物に筆を執りき。不自然なる因果應報と且つ實感的なる慘殺迫害及び窮厄は往々文藝としての價値を損せしのみならず、餘りに機智を弄するに過ぎて、例の茶番狂言に陷るの弊も亦大南北と同じかりき。前にいへる「三題噺高座新作」に於て、和國橋藤治を和藤内に擬し、神崎屋喜兵衞を甘輝に擬し、喜兵衞の妻が二階より乳を流すを錦祥女の紅流しに擬したる如き、其の最も著しき例なり。蓋し彼れは當時流行せる三題噺に巧みにして、終に脚本にも之を應用し、當時中村座にて「國姓爺」を上場せしかば、以上の三役を三題噺の趣向にて世話狂言に脚色せしなりといふ。

【註】翁常に語りて曰く、三人吉三は最も心を盡せし作にて、中にも我が村井長庵は終生の世話物中第一の出來と思はる。文里は故人小團次の如き俳優ならでは演じられぬ役柄なれども、其後いづくの劇場にも出さゞるは當時不評判なりし故なり云々（「早稻田文學」）

第廿五章　東西の劇場音樂

義太夫の全盛――「チョボ」――操芝居の敗北。――「上方唄」。――「江戸唄」。二世富本豐前掾――富本延壽齋――清元延壽太夫――清元節――「豐後節の三流」――二世清元延壽太夫――一中節――江戸節と河東節――大薩摩節――豐後節三流の傳統。――江戸に於ける義太夫節。――江戸長唄――三世杵屋六三郎と十世杵屋六左衛門。――劇場的音樂の進歩せし原因。

京阪は淨瑠璃各派の淵源にして而も此等各派の淨瑠璃は大かた專屬の劇場を有して、操人形の動作と共に之れを演奏し、謂はゆる操芝居と稱して歌舞伎芝居と相對立せしと同時に、又歌舞伎芝居にも此等各派の淨瑠璃が其の劇場的音樂として用ひられたりしならん。然るに義太夫節の全盛となりてより、其れ以外なる諸流の操芝居は全く地を拂ひしと同じく、歌舞伎芝居に於ける劇場的音樂も義太夫節が其の中心たる位置を占めたりき。

寶暦期に於ける此の現象は、近世期に至りて愈顯著となり、歌舞伎芝居に於て、操芝居の脚本（即ち義太夫節の淨瑠璃）を流用し、同時に俳優も其の淨瑠璃の演奏に連れて人形の動作を模倣すること益盛んとなり、終には歌舞伎の爲に新作せられし脚本にも淨瑠璃の詞章を挿みて、俳優の動作に連れて義太夫節を演奏せしむるに至り、此等の歌舞伎芝居に演奏せらるゝ義太夫節を總稱して「チョボ」といひ、其の語

るべき太夫を「チョボ語り」といひき。蓋し寶暦期の條下にも說きし如く、淨瑠璃の太夫は受領の官名ありて、歌舞伎芝居の俳優よりは格式を上にし、特に彼等は操芝居を其の根據として、歌舞伎芝居に出づるを不面目とせしかば、此等の「チョボ語り」は第二流もしくは第三流の輩なりき。然も人心の嗜好は非情なる木偶が動作する操芝居よりも、有情なる俳優が動作する歌舞伎芝居に傾きて、流石に義太夫節と操芝居との本場と稱せられし竹本及び豐竹の兩座も明和安永より次第に衰退し、降つて文政に至りては操芝居に於ける新作の淨瑠璃殆ど稀なりき。これ一つは淨瑠璃作者と太夫と人形遣ひとに名手のなかりしにも因るべけれど、操芝居が歌舞伎芝居に敗北せしこと其の主なる原因なるべし。而して斯くの如き操芝居の敗北は又淨瑠璃太夫が歌舞伎芝居への屈服となりぬ、彼の三世歌右衛門が利慾を以て彼等を威壓せし逸話は此の傾向を具體的に示せる實例に外ならざりき。（第二編第十章を看よ。）
義太夫節が京阪の俗曲界を獨占せしと共に、義太夫節以外にして既に獨立を失ひし國太夫節、重太夫節、などの諸淨瑠璃を他の小唄と共に惣稱して之れを上方唄といひ、これ亦義太夫節に次いで、京阪の歌舞伎芝居に用ひられし劇場的音樂の一たりしなり。
尙ほ江戸の俳優五世幸四郎、三世三津五郎、及び五世半四郎等が上阪してより、京阪に江戸趣味の鼓吹せられ、其の藝風の一變せしことは既に第二篇第十七章に述べしが、其の頃より江戸の音樂も其處に移

植せられ、文政三年、彼の幸四郎、半四郎が上阪せし時、常磐津兼太夫等も其の一行にあり、常磐津、富本、清元、長唄を「江戸唄」と稱し、これも京阪に於ける劇場的音樂の一となれり。但し此等「江戸唄」の伎倆の江戸に劣れるは言ふまでもなし。

次ぎに、江戸に於て、豐後節の禁ぜられてより、其の後身たる常磐津節起り、常磐津節より更に富本節を生じて、此の二流が在來の江戸節、河東節、もしくは大薩摩節を壓倒せし事は既に寶曆期に述べたり。就中、初世富本豐前掾が實子たる二世富本豐前掾（寶曆四—文政五）は一代の巨手として其の作に成れる名曲頗る多く殆ど他の諸派を凌ぎたりき。

尙ほ一方に於て、初世豐前掾が高弟に富本延壽齋（享和二——）あり、延壽齋の門下に清元延壽太夫（安永六—文政八）あり、延壽太夫は富本の宗家たりし彼の二世豐前掾と隙を生じて、文化十一年（卅八歲）、別に清元節の一派を創め、これより在來の常磐津及び富本と共に此れを「豐後節の三流」といひ、愈劇場にも俗間にも流行したりき。又延壽太夫が實子に二世清元延壽太夫（享和二—安政二）あり、俗に「名人太兵衛」と稱せられ、父の業を繼ぎて益々清元節を全盛ならしめたり。

是れより先き、一中節は寶曆の初年既に中絶せしを、寛政四年三月、五世都一中（千葉嘉六、—文政五）によりて再興せられしも、劇場的音樂としては行はれず。

補　「妓用袋」に曰く、寛政の頃（四年三月）、中村座に一中節の淨瑠璃ありしは「隅田川劇場錦目」といふ八百屋お七の一番目の大詰に、狂言の内の狂言をせし左交（櫻田治助）の趣向に、高麗屋（幸四郎）の巴之丞、米三の逢州、夕霧の淨瑠璃か、都一中（五世）出居へ出勤して、吉原連中よりは幕などを送り、男藝者の見物は助六の時の如し。賑はしく見物を呼ばんとせしが、大しくじりにて一向見物なし。一中の聲たゞたゞ、評判あしく不入にて、それより出勤なし」。と再興せられし一中節は斯くの如くして劇場前音樂としての生命を失ひしなり。

江戸節及び河東節も「助六」の狂言のほかに劇場に用ひざりき。尚は大薩摩節が長唄に併存せられし事は後に言ふが如きのみならず、豐後三流の一たる彼の富本節も、二世豐前掾の歿後、次第に勢力を失ひ、劇場に出演する機會さへ稀なりしかば、嘉永五年、三世豐前掾が八世團十郎に乞ひて、新く「月柳廓髮梳」を市村座に演奏せし事は既に第三篇第二十章に述べたり。三世が明治九年に歿せし後、適當なる名人を得ず、茲に於て、常磐津と清元とのみ劇場音樂として行はるゝに至れり。左に謂はゆる豐後節三流の傳統を記して、本文に缺げたるを補はん。

補　豐後節三流に次ぎて、新内節、薗八節、等起りしも劇場前音樂としては行はれざりき。「紙屑籠」に曰く、「近頃、鶴賀新内、都座へ出づる。菊五郎、粂三郎の心中もの。又後に三津五郎なども遣ひし事あり。菊之丞所作事にも堺町に勤むる。此の新内節といふもの踊る事出來ず。心中ものにて吉原の女郎藝者の悦ぶもの。豐後節とは事かはり、端歌同前にして座敷に語るもの。上方にては豐後のかはり、心中ものには其（薗）八節をつかふ」と。

豐後節三流の傳統

常磐津

（宮古路豐後掾）都一中の門人。元文五年九月一日、情死す、卅八歳。

├初世常磐津文字太夫　豐後掾の弟子、常磐津節の祖。安永元年二月一日死す、七十三歳（或は六十七歳）。

├二世文字太夫　初世文字太夫の弟子、初め鐘太夫、後に兼太夫と改む。師の養子となり、天明七年二月、二世の名を襲ぐ。寛政十一年七月八日、死す。四十四歳。

├（二世兼太夫）　二世文字太夫の門人、初め大和太夫。天明七年十一月、兼太夫の名を襲ぐ。文字太夫の跡目後見の事より宗家と不和を生じ、寛政十一年四月、別派を立て、吾妻國太夫といふ。享和二年六月十六日、横死す。四十八歳。大橋に住せしにより「大橋の

富本

初世富本豐前掾　常磐津文字太夫の弟子、富本節の祖。明和元年十月廿二日死す。四十九歳。

├二世豐前掾　初世豐前掾の實子、幼名午之助。明和七年十一月、豐志太夫と改め、安永六年正月、二世豐前太夫となり、文化十四年十一月、豐前掾を受領す。文政五年七月十七日、死す。六十九歳。俗に「馬づら豐前」といひ、名人なり。

清元

（富本延壽齋）筑前藩士清水多左衛門の次男伴兵衛。初世富本豐前掾の弟子となり、齋宮太夫といひ、一時、茅場町に米商を營み、清水太兵衛といふ。師歿して二世豐前掾の後見たり。寛政六年、剃髪して延壽齋といひ、享和二年五月十八日、死す。七十三歳（或は七十六歳）。

├初世清元延壽太夫　富本延壽齋の弟子、清元節の祖。江戸横山町の油商岡村藤兵衛の子吉五郎。寛政八年、延壽齋の門に入り、同九年、師名を襲ぎて齋宮太夫といひ、同十一年、森座に初舞臺。文化九年、二世豐前掾と不和。同年九月、豐後路清海太夫と稱して、中村座に出で、暫く下阪。文化十一年、始

兼太夫」といへり。

三世文字太夫　二世の實子、幼名林之助。寛政十二年六月、九歳にて小文字太夫。文化四年十一月、市村座に初舞臺。文政二年七月、三世の名を襲ぎ、同年十二月一日死す、廿八歳。

四世文字太夫　俳優市川男女藏の第十子、幼名男熊。父男女藏の母にして二世門之助の妻は初世文字太夫の三女なり、其の緣によりて、文政三年春、三世文字太夫の養子となり、小文字太夫といひ、天保八年正月、四世の名を襲ぐ。嘉永四年十月、受領して豊後大掾と改む。安政の末より岸澤古式部と不和、萬延元年裁判となり、文久元年三月廿九日、示談整へて二派に別れ、古式部は別に岸澤派を創む。文久二年八月八日、五十九歳にて死す。

五世文字太夫　幼名林之助、清元琴太夫といふ。二世立川焉馬の媒介にて養子となる。明治十五年春、岸澤古式部の子式佐と和睦、廿三年ぶりにて兩家合併す。

三世豊前掾　二世の養子、善太郎。初め午之助といひ、文政八年十一月市村座にて初舞臺。同十一年三月、豊前太夫と改め、後豊前掾を受領し、更に豊珠翁と改む。明治十三年八月十三日死す、七十二歳。妻は俳優五世幸四郎の女みよ。

四世豊前掾　三世の實子保太郎。初め豊志太夫、後に豊前太夫。明治廿二年九月七日死す、七十二歳。

めて中村座に清元延壽太夫と稱す。文政七年、剃髪して延壽翁といふ。翌八年五月廿六日、刺客に殺さる、四十九歳。

二世延壽太夫　初世延壽太夫の實子巳三次郎。文政元年、都座にて初舞臺。同六年、榮壽太夫と改め、同十年、延壽太夫を襲名。弘化二年十一月、太兵衛と改め、安政二年九月廿六日死す。五十四歳。

三世延壽太夫　二世の養子、實は今戸の材木商高田屋の子粂次郎。後故ありて離別せしも延壽太夫と號すること故の如し。安政五年八月十日死す。三十八歳。

四世延壽太夫　二世の女お葉の婿、實は谷中の質商三河屋と齋藤源之助。安政五年十月、襲名。明治廿四年、太兵衛と改め、同廿六年、延壽翁といひ、同卅七年三月八日死す。

江戸に於ける義太夫節は、彼の大阪に於て竹豐兩座が衰退せしと反對に、明和安永以後却つて彼の地よりも旺盛となり、豐竹肥前掾が操芝居の外に、薩摩外記座も其の流の廢るゝと共に、豐竹新太夫によりて義太夫の操芝居と變じ、説敎節の結城孫三郎座も同じく義太夫節に占領せられて、肥前、外記、結城の三座相對立し、京阪地方の名ある太夫は其の地を棄てゝ江戸に下りしのみか、作者にも平賀鳩溪等の如く江戸土着のものを生じて、益新作に筆を揮ひたり。然れども、此等の盛觀も一時に止まり、文政以後、淨瑠璃に新作なく、操は日に衰へて歌舞伎に壓倒せられ、隨つて義太夫節が操芝居よりも專ら歌舞伎芝居の音樂として用ひられしは京阪と同じかりき。

註　「昔は操座の太夫、三味線引が歌舞伎へ出る事は禁止にて、人形座は御操と御の字を書くらゐ、殊に太夫はそれ〲國名の受領もあればとて、決して歌舞伎座のチョボには出ぬものなりしが、近年は人形も大いに衰へて、受領の太夫、内々町々の寄席へ出るやうに成つたり。（「芝居秘傳集」）

一方に、純粹なる劇場的音樂たりし江戸長唄も、其の宗家たる杵屋代々のほか、門下にも名手を輩出し、唄、三味線、及び其の他の鳴物の發達をなせり。特に、寶暦十三年九月、市村座にて「忠臣無間鐘」に常磐津文字太夫の淨瑠璃と富士田吉次の長唄とを掛合にし、此れを最初として今日も、豐後節と長唄とを一曲のうちに併用すること頻りに行はるゝに至れり。又寛政四年二月、河原崎座にて岩井半四郎が七變

化の所作をせし時、始めて長唄は上段に、囃子は下段に、上下二段に坐して之れを「雛段」といへり。それまでは長唄だけ一段に列りて、囃子は平舞臺に坐せしなり。同年十一月、同座にて「洞が嶽」の場に三世杵屋六三郎（後に六世六左衛門、—文政二）が大薩摩の三味線を彈くに、始めて今日の如く舞臺の前面に現はれ、且つ二世六三郎の風を襲ぎて、大薩摩に專ら合の手の曲彈をなせり。しかのみならず、當時の囃子方は大かた幕士の子弟が無給にて出で、往々專橫なる事多かりしかば、六三郎は特に專門の者を雇ひて自ら彼等を退かしめ、自ら其の頭となりて積弊を一新せりといふ。次いで六三郎が義弟たる十世杵屋六左衛門（寛政十二—安政五）に至り、文政九年二月、大薩摩節宗家の名號を讓受けて、別に十一世大薩摩筑前大掾藤原一壽と稱し、此れより江戸淨瑠璃の一流たりし大薩摩は全く長唄に倂呑せられき。此の他、上方唄も其の前より江戸の劇場的音樂として稀に行はれしが、作者並木五瓶が東下してより、頻りに其の作に插用し、終に長唄の一部として之れを演奏するに至れり。

要するに、近世期に於て劇場的音樂の進步せし原因の一つは、前に述べし如く、操芝居の衰へて歌舞伎以外に淨瑠璃の活躍すべき路を塞ぎたるにあり。尙ほ今一つは、歌舞伎芝居に於て所作事即ち舞踊劇の盛んとなりし事にありき。蓋し、女歌舞伎及び若衆歌舞伎よりの因習として、舞踊は女方の獨占する所にして、立役のこれに指を染むる事を許さゞりしが、此の期に至り、立役と女方との間に設けられし

嚴重なる區劃の取除かれ、且つ立役にして舞踊を能くせしもの、京阪の爲十郎、文七、雛助を始めとして、江戶にも九世羽左衛門、仲藏、等あり、特に文化文政に至りて、三世歌右衛門と三世三津五郎とが、舞踊を以て東西に相頡頏せるあり。玆に於て舞踊に伴へる音樂も女方の獨占を放れて、俳優共有のものとなり、隨つて其の發達を促したるなりき。

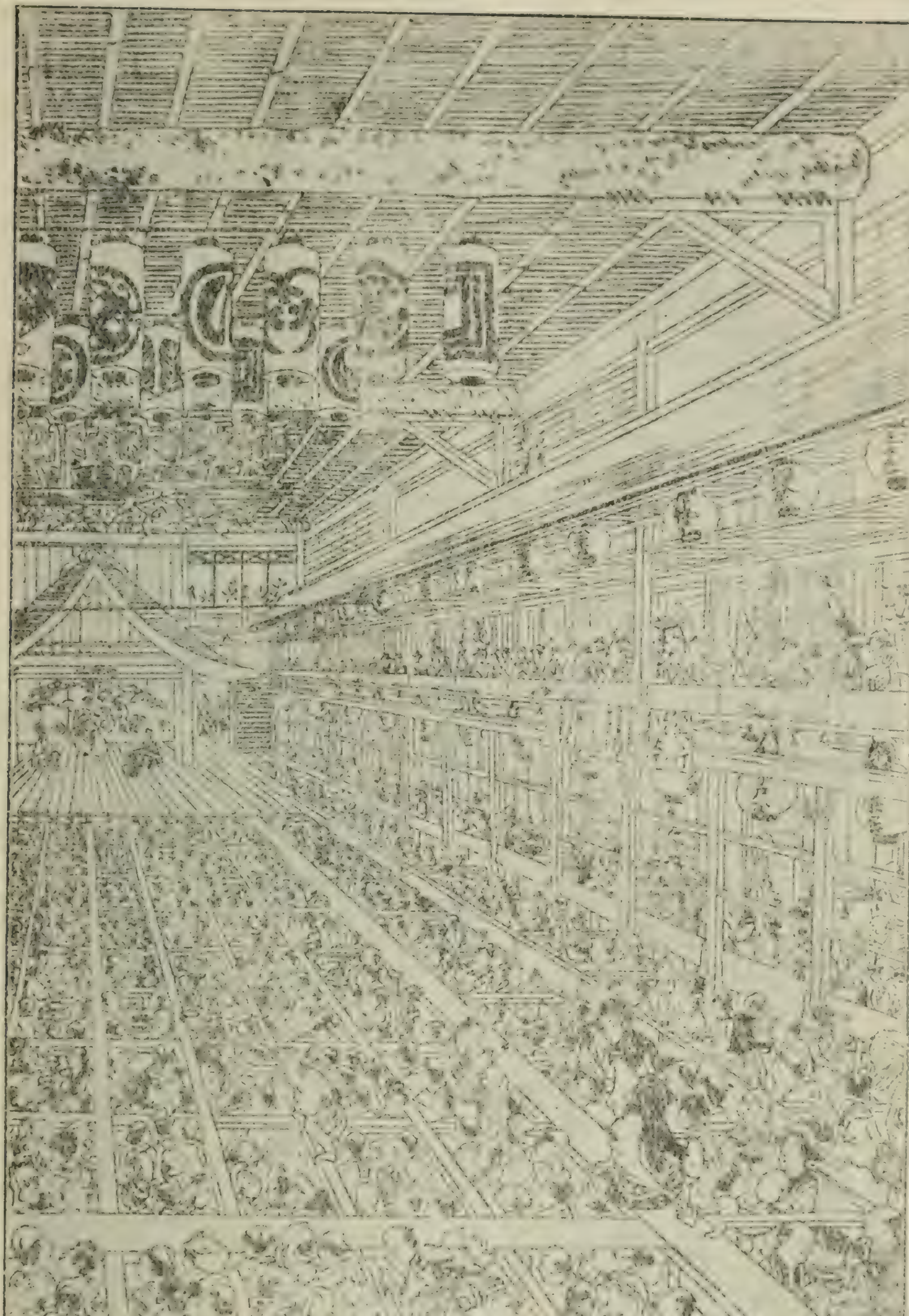
附「歌舞伎品定」に曰く、「所作の事は昔より今に至るまで中二階達女形のものにて、道成寺、石橋、七變化、など今は立役より勤る。よつて囃子は中二階へ付たるもの也。顏見世極る時には、中二階座頭（立女形）へ誰々と連名書を見せる。右ゆゑ立女形の支配也」。又曰く「女形は一日立役の相手のみにして、己の技を表はす事なきゆゑに所作を出す也。然るに、女形に所作の出來ぬ人ありて、立役より所作をするやうになり、亂れたるもの也」。「塵塚談」に曰く、「堺町、葺屋町、木挽町、三芝居役者には、立役、女形、實惡、道外、若衆形、親仁方、敵役、花車方と分り、銘々主役の藝のみを勤めし事にて有し。然るに三四十年以前、女形名人中村富十郎、木挽町にて立役の勤る工藤左衛門の役をなし、實惡中村仲藏、女形の勤るしのぶ賣をなし、立役坂東三津五郎、曾我十郎を勤し次の幕には太郎といふ道外をなしたり。三人ともに大當りにて有し。是主役にあらざる藝を勤めしの始也。此後主役にかゝはらす狂言する事になれり」と。

第五編　其の他の雜事

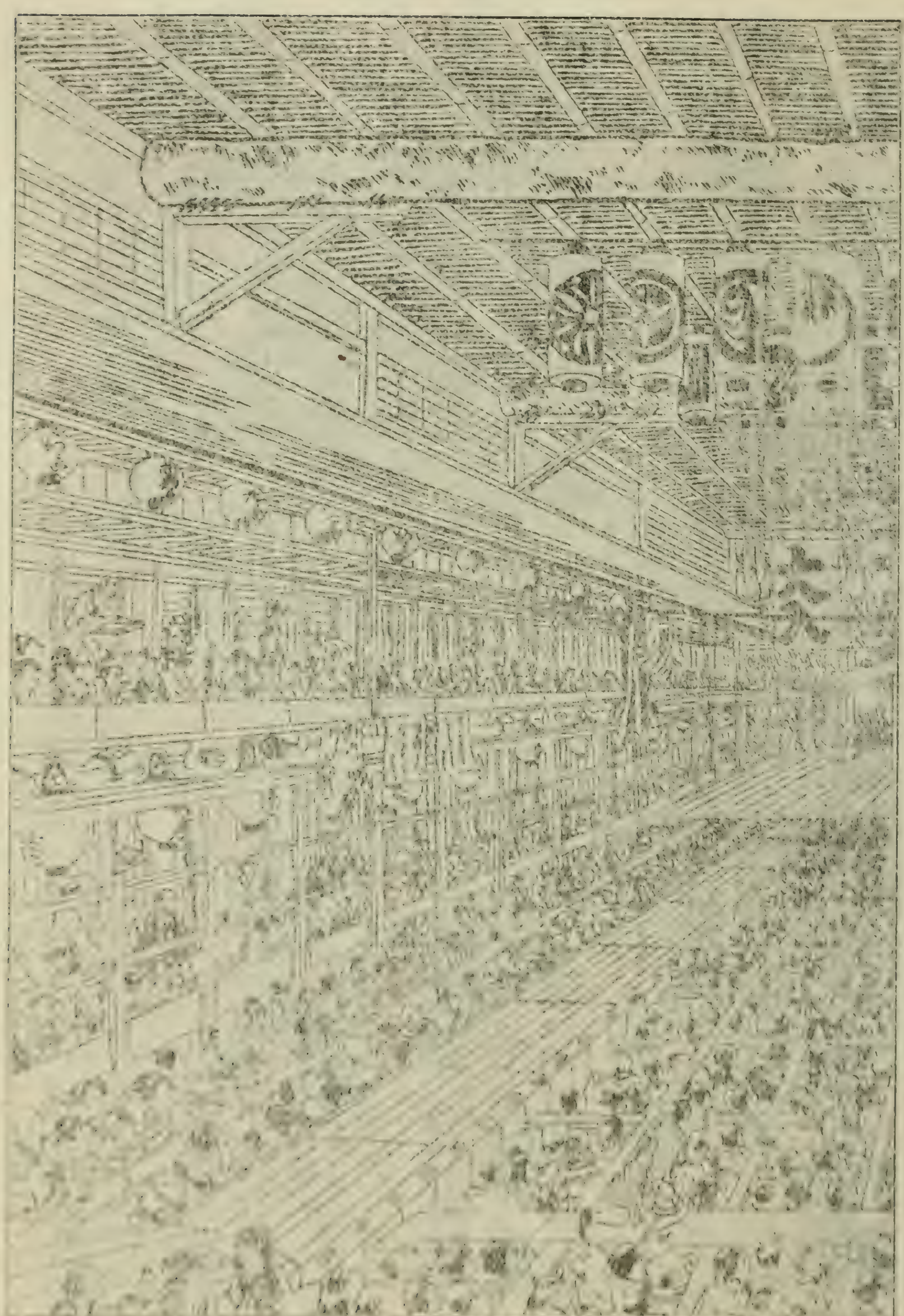
第廿六章　劇場建築と裝飾

劇場の面積。――舞臺裝飾――長谷川勘兵衞――二世勘兵衞。――衣裳及び小道具。――鬘の製作――鬘師友九郎。――化粧法。

江戸に於ける**劇場の面積**を寛政九年の現在によりて測るに、中村座は間口十三間二尺、市村座は十二間七尺、森田座は十一間三尺にして、奥行は三座とも二十間、別に操芝居は七間に十三間なり。翌十年正月、新築の時、間口を二間だけ廣くせしが、出勤の俳優、幸四郎、彥三郎等が、斯くては演藝に困難多しとて、故障を言ひ出せしかば、翌々十二年に至り、終に舊に復しきといふ。降つて天保五年の現在を見るに、寛政九年と尺寸の相違だもなし。思ふに此の面積は一定の法則として存せるならん。次いで文化六年正月、中村、市村、兩座の燒失せし時、政府は劇場の建築の高きに過ぐる爲め火災の危險多しとして、邊土へ移轉の内議ありしが、其の事實行せらるゝに及ばざりしと共に、劇場の棟の高さを二丈四尺に限り、且つ屋根は瓦葺か、又は柿葺の上を荒木田土を置き、漆喰の上塗をして消火の虞なからしめ、且つ塗家造りにすべきを命ぜられき。蓋し瓦屋根と塗家造りとは享保八年の法令によりて規定の條件なりしと雖も、何時しか其の制度の廢れたりしを、此の時に厲行せしめられたりしなり。茲に於て彼の海鼠壁



文化時代に於ける江戸の劇



場内部（歌舞伎年代記より）

も復舊せしが、それまでは總棟なりしを、右の如く其の高さを制限せられて總棟にては建築の餘りに低くなるを以て、屋根を横ざまに六棟にして、其の上に瓦を置きたり。尙ほ當時燒失せざりし河原崎座も、翌七年冬、取崩して右の通り新式の建築に改め、これより劇場の建築は永く此の制に據れり。天保の改革に淺草へ移轉しても、思ふに建築は依然として舊の如くなりしならん。其の後、安政二年の大地震に三座とも燒失するや、これまで大梁三本を用ひしを、其の材料の稀れなると、且つ費用の多額に上るを以て、市村座の大工棟梁二世長谷川勘兵衞が新意匠を考出し、十四本の小さき丸太を組みて之に代用し、同時に中村座も此の式に倣ひ、之を「龜甲梁」といひき。

●●●●舞臺裝飾は近世期に至りて愈〻發達したりき。寬政の初年に至るまで京阪の狀態は既に寶曆期に述べしが、江戸にては、寬政四年八月、市村座にて瀨川菊之丞が七役の所作を演せし時、「檜垣」の出端に、正面なる出囃子の二段を中央より左右へ割り、其の間より引道具にて現はれ、跡は元の如くとなり、又破風を引返して、田野の遠見を見するなど、見物の眼を驚かせしといふ。江戸に於て大道具の精巧となりしは此の頃を始めとす。翌五年四月、中村座にて、二世澤村宗十郎が「赤穗鹽竈」の大星由良之助に扮し、蜂の巣を見て思入あり、其のまゝ舞臺を廻轉せしかば、見物その意外なるに驚いて喝采せしといふ。蓋し江戸に於ける廻り道具は、寶曆十二年の市村座を最初とすれど、これまでは舞臺の上にて、道具に車を

着けて廻はせしを、宗十郎と共に上方より下りし大道具方老住屋重次郎(タコ十)といふ者、彼の地の方式を學び、舞臺下にて人足が之を廻轉するやうにせしなりき。次いで、同六年正月、河原崎座にて岩井半四郎及び市川門之助がお花半七の道行を演せし時、京橋より品川までの引道具と三段返しを見せ、其の大切に門之助が野分姫の亡魂に扮し、舞臺の上を宙乘りして喝采を博せり。又同七年四月、都座にて「忠臣藏」の討入を演じ、大道具を飾るに左右の大臣柱の爲め妨げられしかば、臨時之を取除けしが、元の如く修復するを得ざりしより、終に舞臺正面の破風を撤するに至れり。此の破風造りは能舞臺を眞似たるものにして、京阪の劇場には此の事なく、全く江戸の歌舞伎の特色なりしが、此れより永く消滅せしは、一面に於て舞臺裝飾が發達して、此等元始的遺物の生存を許さざるに至りしなればなり。

斯くの如く、寛政時代は實に江戸に於て舞臺裝飾の進歩せし時なりき。而も其等は大かたは京阪の設備を模倣するに止まりしが、長谷川勘兵衞(安永八―天保十三)の出づるに及び、劇場の大工棟梁及び大道具方として、道具仕掛もしくは怪談物の工夫に妙を得、「千人廻し」「三方せり上げ」など、彼れが意匠として名高かりき。勘兵衞が子たりし二世勘兵衞(初め清五郎)、專ら三世菊五郎の爲めに意匠を凝らし、市村座にて菊五郎が「五十三次」を演せし時、始めて「蛇の目廻し」を工夫し、其の他「金閣寺」のせり上げ、「五山桐」に山門の强盜返し、「忠臣藏」に長廊下の土間引割り、「五十三次」に根來の塔の三重せり上げなど、彼れが

工夫によりて喝采を博したりき。

補 二世勘兵衛についての逸話多し。左に二三を錄す。

お岩にて提灯より出づるは勘兵衛工夫にて菊五郎(三世)へ勸める。菊五郎更に呑込めず。勘兵衛、紙提灯の二番を買ひ來り、眞中糸の骨のかゞり二間切つて捨て、しつたる糸のつなぎへ張がねにて付、紙を張り、尤も前と後、通しぬけに切りたり。菊五郎細工場へ來て、是では小さかろうといへば、大きい中よりは誰でも出られます、小さい中から何うして出られると思はせれば、面白くなしといふ。顏が出たれば前へ身體すつと張つて出で、前へ下より撞木突上げれば、此の撞木に手をかけ、撞木の棹には足の懸る具ついてあれば自由にて、其儘、撞木を舞臺下へ引下げる、提灯の後よりは樋を突出す、是にて出られる道理といふ。梅幸感心して其通りにやり評判よく、世の中では梅幸が工風と今にいひ傳ふ。(「芝居秘傳集」)

堺町、顏見世のだんまり前の小幕に、三津五郎、半四郎、駕昇實は大塔の宮と内侍の靈にて、緋櫃より出るといふ仕掛物。之が幕明くと向うより緋櫃を擔ぎ出し、花道へ置き、せりふ渡り入る。どろ〳〵になり、櫃の蓋自然とあきて、中より四つ手駕の骨出で、左右へ駕の棒はね返して出で、四つ手駕になると、同じ花道、すつぽんより、兩人息杖をもつて出で、顏見合せ肩を入れ擔ぎ、鳴物になり舞臺へ來るといふ脚色なり。然るに、初に仕掛物をしくじりしが、作者福森久助、言譯なしと勘兵衛を捜せど見えず。愈立腹して、切つて捨てんと脇差を帶し、漸く樂屋にて見付けて言罵れば、長谷川は笑ひながら、仕掛物はしくじる事もあり、行損つた上でなくげ好き工風はつかぬ、といふに笑つて居る者は切るにも切られず、漸う事濟になりしが、翌日は美事に出來たり。久助これを見て却て禮を述べたり。(同上)

されば、文化文政より天保嘉永に至り、舞臺裝飾は愈精巧の域に進み、天保九年三月、市村座にて「田舎源氏」を脚色し、雛の所作事に紫宸殿の大道具を飾り、其れを强盜返しにする仕掛の花やかなりしかば、其の筋より普通の道具立に改むべしとて注意せられきといふ。これまで脚本もしくは衣裳等について政府の干渉を受けたる事は數次なりしも、舞臺裝飾について云々せられたるは實に此れを始めとす。以て其の如何に盛觀なりしかを知るべし。

尚ほ舞臺裝飾と同じく、內部の設備に屬すべき見物席の變遷は、次章の觀覽料の條下に於て述ぶべし。

衣裳及び小道具　●●●●●● 衣裳及び小道具に贅澤なる材料を禁ぜられし爲め、却て高價なる物を用ふるに至りし事は、寶曆期より既に然りしが、近世に比すれば尙ほ質素たるを免れざりき「壽阿彌筆記」に、天明二年、市村座にて「伊勢平氏榮花暦」が大當りなりし事を記し、且つ曰く、

此時、遠藤武者(中村仲藏)の衣裳、黑棧留に白加賀にて破れ格子を伏せ、平金にて縁を取りたるなり。是より先き中村座にて、門之助、初助六の時、曉風(大谷廣次)意久の衣裳、江戸中よき衣裳なりとて大評判なりしは、鬱金の眞岡に吉原の屋根の書附、平金の書なり。今は二つ目に斯んなものを着る者なし。

と。寛政に至り、衣裳の華美なるため制裁ありしも(第廿八章を看よ)、大勢は能く政令の禁ずべきにあらず。文化十三年著の「世事見聞錄」に曰く、

衣裳の美きこと論に絶えたり。譬へば天子將軍姫君などの藝をする時は、金襴、錦、綾、天鵞絨、或は金銀の高縫などの衣裳を着し、所作事といへる狂言の女形の衣裳は價百兩に及ぶといふ。實の姫后方にても、かほどの品を召し玉ふ事あるまじきなり。元祿の頃木綿衣裳に金襴、錦の如き形を見せ、金銀の箔にて摺込みしすら御沙汰となりて停止せられしと聞く。又刀、脇差なども、昔は緣頭、鍔、鞘も拵へものにて、身も竹か鯨に箔を設けて用ひし由。今の拵へは本式にて、緣頭、鍔、目貫、小柄、笄も、金銀色畫の上作の品を用ひ、花カイラギなどへ鯨などを用ひ、大名の差料にも劣らざる拵方なり。尤も寬政の御改革以來、衣裳改といふありて、折節役筋のもの見分に參りけるが、其の日一日はわざと古き惡き衣類を用ひ見分を濟ますなり。又間に私の樂みの見物に參りたる時は、己が妻妾又は遊藝者など連引きて終日見る事なり。

此の衣裳見分のこと、「只誠翁筆記」に一層詳く記されたり。曰く、

寬政初年改革につき、見物の出役有之旨御達につき、衣裳下見分と唱へ、狂言初日前に名主より通達すれば、芝居掛りの役人（町奉行所年番下役、俗に年寄同心といふ）。兩三人、其處の自身番屋又は名主宅へ出役の上、狂言中の衣裳それ〴〵見分して善惡を分ち許否す。

それより興行、狂言出揃の上屆出で、本見分當りは南北の與力一人づゝ、同掛りの同心四人、名主二人にて、座元より當狂言衣裳帳を出す。帳面と相違、又は下見分と相違の品あれば、下見分出役の者へ與力より沙汰あり、それより名主に命じ、座元頭取、掛りの者を呼出し、嚴重に談じ、種々嘆願の上早々引替へて仕る受書を出して相濟むなり。

又下見分の時は、例へば打かけ又は純子の着附、上下類の縫模樣、或は金銀の飾糸を附くる類は、未だ縫の下地にて、仕立前又は糸

を縫下げの前に持出し、見分濟みてより縫臺附をなし、或は糸を飾り、種々手を盡くしたるものなり。此等は上を欺くといふべし。名主も大概知らぬ顔にて濟ませしが、今度は大抵立派なりなど世評の役人に聞こえ、名主を呼出して、其れに相違なきや、未見分の時・不都合なきやうなど言はれ迷惑する事多かりしといふ。

又加役(立役にて女方を兼勤する事)衣裳は表方より出せども、氣に叶はねば彼れ是れむづかしく取替へさすなり。しかし表衣裳方にて上品を用ひず、かゝる時は掛合の上、衣裳代を受取り、それへ自ら増金して充分に拵へる役者もあり。衣裳は舞納めの後、表方へ返すことにて之を着せ剝といふ。代にて受取りしものは己れの物となる。

内情既に斯くの如し、第廿八章に述ぶる如く、寛政以後も屢其筋の干渉あり、又衣裳もしくは小道具に奢侈を盡くせし爲め俳優の所罰せられし者ありしと雖も、其の材料及び製作の次第に精巧となりしは、蓋し自然の數なりしなり。

天保十年三月、江戸の河原崎座にて「薄雪」と「國姓爺」を演ぜし時なりき。

金主は七代目(團十郎)贔屓の三十間堀の三村清左衛門(十人衆の一人にて鳥羽屋)一手持にて、自分の好にて、白猿(團十郎)市紅(團藏)を合せ、又久しく打絶たる國姓爺を見だしとて、損失を期しての出し物なり。二十五日と取極め、金二千四百餘兩の仕込、日拂も廿兩餘。……前代未聞の高給にて、七代目が五百兩、團藏が三百兩、訥升二百兩。團藏も訥升も勿體なしと、訥升の考案にて、樓下の着附を三番着て、手桶の立廻に赤い縮緬の襦袢を十五六枚、取替へ仕着を出し、錦繡女で本國織を切り、團藏は至って律儀の人なりしが、袋物屋が巻物五六本擔ぎ來りしを、海老藏が弟子に覗かせ見ると、茶のチレンプなり。其れに珊瑚珠の一寸玉と、外に[illegible]

なるべけれど一寸五分もある珊瑚を團藏に見せて居りたり。……あの親仁がテレンプを着るから呆然しちやあ居られぬ、と三人が衣裳の寄合となり。扨蓋を開けると、團藏の甘輝が、茶のテレンプへ金糸で模樣を縫出し、本物の玉を簪に、織物の玉を首へ掛け、七代目の伊賀守の上下、古金襴の裏付一具、幷に大小にて百兩、訥升の錦祥女の衣裳百八十兩、國姓爺の衣裳三人にて千兩もかゝりしといふ。(「戲場年表」其の他)

其は特別の場合ながら、俳優が衣裳を自辨せし當時に於て既に衣裳の華美なりしこと斯くの如し。而も次章に述ぶる如く、嘉永三年以後、一般に衣裳は俳優の自辨たるを改めて、興行主の負擔となせしより、一層豪奢を競ふに至りき。

尙ほ衣裳及び小道具が斯くの如く精巧となれるは、單に俳優自らが奢侈を追へるのみならず、藝風が次第に寫實に走り、且つ彼の尾上松助及び三世菊五郎等が、怪談もしくは早變りの狂言によりて、頻りに世間に喝采せられ、隨つて衣裳及び小道具の仕掛物に腐心せし結果に他ならず。此等の具體的記事は以上各篇に於て述べたる名優の條下に就いて見るべし。

鬘の製作が此の期に至りて進步せしも衣裳及び小道具と同じ原因によりてなりき。延寶中、既に銅製の鉢形へ毛髮を植ゑる事を京都にて工夫せしも、鬢を此の臺金に綴付けしものなるゆゑ、生え際の不自然なりしを、尾上松助が岩藤に扮せし時、其の銅の鉢へ羽二重を張りて、其の羽二重の纖維の間へ毛髮を植ゑて、生え際を見するやうに工夫し、其の他、仕掛の鬘は鬘師友九郎が更に此の製法を松助より傳へ

られて愈精巧を極めしが、友九郎の弟子に善八あり、善八の弟子に長谷川鐵五郎あり、益製作の進歩を見るに至れり。

尚ほ寫實の藝風が行はるゝと共に、化粧法にも變動を生ぜし事は團藏、幸四郎、等の條下に言へる如し。

第廿七章　劇場の財政

俳優の給金――大久保今助――衣裳は興行主の負擔。――觀覽料の上騰。――看客の減少。――財政困難。――劇場の休業と櫓の興行。――顔見世興行と一年抱へ。

俳優の給金も此の期に至りて愈上騰せりき。中村仲藏が「秀鶴日記」に「白猿（五世團十郎）高助（三世宗十郎）は千兩に上りたるに、我は三兩の役者より八百五十兩までしか上らず」とあれど、安永七年、森田座にて二度目の座頭たりし時、給金千兩にて手付金二百兩の代り脇差を受取れる由を自記せり。彼れも晩年には斯くの如き高給を受取りしと見ゆ。されど此等の給金額は契約の表面に過ぎずして、其の實は劇場の經濟の困難なりし爲め、約定の金額を支拂はずして、例へば千兩に極めても實際は六七百兩もしくは二三百兩しか受取る事を得ず、而も

役者の儀は渡世がらにて世上の評判も受け候者ゆゑ、名聞を存じ、給金高過分を望み候を、右體芝居より釣上げ候間、極め高のうち引方付候付最初より合點に候得共、高金に極め置き候へば、萬一、一ケ年狂言當り仕候時は全體の格高く有之候間格別には相減申

まじく、と存候儀より、自然と心弛みに相成、奢り榮耀な好み、身分費用失墜も多く相成候、

と寛政六年十月の江戸三劇場の規約書(廿八章を看よ)に記されたり。斯くて此の規約を設けてより、俳優の給金の最大額を一か年五百兩と限られたるが、當時の新舊比較表を見るに、

改正前の給金額	(改正後の同上)	人名	改正前の給金額	(改正後の同上)	人名
九百兩	(五百兩)	瀨川菊之丞(三世)	七百兩	(三百兩)	市川海老藏(六世團十郎)
九百兩	(五百兩)	岩井半四郎(四世)	七百兩	(五百兩)	市川門之助(二世)
八百兩	(五百兩)	澤村宗十郎(三世)	七百兩	(四百兩)	中山富三郎
七百兩	(三百兩)	松本幸四郎(四世)	六百兩	(五百兩)	市川八百藏(三世)

寛政年度の此の改革は、俳優の高給を防ぐと共に、其の收入の確實たらん事を期せしなるが、自然の傾向は規約の之を制する能はず、現に三世歌右衛門が千七百兩、三世菊之丞が千八百五十兩を受取りたる事實あり。文政十年に出版せられし「三都役者給金幷位定」によれば、

千四百兩	中村歌右衛門(三世)	九百五十兩	關　三十郎(二世)	八百三十兩	中村芝翫(四世歌右衛門)
千三百兩	坂東三津五郎(三世)	九百五十兩	中村松江(二世富十郎)	八百七十兩	中村　歌六(初世)
千　兩	市川　鰕十郎(初世)	九百二十兩	市川　團藏(五世)	八百五十兩	瀨川菊之丞(五世)
千　兩	市川　團十郎(七世)	九百二十兩	坂東壽太郎(初世)	千二百兩	松本幸四郎(五世)
千　兩	岩井　半四郎(五世)	八百八十兩	淺尾額十郎(後に實川)	千二百兩	片岡仁左衛門(七世)
千　兩	嵐　小六(四世)	九百兩	澤村國太郎(二世)	九百兩	嵐　來芝
九百八十兩	尾上　菊五郎(三世)	八百八十兩	嵐　橘三郎		

此は大阪にて出版せられしも、編者は江戸に居りて劇場の内部に通ぜし者なりしが、大いに物議を起し終に絶版せしむるに至れりといふ。然れば右の數字も門外漢の臆測なりとすべからず。

更に翌文政十一年、政府は令を下し、近年俳優の給金千兩以上に上り、彼の寛政年度の規約に反きて不埒なれば、再び五百兩を最大額とすべしといひ、即ち江戸の三劇場にて左の如く給金額を定めたりき。

五百兩（他に百兩）	松本幸四郎	五百兩（他に二百兩）	坂東三津五郎	三百五十兩（他に五十兩）	坂東彦三郎
五百兩（他に二百兩）	中村芝翫	四百五十兩（他に百兩）	坂東簑助	五百兩（他に二百兩）	岩井紫若
四百兩（他に五十兩）	嵐　冠十郎	五百兩（他に二百兩）	岩井粂三郎	五百兩（他に百兩）	中村歌六
四百三十兩（他に五十兩）	三枡源之助	五百兩（他に二百兩）	市川鰕十郎		
五百兩（他に二百兩）	瀬川菊之丞	五百兩（他に百兩）	關　三十郎		

茲に「他に」とあるは、衣裳料その他給金以外の報酬にして、尚ほ此等の諸優以下も其れ〳〵減額せられたり。更に天保五年、三座燒失せし時、再び此の規約の勵行を誓ひしが、其は殆んど有名無實にして、給金暴騰の弊は依然として行はれき。現に天保十年、河原崎座の三月狂言に、一興行きりにて、七世團十郎は五百兩、五世團藏は三百兩、五世宗十郎（訥升）は二百兩を受取れりといふ。（第廿六章を看よ。）こは例外の例なりと雖も、天保十二年、幕府の調査にかゝる「風聞書」に據れば、四世歌右衞門の如きは、千七八百兩を取り、其の餘にも、役柄により餘分の給金を得たりといひ、三十年前、大久保今助（寶曆七―天保五）が資本主となりてより俳優の給金をせり上げたりといひ、又同十三年の布令に

給金のほか、加役、よなひ、など唱へ、増金を望み、斷り受け候へば病氣と申立て、興行爲差支候につき、無據增金相渡……

とあるは、當時如何に規約が違犯せられしかを知るべし。

圖　大久保今助は常州水戸領邊垂村の産にして、壯時、江戸へ出で、土方縫殿之助の草履取となり、後、芝櫻川の惣淺を受負ひて大利を得、これより中村座の金主となれりともいひ、又は水戸侯の部屋頭なりしが、金一歩拾ひしとて、富籤を買ひ、八十兩取りしを、文化四年、四世歌右衞門が中村座へ下りし時、始めて同座へ貸したりともいふ。斯くて歌右衞門の好評なりしより、終に巨萬の富を作り、文政の半ばより、水戸侯の用達となり、威勢盛んなりしが、文政の末より、産を傾けて水戸へ逼塞し、天保二年、再び其處を出で、京阪四國を遊歷し、五年二月四日、江戸京橋の宅に死せり。或る時、出火あり、仕切場の定番、櫓に上り、「京橋通り」と呼ぶべきを、今助を憚りて「京橋樣通り」といへりといふ。又三津五郎歌右衞門の「妹背山」にて大入なりし時、作者鶴屋南北を呼びて今度の新狂言の褒美なりとて小判十兩を與へしと。(「東都劇場沿革誌」「俳優茶話」)

此の天保十三年の大改革に於て、水野越前の内閣が再び俳優の給金を減じ、最大額五百兩を厲行せしめし事は次章に於て述ぶる通りなるが、當時改正せられし給金額と人名表とを見るに、

五百兩	尾上菊五郎	四百兩	市村羽左衞門	二百兩	市川團十郎
五百兩	中村歌右衞門	三百五十兩	市川高麗藏	五百兩	岩井紫若
四百五十兩	坂東彥三郎	三百兩	嵐吉三郎	四百兩	尾上榮三郎
四百五十兩	澤村訥升	二百兩	市川團三郎	三百兩	尾上菊次郎
四百兩	尾上多見藏	二百兩	嵐猪三郎	三百兩	坂東しうか
四百兩	市川九藏	二百兩	關三十郎	三百兩	岩井杜若

百八十兩　小佐川常世

以下これに準じて削減せられたり。嘉永三年正月の俳優給金表に據れば、八世團十郎、四世小團次、しうか、五世宗十郎(長十郎)、羽左衞門、梅幸、彦三郎、菊次郎の八人は五百兩の列に在りき。されど、同年七世團十郎が河原崎座より受取りし給金帳を見れば、僅に三月より九月までに四百五十兩に上り、又同五年十一月より一か年間、嵐璃寛が同座より受取りし給金額を其の通帳によりて計算するに、合計九百兩餘に上れり。されば、五百兩を最大額とするの規約は夙に破れしならん。而も當時、璃寛は同座と給金の折合つかざりし爲め、大阪より下らじと言ひしを、衣裳の費用は興行主の負擔とすべしとの條件にて漸く江戸に來り、此の秘密を知れる小團次は大いに不服を唱へて、璃寛と同く衣裳を興行主に負擔せしむる事とし、是れより俳優の自辨たりし從來の習慣を一變して、孰も衣裳は興行主の負擔する所となり、隨つて俳優は間接的に其の收入を増すの結果となりたり。

更に文久年度に至り、給金の制限は愈亂れて、各劇場は伎倆ある俳優を聘する事を競ひしかば、益暴騰の弊を生じたりき。

俳優の給金を首めとして、道具、衣裳など、劇場のすべての支出が膨脹すると共に、其の觀覽料の上騰するは自然の勢なりき。「塵塚談」(文化十一年著)に、昔は舞臺際より鼠木戸まで切落し、又は中の間

とて、孰も追込なりし事をいひ、且つ曰く、

二三十年以來、貳塞際へ土間棧敷を拵へ、殘りは切落し、中の間にて追込にせしが、近頃は切落し、中の間は更になし、土間棧敷にしたり。

と。即ち寬政の初めまでは土間の半分を仕切桝として、其の餘を切落し、若しくは中の間として追込とし、其の料金は、一間一分一朱、上追込一人二百廿四文、次百六十四文、安札場百文なりしを、寬政五年の秋、中村座の新築成りて都座と稱せし時、切落しは花道の末に少し殘し、中の歩みの外と二所だけ追込みにせしのみにて、其の餘は大かた土間となし、且つ向棧敷を在來よりも一側增し、棧敷を三十五匁、土間を廿五匁とし、終に觀覽料は此の格に一定せりといふ。又同九年に、切落しを百六十四文と定め、別に一幕見を十六文とせり。此れを彼の安永三年の棧敷十二匁五分、土間十匁、切落し六十四文に比ぶれば殆ど二倍以上の騰貴にあらずや。

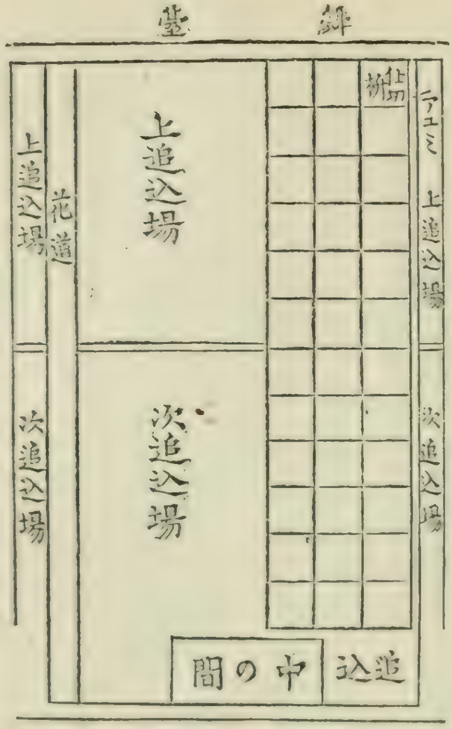
圖　寬政十二年出版の「增補戲場一覽」に、京都四條に於ける大劇場の見料を記せり。曰く、「大歌舞伎、茶屋附。上棧敷一間二貫六百文。下棧敷同二貫五百文。新棧敷二貫五百文。割合一人前二百八十文。切見廿四文。中錢八文。毛氈ゑむしろ二匁五分。」

尙ほ享和二年の夏、市村座を新築せし時、始めて高土間を設け、中村座は同年の冬、河原崎座は翌年、いづれも之れに傚ひしが、當時は「二重土間」といひ、土間と同じき觀覽料なりしを、文化二年の春より毛

氈を掛けて始めて高土間と稱し、料金を三十匁と定めき。されば、享和三年著の「後者昔物語」に、

一面に切落しにて、土間棧敷といふはなく、やう〳〵繩張など鶉の下に少ばかりありたる頃は、棧敷の外は二百錢にて事足りたるを、今は輕き身にても其の倍にて足らぬやうになりたる故は棧敷の食類とても昔は今のやうになかりしと見えたり。

といひ、文化十三年の「世事見聞集」には、



安札見物場
寛政初年の見物席
(「東部劇場沿革誌」より)

如何ほど儉約に見物しても、棧敷にては金一兩二步より安くは出來ざるなり。米三俵餘に當るなり。

といへり。尚ほ文化十五年五月、中村座を見物したる四人分の實費計算書を見るに左の如し。

廿五匁(土間代)。二匁(敷物代)。三匁(菓子)。二匁(酒)。三匁五分(取肴)。四匁(辨當)。七匁五分(夜食)。
〆四十七匁(金三分と二百廿四文)。

更に天保十二年、町奉行遠山左衞門尉が老中水野越前守に上りたる調書に、

棧敷代、古來より銀三十五匁に候處、近來四十匁に直上致し、其の上にも見物人多き節は、表向は四十匁にて、種々品をつけ、六七十匁位に相成候儀も有之哉に相聞……

とあり。降つて、安政五年七月、市村座へ七世團十郎が歸座せし時、棧敷四十匁、高土間三十五匁、平土間三十匁と掲示したり。其れまでも事實に於ては右の如く規定以外の料金を取りしと雖も、公けに掲示せしは此の時を始めとす。斯くて、文久年度に愈舊慣を亂りて、敷物代を餘分に取り、又は手積金を一間幾何と定め、劇場の舊債、又は仕込金の不足を此れによりて補ふの弊を見るに至れり。

斯くの如き觀覽料の上騰は劇場の收入をして増加せしむる筈なるも、一方には、觀覽料の不廉なる爲め看客の減少を見るに至れり。「壽阿彌筆記」に曰く、

明和より天明に至るまで、芝居專ら流行す。是故に評判記の小冊絶す刊行す。寛政より漸く衰へ、文政天保其極に屆る。夜行するに役者の聲色を遣ふ者斷じて無く、軒下に物を乞ふ丐兒も聲色を遣ふものなし。是れも流行せざるの一證とすべし。其流行せざる所以を原ぬれば、切落といふもの絶て、土間料高く、下廉に見ること能はず、一方金を貯へざれば場に上る事難く、一方金を費せば別に興を遣る地あればなり。享保の明君、人に問て曰く、芝居は繁昌なりや。答て曰く、甚し。又曰く、吉原は如何。答て曰く、芝居に如かず。歎じて曰く、都下の財未豐饒ならずと。是芝居は妓樓より費薄きが故なり。今亦費を薄くし、容易に觀ることを得ば明和に復すべし。其流行と不流行とは役者の功拙にあらず、儉と侈とにあり……

と。而も、一方に於ては、劇場が互ひに競爭せし結果、俳優の給金の膨脹せるあり。故に財政の困難は愈く切迫し、而も財政の困難は高利の負債を起して、益收支相償はざるの窮境に陷れり。寛政六年の劇場規約書に據れば、當時三座とも五十萬兩前後の借財高に上れりといひ、且つ其の眞相を述べて曰く、

一ヶ年二百日積りの興行につき、當り外れな右日數へ平均候ては、何程當り候年にても、一芝居にて一ヶ年六千兩位ならでは上り高無之、然るに五百兩以上、千兩までの役者五六人、五百兩以下百兩位まで六七人、百兩以下、並に狂言作者、囃子方、淨瑠璃語り申す給金、上り高を引競べ候ては一向利徳も無之候間、若し四季とも狂言相外れ候年は、一ヶ年の上り高、惣給金高の半減にも不足す、諸掛り雜用の出方も無之につき、役者へ相對之上、極め高へ引き方をつけ興行相始め候ところ……古來は五百兩以上の極めも無之候へども、金高少く候とも極り通り受取候間互に實情を以て興行打續候ゆゑ、仕入金高も利安く、或は役者のうち贔屓にも致し候金主共無利足にても出金有之候につき、芝居に借金なく、興行差支無之候處、三十ヶ年程以來、當時まで前書の通り不實の仕儀に相成、三座とも手代任せに取賄はせ候につき、役者抱方の儀も一方に五百兩に對談致候へば一方にて六百兩に申込み、又七八百兩にもせり上げ候ゆゑ、同家業と申候ても互に流行のみ爭ひ、内心睦しからず、實情を失ひ候につき、段々取續け難き仕儀に相成候。

寛政十二年著の「乘合船」に劇場の收支豫算を說いて曰く、

芝居の凡見積は、當顏見世より來十月迄を二百日と見つもりて、其時々々の役者の座組に據る事ながら、大概一ヶ年七千兩位、内外の積りにて、大入、中入、不入をならして、興行一日を金四拾兩あがりとならして、二百日にて〆八千兩と定しもの也。最、顏見世大入の節は、八九拾兩程も揚るものにて、一ヶ年の內、三替り大入あれば、金主の損毛は是なきもの也。

と、然れども、此の豫算の超過せる事は前に述べたる如きのみならず、寛政以後に至りて愈甚しくなりき。「只誠翁筆記」に曰く、

天明寛政より文化度の頃までは、芝居一ヶ年六度の興行、日數二百日餘と定め、此の仕入金七千兩、外臨時、仕切細式並に顏見世、又

は非常入用共高千兩と見積り、二口にて凡八千兩も掛ると見て、之を六分の見物人收納とするに、損益なし。其の餘は潤益とす。然るに、文政の頃より、追々給金又諸雜費相嵩み、終には一ヶ年一萬二三千兩の仕入高となる。されども計算上、棧敷土間には場代仕込金に準じ、何分か直段增ならざれば詮方なしとて評議の上、度々此の事嘆願すと雖も之を許さず。其の上、度々の類燒にて、金主家作人、座元、等の損失少からず……。

かゝれば、文政十一年九月、町奉行へ劇場永續の方法と俳優給金の削減とを出願し、當時、町奉行より三座の收支損益の決算を徵せられしに、各劇場より出せしもの左の如くなりしといふ。

中　村　座

文政十年十一月興行より同十一年八月興行まで

上り高　金五千六百五十四兩三分と錢三百四十文

拂ひ高　金七千七百兩と錢一貫百文

差引金二千四十五兩一分と錢七百五十六文　損毛

市　村　座

文政十年十一月興行より同十一年八月興行まで

上り高　金五千六百四十六兩一分二朱と銀三匁

拂ひ高　金八千二百三十九兩三分二朱と銀十三匁

差引金二千五百九十三兩一分と銀一匁　損毛

河原崎座

文政十年十一月興行より同十一年六月興行まで

上り高　金二千二百四十五兩三分二朱と錢三貫六十文

拂ひ高　金六千三百三十八兩二分二朱と銀五分二厘

差引金四千九十二兩三分餘　損毛

右仕入金高は借用金も御座候につき、利分差加へ申候へば尚又餘分の損毛に相成申候。

右の結果は更に同年の劇場規約書となり（第廿八章を看よ。）尚ほ天保九年、三劇場の燒失せし時、更に三座々主と俳優との間に冗費を節すべき規約を設けしが（第廿八章を看よ。）、其の前文に、

芝居度々の類燒につき、座方借財相嵩み、既に文政十一年改正の處、兎角等閑に相成候處、今般類燒後、又候三座元並に當時の出勤の重立候役者立會の上改正の處、役者臨時出金多くして給料にては引足不申、依而、銘々大借と相成、左候へば自然興行にも差支候に付、尚今般改正の上、夫々出費致すやう取極候……。

とあり。當時劇場と共に俳優も疲弊せしを知るべし。斯くて、同十三年、再び此の規約の勵行を聲言せしも、積弊は終に依然たりき。

〔四〕大久保今助が劇場の金主となりて、暴富をなせし事は前に述べしが、シーボルト事件の爲め改易に處せられし[illegible]

も、文政十一年十一月より、市村座の金主となり、興行毎に損失のみなりしに、菊五郎半四郎を聘して急に大入を取れるから、其の三日目に玄碩は拘引せられ、市村座は彼れに對する債務二千六百三十兩餘に上りしも、金主なしの大入とて孰も悦喜せりと。又儒者山本北山も市川鰕五郎を贔屓にせしより、彼れを名題に上すを條件として河原崎座の金主たりし事ありといふ。(「文政雜誌」、「芝居秘傳集」)

財政の困難は、劇場の休業と謂はゆる扣櫓の興行を頻繁ならしめたりき。寛政以前に於ける各座の起伏は既に寶暦期に於て述べたり。茲には寛政以後を列記せん。

寛政元年正月より森田座休業、同二年十月より同九年九月まで、河原崎座代りて興行。

寛政五年七月より中村市村兩座休業、同年十一月より同九年九月まで中村座の代りに都座、同十年九月まで市村座の代りに桐座興行。一時に三座とも扣櫓なり。

寛政十二年正月より森田座休業、同年十一月より文化五年三月まで河原崎座代りて興行。

文化十二年正月より森田座休業、同年五月より同十四年十月まで河原崎座代りて興行。

同年七月より市村座休業、同十三年三月より同十四年七月まで桐座代りて興行。同年十一月より文政元年七月まで更に都座代りて興行。同年十一月より同三年十一月まで更に玉川座代りて興行。

文政元年七月より森田座休業、同二年六月より同五年七月まで河原崎座代りて興行。

文政六年九月より森田座休業、同年十一月より天保四年九月まで河原崎座代りて興行。

天保八年十一月、森田座休業、同月より安政二年七月まで河原崎座代りて興行。

同時に、舊慣の紊亂は頻りに劇場に行はれき。其の主なるものは顔見世興行と俳優を一年抱へにすることの廢れたる事なりき。蓋し、昔は京阪も江戸も、毎年十一月を年度の始めとして、俳優を滿一か年間づゝ雇入るゝを例とし、且つ十一月は新たに雇入れたる俳優を見物に紹介する興行とて、これを顔見世といひ、各劇場とも必らず新作を上場し、內外の裝飾に盛觀を競ひたるが、京阪にては彼の嵐雛助（第三章を看よ）の頃より次第に一年抱への制度の紊れしに拘はらず、江戸にては尚ほ舊慣を維持せしに、七世團十郎が全盛時代より、一興行きりにて他座に轉勤し、或は同時に甲乙兩座を兼勤するの習慣を生じたり。又嘉永二年十一月、市村座にて四世歌右衛門が不入つゞきなりし爲め、他の兩座へ俳優交代の延期を賴みて歌右衛門の名殘興行を催し、顔見世を初春に繰延ばしたるより、次第に其の儀式を紊るに至りしといふ。

第廿八章　法令と社會

政令の干渉――兩つの絕頂。――規約書――再び劇場規約――天保十三年の大改革――遠山左衞門尉の意見書――劇場の轉地。――冷酷なる社會の待遇――表面の形式のみ。

政令の干渉は前期に於て正德と享保との二絕頂を爲せし如く、近世期に於ても、寛政の松平定信公の內

閣と及び天保の水野忠邦の內閣とに兩つの絕頂を示せりき。是れより先き天保七年、十一代將軍家齊の將軍職を襲ぐや、松平越中守定信入りて閣老として諸般の改革をなす、而も其の政策は劇場に對しても峻嚴なりき。即ち、

寛政元年三月。狂言役者共、舞臺は勿論、平生の衣服とも、前々御定の通り、絹紬麻布の外一切着用仕りまじく、且つ平生萬端質素を相守るべき事を命ぜらる。

同年同月十八日、瀨川菊之丞が劇場より歸途、琥珀、七子、縮緬、或は琥珀地の織物等、眼だちたる衣類を着用せし廉により、品物を沒收し、過料五貫文に處せらる。

同年九月。芝居打出しの儀、以來夕七つ時限り相仕舞可申、明り燈し候儀一切不相成、火の元嚴重に相守り、風烈の節は別て念入可申を命ぜらる。

尙は、芝居茶屋の儀は、享保八年規定證文差出以來、度々申渡し置き候通り、家作り、座敷向き、圍ひ候儀は勿論、放れ座敷と唱へ家作不相成、すべて外より見通し候やう可致と命ぜらる。

同二年七月、市村座の「忠臣藏」に藥師寺次郎左衞門といふ役名ありしを、本丸徒頭たりし藥師寺家より故障を申込み、山名次郎左衞門と改めて町奉行へ屆出でしに、大番組山名十郎左衞門より更に故障のありし爲め、大澤次郎左衞門と改む。

同三年正月、中村座にて市川八百藏の助六、岩井半四郎の揚卷、尾上松助の意休、いづれも華美なりし爲め取上げらる。又八百藏より座中へ反物百十反を贈りしを糺問せられしが、先代八百藏の遺金百兩を施せしとの答辯にて事濟みたり。

同四年十二月、市村座「菊伊達大門」に市谷の寶藏へ忍入りし二賊の事を脚色せりとて中止を命ぜらる。

同六年五月、都座及び桐座にて曾我祭を催し、俳優のほか座員の者まで眼だちたる衣類を着し、花山車萬燈を往還へ持出せし廉により、兩座主及び家元共を罰せらる。

同時に劇場の不取締なる事、俳優の給金の過分なる事を認め、劇場永續の爲め、規約書を設けしめられき。蓋し享保年度の規約を一層嚴密にせるものなり。左に其の内容を示さん。

一、俳優一ヶ年の給金最高額を五百兩とし、興行の不成績なるも必ず約定の給金を減ぜざる事。
但し劇場一日の上り高五十兩以上を當り興行とし、此の場合には上り高の幾分を俳優全體へ「當り分」と名づけ各自甲乙を付して配當し、五十兩ならば五分、六十兩ならば六分、七十兩ならば七分、八十兩も右に準ずる事。

二、俳優の抱入は毎年四月中旬を期し、三劇場の當事者集會して、先づ座頭たるべき立役一人宛を極め、次いで、女方、敵役等、いづれも三劇場の合意によりて之を決し、且つ町名主へ其の連名を届出つる事。

三、甲の劇場にして資本のなき爲め興行を休む時は、其の座の俳優及び作者を他の二劇場へ助勤せしめ、給金は一ヶ年の興行を二百日と假定し、日割を以て支拂ひ、決して彼等をして職を空くせしめざる事。
但し甲の劇場が興行を始むる場合には、俳優等は助勤を廢して其の劇場に歸るべしと雖も、助勤の劇場が尚ほ興行中なるに拘はらず中途より彼等を呼戻さゞる事。

四、他座へ助勤の結果は、京阪の如く俳優を月雇にする習慣を生ずるかも知れねば、其の場合は給金を、春若干、夏若干、と三劇場の合意により定め置き、決して互ひに金額をせり上ぐるの弊を生ぜしめざる事。

五、劇場の事務員を制限し、札場及び木戸番とは十五人づゝ、留場は廿人、棧敷番は三十人、半疊賣と表働とを合せて三十八人、煙管賣は二十人、樂屋番と口番とを合せて三十人、以上を最多額とする事。

但し一時に減員しては彼等の爲め難澁なるゆゑ、轉業もしくは死亡の機を見て右の定員に達するまで漸次に減員する事。

六、俳優及び當事者は豫ての規則の如く必ず劇場附近へ移轉すべく、反く者は除名する事。

七、劇場の休業せる爲め俳優の旅稼ぎする者ありしも、今後は猥りに他國に赴くを禁じ、もし神佛參詣、病氣見舞、又は湯治の爲め他行するものは、劇場の許しを得、且つ町名主へ届出づる事。

八、脚本に風紀を害し人心を紊す如き作意をなさゞる事。

九、俳優日常の衣服は質素を旨とし、反く者は町名主へ申告する事。

十、俳優は酒宴遊樂の場所へ出でず、もし止むを得ずして町人に應對するとも、席上にて大酒又は不謹愼の行爲をなさゞる事。

此の規約の幾もなく實行せられざりし事は、前に述べたる給金の例によりても明かなれど、これが爲め違犯者の處罰せられし者頻繁なりき。

同七年正月、都座にて瀨川菊之丞が男舞を演じ、本金絲の繡を着用せしとて衣裳の引換を命ぜらる。

文化二年三月、市村座にて南茅場町の土藏破りを脚色して、松本幸四郎が之に扮せしを修正せしめらる。

同年五月、河原崎座に尾上松助が「鏡山」の岩藤に扮し、被布に似たる品を着し、又「助六」の意休に扮して、銀の羽折紐及び煙管を用ひしとて、譴責せらる。

且つ色々新作事を狂言に取組み、且つ御法度の品を用ひずといふ誓書を三座の座元及び名主より徴せらる。

同三年三月、河原崎座焼失につき、市中に在りては其の風俗を亂すを恐れ、邊土に移轉せしめんとの内意ありしが、評議の上この事止む。

同六年二月、中村座及び市村座焼失につき、火災の危險ありとし、更に本所もしくは深川に劇場を轉するの内議ありしが、彼等の嘆願により、轉地を中止し、棟の高さを普通の民家と同く二丈四尺を限りとし、且つ瓦屋根か又は柿葺の上へ荒木田土を置き、漆喰の上塗をして導火の虞なからしめん事を命ぜらる。

同月。役者總代として團十郎後見人男女藏を呼出し、役者行跡取締方、寛政度の申渡に違はざるやう諭さる。

同年六月、市村座の「日本振袖始」に七世團十郎が素盞雄尊に扮し、其の衣裳道具の立派なりしかば中止を命ぜらる。

同年、市谷八幡境内の宮地芝居へ市川荒五郎等が出勤せしを、三座より起訴し、其の芝居は停止され、荒五郎等は大芝居を除名さる。

同八年六月、中村座にて田沼の刄傷事件を脚色したる「花菖蒲佐野八橋」を停止せらる。

同九年正月、市村座の「初松鶯曾我」の二番目に小梅の瓦師殺しを脚色せしかば、座元羽左衞門を譴責し、其の觸を除かしめらる。又木場文藏に扮せる市川團十郎が去年禁令ありし文身をせしとて譴責せらる。

同十四年春、大阪にて中村歌右衞門が高價なる引幕及び水引を用ひしとて譴責せらる。

斯くて、文政十一年九月に至り再び**劇場規約**を設けしめられき。此の規約を設くるに至りし内情は既

に前章に述べたり。茲に其の内容の大要を示さん。

一、毎年四月中旬、各座に於ける俳優の分配を三劇場合意にて決する事。
二、俳優の給金は座頭一ヶ年五百兩を最高額とする事。
三、手附金は座頭百兩、以下は一ヶ年給金の一割にして、其れ以上を渡さゞる事。
四、俳優へ劇場よりの貸金は、他座へ轉勤する際、其の座の座元より必ず返濟し、決して翌年へ持越さゞる事。
五、甲の劇場急に休場する時、其の座の俳優は自他合意の上にて他座へ招聘する事。
六、俳優、作者、等既に給金を受取り、途中にて他座へ無斷出勤せんとするも、決して他座にて用ひざる事。
七、秘密に給金を増し、又は別の名目にて増給する時は、他座より交渉して、興行中たりとも其の俳優の出勤を禁じ、且つ次の興行二回を休業せしむ、同時に其の劇場は翌年の俳優分配に投票權を失ふ事。
八、表方樂屋の冗費を省く事。
九、事務員に不都合ありて免ぜし時は、他の劇場にても之を用ひざる事。

天保五年七月、右の外に更に、三座々主と俳優との間に冗費を節儉するの規約を設けしめられき。其の條目頗る些事に渉ると雖も、左に本文のまゝを掲げん。

一、顔見世、五節句狂言の節、積物、引幕、水引、等貰請候儀は相斷可申事。
一、名弘め摺物、又は神佛勸化、無據方より願來り候とも相斷可申事。

一、近來樂屋、神佛勸請致し、祭禮と名づけ集會致候儀決して不相成候事。尤も古來より仕來り候儀は不苦候。

一、女形より差出し候木戸前羽織の儀、立女形に限り候。但し二枚目は扇手拭に限り候事。

一、名題役者送り候留場一人に限り、其餘役者、留場中より日毎に三人宛定役にて一流送り、萬端心付可、尤も右の分、名題下役者共より心添致可申事。

一、役者掛り合出方、其外の者共へ役者共より差遣し候祝儀、何程遣し候ても不足がましき儀決して申まじく候事。

一、當り振舞と相唱、大行の物入有之候風聞に御座候。以來は失費無之やう可致候事。

一、花見、酒番、餅番と名付候分無益の儀につき、向後相止可申事。

一、重立ち候役者共、樂屋中喰致候砌、其の當人の外野菜の儀不相成候事。

一、樂屋部屋々々へ如何はしき風體の者入込み、拵への支度に差障難儀の趣に付、以來は留場口より番役を以て兩三人づゝ無懈怠心付、口論等無之やう相勤可申候事。

此の規約が劇場と俳優の兩者の疲弊を救ふべく設けられし事は前章にも述べしが、思ふに其の實行は難かりしならん。斯くて天保十三年の大改革となりしが、其の間にも、政令の干渉はまゝありき。即ち、

天保七年八月、湯島天神社地の笹屋長三郎座、及び芝神明社地の江戸喜三郎座を取崩す。蓋し三座以外の劇場なればなり。

同九年四月、市村座の「内裡模樣源氏紫」の所作事に、紫宸殿の大道具大仕掛、あまりに目だちたりとて譴責せらる。

同十一年八月、湯島天神社地の笹屋長三郎が三月に再興せしを再び取崩さる。

是れより先き、徳川政府は水野越前守忠邦新たに老中となり、次で十二代將軍家齊、その職を辭して、十三代將軍家慶之に代り、大いに弊政を革め、奢侈を禁じたりき。偶、天保十二年十月、中村座より出火し、市村座及び操芝居の兩座を燒失せしかば、劇場の火災に危險なると及び風俗に害あるとの故を以て、之れを絶對的に廢止せんか、もしくは邊土へ轉地せしむる意あり。卽ち各劇場及び茶屋、其の他に新築を見合すべしと命じ、一方に町奉行遠山左衞門尉に其の意見を諮問せりき。當時、左衞門尉の意見書によれば、「破却と申儀は是まで更に議論も無之儀につき、別段存寄不申上候」といひ、轉地については、「場所の遠近により市中の風俗改り候と申儀は更に見當なき論と奉存候」といひ、兩者とも同意を表せざりしが、同年十二月、終に劇場の轉地を命ずるに決し、其の旨を發表したりき。當時の申渡書を見るに、轉地の理由は、俳優等が身分の差別を忘れて町家の者と同樣に立交る事、狂言の仕組卑猥にして市中に惡風を流す事、且つ流行の源となり奢侈の弊を釀す事、故に市中に劇場を置く能はずといふにありたり。斯くて移轉地は淺草聖天町なる小出信濃守の下座敷と決し、面積一萬千五十坪を三分して、猿若町一丁目、二丁目、及び三丁目と稱し、一丁目を堺町の代地として、中村座（二百三十六坪五合）と操り芝居の薩摩座とを、二丁目を葺屋町の代地として、市村座（二百三十六坪五合）と操り芝居の結城座とを作らしめ、兩町の住民一同に對し移轉料五千五百兩を賜はりたり。又このたび燒失せざりし木挽町の河原崎

座も、他日燒失するか又は大破の時は猿若町三丁目へ移轉すべしとて、移轉料二千七百五十兩を下されき。翌十三年、工事終りて市村座は九月より、中村座は十月より興行を始めしが、次いで河原崎座も十二月に至り、更に移轉を命ぜられ、十四年五月より新地にて興行を始めたりき。

劇場の移轉と共に、天保十三年七月、彼等の取締について嚴重なる布令は發表せられき。其の内容は、

一、給金の儀は座頭の者一か年五百兩を限り、其の餘の者は右に準じ、總て座元よりの申談違背致間敷候。

但し給金渡し方遲滯無之やう致し遣し、座元も權威を以て押付け候取計致まじく候。

一、役者共儀、過不及これなきやう三座へ割合ひ、一か年限り代る〲相抱へ、一か所へ居付き不申やう致し、雜合抱入れ候儀は不相成候。

一、近來大入の節は棧敷代敷物代等引上げ候由、向後古來の直段より一切引上げ不申。

一、狂言仕組等猥りなる儀これなきやう可致候。

一、向後他所住居相成らず、途中往來致候節は暑寒とも編笠を相用ひ、總て素人へ立交り候儀は難相成候。

一、三か津の外、遠國上下在町へ罷越し狂言致候儀は不相成候。湯治神佛參詣など〻號し猥に参り候儀は致すまじく候。

此の布令は江戸のみならず、京阪へも發表せられて、其の勵行を促がすと共に、數多の違犯者を生じたりき。即ち、

天保十三年正月。人形町の源氏茶屋十人外十一人、劇場移轉の中止を再度出願せしにより手鎖に處せらる。

同年三月。市村羽左衛門、坂東彦三郎、嵐吉三郎、及び中村歌右衛門が素人へ立交しとて検擧せられしが後来を戒めて放免せらる。

同年六月。市川海老藏(七世團十郎)、身分をも顧みざる奢侈僭上により、家宅を取崩し、物品を取上げ、江戸十里四方追放に處せらる。(第二篇第十四章を見よ。)

同月。坂東しうか、尾上菊次郎、及び吾妻藤藏が女湯へ入浴せしとて手鎖及び過料三貫文に處せらる。

同月。光十郎、菊壽、及び梅之助が姓名を變じて他處に住し、且つ編笠を著用せざりしとて同上に處せらる。

同年九月。澤村宗十郎及び尾上菊五郎が編笠を忘れし廉により手鎖及び過料三貫文に處せらる。

同月。澤村訥升、中村歌右衛門、及び尾上菊五郎が加役のよなひ金を望みしとて過料十貫文宛に處せられ、且つ座主なる中村勘三郎、市村羽左衛門、及び河原崎權之助は右の金を渡せしとて過料五貫文宛に處せらる。

同月。草双紙、錦繪類に役者を描く事を禁ぜらる。

同月、旅役者と唱へ、兩國廣小路其他市中にて渡世の者を引拂はしめ、轉業せざる者は猿若町へ移りて役者共の弟子となるべきを命す。

同月。市谷八幡社内の齋藤座・湯島天神社の佐々木長十郎が天神座を取拂はしむ。

同十四年五月。尾上菊五郎が菅丞相に扮して紋紗の裝束に似たる品を着用し、又早野勘平にて臺引食物等實物に似たるを持ちしとて現品を沒收し、過料十貫文に處せらる。(第二編第十三章を見よ。)

同年。中村富十郎、生活の奢侈なる廉により大阪を追放せらる。

同年、劇場ハ棟の高さ二丈四尺、軒の高さ一丈八尺を限りとすと命ぜらる。

蓋し天保の新政は將に滅せんとつしゝある德川政府が最後の光明を發揮せるものなりき。此の後、外交と財政とに蹉跌し、且つ謂はゆる尊王攘夷の輿論と相容れずして、次第に其の威力と實權とを失ひ、終に明治の大政一新となりき。而も此の間にありても、演劇に對する政令の干涉は頻りなりき。

嘉永六年九月。中村座に所作「花莚嵯峨猫魔稿」（佐賀の猫騷動）を上場せんとせしに、鍋島侯より故障の申し出で、開演を禁ぜらる。

安政六年二月。市村座の新作「小袖曾我薊色縫」（鬼坊主）に前年所刑せられし金藏破りを脚色したりとて削除を命ぜらる。

慶應元年三月。操芝居の薩摩座及び結城座の猿若町より外神田講武所もしくは米澤町へ移轉する事を許す。

同二年三月。近來世話狂言人情を穿ち過ぎ、風俗に拘る故、以來は色氣なども薄く、成るたけ人情に通ぜざるやう致すべしと達さる。

同月。俳優の猿若町以外に住し、茶屋へ招かれ、又編笠を用ひざるを戒む。

同月。宮芝居を停止し、且つ役者繪を禁ず。

劇場に對する政令の干涉が斯くの如く峻嚴なりし如く、彼等に對する社會の待遇も亦冷酷なるものなりき。俳優が他の平民と雜居する事を禁じ、且つ途上に編笠を被るべく餘儀なくせられし事は、既に前に述べたり。而して芝居町は遊女町と共に之れを「惡所場」と稱せられて、不良なる人物の巣窟、不善なる風俗の泉源と目せられ、士君子のこゝに出入する事を恥とするは、正德以來の因習なりき。文政二年、中村座と玉川座とにて、三世菊五郎と七世團十郎とが同じ「助六」に扮せし時、

三月十三日、紀州侯姫君、濱町館より歸りの途中、假に芝居見物との事にて、兩座より御伺あり、兩座とも木戸御留のみにて、其時は

其儘にて宜敷との事にて、仕度掃除の最中、はや御入との先ぶれ、表木戸へ、出方、役掛り、其外一同下座。……晝八つ時過ぎ、葺屋町玉川座へ駕を据られ、丁度團十郎の助六の出端の處、乘物を差上げ、戸を細目に明けて暫く舞臺を御覽、夫より中村座、これも助六の幕明、口上ぶれの處にて、狂言は御覽なく、人形町より歸館。市々の噂とり〴〵にて、或は役者の名前聞糺ありしなど申程なれば、町奉行岩瀬伊豫守より御聞合あり、御徒目付よりも探偵あり、同月十九日、姫君は國元へ押込、御供頭増村某は切腹、他六人永押込被仰付。(「芝居秘傳集」「劇場年表」)

貴族の令孃が劇場を一過せしだけにて極刑者を出すに至る。當時の上流が如何に劇場を呪ひしかを知るべし。

然れども、此等は寧ろ表面の形式のみ。法令の名文には峻嚴なる條件を設けて、其の實際に於ては却て寛裕なりしこと、彼の「衣裳見分」(第廿六章を見よ)の實例に見るが如く、貴族もしくは士人と雖も、裏面に於ては常に劇場に出入し、且つ俳優と昵近したりき。或は第廿五章にいへる如く、幕士が囃子方として劇場に出演せる事實に徴しても明らかなるのみならず、「紙屑籠」に、

大昔は高家の御隱居にても、御忍にて芝居見物あり、打出して後、茶屋へ御ひいきの役者を召されて御盃を下さる。元祖梅幸、富十郎は至つて贔屓の役者ゆゑ、度々御大名衆へ召されしといふ。袴羽折にて遥か茶屋の座敷の下に平伏して、御盃を頂戴して、ここ〳〵に暇を乞ふて立去る。……

といひ、仲藏の「雪月花寐物語」に、長州侯の私邸に召されし事を記して、

大膳大夫様、年久敷御出入仕り候へども、御代には御目見相成不申、御隱居被遊、檜の木御屋敷へ召れ、御菓ないたゞき申候。其上、御座敷にて所作御望に付、四季椀久御前にて仕り申候。三味線被遊、歌富士田音藏謡申候。上り申候人々は、川竹粕七(狂言作者)、和泉屋勘十郎(芝居茶屋)、松助(尾上)、藤藏(吾妻)、三味線佐吉、の人数にて御庭拜見仕り、御茶園拜見、其上、御菓いたゞき、御草子入三つのふた物、唐物にて箱入戴申候。御國へ、御入被遊候て、長州の紫硯わざ〳〵御國より被下、難有次第にて候。

といひ、其の他、俳優が諸侯に寵遇せられ、其の邸に出入せし逸話は多く傳へらる。されば、徳川時代の法令と社會とは其の表面に見えたる如く、事實に於ては甚しく彼等に峻嚴に且つ冷酷ならざりしならん。

結論

要するに吾が日本演劇(殊に歌舞伎劇)の發達は雜駁にして且つ不健全なるものなりき。女歌舞伎劇起りて以來、最初は全く樂劇本位なりしが、何時しか科白劇の之れに寄生するありて、終に兩者の混淆となり、一方には象徴的に又模樣的たると共に、他の一方には寫實的に又繪畫的たり。歌舞伎劇自身が此の相矛盾せる兩端を有せると同時に、其の外界よりは、不統一にして不合理なる政令及び道德の壓迫を受けたりき。而も斯くの如き困難の間に能く駸々として長足の進歩をなし得たりしは、吾が國民

性に適合するの藝術なりしなればならん。然れども、近世期の次ぎなる明治期に入りて、今や彼等の運命は滅亡あるのみ。蓋し是れ時勢の然らしむるところ止むを得ずと雖も、思ふに吾が歌舞伎劇は過去三百年の歴史を有する國寶的一大伽藍たり、而も時勢といふ猛火の爲めに、此の大伽藍を烏有に歸せしめんは、ひとり日本の爲めのみならず、世界の爲めに愛惜すべきならずや。

近世日本演劇史　終

大正二年六月廿五日印刷
大正二年六月廿八日發行
大正十三年十月五日再版
大正十四年一月八日三版
昭和二年五月廿五日四版

近世日本演劇史

正價金五圓

著者　東京市赤坂區青山南町五ノ三七　伊原敏郎

發行者　東京市牛込區辨天町一五七　種村宗八郎

印刷者　東京市牛込區榎町七　竹內喜太郎

發行所　東京市牛込區早稻田　早稻田大學出版部
（振替口座東京一一二三番）

【日清印刷株式會社印刷】

伊原敏郎（青々園）著

（四版）

日本演劇史

菊版六百頁
木版多數入
定價五圓
郵稅拾八錢

本書品切れ中、需要甚しく古本賣價一部拾八圓に達した

本書は阿國歌舞伎以來寛政に至るまでを前後四期に分ち俳優と其の技藝とを主とし、脚本と其の作者、劇場的音樂、建築、舞臺裝飾、服裝、化粧、政令及び社會との關係を詳敍し所々木版の圖畫を挿んで技藝、建築及び古來諸名優の肖像等を示し、歌舞伎劇の發達變遷の跡を說き一面には文學史に又音樂史にも涉るもの、劇界及讀書界の寶典である。

東京牛込 振替東京一二〇〇〇 大阪六八九〇〇
早稻田大學出版部
（賣捌）東京堂・東海堂・盛文館・北隆館・星野